

一般国道9号（東伯・中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡琴浦町

南原千軒遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団
国土交通省 倉吉河川国道事務所

鳥取県教育文化財団発掘調査報告書 100

一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡琴浦町

南原千軒遺跡

発行 2005年3月28日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260
電話(0857)27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 富士印刷株式会社



S15 石圍炉 (北東から)



(側面)



(正面)



(側面)

土器 脚部 (表土中出土)



SK2 遺物出土状況 (南から)



SK2出土 和銀



SK2 和銀出土状況



SD1 - 6 - 7 (西から)



SD1 - 6 - 7 土層断面 (西から)



SD7 土師器皿出土状況 (東から)



S01 (南から)



S01 P1 同元通底出土状況 (西から)



S02 P13 土層断面 (北西から)



S01 P5 釜通元底出土状況 (北から)



S02 P13 礎盤石検出状況 (北西から)

序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところでありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、琴浦町にある南原千軒遺跡では、縄文時代の土偶や竪穴住居跡、中世の大規模な溝や掘立柱建物跡など、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団

理事長 有田博充

序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取 島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡中山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」、「久蔵谷遺跡」、「化粧川遺跡」、「八幡遺跡」、「中道東山西山遺跡」、「福留遺跡」、「湯坂遺跡」、「南原千軒遺跡」の9遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「南原千軒遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所
所 長 嘉 本 昭 夫

例 言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局倉吉国道河川事務所の委託により、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センター東伯調査事務所が平成16年度に行った「一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査事業」の調査報告書である。
2. 本報告書に収載した南原千軒遺跡の所在地は以下のとおりである。
鳥取県東伯郡琴浦町（旧赤碕町）大字光字壱本松1 - 1他（1区）
字大加布毛64他（2区）
また、調査面積は2917.0m²である。
3. 本報告書で示す標高は、2級基準点H10 - 2 - 8（旧赤碕町、X：- 54683.946、Y：- 64490.818、H = 24.506）3級基準点H10 - 3 - 12（旧赤碕町、X：- 54637.222、Y：- 64750.192、H = 21.330）を基点とする標高値を使用した。方位は、公共座標北を示す。なお、座標北に対し磁北は6°27'25"西偏、真北は0°22'35"東偏する。X：、Y：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第 系 の座標値である。
4. 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図「大山」「赤碕」および「赤碕町都市計画図 1、3」（1/2500）を使用した。
5. 本報告にあたり、出土石製品の石材鑑定を赤木三郎氏に、SK13出土獣骨の鑑定を井上貴央氏に、出土鉄滓・鉄製品の整理指導を穴澤義功氏に依頼した。また、出土土器の胎土分析について白石 純氏より、出土玉材・石材の産地分析について藁科哲男氏より、玉稿を賜った。
6. 本報告にあたり、調査前・調査後航空写真撮影、基準点測量、自然科学分析の一部を業者に委託した。
7. 本報告書に使用した遺構実測図は、調査担当者および作業員が作成したものを整理作業員が浄書した。遺物実測図は、調査担当者および整理作業員が作成、浄書した。なお、土器、石器、鉄製品の一部について、実測および浄書を業者に委託した。
8. 本報告書に使用した遺構・遺物写真は、航空写真を除いて調査担当者が撮影した。
9. 本報告書の執筆・作成は、君嶋俊行、西川雄大、山根 航、牧本哲雄が分担し、目次と各文末に文責を記した。編集は君嶋が行った。
10. 出土遺物、図面、写真等は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。
11. 現地調査および報告書作成にあたり、下記の方々に御指導、御協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。

赤木三郎、穴澤義功、池澤俊幸、伊藤正人、井上貴央、今村啓爾、岩崎紅美、岩田文章、大賀克彦、大野 薫、角田徳幸、木田 真、小池伸彦、小林義孝、酒井雅代、白石 純、杉山 洋、高橋進一、中村芳雄、西尾克己、箱崎和久、東山信治、廣江耕史、藤本史子、松村恵司、松本岩雄、宮本正保、森岡秀人、安村俊史、山崎真治、山田康弘、山本信夫、米田克彦、渡辺貞幸（五十音順、敬省略）

凡 例

1. 本遺跡の遺物の注記に用いた略号は「ナンハラ」である。

2. 本報告書で用いた遺構、遺物の略号は以下のとおりである。

[遺構]

SI：竪穴住居跡、SD：溝、SB：掘立柱建物跡、SK：土坑・土壙、P：柱穴、ピット（小穴）

[遺物]

S：石器・石製品 C：銅製品 J：玉類

記号のないものは土器・土製品・陶磁器

丸数字は鉄製品、鉄関連遺物（第88～90図 鉄関連遺物構成図の構成 に対応）

3. 本報告書における実測図の縮尺は、特に断りのない限り以下のとおりである。

[遺構]

竪穴住居：1/60、1/80、掘立柱建物跡：1/80、土坑・土壙：1/40

[遺物]

土器・土製品・陶磁器：1/4、1/3、1/6、金属製品：1/1、1/2 石製品：1/1、1/3、1/4 玉類：1/1

4. 遺構実測図に用いたスクリーントーンおよび記号は、特に説明がない限り以下のものを表す。

■：土器・土製品出土位置 □：石器・石製品出土位置 ○：鉄製品、鉄関連遺物出土位置

■：地山 ▲：ケズリの方向（砂粒の動き）………：砥面・磨面の範囲

また、遺物実測図において、須恵器は断面黒塗り、それ以外の土器・土製品は白抜きで表現した。

5. 遺物の法量記載における数値は最大値であり、○は推定復元値、□は現存値を示す。

6. 掘立柱建物跡の遺構番号は、調査時と本報告において以下のように変更している。

（旧）SB 1、SB 2 （新）SB 1、（旧）SB 3、4 （新）SB 2

7. 本書における土器類の分類・編年・年代観は基本的に以下の文献に拠る。

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

小口英一郎・北島大輔・原あづさ 2004 「八橋第8・9遺跡における6～7世紀の土器編年」

『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団

足立克己・丹羽野裕 1984 「第6章 まとめ（3）遺物」『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会

巽淳一郎 1979 「2 土器類」『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』倉吉市教育委員会

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4、

九州歴史資料館

八峠 興 2004 「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会

目次

巻頭写真図版

序

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯	(君嶋) 1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	2
第3節 調査体制	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	(牧本) 5
第2節 歴史的環境	(牧本) 6
第3章 発掘調査の成果	11
第1節 遺跡の立地と層序	(君嶋) 11
第2節 縄文時代の調査成果	14
(1) 概要	(君嶋) 14
(2) 竪穴住居跡	(君嶋) 14
第3節 弥生時代の調査成果	17
(1) 概要	(君嶋) 17
(2) 溝	(君嶋) 17
(3) 土坑	(君嶋・山根) 21
第4節 古墳時代の調査成果	26
(1) 概要	(君嶋) 26
(2) 竪穴住居跡	(君嶋・西川) 26
(3) 溝	(山根) 32
第5節 古代・中世の調査成果	34
(1) 概要	(君嶋) 34
(2) 竪穴住居跡	(君嶋) 34
(3) 掘立柱建物跡	(西川) 37
(4) 溝	(西川・山根) 42
(5) 土坑	(君嶋・西川・山根) 50
第6節 ピット群	(山根) 63
第7節 遺構外出土の遺物	(君嶋) 69
第8節 鉄関連遺物	(君嶋) 70
第4章 自然科学分析の成果	90
第1節 南原千軒遺跡SK13出土動物骨の放射性炭素年代測定	(株式会社 加速器分析研究所、君嶋) 90
第2節 南原千軒遺跡出土土器の胎土分析	(白石 純) 92

第3節	南原千軒遺跡出土サヌカイト剥片の産地分析(藁科哲男)	96
第4節	南原千軒遺跡出土碧玉・ヒスイ製玉材の産地分析(藁科哲男、(有)遺物分析研究所)	105
第5章	考察	129
第1節	南原千軒遺跡における縄文時代の遺構・遺物について(君嶋)	129
第2節	南原千軒遺跡における弥生時代の玉作について(山根)	131
第3節	南原千軒遺跡SK2の出土遺物について(西川)	134
第4節	南原千軒遺跡の掘立柱建物について(西川)	136
第5節	南原千軒遺跡における中世初頭の鉄生産について(山根)	139
第6節	南原千軒遺跡出土の古代・中世の土器について(君嶋)	140
第7節	南原千軒遺跡と勝田荘(君嶋)	143
	土器・土製品観察表	147
	石器・石製品観察表	156
	玉類観察表	156
	銅製品観察表	156
	写真図版		
	報告書抄録		

挿 図 目 次

第1図	調査区周辺地形図	1	第23図	SI 1	27
第2図	遺跡位置図	5	第24図	SI 1 出土遺物	27
第3図	琴浦町の主要遺跡分布図	7	第25図	SI 3	28
第4図	調査区全体図	9	第26図	SI 3 出土遺物	28
第5図	調査区周辺の小字名	11	第27図	SI 6	29
第6図	調査区内土層断面図	13	第28図	SI 6 出土遺物(1)土器	30
第7図	SI 5	15	第29図	SI 6 出土遺物(2)石器、鉄製品	31
第8図	SI 5 出土遺物(1)土器	15	第30図	SI 6 周辺出土遺物	31
第9図	SI 5 出土遺物(2)石器	16	第31図	SD10	33
第10図	弥生時代遺構分布図	17	第32図	SD10出土遺物	33
第11図	SD 2・3	18	第33図	古代・中世遺構分布図	34
第12図	SD 2・3 出土遺物(1)土器	19	第34図	SI 2	35
第13図	SD 2・3 出土遺物(2)石器、玉類	20	第35図	SI 2 出土遺物	36
第14図	SK 4	21	第36図	SI 4	36
第15図	SK 4 出土遺物	22	第37図	SB 1 出土遺物	37
第16図	SK16	23	第38図	SB 1	38
第17図	SK16出土遺物	23	第39図	SB 1 土層断面図	39
第18図	SK20	24	第40図	SB 2	40
第19図	SK20出土遺物	24	第41図	SB 2 土層断面図	41
第20図	SK23	25	第42図	SB 2 出土遺物	41
第21図	SK23出土遺物	25	第43図	SD 1・6・7	43
第22図	古墳時代遺構分布図	26	第44図	SD 1・6 出土遺物	45

第45図	SD 7 出土遺物	46	第86図	遺構外出土の遺物 (1)	68
第46図	SD 4	47	第87図	遺構外出土の遺物 (2)	69
第47図	SD 4 出土遺物	48	第88図	鉄関連遺物構成図 (1)	71
第48図	SD 5・8	49	第89図	鉄関連遺物構成図 (2)	72
第49図	SD 5・8・9 出土遺物	49	第90図	鉄関連遺物構成図 (3)	73
第50図	SD 9	50	第91図	鉄関連遺物 (1)	77
第51図	SK 1	51	第92図	鉄関連遺物 (2)	78
第52図	SK 1 出土遺物	51	第93図	鉄関連遺物 (3)	79
第53図	SK 2	51	第94図	鉄関連遺物 (4)	80
第54図	SK 2 出土遺物	52	第95図	鉄関連遺物 (5)	81
第55図	SK 3	53	第96図	須恵器の産地推定 (K-Ca)	94
第56図	SK 5	53	第97図	須恵器の産地推定 (Rb-Sr)	94
第57図	SK 6	53	第98図	須恵器の産地推定 (Ti-Ca)	95
第58図	SK 3・5・6 出土遺物	53	第99図	須恵器の産地推定 (Zr-Sr)	95
第59図	SK 7	54	第100図	サヌカイトおよびサヌカイト様岩石の原産地	101
第60図	SK 7 出土遺物	54	第101図	花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル	120
第61図	SK 8	54	第102図	弥生 (続縄文) 時代の碧玉製、緑色凝灰岩製玉類の原材使用分布圏および碧玉・碧玉様岩の原産地	120
第62図	SK 9	55	第103図	南原千軒遺跡出土玉材の蛍光X線スペクトル	121
第63図	SK 9 出土遺物	55	第104図	碧玉原石のESRスペクトル	122
第64図	SK10	55	第105図	碧玉原石の信号 () のESRスペクトル	123
第65図	SK10遺物出土状況図	56	第106図	南原千軒遺跡出土玉材の信号 () のESRスペクトル	125
第66図	SK10出土遺物	56	第107図	ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布圏	126
第67図	SK11	57	第108図	ヒスイ原石の元素比值Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布圏	126
第68図	SK12	57	第109図	ヒスイ原石の元素比值Ca/Si対Sr/Feの分布および分布圏	127
第69図	SK11・12出土遺物	57	第110図	ヒスイ原石の元素比值Na/Si対Mg/Siの分布および分布圏	127
第70図	SK13	58	第111図	南原千軒遺跡出土硬玉製玉材の蛍光X線スペクトル	128
第71図	SK14	58	第112図	鳥取県出土の土偶および類例	130
第72図	SK13・14出土遺物	58	第113図	南原千軒遺跡出土の玉作関連遺物	132
第73図	SK15	59	第114図	SK 2 出土和鏡背面復元図および部分名称	134
第74図	SK18	59	第115図	山吹双鳥鏡の類例	134
第75図	SK15・18出土遺物	60	第116図	SK 2 出土輪状鉄製品	135
第76図	SK19	60			
第77図	SK21	61			
第78図	SK21出土遺物	61			
第79図	SK22	61			
第80図	SK22出土遺物	61			
第81図	SK24	61			
第82図	SK17・25	62			
第83図	ピット出土遺物	63			
第84図	ピット分布図 (1)	66			
第85図	ピット分布図 (2)	67			

第117図	島根県吉佐山根 1号墳SK01出土鉄製品	135	第121図	奈良県春日大社着到殿平面図および立面図	138
第118図	島根県吉佐山根 1号墳SK01遺物出土状 況図	135	第122図	小皿の分類	141
第119図	SB 1 柱間寸法復元図	137	第123図	中世土器の変遷	141
第120図	SB 2 柱間寸法復元図	138	第124図	空間構成変遷図	144
			第125図	勝田川流域の小字界と条里地割復元案 ...	146

挿 表 目 次

第 1 表	SI 5 ピット計測表	14	比分析結果	103	
第 2 表	SI 1 ピット計測表	27	第19表	南原千軒遺跡出土サヌカイト剥片の原材 産地分析結果	104
第 3 表	SI 3 ピット計測表	28	第20表	各碧玉の原産地における原石群の元素比 の平均値と標準偏差値 (他).....	115
第 4 表	SI 6 ピット計測表	29	第21表	南原千軒遺跡出土玉材の分析結果 ...	118
第 5 表	SI 2 ピット計測表	35	第22表	南原千軒遺跡出土玉材の原材産地分析結果	118
第 6 表	SB 1 ピット計測表	39	第23表	ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準 ...	119
第 7 表	SB 2 ピット計測表	41	第24表	南原千軒遺跡出土のヒスイ製玉材の元素 分析値と比量の結果	119
第 8 表	ピット計測表	64	第25表	南原千軒遺跡出土のヒスイ製玉材の原材 産地分析結果	119
第 9 表	鉄関連遺物集計表	74	第26表	鳥取県内の縄文時代竪穴住居跡	129
第10表	鉄関連遺物観察表	82	第27表	鳥取県内出土の土偶	130
第11表	SK13出土動物骨年代測定結果	91	第28表	鳥取県内の主な弥生時代玉作関連遺跡	133
第12表	散布図による南原千軒遺跡出土の7世紀 前半・中世須恵器の産地推定	92	第29表	銭貨出土掘立柱建物の類例	137
第13表	南原千軒遺跡出土土器の分析一覧表 ...	93	第30表	鳥取県内の中世製鉄関連遺跡	139
第14表	各サヌカイト (安山岩) の原産地におけ る原石群の元素比の平均値と標準偏差値 (他)	101	第31表	遺構別出土土器集計表	142
第15表	岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の 分類結果	103	第32表	土器・土製品観察表	147
第16表	和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原 石72個の分類結果	103	第33表	石器・石製品観察表	156
第17表	和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原 石21個の分類結果	103	第34表	玉類観察表	156
第18表	南原千軒遺跡出土サヌカイト剥片の元素		第35表	銅製品観察表	156

写 真 目 次

写真 1	2区表土除去作業風景	3	写真 7	SK13 鯨骨出土状況	58
写真 2	調査風景	3	写真 8	SK17 (古) 礫検出状況	62
写真 3	SI 6 甕 (66) 出土状況	32	写真 9	SK17 (新) 礫検出状況	62
写真 4	SI 6 土師器甕 (73) 出土状況	32			
写真 5	SK12 土器出土状況 (1)	58			
写真 6	SK12 土器 (224) 出土状況 (2).....	58			

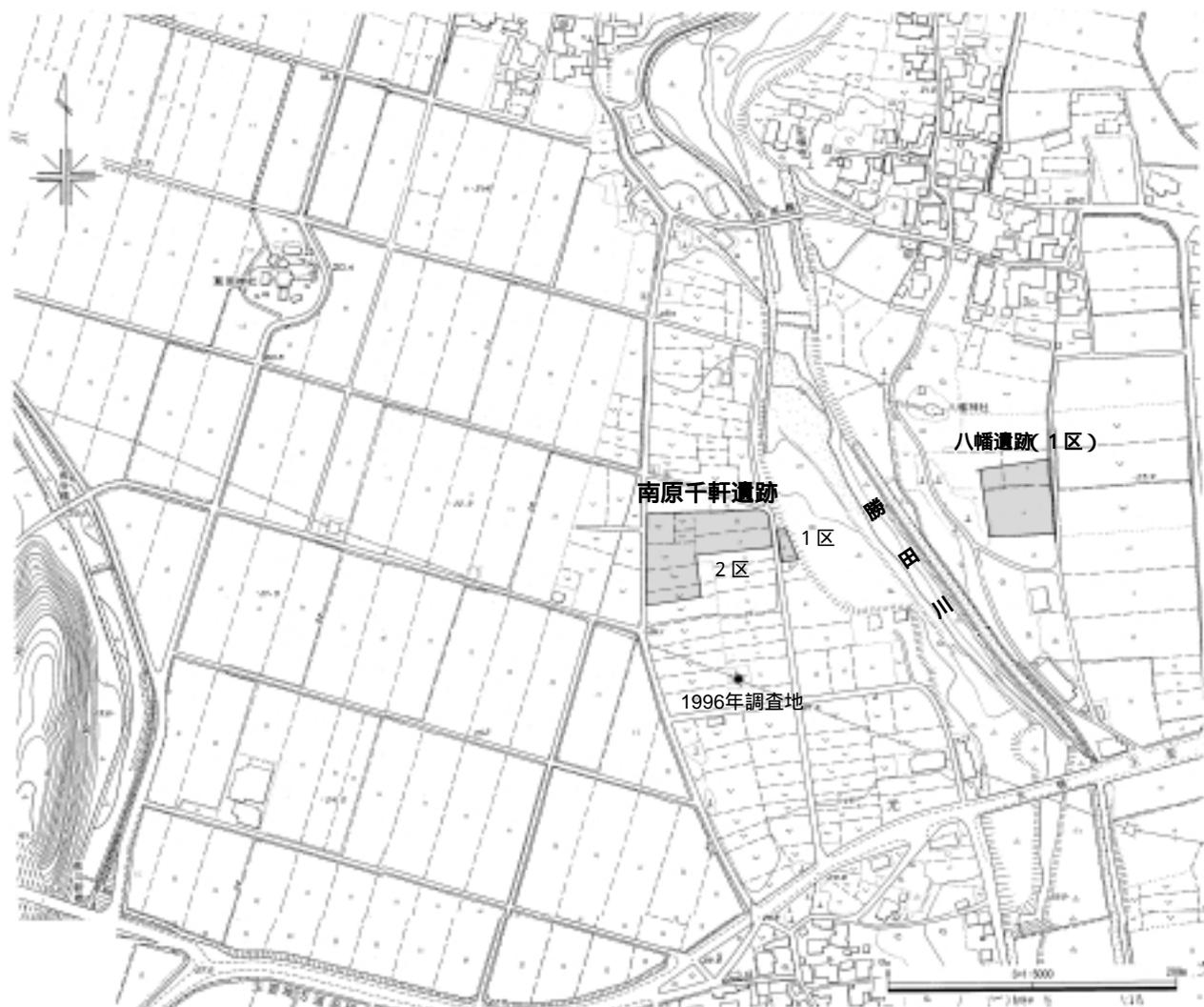
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道9号東伯中山道路の改築に伴い、東伯郡^{ことうら}琴浦町^{みつ}光地内の工事予定地に存在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である南原千軒遺跡^{なんばらせんげん}の記録保存を目的としたものである。当該地は旧東伯郡赤碓町に所在するが、平成16(2004)年9月1日に東隣の東伯町と合併し、琴浦町となった。

さて、山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和および将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内のうち、旧赤碓町地内では別所中峯遺跡^{べっしょなかがみね}、松谷中峰遺跡^{まつたになかみね}、化粧川遺跡^{けしょうがわ}、福留遺跡^{ふくどめ}、八幡遺跡^{やわた}、南原千軒遺跡^{なんばらせんげん}、湯坂遺跡^{ゆざか}、長谷城跡^{ながたに}、笹津乳母ヶ谷第2遺跡^{のつうぼがたに}、中山町域と跨る梅田萱峯遺跡^{うめだかやうね}などの多数の遺跡があり、建設に先立ち計画地内の遺跡および遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、赤碓町および中山町教育委員会が平成11(1999)年度から15(2003)年度にかけて、国庫補助事業として断続的に試掘調査を行った。当該地の試掘調査は、平成15年度に行われた^{註1)}。



第1図 調査地位置図

この結果を受け、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成16年度に当財団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

なお、平成8（1996）年度には、今回調査地の約60m南の地点において、送電線鉄塔化工事に伴う試掘調査が赤碕町教育委員会によって行われたが、その際の調査では遺構、遺物ともに確認されなかった^{註2)}。

註1) 小泉傑・石賀太編 2004 『赤碕町内遺跡発掘調査報告書』赤碕町埋蔵文化財調査報告書第15集、赤碕町教育委員会

註2) 大谷浩史編 1997 『赤碕町内遺跡発掘調査報告書』赤碕町文化財調査報告書第10集、赤碕町教育委員会

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査区の名称と調査方法

南原千軒遺跡の調査区は東西に長い長方形状であり、その東端寄りを農道が南北に通っている。この農道の東側を1区、西側を2区と呼称した（第1図）。2区南側には着手当初から未用買地があり、期間中に買収可能とのことであったが、現地調査終了までに買収が困難となったことから、国土交通省と協議のうえ、今年度の調査対象からは除外した。その結果、2区は実質上L字形を呈することとなった。

また、試掘結果により遺構面は2面とされていたが、調査区際でのトレンチ調査および試掘トレンチを再掘削して検討した結果、1面目から2面目とされた面までの層位には遺物は包含されておらず、また2面目において土坑と報告されていたものも自然地形の誤認であったことが判明したため、当初の計画を変更して全面1面の調査を行うこととなった。

表土の除去には重機を用い、それ以外の包含層、攪乱土および遺構の掘り下げは人力で行った。排土は2区西端に仮置きし、数回にわたって場外に搬出した。

表土剥ぎ終了後、公共座標第 系に基づく10m間隔の基準杭を設定した。これらの杭には、南北軸には算用数字を東から、東西軸にはアルファベットを北から付し、「A1杭」のように呼称した。また、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとってグリッド名とした。

検出した遺構・遺物の記録には光波トランシットを用いた。出土遺物のうち、時期判断が可能なものについては出土位置を記録し、それ以外は遺構もしくはグリッド毎に一括して取り上げた。遺構や遺物出土状況の写真撮影には35mm判と6×7判フィルムを使用し、適宜デジタルカメラを併用した。遺物の写真撮影には4×5判と6×7判とを用いた。

(2) 調査の経過

南原千軒遺跡では、平成16（2004）年3月4日に調査前航空写真撮影の委託契約を結び、調査を開始した。4月12日から15日にかけて重機による表土除去を行い、4月19日に委託業者による基準点測量を行った。4月20日より作業員を稼動して遺構検出作業を開始した。

2区では、表土下に厚さ約20cmの包含層が堆積していた他、近現代の畝耕作による攪乱も各所で認

められた。これらの包含層および攪乱土からは大量の遺物が出土したことから、掘り下げには時間と労力を要した。5月中旬頃までには遺構面の検出をほぼ終え、遺構の調査に取りかかった。なお、1区では表土下で検出したのは黄褐色の砂質土層であり、2区の遺構面である黒褐色土の堆積は認められなかった。また、表土除去から黄褐色砂質土層検出に至る過程において遺物がまったく出たしなかった。この黄褐色砂質土は、2区でのトレンチ調査の所見によれば遺構面（黒褐色土上面）より下位の層序であることから、1区においては遺構面（黒褐色土上面）が既に削平され失われたものと判断した。

調査を進めていくうえで、SK2からの和鏡の出土、SB1からの銭貨の出土、縄文時代の住居跡SI5の検出など、重要な成果が次々と明らかになった。これらの遺構の多くは、埋土が地山と非常に似通っていたため、その検出や掘り下げにあたっては、サブトレンチを多く設定して慎重を期した。6月中旬になって、2区南端付近にSD1・SD6・SD7など大規模な溝が重複して存在することが明らかになった。これらの溝は土量や出土遺物も多く、これ以降は常時作業員の半数近くが溝の掘り下げに取り組んだ。6月下旬から7月にかけては記録的な少雨となり、調査地内は白く硬く乾燥して遺構埋土の識別はますます困難となった。そのため稼働日数の多さと作業効率とは必ずしも比例しなかった。

SD6・SD7などがほぼ完掘に近づき、調査成果がまとまりをみせた8月7日に現地説明会を開催した。好天にも恵まれ、町の内外から約80名の方々の参加があった。8月10日に委託業者による調査区の航空写真撮影を行った。この段階では、現地調査の終了を8月中旬から下旬に予定していたものの、終了間近となっても新たな遺構の発見が相次いだため調査期間を延長し、9月16日に作業員の稼働を終了した。その後、調査担当者による補足調査を行い、10月28日に現地での調査を全て終了した。

発掘調査報告書の作成に伴う遺物の整理作業は埋蔵文化財センターで、図面類の整理作業は東伯調査事務所で行った。整理作業および報告書の作成は現地調査と並行して進め、平成16年度末をもって終了した。



写真1 2区表土除去作業風景



写真2 調査風景

第3節 調査体制

調査は、下記の体制で実施した。

調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局長 中村 登

埋蔵文化財センター

所長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務） 竹内 茂

次長（専門） 加藤 隆昭

調査課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶務課

課長（兼次長） 竹内 茂

主幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

調査担当 東伯調査事務所

所長 佐治 孝弑

班長 牧本 哲雄

文化財主事 家塚 英詞、小山 浩和（福留遺跡・湯坂遺跡担当）

君嶋 俊行（南原千軒遺跡担当）

高尾 浩司、小口英一郎（中道東山西山遺跡担当）

野口 良也、濱本 利幸（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

玉木 秀幸、浅田 康行（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

恩田 智則、小谷 郁夫（化粧川遺跡・中道東山西山遺跡担当）

調査員 西川 雄大（南原千軒遺跡担当）

岩井 美枝、福井 流星（中道東山西山遺跡担当）

前島 ちか（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

阪上志緒里（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

調査補助員 野 浩一、山根 雅美、吉田由香里、山根 航、石水 健一

事務補助員 真山 葉子

調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

調査協力 琴浦町教育委員会

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

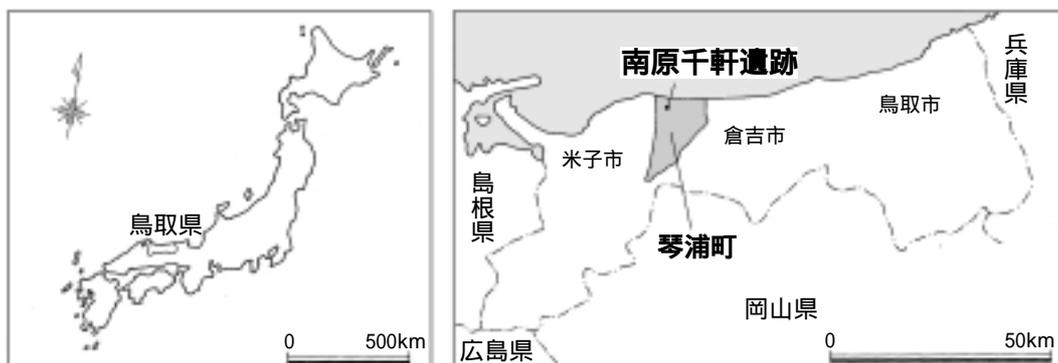
南原千軒遺跡が所在する琴浦町は、平成16年9月1日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した、新しい町である。この町名は、かつてこの地域の海岸一帯が「琴ノ浦」と呼ばれていたことに由来する。当町は鳥取県中部、東伯郡の西側を占める位置にあり、町域は、大山連峰の烏ヶ山（1381m）から船上山（615m）を結ぶ線を南西端とし、北東に細長い三角状に広がって北端は日本海に至る。東西15.2km、南北18.5km、総面積は139.88km²を測り、人口は約20,500人（平成16年末）である。

本町の地勢は、大山（1729m）山系から手指状に派生する急峻な丘陵地、加勢蛇川・洗川および勝田川・黒川流域に発達した平野部からなる。平野部は、肥沃な黒ボク地帯で細かな起伏が認められる。丘陵地は、火山灰土の堆積した溶岩台地状地形が海岸線付近まで延びている。町内には、前述の大山山麓に源流を発する河川の他、大小計8本の川が日本海に注いでいる。

当町の北側は、国道9号線沿線で弱電、酒造、食品製造などの商工業群が形成されている。特に、八橋地区は、古代から伯耆の東西をつなぐ交通、交流および戦略的活動の要衝として栄え、古代山陰道の清水駅、中世以降は八橋城が築かれた場所でもある。赤碕港は、主に沿岸漁業が盛んである。町中部域は、県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、丘陵上では昭和20年代から二十世紀梨栽培が行われ、北米や香港・シンガポールなどにも輸出されるなど本県湯梨浜町に次ぐ生産量を誇るが、現在では農家の高齢化、後継者不足による廃園が目立つようになった。また、平野部においては水稲とともにかつては国内でも有数の生産地であった芝栽培の他、プロイラー、乳牛、和牛などの畜産も盛んに行われている。町域南側は、国立公園の一部の大山滝、伯耆大シイ、船上山などが知られ、風光明媚な自然・景勝地を求めて観光客が訪れる地域となっている。

町内の遺跡は、加勢蛇川下流域右岸の低丘陵地と、加勢蛇・洗川左岸の丘陵台地とその山裾付近、勝田川流域および黒川左岸丘陵上に集まっている。加勢蛇・洗川両河川に挟まれた平野部には、律令時代の条里制の名残が旧地名や地割りに残る地域もあるが、概ね残りがよいとは言えない。

南原千軒遺跡は旧赤碕町域に位置し、JR赤碕駅の南西約1.5km、標高約25mの沖積平野に立地する。調査地周辺は、遺跡のすぐ東側を流れる勝田川によって形成された扇状地であり、旧赤碕町域では最も広く発達した稲作・畑作地帯となっている。（牧本）



第2図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

旧石器・縄文時代 鳥取県内では旧石器時代の遺構を伴う遺跡は発見されていない。当町でも松ヶ丘、槻下で尖頭器が数点、三林遺跡（6）でサイドスクレーパー、笠見第3遺跡（7）で舟形細石刃石核が見ついているが、層位的にはいずれも確認されていない。

縄文時代の遺構は、後期に入るまで明確なものは少ない。早～前期では大栄町西高尾谷奥遺跡（41）で押型文土器とともに住居跡の可能性のある竪穴状遺構、松ヶ丘遺跡（68）、森藤第1・2遺跡（39）、上伊勢第1遺跡（2）などで土器片が出土している。中期では、井岡地中ソネ遺跡（5）、井岡地頭遺跡（4）など丘陵上の遺跡で、土器が出土している。後期になると丘陵部に定住的な集落が見られるようになる。特に森藤第2遺跡では中央に石囲炉をもつ竪穴住居跡が精製・粗製土器、土器片錘、土偶とともに検出されている。また、勝田川左岸の南原千軒遺跡（19）では、中津式併行期の竪穴住居跡の他、今朝平タイプに類似した土偶が出土している。その他、この時代と考えられる落し穴が福留遺跡（17）、化粧川遺跡（16）、笠見第3遺跡、中尾第1遺跡（1）など多数の遺跡で検出されており、狩猟場として丘陵・微高地が利用された様子が窺われる。

弥生時代 米子市目久美遺跡で前期の水田が確認されているが、県中部では、当該期の稲作関連遺構は発見されていない。前期前葉では、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡（3）、井岡地頭遺跡などで土器が出土し、前期後葉では、中尾第1遺跡で密集した配石墓・土壙墓、三保第1遺跡でも集石遺構が見ついている。中期では、中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡で小規模な集落が営まれている他、墓ノ上遺跡（67）、別所女夫岩峯遺跡（63）で木棺墓が検出されている。その他、南原千軒遺跡では、玉作関連遺物が出土している。

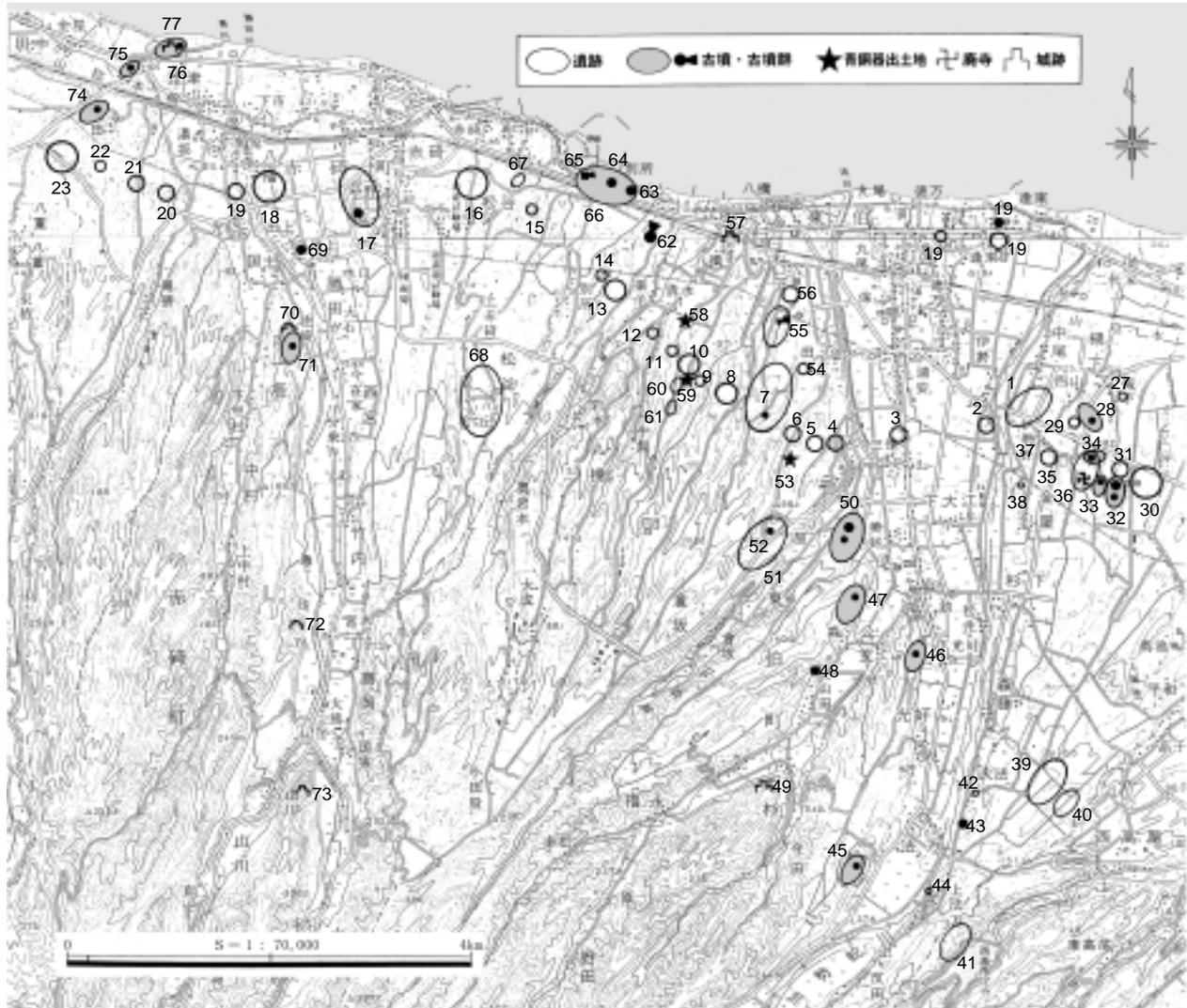
中期後葉から古墳時代初頭にかけて、特に後期後葉をピークに丘陵上で集落遺跡が大幅に増加する。森藤第1・2遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡（30）、大峰遺跡（40）、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡（51）、笠見第3遺跡、三林遺跡、中道東山西山遺跡（8）、久蔵峰北遺跡（10）、福留遺跡などがある。これらの遺跡の中には、集落内に玉作工房を持つ遺跡がある。大栄町西高江遺跡は、中期の工房跡で水晶の剥片とともに鉄製工具等が出土している。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡は、後期の工房跡で碧玉・緑色凝灰岩製の管玉未成品や剥片が多数出土しており、製作に当っては鉄器が使用されている。

湯坂遺跡（20）では、小型の墳丘墓が築造されている他、井岡地中ソネ遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の溝で区画された土壙墓群が見ついている。

また、弥生時代の祭祀に特徴的な銅鐸が、県中部では6遺跡で計7口見ついている。当該地域では、八橋南方丘陵上（58）で銅鐸（扁平鈕式）が1口見ついている。また、田越南方丘陵上（53）では、出土状況は明らかではないが、箱式石棺の下から中細形銅剣が4口、久蔵峰（59）で銅矛が1口出土している。八橋地区を中心とする地域は、銅剣・銅矛・銅鐸がそろって出土しており、島根県神庭荒神谷遺跡と同様の組成であることから、共通した祭祀形態があったものとして興味深い。

古墳時代 当該地域では明らかに前期に属する大型古墳は確認されていないが、前方後方墳である別所1号墳（笠取塚古墳）（65）は、撥型に開く前方部等の特徴から前期に遡る可能性がある。中期から後期になって前方後円墳が築造され、八橋狐塚古墳（62）、笠見1号墳（55）、竜ヶ崎3号墳（50）がある。

中期・後期になると中・小規模の円墳が群集して築かれるようになり、大高野古墳群（32）、塚本



1.中尾第1遺跡、2.上伊勢第1遺跡、3.三保第1遺跡、4.井図地頭遺跡、5.井図地中ソネ遺跡、6.三林遺跡、7.笠見第3遺跡、8.中道東山西山遺跡、9.久蔵谷遺跡、10.久蔵峰北遺跡、11.蛭谷遺跡、12.岩本遺跡、13.八橋第8・9遺跡、14.別所中峯遺跡、15.松谷中峰遺跡、16.化粧川遺跡、17.福留遺跡、18.八幡遺跡、19.南原千軒遺跡、20.湯坂遺跡、21.筥津乳母ヶ谷第2遺跡、22.梅田所在遺跡、23.梅田宮峯遺跡、24.逢束双子塚古墳、25.逢束遺跡、26.逢束第2遺跡、27.槻下豪族居館跡、28.槻下古墳群、29.下斎尾2号遺跡、30.水溜り・駕籠据場遺跡、31.大高野遺跡、32.大高野古墳群、33.塚本古墳群、34.斎尾古墳群、35.下斎尾1号遺跡、36.斎尾廃寺、37.伊勢野遺跡、38.金屋経塚、39.森藤第1・2遺跡、40.大峰遺跡、41.西高尾谷奥遺跡、42.大法古瓦出土地、43.大法3号墳、44.上法万経塚、45.杉地古墳群、46.下光好古墳群、47.公文古墳群、48.山田1号墳、49.妙見山城跡、50.竜ヶ崎古墳群、51.三保遺跡、52.三保6号墳、53.田越銅剣出土地、54.田越第4遺跡、55.笠見第2遺跡・笠見1号墳、56.笠見第1遺跡、57.八橋城跡、58.八橋銅鐸出土地、59.久蔵峰銅矛出土地、60.八橋第2遺跡、61.八橋第4遺跡、62.八橋狐塚古墳、63.別所女男岩峯遺跡、64.別所2号墳、65.別所1号墳（笠取塚古墳）、66.別所古墳群、67.墓ノ上遺跡、68.松ヶ丘遺跡、69.出上岩屋古墳、70.太一垣城跡、71.太一垣古墳群、72.大仏山城跡、73.山川城跡、74.梅田古墳群、75.坂ノ上古墳群、76.筥津古墳群、77.筥津城跡

第3図 琴浦町の主要遺跡分布図

古墳群（33）斎尾古墳群（34）公文古墳群（47）竜ヶ崎古墳群、別所古墳群（66）筥津古墳群（76）坂ノ上古墳群（75）梅田古墳群（74）などがある。また、後期以降、従来の竪穴系の埋葬施設に代わって横穴式石室が採用される。このうち、大法3号墳（43）や三保6号墳（52）、大栄町上種東3号墳、上種西14号墳は竪穴系横口式石室と呼ばれる特異な構造で、八橋狐塚古墳のくびれ部西側の石室もその可能性がある。槻下古墳群（28）塚本古墳群、大高野古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態も同じ系譜上のものであることから、加勢蛇川流域が石室形態を共通とするまとまった地域であったことを示している。大高野3号墳では金銅製耳環・青銅製鈴・鉄刀・刀子などが、槻下5号墳（代々1号墳）では金環・鉄刀などが副葬されていた。山田1号墳（48）や出上岩屋古墳（69）は切石積石室で、終末期の様相を示す。

この時代の集落は、丘陵上に営まれる三保遺跡、井岡地中ソネ遺跡、笠見第3遺跡、八橋第8・9遺跡(13)、松谷中峰遺跡(15)、別所中峯遺跡(14)などの他、低地部でも小規模ながら中尾第1遺跡、上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡、逢東第2遺跡(26)等がある。

古代 現在県内では22カ所の古代寺院が見つまっているが、初期の仏教文化の姿を最もよく残し、山陰では唯一の国特別史跡に指定されている齋尾廃寺(36)は、県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対し、法隆寺式を採っている。塑像片・仏頭・鴟尾・鬼瓦の他、創建期の軒丸瓦には紀寺式、軒平瓦に法隆寺式系統のものが出土し、山陰・山陽では数少ない瓦当文様をもち、畿内と結びつきの深い有力豪族が齋尾廃寺周辺で勢力を持っていたと推察される。大高野遺跡(31)では、総柱礎石建物群が検出されており、正倉(郷倉)と考えられ、郡衙推定地もその周辺に比定されている。その周辺の伊勢野遺跡(37)、水溜り・駕籠据場遺跡、森藤遺跡群では、掘立柱建物を中心とする集落が見つまっている他、大法に古瓦出土地(42)がある。加勢蛇川下流右岸域は、伯耆国八橋郡に属し、当郡の中心地であったと推察される。その他、旧籠津郷に当る八幡遺跡(18)では、掘立柱建物、赤色塗彩土師器が多数出土している。

平安時代では、上伊勢第1遺跡で、規格性のある大規模な畠跡が見つまっている他、丘陵上の中道東山西山遺跡では小規模な鍛冶施設が検出されており、当時の農耕、集落内鉄器生産の様相を窺うことができる。笠見第3遺跡、三林遺跡では、専用器を用いた火葬墓が検出されている他、当該期末になると末法思想が広まり、金屋(38)と上法万(44)でも経塚が作られ、金屋では銅経筒が出土している。

中世 南原千軒遺跡では、大規模な溝内から大量の鉄滓が出土している他、整然と並ぶ掘立柱建物や和鏡を副葬した墓壙が検出されている。井岡地頭遺跡では、平安時代末頃の「コ」字状の方形区画溝があり、丘陵上の方形居館の可能性が指摘されている。また、『伯耆民談記』に「岩野弾正坊居す」と記された、槻下館跡(27)がある。台地に堀を巡らせた方形の一段高い敷地が並んで残り、一つには周囲に高さ2mの土塁が築かれている。その他、町域西側海岸部から船上山にかけて、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせ持つ独特の形態の「赤碕塔」が、6基確認されている。

船上山には、鎌倉時代末の戦乱期に、後醍醐天皇が隠岐島から逃れる際に立て籠もった国史跡行宮跡がある。その他中世城館が各地に見られ、南北朝時代には、行松氏によって築造されのちに尼子・毛利氏の支配下となり、伯耆方面の経営拠点となった八橋城跡がある。また大杉には南条氏の出城である妙見山城跡(49)、籠津には、土塁と堀を持つ籠津城跡(楨城)(77)がある。1585年頃の築城と推定され、海上防備の城と考えられている。他に、太一垣城跡(70)、大仏山城跡(72)、山川城跡(73)などがあり、『伯耆民談記』によると、吉川元春の羽衣石城攻撃に関与した城と考えられている。

近世 江戸時代前期、寛永14(1637)年の『因幡伯耆駄賃銀宿賃書付』に「大塚」の文字がみられることから、逢東はこの時期には宿駅として機能していたことが分かる。またこの地には鳥取藩の藩倉「大塚御蔵」がおかれ、現在でも北側の土手の一部と火除地が残っている。(牧本)

【参考文献】

赤碕町編 1974『赤碕町誌』/東伯町編 1968『東伯町誌』/鳥取県教育委員会 2003『弥生時代からのメッセージ』鳥取県教育委員会/鳥取県埋蔵文化財センター編 1989『歴史時代の鳥取県』鳥取県教育文化財団/内藤正中・真田廣幸・日置桑左衛門 1997『県史31 鳥取県の歴史』山川出版社/坂詰秀一編 2003『仏教考古学辞典』雄山閣



第4図 調査区全体図

第3章 発掘調査の成果

第1節 遺跡の立地と層序

南原千軒遺跡は、琴浦町（旧赤碕町）光地内に所在する。遺跡名は、調査地付近が地元で「南原千軒」と呼ばれてきたことに由来する。調査地が位置する小字名は大加布毛および菅本松であるが、調査地の北・西側に「東南原」「西南原」、南側に「南原口」の小字名が残っており（第5図）、かつては調査地周辺が「南原」と呼ばれていたことが窺える。また、「千軒」は、著名な「草戸千軒」遺跡（広島県福山市）などで知られているように、中世においては大集落を指す語であり、調査にあたって中世の遺構・遺物の出土が予想された^{註1)}。

調査地が立地する地形は、勝田川と黒川によって形成された扇状地である。勝田川は調査地1区のすぐ東側を、黒川は調査地の約400m西方をとともに北流している。勝田川の河床は周囲の水田面よりも5～6m低く、1区の東側は崖状を呈している。勝田川をはさんで東側の対岸には八幡遺跡が位置する。

調査地は標高約26mで、傾斜はなくほぼ平坦である。調査前の地目は畑地である。

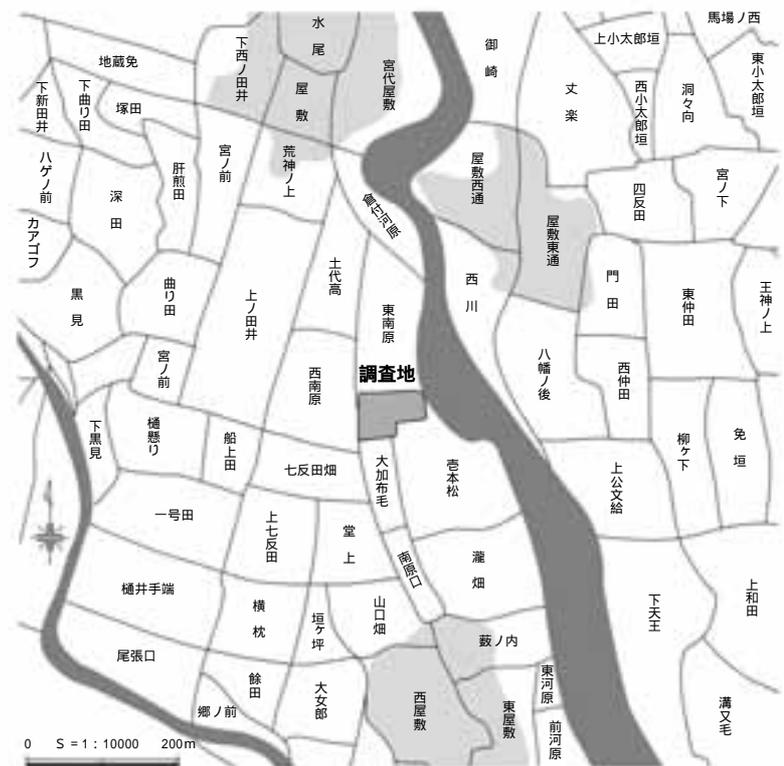
調査に先立ち、調査区北壁際および南壁付近に試掘坑を設け、断面の土層を観察した。このうち、北壁断面における所見を基にⅠ～Ⅳ層に分層した。南壁付近の堆積は、色調や混入物等が北壁際と異なる様相を示すが、層序の対応関係を優先させて北壁際に準じる層名を付した。

遺構確認面となったのはⅠ層の上面である。なお、旧赤碕町が行った試掘調査では、Ⅰ層上面に相当する面において「多数の礫が埋め込められるように出土」した「土坑」が検出された^{註2)}。したがってこの面が2面目の遺構面となることが予想されたため、試掘第5トレンチを再掘して検討した結果、埋められたように見えた礫とは、Ⅰ層直下の礫層が部分的にⅠ層上面に現れたものであることが判明した。また、Ⅱ～Ⅳ層には遺物の包含は認められなかったことから、全面1面のみでの調査を行うこととなった。

以下、各層序を説明する。

Ⅰ層：表土・耕土層。調査区の全面にわたって、約20cmの厚さで堆積している。縄文時代から近現代までの遺物を多量に包含する。

Ⅱ層：Ⅰ層とⅢ層（遺構面）との間に堆積した遺物包含層をⅡ層として一括した。調査区内に広く堆積するのはⅡ-1層（暗灰褐色土）で、厚さ約15～20cmである。縄文時代から近世



第5図 調査区周辺の小字名（■...現在の集落）

までの遺物を包含する。 - 1層の他に、調査区北壁にみられる - 2、3層など、局所的な堆積も認められた。これらは色調が似通っており、断面観察では分層できたがその広がり面的に把握することは困難であった。また、調査区の各所で、耕作に伴う攪乱が層から層にまで及んでおり、これら攪乱土、包含層、遺構埋土の識別にも困難を伴った。

また、調査区の西側、おおむね8グリッドライン以西では、厚さが最大で約20cmにおよぶ暗赤褐色の鉄分沈着層が部分的に堆積していた（ - 5層）。この層は弥生時代～7世紀代の遺物（須恵器を含む）を包含しており、7世紀代に埋没したSD9の埋土上面を覆っている。さらに、9世紀代に埋没したSD1がこの層の上面から掘り込まれている。したがって、この層の形成時期はおよそ8世紀代と考えられ、当該期に調査区西側が滞水環境にあったことが窺える。

層：黒褐色～暗灰褐色を基調とするシルト質の堆積であり、この層の上面が遺構面となる。概して調査区の西側では黒味が強く、東側および南側ではより明るい色調であるが、その変異は漸移的である。なお、1区においては表土下が黄褐色砂質土層となっており、遺構・遺物が確認されなかった。層序としては - 3層ないし層以下に対応するものと考えられ、遺構面がすでに削平され失われたものと判断した。

層：しまりの強い黒褐色のシルト層。南側ではやや明るみを帯び、拳大～人頭大の礫を多量に含む（'層）

層：暗褐色のシルト層。南側ではやや暗い（'層）

層：黄灰色の砂層。調査区の北側、南側、西側（試掘第5トレンチ）で共通して認められる。

地表面から層上面までの深さは約1.2～1.5mである。層の下位は、先述した試掘第5トレンチでの所見によれば礫層となる。表面観察による限り、シルトや粘土を含まず拳大の黄灰色礫のみで構成されており、勝田川の旧河床である可能性が高い。なお、今回の調査地の60m南で行われた1996年の調査では、「基盤層までは約60～140cmであり、旧河床のものと考えられる大レキが混入していた」、遺物は「耕作土下よりは全く出土しなかった」と報告されている^{註3)}。

以上のように、勝田川の氾濫原に位置する本調査区の基本層序は、シルトや礫を主体とした不安定な堆積を示している。本調査区が人々の生活の舞台となって以後も、縄文時代と中世の遺構が同一遺構面で検出されたことなどから、生活面の形成と流失が繰り返されたことが窺われる。鉄分沈着層や層として一括した局所的な堆積が処々に認められる点と合わせて、本調査地が勝田川の影響を受け続けたことが推測される。 (君嶋)

【註】

- (1) 当地が「千軒」と呼ばれた由来については、遺跡周辺の方々からいくつかの説を伺うことができた。明治年間、付近は朝鮮人参（もしくはダイコン）作りが盛んであり、作業小屋が林立してあたかも集落のようであった。当地は湯坂集落と光集落の中間に位置するが、両集落間の距離が「千間」であり、「千軒」は当て字。光集落はかつて調査地付近にあったが、ある時大火に遭い現在の地に移った。
- (2) 小泉傑・石賀太編 2004 『赤碓町内遺跡発掘調査報告書』赤碓町埋蔵文化財調査報告書第15集、赤碓町教育委員会
- (3) 大谷浩史編 1997 『赤碓町内遺跡発掘調査報告書』赤碓町文化財調査報告書第10集、赤碓町教育委員会



第6図 調査区内土層断面図

土層断面図位置図

第2節 縄文時代の調査成果

(1) 概要

縄文時代の遺構として、後期初頭（中津式期）の竪穴住居跡1軒（SI5）を検出した。

遺物は、SI5の他に遺構外からも出土している。土器は中津式が最も多く、前期の爪形文土器、後期前葉～中葉、後期中葉～後葉の土器が少量存在する。注目されるのは、表土中から出土した土偶の脚部片である。土偶としては県内6例目の発見であり、形態的な特徴に東日本の影響が認められる。

遺構外出土の土器、土偶の実測図は、第7節の第86図（68p）に掲載している。

(2) 竪穴住居跡

SI5（第7・8・9図、第1表、PL.5・22・40・44）

調査区の北東、B4グリッドに位置する。耕作に伴う攪乱が著しく及んでおり遺存状態はよくないが、長軸5.25m、短軸約3.6mの楕円形を呈し、主軸をやや北西-南東方向にとる。検出面から床面までの深さは5～8cmと極めて浅い。したがって壁面はほとんど遺存していないが、その立ち上がりは垂直とはならず、全体として浅い皿状の掘り込みである。住居の中央やや西寄りには石囲炉が構築されている。

床面は、住居の西側、すなわちP1とP7の間、および石囲炉の東側、中央やや東寄りの3箇所で、硬化した貼床を検出した。このうち石囲炉の東側では、貼床が上下2面に重複していた。これらの貼床が部分的に施されていたものか、本来は床面全体に貼られていたものかは不明であるが、貼床部分以外では地山である層（黒褐色土）の上面をそのまま床面としており、特に硬化した範囲は認められない。また、床面上では3箇所の焼土面を検出した。これらのうちP1の南西側に接する焼土面は非常に硬く焼き締まっていた。残る2箇所は、明るい色調の焼土が床面上に薄く散った状況である。その他に、ピット13基、直線状または弧状の溝数条を検出した。これらの埋土は床面（地山）と似通っており、締まりの強弱や炭化物の混入などを手がかりとして検出した。これらのピットには柱痕跡の明らかなものはなく、また配置も不規則であり、支柱配置を復元するには至らなかった。溝は幅10～20cm、深さ5cm程度で、住居の東側に集中している。住居の縁に沿った壁溝状のものもあるが、概して走向は一定せず、性格は不明である。

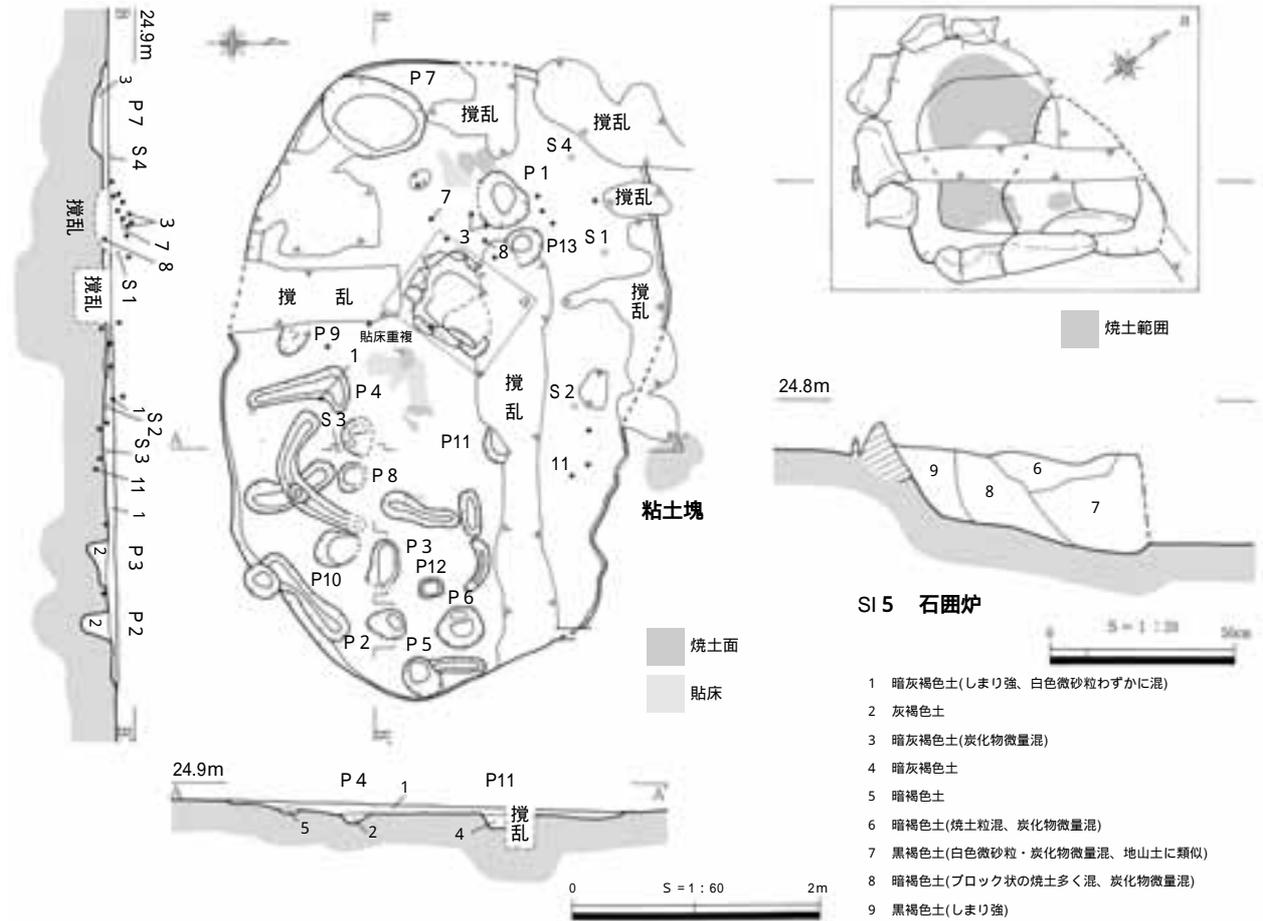
第1表 SI5ピット計測表

No.	長径(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土
P1	46	38	19	暗灰褐色土
P2	30	23	24	2層
P3	40	22	17	2層
P4	31	24	7	2層
P5	32	30	13	暗褐色土
P6	38	34	8	暗灰褐色土
P7	87	62	8	3層
P8	26	22	7	暗灰褐色土
P9	28	22	13	暗灰褐色土
P10	39	30	6	暗灰褐色土
P11	24	22	13	暗灰褐色土
P12	19	14		暗褐色土
P13	26	29	23	灰褐色土

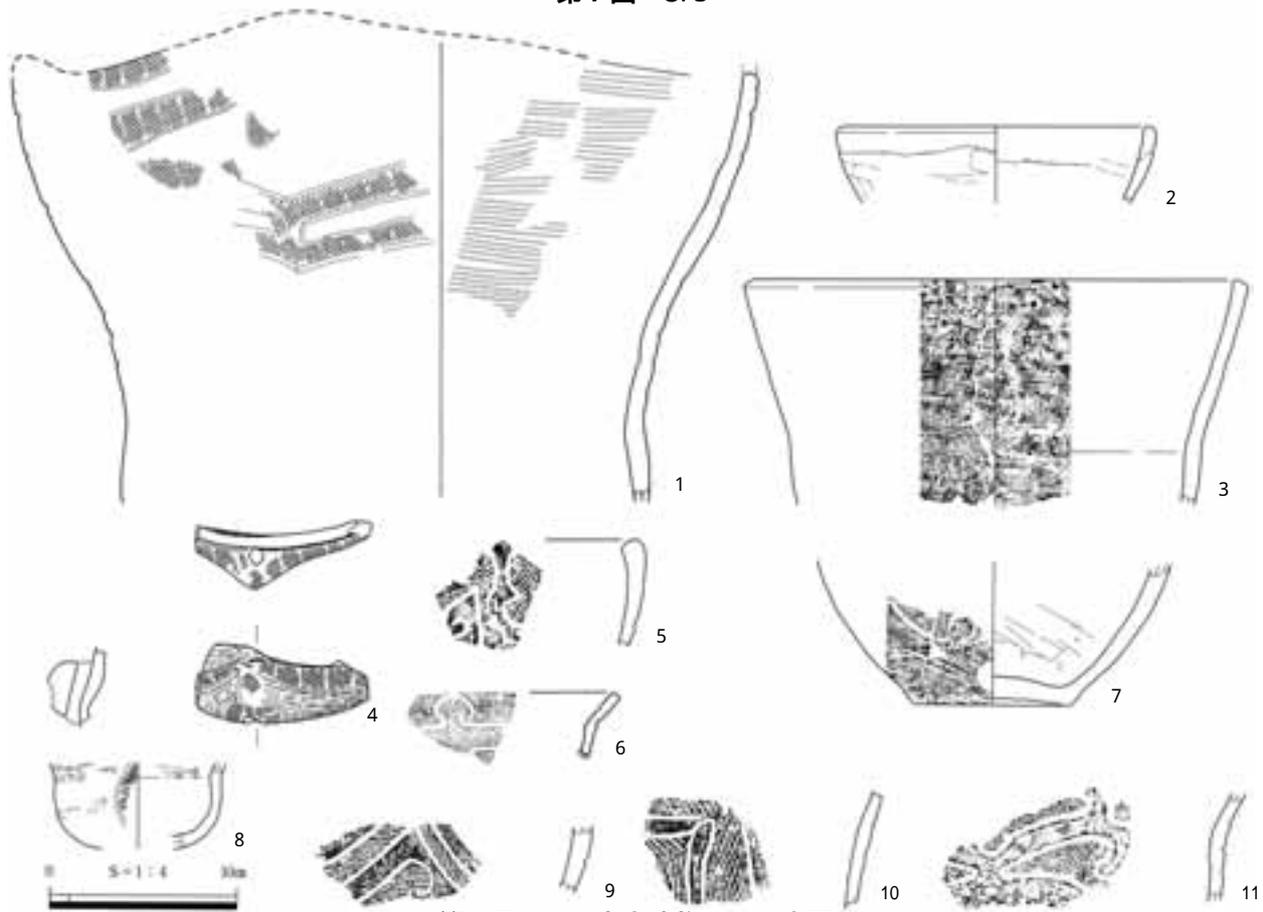
は残存値

石囲炉は北側を攪乱によって破壊されているが、主軸を北東-南西方向にとる方形ないし長方形を呈するものと考えられる。残存長は80cm、幅は74cmである。炉底は北側へ向けて傾斜しており、深さは最大で24cmである。炉内埋土の検出面上に薄く焼土が広がっていたほかに、埋土の8層中にも焼土がブロック状に混入していた。ただし、灰や炭化物は顕著には認められなかった。その他、炉内埋土中には割れた礫が数点含まれていた。

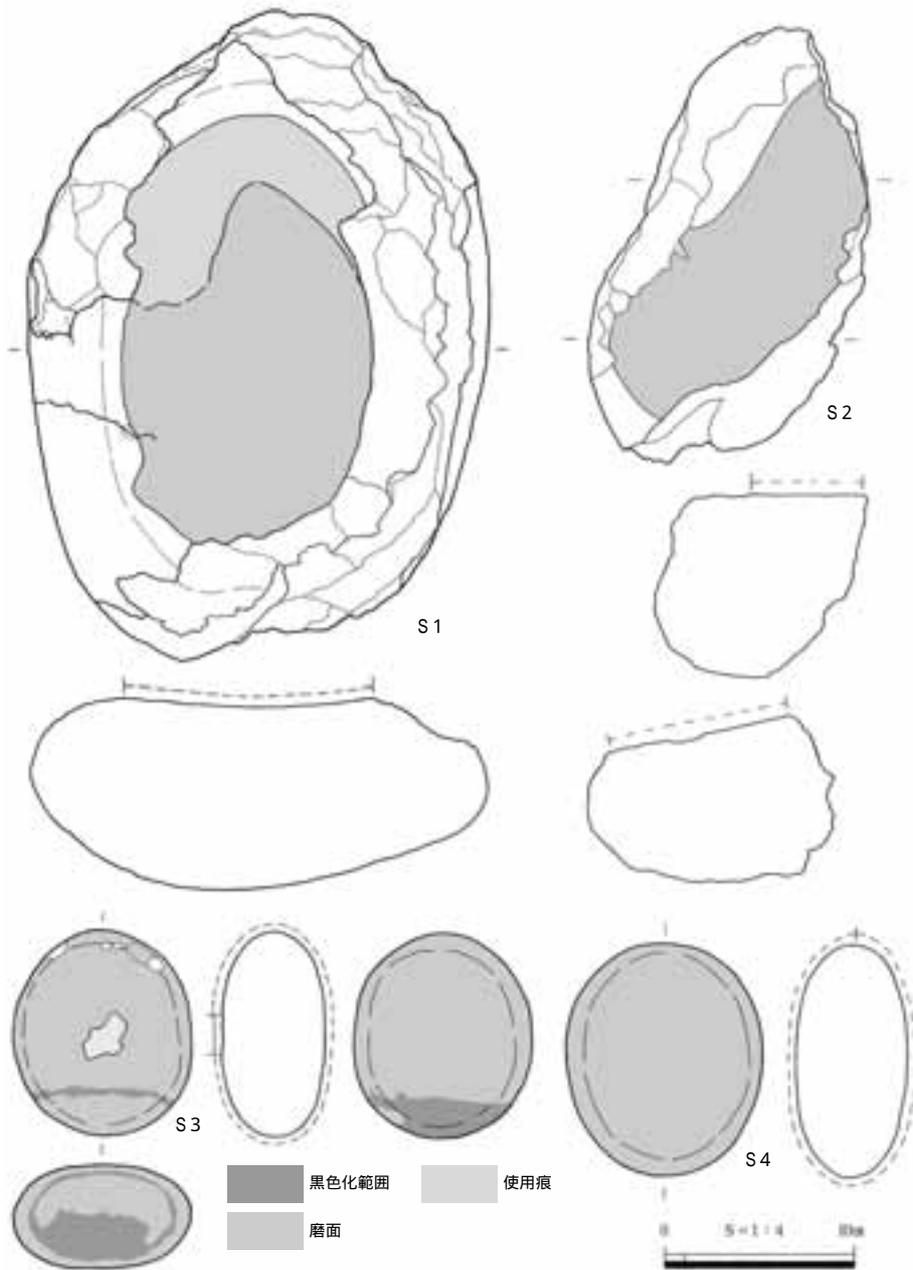
さて、ここまで本遺構を1軒の住居跡として記述してきたが、長軸が約5mあり当該期の住居跡としては大型



第7図 SI5



第8図 SI5出土遺物(1)土器



第9図 SI5出土遺物(2)石器

磨石S4は底面からやや浮いた状態で、石皿の破片S2、磨石S3は床面直上から出土した。また、床面上ではこれらの遺物の他に、拳大程度までの自然礫や割れた礫が数点検出され、その中には被熱したのも1点認められた。

粗製深鉢3、精製深鉢底部7は、厳密には住居跡の埋土よりさらに上層の包含層から出土したものである。本住居跡を検出する以前の、表土・包含層を掘り下げる段階においても、本住居跡付近では周辺に比べて特に縄文土器が集中して出土した。3、7も含めたこれらは、本来はこの住居跡の埋土中に存在したものが攪乱によって浮き上がったものと考えられる。またこのことと関連して、住居の掘り込み面が本来はもう少し高かった可能性も考えられる。

本住居跡から出土した土器は、そのほとんどが縄文時代後期初頭、中津式の段階に位置づけられる。したがって、建て替えないし拡張を含めた本住居跡の時期は中津式期と考えておきたい。(君嶋)

である点、石囲炉の他に複数の火処(焼土面)が存在する点、ピットや溝が密に集中しており、溝の切り合いもみられる点、溝の埋土上に貼床が遺存している点、貼床が2面重複している点などから、建て替えあるいは拡張によって複数の住居が重複している可能性が高い。ただし、住居全体の埋土があまり残っていないため、土層断面での切り合い関係は把握できなかった。

本住居跡からは、縄文土器片多数と礫石器数点が出土した。土器片は1、3のように遺存度の高い個体もあるが、完形に復元できるものはない。床面直上から出土したものは2、6、8、10である。礫石器のうち、石皿S1、

付・粘土塊

SI 5 の北縁に近接して、長軸約55cm、短軸約40cm、厚さ約20cmの灰白色粘土塊を検出した。住居内に保管された土器素材である可能性が想起されたが、断ち割って調査したところ、粘土内から黒曜石製の石鏃破片の他に、弥生土器もしくは土師器の破片が出土したため、SI 5 に伴うものではないことが判明した。土器は細片であり時期は特定できない。性格も不明である。(君嶋)

第3節 弥生時代の調査成果

(1) 概要

弥生時代の遺構として、溝2条(SD 2・3)、土坑4基(SK 4・16・20・23)を検出した。

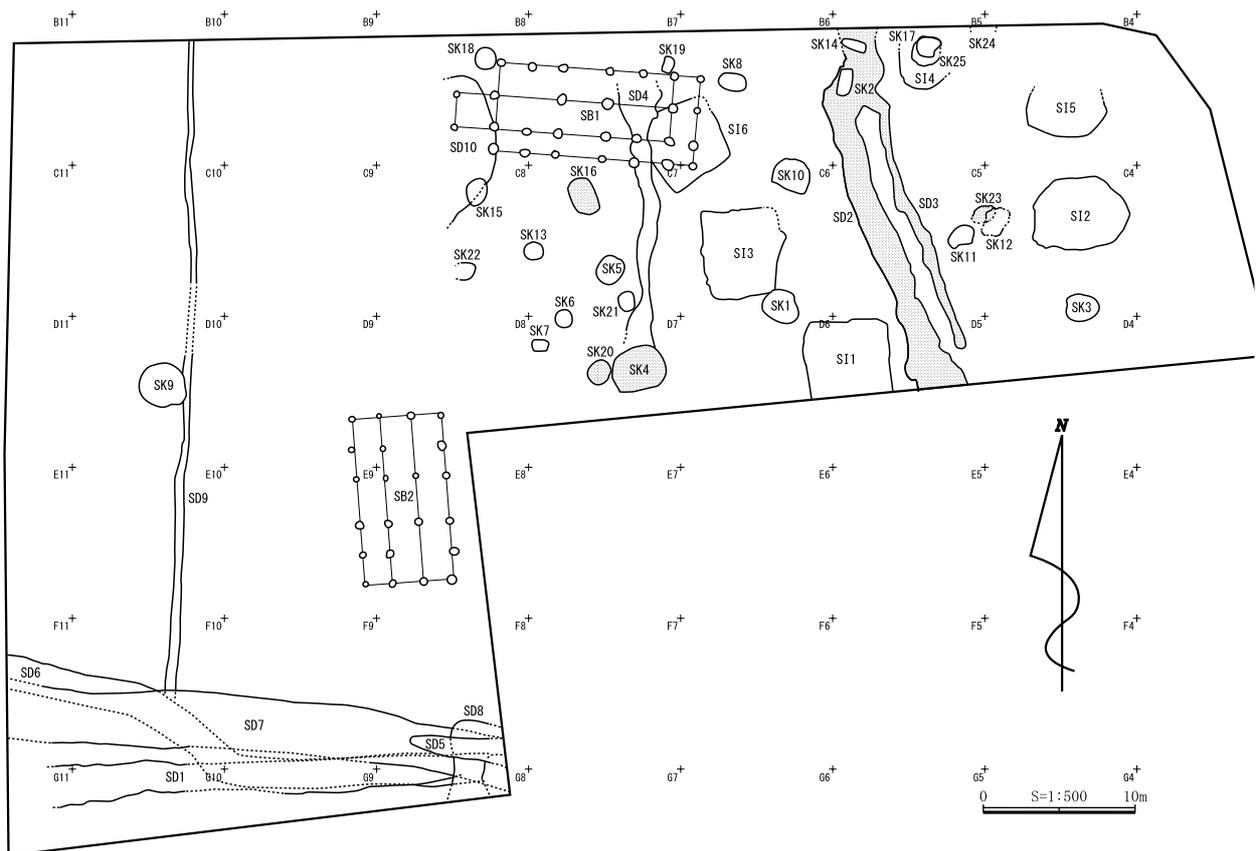
SD 2・3 は自然流路と考えられ、縄文時代から弥生時代終末期までの多量の土器を含む。また、碧玉製の管玉未成品も出土している。

4基の土坑はいずれも中期の遺構である。SK 4、SK16では礫とともに土器が廃棄された状況を示す。SK20からは石鋸が出土しており、SD 2・3の管玉未成品と合わせて、本遺跡で弥生時代中期前葉～中葉に玉作が行われていたことが推測される。(君嶋)

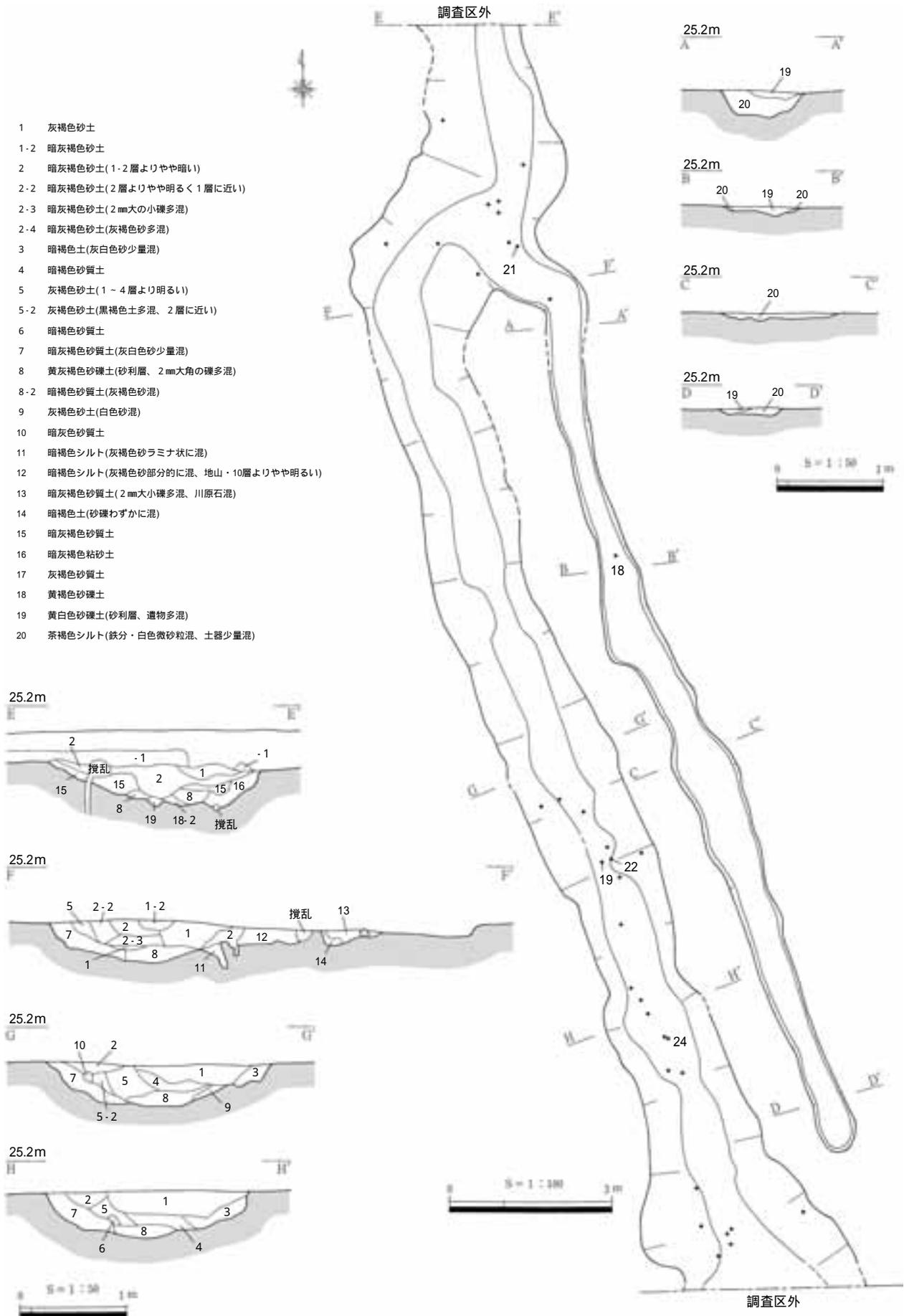
(2) 溝

SD 2・3 (第11・12・13図、PL. 6・23・42・44)

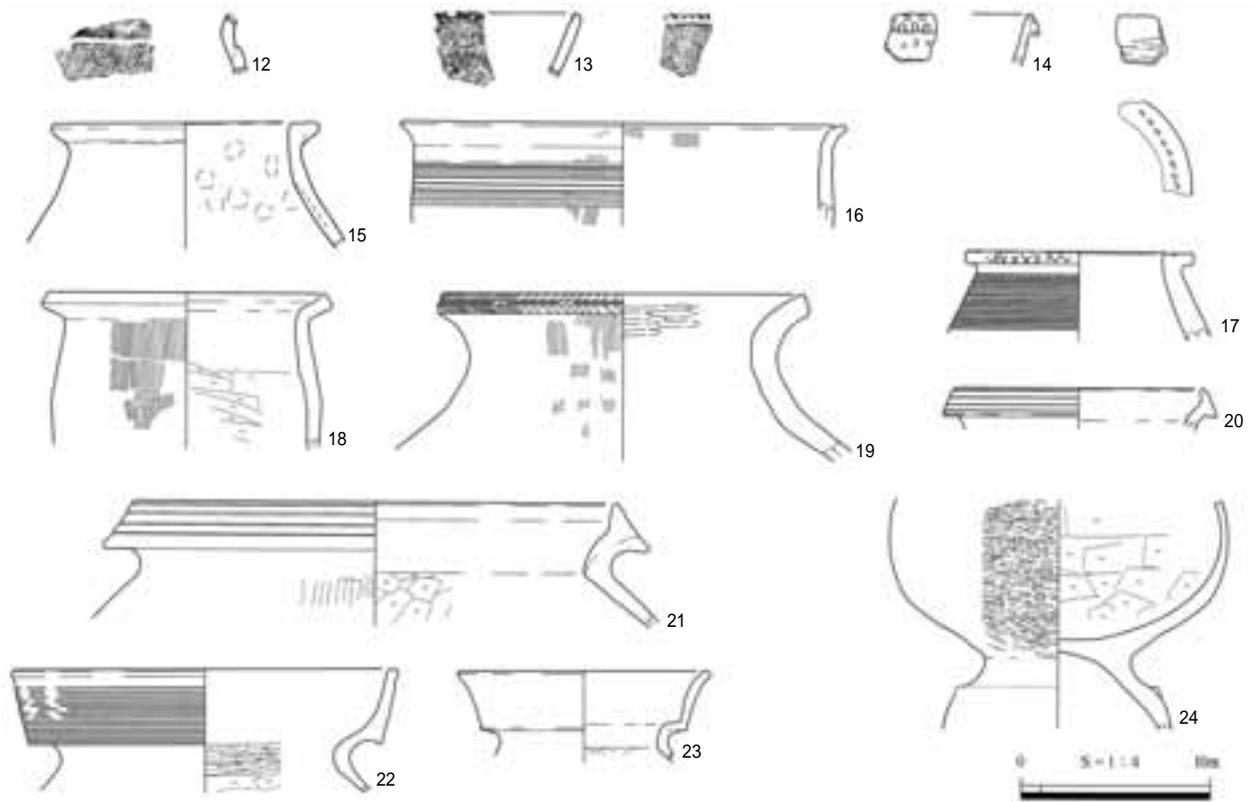
調査区の東側、B5・C5・D5グリッドに位置する。両遺構は南北方向に平行する2条の溝であり、B5グリッドで合流する。両遺構の先後関係は、面的に検出した段階で把握した切り合い関係から、



第10図 弥生時代遺構分布図



第11図 SD 2・3



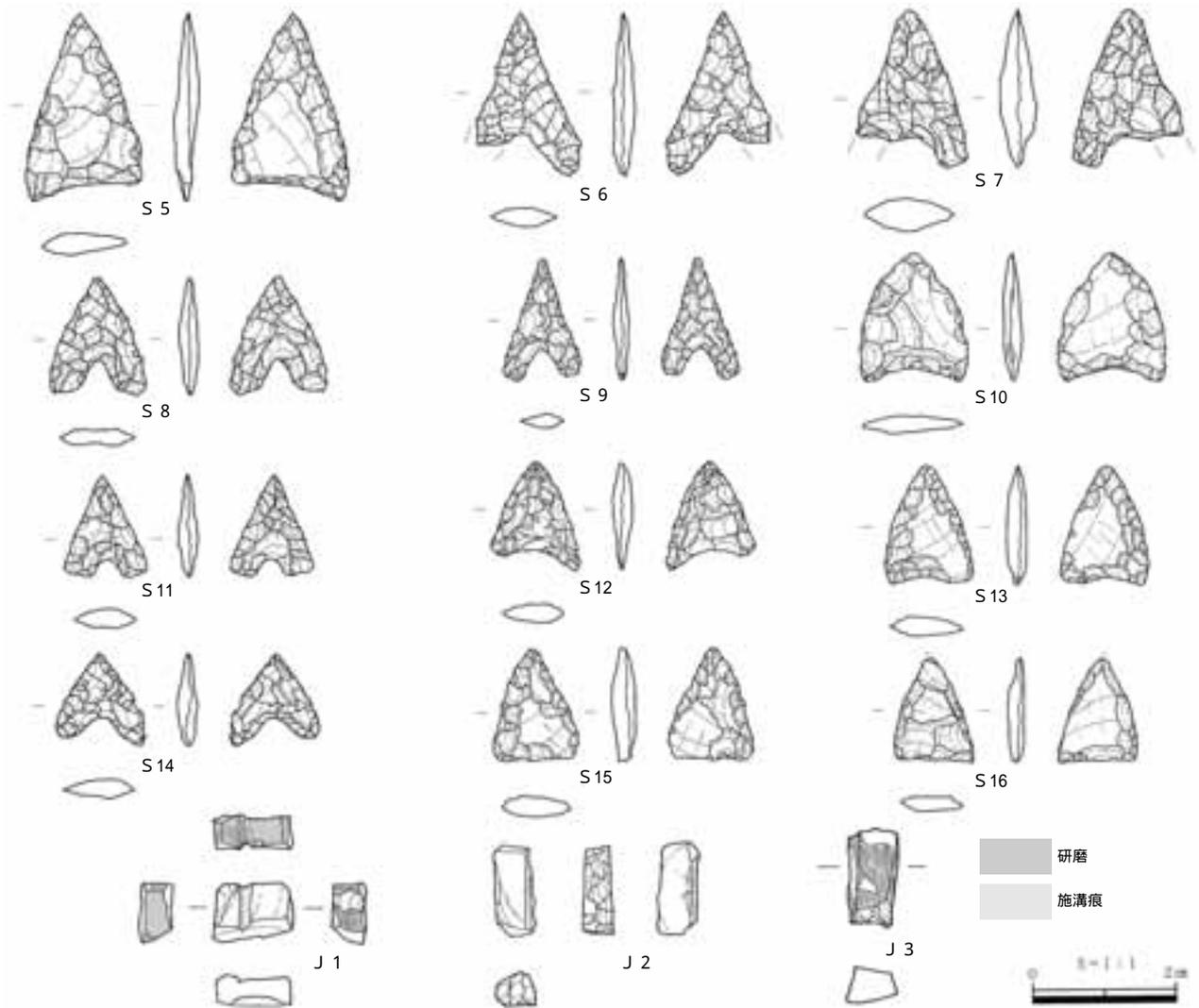
第12図 SD 2・3 出土遺物(1) 土器

SD 3 が先行し、SD 2 が後出する。

SD 2 は南端と北端が調査区外にかかっており、検出した長さは約24.5mである。調査区南端から北西方向へほぼ直線的にのびており、調査区北壁から約4mの地点で北東方向へ短く屈曲した後に、再び北方向へと走向を変えて調査区外へと伸びている。幅はおよそ1.3mから2mで、広いところでは3m近くに達する。検出面からの深さは約35～45cmで、断面形は浅いU字形を呈する。溝底の標高は、調査区南端で約24.55m、調査区北端で約24.25mであり、北端の方が約30cm低い。

埋土は、上層の灰褐色砂、暗灰褐色砂層と、下層の黄灰褐色砂礫層に明瞭に二分され、かつて水が流れていたことが窺える。先述した溝底のレベル差から、周辺の河川と同様に北流していたものと考えられる。また、下層は厚さ15cmほどの堆積であるが、粒径の粗いいわゆる砂利層であり、拳大～人頭大の礫も多く含まれていた。このことから、本遺構形成時の流れはかなり流勢が強かったものと推測される。

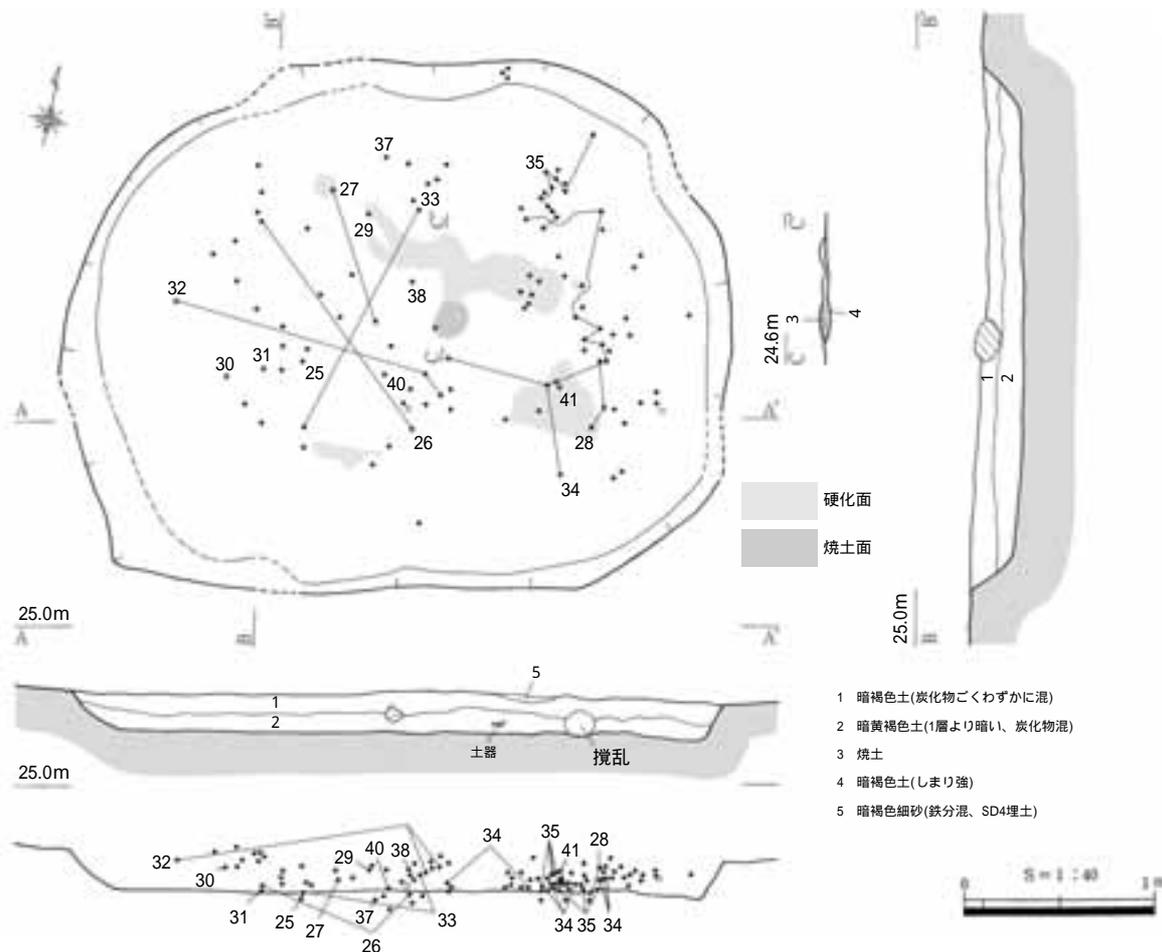
遺物は、埋土中から多量の土器片が出土した。特に下層からの出土量は膨大で、コンテナ数箱分に相当する。遺物の時期別にみると、厳密に計量してはいないが弥生時代後期のものが最も多く、縄文時代後期、晩期、弥生時代前～中期のものを含む。これらのうち、各時期の特徴を示す代表的な個体を選んで第12図に図示した。最も新相を示すのは甕23など弥生時代終末期（様式）のものである。なお、遺物は上層と下層とに分けて取り上げたが、下層からも弥生時代後期の土器が出土しており、遺物の新古と層位とは対応しない。古相を示す遺物は、弥生時代終末期に溝が形成された際に、上流側、すなわち調査区の南側に存在した弥生時代中期以前の遺構ないし包含層から流されてきたものであろう。土器片はほとんどが小片であるが、摩滅はそれほど顕著ではなく、壺19や脚付壺24など、遺存度の高い個体もわずかに含まれる。したがって、遠距離を流れてきたものとも考えにくい。



第13図 SD 2・3 出土遺物(2) 石器、玉類

土器以外の遺物では、黒曜石製、サヌカイト製の石鏃が出土している。また、注目すべき遺物として管玉未成品があげられる。図示したもののうちJ1、J2には施溝痕が認められ、施溝分割によって板状の素材から角柱状の素材を形成する過程で廃棄されたものと考えられる。一方でJ3は打割分割によって成形された角柱状の素材であり、管玉の製作技法において異なる2者の存在を指摘できる。両技法は盛行した時期が異なるが^{註)}、先述したとおり本遺構では縄文時代～弥生時代終末期までの遺物が混在しており、管玉未成品についても帰属時期は明らかにできない。なお、これら管玉未成品3点の石材産地については、蛍光X線分析によりいずれも菩提、女代南B群に属する碧玉であるとの結果を得た(第4章第4節参照)。その他に、図化するに至らなかったサヌカイト、碧玉の極小剥片(チップ)も多数出土している。

SD3は、SD2の約1m東側をほぼ直線的に併走し、調査区北壁から約4.5mの地点でわずかに屈曲してSD2に合流する。幅は40cm～1m、深さは5～45cmであり、SD2よりも小規模である。埋土は2層に分層される。上層はSD2の下層に類似した砂利層であり、遺物を多量に包含する。下層は鉄分の沈着もみられる茶褐色シルトで、いずれも流水の痕跡をとどめている。部分的に上層が認められない箇所もあることから、上半部は削平を受けているものと考えられる。溝底のレベルは、南端付近で標高約24.9m、合流点付近で約24.5mであり、SD2と同様に北側が低くなっている。



第14図 SK 4

SD 3 は、先述した切り合い関係によりSD 2 に先行するが、出土遺物の様相はSD 2 と同様であり、弥生時代終末期までの幅広い時期の遺物を含んでいる。したがって、SD 2 とSD 3 は、ともに弥生時代終末期の近接した時期に形成された自然流路と考えられる。(君嶋)

【註】増田浩太 2004 「第2章第2節 鳥取県」『古代出雲における玉作の研究』鳥根県古代文化センター。この中で、伯耆地域では弥生時代後期前葉から中葉頃にかけて施溝分割技法から打割技法へと変化すると整理されている。

(3) 土坑

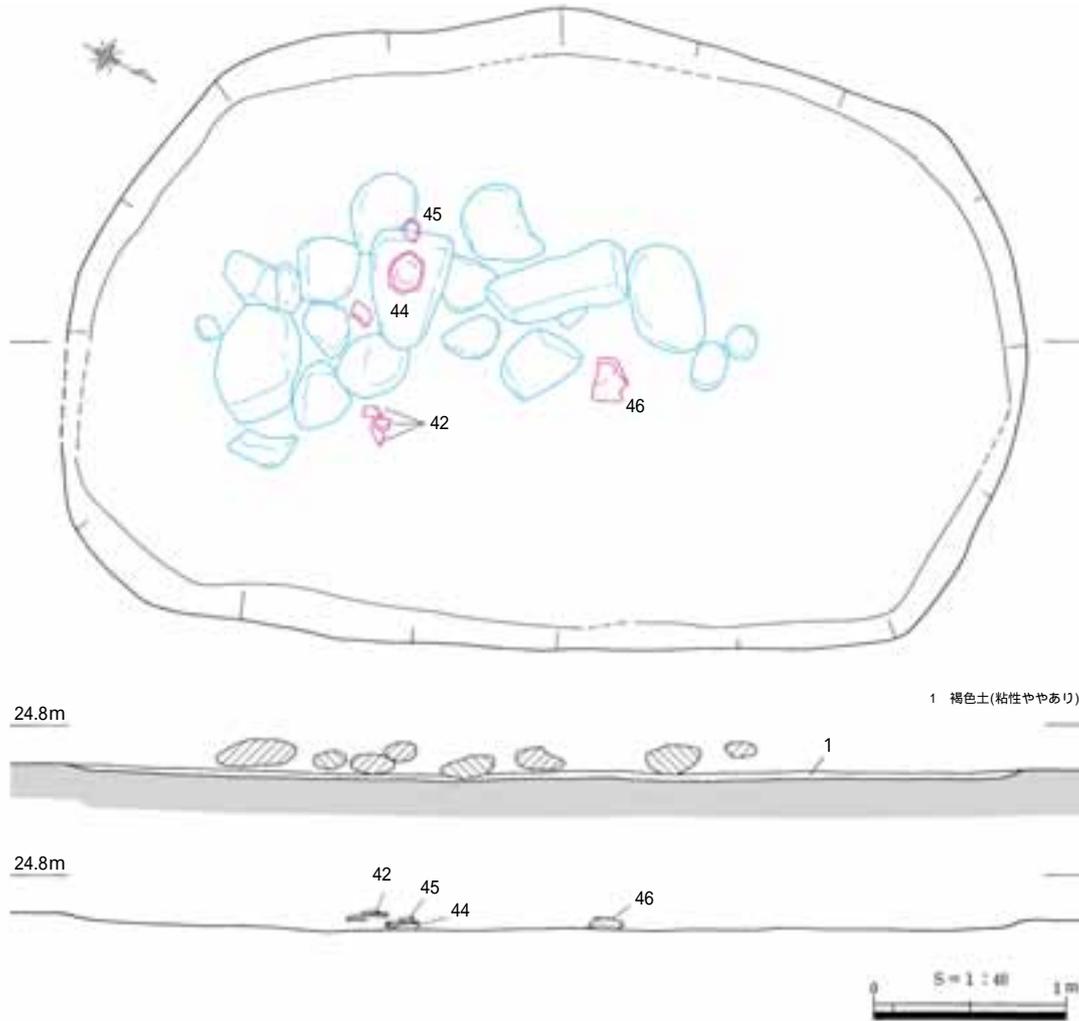
SK 4 (第14・15図、PL. 7・24・25・26)

D 7 グリッド北東寄りに位置する。SD 4 に切られるが、SD 4 自体が浅い掘り込みであることや、後述する土器の遺存状況などから、大きな削平は受けていないと考えられる。検出面での平面形は長軸約3.5m、短軸約2.8mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約25cmを測り、断面形は逆台形である。底面は長軸約3.2m、短軸約2.5mの楕円形を呈し、ほぼ平坦である。埋土は暗褐色土、暗黄褐色土層が主体で、いずれも炭化物や拳大の礫を少量含む。土坑底のほぼ中央部において厚さ1～3cmほどの焼土面を検出し、さらにその周辺には部分的に硬化面が認められた。

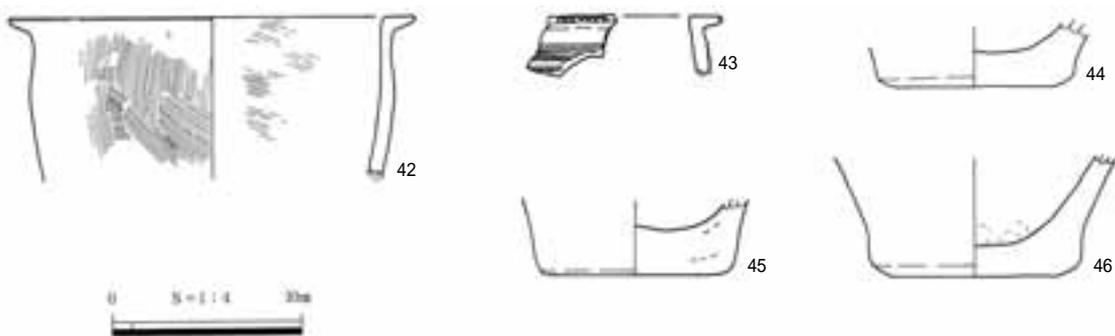
埋土の上層から底面直上にかけて、夥しい量の土器が出土した。土器は焼土面の周囲に集中している傾向がみられた。破片のものが多く、最小個体数にして20個体以上に相当する。完形に復元できるものはないが、34、35など遺存度の高い個体も含まれる。土器の器種には偏りがみられ、甕が最も多く、そのうち大部分は胴部外面に煤が付着している。また、34は底部に焼成前の穿孔がされている。



第15図 SK4出土遺物



第16図 SK16



第17図 SK16出土遺物

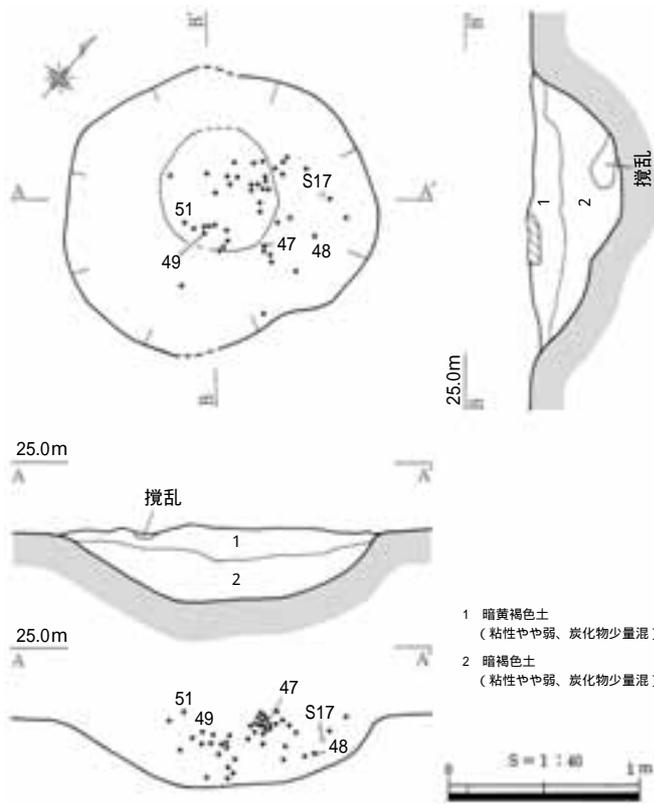
36は古墳時代後期以降の甕形土器であり、SD4に伴って混入したものと考えられる。これらの出土土器は - 1 様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

土器の出土状況から廃棄土坑と推測されるが、焼土面や硬化面が存在し、土器の出土位置が偏っている点からは、単なる廃棄土坑とは考えにくい。短期間のみ使用され、廃棄された小型住居跡としての可能性も考えられるが、中央ピットや柱穴、壁溝などが検出されなかったため明確にはできない。

(山根)

SK16 (第16・17図、PL. 7・26)

C7グリッド北寄りに位置する。検出面での平面形は長軸約5m、短軸約3.4mの楕円形を呈する。検



第18図 SK20

出面からの深さは約3cmしか遺存しておらず、上部がかなり削平を受けているものと推測される。底面は長軸約4.8m、短軸約3mの楕円形を呈する。埋土は褐色土の単層で、10～60cm大の礫を多量に含む。礫は丸みを帯びており河原石と考えられる。

遺物は、礫と礫の間、および礫の下から土器が出土した。甕43は口縁外面に刻目、胴部上半に櫛描平行線が施され、42とともに逆「L」字状口縁をもつ。礫の下から正置された状態で出土した44は甕または壺の底部で、胴部を意図的に打ち欠いたものと考えられる。土器は 様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

礫や土器の出土状況から、何らかの祭祀に関わる土坑の可能性はある。 (山根)

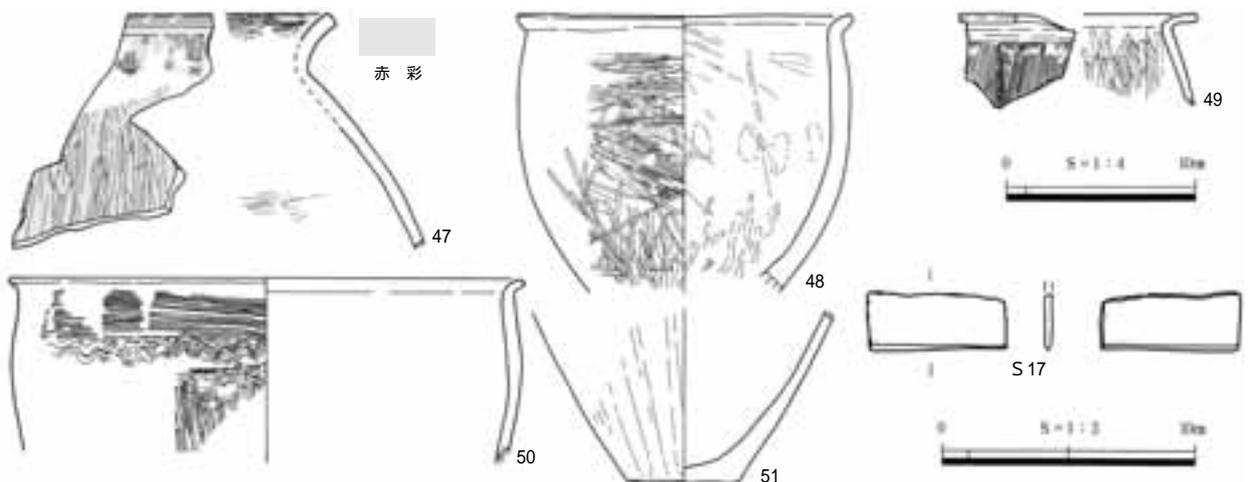
SK20 (第18・19図、PL.7・26・44)

D7グリッドのほぼ中央に位置する。検出面での平面形は長軸約1.6m、短軸約1.5mの楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約50cmであり、断面形はすり鉢状である。底面は長軸約0.8m、短軸約0.7mの不整な楕円形を呈する。埋土は暗茶褐色土層、暗褐色土層に分かれ、いずれの層にも少量の炭化物が混じる。

遺物は埋土中から多量の土器片および石鋸が出土した。遺物の時期は、甕48、50が 様式、47、49が 様式に近い特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期中葉と考えられる。また、本土坑からの石鋸の出土は、本遺跡における玉作が中期前葉ないし中葉にさかのぼる可能性を示唆するものである。

土器の出土状況から廃棄土坑としての性格が想定される。

(山根)



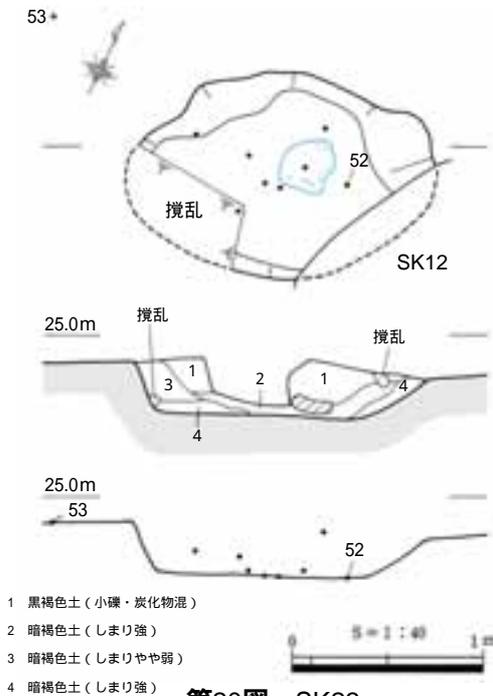
第19図 SK20出土遺物

SK23 (第20・21図、PL. 7・25・26)

C4・C5グリッドの境界付近に位置する。主軸を北東 - 南西方向にとる楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.1mである。東側を中世の土坑であるSK12に切られ、また西端は攪乱によって破壊されており、遺存状況はよくない。検出面からの深さは最大で約25cmであり、底面はほぼ平坦である。埋土は地山に似通った黒褐色土、暗褐色土を主体とする。1、2層は、3、4層の堆積後に掘り返したような堆積状況である。埋土中からは土器の小片数点が出土した。また、底面近くから扁平な人頭大の礫が検出された。図示した甕52は底面直上から出土したもので、様式の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

なお、本遺構の西縁から北西方向へ80cm離れた地点において、壺53が検出された。口縁部から胴部までの半周ほどが遺存しており、遺構面上に横転した壺の上半が削平されたものと考えられる。時期は様式に位置づけられる。また、周辺には人頭大の礫が散乱していた。同時期の遺構であるSK23やSK16からも同大の礫が出土していることから、本来は遺構に伴っていた遺物である可能性が高い。

(君嶋)



第20図 SK23



第21図 SK23出土遺物

第4節 古墳時代の調査成果

(1) 概要

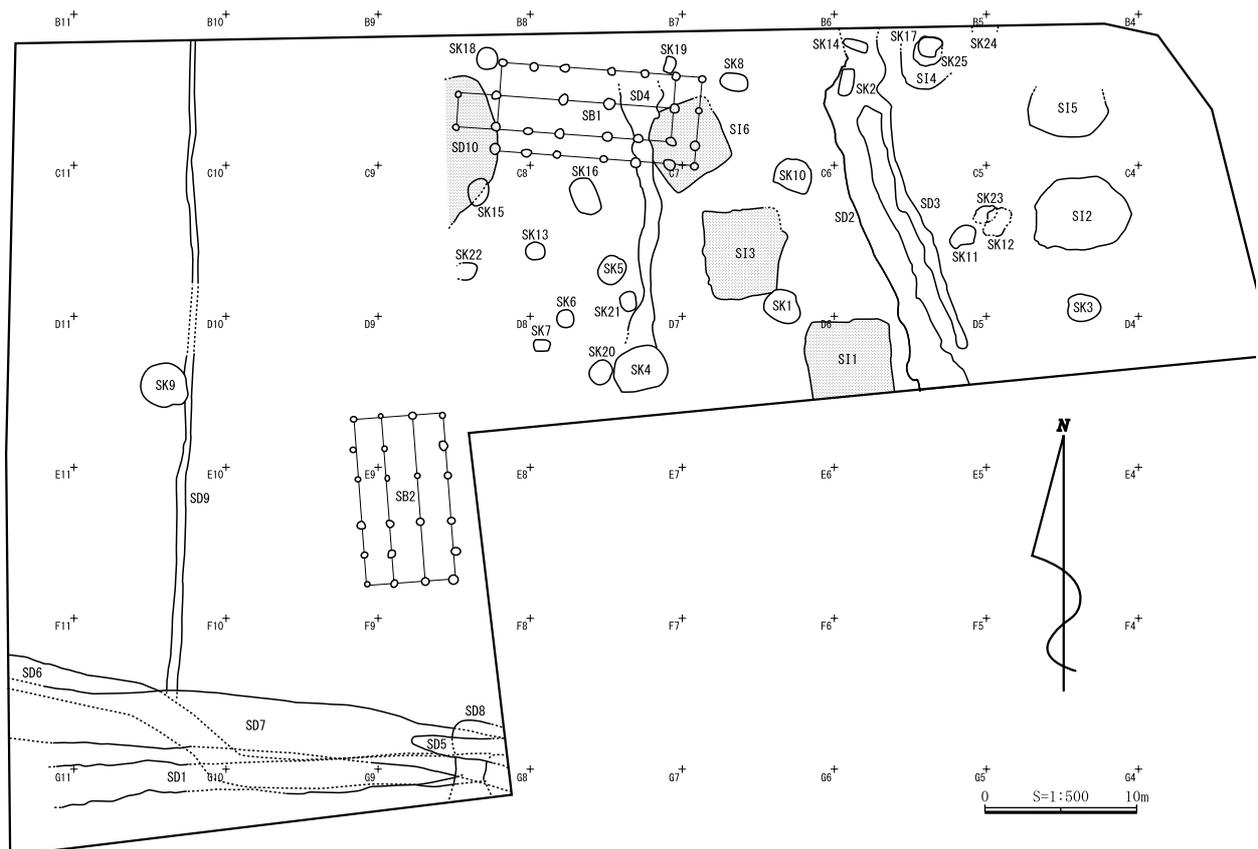
古墳時代の遺構として、竪穴住居跡3軒(SI1・3・6)、溝1条(SD10)を検出した。これからは、いずれも古墳時代後期、八橋期(TK209式併行)前後の土器が出土している。(君嶋)

(2) 竪穴住居跡

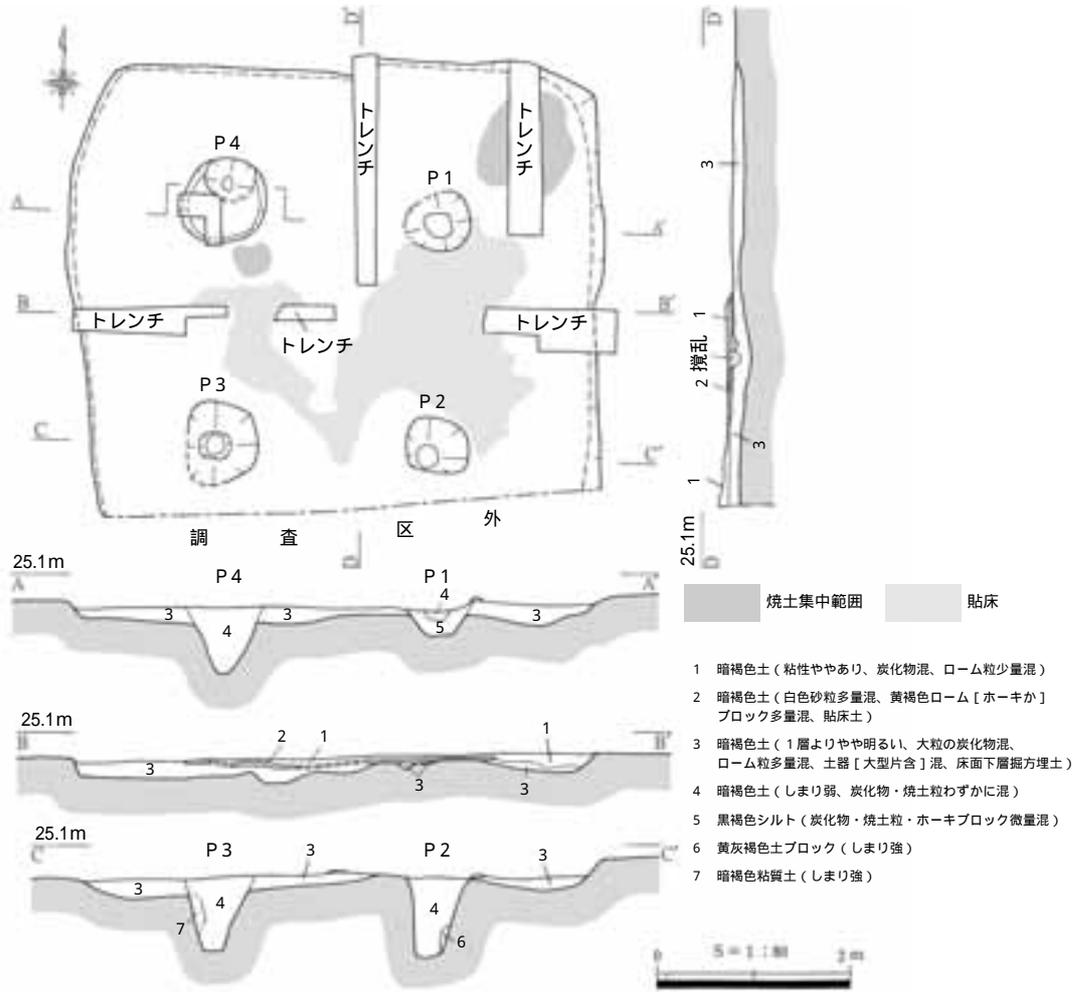
SI1(第23・24図、第2表、PL.8・27)

D5・D6グリッドの調査区南壁際に位置する。平面形は、四辺をほぼ東西南北方向に向けた方形を呈する。南辺は調査区外にかかるため正確な規模は明らかにできないが、東西約5.6m、南北約5mである。

掘り込みは非常に浅く、遺構検出面とほぼ同レベルで貼床による硬化面の一部を検出した。埋土として把握した1層は厚さ5cmほどに過ぎない。したがって壁面はほとんど遺存していない。また、貼床下の3層は、地山と非常に似通っているものしまりがやや弱く、土師器、須恵器の小片を包含していた。このことから、3層は粗掘りした住居の掘方に充填された整地土層と判断した。貼床は部分的に遺存していたのみである。なお、住居の北東隅およびP4南側付近の2箇所に焼土の集中が認められたが、ここでは貼床は確認されておらず、焼土自体も硬化していない。したがってこの焼土は3層中に含まれていたものと考えられる。



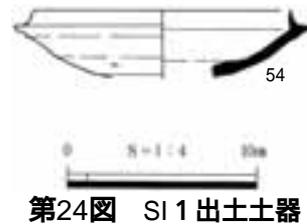
第22図 古墳時代遺構分布図



第23図 SI 1

第2表 SI 1ピット計測表

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P 1	70	65	25
P 2	70	55	85
P 3	90	80	80
P 4	90	85	70



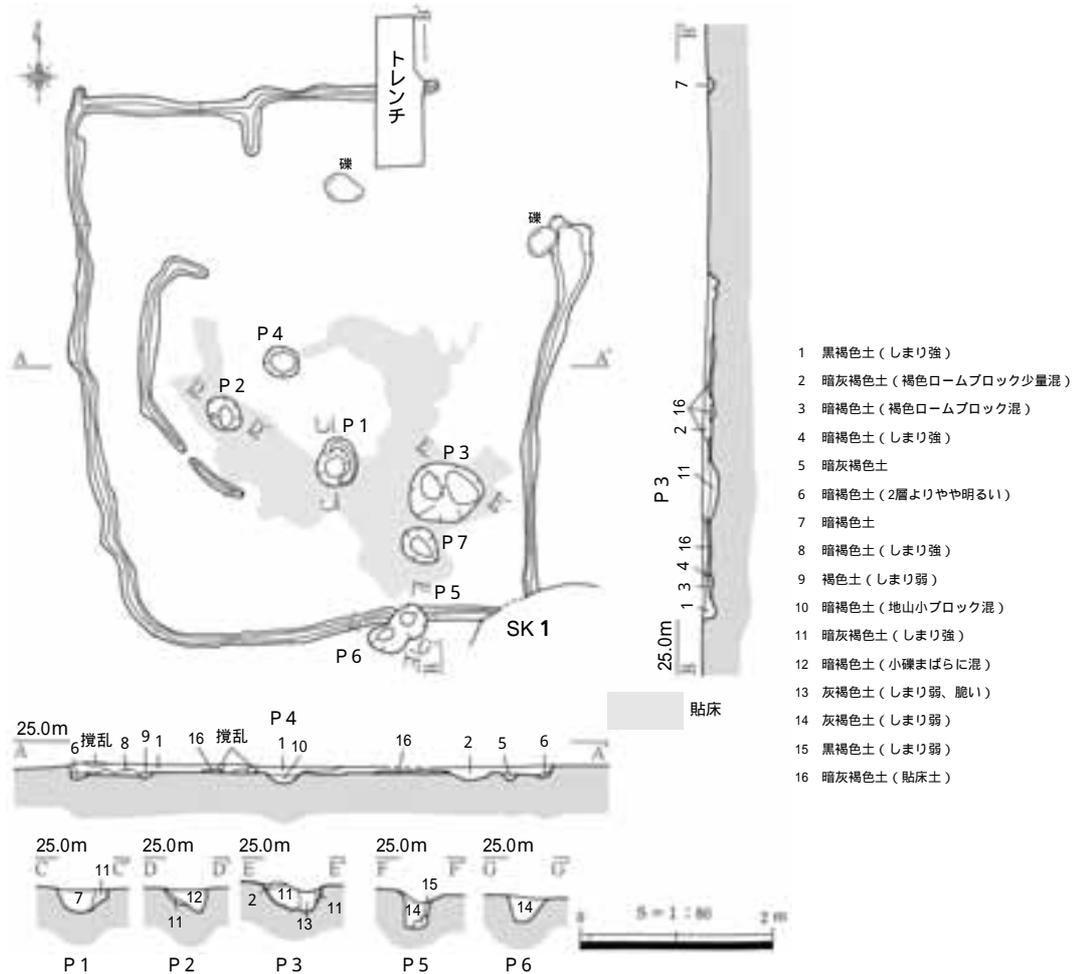
第24図 SI 1出土土器

柱穴は、P1～P4の4基を検出した。土層断面から、3層充填後に掘り込まれたことが窺える。柱痕跡は明確ではない。心々距離はP1 - P2間から順に2.5m、2.25m、2.8m、2.3mであり、ややいびつながらも方形の主柱配置をとるものと考えられる。

遺物は、埋土1層および整地土3層から土師器、須恵器の小片が十数点出土した。図示した須恵器蓋坏坏身54は1層から出土したもので、八橋 期の特徴を示すことから、本住居跡の時期は古墳時代後期～終末期と考えられる。なお、本住居跡出土の須恵器の破片2点について胎土分析を行ったところ、鳥越山窯 (倉吉市関金町) 産と推定された (第4章第2節参照)。(君嶋)

SI 3 (第25・26図、第3表、PL. 8・27)

C6グリッドに位置する。南東隅を中世の土坑であるSK 1に切られる。南東方向には3mの間隔においてSI 1が位置する。平面形は、四辺をほぼ東西南北方向に向けた方形を呈し、南北約5.9m、東西約5.4mである。SI 1と同様に掘り込みは非常に浅く、埋土は厚さ10cm程度である。壁面はほとんど遺存していないが、幅約20cm、深さ約5cmの壁溝が四周を巡る。この壁溝は北東隅が途切れるが、この



第25図 SI 3

第3表 SI 3 ピット計測表

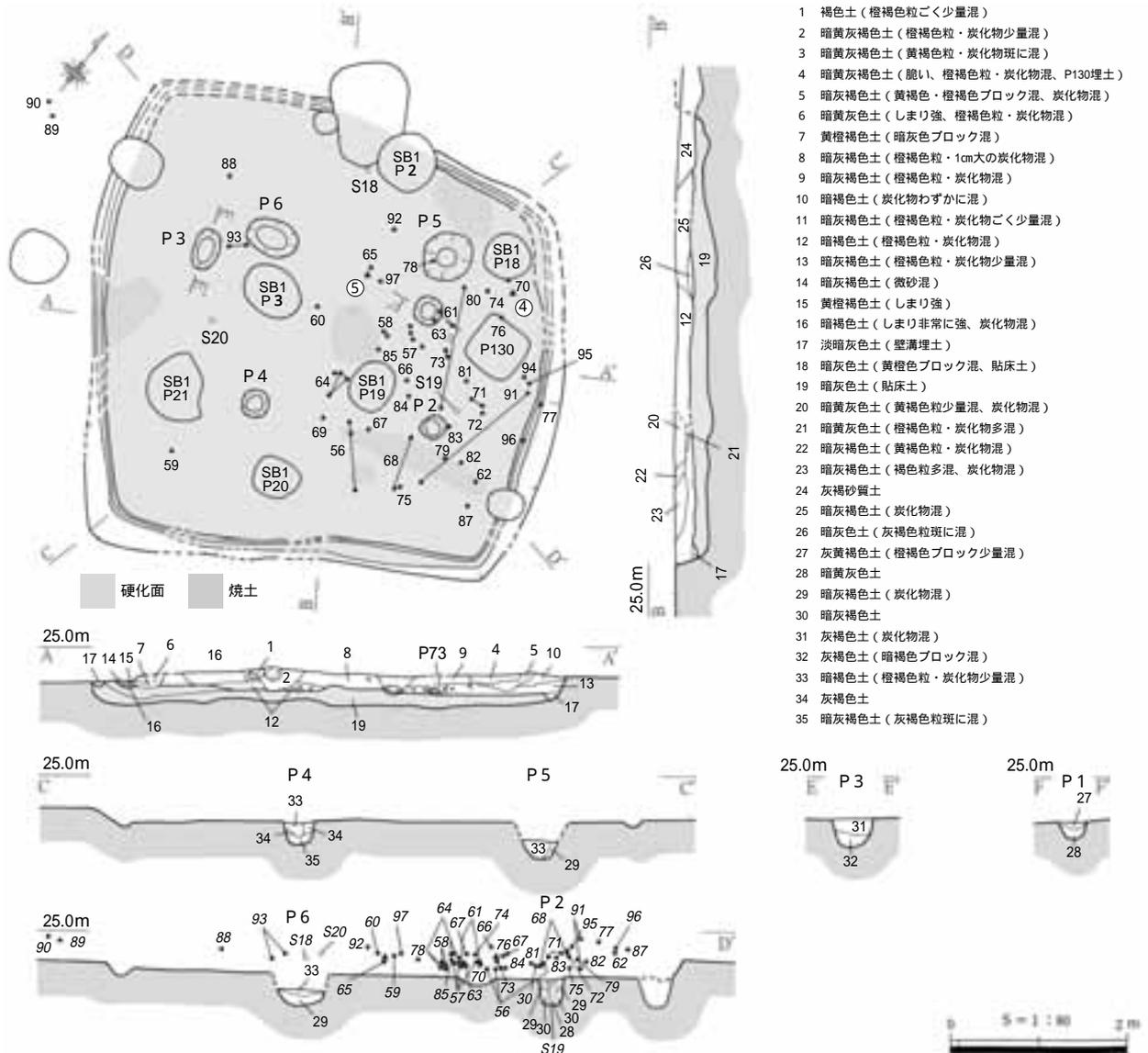
番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P 1	50	43	23
P 2	43	33	24
P 3	78	66	30
P 4	37	33	13
P 5	35		40
P 6	37		29
P 7	45	40	50



第26図 SI 3 出土遺物

部分は削平を受けている可能性が高い。また、住居の西側では壁溝から約60cm内側で弧状の溝を1条検出した。床面は、地山上に貼床を施しているが、貼床の遺存状況はよくない。住居の北側、北壁溝から2mの範囲では地山面が5cmほど高く、意図的に造作されたベッド状の高まりであった可能性もある。ピットは7基検出した。いずれも柱痕跡は明確ではなく、また配置も不規則であり、支柱配置を復元するには至らなかった。南側壁溝に後出するP5・P6は本住居跡に伴わない可能性もある。

遺物は、埋土中より土師器、須恵器片十数点が出土した。また、住居北側の床面上から扁平な人頭大の礫を2点検出した。使用の痕跡は認められず性格は不明である。土器のうち、図示した須恵器蓋坏坏身55は八橋 ~ 期の特徴を示すことから、本住居跡の時期は古墳時代後期～終末期と考えられる。さらに、主軸方向や床面のレベル等がSI 1 とほぼ一致することから、SI 1 と近接した時期に、同一の設計原理に基づいて構築された可能性が想定される。 (君嶋)



第27図 SI 6

第4表 SI 6ピット計測表

SI 6 (第27・28・29・30図、第4表、写真3・4、PL.9・27・28・29・30)

C7グリッドの平坦面に位置する竪穴住居跡である。検出面では中世の遺構であるSB 1の柱穴やSD 4が上に重複する。この他にも礫を投棄した後世のピットが多数掘り込まれている。

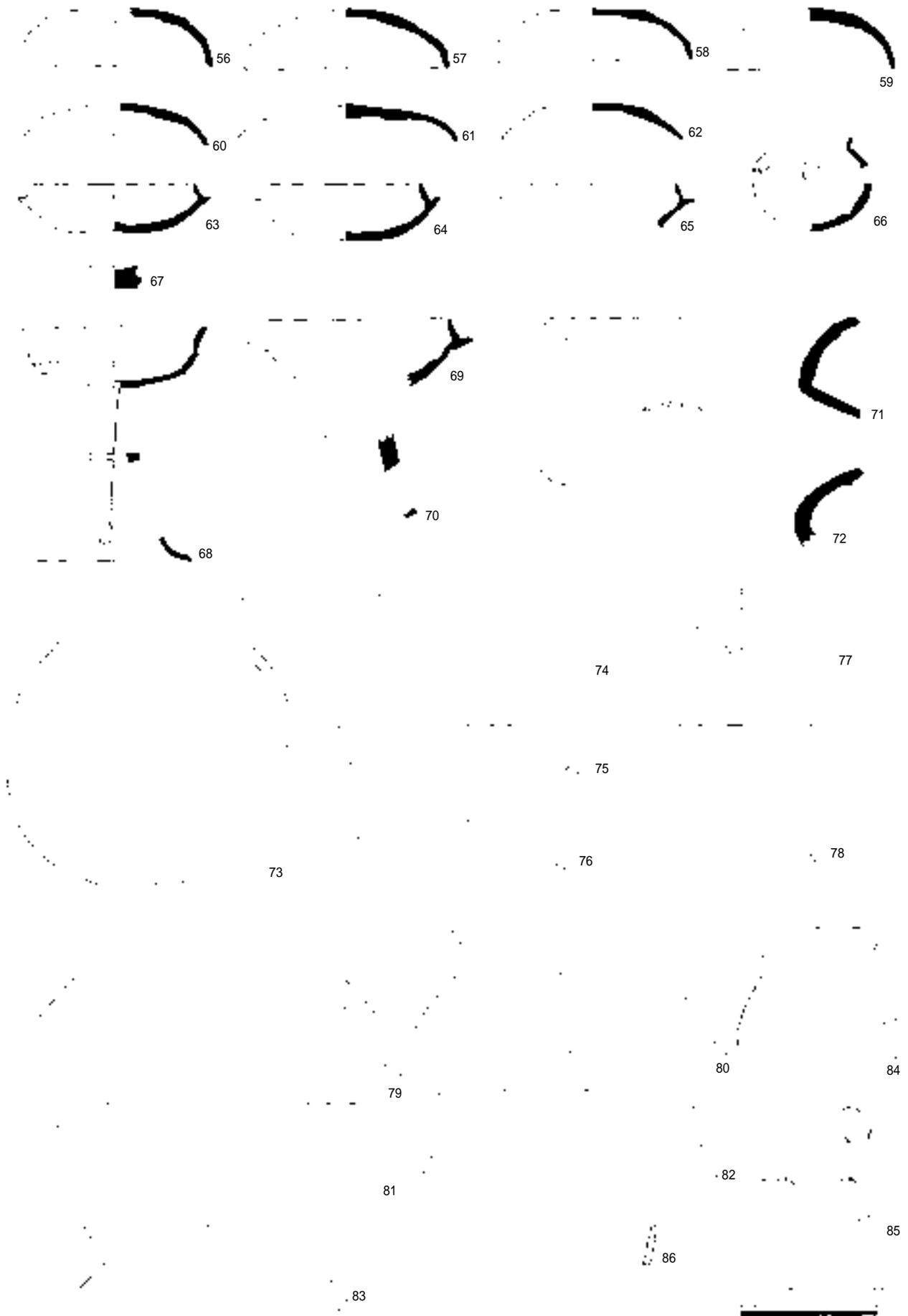
番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	33	32	40	
P 2	29	27	52	主柱穴 (柱痕跡あり)
P 3	48	30	34	
P 4	32	30	30	主柱穴 (柱抜き取り)
P 5	56	55	42	主柱穴 (柱抜き取り)
P 6	60	42	38	主柱穴 (柱抜き取り)

は復元値

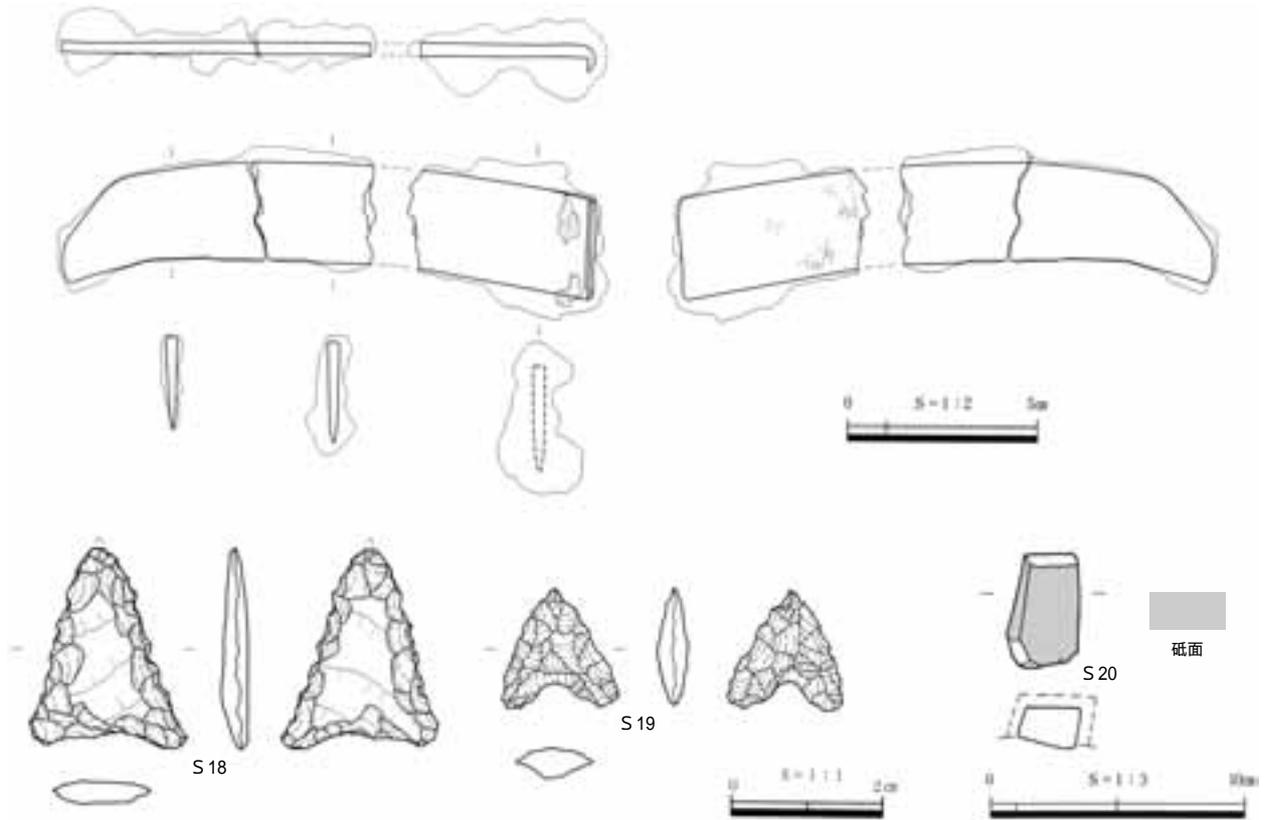
平面は方形を呈しN - 40° - Wに主軸をとる。一辺5.4mを測るが、北東隅はやや不整形となる。壁高は最高で20cm残存する。壁溝は幅12~20cm、深さ6~8cmで断面U字形を呈する。

主柱穴はP2・4・5・6である。床面精査時、後述する貼床土と主柱穴の埋土の峻別が困難であったため、P4・5・6は貼床土を除去してからの検出となった。P1・3はそれまでの柱想定位置である。土層断面観察によりP2では柱痕跡を確認した。その他の柱穴は柱抜き取り穴であると思われる。柱間距離はP5 - P2から時計回りに2m、2.1m、2m、2mとなる。

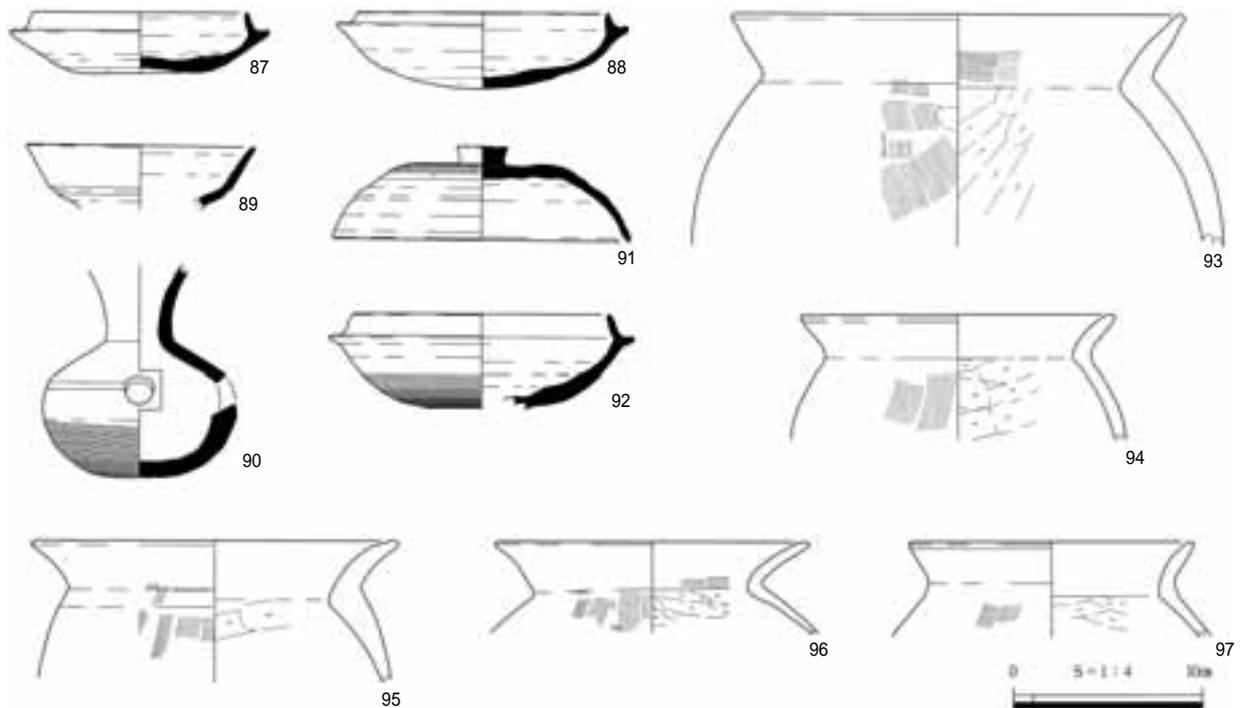
床面には全面に貼床土を付加する。竪穴を掘削する際、いったん床面よりも10~30cmほど深く掘り



第28図 SI 6 出土遺物(1)土器



第29図 SI 6 出土遺物(2) 石器・鉄製品



第30図 SI 6 周辺出土遺物

込み、それから全面に貼床土を付加して床面を形成している。貼床土は二層にわかれ、それぞれに少量の弥生土器や縄文土器が含まれる。また、床面の数箇所に硬化面があり、その遺存状況から西側床面が若干高くなる。

先述のP2の土層断面から判断して、貼床面を形成した後で柱穴を掘り込み、上部構造を組み立てたものと考えられる。

埋土からは多量の須恵器と土師器が出土した。床面直上から埋土上層まで広範囲に含まれており、住居廃絶時に上部構造を解体後、廃棄したものと考えられる。この他にも直刃鎌 や砥石S20、厚手の土製紡錘車85などが出土している。

須恵器は坏身・坏蓋が多く、田辺編年TK209式に併行する時期と考えられる。土師器は甕が大半で、大きさの異なるものが多岐にわたって出土した。八橋編年 期に相当するものと思われる。これらの出土土器から判断して、住居の廃絶時期は古墳時代後期～終末期であると考えられる。

住居西側の遺構検出面でも須恵器有蓋高坏・甕・蓋坏などが出土した。これらは「SI 6 周辺出土遺物」として第30図に図示した。これらの遺物も本来はSI 6で廃棄されたものであり、SB 1 造営時にSI 6 埋土上で柱穴（SB 1 P2・3・5、P18～P21など）を掘削した際に二次的に移動したものと考えられる。

（西川）



写真3 SI 6 甕(66) 出土状況



写真4 SI 6 土師器甕(73) 出土状況

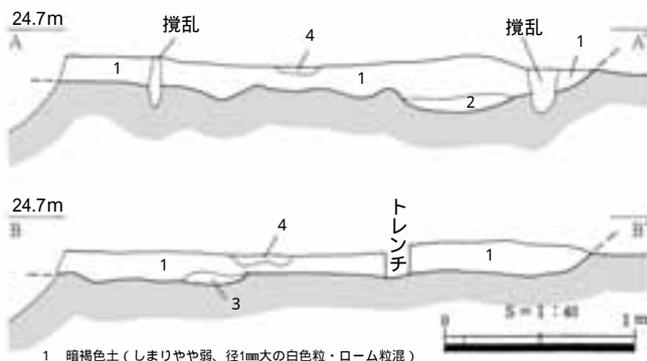
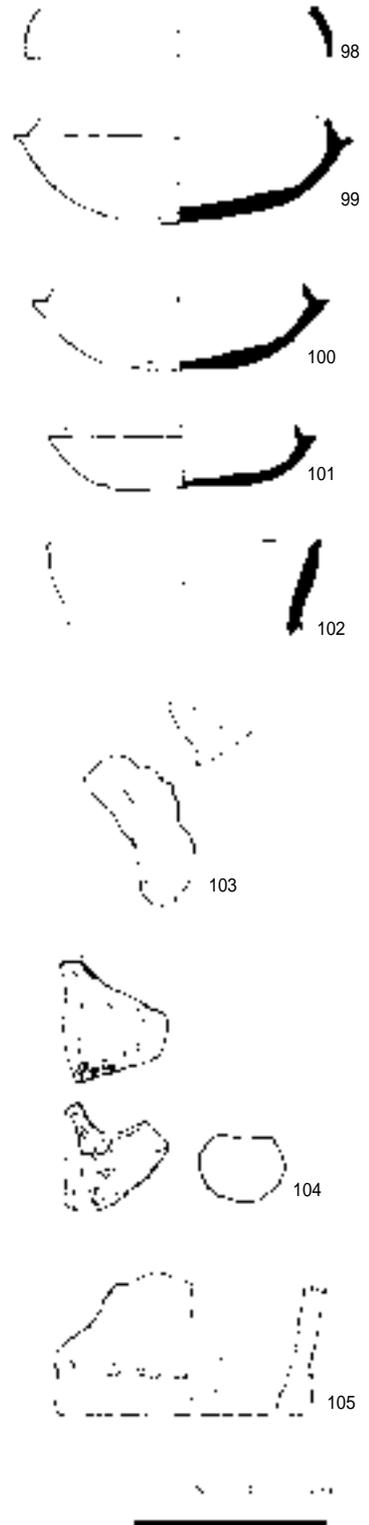
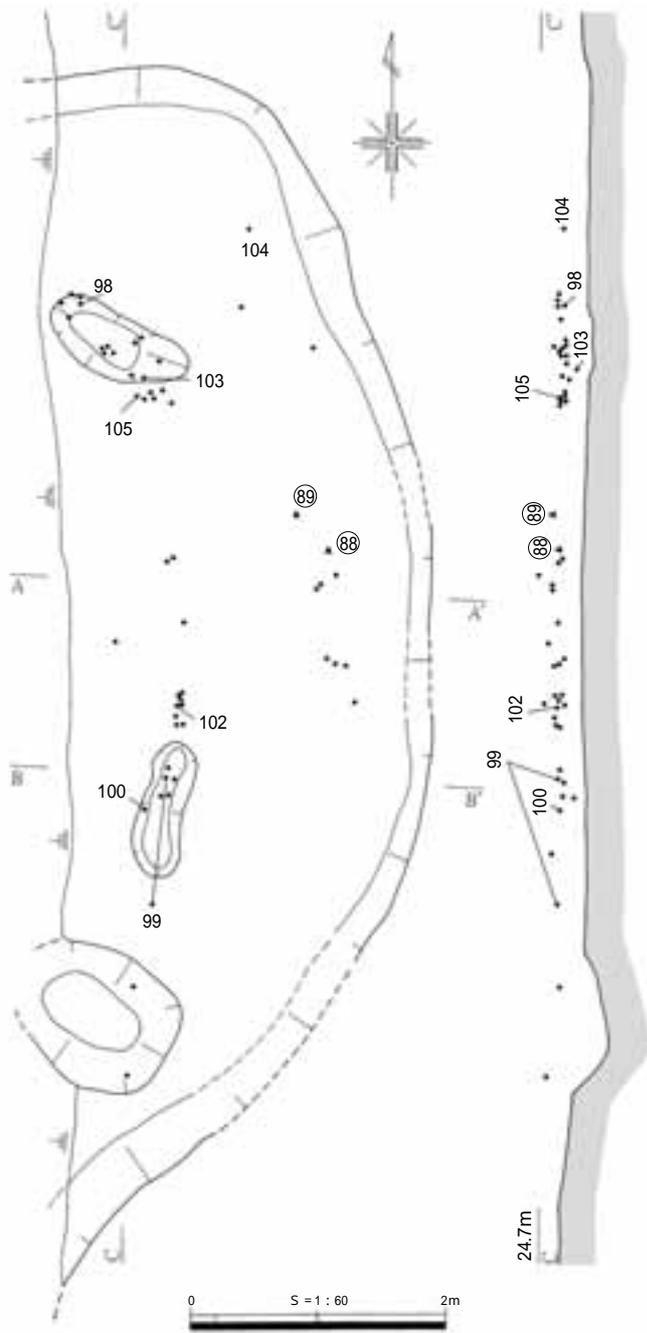
（3）溝

SD10（第31・32図、PL.10・30）

B8・C8 グリッドに位置し、中世の遺構であるSB 1・SK15に切られる。西側は後世の攪乱により壊されているため、平面形は不明である。検出した長さは約10mである。主軸・走向ともに明確にできないが、南側において南西方向に角度を変えており、さらに南西にのびていく可能性がある。検出した幅は2～2.4mである。検出面からの深さは最大で約30cmであるが、特に北側ではSB 1 造成時の削平により遺存状況は悪く、深さ約2cm程度しか残っていない。断面形は西側が不明であるが、非常に浅いU字形と推測される。溝底面の標高は北端で約24.3m、南端で24.4mであり、北端の方が約10cm低い。埋土は暗褐色土を主体とし、10～20cm大の礫が少量混じる。また、黒褐色土および拳大の礫や砂利を少量含む浅い落ち込みが3箇所確認された。

遺物は埋土中から土器片、鉄滓が数十点出土した。出土位置は、先述した浅い落ち込みに集中する傾向がみられる。須恵器坏蓋98、甕底部103、甕脚部105は北側の落ち込みから、須恵器坏身99、100、須恵器口縁部102は中央付近の落ち込みから出土した。98、100の焼成は土師質に近い。坏身99、100、101はいずれもかえりが内傾・短小化しており、口唇部は尖り気味である。甕脚部105は外面ハケ調整後、刺突列点文が施される。鉄滓は3点出土し、うち2点を図示した(88、89)。土器の特徴は八橋～期を示すものであり、埋没時期は古墳時代後期～終末期と考えられる。

溝の性格については明らかにできないが、3箇所の落ち込みで確認された砂利の堆積から、一時期



- 1 暗褐色土（しまりやや弱、径1mm大の白色粒・ローム粒混）
- 2 黒褐色土（白色粒混）
- 3 暗褐色土（しまり弱、砂粒・砂利混）
- 4 褐色土（しまり強、白色粒混）

第31図 SD10

第32図 SD10出土遺物

に水が流れていたか滞水していた可能性が高い。また平面形や断面形などから判断すると、人為的に掘られたものではなく、自然に形成された落ち込みである可能性も考えられる。

（山根）

第5節 古代・中世の調査成果

(1) 概要

古代の遺構として、溝3条(SD1・6・9)を検出した。これらの溝の埋没時期は、SD9が7世紀末頃、SD6が8世紀末～9世紀頃、SD1が9世紀頃と考えられる。

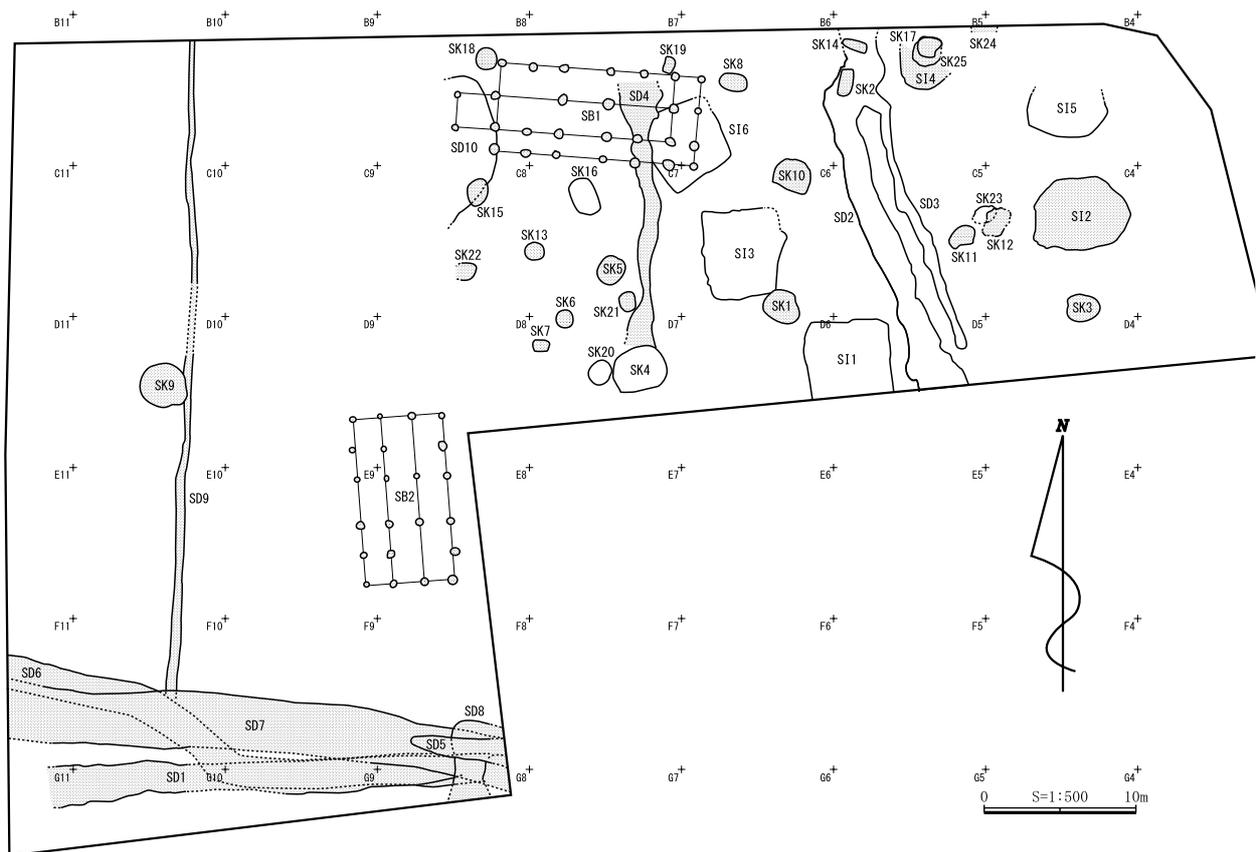
中世の遺構として、竪穴住居跡2軒(SI2・4)、掘立柱建物跡2棟(SB1・2)、溝4条(SD4・5・7・8)、土坑21基(SK1・2・3・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・17・18・19・21・22・24・25)を検出した。これらの遺構は大部分が12世紀代に位置づけられ、掘立柱建物跡やSD4など一部の遺構が13世紀代に降るものと考えられる。(君嶋)

【註】本報告書においては、7世紀後半～10世紀代を古代、11世紀以降を中世とする。土器編年と暦年代との対応は、例言に掲げた参考文献に拠る。

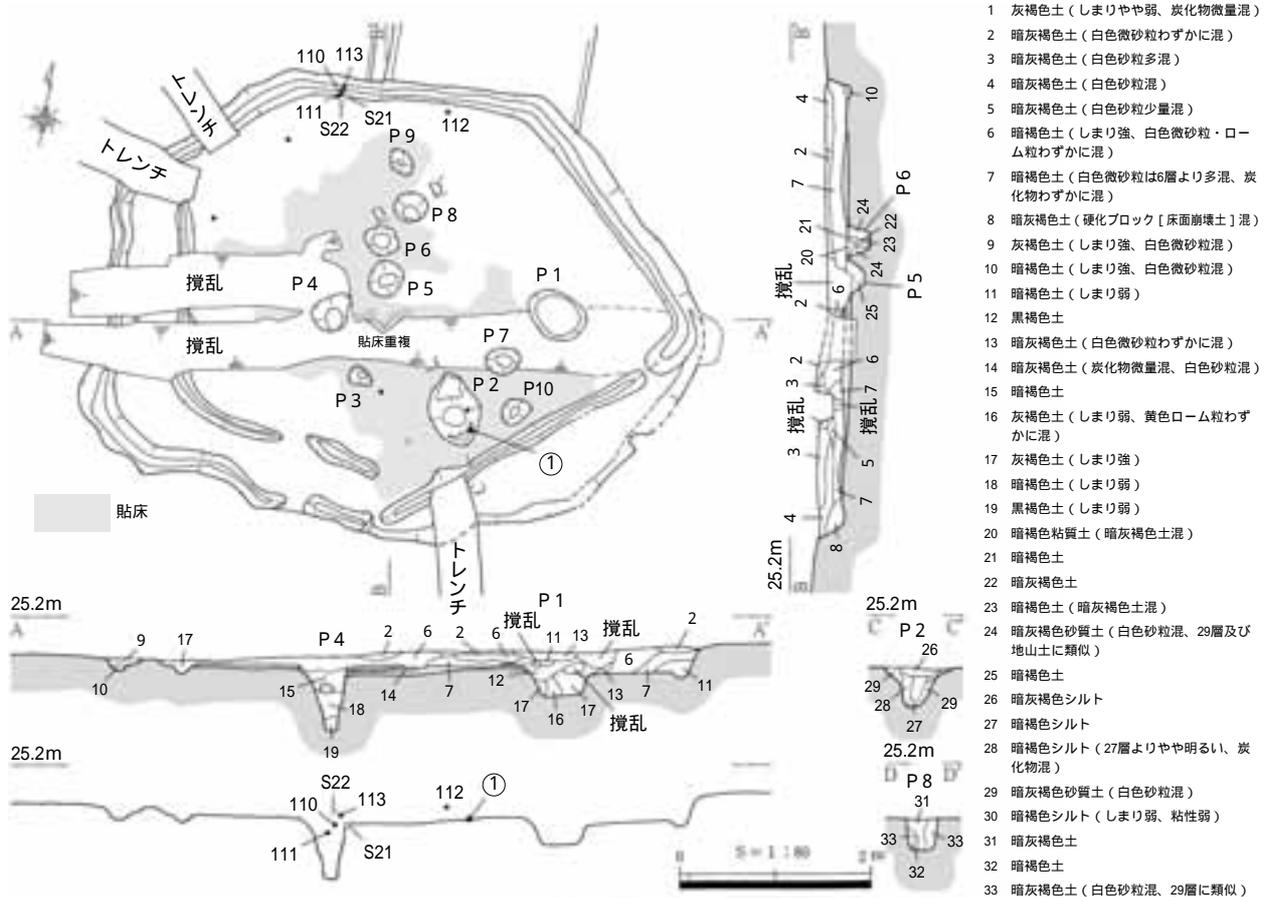
(2) 竪穴住居跡

SI2(第34・35図、第5表、PL.10・35)

C4グリッドに位置する。東西方向に主軸をもつ不整な多角形を呈し、長軸約6.3m、短軸約4.85mである。検出面からの深さは最大で約25cmである。床面は貼床を施しているが、遺存しているのは中央部付近のみである。床面のほぼ中央、P5・P4付近では、薄い間層(14層)を挟んで貼床面が上下に重複している箇所が認められる。床面の周囲には幅約10～20cm、深さ約5cmの壁溝が巡る。住居の南東辺はやや弧状を呈するが、ここでの壁溝は壁面直下ではなく、壁面の約80cm内側に直線的に設けら



第33図 古代・中世遺構分布図



第34図 SI 2

れている。また、壁溝と壁面との間は床面より10～15cmほど高くなっており、意図的に掘り残された柵状施設の可能性もある。住居の西壁および南西壁では、壁溝の30～50cm内側に平行するもう1条の溝が検出された。先述した貼床面の重複と合わせて、本住居跡が拡張ないし建て替えを経ている可能性を示唆するものである。

ピットは10基検出された。いずれも柱痕跡は明確ではなく、配置も不規則であり、主柱配置を復元するには至らなかった。遺物は、埋土中および床面直上から土器片多数が出土した。土器の特徴は八峠中世に相当することから、本住居の時期は12世紀代と考えられる。また、縄文・弥生土器も少量出土している。

なお、土師器坏110、皿111、砥石S21は、北壁際の埋土中に平らに据えられた礫S22の下から、少量の炭化物とともにまとめて出土したものである。出土状況から、これらの遺物は、本住居の廃絶後に埋土中に掘り込まれたピットに伴うものである可能性も考えられる。ただし、112、113など他の位置から出土した土器と比べても大きな時期差は認められない。

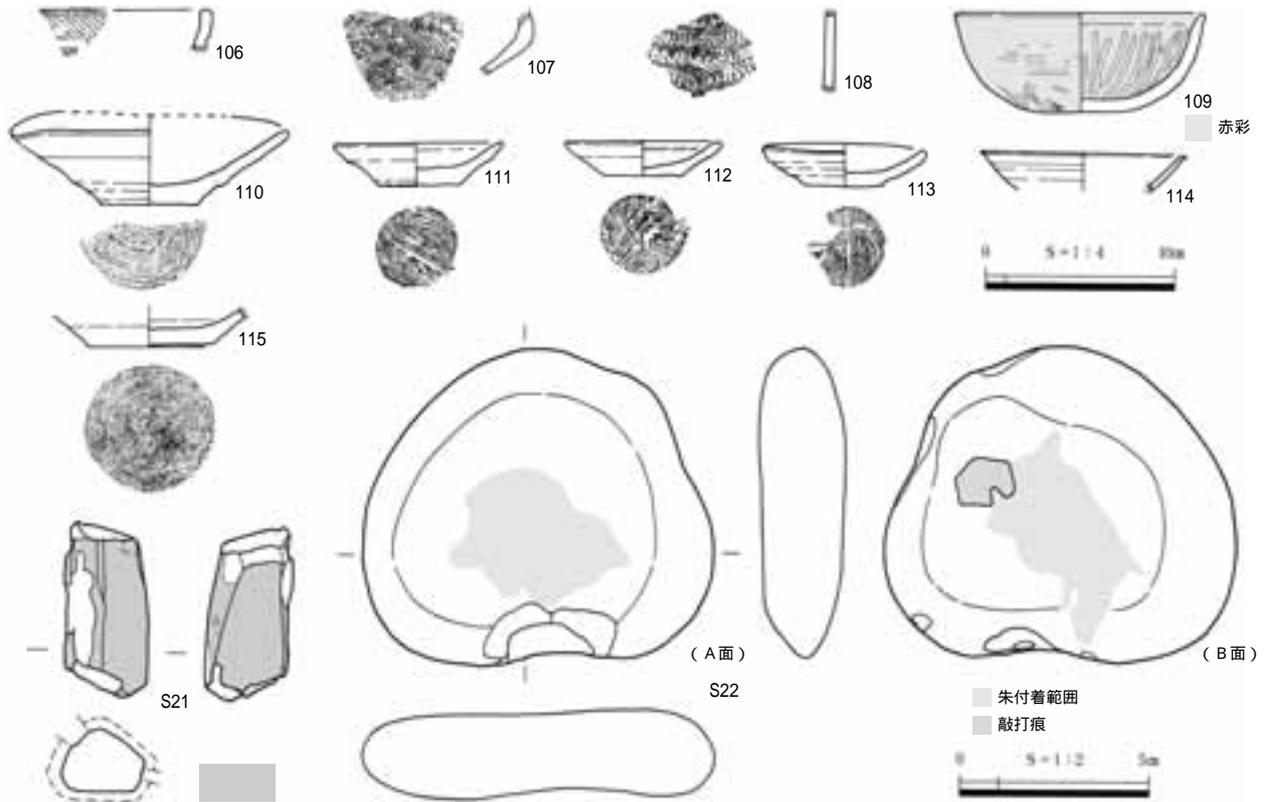
（君嶋）

SI 4（第36図、PL.11・40）

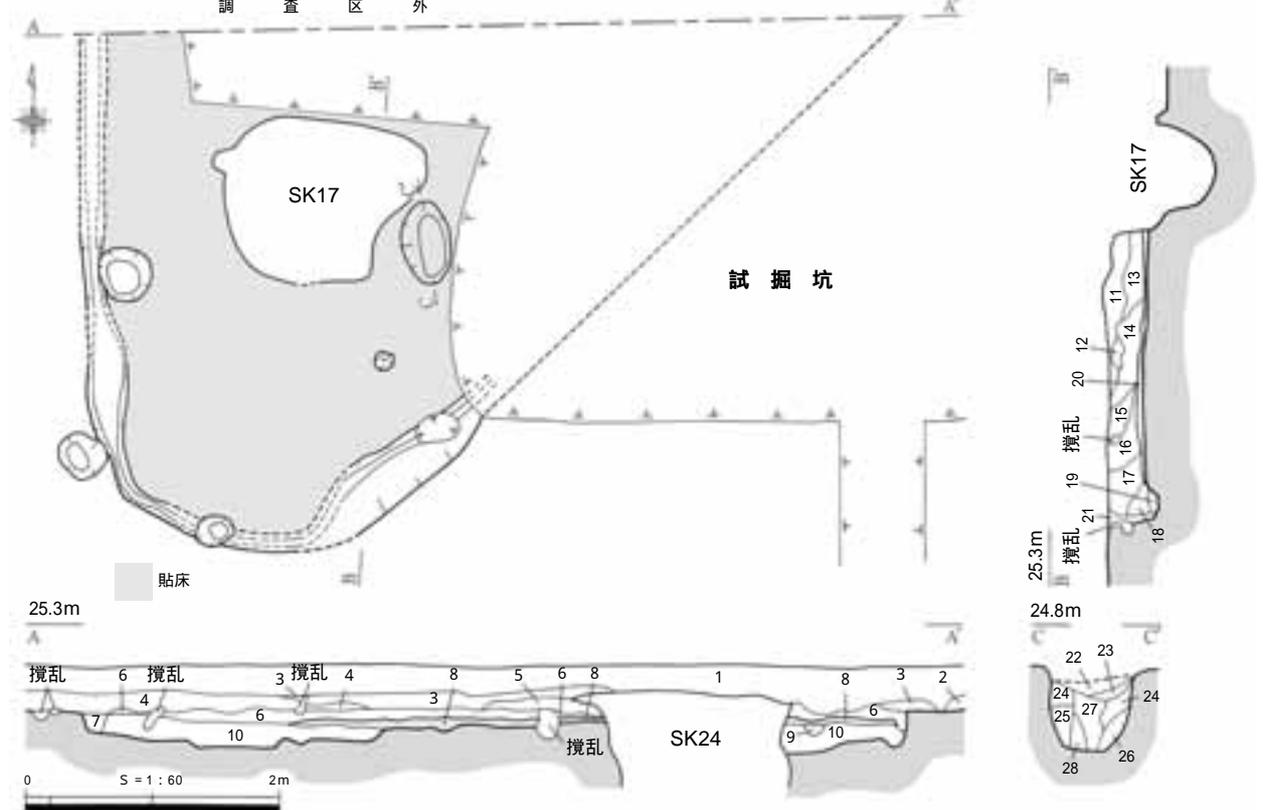
B5グリッドの調査区北壁際に位置する。北側は調査区外にかかり、東側は調査に先立って設けた試掘坑にかかるため、全体の形状は不明である。SK25の埋没後に構築された遺構であり、床面中央

第5表 SI 2ピット計測表

番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P 1	65	50	20
P 2	80	55	42
P 3	25	20	24
P 4	45	37	65
P 5	37	35	19
P 6	37	30	29
P 7	37	28	22
P 8	37	33	32
P 9	30	22	20
P10	35	25	12



第35図 SI 2 出土遺物



- | | | |
|--|--------------------------------------|-------------------------------|
| 1 表土・耕土 | 9 暗褐色土 (黄褐色砂礫多混) | 19 黒色土 (しまり強) |
| 2 暗灰褐色土 (しまりやや弱、粘性あり、褐色粒混、10mm大小礫まばらに混、縄文から近世の遺物包含層 [= 基本層序 -1]) | 10 暗褐色土 (褐色ブロック混、黄褐色砂礫わずかに混) | 20 暗褐色土 (8層と対応、ローム粒わずかに混、貼床土) |
| 3 暗灰褐色土 (しまり強、黒褐色粒班に混、3mm大黄褐色砂礫 [黄色粒] 多混、包含層 [= 基本層序 -2]) | 11 暗褐色土 (しまり強、5cm大角礫・炭化物混、ローム粒わずかに混) | 21 黒褐色土 (しまり弱) |
| 4 暗灰褐色土 (基本層序 -2層に色調似るが灰色強く暗い、しまり強、緻密、白色微細粒・橙色粒 [スコリアか] ごく少量混、炭化物混、中世初頭の遺物包含層 [= 基本層序 -3]) | 12 黒褐色土 (ブロック状をなす、しまり強、ローム粒多混) | 【貼床下層土坑】 |
| 5 暗灰褐色土 (黄褐色砂礫わずかに混) | 13 黒褐色土 (しまり2層より強、ローム粒わずかに混) | 22 灰褐色土 |
| 6 暗褐色土 (しまり強、黄褐色砂礫多混) | 14 黒褐色土 (ローム粒・黄色小ブロック多混) | 23 暗褐色土 (黄褐色砂質粒混) |
| 7 暗褐色土 (黒褐色小ブロック混、壁溝埋土) | 15 黒褐色土 (径3cm大円礫混、ローム粒・白色砂粒わずかに混) | 24 灰褐色土 (しまり強、黒褐色ブロック混) |
| 8 暗褐色土 (しまり強、白色微砂粒多混、黄褐色砂礫わずかに混、貼床土) | 16 暗褐色土 (ローム粒混 [15層より多く、14層より少ない]) | 25 暗褐色土 (しまり強) |
| | 17 黒褐色土 | 26 暗灰褐色土 (しまり弱、粘性弱) |
| | 18 黒褐色土 (しまり強、緻密) | 27 暗灰褐色土 (炭化物・黄褐色粒わずかに混) |
| | | 28 灰黄褐色土 |

第36図 SI 4

にはSK17が掘り込まれている。また、試掘坑際を除いて削平が及んでおり、壁面もほとんど遺存していなかった。検出したのは南北約4m、東西約3mで、住居の隅角部分に相当する。調査区北壁の土層断面では、東西方向の規模は6.5mとなる。ただし、検出した壁の東端と断面での東端とを結びと、住居の全体形はかなりいびつな三角形ないし多角形として復元されることとなり、やや不自然である。壁面の高さは、試掘坑際での土層断面では30cmを確認できる。床面は、検出した範囲では全面貼床を施しており、周囲に壁溝が巡る。部分的に、貼床下に整地土(10層)を充填している。また、貼床下では、SK25の他に長軸65cm、短軸40cm、深さ70cmの小土坑を検出した。ピットは住居の外縁に接するものも含めて4基検出したが、支柱配置は不明である。遺物は、埋土中から土器片十数点が出土した。いずれも小片であり図化に耐えないが、縄文土器の他に底部回転糸切の土師器片が含まれていることから、本遺構の時期は平安時代と考えられる。(君嶋)

(3) 掘立柱建物跡

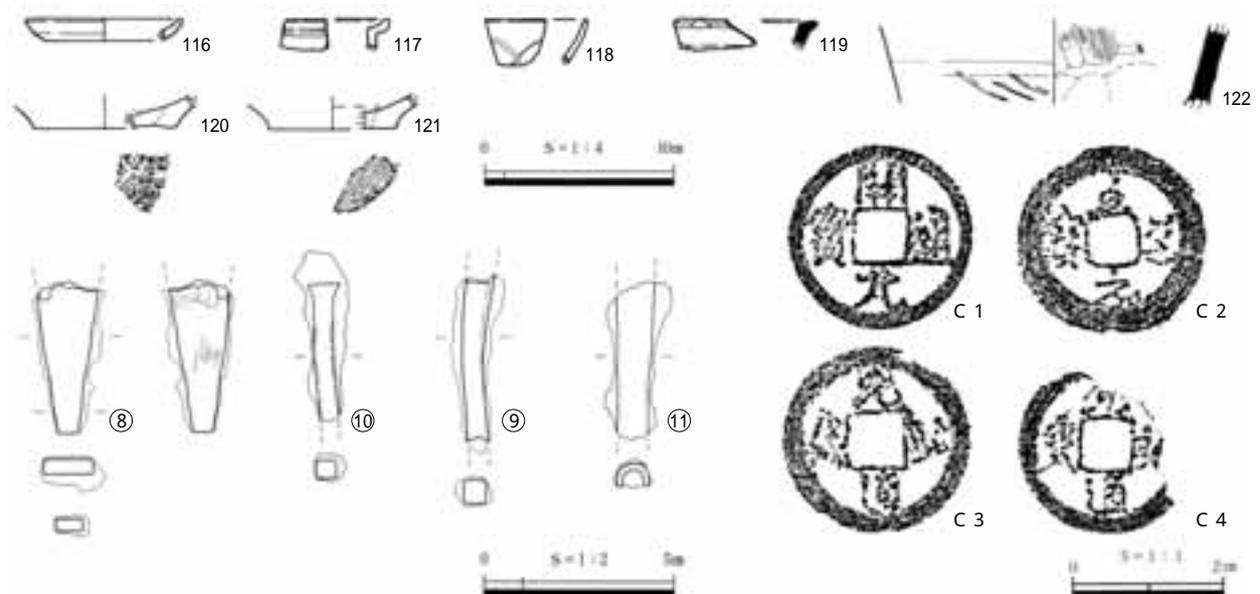
SB1(第37・38・39図、第6表、PL.11・12・13・31・42・43)

B7・8グリッドの平坦面に位置する。建物の東側ではSI6とSD4を掘り込む。東西棟の掘立柱建物で、主軸をW-5°-Nにとる。

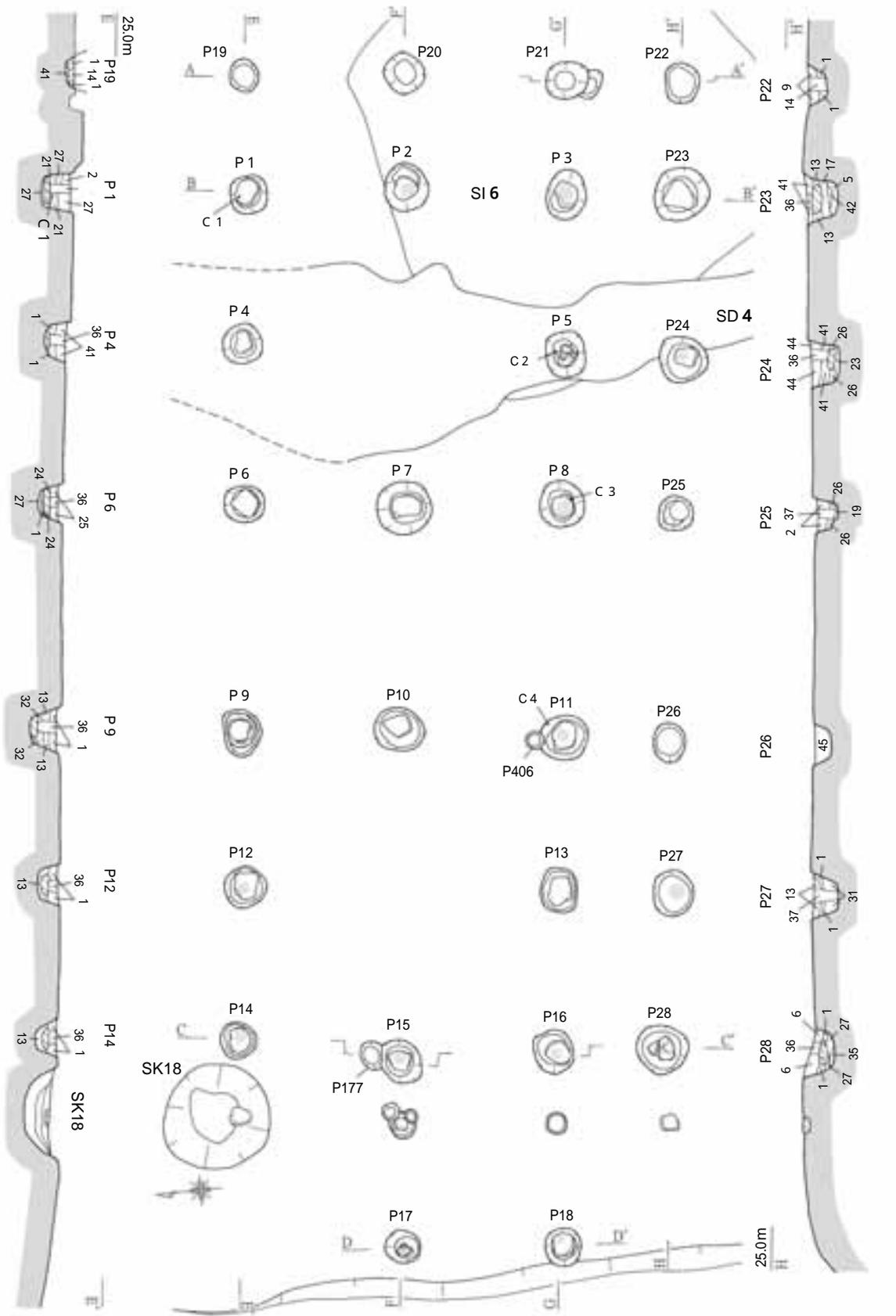
身舎(主屋)は柱間が桁行5間×梁行2間。柱間距離は桁行の中央間が約3m。その他は桁行・梁行とも2.1m前後である。

身舎の柱掘方はP1~P16で、直径50~70cm、平面円形あるいは楕円形を呈する。深さは40cm~1.1mで、断面観察によりすべての柱穴において柱痕跡を確認した。平面検出時に確認できたものはすべて円形で、柱径はそれぞれ12~20cmに復元できる。掘方の底面には礎盤石が据えられ、その上に柱が立つ構造であった。

礎盤石は厚さ10cm前後の扁平な自然石で、加工痕跡は認められない。礎盤石の据付け方法は柱掘方の底面に直接据えるもの、柱掘方掘削後、礎盤石を安定させるための土を入れたあと、その上に据えるもの、柱掘方の底面から2、3層程度、互層状につき固めてから据えるものと大別して三つのパターンが確認できた。また、の特異な例としてはP2のように深い掘方に礎盤石を積み重ね、より堅



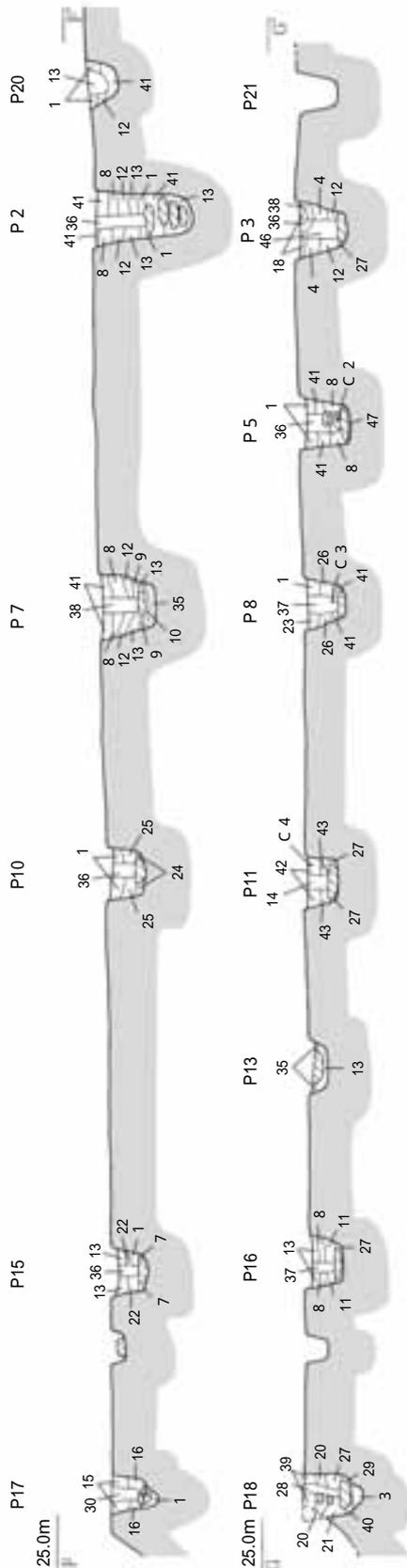
第37図 SB1出土遺物



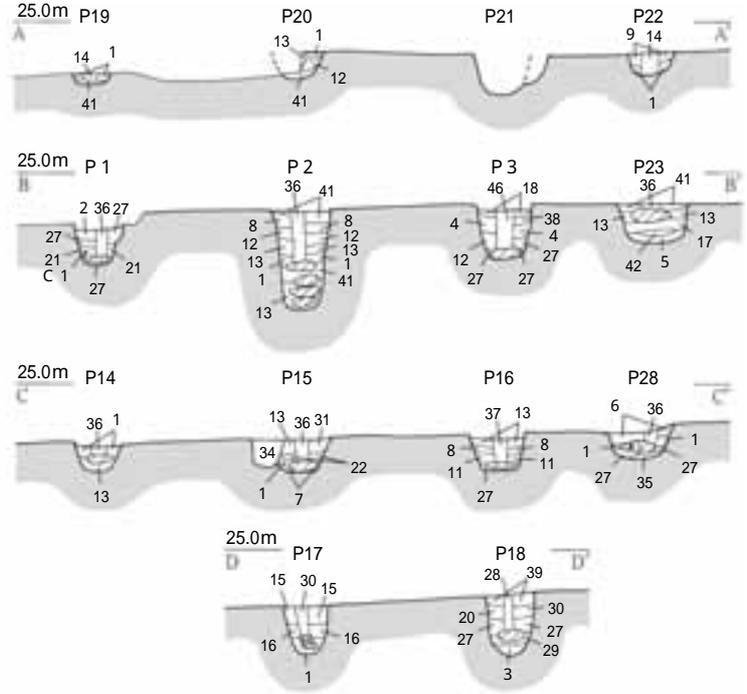
● 平面検出した柱痕跡

0 S = 1 : 80 2m

第38図 SB1



第39図 SB1土層断面図

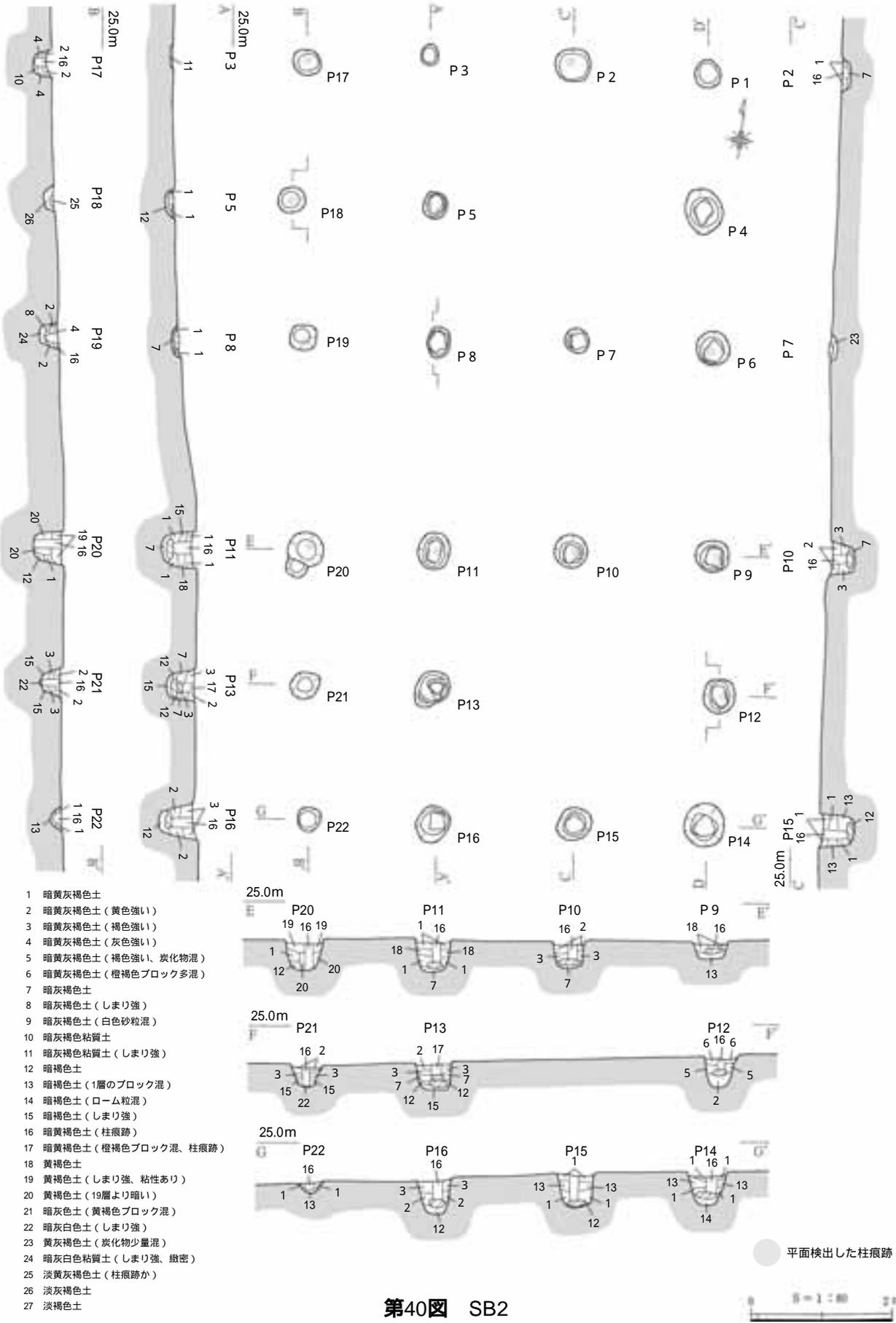


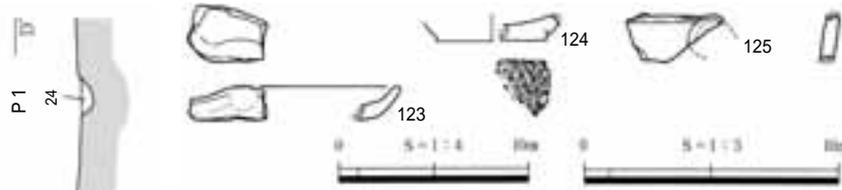
- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1 暗黄灰褐色土 | 25 暗灰褐色土（灰褐色強い） |
| 2 暗黄灰褐色土（脆い） | 26 暗灰褐色土（灰色強い） |
| 3 暗黄灰褐色土（しまる、ローム粒混） | 27 暗褐色土 |
| 4 暗黄灰褐色土（しまり強、粘性あり） | 28 暗褐色土（炭化物少量混、ローム粒混、柱痕跡） |
| 5 暗黄灰褐色土（褐色強い、しまり強、粘性あり） | 29 暗褐色土（脆い、炭化物・ローム粒混） |
| 6 暗黄灰褐色土（橙褐色ブロック少量混） | 30 暗褐色土（ローム粒混） |
| 7 暗黄灰褐色土（灰褐色ブロック少量混） | 31 暗褐色土（灰褐色土ブロック混） |
| 8 暗黄灰褐色土（褐色強い） | 32 暗褐色土（灰褐色土混） |
| 9 暗黄灰褐色土（暗褐色強い） | 33 暗褐色土（黄色粘土混、P406埋土） |
| 10 暗黄灰褐色土（灰褐色強い） | 34 暗褐色土（P177埋土） |
| 11 暗黄灰褐色土（灰色強い） | 35 暗黄褐色土 |
| 12 暗黄灰褐色土（黄灰色強い） | 36 暗黄褐色土（柱痕跡） |
| 13 暗灰褐色土 | 37 暗黄褐色土（脆い、柱痕跡） |
| 14 暗灰褐色土（柱痕跡） | 38 暗黄褐色土（脆い） |
| 15 暗灰褐色土（しまる、炭化物混） | 39 暗黄褐色土（炭化物・ローム粒混） |
| 16 暗灰褐色土（しまる、柱痕跡） | 40 暗黄褐色土（炭化物混、ローム粒多混） |
| 17 暗灰褐色土（しまり強） | 41 暗黄灰色土 |
| 18 暗灰褐色土（しまり強、粘性あり） | 42 暗黄灰色土（暗褐色粒混） |
| 19 暗灰褐色土（褐色強い、しまり強） | 43 暗黄灰色土（暗褐色粒多混） |
| 20 暗灰褐色土（炭化物・ローム粒混） | 44 暗灰色土 |
| 21 暗灰褐色土（炭化物少量混） | 45 褐色土 |
| 22 暗灰褐色土（暗褐色ブロック少量混） | 46 灰褐色土 |
| 23 暗灰褐色土（褐色強い） | 47 黄灰褐色土 |
| 24 暗灰褐色土（暗褐色強い） | |

第6表 SB1ピット計測表

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備考
P 1	52	49	44	身舎柱穴（柱痕跡あり）開元通竈出土
P 2	64	60	112	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P 3	68	53	58	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P 4	52	52	30	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P 5	62	51	58	身舎柱穴（柱痕跡あり）至道元竈出土
P 6	54	50	34	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P 7	73	73	63	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P 8	65	60	46	身舎柱穴（柱痕跡あり）元祐通竈出土
P 9	62	50	41	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P10	57	68	43	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P11	58	66	38	身舎柱穴（柱痕跡あり）元豊通竈出土
P12	53	54	32	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P13	60	48	20	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P14	48	49	30	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P15	65	53	41	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P16	60	58	42	身舎柱穴（柱痕跡あり）
P17	45	48	52	柱穴（柱痕跡あり）
P18	52	49	68	柱穴（柱痕跡あり）
P19	45	41	28	廂柱穴（柱痕跡あり）
P20	53	52	34	廂柱穴（柱抜き取り）
P21	59	51	47	廂柱穴
P22	56	46	25	廂柱穴（柱痕跡あり）
P23	79	71	47	廂柱穴（柱痕跡あり）
P24	66	63	40	廂柱穴（柱痕跡あり）
P25	49	48	34	廂柱穴（柱痕跡あり）
P26	52	42	24	廂柱穴
P27	63	52	37	廂柱穴（柱痕跡あり）
P28	68	65	41	廂柱穴（柱痕跡あり）

は復元値





第42図 SB 2 出土遺物



第41図 SB 2 土層断面

第7表 SB 2 ピット計測表

番号	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	備 考
P1	42	38	16	身舎柱穴
P2	51	47	13	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P3	31	24	4	身舎柱穴
P4	66	51	30	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P5	40	36	10	身舎柱穴
P6	49	47	28	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P7	36	34	10	身舎柱穴
P8	44	32	14	身舎柱穴
P9	48	46	27	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P10	48	48	41	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P11	53	45	50	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P12	49	46	47	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P13	60	47	43	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P14	62	58	52	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P15	52	46	51	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P16	53	50	57	身舎柱穴 (柱痕跡あり)
P17	42	37	27	廂柱穴 (柱痕跡あり)
P18	40	38	16	廂柱穴 (柱痕跡あり)
P19	38	37	29	廂柱穴 (柱痕跡あり)
P20	52	49	44	廂柱穴 (柱痕跡あり)
P21	45	38	33	廂柱穴 (柱痕跡あり)
P22	35	33	16	廂柱穴 (柱痕跡あり)

24・28の三か所で使用が認められた。

身舎西妻のさらに西側でも柱穴P17・18を検出した。柱位置は棟通りとその南側の桁行柱筋の延長上に対応する。柱掘方の規模・形態は身舎柱のそれとほぼ同じである。P15 - P17、P16 - P18の柱間距離は2.5mと身舎や廂の柱間距離に比べ長い。身舎柱同様、礎盤石を用いた構造であることから、身舎に伴う一連の柱穴であると考えられる。また西妻梁行の柱列 (P14~P16、P28) のさらに西側にも、それぞれに対応する小ピット、あるいは礎盤石より一回り小さい扁平な石があり、それらも身舎に伴う可能性がある。建物全体の復元については第5章第4節で述べることとする。

そのほかSB 1の中央間以西では多数のピットが検出された (第84図)。これらの中にはSB 1建設時の足場穴や建物に付属する補助的な柱穴などに該当するものもあると思われる。しかし、建物の西側に比べ、遺構面が若干高く残る東側ではほとんどピットが検出できなかったため、それらのピットをSB 1に関連する遺構として積極的に評価することは難しい。

またSB 1の身舎柱掘方の深さが40~50cmと比較的浅いものが多く、本来の地表面は少なからず削平を受けているものと思われる。よって、一般的に掘方の浅い足場穴なども削平を受けた可能性が高いであろう。

SB 1の柱穴からは小片の土器や鉄製品、鉄滓、銭貨などが出土した。土器には土師器杯、皿 (116、120、121)、鍋117 (八峠中世 期)、瓦質土器119、中世須恵器 (勝間田焼) 122、青磁118 (外面に篋

固に基礎固めを行ったところもある。

身舎の東面と南面には矩折れに1間通りの廂がとりつく。柱間距離は身舎に比べ短く、1.5m前後となる。北側でも廂の存在が想定されたが、柱穴は確認できなかった。

廂の柱掘方はP19~P28で、直径40~70cm、平面円形あるいは楕円形を呈する。深さは復元値のものを含めても30~50cmと身舎柱に比べ浅い。柱痕跡は大半で確認し、平面円形の柱材は身舎の柱と同様、直径12~20cmに復元できる。礎盤石はP23・

描きによる蓮弁文あり。森田分類：龍泉窯系青磁碗（5か）などがある。いずれも掘方埋土からの出土で、建物の廃絶期を示す遺物はない。

銭貨はP1から開元通寶（唐：621年初鑄）、P5から至道元寶（北宋：995年初鑄）、P8から元祐通寶（北宋：1086年初鑄）、P11から元豊通寶（北宋：1078年初鑄）がそれぞれ出土した。

柱を立てる工程として掘方掘削、礎盤石据付、柱を立てる、数回に分けて柱周りを埋め立てるといふ、大きく四段階の工程が想定される。SB1ではP11を除く全てがの直後あるいはの最初に銭貨を納めている。おそらくこれらは柱を立てる際に意図的に埋められたもので、建設時の地鎮に関連した埋納品であったものと考えられる。

掘方埋土に含まれる遺物から判断して、13世紀以降の掘立柱建物であると考えられる。（西川）
SB2（第40・41・42図、第7表、PL.14・15・31・42）

D8・E8グリッドの平坦面に位置する。調査区8グリッドラインと9グリッドラインのほぼ中間以西は後世の攪乱を大きく受けており、以東に比べ25～30cmほど低く、遺構の遺存状態は全体的に悪い。

南北棟の掘立柱建物で、主軸をN-5°-Wにとる。身舎は柱間が桁行5間×梁行2間。柱間距離は桁行の中央間が約3m。そのほかは桁行・梁行とも2.1m前後である。

身舎の柱掘方はP1～P16で、比較的残りのよい南半では直径が45～60cm、平面は円形か楕円形を呈する。深さは40～60cmである。SB1同様、柱掘方の底面付近に礎盤石を据え、その上に柱を立てている。ただし、P2では礎盤石を使用していない。遺構面は北側ほど削平が著しく、P1・P3に関しては礎盤石が用いられていたかどうかは不明である。柱痕跡は大半の柱穴で確認した。平面で確認できたものはすべて円形で、復元できる柱径は10～16cmである。P13は礎盤石を二個積み重ねた上に柱を立てていた。これは材を組上げた際の柱の長短を調整するためであろう。

身舎の西面には1間の廂がつく。梁行の柱間距離は身舎に比べ少し短く、1.8m前後となる。廂の柱掘方はP17～P22で、比較的残りのよい南半では直径30～50cm、平面円形あるいは楕円形である。深さは復元値のものを含めて20～45cmと、身舎柱に比べて小規模で浅いものが多い。

廂部分の柱穴には礎盤石を用いないが、P19底面の埋土は粘土質で非常に固く締っていた。これは柱の沈み込みを防ぐための基礎固めであったと考えられる。

SB2の柱穴からは少量の土器が出土した。123は底部回転糸切の土師器皿である。側縁を内側に折り曲げた痕跡を残しており、耳皿の可能性もある。125はごく小片であるが、褐釉を施した陶器である。外面には横位の沈線1条に接して浅くくぼむ円形の剥離面を残しており、把手あるいは耳が付いていたものと思われる。水注の胴部片であろうか。

SB2の柱掘方は大半がSB1と同様の状況で埋土が遺存していたが、銭貨の出土はまったく認められなかった。

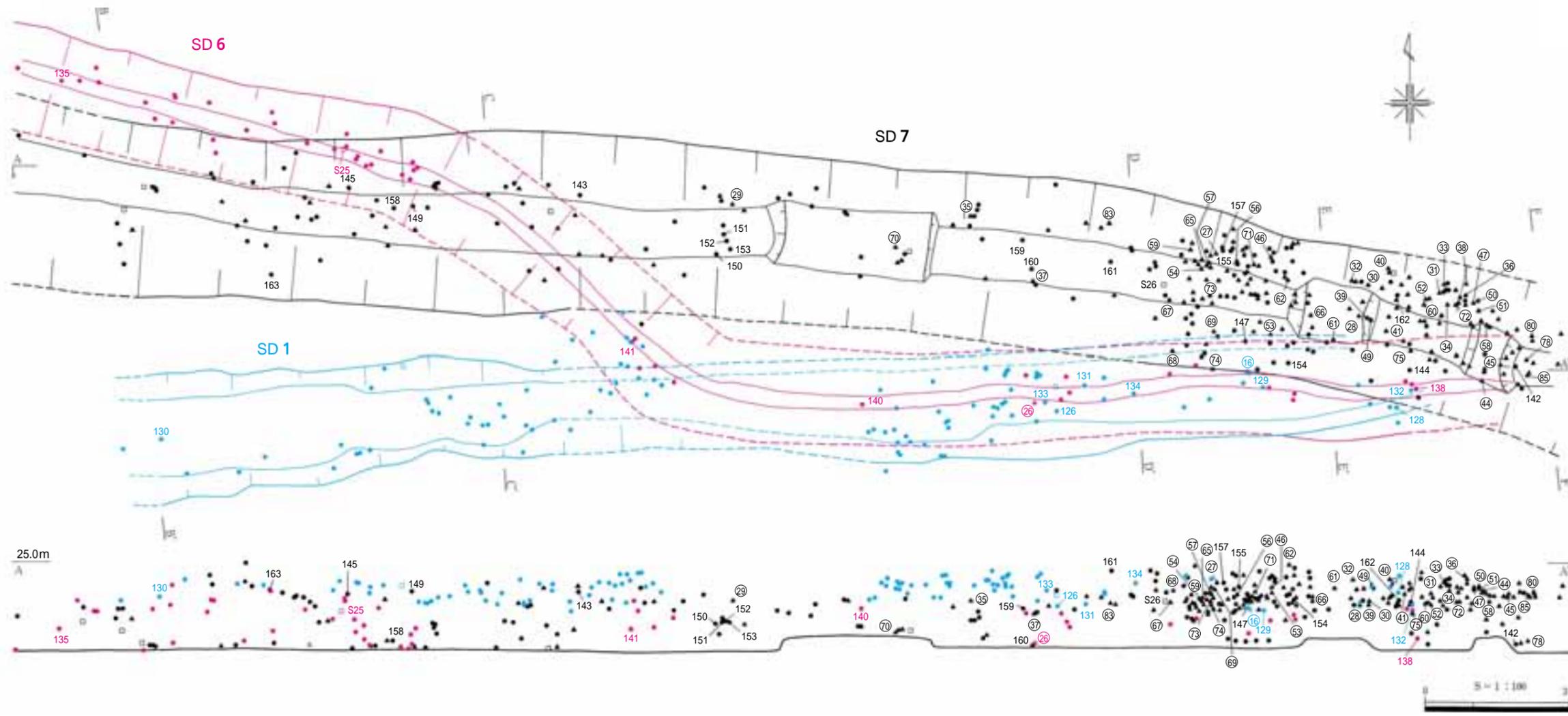
出土遺物の時期はSB1と大差なく、ほぼ同時期の13世紀以降の掘立柱建物であると思われる。

（西川）

（4）溝

SD1（第43・44図、PL.15・31・42）

G8～G11グリッドに位置する。中央でSD6を切り、東側でSD7・8に切られている。また、西側は後世の攪乱により途切れ、中央部には試掘坑がかかる。検出した長さは約26mで、東西方向に主軸をとる。走向は直線的で、最大幅は約2.7mである。検出面からの深さは約70cmで、断面形は緩やかに



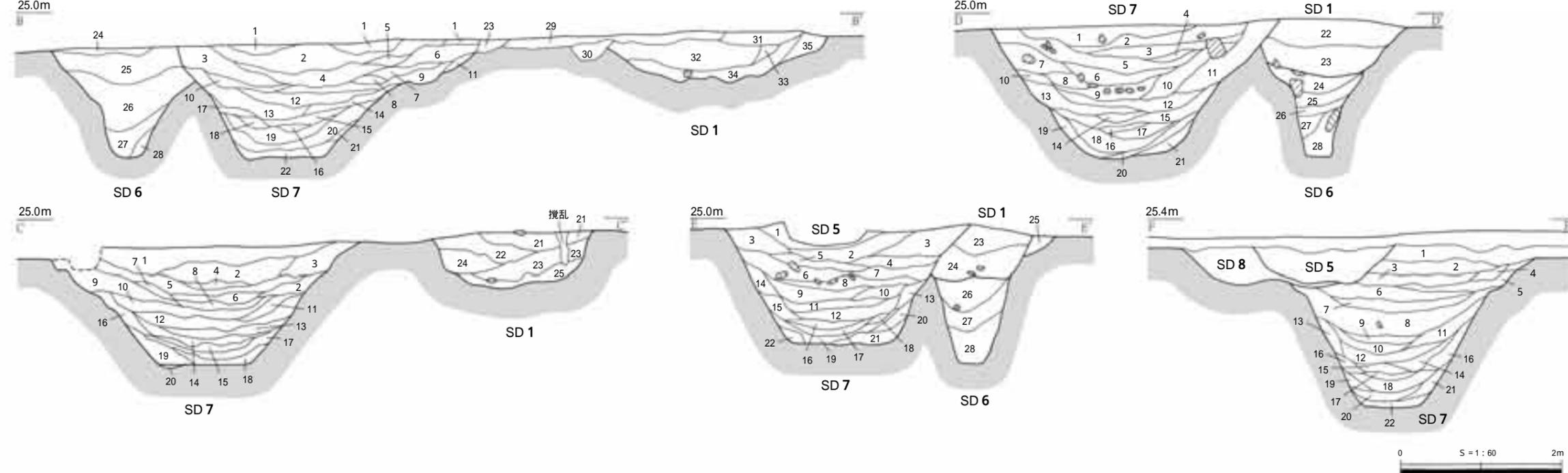
B - B' <1-22:SD7埋土 24-28:SD6埋土 31-35:SD1埋土>
 1 褐色土 2 暗褐色土(白色粒混) 3 暗褐色土(白色粒・砂混)4 暗褐色土(白色粒・鉄分混) 5 暗褐色土(炭化物混) 6 暗褐色土(白色粒混) 7 暗褐色土(3mm大のローム粒混) 8 暗褐色土(3mm大のローム粒混) 9 褐色土(3mm大のローム粒混)10 暗褐色砂質土(炭化物混) 11 暗褐色土(白色粒・5mm大のローム粒混) 12 暗褐色土(5mm大の炭化物混) 13 暗褐色土(5mm大のローム粒混) 14 褐色土(2cm大のローム粒・鉄分混)15 褐色土(4cm大のローム粒・鉄分混) 16 暗褐色砂質土17 暗褐色土(5mm大の炭化物混) 18 黒褐色土(白色粒混)19 暗灰褐色砂質土(鉄分混) 20 褐色土(3mm大のローム粒混)21 暗褐色土(10mm大のローム粒混) 22 暗褐色砂質土(3mm大のローム粒混) 23 褐色土(しまりやや強[攪乱か]) 24 褐色土(白色粒・2mm大のローム粒混) 25 暗褐色土(白色粒・鉄分・5mm大のローム粒混) 26 暗褐色土(10mm大のローム粒・炭化物混) 27 暗褐色土(粘性やや強、5mm大のローム粒混)28 暗褐色土 29 褐色土(赤色粒混) 30 暗褐色土(粘性やや弱、白色粒混) 31 褐色土(3mm大のローム粒混)32 [=C24層] 33 暗褐色土(3mm大のローム粒多混)34 [=C25層] 35 暗褐色土(3mm大のローム粒・白色粒混)

C - C' <1-19:SD7埋土 20:SD6埋土 21-25:SD1埋土>
 1 暗褐色土(白色粒混) 2 暗灰褐色砂質土 3 褐色土(粘性やや弱、白色粒混) 4 褐色土(粘性やや強) 5 暗褐色土(粘性やや弱、3mm大のローム粒混) 6 暗灰褐色土 7 暗褐色土(5mm大のローム粒混) 8 暗灰褐色砂質土(3mm大の炭化物混)9 褐色土(粘性やや弱、白色粒混) 10 褐色土(砂・5mm大のローム粒混) 11 暗褐色土(赤色粒混) 12 暗灰褐色土(砂・3mm大の炭化物混) 13 暗灰褐色砂質土 14 暗灰褐色砂質土(2mm大の炭化物混) 15 暗灰褐色砂質土 16 褐色土(粘性やや弱)17 暗灰褐色土 18 暗灰褐色土(粘性強、5mm大の灰白色粒混)19 暗褐色土(粘性やや弱) 20 暗褐色土(5mm大のローム粒混)21 褐色土(3mm大のローム粒混) 22 暗褐色土(白色粒混)23 褐色土(2cm大のローム粒混) 24 暗褐色土(白色粒・2mm大のローム粒混) 25 黒褐色土(白色粒・2mm大のローム粒混)

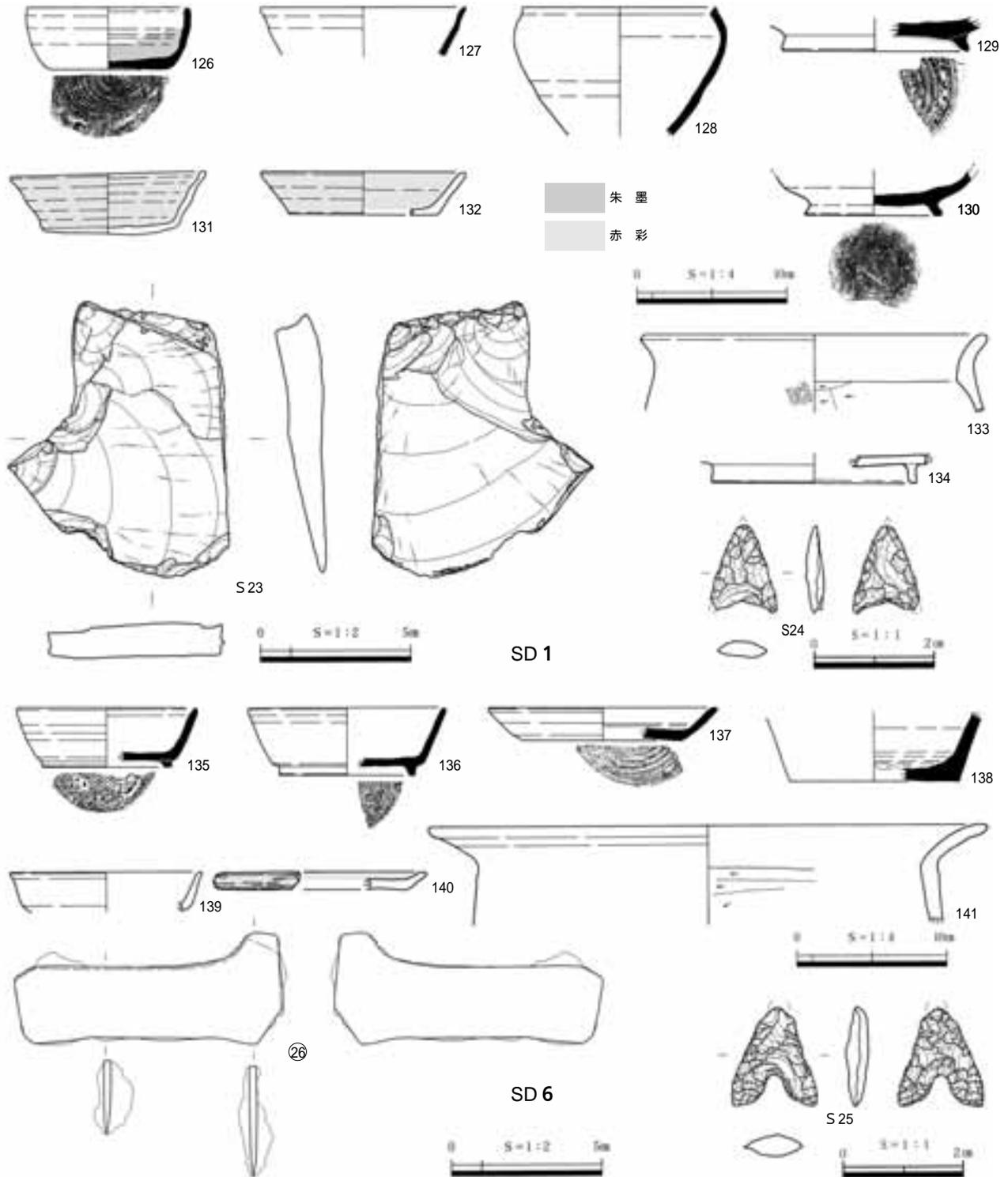
D - D' <1-21:SD7埋土 22-23:SD1埋土 24-28:SD6埋土>
 1 暗褐色土(白色粒混) 2 [=C2層] 3 暗灰褐色砂質土(砂混)4 灰褐色砂質土 5 暗褐色土(拳大の礫混) 6 暗褐色土(3mm大のローム粒混) 7 暗褐色土(礫・3mm大のローム粒混) 8 褐色土(礫・3mm大のローム粒混) 9 暗褐色土(拳大の礫・砂混)10 褐色土(3mm大のローム粒混) 11 褐色土(白色粒混) 12 [=C13層] 13 暗褐色土(3mm大の炭化物混) 14 [=C14層]15 暗灰褐色砂質土 16 [=C15層]17 暗褐色土(粘性やや弱、砂・3mm大の炭化物混) 18 暗褐色土 19 褐色土(5mm大のローム粒混) 20 灰褐色砂質土(鉄分混) 21 暗灰褐色砂質土 22 褐色土(鉄分・5mm大のローム粒混) 23 暗褐色土(10mm大のローム粒混) 24 暗褐色土(3mm大のローム粒混) 25 黒褐色土(5mm大のローム粒混) 26 暗灰褐色土(鉄分・5mm大のローム粒混)27 暗灰褐色土 28 黒褐色土(5mm大のローム粒混)

E - E' <1-22:SD7埋土 23-24:SD1埋土 25-28:SD6埋土>
 1 暗褐色土 2 [=C2層] 3 褐色土(粘性やや弱、白色粒・3mm大の炭化物混) 4 褐色土(3mm大のローム粒・鉄分混) 5 [=D3層] 6 [=D5層] 7 褐色土(赤色粒・3mm大のローム粒混)8 [=D9層] 9 [=D12層] 10 暗褐色土(粘性やや弱、砂混)11 暗褐色土(砂・5mm大の炭化物混) 12 [=D16層] 13 褐色土(3mm大のローム粒混) 14 褐色土(白色粒混) 15 暗褐色土(鉄分混) 16 暗褐色土(砂混) 17 暗灰褐色土(粘性強い) 18 暗灰褐色土 19 鉄分沈着層 20 灰褐色砂質土(鉄分混) 21 [=D21層] 22 褐色土(粘性やや弱、鉄分・3mm大のローム粒混)23 [=D22層] 24 [=D23層] 25 褐色土(鉄分・3mm大のローム粒混) 26 [=D24層] 27 [=D25層] 28 [=D28層]

F - F' <2-22:SD7埋土>
 1 [=基本層序 -4] 2 褐色土(3mm大のローム粒混) 3 暗褐色土(砂少量混、3mm大のローム粒混) 4 褐色土 5 暗褐色土(砂少量混) 6 褐色土(赤色粒・5mm大のローム粒混) 7 暗灰褐色砂質土 8 褐色土(砂少量混・炭化物混) 9 暗褐色砂質土10 暗褐色土(砂少量混・炭化物混) 11 暗褐色土(鉄分・炭混)12 暗褐色土(炭化物混) 13 暗褐色土(粘性やや弱、鉄分・3mm大のローム粒混) 14 暗灰褐色土(砂少量混、炭化物混)15 暗灰褐色砂質土(炭化物混) 16 暗褐色土(粘性強、鉄分混)17 暗灰褐色砂質土 18 暗灰褐色土(粘性強) 19 褐色土(10mm大の灰白色粒混) 20 暗灰褐色土 21 暗褐色土 22 暗褐色土(3mm大の灰白色粒混)



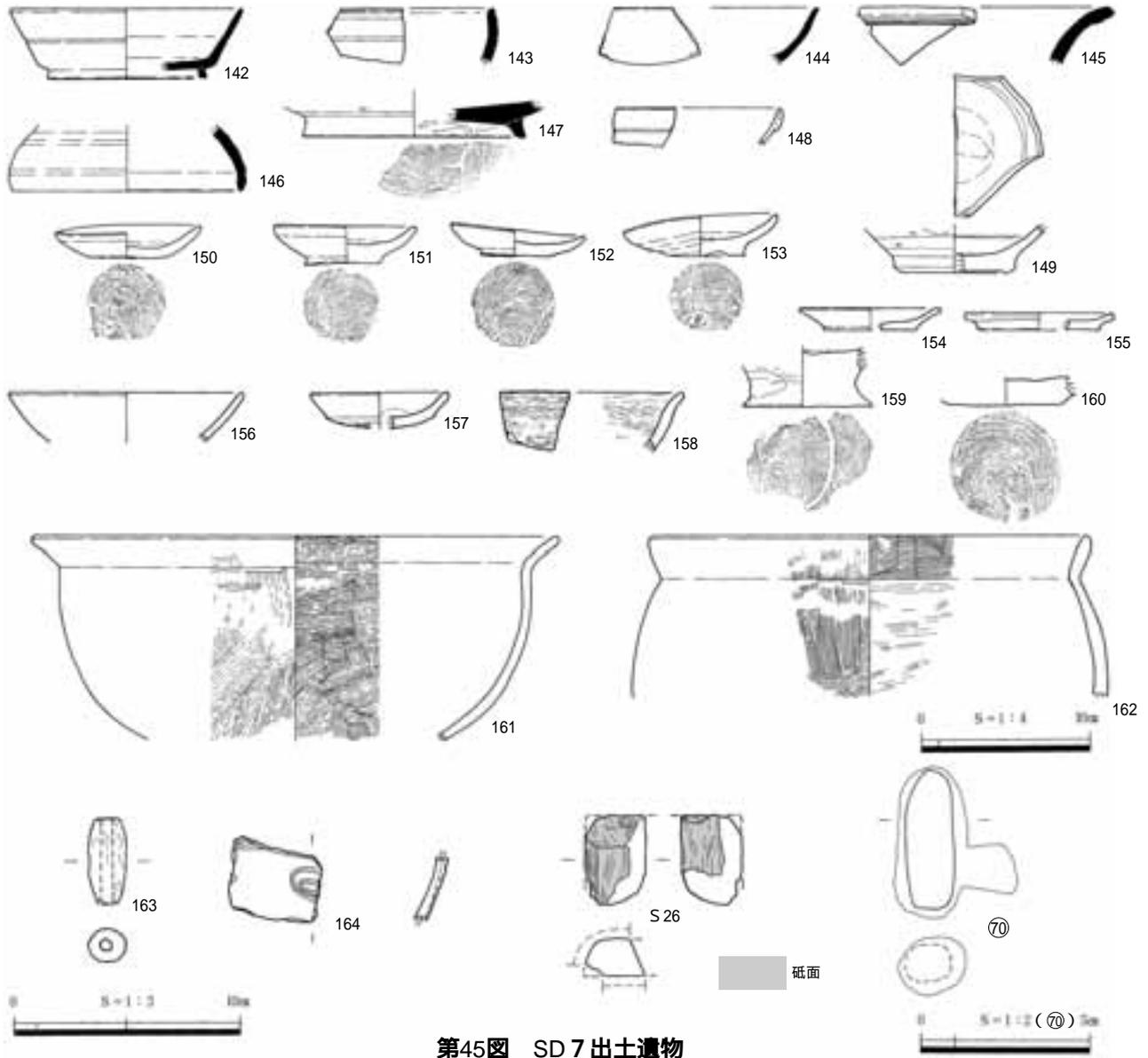
第43図 SD 1・6・7



第44図 SD 1・6 出土遺物

開くU字形を呈する。溝底面の標高は東端で約24.2m、西端で約24.1mであり、西側がわずかに低い。埋土は暗褐色土、黒褐色土、褐色土が主体で、黄褐色粒、白色粒が混じる。粘質土や砂礫などはみられず、流水または滞水していた痕跡は認められない。

遺物は埋土中から土器、石器、鉄滓が出土した。須恵器坏126は底部内面・断面に朱墨が付着しており、パレットに転用された可能性が高い。土器の特徴から、埋没時期は9世紀頃と考えられる。形状・断面形から判断して人為的に掘られたものであるが、溝の性格については、重複するSD 6・7と同様に区画溝として機能していた可能性が高い。(山根)



第45図 SD 7 出土遺物

SD 6 (第43・44図、PL.16・32)

G8・F8～F11グリッドに位置する。西側から中央はSD 7に、中央から東側はSD 1に切られている。検出した長さは約33mで、東側から中央にかけては、東西方向に主軸をとるが、中央で北西方向に向きを変え、緩やかな弧状を描きながら西の調査区外へと伸びる。幅は肩部がSD 1・7によって壊されているため明確ではないが、約2m程度と推測される。検出面からの深さは約1.3～1.5mで、断面形は、溝底面から1/3～1/2の高さで段をもち、上半は緩やかに開くU字形、下半は深い逆台形を呈する。溝底面の標高は東端で約23.2m、西端で約23.1mと西側がわずかに低い。埋土は暗褐色土が主体で、黄褐色粒や、拳大から人頭大の礫が少量混じる。やや粘性が強い層などもみられたが、砂層などはなく、礫も混入した状況であることから、流水あるいは滞水していた可能性は低い。

遺物は埋土中から土器・鉄製品などが出土した。土器はいずれも高広編年～期に位置づけられること、SD 1に先行することから、埋没時期は8世紀後半から9世紀頃と考えられる。

形状・断面形から判断して人為的に掘られたものと考えられる。SD 6につづき、SD 1・7がほぼ同じ場所に繰り返し掘り込まれている点を考慮すると、地境を示す区画溝として機能していた可能性が想定される。

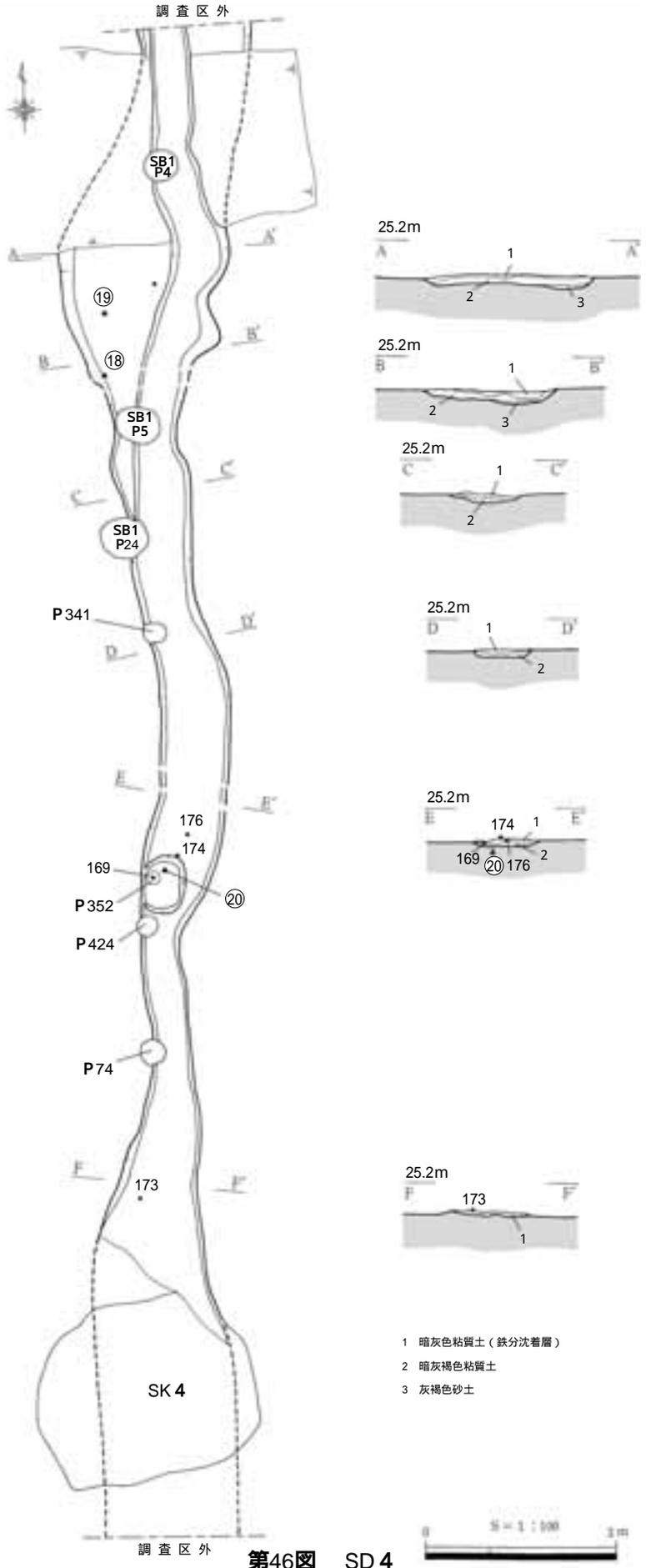
(山根)

SD 7 (第43・45図、PL.16・17・33・34)

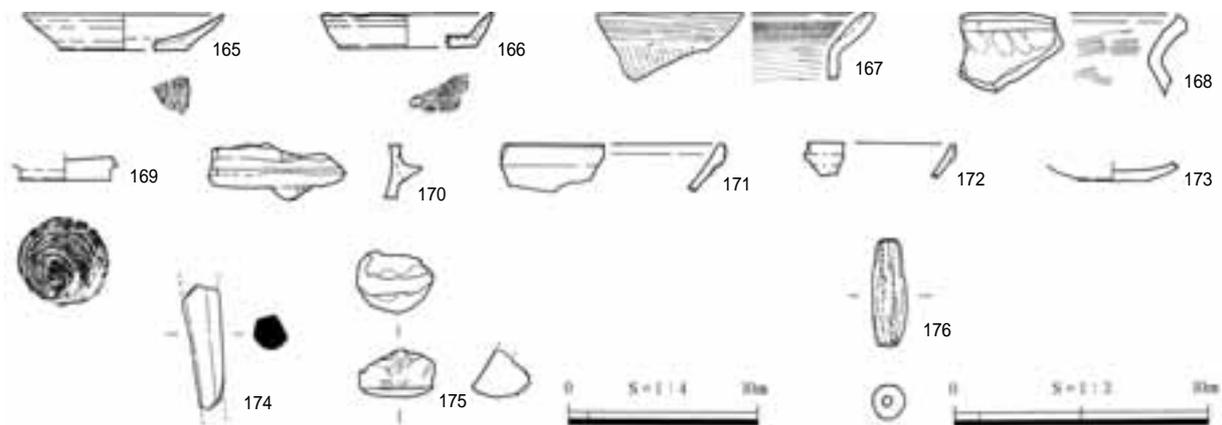
F8～F11グリッドに位置する。SD 1・6・9を切り、SD 5・8に切られている。検出した長さは約32mで、ほぼ東西方向に主軸をとる。東端・西端いずれも調査区外にのびる。走向は直線的で、幅は約3～3.5mである。検出面からの深さは約1.5mで、断面形は逆台形を呈する。溝底面の標高は東端・西端ともに約23.1mで、ほぼ同じ高さである。また溝底面には、地山を掘り残した段状の高まりが3箇所認められた。段の高さはいずれも約15～20cm程度であるが、段の幅は西側のものが約3m、中央のものが約1.2m、最も東のものが約0.6mである。埋土は暗褐色土が主体で、黄褐色粒、白色粒や拳大の礫が混じるが、灰褐色の砂質土や粘質土もみられた。礫や砂質土などの堆積状況から、上層、中層、下層に分け、掘り下げを行った。また、埋土中や溝底面付近では鉄分の沈着がみられた。

遺物は上層から下層にかけて土器、石器、鉄製品、鉄滓が出土し、特に鉄滓は東側で集中して出土した。土器の特徴から、埋没時期は12世紀頃と考えられる。また、時期は明確にできないが、絵画土器と考えられる164も出土している。

形状・断面形から判断して人為的に掘られたものであり、溝の性格については、重複するSD 1・6と合わせて、区画溝として機能していたと考えられる。また、砂質土や粘質土、鉄分沈着層などの存在は、滞水していた状況を示すものである。底面にみられた段状の高まりは、用水としての機能と関係



第46図 SD 4



第47図 SD 4 出土遺物

する可能性もある。また鉄滓が東側に集中する状況から、東側の調査区外に鍛冶関連遺構が存在する可能性が高い。 (山根)

SD 4 (第46・47図、PL.15・32・34)

B7～D7グリッドの平坦面に位置する南北溝である。南端ではSK 4 を掘り込み、北端ではSI 6 を掘り込む。また北端ではSB 1 の柱穴が重複する。

現状では溝の上層が大きく削平を受け、ごくわずかに溝の底面をとどめているのみである。溝幅は0.25～1.1m、深さは最深部でも30cmを超えない。埋土は北端の下層に水流を示す砂質土の堆積があり、その上層には鉄分が沈着して硬化した暗灰色粘質土が南端まで広がる。南端の溝底面の標高が24.7m、北端では24.4mであることから、SD 4 は本来、南から北へ向かっての水の流れがあったことを示す。また堆積土の状況から見て、ある時期以降は滞水していたと思われる。

出土した土師器類は八峠中世 期、陶磁器は森田碗 類(171、172)、皿 類(173)に想定され、12～13世紀以降の時期を示すものと思われる。 (西川)

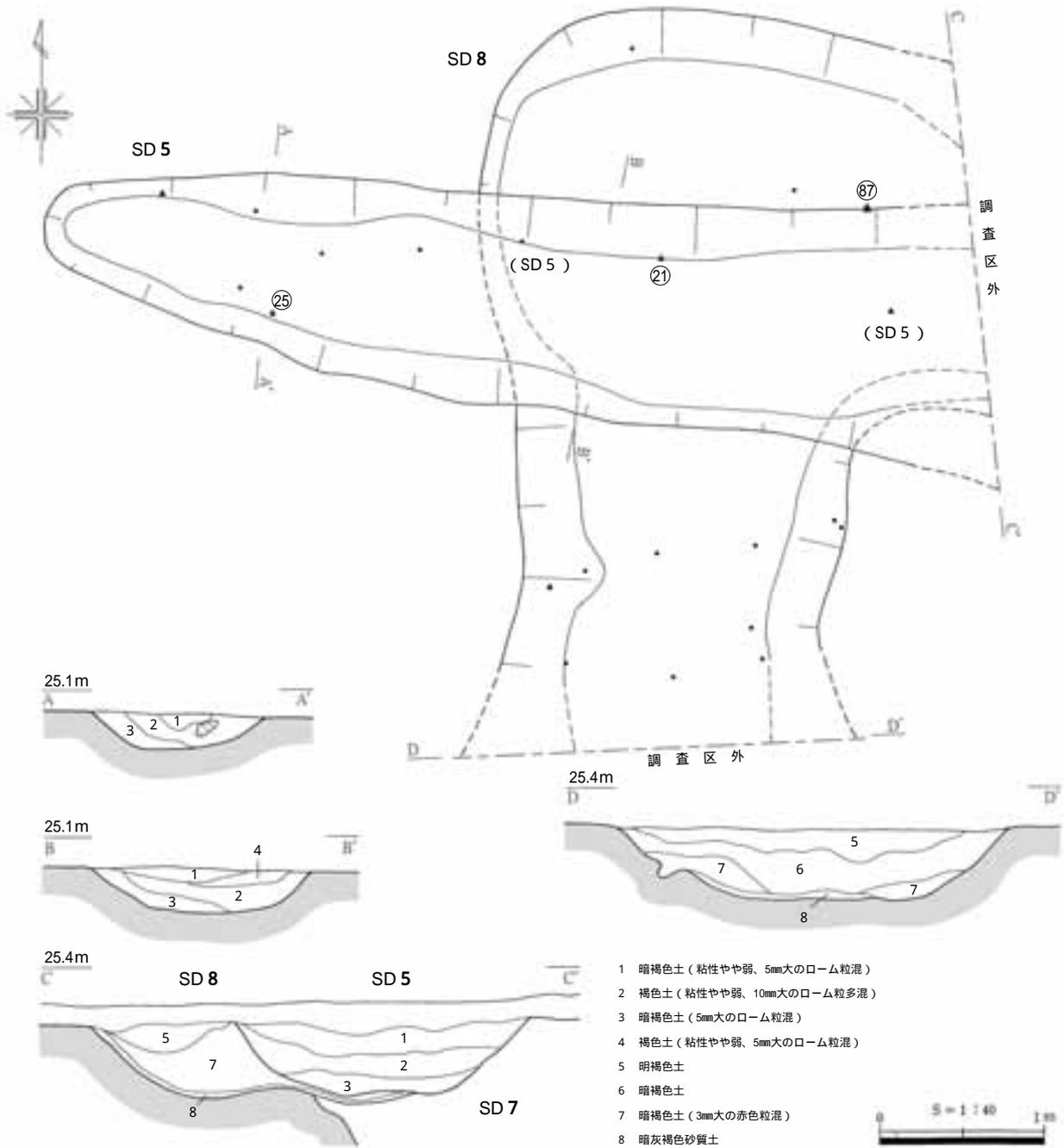
SD 5 (第48・49図、PL.16・42)

F8グリッド南東寄りに位置する。SD7・8を切る。検出した長さは約6mで、北西-南東方向に主軸をとる。南東端は調査区外にのびている。走向は直線的で、幅は約0.6～1.5mである。検出面からの深さは約20～30cmで、断面形はU字形を呈する。溝底面の標高は北西端で約24.7m、南東端で約24.6mであり、南東側がわずかに低い。埋土は暗褐色土、褐色土で、砂礫等はみられず、流水などの痕跡は認められない。遺物は埋土中から土器片が数点出土した。図示できたものは青磁破片177の1点のみである。13世紀以降に位置づけられるものであり、溝の埋没時期を示すものと考えられる。ただしSD 7あるいはSD 8埋土からの混入の可能性もある。

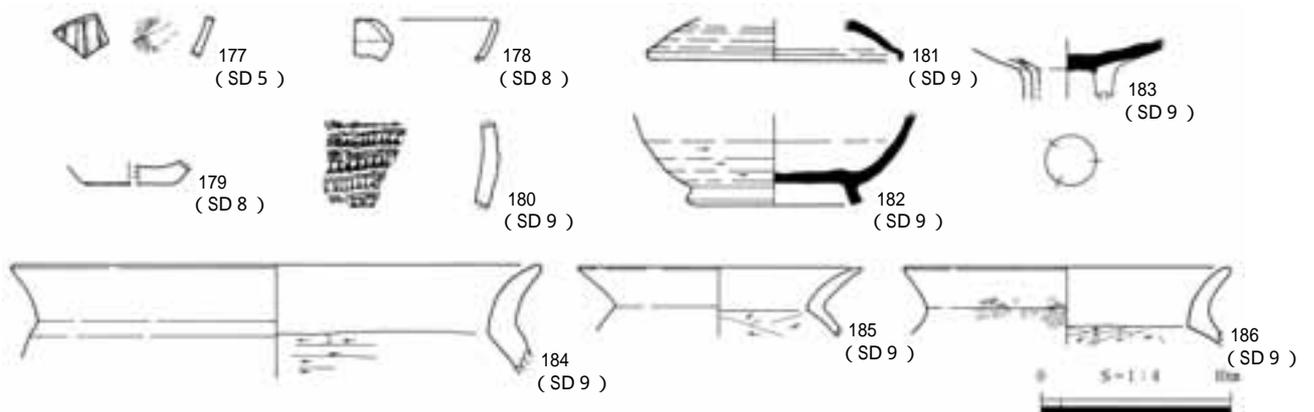
形状や埋土の状況から人為的に掘られた溝と考えられるが、溝の性格は不明である。 (山根)

SD 8 (第48・49図、PL.17・35・42)

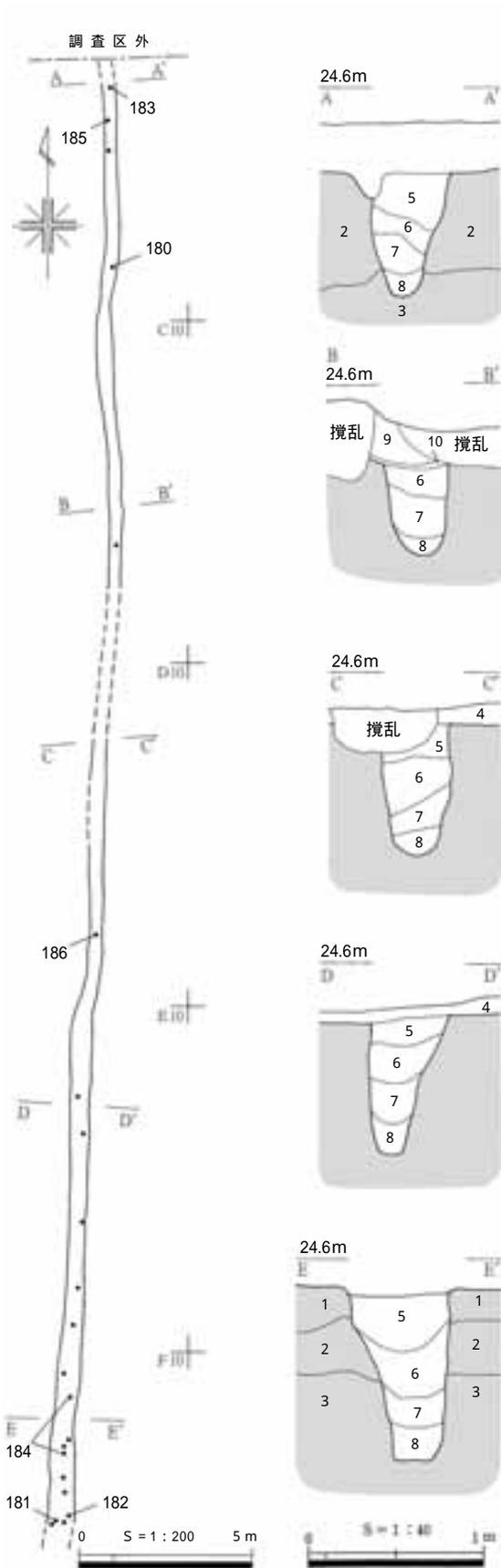
F8・G8グリッド、調査区南東隅に位置する。SD 1・7を切り、SD 5 に切られている。検出した長さは約4.5mである。幅は約2mで、北側では約2.3mとやや広がる。検出面からの深さは約30～40cmで、断面形は浅い皿状を呈する。溝底面の標高は北端で約24.6m、南端で約24.7mであり、北側がわずかに低い。埋土の最下層では厚さ約2～6cmの砂質土が堆積していた。これは一時期流水または滞水していた痕跡と考えられる。遺物は埋土中から土器片が数点出土した。土器の特徴から、埋没時期は12世紀と考えられるが、SD 1・7の埋土から混入した土器の可能性もある。



第48図 SD 5・8



第49図 SD 5・8・9出土遺物



- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色土 ([= 基本層序 -5]) | 6 褐色土 (しまりやや弱、暗黄褐色粒少量混) |
| 2 黒褐色シルト ([基本層序]と対応) | 7 暗褐色土 (砂少量混・炭化材混) |
| 3 暗褐色シルト ([= 基本層序 ']) | 8 暗褐色土 |
| 4 鉄分沈着層 ([= 基本層序 -5]) | 9 暗黄褐色土 (しまりややあり) |
| 5 褐色土 (炭化物・3mm大のローム粒混) | 10 暗灰褐色土 (しまりあり) |

埋土の状況から人為的に掘られた溝と判断したが、溝の性格は不明である。 (山根)

SD 9 (第49・50図、PL.17・35)

B10～F10グリッドに位置し、ほぼ中央でSK 9に、南端でSD 7に切られている。またD10杭の西側では旧赤碕町の試掘第5トレンチにより、約5mにわたって破壊されている。検出した長さは約45mであり、南北方向に主軸をとる。北側はさらに調査区外へのびる。走向はほぼ直線的で、幅は約40～60cmである。検出面からの深さは約80～90cmで、断面形は深い逆台形ないしU字形を呈する。溝底面の標高は北端・南端でいずれも約23.4mであり、高低差はほとんどみられないが、中央部では約23.5mとわずかに高い。埋土は褐色土、暗褐色土が主体となっており、流水または滞水していた痕跡は認められない。

遺物は埋土中から土器片十数点が出土し、そのうち7点を図示した。遺構の埋没時期を示すのは須恵器底部182、土師器甕184～186であり、7世紀末頃に位置づけられる。

形状から人為的に掘られたものと判断したが、溝の性格については不明である。 (山根)

(5) 土坑

SK 1 (第51・52図、PL.18・36)

C6グリッドに位置し、北縁がSI 3を切る。主軸が北西 - 南東方向にとる楕円形を呈し、長軸約2.4m、短軸約2.1m、検出面からの深さ約20cmである。底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土を主体とし、2、3層はほぼ水平に堆積している。また、埋土中には鉄分の沈着や炭化物の混入がみられる。遺物は土器片数点が出土した。また、坑底に接して拳大～人頭大の礫4点が検出された。礫の1点には、SI 2出土礫と同様に朱が付着していた。土器は八峠中世～期の特徴を示すことから、遺構の埋没時期は

第50図 SD 9

12～13世紀代と考えられる。遺構の性格は不明である。(君嶋)

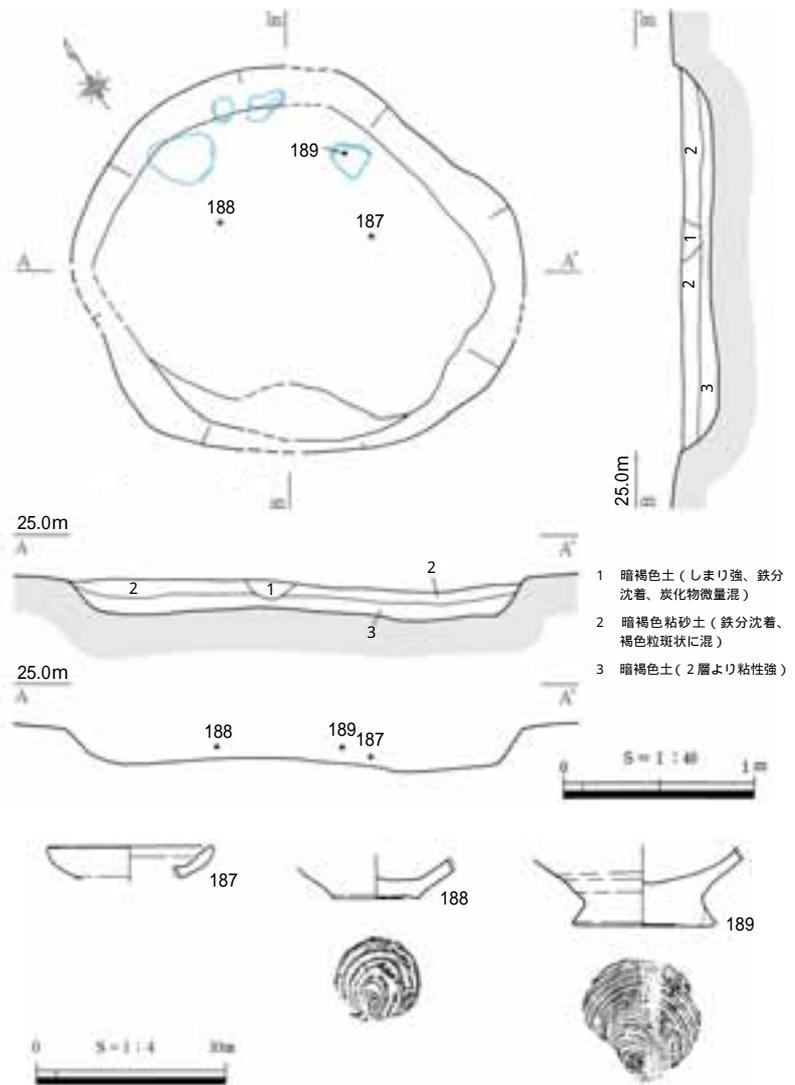
SK 2 (第53・54図、PL.18・43・45)

B5グリッドに位置し、SD 2の埋土中に掘り込まれている。平面形は長軸約1.7m、短軸1mの長方形を呈し、主軸方位はN - 10° - Eである。検出面からの深さは約20cmで、底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分層される。2、3層は水平な堆積であるが、1層は掘り返されたか、上から陥没したような落ち込みを呈する。1、2層は砂質土で、弥生土器の小片を含む。おそらくSD 2の埋土に由来するものであろう。遺物は、北端近くから和鏡C5が、中央付近から輪状の鉄製品⑩～⑫が出土した。和鏡、輪状鉄製品はともに坑底から5～7cm高い位置で出土した。これら遺物の出土レベルが3層上面にほぼ一致することから、3層は副葬前に既に坑底に充填されていた可能性がある。他に鉋と想定される鉄製品⑬が出土している。

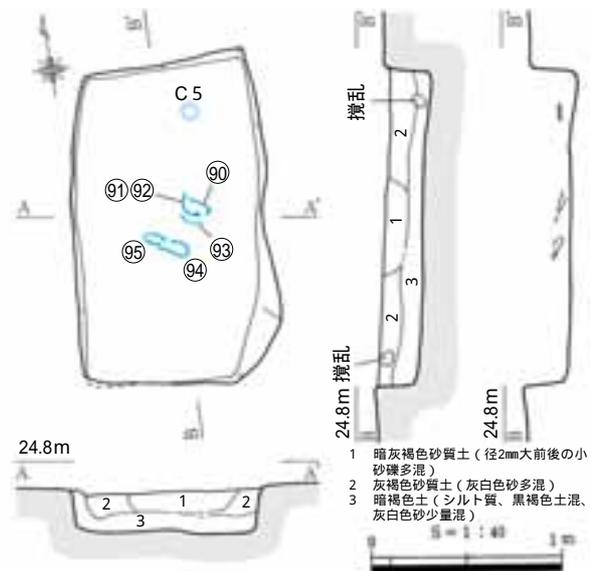
これらの出土遺物および土坑の形状から、本遺構は墓塚と考えられる。ただし、木棺等の痕跡は確認できなかった。出土した和鏡の年代は12世紀半ば頃である。(君嶋)

SK 3 (第55・58図、PL.18・38)

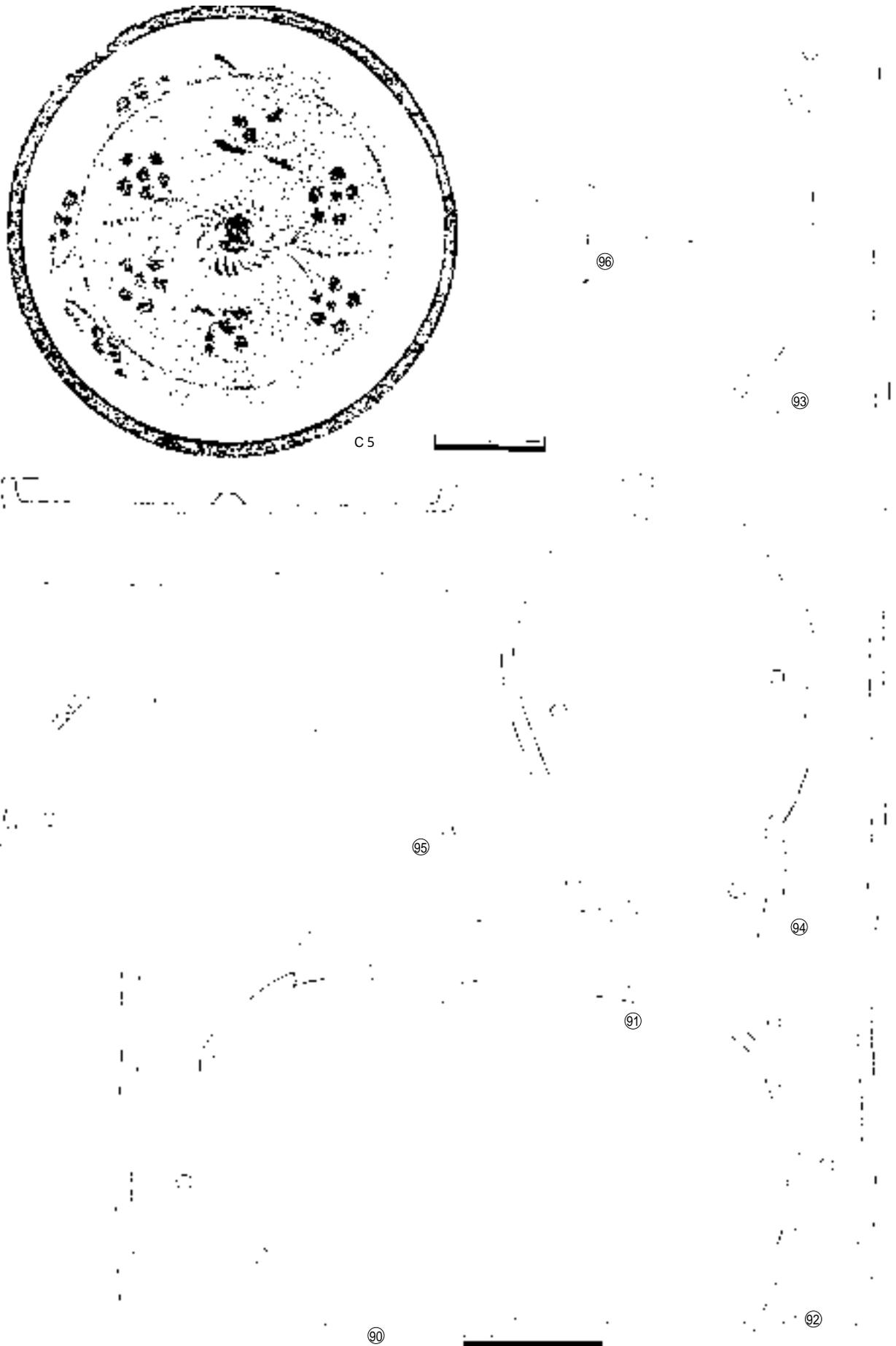
C4・D4グリッドに位置する。平面形は、東西方向に主軸をとる楕円形を呈し、長軸約2.15m、短軸約1.7mである。検出面からの深さは最大で約30cmであり、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色土を主体とし、ほぼ水平に堆積している。遺物は、埋土中より土器数点が出土した。図示した195は底部回転系切の土師器である。遺物の特徴から、遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。遺構の性格は不明である。(君嶋)



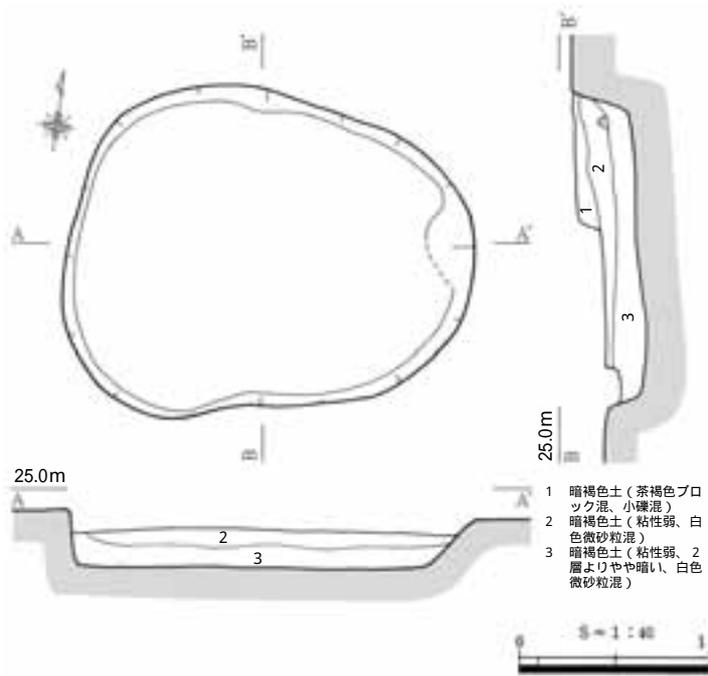
第52図 SK 1 出土遺物



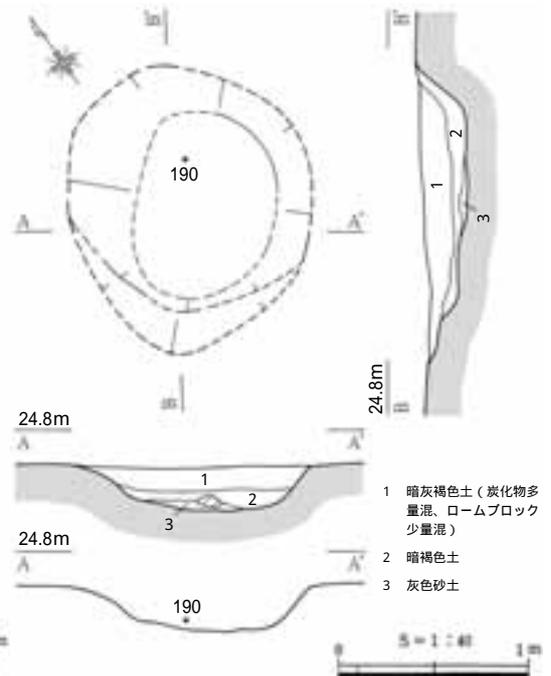
第53図 SK 2



第54図 SK 2 出土遺物



第55図 SK 3



第56図 SK 5

SK 5 (第56・58図、PL.18・38・42)

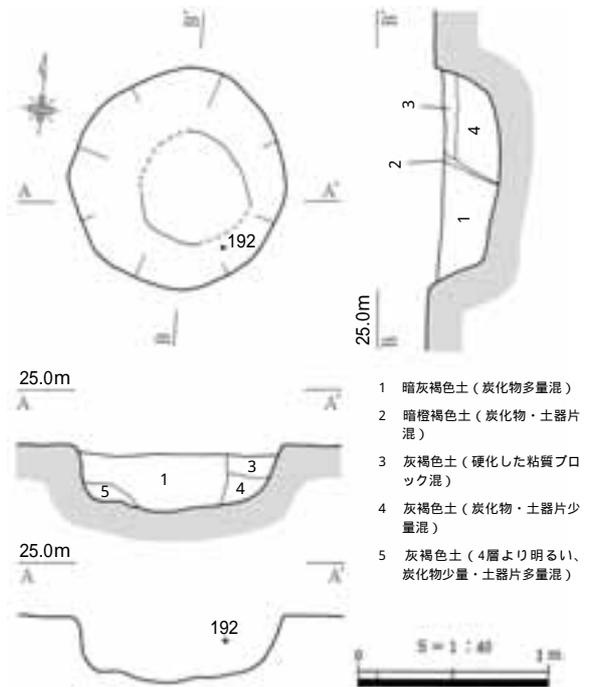
C7グリッドの平坦面に位置する。平面形は長径1.55m、短径1.25mの不整な楕円形を呈する。断面は逆台形で、検出面からの深さは25cmである。埋土は暗灰褐色土を主体とし、底面中央には灰色砂土が堆積する。砂土の上層からは人頭大の礫に加え、底部回転系切の土師器皿191や白磁底部190が出土した。190は森田分類 類に相当する。出土遺物から時期は12世紀以降と考えられるが、遺構の性格は不明である。

(西川)

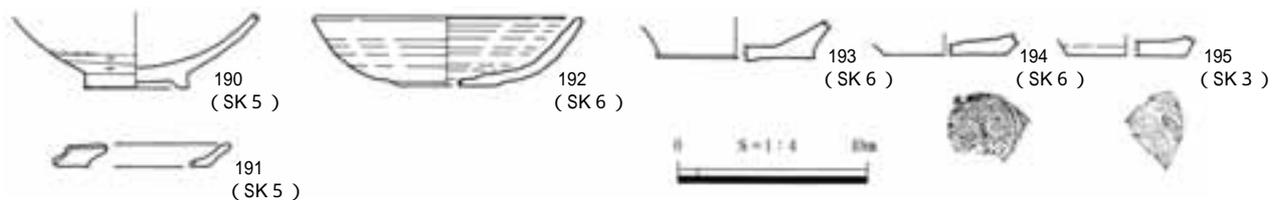
SK 6 (第57・58図、PL.18・38)

D7グリッド北西の平坦面に位置する。平面形は直径1.1mの円形を呈する。断面は逆台形で、底面はやや曲面をなす。検出面からの深さは35cmである。埋土は4層に分けられるが、1、2層は抜き取り穴、あるいは後世の掘り込みの可能性がある。出土遺物はいずれも3、4層からの出土である。時期は12世紀以降(八峠中世 ~ 期)と考えられるが、遺構の性格は不明である。

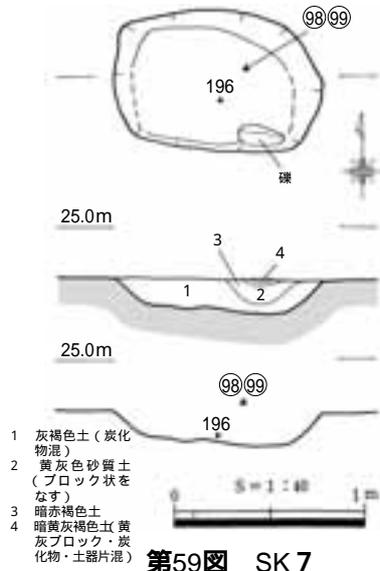
(西川)



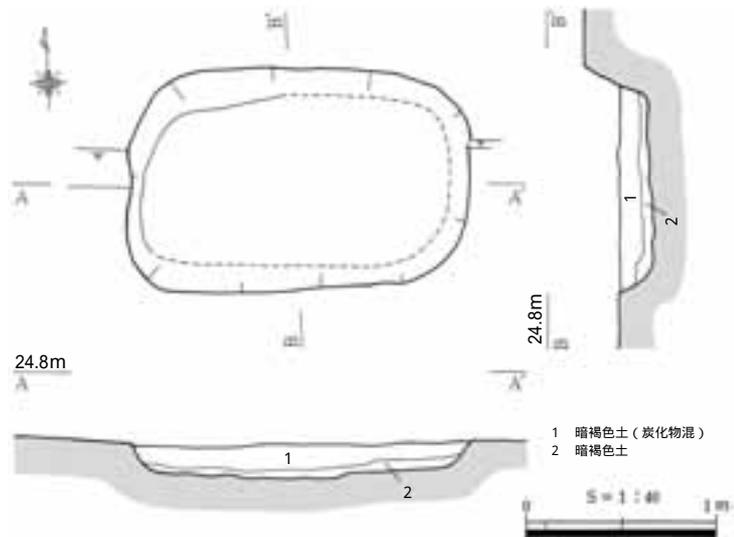
第57図 SK 6



第58図 SK 3・5・6 出土遺物



第59図 SK 7

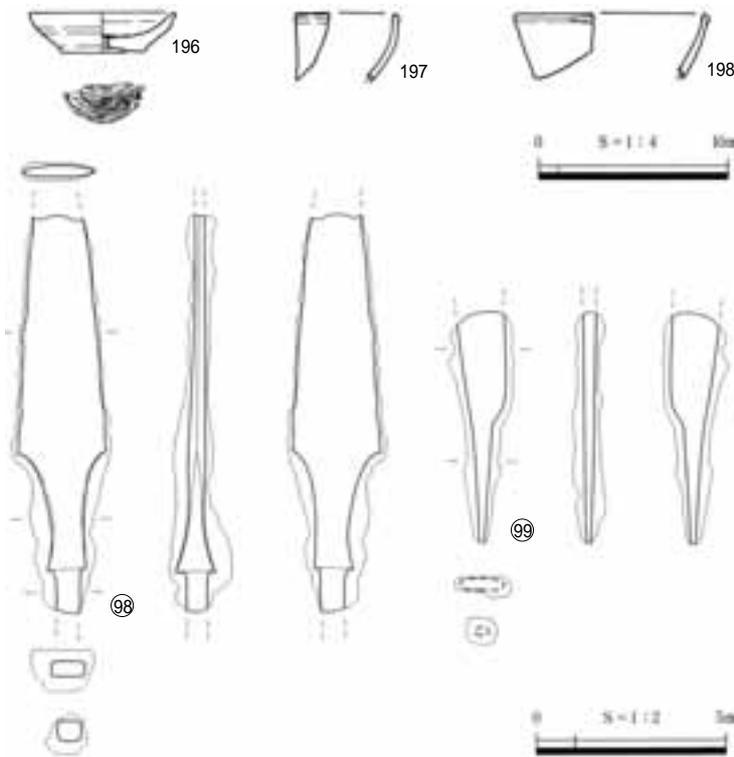


第61図 SK 8

SK 7 (第59・60図、PL.19・38・42・46)

D7グリッド北西の平坦面に位置する。平面形は長辺1.1m、短辺75cmの不整な長方形を呈する。断面は逆台形で、検出面からの深さは35cmである。埋土は4層にわかれ、2層には黄色土が、3層には炭化物が、4層には焼土粒がそれぞれ多く含まれていた。

検出面でもある2層の上面で鉄製品⑨⑧、⑨⑨が出土した。刃部の破断面どうしが接した状態で出土したが、接合せず別個体である。その他の遺物として、底部回転糸切の土師器皿196や白磁197、198が出土している。前者は八峠中世期以降に相当することから、埋没時期は12世紀以降と考えられるが、遺構の性格は不明である。(西川)



第60図 SK 7 出土遺物

SK 8 (第61図、PL.19)

B6グリッドの中央西寄りの平坦面に位置する。平面形は長辺1.8m、短辺1.2mの隅丸長方形を呈する。南半は後世の攪乱によって削平されている。断面は逆台形で、深さは35cmである。埋土は2層にわかれ、ほぼ水平に堆積する。墓壙と考えられるSK 2と形態や規模は類似するが、出土遺物はごくわずかな土師器片のみで、明確な時期や遺構の性格を示すものはない。(西川)

SK 9 (第62・63図、PL.19・37)

D10グリッドに位置し、東縁がSD 9を切る。付近に堆積した鉄分沈着層(- 5層)上面より掘り込まれた土坑である。平面形はややいびつな円形を呈し、長軸約3.2m、短軸約2.9mである。検出面

からの深さは最大で約50cmであり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平坦である。埋土は暗灰褐色土で、均質な土質である。埋土中からは、土器片、鉄製品数点が出土した。その他に、割れた拳大～人頭大の礫が数点検出された。遺物の特徴から、遺構の埋没時期は13世紀以降と考えられる。遺構の性格は不明である。(君嶋)

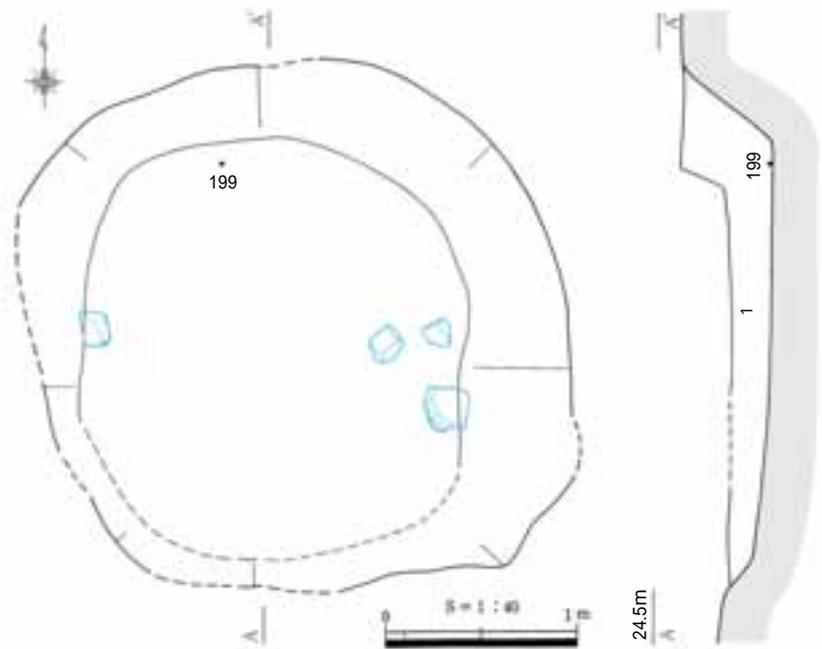
SK10 (第64・65・66図、PL.19・36・37・38)

C6グリッド北東の平坦面に位置する。平面形は長辺2.5m、短辺2.2mの不整な台形を呈する。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは20cmである。埋土は3層にわかれ、灰を多く含む2層が土坑の東半に広がる。

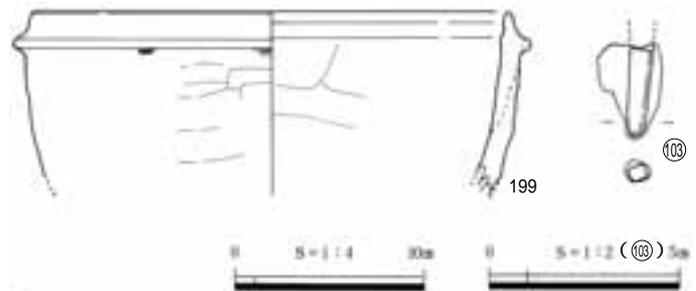
土坑内からは土師器と礫がまとまって出土した。いずれも土坑全体に散在しており、その大半が埋土中に遊離していた。底面から出土した土師器には201と214がある。礫では扁平な形状のものを数点確認した。底面に残る礫から判断して、礫を用いて土坑内を方形または長方形に囲んでいた可能性も考えられるが、土層断面観察では底面に位置する礫の内側と外側の埋土に、礫据付け時の裏込め土と埋没土に相当する明確な違いは認められなかった。

出土した土師器には皿・坏・甕あるいは鍋がある。なかでも口径9cm前後、底径4～4.5cmの小皿が大半を占める。

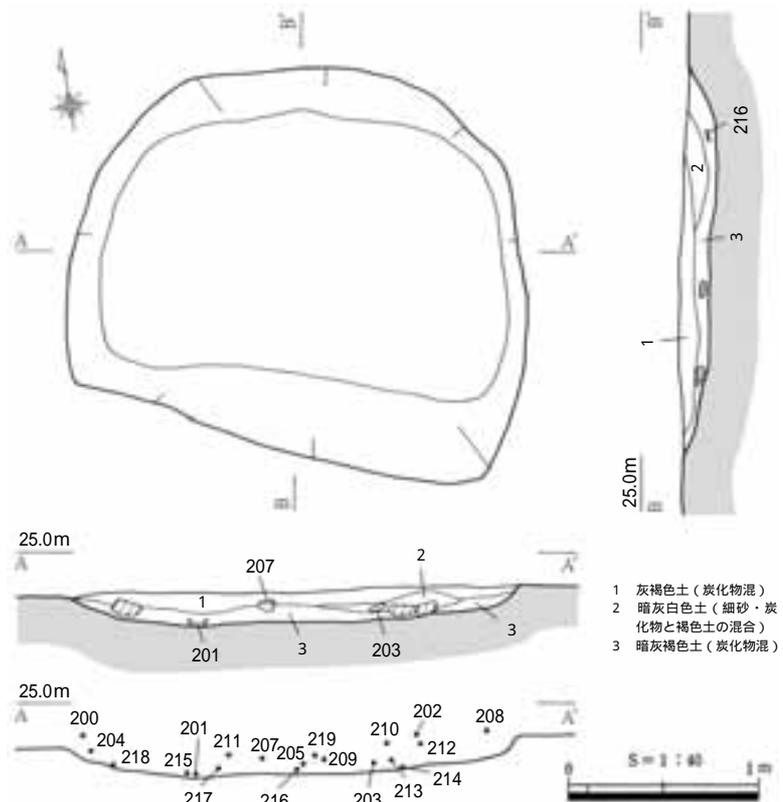
皿や坏の底部の破片には人為的な打ち欠き痕跡をとどめるものがある



第62図 SK 9



第63図 SK 9 出土遺物



第64図 SK10

- 1 灰褐色土 (炭化物混)
- 2 暗灰白色土 (細砂・炭化物と褐色土の混合)
- 3 暗灰褐色土 (炭化物混)

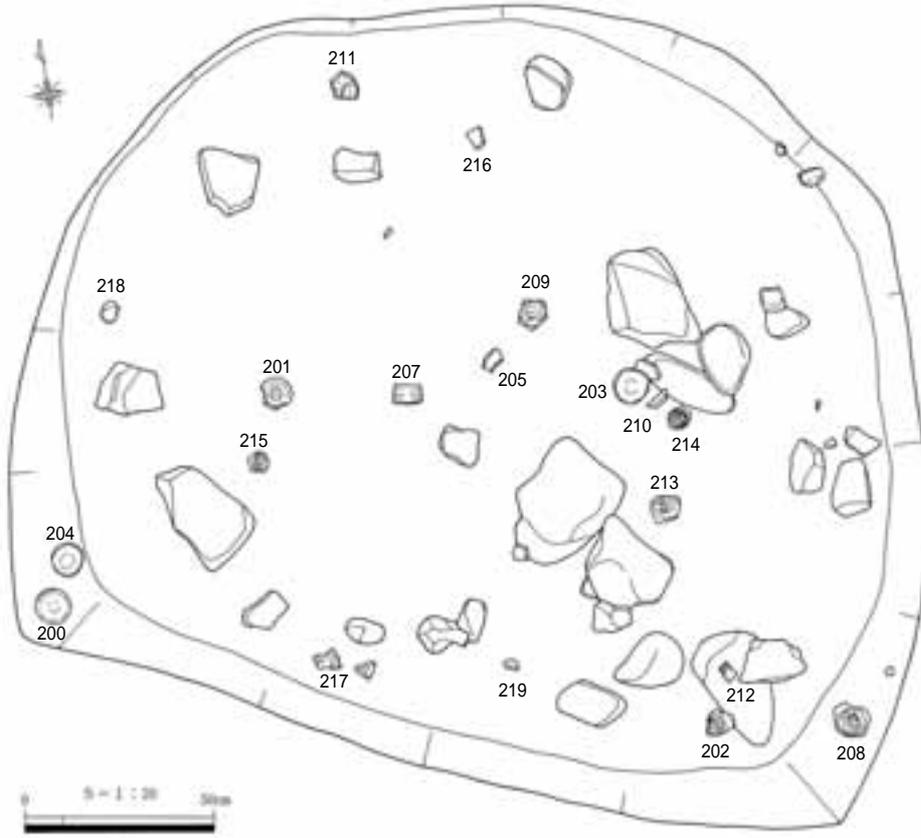
(211、212、213)。その他、赤色ではないが、橙色を基調とした化粧土を内外面に塗彩するものがある(202、205、206、210、214)。

これだけで判断することは難しいが、SK10の出土遺物は何らかの祭祀に使用されたものである可能性が考えられる。出土した土師器は八峠中世 期に位置づけられ、時期は12世紀以降であると考

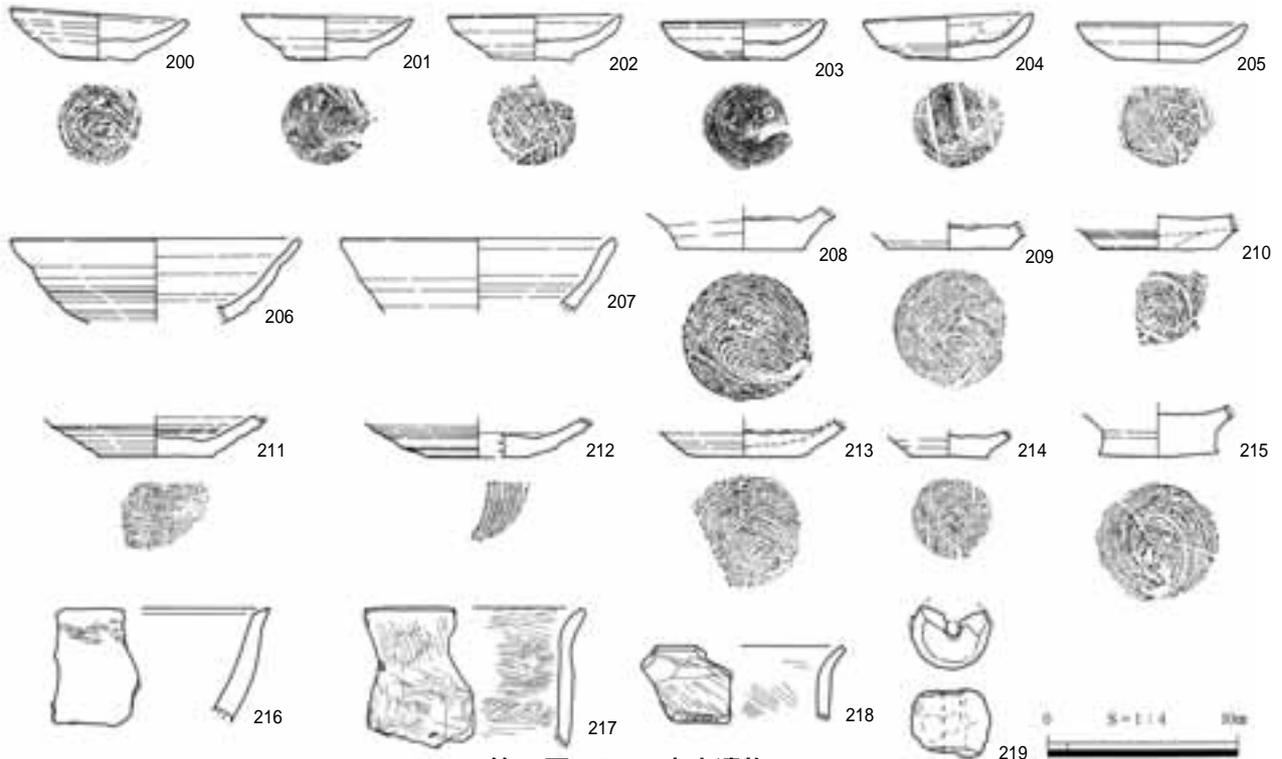
られる。(西川)

SK11(第67・69図、PL.19・37・38)

C5グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形を呈し、長軸約1.8m、短軸約1.3mである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは最大で43cmである。底面は、北西側に高まりがあるがそれ以外はおおむね平坦である。埋土は3層に分層され、レンズ状に堆積した2層には砂が多量に混じる。遺



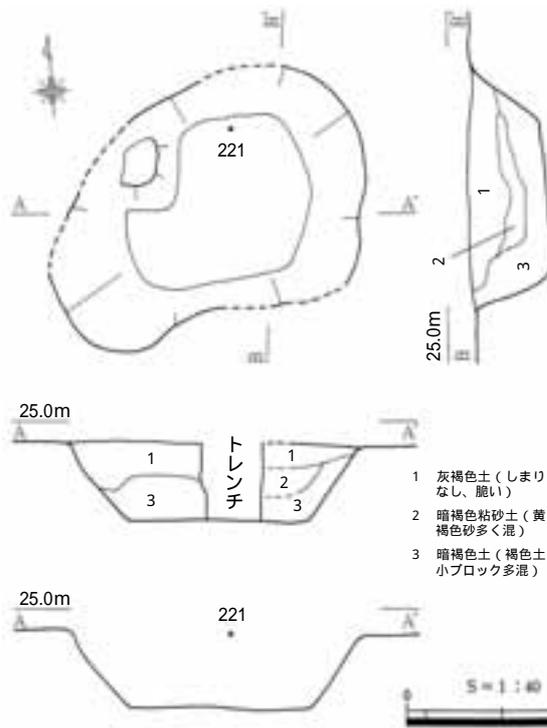
第65図 SK10遺物出土状況図



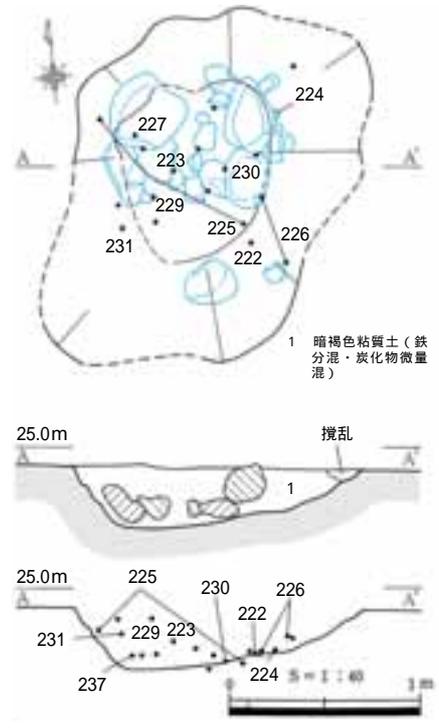
第66図 SK10出土遺物

物は、埋土中から土器片十数点が出土した。遺物の特徴から、埋没時期は12世紀以降と考えられる。遺構の性格は不明である。(君嶋) SK12(第68・69図、写真5・6、PL.20・36・37・38)

C4グリッ

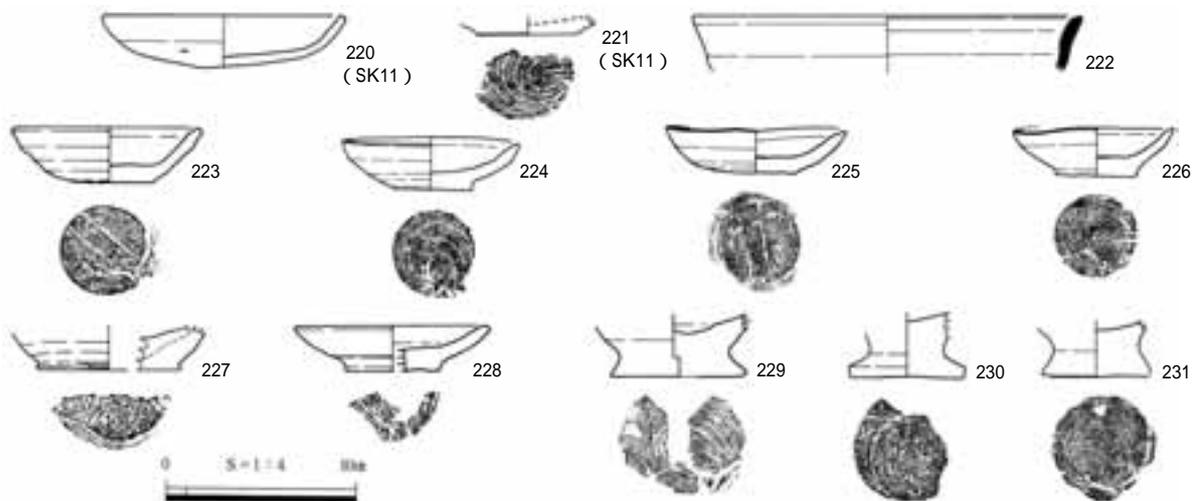


第67図 SK11

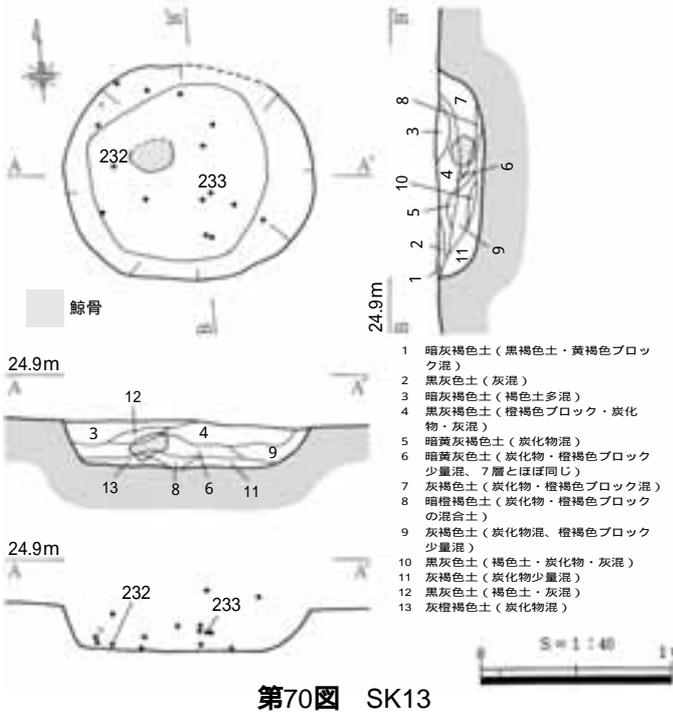


第68図 SK12

ドに位置し、弥生時代の土坑SK23を切る。平面形は、北東 - 南西方向に主軸をとる不整な楕円形を呈し、長軸約2.2m、短軸約1.5mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは最大で約35cmである。埋土は暗褐色の粘質土1層で、わずかに炭化物が混じる。埋土中からは、土器片十数点の他に、拳大～人頭大の礫が多数検出された。これらの礫の多くは坑底から浮いた状態であり、一見投棄された状況であるが、底面北東寄りの特に大振りの1石の下から、土師器皿224が完形で出土した。この石は長軸の南側の一端は別の石に乗り、北端は2個の小礫をかまされた状態であったため、石と坑底との間に空間が生じていた。224はこの空間に正置された状態であった。このことから、大形の礫については意図的に配置されたものであり、原位置をとどめている可能性が高いと考えられる。これらの礫の性格は明らかにできないが、大形の礫を基壇とする石組み状の施設などが想定される。出土した土器は土師器小皿、柱状高台皿が多く、1点のみ須恵器が含まれる(222)。これらの遺物の特徴は八峠中世 期に相当することから、遺構の時期は12世紀頃と考えられる。(君嶋)



第69図 SK11・12出土遺物



- 1 暗灰褐色土（黒褐色土・黄褐色ブロック混）
- 2 黒灰色土（灰混）
- 3 暗灰褐色土（褐色土多混）
- 4 黒灰褐色土（橙褐色ブロック・炭化物・灰混）
- 5 暗黄灰褐色土（炭化物混）
- 6 暗黄灰褐色土（炭化物・橙褐色ブロック少量混、7層とほぼ同じ）
- 7 灰褐色土（炭化物・橙褐色ブロック混）
- 8 暗灰褐色土（炭化物・橙褐色ブロックの混合土）
- 9 灰褐色土（炭化物混、橙褐色ブロック少量混）
- 10 黒灰色土（褐色土・炭化物・灰混）
- 11 灰褐色土（炭化物少量混）
- 12 黒灰色土（褐色土・灰混）
- 13 灰橙褐色土（炭化物混）



写真7 SK13鯨骨出土状況



- 1 灰褐色砂質土（白色砂粒・黄白色砂礫混）
- 2 暗褐色砂質土（白色砂粒混）
- 3 黒褐色土（しまり強、白色微砂粒混）
- 4 暗灰褐色土（白色砂多量混、層が）



第72図 SK13・14出土遺物



写真5 SK12土器出土状況(1)

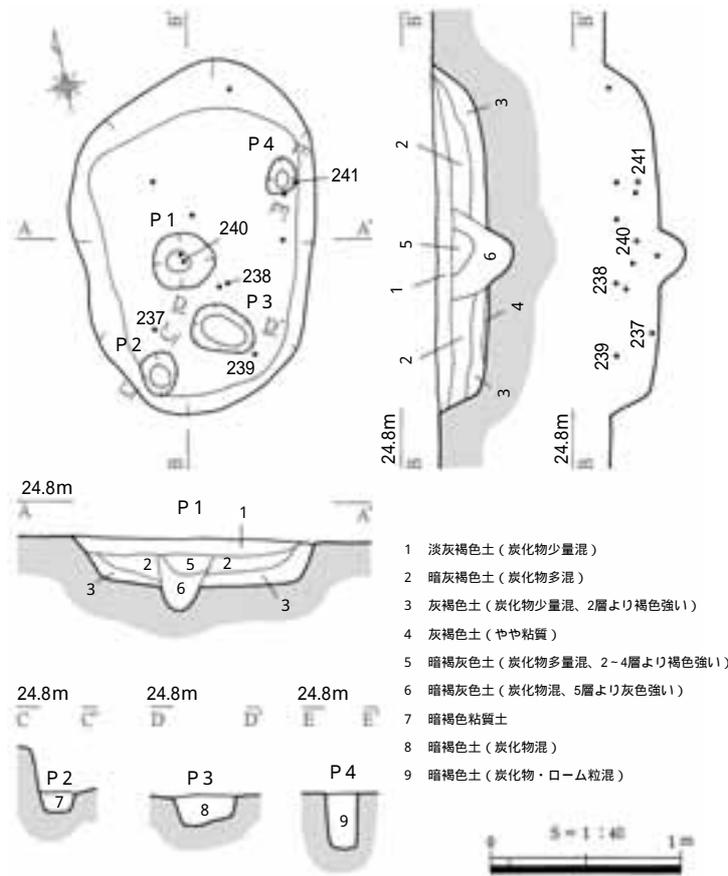


写真6 SK12土器(224)出土状況(2)

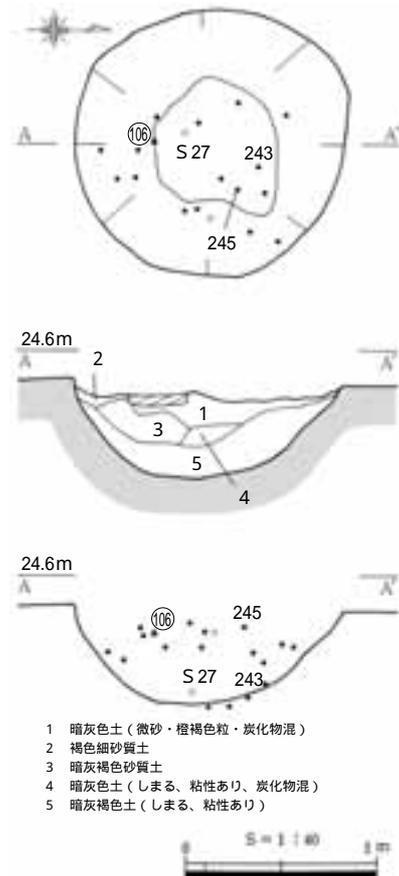
SK13 (第70・72図、写真7、PL.20・37・38)

C7グリッド西端の平坦面に位置する。平面形は長径1.3m、短径1.15mの楕円形を呈する。検出面からの深さは35cmである。埋土には灰や炭化物、橙褐色の焼土粒が多く含まれており、人為的に埋められた廃棄土坑と考えられる。埋土中からは、土師器皿233や中世須恵器壺232、青白磁合子身234などが出土した。中世須恵器については、蛍光X線分析の結果、勝間田焼が示す成分範囲の中に収まることが判明した(第4章第2節参照)。

その他に獣骨が出土し、井上貴央氏の鑑定により鯨骨との結果を得た。遺存状態はあまり良好ではない。大きさ20×16cm、厚さは約15cmである。灰白色から浅黄橙色を呈し、表面には直径2～3mm程度の



第73図 SK15



第74図 SK18

気泡状の小孔があらわれる。遺存した骨の大きさから、少なくとも小型の鯨類（イルカ等）でないことが窺えるが、より細かな分類や骨の部位は不明である。

出土土器から判断する限り、時期は13世紀以降に位置づけられるが、鯨骨のAMS年代測定では17世紀前後という結果を得ている（第4章第1節参照）（西川）

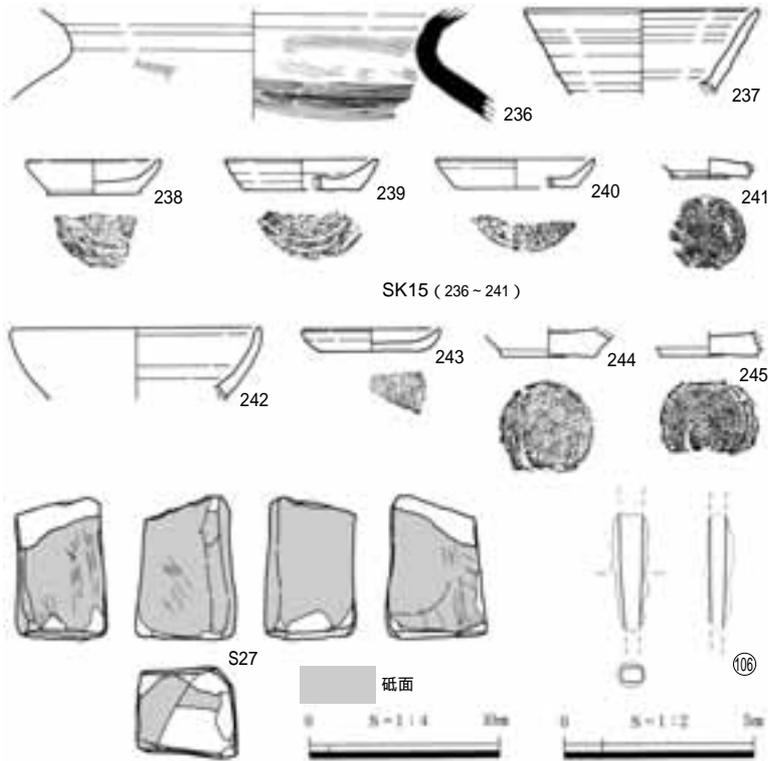
SK14（第71・72図、PL.20・38）

B5グリッドに位置し、SD 2の埋土中に掘り込まれている。土坑の埋土と地山（SD 2埋土）との識別が困難であったため、全体の形状はサブレンチの土層断面から復元したものである。平面形は長軸を東西方向にとる長方形で、長軸約1.6m、短軸約67cmである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。埋土は、SD 2の埋土に似通った砂質土1、2層を主体とし、水平に堆積している。遺構外へ広がる4層は、基本層序の層に包括される包含層である。埋土中からは土器片十数点が出土した。底部回転系切の土師器が含まれることから、遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。墓壙であるSK 2に近接し、主軸を直交させる他は平面形や埋土の状況などがSK 2と類似するが、墓壙である確証はない。（君嶋）

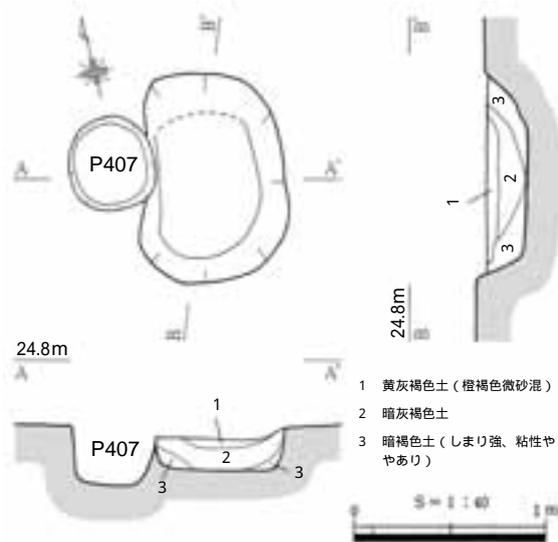
SK15（第73・75図、PL.20・37・38）

C8グリッド北側の平坦面に位置する。平面形は長径2.0m、短径1.3mの不整な長楕円形を呈する。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは最深部で40cmである。断面観察から、長楕円の土坑が埋没した後でP1が掘削され、さらにその上面が削平を受けた後に別の堆積土で埋まった状況が窺える。P2～P4は長楕円土坑に伴うものである。

出土遺物のうち、土師器皿238～240は八峠中世～期に相当すると思われる。須恵器236はP2か



第75図 SK15・18出土遺物



第76図 SK19

出土遺物のうち、土師器244、245、釘⑩が上層、土師器242、243、砥石S27が下層から出土した。両者に明確な時期差は認められない。土師器はいずれも八峠中世～期に相当するものと思われる。

SB1の項でも記したが、SK18の上層(1～4層)と下層(5層)をそれぞれ別の遺構であると解釈すれば、上層はSB1に伴うピットと理解することもできる。

SK19(第76図、PL.21) B7グリッド東端の平坦面に位置する。平面形は長辺1.1m、短辺70cmの不整な隅丸長方形である。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmである。埋土は3層に分かれる。墓壙であるSK2に比べ小規模であるが、形態は類似する。出土遺物はごくわずかな土師器片のみで、明確な時期や遺構の性格を示すものはない。

SK21(第77・78図、PL.21・38) C7グリッド南寄りに位置する。平面形は長軸約1.3m、短軸約1mの不整な楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約20cmであり、断面形は浅い皿状である。底面は長軸約95cm、短軸約55cmの不整な楕円形を呈する。埋土は暗黄褐色土、暗褐色土に分かれ、いずれの層にも炭化物が混じる。遺物は埋土中から土器片が数点出土した。土師器皿247、248は底部回転糸切である。土器の特徴は八峠中世～期に相当することから、埋没時期は12世紀以降と考えられる。土坑の性格については不明である。

ら出土した。胎土分析を行ったSK13の資料と酷似しており、同じく勝間田焼であろう。SK15の時期は12世紀以降と考えられるが、遺構の性格は不明である。P1からは良好な遺物が出土しなかったため、SK15とP1の明確な時期差は不明である。(西川) SK18(第74・75図、PL.21・38・44・45)

B8グリッド北東側の平坦面に位置する。平面形は直径1.4mの円形を呈する。検出面からの深さは最深部で50cmである。埋土は5層にわかれ、上層には砂が多く含まれる。1、2層中には厚さ6cmの扁平な石が水平に据えられている。

SK19(第76図、PL.21) B7グリッド東端の平坦面に位置する。平面形は長辺1.1m、短辺70cmの不整な隅丸長方形である。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは25cmである。埋土は3層に分かれる。墓壙であるSK2に比べ小規模

であるが、形態は類似する。出土遺物はごくわずかな土師器片のみで、明確な時期や遺構の性格を示すものはない。

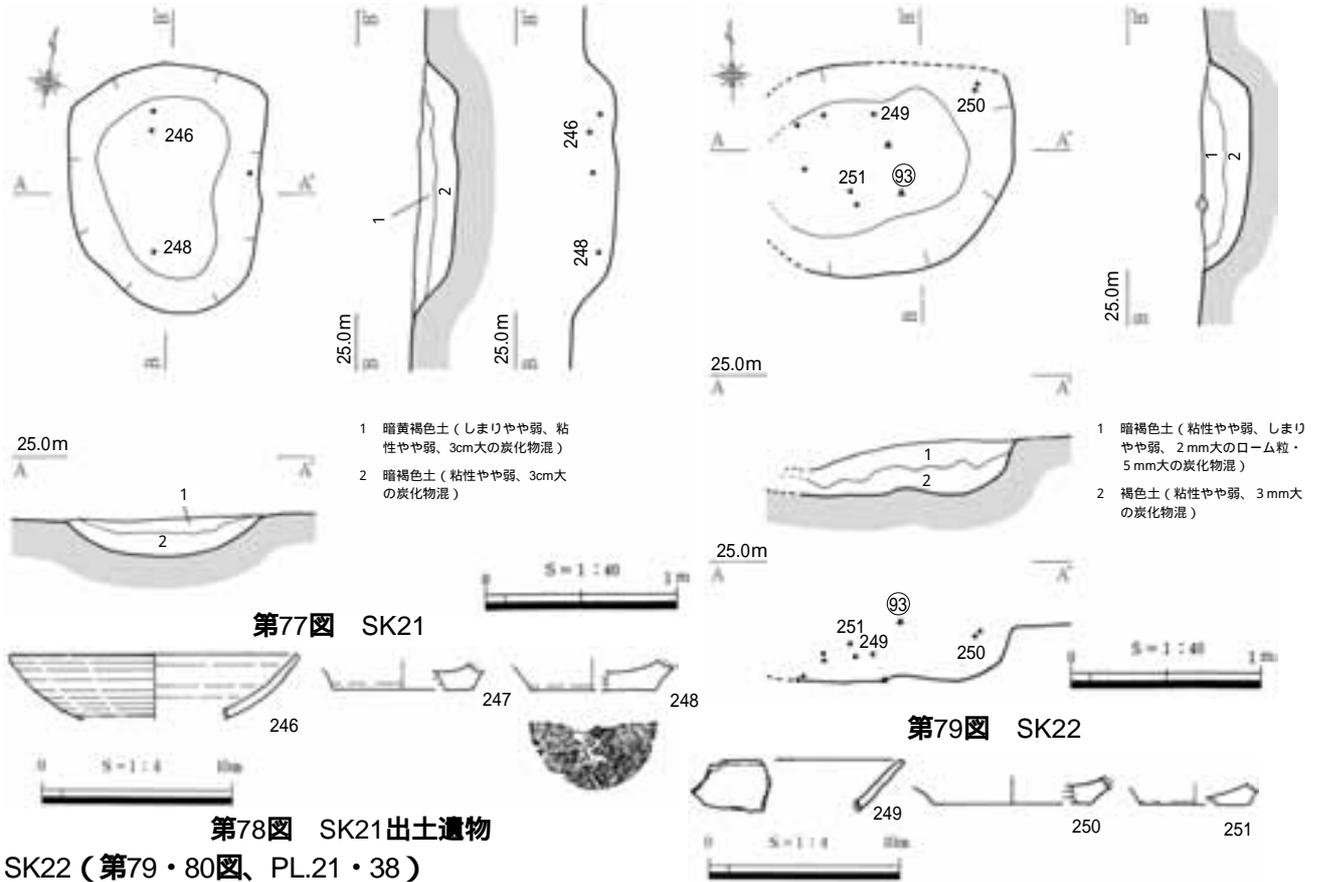
SK21(第77・78図、PL.21・38)

C7グリッド南寄りに位置する。平面形は長軸約1.3m、短軸約1mの不整な楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約20cmであり、断面形は浅い皿状である。底面は長軸約95cm、短軸約55cmの不整な楕円形を呈する。埋土は暗黄褐色土、暗褐色土に分かれ、いずれの層にも炭化物が混じる。

遺物は埋土中から土器片が数点出土した。土師器皿247、248は底部回転糸切である。土器の特徴は八峠中世～期に相当することから、埋没時期は12世紀以降と考えられる。土坑の性格については不明である。

遺物は埋土中から土器片が数点出土した。土師器皿247、248は底部回転糸切である。土器の特徴は八峠中世～期に相当することから、埋没時期は12世紀以降と考えられる。土坑の性格については不明である。

遺物は埋土中から土器片が数点出土した。土師器皿247、248は底部回転糸切である。土器の特徴は八峠中世～期に相当することから、埋没時期は12世紀以降と考えられる。土坑の性格については不明である。



第77図 SK21

第79図 SK22

第78図 SK21出土遺物

第80図 SK22出土遺物

SK22 (第79・80図、PL.21・38)

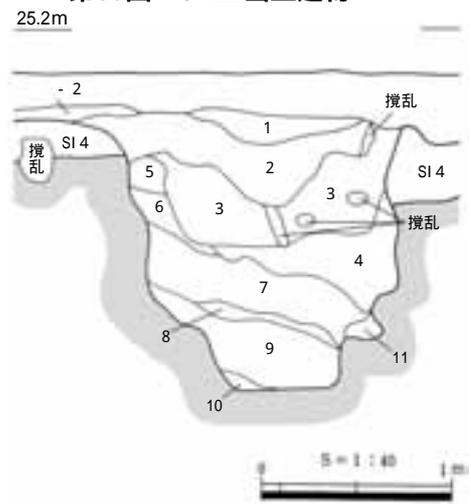
C8グリッドのほぼ中央に位置する。西側は後世の攪乱により破壊されている。平面形は長軸約1.2m、短軸約1.1mの不整な楕円形を呈する。検出面からの深さは最大で約25cmを測り、断面形は皿状である。底面は長軸約90cm、短軸65cmの不整な楕円形を呈する。埋土は暗褐色土、褐色土に分かれ、いずれの層にも炭化物が混じる。

遺物は埋土中から土器片、鉄滓が出土した。土器の特徴から埋没時期は平安時代と考えられる。土坑の性格については不明である。(山根)

SK24 (第81図、PL.21)

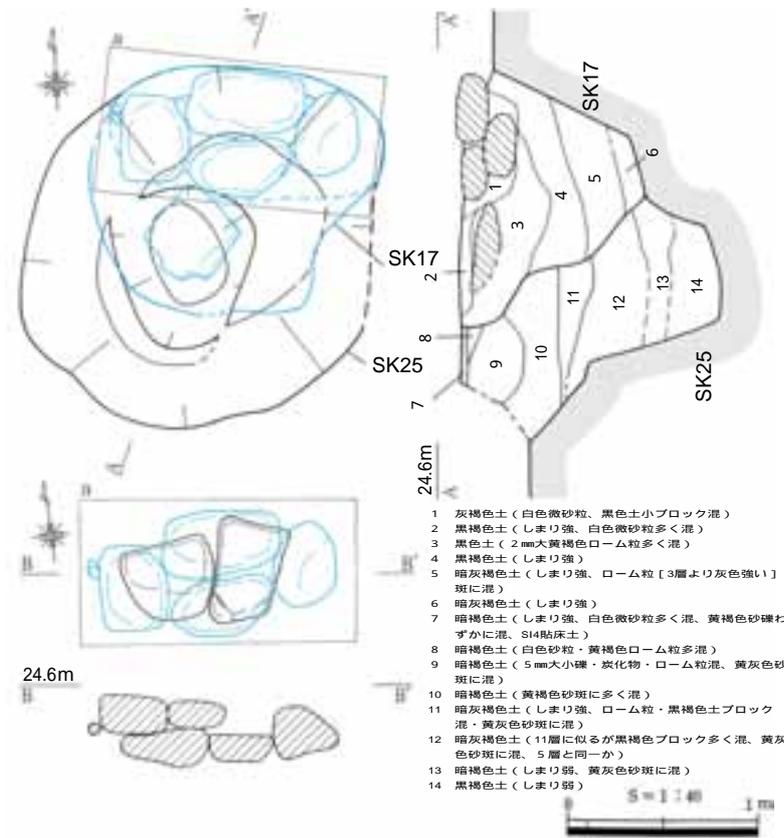
B4・B5グリッドの調査区北壁際に位置する。試掘坑の壁面で断面のみを確認した土坑である。SI 4の床面を破壊して掘り込んでおり、掘り込み面での幅は東西1.75mである。断面形は底面付近が強くくびれたU字形を呈し、掘り込み面からの深さは1.45mである。埋土は11層に分層される。4層以下は、西側から東側へ傾斜して堆積している。1～3層は、

4層以下の堆積後に掘り込まれた別遺構の埋土である可能性もある。3層は黄褐色の砂礫が多量に混じる黒褐色土であり、SI 4の埋土と類似している。遺物は、壁面精査の過程で須恵器を含む土器片数点を回収したが、いずれも小片であり図化に耐えない。仮に1～3層、4層以下を別の遺構と解釈する場合でも、両者とも平安時代の遺構であるSI 4に後出することは土層断面から明らかである。土坑



第81図 SK24

- 1 暗褐色土 (灰褐色ブロック・黄褐色砂礫混)
- 2 暗褐色土 (5cm大礫まばらに混、黄褐色砂礫多混)
- 3 黒褐色土 (しまり弱、黄褐色砂礫多混、炭化物混)
- 4 暗褐色土 (しまり弱、黄褐色砂礫・黄褐色砂混、黒褐色ブロック混)
- 5 暗褐色土 (しまりやや弱、緻密、黄褐色砂礫・炭化物微量混)
- 6 黒褐色土 (黄褐色砂礫やや多混)
- 7 暗褐色土 (黒褐色ブロック・黄褐色砂礫に混)
- 8 暗褐色土 (黄褐色砂礫多混、黒褐色ブロック混)
- 9 暗褐色土 (しまり弱、脆い、黒褐色土との混合土、黄褐色砂礫少量混、灰褐色砂礫に混)
- 10 黒褐色土 (しまり弱、黄灰色砂 [地山] ブロック混)
- 11 暗灰褐色土



第82図 SK17・25

平に堆積しており埋め戻しを示唆する。

SK17（古）はSI 4の床面を破壊して掘り込まれた土坑である。平面形はいびつな楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.3mである。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは約95cmである。埋土は、上層（2～4層）は黒褐色土、下層（5、6層）は暗灰褐色土を主体とする。3層は黄褐色のローム土粒子を多く含み、SI 4、SK24の埋土に似る。また、3層中には人頭大の扁平な角礫1石が含まれる。

SK17（古）の埋没後、土坑の北寄りにさらに新たな土坑（SK17（新））が掘り込まれる。この土坑は東西に主軸をとる長方形を呈し、長軸1.45m、短軸70cm、深さ30cmである。この土坑をほぼ充填する形で、扁平な礫5石と円礫1石とが上下2面に並べられる。

SK17（新）の礫については、検出当初は石蓋土壌墓の可能性を想起したが、下層に墓墳を伴わないことが判明した。その性格については不明である。遺物は、SK17（古）SK25の埋土中から土器片数点が出土した。いずれも小片で図化に耐えないが、両土坑とも底部回転糸切の土師器片を含んでいる。したがって、SK25 SI 4 SK17（古）までの変遷は、10世紀以降、中世までの時間幅で継起したものと理解される。ただし、SK17（新）の時期は不明である。（君嶋）

の性格は不明である。（君嶋）
 SK17・25（第82図、写真8・9、PL.21）

B5グリッドに位置する。SI 4と重複する2基の土坑である。構築順序は、SK25 SI 4（SK25の埋土上面に貼床構築）SK17となる。SK17はさらに（古）（新）に分けられる。

SK25はSI 4の貼床除去後に検出した土坑である。平面形は北東-南西方向に主軸をとる楕円形を呈し、長軸約2.15m、短軸約1.8mである。断面形は、北側はSK17に破壊されているが、逆台形を呈するものと想定されるが、逆台形を呈するものと想定されるが、南側では中位に段をもつ。検出面からの深さは最大で1.3mである。埋土は暗褐色土を主体とし最下層（14層）は黒褐色土となる。ほぼ水

写真8
SK17（新）
礫検出状況



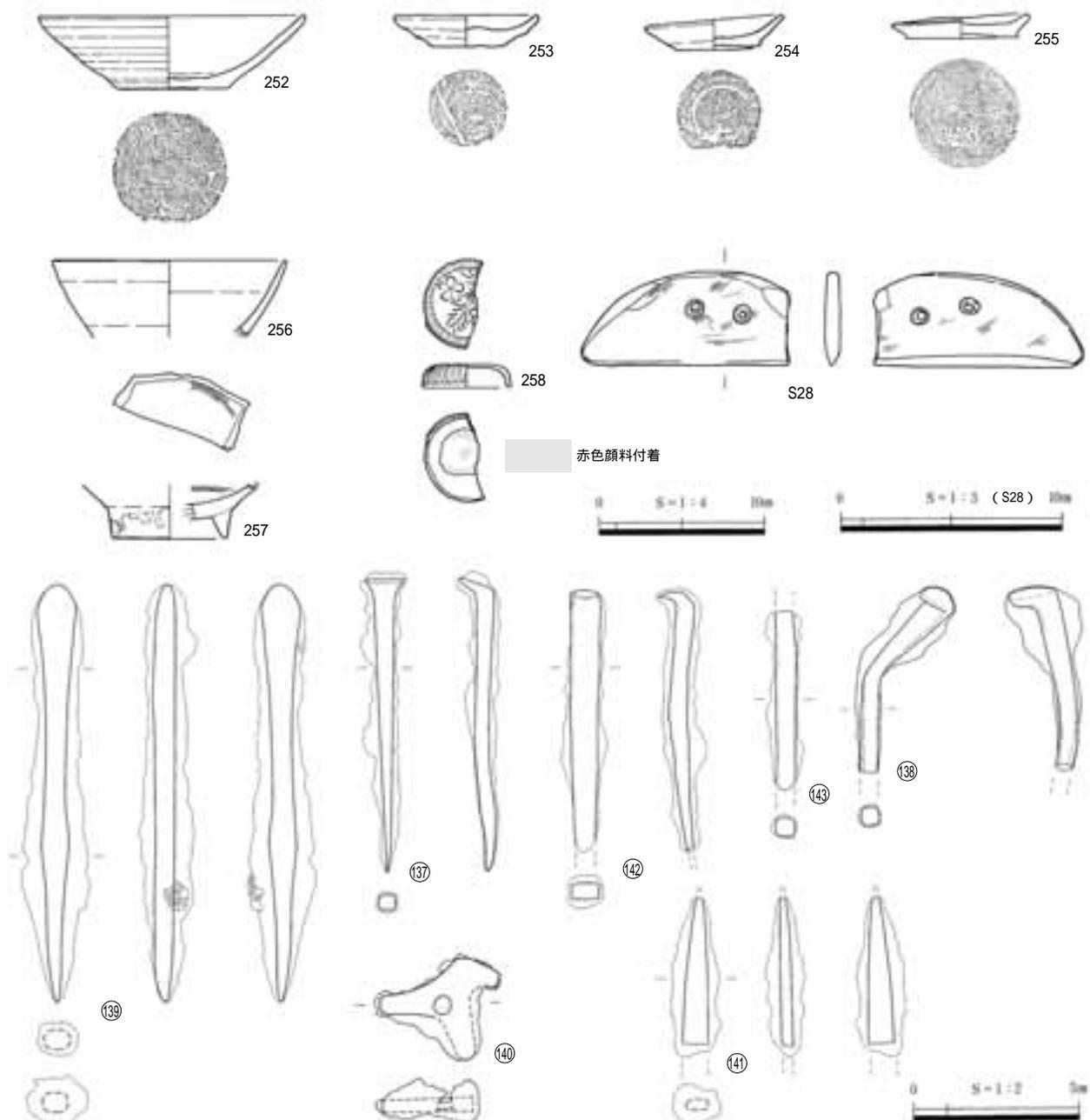
写真9
SK17（古）
礫検出状況



第6節 ピット群（第83・84・85図、第8表、PL.37・39・42・44）

総数482基のピットが検出された。B7・B8・C7・C8グリッドに特に集中して分布している。ピットの埋土は暗灰褐色土、暗黄褐色土、褐色土が主体で、ほとんどが単層である。B5～D5グリッドに分布するピットには砂が、B7・B8・C7・C8グリッドに分布するピットには炭化物、（明）橙褐色ブロック（粒）が混じるものが多く存在する。柱痕跡が認められたものはP110・P145・P147・P148・P161・P162・P208・P296・P424の計9基であるが、ほとんどが単独で存在し、規則的に並ばないことから、建物や柵列を構成する可能性は低いと考えられる。ただし、P161については南側に位置するSB2柱列の延長線上に並ぶことから、SB2と関連する柱穴の可能性はある。

254基のピットから遺物が出土した。そのほとんどが小片の土器であったが、遺存度が高く、各時期の特徴を示すものを選んで図示した。時期としては中世の遺物が多いが、P258からは弥生時代のものと考えられる磨製石庖丁S28が出土している。（山根）



第83図 ピット出土遺物

第8表 ピット計測表

	地区	長径 cm	短径 cm	深さ cm	土色	遺物	備考
P1	D5	49	26	24	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P2	D5	33	27	22	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P3	D5	27	23	35	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P4	D5	28	23	18	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P5	D5	19	17	20	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P6	D5	34	32	37	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P7	D5	23	16	22	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P8	D5	31	26	39	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P9	D5	32	29	43	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P10	D5	16	15	16	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P11	C5	36	32	30	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P12	C5	29	27	30	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P13	C5	30	24	21	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P14	C5	27	20	38	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P15	C5	14	14	14	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P16	C5	48	48	15	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P17	C5	32	26	22	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P18	C5	17	15	10	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P19	C5	25	24	19	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P20	C5	49	30	29	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P21	C5	96	52	31	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P22	B5	22	21	21	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P23	B5	31	30	14	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P24	B5	44	41	45	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P25	B5	33	28	17	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P26	B5	32	31	43	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P27	B5	80	76	24	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P28	B5	39	34	17	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P29	B5	30	23	21	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P30	D5	26	25	31	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P31	D5	31	30	36	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P32	D5	47	42	36	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P33	D5	21	20	10	暗褐色土 砂混		SD2より新しい
P34	C5	84	80	15	暗褐色土		SD3より新しい
P35	C5	18	18	52	暗褐色土	x	
P36	C5	42	34	28	暗褐色土 砂混	x	
P37	B5	38	22	24	暗褐色土	x	
P38	B5	38	33	14	暗褐色土	x	
P39	B5	49	34	33	暗褐色土		SD3より新しい
P40	B5	23	18	14	暗褐色土	x	
P41	B5	48	44	43	暗褐色土	x	
P42	C3	27	22	49	暗褐色土	x	
P43	C3	36	29	36	暗褐色土	x	
P44	C3	43	36	25	暗褐色土		
P45	C3	17	17	23	暗褐色土	x	
P46	C3	44	39	27	暗褐色土	x	
P47	C3	29	28	63	暗褐色土	x	
P48	C3	31	21	16	暗褐色土	x	
P49	C3	29	24	26	暗褐色土	x	
P50	C3	19	17	31	暗褐色土	x	
P51	C3	28	24	18	暗褐色土		
P52	C3	27	20	11	暗褐色土	x	
P53	C3	38	26	18	暗褐色土		
P54	C3	43	33	83	暗褐色土		
P55	C3	37	32	27	暗褐色土	x	
P56	C3	41	39	50	暗褐色土 炭混		
P57	C3	27	26	36	暗褐色土	x	
P58	C3	27	25	23	暗褐色土		
P59	C3	30	27	13	暗褐色土	x	
P60	C3	36	36	44	暗褐色土	x	
P61	C3	23	22	25	暗褐色土		
P62	C3	26	24	37	暗褐色土	x	
P63	C3	33	29	51	暗褐色土		
P64	C3	56	48	14	暗褐色土		
P65	C3	27	25	18	暗褐色土	x	
P66	C3	30	29	35	暗褐色土		
P67	C3	31	15	13	暗褐色土	x	
P68	C3	33	31	57	暗褐色土	x	
P69	C3	68	41	11	暗褐色土	x	
P70	C3	29	25	41	暗褐色土		
P71	C3	33	33	44	暗褐色土		
P72	C3	31	29	37	暗褐色土	x	
P73	C3	39	38	30	暗褐色土	x	
P74	C7	36	33	37	暗褐色土	x	(旧P510)
P75	C3	20	20	24	暗褐色土	x	
P76	C3	31	26	31	暗褐色土 炭混		P97より新しい
P77	C3	34	30	48	暗褐色土	x	
P78	C3	29	23	51	暗褐色土	x	
P79	C4	27	25	25	暗褐色土		
P80	C4	35	22	16	暗褐色土	x	
P81	C4	52	45	41	暗褐色土	x	
P82	C4	39	36	22	暗褐色土		
P83	C4	29	24	41	暗褐色土	x	
P84	C3	24	23	27	暗褐色土		
P85	C4	24	22	34	暗黄褐色土	x	P84より新しい
P86	C4	23	22	34	暗褐色土		鉄滓出土
P87	C4	27	25	48	暗黄褐色土 炭混		
P88	C4	34	29	46	暗褐色土		
P89	C4	28	23	44	暗褐色土		P88より新しい
P90	C4	38	35	33	暗褐色土		
P91	C4	35	35	41	暗褐色土		P92より新しい
P92	C4	30	28	30	暗褐色土 炭混		鉄釘出土
P93	C4	28	20	44	暗褐色土 炭混	x	
P94	C4	21	18	38	暗褐色土	x	
P95	C4	21	19	20	暗褐色土	x	
P96	C4	36	33	38	暗褐色土	x	
P97	C3	29	26	23	暗褐色土	x	
P98	C4	25	24	24	暗褐色土		

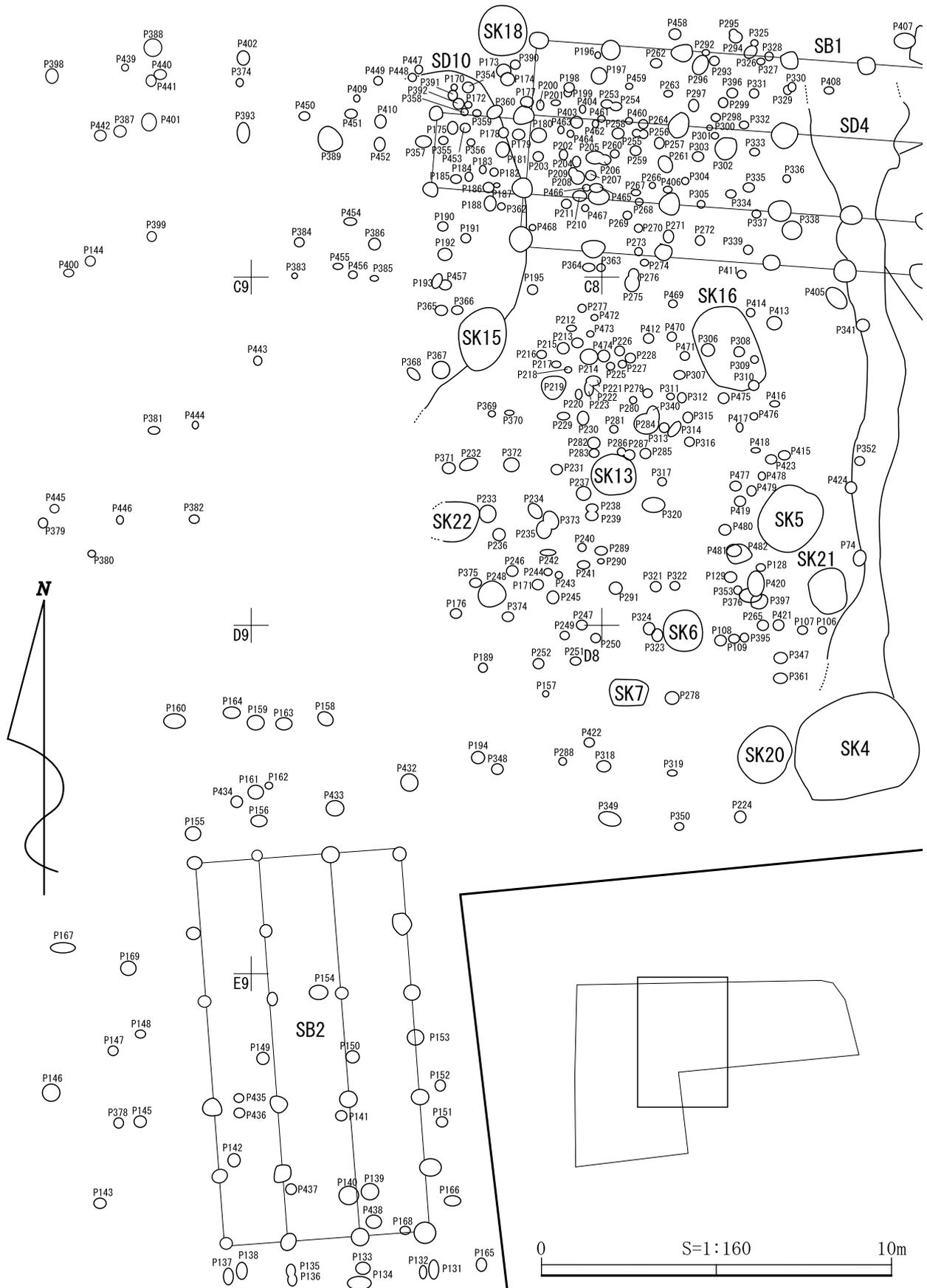
	地区	長径 cm	短径 cm	深さ cm	土色	遺物	備考
P99	C4	43	28	46	暗褐色土 炭混		
P100	D3	53	40	29	暗褐色土		
P101	D3	67	48	23	暗褐色土 砂混		
P102	D3	78	43	25	暗褐色土	x	P101より新しい
P103	D3	32	24	27	暗褐色土	x	
P104	D4	42	37	31	暗褐色土		赤碇T3内
P105	D4	23	22	20	暗褐色土	x	赤碇T3内
P106	D7	18	18	24	褐色土 炭混	x	(旧P488)
P107	D7	18	16	13	暗褐色土	x	(旧P489)
P108	D7	24	22	13	褐色土	x	(旧P490)
P109	D7	33	28	20	褐色土	x	(旧P491)
P110	C5	53	50	40	-		SD2より新しい
P111	C5	50	42	45	-		SD2より新しい
P112	D5	33	30	45	暗褐色土 砂混	x	SD2より新しい
P113	C5	90	75	30	暗褐色土		
P114	B6	34	-	47	暗褐色土 礫砂混		
P115	B6	45	36	15	暗褐色土		
P116	B6	48	38	25	暗灰褐色土		
P117	B6	39	35	18	暗灰褐色土 砂混		
P118	B6	20	-	15	暗褐色土	x	
P119	B6	18	-	8	暗黄褐色土	x	
P120	B6	50	40	25	暗褐色土		
P121	B6	25	-	32	暗褐色土	x	
P122	B6	35	35	33	-		
P123	B6	45	44	22	暗褐色土	x	
P124	B6	24	22	24	暗灰褐色土	x	
P125	B6	21	18	20	暗褐色土	x	
P126	B6	30	25	13	暗褐色土	x	
P127	B6	60	-	7	灰褐色土 粘質土		
P128	C7	19	18	18	褐色土	x	(旧P483)
P129	C7	40	36	32	暗褐色土 炭混	x	(旧P484)
P130	B6	57	60	9	灰褐色土		橙褐色ブロック・炭化物多く混在 方形ピット
P131	E8	40	28	25	暗黄灰褐色土		P132より新しい
P132	E8	30	25	20	暗灰褐色土	x	P131より古い
P133	E8	40	30	30	暗黄灰褐色土		P134より新しい
P134	E8	45	30	28	暗灰褐色土	x	P133より古い
P135	E8	40	26	27	暗黄灰褐色土	x	P136より新しい
P136	E8	33	30	30	暗褐色土		P135より古い
P137	E9	35	30	30	暗黄灰褐色土		
P138	E9	45	30	20	暗黄灰褐色土/ 暗灰色土		攪乱か
P139	E8	50	40	20	暗黄灰褐色土		
P140	E8	46	40	20	暗黄灰褐色土		
P141	E8	25	25	10	暗黄灰褐色土	x	
P142	E9	25	25	14	暗黄灰褐色土		
P143	E9	30	25	15	暗黄灰褐色土	x	
P144	B9	34	30	21	暗灰褐色土	x	(旧P508)
P145	E9	30	30	40	-		柱痕
P146	E9	40	40	20	暗黄灰褐色土		
P147	E9	33	25	28	-	x	柱痕
P148	E9	25	25	35	-		柱痕
P149	E8	30	30	17	暗灰褐色土	x	
P150	E8	29	27	10	暗灰褐色土	x	
P151	E8	30	23	6	暗黄灰褐色土	x	
P152	E8	33	30	8	暗黄灰褐色土	x	
P153	E8	30	27	10	暗黄灰褐色土	x	
P154	E8	35	28	7	暗黄灰褐色土		
P155	D9	35	28	12	暗灰褐色土	x	
P156	D8	42	38	9	暗灰褐色土	x	礎盤石か
P157	D8	23	22	14	暗褐色土	x	(旧P509)
P158	D8	42	40	3	暗灰褐色土	x	
P159	D8	28	28	36	暗灰褐色土		柱穴か
P160	D9	42	37	6	暗褐色土		
P161	D8	35	33	26	-	x	柱痕
P162	D8	30	28	13	-		柱痕
P163	D8	32	31	2	暗褐色土	x	
P164	D9	42	42	16	暗褐色土		
P165	E8	38	27	15	暗黄灰褐色土	x	
P166	E8	40	30	15	暗黄灰褐色土	x	
P167	D9	35	35	28	暗黄灰褐色土	x	
P168	E8	22	22	5	暗黄灰褐色土		
P169	D9	25	28	10	暗褐色土	x	
P170	B8	30	30	20	暗褐色土 礫混		
P171	C8	27	25	26	暗褐色土	x	(旧P495)
P172	B8	22	22	23	暗灰褐色土 炭混		
P173	B8	40	35	18	暗褐色土 黄褐色ブロック	x	P174より古い
P174	B8	35	35	30	暗灰褐色土 炭少量混	x	P173より新しい
P175	B8	37	27	16	暗灰褐色土 黄褐色ブロック・炭混	x	
P176	C8	25	22	15	褐色土 炭混	x	(旧P496)
P177	B8	35	35	33	暗灰褐色土 炭混		
P178	B8	25	23	31	暗褐色土 明褐色ブロック・炭混		鉄滓出土
P179	B8	35	30	10	暗灰褐色土		
P180	B8	48	37	15	暗褐色土 橙褐色ブロック・炭混		
P181	B8	45	40	25	暗灰褐色土 暗黄灰褐色土		柱穴か
P182	B8	22	22	35	暗褐色土 橙褐色ブロック・炭少量混		

	地区	長径 cm	短径 cm	深さ cm	土色	遺物	備考
P183	B8	17	17	10	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・炭少量混	x	
P184	B8	27	25	17	暗灰褐色土	x	
P185	B8	27	25	15	暗黄灰褐色土		
P186	B8	29	26	26	暗褐色土	x	攪乱著しい
P187	B8	17	17	18	暗黄灰褐色土		
P188	B8	30	30	22	暗黄灰褐色土	x	
P189	D8	25	23	16	暗褐色土 炭混	x	(旧P497)
P190	B8	26	26	18	暗褐色土 炭少量混	x	
P191	B8	25	25	15	暗褐色土 明褐色ブロック・炭混		
P192	B8	40	40	28	暗褐色土 橙褐色ブロック・炭・人頭大礫混		
P193	B8	48	45	45	暗褐色土 黄褐色ブロック・炭混		鉄製品出土
P194	D8	30	30	30	褐色土	x	(旧P498)
P195	C8	24	20	8	暗灰褐色土		
P196	B8	23	23	22	暗褐色土		
P197	B8	45	47	33	-		
P198	B8	28	28	25	暗灰褐色土		P199より新しい
P199	B8	25	25	20	暗褐色土		P198より古い
P200	B8	22	20	17	暗灰褐色土 褐色ブロック混	x	

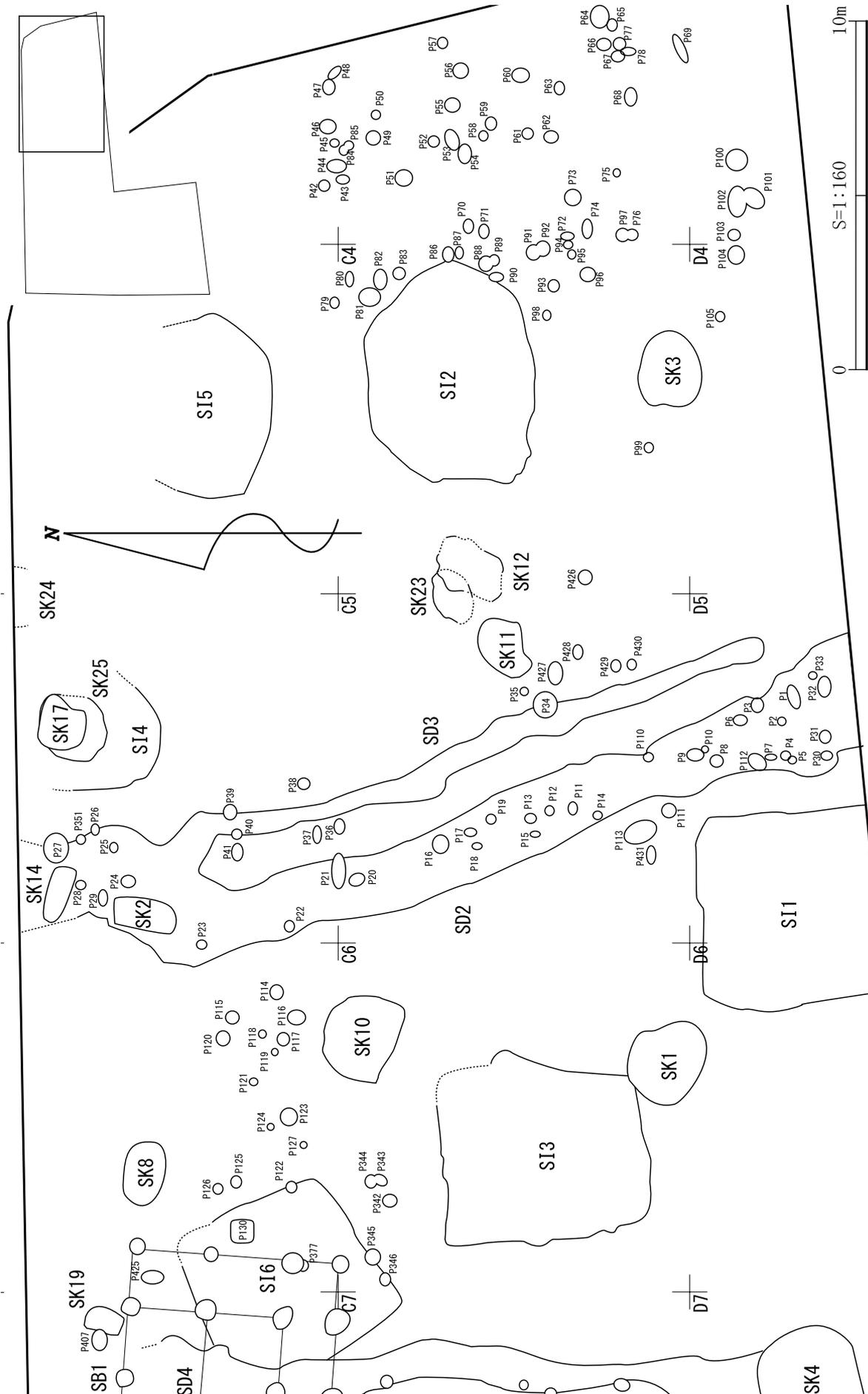
	地区	長径 cm	短径 cm	深さ cm	土色	遺物	備考
P246	C8	30	25	13	暗灰褐色土 炭混		
P247	C8	28	26	19	暗灰褐色土 炭混	x	
P248	C8	76	73	10	灰褐色土粘質土		
P249	D8	25	23	14	暗灰褐色土		
P250	D8	26	24	20	暗褐色土		
P251	D8	30	26	12	暗褐色土		
P252	D8	23	23	27	暗褐色土		
P253	B7	22	19	30	暗灰褐色土 明褐色ブロック混		P254より新しい
P254	B7	30	24	25	暗褐色土		P253より古い
P255	B7	21	21	23	暗褐色土		
P256	B7	27	24	15	暗灰褐色土 明褐色ブロック・ 炭混		
P257	B7	35	31	10	暗灰褐色土		
P258	B7	30	28	20	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		石廂丁出土
P259	B7	24	24	34	褐色土 明褐色ブロック・ 炭混		
P260	B7	34	30	20	暗褐色土		
P261	B7	50	40	38	暗灰褐色土 褐色ブロック・ 橙褐色ブロック・ 炭混		
P262	B7	28	26	22	暗灰褐色土 暗灰褐色土		
P263	B7	26	22	25	明褐色ブロック・ 炭混		
P264	B7	27	24	21	褐色土		
P265	D7	25	20	40	暗灰褐色土	x	(旧P506)
P266	B7	15	14	15	暗褐色土	x	
P267	B7	26	26	27	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭多量混		
P268	B7	25	23	32	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭多量混	x	
P269	B7	26	21	9	暗灰褐色土		
P270	B7	20	20	16	暗褐色土(密)	x	
P271	B7	24	24	35	暗褐色土		
P272	B7	23	19	10	暗褐色土		
P273	B7	25	25	38	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		
P274	B7	26	24	30	暗褐色土 炭混	x	
P275	C7	45	45	8	暗黄灰褐色土 黄褐色ブロック・ 炭混	x	P276より新しい
P276	B7	37	36	13	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		P275より古い
P277	C8	50	40	55	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 多量混		
P278	D7	35	32	14	暗褐色土	x	(旧P507)
P279	C7	25	20	20	暗褐色土		
P280	C7	20	18	12	暗褐色土 炭混		
P281	C7	20	20	22	暗褐色土	x	
P282	C8	26	24	35	暗褐色土		
P283	C8	27	20	45	暗褐色土 黄褐色ブロック・ 炭混		
P284	C7	60	60	50	暗褐色土		P340より古い
P285	C7	30	29	12	暗褐色土 炭少量混		
P286	C7	24	20	30	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		P287より新しい
P287	C7	30	30	15	暗灰褐色土		P286より古い
P288	D8	20	19	14	暗褐色土	x	(旧P500)
P289	C8	30	25	26	暗黄灰褐色土 炭混		
P290	C8	21	21	10	暗褐色土	x	
P291	C7	33	33	30	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭多量混		
P292	B7	17	17	15	暗褐色土	x	
P293	B7	25	23	20	暗灰褐色土	x	
P294	B7	24	20	18	暗褐色土	x	P295より新しい
P295	B7	30	25	45	暗褐色土 炭混		P294より古い
P296	B7	56	47	-	-		柱痕
P297	B7	29	25	14	暗灰褐色土		
P298	B7	40	34	22	暗褐色土(密)		
P299	B7	22	20	12	暗灰褐色土(粗)		
P300	B7	14	14	15	暗灰褐色土	x	
P301	B7	29	27	35	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭多量混		
P302	B7	72	67	13	暗褐色土	x	
P303	B7	28	26	39	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭多量混		
P304	B7	17	13	13	暗褐色土(粗)	x	
P305	B7	27	25	23	暗灰褐色土 褐色ブロック・ 炭混		
P306	C7	36	32	24	暗黄灰褐色土	x	
P307	C7	31	30	45	暗灰褐色土		
P308	C7	28	28	15	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭少量混		

	地区	長径 cm	短径 cm	深さ cm	土色	遺物	備考
P309	C7	20	20	8	暗灰褐色土 暗褐色ブロック混		
P310	C7	25	25	10	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		
P311	C7	23	23	20	暗褐色土		
P312	C7	28	27	22	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		
P313	C7	24	21	11	暗灰色土	x	
P314	C7	54	24	8	灰褐色土粘質土	x	
P315	C7	37	34	15	暗褐色土		
P316	C7	25	25	18	暗褐色土 炭混		
P317	C7	23	23	37	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		
P318	D7	35	33	32	暗褐色土	x	(旧P501)
P319	D7	26	23	20	暗褐色土 橙褐色粒混	x	(旧P502)
P320	C7	33	22	13	暗褐色土		
P321	C7	32	29	12	暗褐色土(密)		
P322	C7	24	24	28	暗灰褐色土		
P323	D7	24	31	16	暗褐色土		
P324	D7	31	32	47	暗褐色土		
P325	B7	32	19	7	暗褐色土(密)		
P326	B7	29	27	21	暗褐色土(粗)		
P327	B7	20	20	12	暗褐色土(密)	x	
P328	B7	27	26	23	暗褐色土(粗)		
P329	B7	22	21	18	暗灰褐色土		P330より新しい
P330	B7	24	22	17	暗褐色土	x	P329より古い
P331	B7	27	27	20	暗灰褐色土		
P332	B7	29	27	45	暗黄灰褐色土 炭混		鉄釘出土
P333	B7	27	27	26	暗褐色土 炭混		
P334	B7	27	25	25	灰褐色土 炭多量混 暗褐色土		
P335	B7	28	26	23	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭少量混		
P336	B7	24	21	16	暗褐色土		
P337	B7	22	20	26	暗褐色土 炭混	x	
P338	B7	48	42	10	暗褐色土		
P339	B7	30	25	33	暗灰褐色土 炭混		鉄滓出土
P340	C7	40	40	20	暗灰褐色土 炭混		P284より新しい
P341	C7	36	36	41	暗灰褐色土		
P342	C6	31	26	26	暗灰褐色土 橙褐色ブロック・ 炭少量混		
P343	C6	40	40	16	暗灰褐色土		P344より古い
P344	C6	34	31	20	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		P343より新しい
P345	C6	36	32	25	暗黄灰褐色土		
P346	C6	44	35	21	暗褐色土 暗褐色ブロック混		
P347	D7	32	28	39	暗褐色土	x	(旧P494)
P348	D8	32	28	31	暗灰褐色土	x	(旧P499)
P349	D7	50	34	32	暗褐色土 炭混	x	(旧P503)
P350	D7	27	26	13	暗褐色土 炭混	x	(旧P504)
P351	B5	35	32	38	暗褐色土・砂混		
P352	C7	24	24	45	暗黄褐色土		
P353	C7	20	20	17	暗灰褐色土 炭混	x	(旧P485)
P354	B8	30	27	22	暗褐色土		
P355	B8	30	29	25	暗褐色土	x	
P356	B8	26	26	25	暗褐色土	x	
P357	B8	46	30	42	暗褐色土	x	
P358	B8	20	17	20	暗褐色土	x	
P359	B8	25	23	13	暗褐色土		
P360	B8	30	30	13	暗褐色土		
P361	D7	40	29	33	暗褐色土	x	(旧P492)
P362	B8	22	15	27	暗褐色土	x	
P363	B8	23	23	28	暗褐色土		
P364	B8	39	30	46	暗褐色土		
P365	C8	32	32	20	暗褐色土	x	
P366	C8	30	28	48	褐色土	x	
P367	C8	48	40	23	暗褐色土		
P368	C8	34	25	27	暗褐色土	x	
P369	C8	23	23	20	褐色土	x	
P370	C8	22	22	11	黄褐色土		攪乱か
P371	C8	37	34	52	暗褐色土		
P372	C8	45	40	26	褐色土	x	
P373	C8	42	36	47	暗褐色土		
P374	C8	29	26	16	褐色土		
P375	C8	25	25	36	暗褐色土		
P376	C7	70	30	12	暗褐色土 炭混	x	(旧P486)
P377	B6	40	28	51	-		
P378	E9	27	26	44	-		
P379	C9	38	32	40	暗灰褐色土 炭混		
P380	C9	25	24	14	褐色土		
P381	C9	28	26	23	褐色土 炭混 暗黄褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		
P382	C9	33	31	38	暗黄褐色土 暗黄褐色土 暗褐色土		
P383	B8	24	23	26	暗黄褐色土		
P384	B8	35	30	30	暗黄褐色土		
P385	B8	25	25	35	暗黄褐色土 暗黄褐色土		
P386	B8	45	36	47	暗褐色土 橙褐色ブロック・ 炭混		
P387	B9	35	32	33	暗灰褐色土		
P388	B9	45	44	42	褐色土		

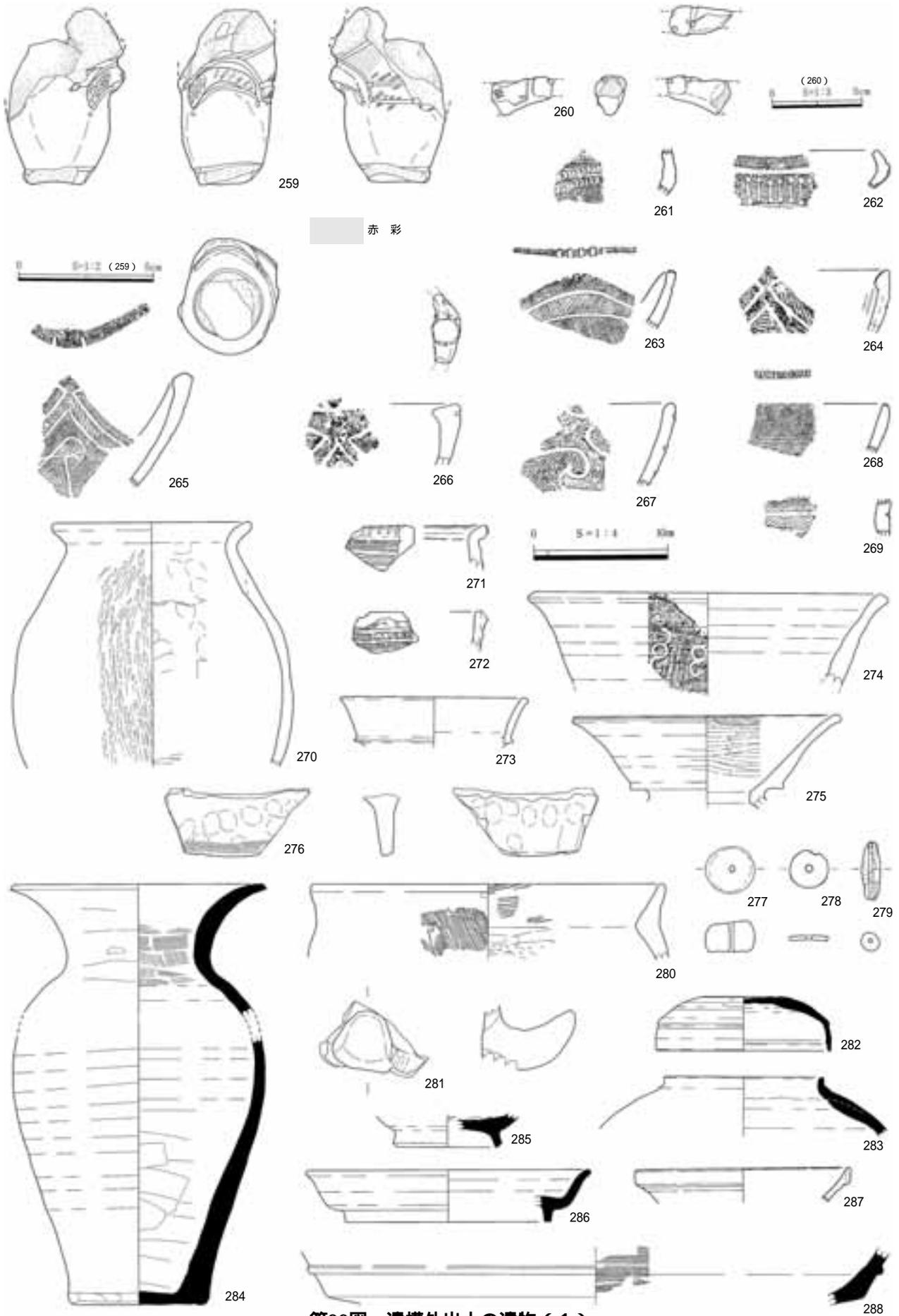
	地区	長径 cm	短径 cm	深さ cm	土色	遺物	備考
P389	B8	77	60	40	褐色土(粗)		
P390	B8	25	24	25	暗灰褐色土	x	
P391	B8	30	30	32	褐色土		
P392	B8	31	31	40	暗灰褐色土 橙褐色粒混	x	
P393	B9	53	40	48	暗褐色土(粗)		
P394	B8	28	26	43	褐色土	x	
P395	D7	27	25	23	暗褐色土	x	(旧P493)
P396	B7	23	20	24	暗褐色土		
P397	C7	40	39	60	暗褐色土	x	(旧P487)
P398	B9	36	34	17	暗褐色土		
P399	B9	24	23	12	褐色土		
P400	B9	29	26	26	褐色土		
P401	B9	36	30	30	暗褐色土		
P402	B9	42	40	70	褐色土		
P403	B8	36	32	56	暗褐色土 炭混		
P404	B8	30	28	24	暗褐色土		
P405	C7	61	38	20	黄灰褐色土		
P406	B7	26	23	28	-	x	
P407	B7	60	57	50	暗褐色土		
P408	B7	28	28	14	褐色土		
P409	B8	28	23	12	褐色土 鉄分混		
P410	B8	37	30	18	褐色土		
P411	C7	34	24	49	暗褐色土 炭混		
P412	C7	37	37	45	褐色土 橙褐色粒混		
P413	C7	38	36	40	暗灰褐色土		
P414	C7	29	28	50	暗褐色土 炭混		
P415	C7	25	25	31	褐色土		
P416	C7	25	24	13	暗灰褐色土		
P417	C7	28	25	30	暗褐色土 炭混		
P418	C7	23	23	26	褐色土		
P419	C7	32	30	44	暗褐色土		
P420	C7	73	50	24	暗褐色土 炭混		
P421	D7	34	28	45	暗灰褐色土 炭混	x	
P422	D8	25	23	21	暗褐色土	x	
P423	C7	35	34	40	-	x	
P424	C7	45	45	37	-	x	柱痕
P425	B6	72	50	20	-	x	
P426	C4	30	28	40	暗褐色土	x	
P427	C5	40	37	36	褐色土 砂混	x	
P428	C5	30	29	40	暗褐色土	x	
P429	C5	26	24	27	暗褐色土	x	
P430	C5	20	19	36	暗褐色土	x	
P431	C5	60	52	26	暗褐色土 鉄多量混	x	
P432	D8	39	33	18	暗褐色土	x	
P433	D8	44	36	20	褐色土	x	
P434	D8	26	24	10	褐色土	x	
P435	E8	28	20	13	褐色土	x	
P436	E8	23	20	15	褐色土	x	
P437	E8	26	26	10	褐色土	x	
P438	E8	32	30	20	暗褐色土	x	
P439	B9	18	16	18	暗褐色土	x	
P440	B9	29	29	25	暗黄褐色土	x	
P441	B9	26	22	21	暗灰褐色土	x	
P442	B9	38	35	20	暗灰褐色土	x	
P443	C8	30	28	24	暗褐色土	x	
P444	C9	20	17	12	暗褐色土	x	
P445	C9	33	24	17	暗褐色土	x	



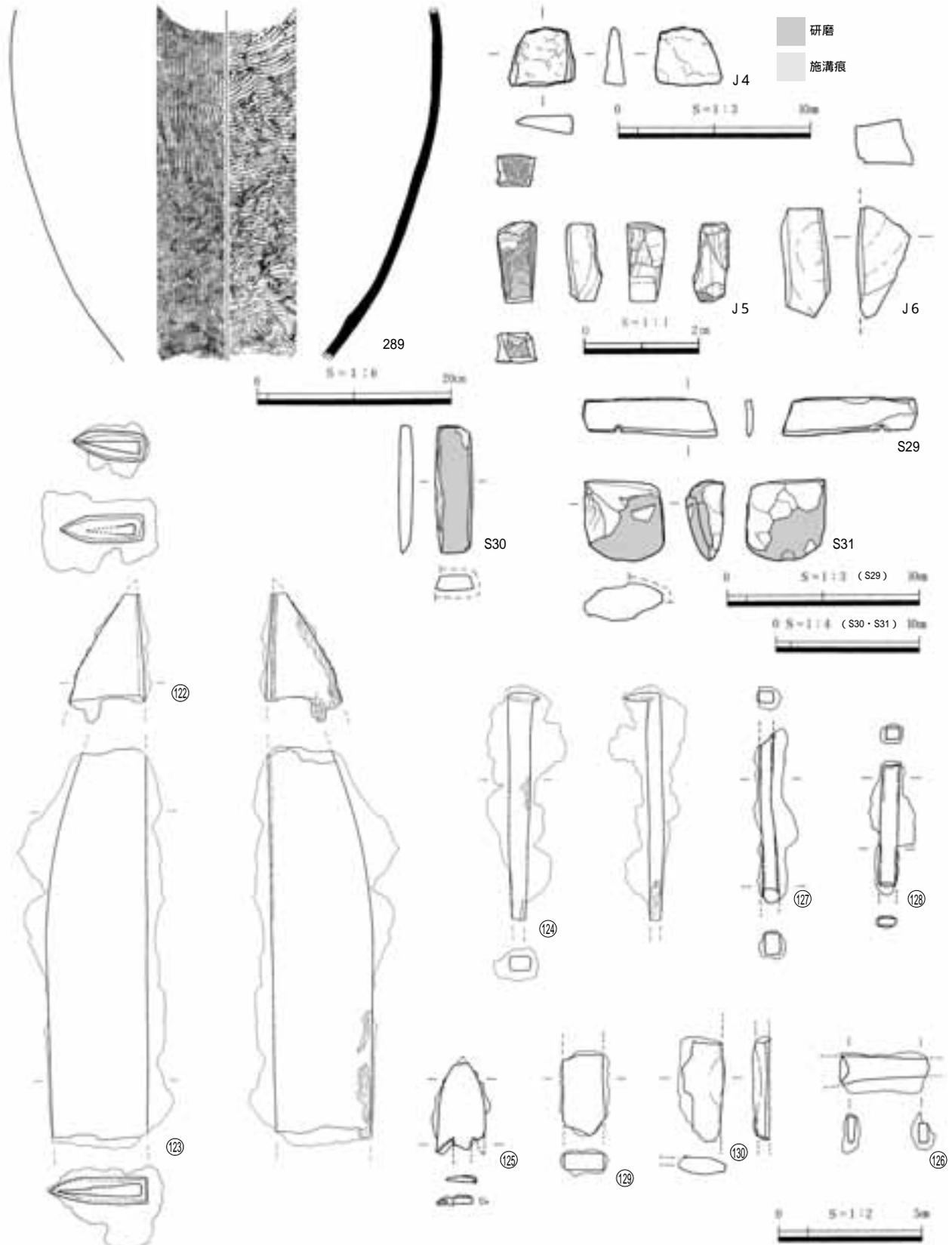
第84図 ビット分布図(1)



第85図 ビット分布図(2)



第86図 遺構外出土の遺物(1)



第87図 遺構外出土の遺物(2)

第7節 遺構外出土の遺物(第86・87図、PL37・39・40・41・42)

表土、包含層、攪乱土からも膨大な量の遺物が出土した。これらの中から各時期の特徴を示すものを選別して第86・87図に図示した。ただし、須恵器壺284、須恵器甕289など遺存度の高い個体については、本来は遺構に伴っていた可能性もある。

注目されるのは、C5グリッド表土から出土した土偶の脚部片259である。形態的な特徴は、東海地方を中心に分布する「今朝平タイプ」の土偶に類似する。土製品260は縄文が施されていることから縄文時代の遺物と考えられるが、部位や器種は不明である。

古墳時代前期の遺物として、甕273、鼓形器台274、275を図示した。ただし、古墳時代前期・中期の遺物は、他の時期と比較すると非常に少ない。

土器以外では、石器、鉄製品の他に玉作関連遺物が出土している。J4はC5グリッド表土出土の翡翠の原石である。縁辺部に施溝痕が認められ、勾玉の未成品である可能性が考えられる。翡翠原石は同グリッド表土からもう1点出土しており、それについて蛍光X線分析を行った結果、糸魚川産と判定された（第4章第4節参照）。（君嶋）

第8節 鉄関連遺物（第88～95図、第9・10表、PL.45～57）

今回の調査では、鉄滓、鉄塊系遺物、炉壁、鉄製品、羽口など鉄生産に関連する遺物が約600点、重量にして約98kgが出土した。これら鉄関連遺物について、出土遺構および種類毎の点数と重量を「鉄関連遺物集計表」（第9表）にまとめた。また、鉄製品の全点、および鉄製品以外の遺物のうち代表的なものを「鉄関連遺物構成図」として図示した（第88～90図）。構成図に掲載した143点の遺物については観察表を作成した（第10表）。

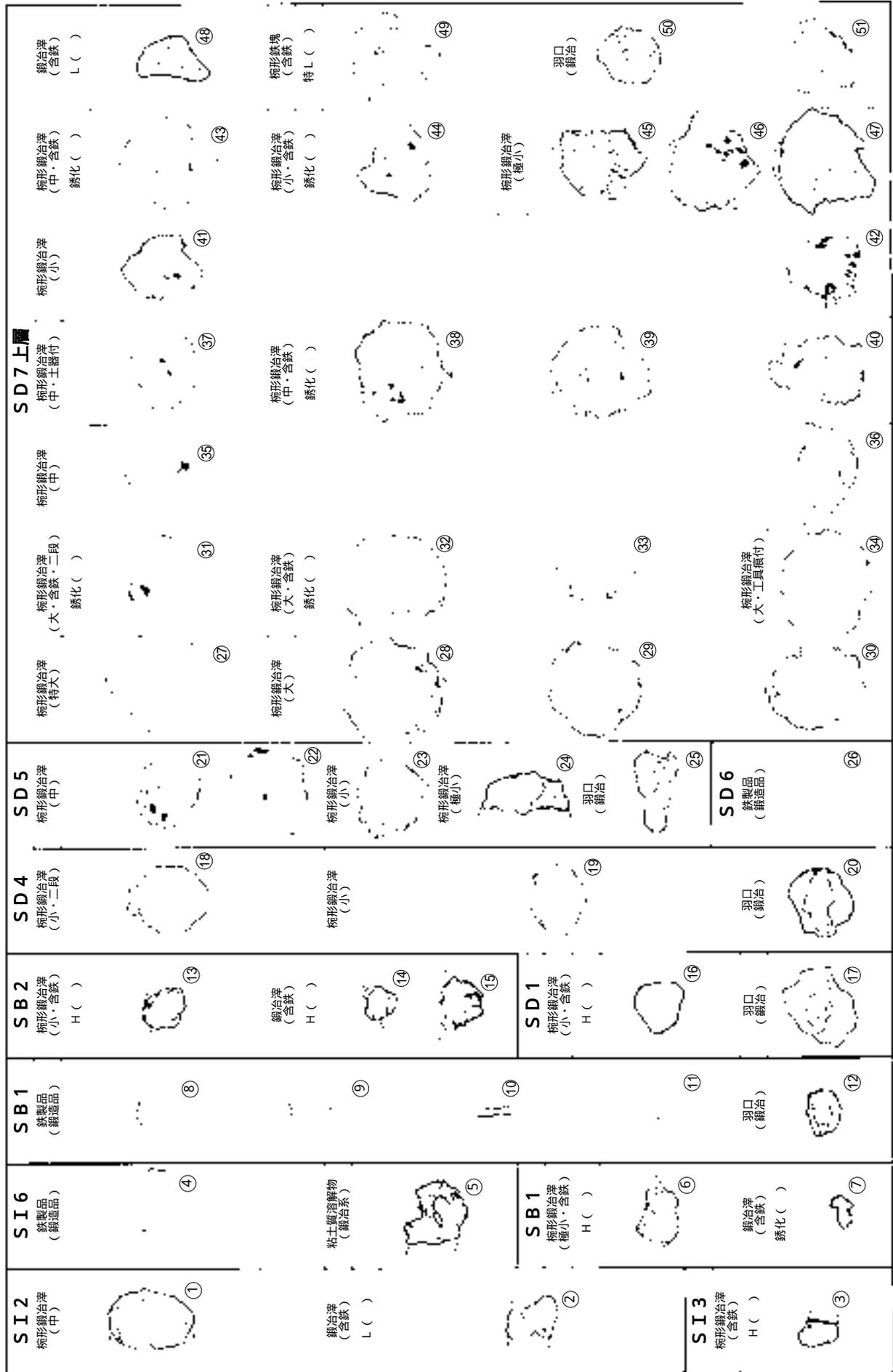
鉄製品の実測図は各出土遺構の項に示したが、鉄滓、鉄塊系遺物、羽口など鉄製品以外の実測図については、本節にまとめて掲載している（第91～95図）。また、今回は諸般の事情から金属学的分析を行えなかったが、将来分析を行う機会に備えて、分析対象候補試料を13点抽出し、「仮分析」を付した^註。

これらの時期については、遺物自体の特徴および出土遺構から判断すると中世初頭（12～13世紀）を中心とし、一部に7世紀代まで遡るものを含むと考えられる。また、表土中など遺構外から出土した鉄製品の中には、中世以降の新しい時期の遺物が混入している可能性もある。

遺構別にみると、最も多量の遺物が出土したのは12世紀代の溝であるSD7である。遺物は埋土の上層、中層、下層に分けて取り上げたが、各層位間で特に組成の差は認められない。ただし、これを掘立柱建物跡や土坑出土の遺物と比較すると、その組成に大きな違いがある。すなわち、SD7出土遺物のほとんどが椀形鍛冶滓で占められるのに対し、その他の遺構では鉄製品や鍛冶滓、鉄塊系遺物が多い。このことから、大型や中型の椀形鍛冶滓のみが選別されてSD7に廃棄されたことが推定され、本遺跡での鉄生産が組織的に行われていたことが窺える。また、今回の調査では鍛冶炉等の遺構は検出されていないが、SD7での出土位置が東端寄りに集中していることから、2区南側の調査区外に鍛冶炉が存在する可能性が極めて高いものと想定される。

出土した鍛冶滓については、表面観察のみの所見であるが、特大や大型の椀形鍛冶滓については精錬鍛冶工程の所産と考えられよう。一方で、羽口や炉壁をも含めて、製錬工程と評価できるものは見出せない。SD7出土の椀形鍛冶滓には含鉄のものが少なく、ある程度熟練した工人が生産に関わったと考えられる。また、鍛冶滓の大きさや形状は多様であり、二段椀形鍛冶滓も出土していることから、複数の鍛冶炉が存在したこと、複数回の作業が行われたことが窺える。（君嶋）

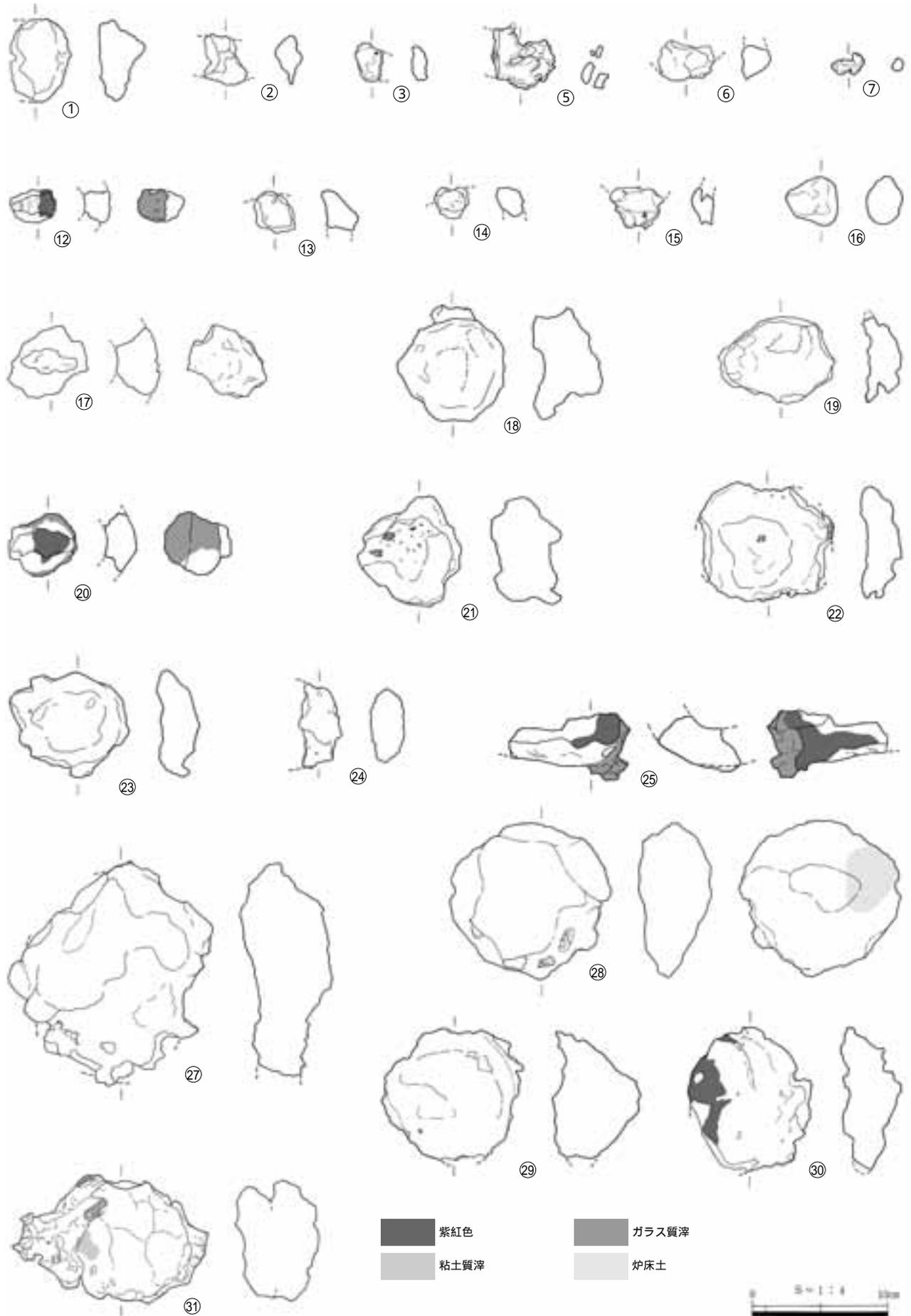
【註】鉄関連遺物の整理は、穴澤義功氏の指導の下、君嶋、西川、山根が行った。なお、本節を含め鉄関連遺物についての記述は穴澤氏の御教示に多くを負っているが、理解に誤りがある場合の責任は筆者らにある。



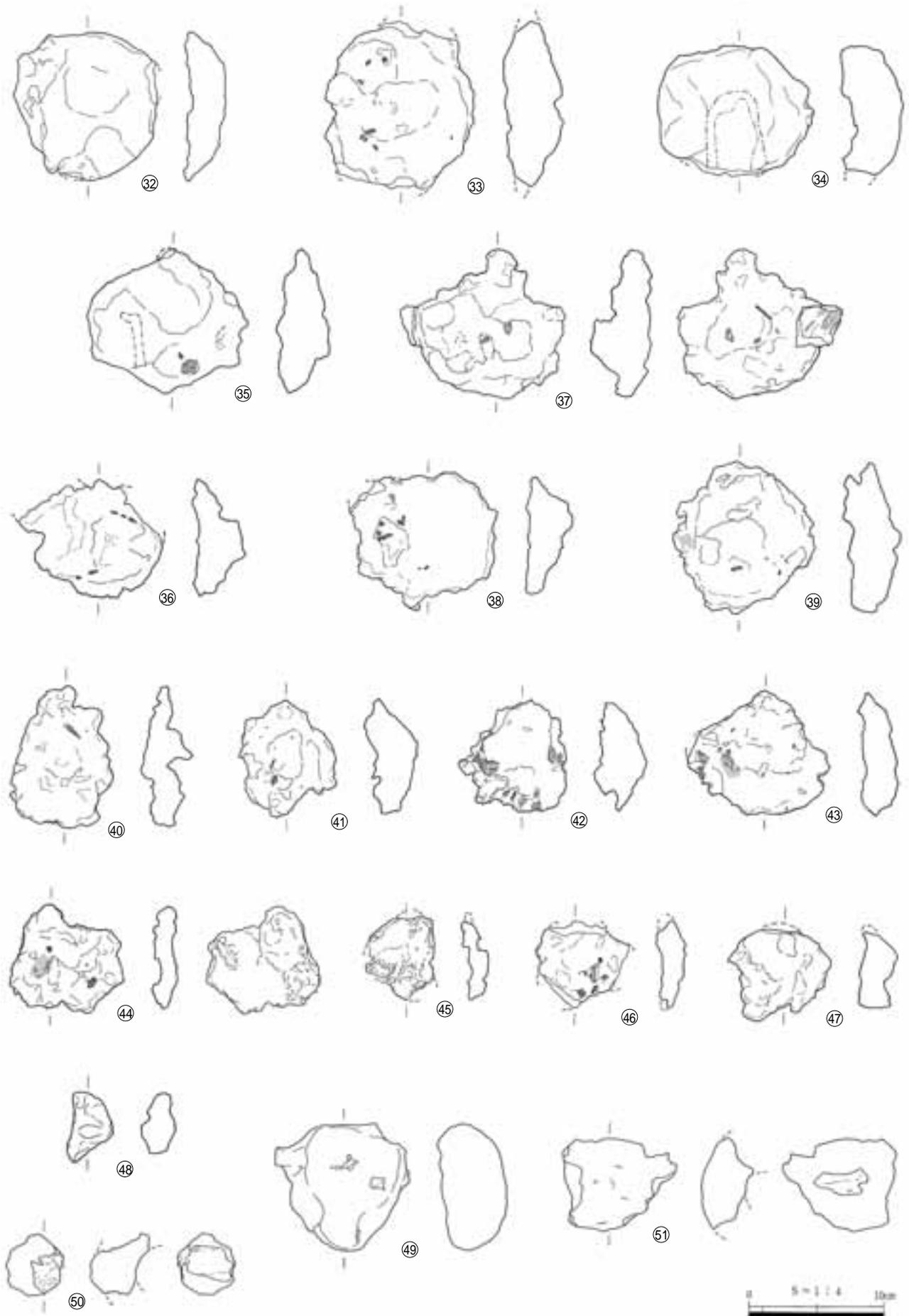
第88図 鉄関連遺物構成図(1)

<p>SK 2 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>90</p> <p>91</p> <p>92</p> <p>93</p> <p>94</p> <p>95</p> <p>96</p>	<p>SK 6 鍛冶滓</p> <p>97</p>	<p>SK 9 楕形鍛冶滓 (小・含鉄) 錆化()</p> <p>98</p> <p>楕形鍛冶滓 (極小・含鉄) 錆化()</p> <p>99</p>	<p>SK 13 楕形鍛冶滓 (小・含鉄) 錆化()</p> <p>100</p> <p>鍛冶滓 (含鉄) 錆化()</p> <p>101</p>	<p>楕形鍛冶滓 (大)</p> <p>102</p> <p>楕形鍛冶滓 (中)</p> <p>103</p> <p>楕形鍛冶滓 (小)</p> <p>104</p> <p>楕形鍛冶滓 (小・含鉄) 錆化()</p> <p>105</p> <p>楕形鍛冶滓 (極小・含鉄) H()</p> <p>106</p> <p>楕形鍛冶滓 (中・含鉄) H()</p> <p>107</p> <p>楕形鍛冶滓 (極小・含鉄) L()</p> <p>108</p>	<p>グリッド一括</p> <p>楕形鍛冶滓 (含鉄) H()</p> <p>109</p> <p>鉄塊系遺物 H()</p> <p>110</p> <p>鉄塊系遺物 L()</p> <p>111</p>	<p>鉄製品 (鍛造品)</p> <p>112</p> <p>113</p> <p>114</p> <p>115</p> <p>116</p> <p>117</p> <p>118</p> <p>119</p> <p>120</p> <p>121</p> <p>122</p> <p>123</p> <p>124</p> <p>125</p> <p>126</p> <p>127</p> <p>128</p> <p>129</p> <p>130</p>	<p>P 86 楕形鍛冶滓 (中・含鉄) 錆化()</p> <p>131</p> <p>P 92 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>132</p> <p>133</p> <p>P 193 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>134</p> <p>P 198 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>135</p>	<p>P 221 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>136</p> <p>P 226 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>137</p> <p>P 230 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>138</p> <p>P 332 鉄製品 (鍛造品)</p> <p>139</p> <p>140</p> <p>141</p> <p>142</p> <p>143</p>
--	--------------------------------------	--	--	--	--	---	---	---

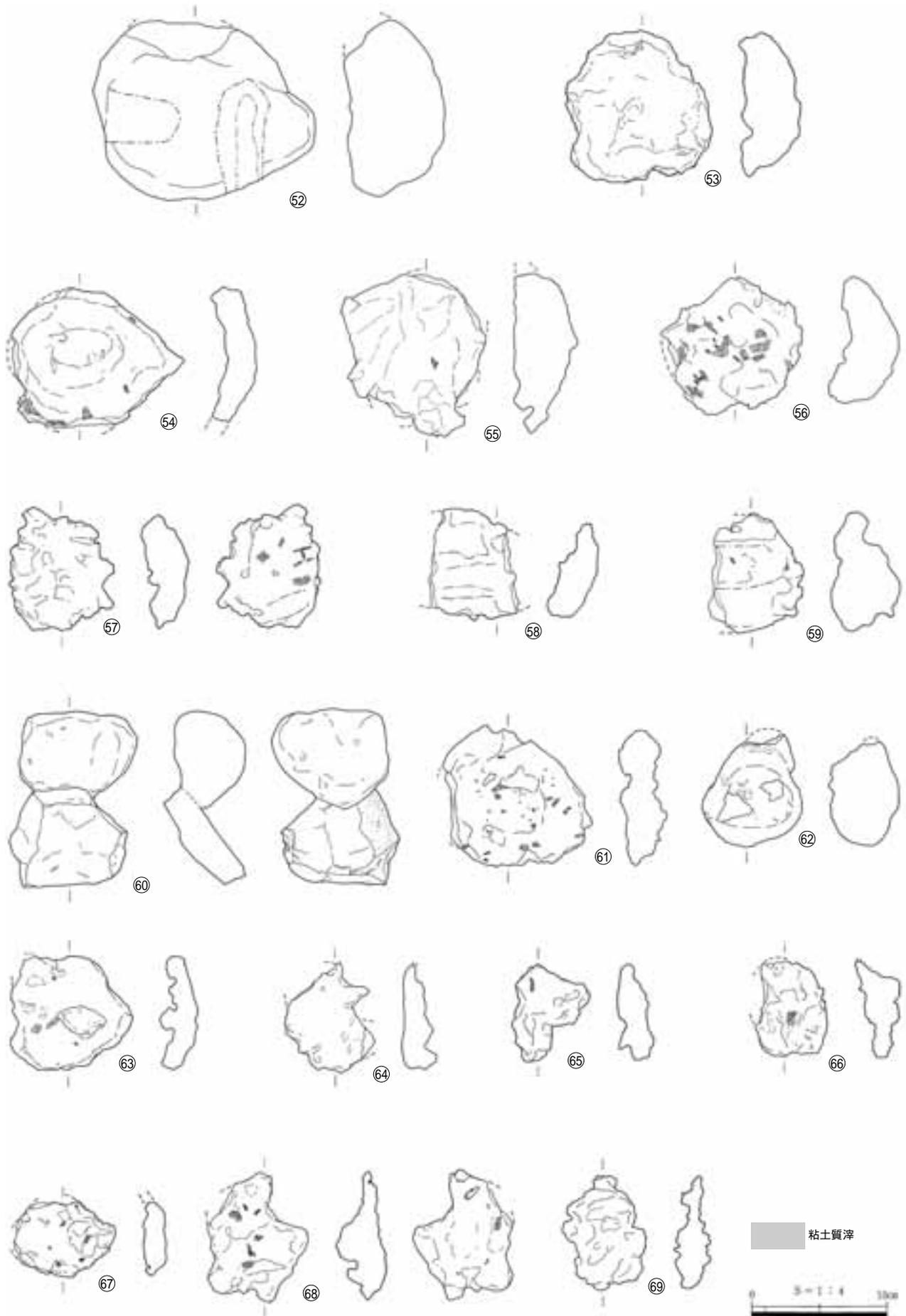
第90図 鉄関連遺物構成図(3)



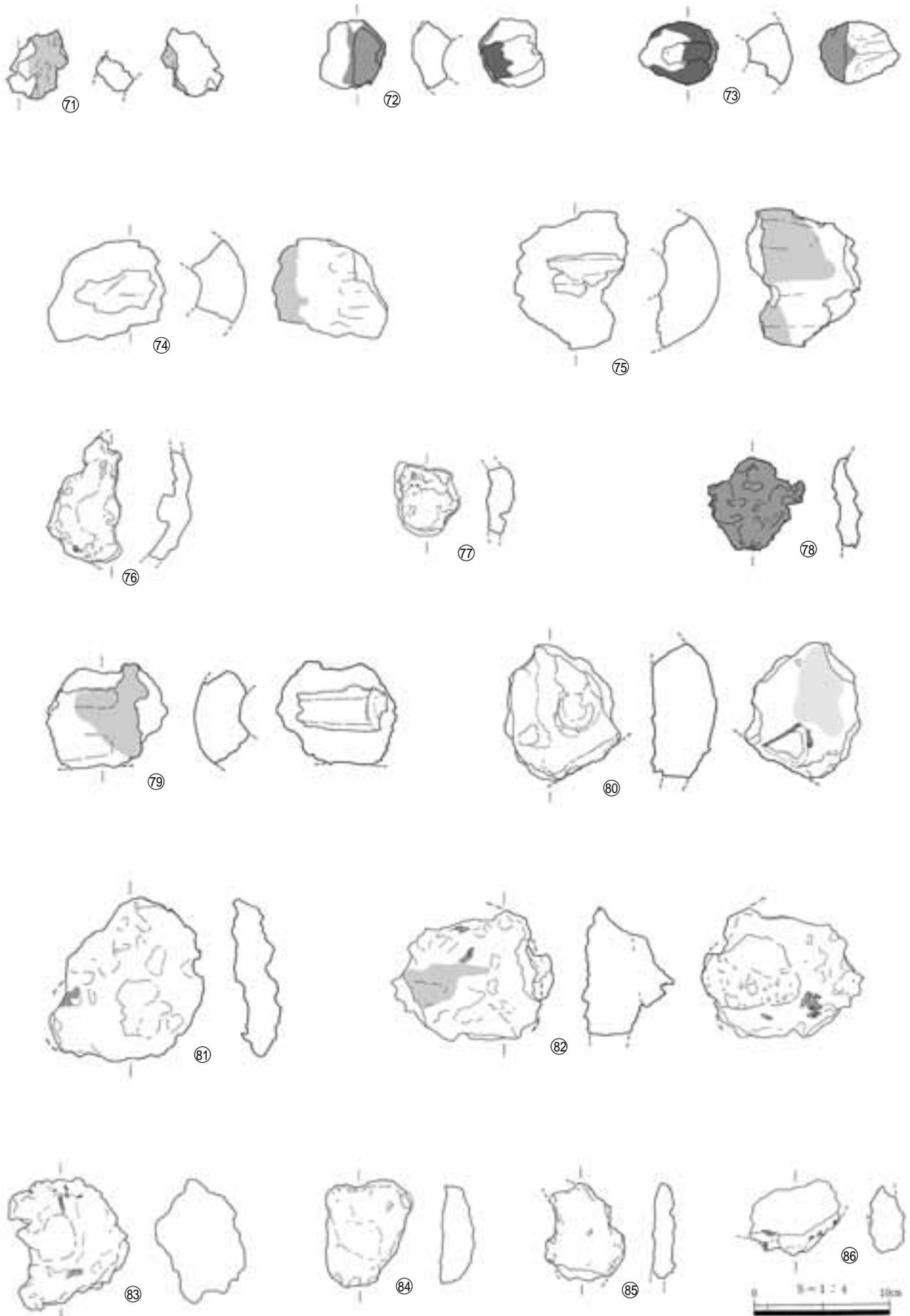
第91図 鉄関連遺物（1）



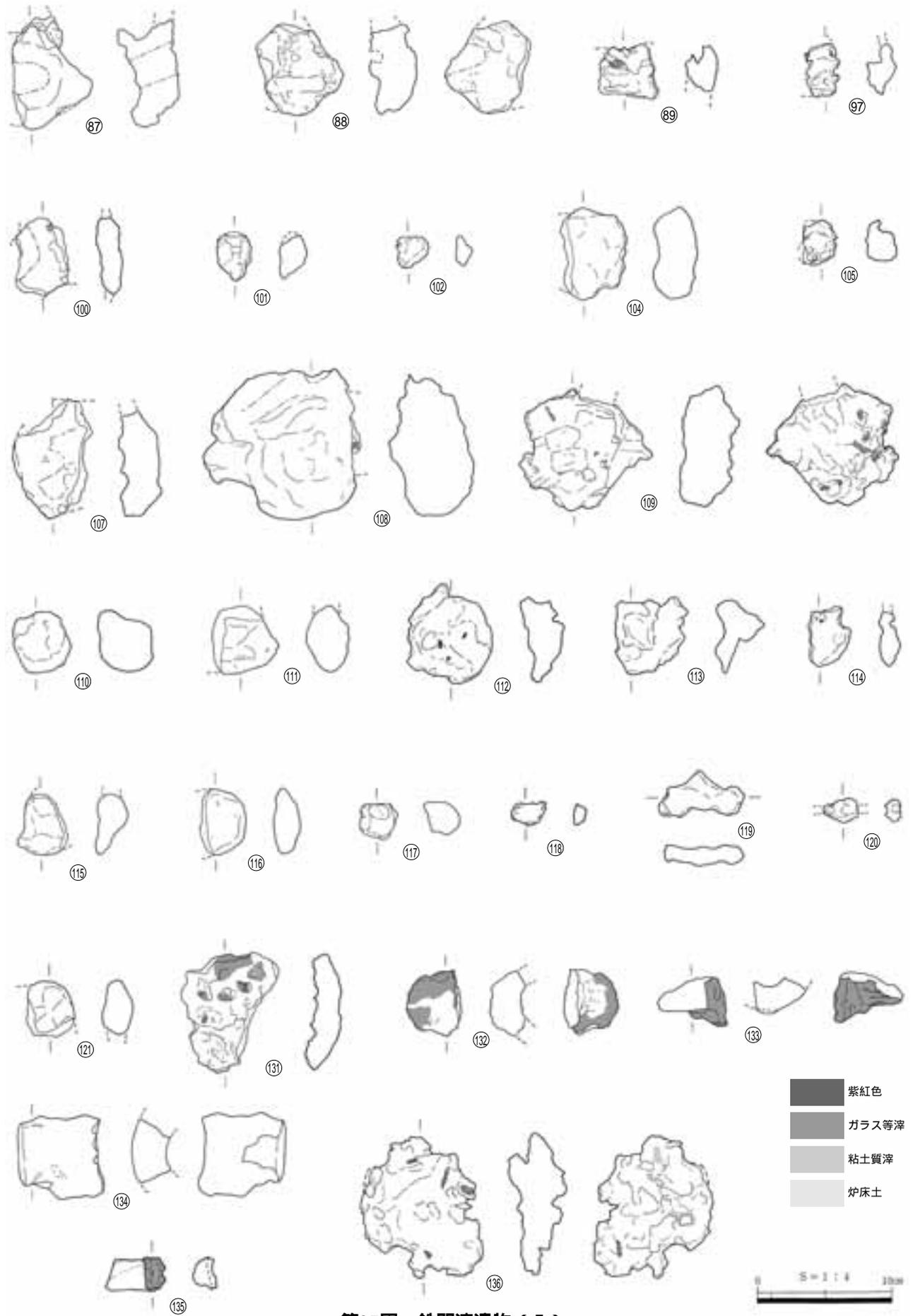
第92図 鉄関連遺物(2)



第93図 鉄関連遺物(3)



第94図 鉄関連遺物(4)



第95図 鉄関連遺物（5）

第10表 鉄関連遺物観察表

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
	椀形鍛冶滓 (中)	SI 2	4.5	6.2	3.4	116.0	2	なし	(仮・分析No.1) 中核部から側部の破片。左側面が主破面。上面は平坦で肩部は丸味を持つ。右側部から下面は椀形で、1cm大以下の木炭痕が残る。滓は上半部が緻密で中間層にやや隙間を残す。
	鍛冶滓 (含鉄)	SI 2	3.2	3.8	2.0	19.2	5	L ()	(仮・分析No.2) 平面・不整六角形をした扁平な鍛冶滓。上下面が生きており、左右の側部が破面となる。黒錆に覆われており、上下面の各所に錆びくずれが発達する。含鉄部は肥厚した中核部。下面はやや皿状となる。
	鍛冶滓 (含鉄)	SI 3	1.9	2.8	1.1	9.5	5	H ()	(仮・分析No.3) 平面・不整六角形をした扁平な鍛冶滓。小振りて上手側側部は下に向かい伸び気味となる。上下面が生きており、右側部から下手側にかけてが破面。上面には木炭痕が残り、下面はやや皿状。放射割れが生じ始めている。
	鉄製品 (鍛造品) 曲刀鎌	SI 6	1.4	2.8	0.3	59.0	4	錆化 ()	刀部の中程を欠損する。折り返し部は錆に覆われているが、一部の縦方向の木質痕を認める。
	粘土質溶解物 (鍛冶系)	SI 6	4.5	4.6	1.9	19.6	1	なし	(仮・分析No.4) 内面が滓化した粘土質溶解物。表面の色調は淡緑色から黒褐色。左側面が主破面。裏面に隙間は残るものの全体的には椀形となる。砂粒主体の鍛冶炉の炉床土が右寄りに残存する。色調は灰褐色。破面の一部は黒色ガラス質。羽口先に接した鍛冶炉の炉壁表面破片か。
	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	SB 1 P15	4.1	3.0	2.2	43.6	4	H ()	(仮・分析No.5) 極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上下面と下手側の側部は生きており、左右と下手側の側部が破面。上面は中央部が窪み、下手側の側部は立ち上がり急となる。含鉄部は上手側に広がりを持つ。酸化土砂がやや厚い。わずかに錆びくずれが生じている。
	鍛冶滓 (含鉄)	SB 1 P7	2.4	1.6	0.9	2.4	2	錆化 ()	横方向に不定形に伸びたごく小さな鍛冶滓。ほぼ完形品で、側部の凹凸は木炭痕のため。下面はわずかに椀形。含鉄部は中核部。
	鉄製品 (鍛造品) 刀子茎	SB 1 P18	4.0	1.6	0.4	6.0	3	錆化 ()	上部を欠損。裏面に一部木質あり。茎の先端は厚みを減じ、横一文字に終わる。
	鉄製品 (鍛造品) 釘	SB 1 P4	4.5	0.7	0.6	6.5	3	錆化 ()	上下端部はともに欠損する。断面方形で下部に行くに従い細くなる。表面に木質などの付着物は認められない。
	鉄製品 (鍛造品)	SB 1 P14	4.5	0.6	0.7	7.0	5	錆化 ()	(仮・分析No.6) 横断面形が方形となる棒状の鉄製品破片。下手側が側部と推定され、徐々に細くなることから、釘の可能性が高い。頭部は欠落している。表面の酸化土砂中にはガラス質の薄片が付着している。
	鉄製品 (鍛造品)	SB 1 P12	4.2	0.9	0.7	8.0	5	錆化 ()	逆槌状の横断面形を持つ棒状の鉄製品破片。表面には数多くの筋状の放射割れが走っている。上手側の側部は貝殻状の錆びくずれで変形している。全体に上手側が太くなり、下手側に向かい狭まった槌状を示す。内側には酸化土砂が厚い。容器状の鉄製品の脚部分か。
	羽口 (鍛冶)	SB 1 P15	3.4	2.5	1.9	16.2	1	なし	羽口先端部の小破片。通風孔部と先端部外面の一部が生きており、残る半分が破面となる。外面は黒色ガラス質に滓化している。通風孔部には回転方向のケズリ痕が残る。胎土は初殻をわずかに混じえる粘土質。
	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SB P9	3.0	3.1	2.7	27.0	5	H ()	含鉄の椀形鍛冶滓の側部破片。上下面が生きており、左右の側部と下手側が破面。上手側側部は元の椀形鍛冶滓の側部となる。含鉄部は上面上手寄り。外周部には酸化土砂が厚い。
	鍛冶滓 (含鉄)	SB2 P16	2.4	2.2	2.1	19.4	4	H ()	上面と上手側の側部がわずかに生きている鍛冶滓片。左右の側部はシャープな破面で滓はやや緻密。結晶が発達気味。極小から小型の椀形鍛冶滓の肩部破片の可能性もあり、上手側の側部が弧状となるのが理由である。含鉄部は上面表皮寄り。
	鍛冶滓 (含鉄)	SB2 P11	3.9	2.0	1.6	21.2	3	H ()	側面の半分以上が破面となったガス質の鍛冶滓片。上下面は小さな波状で1cm大以下の木炭痕が目立つ。上手側の側部の破面には気孔が数多く露出する。また中間層に隙間を持つ。上面には粉炭主体の厚い酸化土砂が残る。含鉄部は右手の中核部。
	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD1	3.8	3.6	2.6	39.0	4	H ()	全面が酸化土砂に覆われた含鉄の椀形鍛冶滓片。上下面は生きている可能性が高く、側面は破面の可能性がある。酸化土砂のため表面状態は全く不明。横断面形は右手に向かい薄くなるため、こちら側が肩部寄りか。含鉄部は右上面寄り。
	羽口 (鍛冶)	SD1	5.8	5.4	3.3	65.0	1	なし	羽口先端部寄りの側部破片。通風孔部と外面の一部が生きており、側部は破面主体となる。右側部は破面と滓化した面が混在しており一部が割れたまま使用されたものか。外面は薄く滓化発泡しており、半分以上が風化のため灰白色となる。胎土は多量のスサを含む粘土質。8mm大の石も含まれている。
	椀形鍛冶滓 (小・二段)	SD4	7.9	8.7	5.1	277.0	5	なし	上面に完形の椀形滓が残る二段椀形鍛冶滓。下面の滓は中核部のみが生きており、側面は破面と自然面が混在する。厚味は上下とも近似する。上面の滓は不整形形で右側に向かい厚くなる。上面は流動状で中央部と右上手側が槌状に窪む。工具痕の可能性大。側面から下面には木炭痕が目立つ。下面の滓は1cm大以下の木炭痕が各面に目立ちややガス質となる。上下滓の中間層には木炭をかみ込んでいる。
	椀形鍛冶滓 (小)	SD4	8.6	6.4	2.3	177.0	6	なし	平面・長手の不整形円形をした小型の椀形鍛冶滓。肩部に主破面が連続するが、滓の全体観は生きている。上面は緩やかに凹み、側面から下面は皿状の外観を残す。下面右端部は一段窪み、酸化土砂が厚い。それ以外は木炭痕に覆われており、部分的に灰黒色の鍛冶炉の炉床土が残る。滓はやや緻密で木炭のかみ込みも認められる。
	羽口 (鍛冶)	SD4	5.0	4.7	2.4	49.0	1	なし	羽口の先端部破片。通風孔部と外面に加えて右側の先端部の一部が生きている。通風孔部の内面は先端から3.5cmまで紫紅色に被熱。右側の先端部は黒色ガラス質に滓化しており、外面の半分以上が同じガラス質に覆われている。胎土はスサを含まない緻密なもの。角張った石粒や砂粒が混在する。
㊸	椀形鍛冶滓 (中)	SD5	7.6	8.2	5.2	247.0	3	なし	二段気味の椀形鍛冶滓破片。酸化土砂が側面から下面に厚く、不明点も多い。上面の滓は上手側が欠落しており、ガス質で密度が低い。上面は平坦気味で木炭痕が並ぶ。上下の滓の中間層は木炭痕や木炭のかみ込みが激しく、不規則な段をなす。下段の滓は酸化土砂のため不明。上下の滓は大きさ自体は小型に属する。
㊹	椀形鍛冶滓 (中)	SD5	9.8	8.9	3.0	410.0	6	なし	中型の椀形鍛冶滓。肩部の3箇所小破面が残るが、ほぼ完形に近い。上面が中央に向かってくぼみ、表面には木炭痕が浅く残される。横断面形は左側が薄く、右側が厚くなっており、肩部や側面の木炭痕が右側に目立つ。下面は皿状でわずかに木炭痕が残るが酸化土砂のため不明点が多い。比重は高く滓質は緻密。下面の酸化土砂中には靑光りする鍛造剥片が2点含まれている。左右逆の可能性もあり。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
㉓	椀形鍛冶滓 (小)	SD5	8.8	7.8	3.0	262.0	5	なし	完形の小型の椀形鍛冶滓。表面の酸化土砂が厚く、表面状態は不明。上面が浅く窪み、肩部は厚く丸みを持つ。下手側と左上手寄りの側部が部分的に突出する。比重はやや高い。
㉔	椀形鍛冶滓 (極小)	SD5	3.2	6.3	2.5	52.0	5	なし	極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。左側部がシャープな破片となる。下手側の表皮が剥落する。肩部はまとまりをもち、側面から下面にかけてもしっかりしている。表面には薄い酸化土砂が残る。
㉕	羽口 (鍛冶)	SD5	8.9	5.0	2.8	152.0	1	なし	羽口の先端部から体部にかけての破片。先端部は薄皮状の黒褐色の滓に覆われており、あご部には滓が突出する。通風孔部の径はやや大きめで、先端部寄りの内面には滓が2mmほどの厚みで固着している。通風孔部の整形痕は斜め回転方向と長軸方向の二者あり。外面は灰色に薄く滓化しており、先端寄りには発泡気味。胎土は多量のスサを混じえた粘土質。胎土の練りはややあまい。
㉖	鉄製品 (鍛造品) 鋤先?	SD6	9.0	3.8	0.2	31.4	4	錆化 ()	下端部は刃部状に薄くなり、右側上端部はわずかに反る。鎌もしくは鋤先の可能性が考えられる。
㉗	椀形鍛冶滓 (特大)	SD7 上層	15.0	16.5	6.7	1410.0	4	なし	肩部に小破面を点々と残す特大の椀形鍛冶滓。上面上手側は酸化土砂が厚く、部分的に盛り上がる。下面中央部から上手にかけては滓が幅4.5cmほど楕状に突出しており、工具により鍛冶炉の荒れに差し込んだ滓の可能性が高い。突出部は一部二段になっている。上面は緩やかに窪み、肩部は凹凸が激しい。側面から下面は比較的きれいな椀形で、木炭痕と鍛冶炉の炉床土の圧痕が混在する。滓の密度はやや低めで、大きな割には軽い印象を持つ。
㉘	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 上層	11.8	11.7	5.4	790.0	4	なし	上面から側面の大半が酸化土砂に覆われたまとまりのよい大型の椀形鍛冶滓。円盤状で下面がきれいな椀形に突出する。下手側の側部は小破面か。下面左半分には灰褐色の鍛冶炉の炉床土が薄く固着している。密度は高め。
㉙	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 上層	10.4	9.8	6.4	600.0	5	なし	横断面形が深いコマ形の椀形鍛冶滓。下手側の肩部に小破面を残すが、ほぼ完形品。上手側が2cmほど斜め上に突出しているのは、滓の生成段階で水平位置がずらされたためか。側面から下面は傾斜が強く、下面中央部は大きく突出する。表面には木炭痕がかすかに残る。右側面下半には灰黒色の鍛冶炉炉床土の焼き付きが生じている。
㉚	椀形鍛冶滓 (大)	SD 上層	9.1	10.7	4.3	530.0	3	なし	密度が高く全体に流動状の椀形鍛冶滓。左側部と下手側が小破面。上面は左側が傾斜し表皮が紫紅色気味となる。羽口先からの通風による酸化か。右半分は不規則な波状で、右側に向かって広がる形状を残す。側面は凹凸が著しい。下面は炉床土の圧痕主体で荒れ気味。一部に灰黒色の炉床土がかみ込む。滓内部の気孔はきわめて少ない。
㉛	椀形鍛冶滓 (大・含鉄・二段)	SD7 上層	14.5	9.6	6.2	650.0	5	錆化 ()	平面・不整楕円形をした二段椀形鍛冶滓。下面は小さい破面が散在するがほぼ完形。上面の滓本体は径8.5cmほどの不整円形で、木炭痕の目立つ滓部が左側に向かって不規則に伸びる。滓本体の上面左端部には羽口由来の滓が乗る。下面の滓は平面・不整楕円形で、下手側から右側の肩部が横方向に薄く張り出す。下面は1cm前後の木炭痕主体。上下とも含鉄部が散在する。
㉜	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 上層	10.6	11.1	3.2	510.0	3	錆化 ()	平面・不整楕円形をしたやや二段気味の椀形鍛冶滓。肩部に小破面が確認されるが、完形に近い。上面は短軸方向が浅いV字状に窪み、肩部は薄くなる。左側部は二段気味で中間層に1cm大前後の木炭をかみ込む。下面は中央部が平坦気味で側部の立ち上がり強い。細かい木炭痕と炉床土の剥離痕が混在し、青光りする薄手の鍛造剥片が無数に固着している。含鉄部は上面の滓側に広がっている。
㉝	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 上層	11.0	12.4	4.5	800.0	5	錆化 ()	短軸方向にやや長めの椀形鍛冶滓。肩部の半分程度が破面で途切れているが、左右方向はほぼ完形となる。まとまりのよい滓で、上面中央部と上手左寄りが小さく窪む。粉炭と鍛造剥片に加えて粒状滓が酸化土砂中に混在する。下面は木炭痕と炉床土の圧痕で、上手寄りには斜め左上からの浅い工具痕が残る。含鉄部は上面上手寄りのみ。密度の高い滓である。
㉞	椀形鍛冶滓 (大・工具痕付)	SD7 上層	11.6	9.7	4.6	790.0	4	なし	全面が厚い酸化土砂に覆われた工具痕付の椀形鍛冶滓。酸化土砂が特に厚いため、上面や肩部を中心に不明点が多い。下手側の側部が主破面。それ以外も肩部に小破面が推定される。上面は中央部が大きく窪み、下手側に向かって溝状に伸びる。この部分は工具痕である可能性が高い。滓は厚味を持ち、左側では厚さ4.5cmにも達する。下面はやや不規則で木炭と小さな突出部が各所に残る。
㉟	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 上層	11.9	10.8	3.9	474.0	3	なし	中型の椀形鍛冶滓。左右方向にやや長い不整楕円形で、左半分が薄くなっている。特に左側5cmほどの範囲で1cmほど窪んでおり、その中央部に短軸方向に向かう幅7mmほどの浅い楕形の工具痕が認められる。工具痕の長さは現状で4cm。先端部は2単位に分かれている。肩部や下面はまとまりを持ちながらも、小さな突起が点在する。下面の突起は鍛冶炉の炉床部の荒れを示すものか。下面下手側にも上面と同様、かすかな工具痕が残る。
㊱	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 上層	10.6	8.8	4.0	298.0	4	なし	平面・不整楕円形の椀形鍛冶滓。左上手側の肩部と右上手側が小破面。上面は左半分の凹凸が著しく、右側が浅い皿状となる。下面は木炭痕と炉床土の圧痕が混在し、凹凸がやや強い。右側の窪みには、灰黒色の鍛冶炉の炉床土が点々と固着しているが、2mm大の粒状滓の可能性もある。黒褐色の滓が酸化土砂中に含まれる。上面は左側が窪み気味。
㊲	椀形鍛冶滓 (中・土器付)	SD7 上層	12.1	11.1	4.5	486.0	4	なし	下面左側に底部糸切の土師器片が固着した中型の椀形鍛冶滓。やや二段気味で完形品。上手側肩部の発達不均一で窪みや突出部が生じている。上面に乗る滓部は長さ8cm大で、下半の滓よりひと回り小さく未発達である。工具(幅1cmほどの丸棒状)の先端部のアタリが2箇所に残される。加えて黒色の鍛造剥片が固着している。下半の滓は肩部から底面にかけて凹凸があり、深い窪みは大半が木炭痕となる。酸化土砂がやや厚く鍛造剥片も含まれている。固着する土器も酸化土砂により固着している。土器は初殻やスサをわずかに含んだ胎土で、緩やかに外反気味の立ち上がりを持つ。混和物中にスコリアあり。
㊳	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	10.9	10.3	3.5	443.0	3	錆化 ()	中型のほぼ完形の椀形鍛冶滓。左側部に小破面が2箇所残る。上面は平坦気味で左側の木炭痕が強い。側面から下面は木炭痕が著しく、それに応じて凹凸も目立つ。3箇所突出部を持つ二次的な酸化土砂。含鉄部は上面上手寄り主体。滓内部にも一部木炭をかんでいる。
㊴	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	10.5	11.3	4.2	460.0	7	錆化 ()	中型のしっかりした椀形鍛冶滓。全体的に構成構成 ㉓に似る。上面左寄りが窪み、右側に向かって平坦化する。薄い酸化土砂に覆われており、青光りする鍛造剥片を多く含んでいる。左側部縦方向に幅1cmほどの丸棒状の工具痕が残る。側面から下面は浅い椀形で短軸方向はやや凹凸が著しい。中央寄りには灰色の鍛冶炉の炉床土の痕跡を残す。上面端部に羽口先のたれを残す。

第3章 発掘調査の成果

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
④①	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	7.6	10.6	3.8	283.0	5	錆化 ()	短軸方向に長手の不整楕円形をした中型の椀形鍛冶滓。下手寄りにははっきりした椀形で、上手側は発達弱。そのため凹凸が目立つ。上面は全体に平坦気味で中央部に向かって浅く凹む。窪みには酸化土砂が厚い。下面は上面に対応して下手寄りがきれいな椀形となる。酸化土砂が瘤状に固着する。含鉄部は上面上手寄り主体。
④②	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 上層	7.3	8.6	3.9	233.0	3	なし	平面形のやや乱れた完形に近い椀形鍛冶滓。不整多角形気味。右上手側が発達しており、逆に左下手側が発達不良。下面は上面に対応するかのよう、右斜め上から左斜め下に向かって突出する。表面には木炭痕と炉床土の圧痕が併存する。滓の形成が阻害されているものか。
④③	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 上層	8.0	8.3	3.9	246.0	4	なし	平面・不整楕円形をした小型の椀形鍛冶滓。各面とも発達途上でほぼ完形品である。上面は下手側が発達弱く、木炭を内部にかみ込んでいる。側面から下面は底面中央部のみが炉底部に接しており、周辺部は木炭層上で形成されている。薄く固着する酸化土砂中には光沢をもった鍛造剥片や1mm大の粒状滓が含まれる。
④④	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 上層	10.5	9.2	3.1	295.0	4	錆化 ()	上面左側に羽口由来の粘土質の滓を残す中型の椀形鍛冶滓。左上手側の肩部が破面。下手側はきれいに発達した椀形で、右上手側は発達弱。SD7上層ではこのような右上手側の滓の発達弱の資料がやや目立ち、構成No.④⑦・④⑧なども同様である。左側部がわずかに反り気味で木炭痕が目立つ。下面から側面は浅い椀形で炉床土の圧痕と木炭痕が相半ばする。含鉄部は上面下手寄りに突出する1.5cm大の範囲。
④⑤	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD7 上層	8.4	8.1	1.9	158.0	5	錆化 ()	扁平な小型の椀形鍛冶滓。上面左側には羽口先の脱落片が乗り、一部が風化して灰白色となっている。上面は浅い皿形で木炭痕が点在する。肩部は発達不完全で凹凸が交互に残される。下面は浅い皿形でほぼ全体が炉床土に接している。下面右上手が幅0.8cmほどの範囲で溝状に窪む。工具痕の可能性あり。滓量の少ない割には炉床に接している。椀形鍛冶滓・含鉄部は上面上手側の2箇所に残る小塊状の部分。
④⑥	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 上層	5.1	6.2	2.0	87.0	3	なし	発達不完全な極小の椀形鍛冶滓。肩部の4箇所は破面で左側部はやや乱れている。上下とも木炭痕が点在し、下面上手側には灰黒色の鍛冶炉の炉床土が固着する。内部にも木炭をかみ込んでいるが、滓質は緻密。
④⑦	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 上層	6.9	6.5	2.2	108.0	3	なし	側面三面に破面を残す極小の椀形鍛冶滓。扁平で上下面の質感がやや異なる。上面は木炭痕主体で、下面には木炭痕が密に固着する。下面右端部には粘土質の滓が小さく突出する。木炭は針葉樹材主体。
④⑧	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 上層	7.7	6.9	2.9	151.0	4	なし	下面の1/3ほどに炉床土の固着した極小の椀形鍛冶滓。左側部から上面が不規則に窪んでおり上手側の肩部が小破面となる。全体に発達途上の滓。下面下手側は全体に凹んでおり、上手側はきれいな椀形を示す。灰白色から灰黒色の鍛冶炉の炉床土が薄く張り付いている。滓質は構成No.④⑤と似る。
④⑨	鍛冶滓 (含鉄)	SD7 上層	3.4	5.3	2.6	59.0	4	L ()	(仮・分析No.10) 左右の側部が欠落したような含鉄の鍛冶滓。中核部は鉄主体で錆も進んでいる。錆ぶくれや黒錆のにじみに加えて放射割れも生じ始めている。椀形鍛冶滓を短軸方向に割り取ったような形状を示している。鉄部の割合が6割以上。表面には酸化土砂がやや厚い。
④⑩	椀形鉄塊	SD7 上層	9.9	9.5	5.1	700.0	5	特L ()	(仮・分析No.11) 酸化土砂に覆われた、厚味のある椀形の形状を示す椀形鉄塊。酸化土砂のため表面状態は全く不明。上面は平坦気味で下面は椀形となる。左側部がややえぐれた形状。鉄主体の椀形鍛冶滓。または精錬鍛冶処理の最終段階にあたる鍛冶鉄塊か。突出する酸化土砂の部分のみ磁着が弱い。
⑤①	羽口 (鍛冶)	SD7 上層	4.3	4.7	4.4	49.0	1	なし	羽口先端部の小破片。先端は滓化して黒色から淡緑色となっている。風化して表皮が剥離した部分は灰白色。肩部は大半が破面。通風孔部は長軸方向に向かう穿孔。胎土は短いスサや初殻を含んだ粘土質。胎土や通風孔部の整形方法は構成No.②と類似する。通風孔部の径はやや太め。
⑤②	羽口 (鍛冶)	SD7 上層	8.4	6.9	3.3	176.0	1	なし	羽口の先端部寄りの体部破片。外面の成・整形は長軸方向の帯状のケズリの後にナデ。外面右寄りの3cmほどが灰色に被熱し先端側を示す。通風孔部は長軸方向の粗いナデ状の圧痕となる。胎土は多量のスサを含む粘土質で構成No.③に似る。
⑤③	椀形鍛冶滓 (特大・含鉄)	SD7 中層	16.4	13.4	7.5	2100.0	3	M ()	(仮・分析No.7) 平面・不整楕円形の特大型の椀形鍛冶滓。本遺跡出土品中では最大の椀形鍛冶滓で、2100gを計る。酸化土砂が厚く不明点も多いが、上手側肩部は破面の可能性が高い。上面は中央部が左右方向に凹み、羽口先の滓の窪みまたは工具痕に開くものであろう。右側の浅いV字状の窪みは工具痕の可能性が高い。最大肥厚部は左端部で、径7cmほどの丸みをもって突出している。その周辺を含めて、下面には褐色から灰褐色の鍛冶炉の炉床土が面的に張り付いている。この突出部が本来の滓の中心部で、その後滓を左側にずらした形で滓が成長している。滓内部については酸化土砂のため不明ながら、比重の高さから緻密なものと推定される。含鉄部は1箇所だけでなく分散気味。
⑤④	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 中層	10.7	11.3	4.4	630.0	4	なし	平面・不整形をしたほぼ完形の椀形鍛冶滓。左側面と下手側が窪んでいるが、破面はなく自然面。上面は緩やかな波状で肩部から下面にかけてやや木炭痕が激しい。底面の三方が突出気味になっているのは炉床の工具による荒れか。酸化土砂はすべて土壌である。
⑤⑤	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 中層	12.7	10.5	3.3	522.0	7	錆化 ()	肩部に小破面を3箇所残す椀形鍛冶滓。上面は中央部に向かい緩やかにくぼみ、左側部は2.5cm大の木炭をかみ込んでいるため変形している。肩部に向かい薄くなり、部分的に二段気味の木炭のかみ込みが認められる。滓は緻密。下面は左右方向に向かう浅い樋状で、左寄りの木炭痕が粗い。含鉄部は上面上手寄りに広がりを持つ。
⑤⑥	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	SD7 中層	10.8	12.1	4.8	660.0	8	錆化 ()	短軸部と右側部の三方が破面となった椀形鍛冶滓。左側1/3は上下面とも一段凹んでおり、滓の形成が弱い。上面は全体に平坦気味で短軸方向へ向かう窪みが2箇所認められるが、酸化土砂のため工具痕かどうかは不明。左側部から見ると滓は二段気味。下手側の肩部が一部突出する。下面右側はきれいな椀形で鍛冶炉の炉床に完全に密着している。含鉄部は上面中央部から上手にかけてで、磁着は強い。
⑤⑦	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 中層	10.4	10.3	5.2	479.0	5	なし	平面・不整六角形気味の中型の椀形鍛冶滓。左側部に小破面が残る以外はほぼ完形品。上面中央部は浅く窪み、下手側はやや突出する。左側部の破面は奥に向かい3cm近く中空となっている。側面から下面はきれいな椀形で、中央部のみが鍛冶炉の炉床に接し、外周部は木炭痕に覆われている。
⑤⑧	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 中層	7.8	9.2	3.5	262.0	3	なし	上面や側面の発達の良い椀形鍛冶滓。小さな突起や木炭痕が目立つ。破面はなく完形品。右側部下手寄りにガラス質の滓が乗るが羽口下の垂れではない。滓は上面が二つに分かれており、左側は傾斜してしまっている。滓の形成時に突き動かされている可能性が高い。そのため左端部が急激に途切れている。下面は浅い椀形で、凹凸はやや少ない。下面下手側には浅い樋状の工具痕が残る。重量的には262gと中型に属するが、形態的には小型品である。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
㉙	椀形鍛冶滓 (中・工具痕付)	SD7 中層	6.7	8.5	3.8	306.0	5	なし	左右の側部が直線状の破面となった椀形鍛冶滓の中核部破片。上面の中央部が左右方向に窪み、工具痕の可能性ある。左側部の破面のみ二段気味で、中間層に木炭をかみ込む。上面右上手側には工具のアタリが小範囲に残る。短軸方向の断面形が不均一で、上手側が素直に横方向に広がるのに対して、下手側は肥厚して押さえられたような形となる。滓の密度が高い。
㉚	椀形鍛冶滓 (中・工具痕付)	SD7 中層	7.1	8.9	5.1	360.0	4	なし	左側部と上手側の一部が破面となった椀形鍛冶滓。厚みを持つ。上面の上手側が左右方向に窪み、工具痕の可能性が高い。右側部から下手側にかけては小破面と突出部が混在する。下面は瘤状の酸化土砂のため形態が乱れている。本来の椀形鍛冶滓の右半分の破片が。
㉛	椀形鍛冶滓 (中・含鉄・ 鉄床石付)	SD7 中層	8.7	7.2	5.3	610.0	4	錆化()	厚い酸化土砂に覆われた含鉄の椀形鍛冶滓破片。上面下手寄りには8cm大の鉄床石表面破片が二次的に固着している。滓は表面状態が全く不明。断面形からみて、深い椀形の形状を持つ滓。含鉄部は中核部と推定される。上手側側面のみが破面の可能性がある。鉄床石破片は表裏が逆転して固着する。鉄床石表面の7劃方が八本により荒れている。残る自然面は平坦な面で、鉄錆が付着する。わずかに被熱していると推定される。石質は緻密。
㉜	椀形鍛冶滓 (中・鍛造 剥片付)	SD7 中層	11.1	10.5	3.6	398.0	3	なし	(仮・分析No.8)角が丸みをもった不整形の平面形を呈する中型の椀形鍛冶滓。肩部が薄く左側部のみが小破面となる。上面は波状で、中央部が窪み気味。上面全体に青光りする鍛造剥片を多量に含む再結合滓が固着している。微細な鍛冶滓の破片も数多い。左側部の破面には羽口先由来の粘土質の滓が小範囲で認められる。下面は浅い皿形で、全面に木炭痕が残る。再結合滓中の鍛造剥片は鍛冶工場の床面または廃棄坑中で形成されたもので、SD7中層で固着したものと推定される。上面のみに再結合しており下面には全く認められない点は、廃棄状態を示す可能性が高い。
㉝	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 中層	7.4	8.4	5.2	356.0	7	錆化()	表面が厚い酸化土砂に覆われた塊状の椀形鍛冶滓。側面の8割以上は破面と推定されるが、詳細は不明。上面に2箇所、新しい破面を持つ。右側部は砂質の酸化土砂が塊状に突出しており、錆づくれに取り付いたものか。下面の酸化土砂の表面に放射割れが生じている。磁着自体は上面側が強い。
㉞	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SD7 中層	9.0	8.6	2.8	273.0	5	錆化()	上面が全体にくぼんだ中型の椀形鍛冶滓。上面右手には3cm大の鍛冶滓片が載っている。肩部に小破面を持つがほぼ完形。皿状に窪んだ上面には木炭痕が並び、中には深いものもある。肩部は下手側が肥厚し、上手側に向かって薄くなる。浅い椀形の下面はほぼ全面が木炭痕。含鉄部は集中せず全体に分散気味。
㉟	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 中層	6.7	8.4	2.6	139.0	4	なし	左右の側面の一部が破面となった扁平な椀形鍛冶滓。上面はきれいな流動状でわずかに中央部が窪む。上手側肩部は2箇所が突出する。下面は木炭痕によりやや凹凸が著しい。滓は比較的緻密。
㊱	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 中層	5.8	7.2	2.7	104.0	1	なし	表裏面や側面が小さな木炭痕に覆われた異形の椀形鍛冶滓。上面は平坦気味で左端部がわずかに高い。側面から下面はほとんど椀形とならず、全体に板状で各面の凹凸が著しい。内部にも隙間や木炭のかみ込みがある。滓量が少なく、流動性に欠けていたことによる形状が。
㊲	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD7 中層	5.4	7.2	3.3	126.0	4	錆化()	左側面が小さく欠けている小型の椀形鍛冶滓。上手側の肩部に小破面があり、上面は浅い皿状で木炭痕が並び、下面は椀形でやや上手側が突出する。下手側の側面は木炭痕を残し厚味を持つ。上面の表皮直下に気孔が横方向に連なり隙間となる。上面下手寄りの薄い酸化土砂中には青光りする鍛造剥片が散在している。
㊳	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SD7 中層	7.5	5.6	1.7	92.5	3	錆化()	扁平な極小の椀形鍛冶滓。肩部に小破面が点在するがほぼ完形品。上面は浅く窪み、一部の木炭痕が深い。右上手側の側部がゆがんでおり、かすかに工具痕らしき凹みを残す。下面は皿状で木炭痕や木炭のかみ込みが認められる。酸化土砂中には青光りする鍛造剥片が含まれている。
㊴	椀形鍛冶滓 (小・工具痕付)	SD7 中層	7.4	9.7	3.7	206.0	2	錆化()	平・断面形が異形の椀形鍛冶滓。上面右上手側が大きくえぐれており、左下手側には斜め下に向かう工具痕が残される。工具痕の幅は2cm前後。上面中央部が大きく盛り上がり、下面は全体的には椀形となるが、大きな波状をも呈する。下面の中央部は窪んでおり、そのために滓上面が突出している可能性もある。その側面上手側のみ小破面、下面上手側に半分埋まったような鉄製品の破片あり。幅4mm前後の断面方形の角棒状。鍛冶具の先端部としては細い。未製品あるいは製品か。右上手側が大きくえぐれていることと関係する可能性あり。
㊵	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 中層	6.3	8.4	2.6	98.0	5	なし	(仮・分析No.9)上下面・側面ともに木炭痕のため凹凸の目立つ極小の椀形鍛冶滓。完形品。右側面に傷を持つが発掘時のものか。滓量の極めて少ない段階の鍛冶滓と推定される。鍛錬鍛冶に伴うものか。表裏面に薄く再結合滓が固着する。粉炭片や微細な鍛造剥片を含む。
㊶	鉄製品 (鍛造品)	SD7 中層	4.2	1.5	1.1	30.4	4	錆化()	(仮・分析No.12)厚い酸化土砂に覆われた鉄製品。棒状または板状で、芯部には錆化した鉄製品が推定される。右側部に固着する石は酸化土砂中のもの。
㊷	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	4.5	5.1	2.7	55.0	1	なし	羽口先端部の小破片。あご部に滓化・発泡した粘土質の滓が不規則に突出する。1cm前後の小範囲に通風孔部の壁面を残すが、表面が滓化して剥離気味。羽口の肉厚は3cm前後。胎土は短いスサを含む粘土質。練りが甘いめかヒビ割れが目立つ。
㊸	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	4.8	5.1	2.6	48.4	2	なし	羽口先端部の小破片。肩部から基部側は欠落する。先端部は黒色ガラス質に滓化して小さな割れが生じている。通風孔部は長軸方向に向かう穿孔。胎土は粗いスサや粗粒を含んだ粘土質。構成No.㉙と類似する。
㊹	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	5.9	4.7	3.0	61.0	2	なし	(仮・分析No.13)羽口の体部から先端部にかけての破片。体部外面は長軸方向の帯状のケズリとナデ整形。肩部から先端部は黒色ガラス質に滓化・発泡して、半分ほどが風化した灰白色。通風孔部の穿孔方向は長軸方向。黒褐色の光沢を持つ鍛造剥片が1点固着する。胎土は大量のスサを混ぜた粘土質で構成No.㉙と類似する。外面の被熱痕は斜め上方に傾斜する。構成No.㉙・㉚と同一個体の可能性あり。
㊺	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	8.6	7.6	3.3	151.0	1	なし	羽口の先端部寄りの体部破片。先端側・基部側とも破面となる。先端寄りの2cmほどの範囲が帯状に薄く滓化している。外面の成・整形は、長軸方向の帯状のケズリの後にナデ。通風孔部は斜め回転方向と長軸方向の整形痕あり。胎土は多量のスサを含む粘土質。長めのスサが目立つ。全体的に構成No.㉙に似る。同一個体の可能性あり。
㊻	羽口 (鍛冶)	SD7 中層	7.4	10.3	3.9	259.0	1	なし	羽口の体部破片。SD7上層出土の羽口としては外径が最も大きい。外面の成・整形は長軸方向の幅広いケズリとナデによる丁寧な仕上げ。外面右端部が薄く滓化し部分的に灰黒色から灰白色に変色している。通風孔部は斜め方向と長軸方向の整形痕が混在する。胎土には長いスサを多量に含む。また、茶褐色に発色する粒子やスコリアを数多く含む。構成No.㉙とは別個体。

第3章 発掘調査の成果

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑦⑥	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 下層	5.6	9.5	2.8	181.0	5	なし	右側部が全面破面となった小型の椀形鍛冶滓。短軸側の上面肩部にも破面を残す。本来の中央部に向かって大きく窪み、瘤状の錆ぶくれが乗っている。側面はやや不規則で木炭のかみ込みが認められる。下面は浅い椀形で上手側の発達が弱い。下面中央部には粘土質の滓がわずかに残る。表面の酸化土砂中には鍛造剥片粉を含む。
⑦⑦	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 下層	5.5	4.8	2.0	81.0	4	なし	側面が全面破面となった極小の椀形鍛冶滓。中核部の破片で、密度はやや高い。上面上手側には木炭痕の窪みを残す。下面は比較的きれいな椀形。表面に薄く固着する酸化土砂中には、粉状の鍛造剥片が数多い。いずれも青光りする薄手のもの。
⑦⑧	炉壁 (鍛冶炉)	SD7 下層	7.1	6.8	2.2	38.0	1	なし	灰黒色のガラス化した表面を持つ炉壁片。内面には木炭痕が連続する。滓化した厚さは最大1cm弱。裏面上手部には、褐色から茶褐色に風化した粘土質の滓が突出する。炉壁胎土はスサをわずかに含まないシルト状。鍛冶炉の羽口先周辺の炉壁表面破片が。
⑦⑨	羽口 (鍛冶)	SD7 下層	8.8	7.7	3.4	172.0	1	なし	成・整形や胎土が特異な羽口体部片。胎土に極めて多量のスサを混和しているためか、内外面や破面もスサ痕が目立つ。外面の成・整形は幅広い帯状のケズリによる。右半分が灰色に被熱し先端側を示す。通風孔部は基部側に向かって開き気味で、左側1.5cmほどがさらにもう一段外側に開いている。外面も全体に開き気味で、基部に向かってラッパ状に開く形態か。胎土は短いスサを多量に含み、淡赤褐色に発色する小塊状の焼土を多量に含んでいる。羽口としては古手の形態。
⑧⑩	椀形鍛冶滓 (大)	SD 埋土	8.4	9.9	4.7	533.0	5	なし	厚味をもった大型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。上下面が生きており、右下側の側面以外は破面となる。上面右側の突出部は錆ぶくれと酸化土砂。上面は全体的に緩やかに中央部が窪む。下面はきれいな椀形で、左半分の表面には淡赤褐色の鍛冶炉の炉床土が薄く張り付く。下面左端部に浅い窪みを残し、工具痕の可能性もある。滓は緻密で比重は高い。酸化土砂が厚く不明点もあり。
⑧⑪	椀形鍛冶滓 (大)	SD7 埋土	11.5	12.1	3.6	511.0	3	なし	右方向に牡蠣殻状に広がったやや扁平な椀形鍛冶滓。上面中央部はやや小高く、左側部から上面にかけて羽口先由来のガラス質の滓が乗る。ほぼ完形品。下面は浅い椀形で中央部がやや乱れている。下面左端部は小さく突出し、表面には粘土質の滓が固着する。上面の滓の流動性は良好で、羽口先から右方向へ向かって広がっていたことを読み取れる。表面には木炭痕が点在する。
⑧⑫	椀形鍛冶滓 (大・二段)	SD7 埋土	11.9	9.8	6.8	670.0	3	なし	下面に極小の椀形鍛冶滓を残す二段椀形鍛冶滓。上面の滓が二倍ほどの厚味をもち、中心位置も左へ3cmほどずれている。上面の滓の肩部の8割以上は破面となる。また滓上面の左半分にやや粘土質の滓が盛り上がっている。滓全体の表面には木炭痕が突き刺さるように残る。上面の滓は立ち上がり急で強い椀形となる。下面の滓は扁平で左右方向に長い。滓の底面には木炭痕と灰黒色の炉床土のかみ込みが並存する。上下の滓は木炭痕の残り方が異なり、下面の滓を取り忘れたまま別工程の鍛冶処理を行っている可能性がある。
⑧⑬	椀形鍛冶滓 (中)	SD7 埋土	8.8	9.8	6.6	428.0	3	なし	ほぼ完形の中型の椀形鍛冶滓。厚味のあるコマ形の断面形を持つが、平面形や側面形は左側を中心に大きく乱れている。上面中央部には大きく盛り上がった瘤状の酸化土砂あり。右側面から底面は比較的きれいな椀形。部分的に二段気味となっているが、はっきりとした二段椀形とはならない。原料単位の投入が前後二時期にわかれたことによるものか。
⑧⑭	椀形鍛冶滓 (小)	SD7 埋土	6.4	8.0	2.6	157.0	5	なし	平面・不整形を呈する扁平で小型の椀形鍛冶滓。肩部に小破面を持つが完形に近い。上面は流動状で上手側が窪み気味。左右の側部は立ち上がり急。下面は浅い皿状で突出部が2箇所残る。上手側が羽口先の可能性もあり。
⑧⑮	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 埋土	6.0	7.3	1.7	93.0	4	なし	平板な極小の椀形鍛冶滓。短軸側の両側部に小破面を持つ。左側面上手は大きく窪む。上面の木炭痕は弱く、皿状の下面では強い。表面が発泡気味の滓。
⑧⑯	椀形鍛冶滓 (極小)	SD7 埋土	6.7	5.6	2.7	90.0	5	なし	表裏面と側面の7割方が破面となる椀形鍛冶滓。下手寄りの上下面と側部が生きている。中型あるいは小型の椀形鍛冶滓の端部破片の可能性も残る。表裏面には木炭痕や木炭のかみ込みが目立ち、鍛造剥片もわずかに固着する。色調は黒褐色で、滓質はややガス質。
⑧⑰	椀形鍛冶滓 (中)	SD8	6.0	8.5	4.6	204.0	5	なし	左側部が大きな破面となった椀形鍛冶滓。上面の中央部が径2cmほど窪んでいるのは、下面に突出する滓部と関係している可能性が高い。下面の突出部は下手側から上手側下へ向かって斜めに差し込まれた工具痕に流入した滓で、この滓の流入により上面の中央部が陥没したものと考えられる。下面の工具痕の径は2.5cmほどの不整丸棒状。上面は比較的きれいな面で、中央部に向かって漏斗状に落ち込む。下面右手は通常の椀形で、表面にはかすかに木炭痕が残る。工人方向と工具の使い方をよく示す滓である。
⑧⑱	椀形鍛冶滓 (中)	SD10	6.4	6.9	3.5	194.0	4	なし	表面に酸化土砂のほとんどない緻密な椀形滓破片。上下面と右側面の一部が生きており、それ以外の側面が主破面となる。上面はほぼ平坦で、一部の表皮が剥落して内部の大型の気孔が露出する。滓の結晶が発達しており部分的にキラキラと輝く。下面は不規則な椀形で、木炭痕の窪みと椀形の表面が混在する。白色の土砂が固着するが、炉床土かどうか不明。右上手側の側部に斜め方向の窪みを持ち、工具痕の可能性あり。
⑧⑲	椀形鍛冶滓 (小・炉床土付)	SD10	4.4	4.2	2.3	46.8	2	なし	下面全体に灰色の炉床土の固着した椀形鍛冶滓破片。上面は生きており、側面三面が破面、上手側の側部は本来の滓の肩部となる。下面はきれいな椀形で、鍛冶炉表面の荒れの少ない段階の生成物である。本来の滓サイズは小型または中型か。
⑨⑩	鉄製品 (鍛造品)	SK2	13.3	-	0.5	19.0	4	L ()	断面が円形の鉄棒をいびつな円弧状に曲げたもの。一部強く屈曲する部位がある。同一個体と思われるが、全形は不明である。
⑨⑪	輪状鉄製品	SK2	7.5	-	0.5	11.8	3	錆化 ()	
⑨⑫	輪状鉄製品	SK2	11.9	-	0.5	15.0	2	L ()	
⑨⑬	鉄製品 (鍛造品) 輪状鉄製品	SK2	13.7	-	0.5	17.4	3	特L ()	断面略方形の鉄棒を円弧状に曲げたもの。両端部を欠損する。一部に繊維状のものを巻き付けた痕跡が認められる。
⑨⑭	鉄製品 (鍛造品) 輪状鉄製品	SK2	17.0	-	0.5	37.4	3	特L ()	断面が略方形の鉄棒をU字形に曲げ、右側面をくびれさせる。両端は欠損し全形は不明である。
⑨⑮	鉄製品 (鍛造品) 輪状鉄製品	SK2	15.8	-	0.6	28.4	3	L ()	断面が略方形の鉄棒をいびつな半円形に曲げたもの。両端部は欠損する。表面には、布か繊維状のものを螺旋状に巻く。
⑨⑯	鉄製品 (鍛造品) 鉋か	SK2	2.5	2.1	0.2	4.1	4	錆化 ()	上下端部とも欠損する。下部は片刃のように見受けられるが上半部は両刃とみられ、鉋の刃部である可能性がある。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑨7	鍛冶滓鉄片	SK6	2.6	3.8	2.6	19.6	4	錆化 ()	不規則な木炭屑の残る滓に上下面を覆われた鍛冶滓の鉄片。上手側の側部に幅1.7cm、厚さ約6mmを計る板状鉄片の錆化物をかみ込んでいる。下面は凹凸を持ちながらも椀形で、鍛冶処理中の未製品か。注目される遺物である。滓部は粘土質で、酸化防止用に表面に塗布された粘土汁の滓化したものか。
⑨8	鉄製品 (鍛造品) 鏃	SK7	10.6	2.4	0.5	36.6	4	特L ()	先端部と茎部を欠損する。鏃身は細見の柳葉形。鏃はみとめられず、両丸造。鏃身閉部は開閉で、篋被は鏃に覆われるが茎部とのさかいにわずかな段差を持つと見られる。茎部の断面形は方形である。
⑨9	鉄製品 (鍛造品) 刀子茎	SK7	6.2	1.3	0.3	9.4	3	錆化 ()	茎先端部の右側面にはえぐりかいはいる。上半部が欠損している。表面に木質などの付着は認められない。
⑩0	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SK9	4.0	5.9	2.0	66.5	4	錆化 ()	扁平な小型の椀形鍛冶滓破片。上下面の一部が生きており左右の側部が主破面。短軸側の側部も小破面を残す。左側部は削ったように弧状に欠落しており、工具痕の可能性も残る。滓はやや緻密。下面は皿状。
⑩1	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	SK9	2.5	3.6	2.1	28.0	5	錆化 ()	上手側の側部が新しい破面となった極小の椀形鍛冶滓、または鍛冶滓片。中核部に含鉄部を持ち下側面に突出している。芯部は鉄製品の可能性もある。外周部は明らかな滓で鍛冶処理中の鉄塊または鉄器の可能性が高い。側面の立ち上がり急な椀形となるのは破面の可能性も残る。錆化が進んでいるため放射割れや黒錆のじみか認められる。
⑩2	鍛冶滓 (含鉄)	SK9	2.4	2.3	1.2	8.5	5	錆化 ()	含鉄の鍛冶滓片。椀形鍛冶滓の肩部が欠落したような形状。含鉄部は上半部。酸化土砂が錆色となる。
⑩3	鉄製品 (鍛造品)	SK9	2.6	0.6	0.6	4.2	2	なし	錆ぶくれの内部に3×4mmの断面形を持つ鉄製品を含んでいる。断面形は方形気味。完全に錆化しており、内部が中空気味。鉄釘の側部片か。
⑩4	椀形鍛冶滓 (小・含鉄)	SK13	4.9	7.0	3.3	136.0	4	錆化 ()	含鉄の椀形鍛冶滓の中核部から側部の破片。上下面と右側部が生きており、左側部が主破面。表面の酸化土砂が厚く、不明点が多い。上面は中央部が窪み、側部は発達が良い。下面は椀形で半分以上が炉床土の圧痕か。上手寄りの上下面に含鉄部を残す。
⑩5	鍛冶滓 (含鉄)	SK13	2.6	3.3	2.3	22.6	5	錆化 ()	小塊状の鍛冶滓片。左側部と上手側が途切れており、破面の可能性を持つ。上面には酸化土砂が瘤状に固着し、下面は浅い波状。滓としての発達が弱く、隙間を持つ。
⑩6	鉄製品 (鍛造品)	SK18	3.2	0.6	0.4		3	錆化 ()	断面が長方形で、下に行くにしたがいがすばまる。上下共に欠損する。鉄釘か。
⑩7	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	SK22	5.9	8.9	3.2	203.0	6	錆化 ()	上手側の側部と左右の側部に小破面を残す板状の椀形鍛冶滓。右側部が二段気味で、本来の右側が大きく欠落している可能性あり。上下面はきれいな弧状で、下面は炉床土の圧痕主体。上面に酸化土砂がやや厚い。滓質は緻密。含鉄部は上面上手側付近。
⑩8	椀形鍛冶滓 (大)	G11 攪乱土	11.7	11.3	6.4	790.0	7	なし	やや二段気味の大型の椀形鍛冶滓。上面や左側部に酸化土砂が瘤状に突出する。主破面は下段の滓の右側面。上段の滓は小破面はあるがほぼ完形。上段の滓は中央部が窪み、大きな酸化土砂が2箇所瘤状に乗る。上面左寄りには樋状に窪んでおり工具痕の可能性もある。滓の厚みは上下の滓ともほぼ近似。滓の中心位置がわずかにずれており、下段の滓は上手寄りに1.5cmほど寄っている。左側部の酸化土砂の突出は、含鉄部の影響とは考えにくい。上面の滓の左下手寄りがやや磁着する。
⑩9	椀形鍛冶滓 (中)	F8 層	9.8	10.1	4.5	319.0	6	なし	ほぼ完形の中型の椀形鍛冶滓。右上手側の側部に破面があるが新しく、発掘調査時のものか。左側の側部は窪み、下面もそれに応じて凹凸が著しい。羽口先方向を示すものと推定される。上面は緩やかに窪み、酸化土砂が厚く乗る。下手側の側部が浅く樋状に凹み、工具痕の可能性もある。
⑪0	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	E8 表土	4.3	4.6	4.1	100.5	6	H ()	丸みを帯びた塊状の椀形鍛冶滓破片。側部の大半が破面か。上面はわずかに左側に傾く皿状。酸化土砂が厚く不明点が多い。含鉄部は上手側の側部下半で、黒錆がにじむ。本来の椀形鍛冶滓の中核部破片か。
⑪1	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	F9	5.0	5.1	3.2	128.0	6	H ()	含鉄の椀形鍛冶滓の側部破片。左側部と上手側が破面と推定される。上面左上手側は黒錆がにじみ、放射割れが生じ始めている。含鉄部の位置を読み取れる。下面はやや深い椀形。表面の酸化土砂が厚く不明点が多い。構成 ⑩と厚みの傾向が似ており、含鉄の状態も近似するため同種の遺物と判断される。出土位置はわずかに異なる。
⑪2	椀形鍛冶滓 (小)	F8 -5層 上面	6.4	7.4	3.3	164.0	3	なし	小型の典型的な椀形鍛冶滓。完形品。上下面や側面には不規則な凹凸があるが、椀形鍛冶滓としてのまともは良好。下面の大半は粉炭層に接している。上面右下手側がわずかに樋状に窪む。工具痕の可能性もあるが確定できない。滓の密度は平均的。
⑪3	椀形鍛冶滓 (小)	B7 層	5.4	5.9	3.7	93.5	3	錆化 ()	形態の乱れた小型の椀形鍛冶滓。上手側の側面は大きく欠落し、下面はゆがんだ突出部を持つ。上面中央部は窪み下面が一段と突出する。含鉄部は上面寄りに分散か。下面の突出部は工具等による変形の可能性もあり。
⑪4	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	D8 表土	3.2	4.5	1.6	32.6	6	H ()	極小の椀形鍛冶滓の1/3ほどの破片。薄い板状で上面には1箇所突出部を持つ。主破面は左側部と上手側。下手側は弧状の肩部が生きている。小さな割には含鉄部がしっかりしており、磁着も強い。
⑪5	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	D9 表土	3.7	4.6	2.5	46.4	6	H ()	上手側が厚みをもった極小の椀形鍛冶滓破片。上面は左右方向に向かう浅い樋状で下手側の肩部は薄くなって生きている。右側の側部と上手側の側部が破面か。含鉄部は上手側の肥厚部。古い放射割れが認められる。
⑪6	椀形鍛冶滓 (極小・含鉄)	F8	3.4	5.0	2.0	52.0	5	L ()	全面が酸化土砂に覆われた椀形鍛冶滓破片。平面形が楕円形で左側の側部が破面の可能性が高い。下面はやや浅い椀形。上面は平坦気味。それ以外は不明。
⑪7	鍛冶滓 (含鉄)	C9 表土	2.9	2.5	2.7	32.0	4	H ()	小塊状の含鉄の滓。表面の各所は破面主体で、椀形鍛冶滓の破片なのか鍛冶滓なのかははっきりしない。中核部は含鉄部で外周部は錆化が進む。上手側の側面はきれいな平坦面。
⑪8	鉄塊系遺物	B3 攪乱土	2.6	1.8	1.0	8.0	3	H ()	1.1cmほどの厚みをもったゆがんだ板状の鉄塊系遺物。錆化が進んでいるためか上面には放射割れが生じている。全体に磁着し、含鉄の鍛冶滓片ではないと判断される。上手側と右側面は破面か。
⑪9	鉄塊系遺物	F8 攪乱土	6.4	3.6	1.6	38.0	6	H ()	やや流動気味の外観を持つ鉄塊系遺物。右方向に伸びており、端部は丸みをもって止まっている。上手側の側部が三角形に突出する。上面は浅い皿状で下面には酸化土砂が厚い。全体に磁着するが右端部が特に強い。わずかに流動した鉄塊か。

第3章 発掘調査の成果

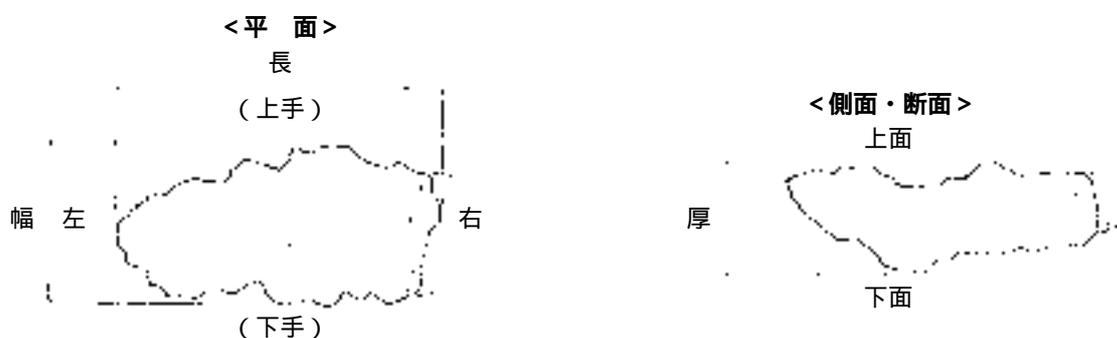
構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑫	鉄塊系遺物	B3 攪乱土	2.6	1.9	1.2	9.6	3	L ()	1.2cmほどの厚みを持った小塊状の鉄塊系遺物。上面は緩やかな波状で、側面は立ち上がり急となる。破面の可能性あり。上手側側面には錆ぶくれが生じ、側面から下面には点々と酸化土砂が固着する。全体に黒錆が吹き、一部に放射割れが生じている。各面が平坦気味で、未製品の可能性も残る。
⑫	鉄塊系遺物	E10/11 攪乱土	3.6	4.1	2.2	68.5	6	L ()	平面・不整五角形で、全面が酸化土砂に覆われた鉄塊系遺物。全体観は椀形で上手側肩部はきれいな弧状となる。左側部と下手側が直線状に途切れており、破面の可能性が残る。上面右手側に突出部あり。裏面は椀形で、放射割れが発達している。鉄部主体の小型の椀形鍛冶滓、または精錬鍛冶で仕上げられた鉄塊の可能性もある。
⑫	鉄製品 (鍛造品)	C9 表土	4.6	2.4	1.0	12.0	3	錆化 ()	別々に実測したが接合する。刀身部は、錆に覆われ観察は困難であるが、反りは弱く一部に鞘の木質が認められる。切っ先はフクラが枯れ、身は鍛造である。刀身部下は欠損する。
⑫	刀	C9 表土	14.1	3.4	0.9	223.0	7	錆化 ()	
⑫	鉄製品 (鍛造品)	C9 表土	8.0	0.9	0.5	28.2	4	錆化 ()	先端部を欠損する。釘の頭は薄くたたきのばし直角に曲げられている。表面には所々に木質が付着し、その繊維方向は釘の長軸に平行する。
⑫	鉄製品 (鍛造品)	C8 層	3.4	2.0	0.3	3.8	3	錆化 ()	鉄鍔の先端部破片。刀部は細身の長三角形で、細い逆V字状の腸袂部を持つ。茎は扁平な長方形断面を持ち、幅は約6mm、厚さは2.5mm前後と極めて薄い。茎部分の大半は欠落する。
⑫	鉄製品 (鍛造品)	F11 攪乱土	3.1	1.5	1.0	6.0	2	錆化 ()	厚い酸化土砂に覆われた鉄製品破片。左右の側面に鉄製品そのものの破面が露出する。右側部は長方形断面で、左側部は扁平な刃部状。刀子の茎部から刃部にかけての破片の可能性あり。
⑫	鉄製品 (鍛造品)	E10 攪乱土	6.2	0.9	0.9	8.6	2	錆化 ()	方形断面の棒状不明品。表面は酸化土砂に覆われており、上手側は芯部が錆化して抜けている。幅は4mm前後と推定される。
⑫	鉄製品 (鍛造品)	表採	4.8	0.8	0.8	6.5	2	錆化 ()	方形ないし長方形の断面を持つ棒状不明品。外周部には瘤状に酸化土砂が固着する。上手側の端部はやや膨らんでおり、この部分が生きていたとすれば釘の可能性もある。下手側が扁平気味で、釘とすればやや異質。
⑫	鉄製品 (鍛造品)	E9 攪乱土	3.0	1.7	0.8	9.8	3	H ()	厚さ6mmほどの鉄片状不明品。平面形は不整長方形。下手側が細くなるようにも見受けられるが酸化土砂か。上面上手には錆ぶくれの欠落があり、側面部は直角に成形されている。何らかの未製品、または鉄製品の破片か。黒錆が吹き、含鉄H ()で、時期的に多少新しい可能性あり。
⑬	鉄製品 (鍛造品)	B8 表土	3.7	1.7	0.6	9.1	3	錆化 ()	厚さ4mm強を測る板状不明品。上下面と右側部が生きており、側面三面が破面。割れ口や錆化の傾向から、さらに大きな鉄製品の端部破片か。右側部は完全に平坦ではなく、やや丸みを持ち、上面の中央部がわずかにたわんでいる。こちらが口縁となる容器状の鉄製品の可能性も残る。錆化の雰囲気から、時期的に新しい可能性もある。
⑬	炉壁 (鍛冶炉)	F8 -5層	7.3	9.0	2.7	102	2	なし	裏面に鍛冶炉の炉床土を残す炉壁破片。内面は全体に淨化している。上端寄りが黒色ガラス質で、中間部は1cm大前後の木炭痕が著しい淨化面。下端部寄りは黒色から灰褐色の発泡気味の滓層となっている。裏面に残る鍛冶炉の炉壁部分は、きれいな弧状の面に沿って全面に残っている。胎土はスコリアの混じるシルト状。微細なヒビ割れが数多く走っている。羽口先下、またはその左右の炉壁破片であろう。
⑬	羽口 (鍛冶炉)	F9 包含層	4.1	5.0	2.5	49.2	2	なし	羽口の先端部の小破片。先端部から肩部にかけては全体が黒色ガラス化し、点々と木炭痕が残る。基部側は破面で、ヒビ割れたまま使用されていたためか外面から肉厚の半分程度までが黒色ガラス質の滓に覆われている。通風孔部はわずかに残存する。先端部側からガラス質の滓が逆流気味。通風孔部の成・整形痕は長軸方向の筋状の工具痕。羽口の胎土はわずかにスサを含む粘土質で、灰色に強く被熱している。
⑬	羽口 (鍛冶炉)	D5 表土	5.2	3.8	2.0	40.0	1	なし	羽口先端部から体部にかけての小破片。通風孔部そのものは欠落する。先端部は溶損。下に向かって黒色ガラス質の垂れが伸び、あご部にも塊状に貼り付いている。垂れた部分は完全にガラス質。表皮は黒色から明るい紫紅色。羽口の体部は最大長3.6cmしか残存しない。外面は斜めに走る8mm間隔ほどの筋目が4条残る。ケズリの単位を示すものか。先端部寄りには薄くガラス質の滓に覆われている。羽口としての肉厚は2cm以上と推定されるが、通風孔部の欠落のため不明。胎土は短いスサを含む粘土質。非常に粘りの強い淨化をする胎土である。
⑬	羽口 (鍛冶炉)	D7 表土	6.5	6.3	2.6	92.5	1	なし	羽口体部から基部にかけての破片。基部は平坦に成形されている。体部は直線状で基部側の1.5cmほどが緩やかな段をなす。成・整形は基本的に長軸方向のケズリの後、斜め方向のナデ。基部はヘラで切り落とされている。通風孔部は基部側に向かってわずかに広がり気味。成・整形は長軸方向と回転方向のナデ。胎土は粗いスサを混じえる粘土質。通風孔部を穿孔したためか、スサ方向が基部側で折り返されている。
⑬	土器附着滓	E10 -5層	4.5	2.5	1.8	13.6	1	なし	須恵器の外面に瘤状の黒色ガラス質滓が付着。ガラス質滓は羽口先由来のもので、構成 ⑩の一部などに似る。部分的に砂粒が残る。母体となる土器は、径の小さなつまみ付きの坏蓋と推定される。外面の風化が著しい。鍛冶の時期を示すものとしてれば7世紀代となり、関連遺物の中では古いものである。
⑬	椀形鍛冶滓 (中・含鉄)	P86	9.0	10.6	4.3	328.0	6	錆化 ()	表面状態のよく残る中型の椀形鍛冶滓。肩部に小破面が残るがほぼ完成品。右上手側の発達が弱い。上面は緩やかな皿状に窪み、木炭痕が点在する。肩部から下面にかけて木炭痕による凹凸の著しい点が特色となる。最も深いものは1.5cmにも達する。木炭の隙間に差し込んだ滓は小さな瘤状に突出している。短軸側の両側部寄りには炉床土または羽口由来の粘土質の滓が小範囲に残る。滓は比重が低く、内部にも中空部や木炭のかみ込みが多い。完全に鍛冶炉の粉炭上で形成されている。
⑬	鉄製品 (鍛造品)	P92	9.0	2.1	0.5	11.4	3	L ()	完形品である。断面方形で、頭部は扁平に打ちのばし「く」の字に曲げる。表面に、木質等の付着は認められない。
⑬	鉄製品 (鍛造品)	P193	5.7	0.8	0.5	19.8	3	M ()	断面方形で中程で大きく折れ曲がり、先端は欠損する。表面に木質等の付着は認められない。
⑬	鉄製品 (鍛造品)	P198	12.8	1.2	0.6	39.0	4	錆化 ()	完形品であるが全体的に厚い錆に覆われ、形状は不明な点が多い。上部はやや幅広く扁平な形状を呈することから刃部の可能性が高いが、反りは認められない。断面系は方形と思われる。錆中には、二次的に付着したと見られる炭化した木質が付着する。

構成	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度	備考
			長さ	幅	厚さ				
⑭	鉄製品 (鍛造品)	P221	3.3	3.8	0.5	15.8	5	H ()	三方に突出部を持つ鉄製品。矢車状で中央部に細い孔が認められる。表面には酸化土砂が小さな瘤状に付着し、錆ぶくれや黒錆が認められる。放射割れもあり、時的には新しい可能性が高い。
⑮	鉄製品 (鍛造品) 棒状鉄製品	P226	4.6	0.8	0.3	9.4	4	錆化 ()	下部は欠損し、上部にいくに従いすばまり上部はわずかに欠損する。厚い錆に覆われ、横断面形は明確ではないが、やや扁平な形状を呈すものとみられる。
⑯	鉄製品 (鍛造品) 釘	P230	8.0	0.9	0.5	19.8	2	L ()	先端部を欠損する。釘の頭部は薄く打ちのばし、直角に折り曲げられる。表面に木質等の付着は認められない。
⑰	鉄製品 (鍛造品) 棒状鉄製品	P332	5.5	0.6	0.6	7.4	3	L ()	上下ともに欠損する。断面形は方形で、表面に木質等の付着は認められない。

凡例

・長さ・幅・厚さ

計測箇所は下図のとおりである。



東山信治編 2002 『殿淵山遺跡・獅子谷遺跡(1)』島根県教育委員会 より引用・改変して使用

・椀形鍛冶滓の分類は以下のとおりである。

(特大) 2000 g 以下前後

(大) 1000 g 以下

(中) 500 g 以下

(小) 250 g 以下

(極小) 125 g 以下

破損しているものは、完形に復元した際の推定重量で分類する。

・磁着度

鉄関連遺物整理用の「標準磁石」(外径約3cm)を使用し、6mmを1単位として資料との反応の程度を表したものである。数字が大きくなるほどメタル部分が多いことを示している。

・メタル度

金属鉄の残留の程度を示すもの。埋蔵文化財用に整準された小型金属探知器によって判定する。

特L () : 20mm大以上の金属鉄が残留することを示す。

L () : 10mm大前後の金属鉄が残留することを示す。

M () : 5mm大前後の金属鉄が残留することを示す。

H () : 2.5mm大前後の金属鉄が残留することを示す。

錆化 () : 本来は金属鉄があったが既に錆びているもの。

なし : 元から金属鉄が無かったもの。

第4章 自然科学分析の成果

第1節 南原千軒遺跡SK13出土動物骨の放射性炭素年代測定

南原千軒遺跡SK13から出土した動物骨^{註)}の年代測定を株式会社加速器分析研究所 (I A A) に依頼した。その結果は以下のとおりである。 (君嶋)

【註】井上貴央氏に鑑定を依頼し、鯨類であるとの結果を得た。

年代測定結果報告書

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- (2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表しています。
- (3) 付記した誤差は、次のように算出しています。
- 複数回(通常は4回)の測定値について²検定を行い、通常報告する誤差は測定値の統計誤差から求めた値を用い、測定値が1つの母集団とみなせない場合には標準誤差を用いています。
- (4) ^{13}C の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される ^{13}C の値を用いることもあります。
- ^{13}C 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰ ; パーミル) で表しています。

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{As} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 \quad (1)$$

$$^{13}\text{C} = [(^{13}\text{As} - ^{13}\text{APDB}) / ^{13}\text{APDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ^{14}As : 試料炭素の ^{14}C 濃度 : ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) s または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$) s

^{14}AR : 標準現代炭素の ^{14}C 濃度 : ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) R または ($^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$) R

^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{As} = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、I A A では加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定していますので、標準試料の測定値との比較から算出した ^{13}C を用いることもあります。この場合は表中に〔加速器〕と注記します。

また、 ^{14}C は、試料炭素が $^{13}\text{C} = -25.0(‰)$ であるとしたときの ^{14}C 濃度(^{14}AN)に換算した上で計算した値です。(1) 式の ^{14}C 濃度を、 ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算します。

$$^{14}\text{AN} = ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{As} \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{As} \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{As} \text{として} ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{AN} - ^{14}\text{AR}) / ^{14}\text{AR}] \times 1000 (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない ^{14}C に相当するBP年代値が比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC(percent Modern Carbon)がよく使われており、 ^{14}C との関係は次のようになります。

$$^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = ^{14}\text{C} / 10 + 100 (\%)$$

国際的な取り決めにより、この ^{14}C あるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age ; yrBP)が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln[^{14}\text{C} / 1000 + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC} / 100)$$

第11表 SK13出土動物骨年代測定結果

IAA Code	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-40861	試料採取場所：鳥取県東伯郡琴浦町光 南原千軒遺跡 試料形態：動物骨 試料名(番号)：1	Libby Age(yrBP) : 310 ± 30 ^{13}C (‰)、(加速器) = - 22.18 ± 0.64 ^{14}C (‰) = - 37.9 ± 3.4 pMC(%) = 96.21 ± 0.34
	(参考) ^{13}C の補正無し	^{14}C (‰) = - 32.3 ± 3.2 pMC(%) = 96.77 ± 0.32 Libby Age(yrBP) : 260 ± 30
#643		

参考

IAAA 40861につきましては、規定通りのコラーゲン抽出法で得られた物質を測定した結果になります。

(株式会社 加速器分析研究所)

第2節 南原千軒遺跡出土土器の胎土分析

白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）

1. 分析の目的

この胎土分析では、南原千軒遺跡から出土した古墳時代後期の須恵器および中世須恵器を理化学的な手法（蛍光X線分析法）で分析した。そして、古墳時代後期の須恵器では倉吉市関金町鳥越山窯跡群と比較した。また中世須恵器の甕は別所遺跡、勝間田焼、亀山焼の各生産地遺跡との比較検討を実施した。

2. 分析方法

蛍光X線分析法は、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

分析した土器は、第13表に示した古墳時代須恵器6点、中世須恵器2点の合計8点の坏・甕などである。

3. 分析結果

第96図K-Ca、第97図Sr-Rb、第98図Ti-Ca、第99図Sr-Zrの各散布図には、古墳時代後期の鳥越山窯跡群と中世の別所遺跡・勝間田焼・亀山焼の各窯跡の分布領域を示しているが、第96図では時期に関係なくほとんどの窯が重なり識別できない。また、第97・98・99図では鳥越山と別所が重なりほとんど識別できないが、鳥越山と勝間田・亀山は一部重なる領域があるが、識別が可能であった。そして、この窯跡分布領域図に南原千軒の7世紀前半および中世須恵器をプロットした。

その結果、第12表のような産地推定となった。

第12表 散布図による南原千軒遺跡出土の7世紀前半・中世須恵器の産地推定

時期	第96図K-Ca	第97図Sr-Rb	第98図Ti-Ca	第99図Sr-Zr	産地推定
7世紀 須恵器	1・2・3・5（鳥越山領域） 4・6（産地不明）	1・2・3（鳥越山領域） 4・5・6（産地不明）	2（鳥越山領域） 1・3・4・5・6（産地不明）	1・2・3（鳥越山領域） 4・5・6（産地不明）	1・2・3（鳥越山窯跡群） 4・5・6（産地不明）
中世 須恵器	7・8（別所・勝間田領域）	7・8（勝間田領域）	7・8（勝間田領域）	7・8（勝間田領域）	7・8 （勝間田焼）

なお、鳥越山の分布領域には、内円と外円を描いており、内円の範囲内には分析した試料53点のうち、41点が入る領域である。

4.まとめ

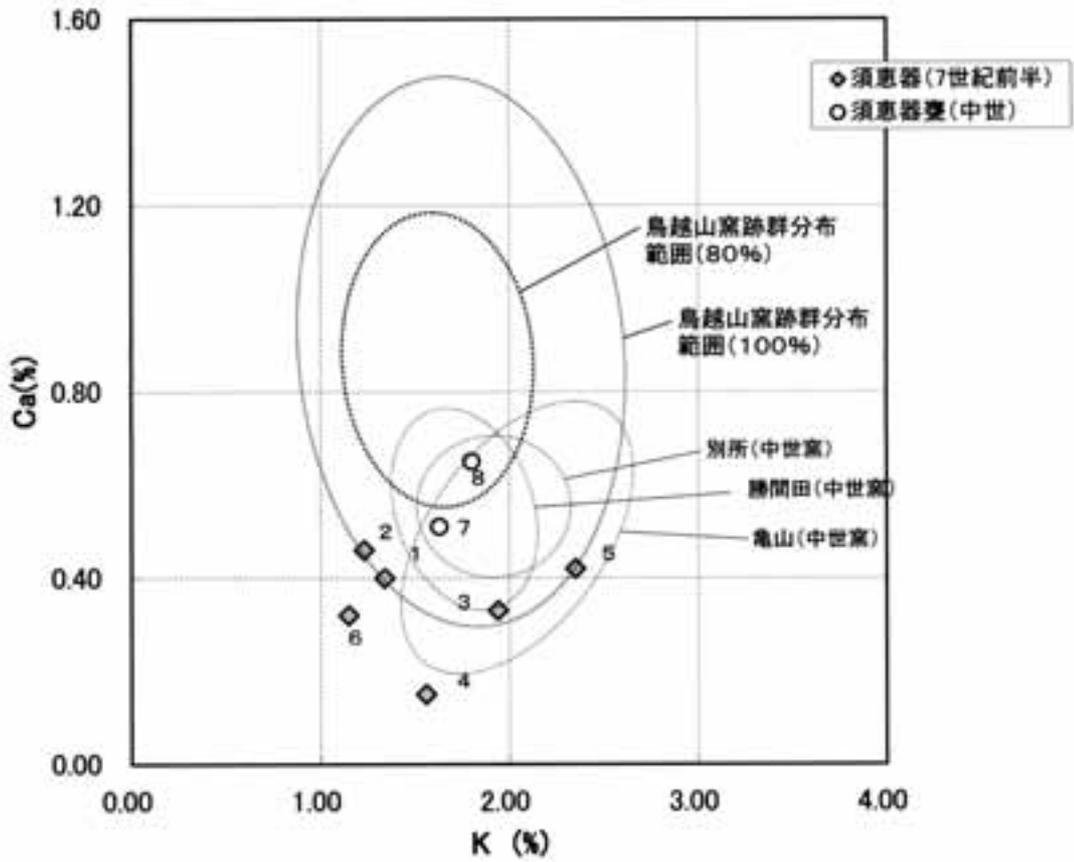
南原千軒遺跡出土土器の胎土分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 7世紀前半の須恵器では、鳥越山に推定できるものは1・2・3の須恵器であった。また、4・5・6は鳥越山の分布域に入らなかった。別の産地のものか今回の分析では明確にできなかった。鳥取県内の他の生産地試料の蓄積をおこない再検討する必要がある。また、鳥越山窯跡の分析試料も6世紀末を中心とした須恵器の分析データであることから、この生産地試料も南原千軒と同時期の須恵器を分析し比較する必要がある。
- (2) 中世須恵器2点の甕は、今回の分析で勝間田産と推定された。

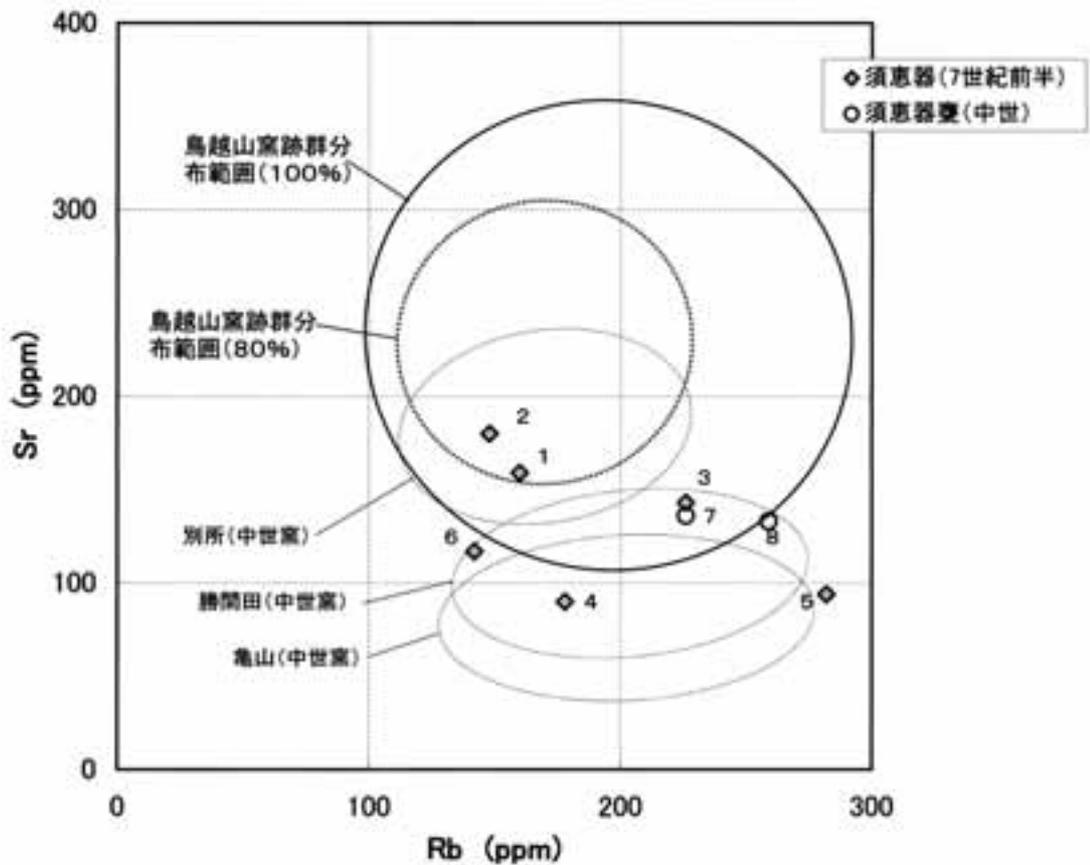
この分析の機会を与えていただいた鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。また、窯跡の分析試料では関金町教育委員会、松江市教育委員会、岡山県古代吉備文化財センター、岡山県勝央町教育委員会、にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

第13表 南原千軒遺跡出土土器の分析一覧表(%)ただし、Rb・Sr・Zrはppm

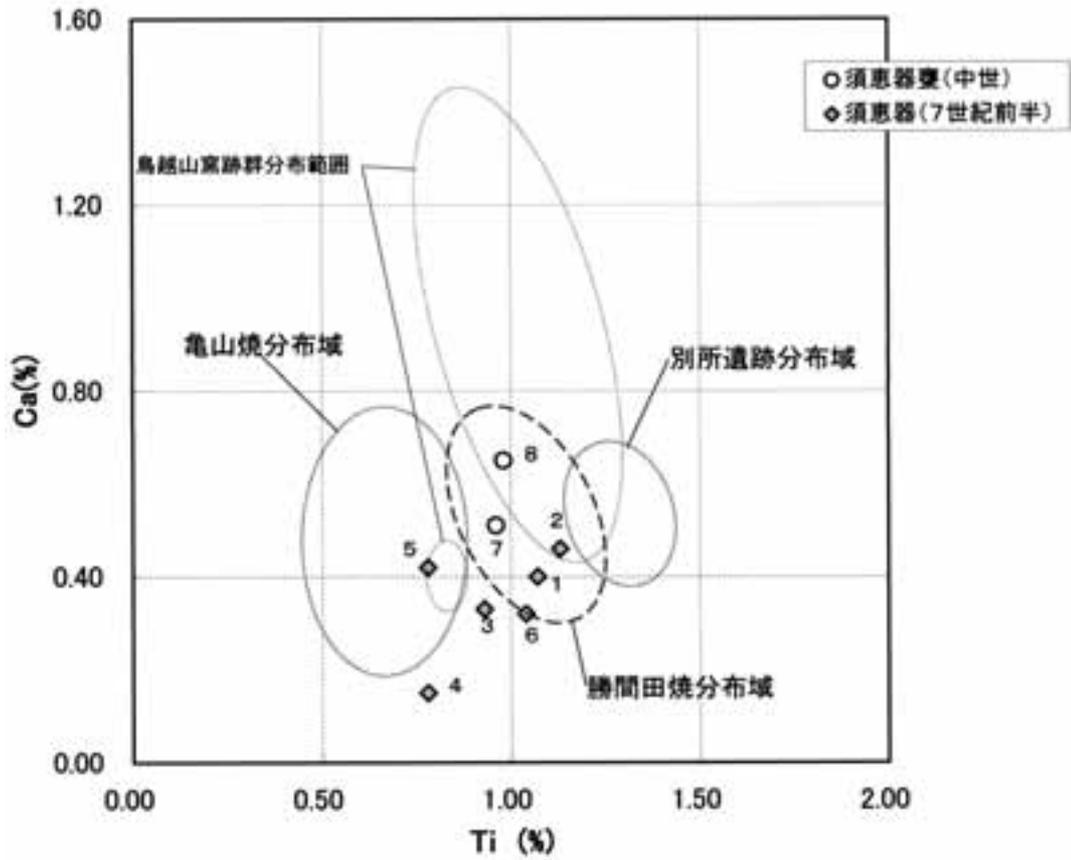
試料	器種	出土遺構	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	須恵器 高坏坏部?	SI 1	66.50	1.07	21.45	3.53	0.03	2.17	0.40	3.21	1.34	0.05	160	159	351
2	須恵器 甕胴部	SI 1	66.89	1.13	22.40	3.29	0.04	1.97	0.46	2.35	1.23	0.08	148	180	346
3	須恵器 坏蓋	SI 6	70.83	0.93	18.00	4.29	0.04	1.64	0.33	1.69	1.94	0.09	226	143	331
4	須恵器 坏蓋	SI 6	65.14	0.78	19.98	7.17	0.07	2.05	0.15	2.80	1.56	0.04	178	90	415
5	須恵器 甕胴部	SI 6	62.39	0.78	23.98	4.91	0.07	2.11	0.42	2.75	2.35	0.03	282	94	347
6	須恵器 甕胴部	SI 6	62.60	1.04	21.97	3.45	0.03	2.89	0.32	6.35	1.15	0.06	142	117	298
7	須恵器 甕肩部	SK13	67.54	0.96	19.74	4.27	0.07	2.06	0.51	2.84	1.63	0.12	226	136	355
8	須恵器 甕胴部	SK13	68.55	0.98	19.04	4.36	0.05	1.97	0.65	2.33	1.80	0.07	259	133	371



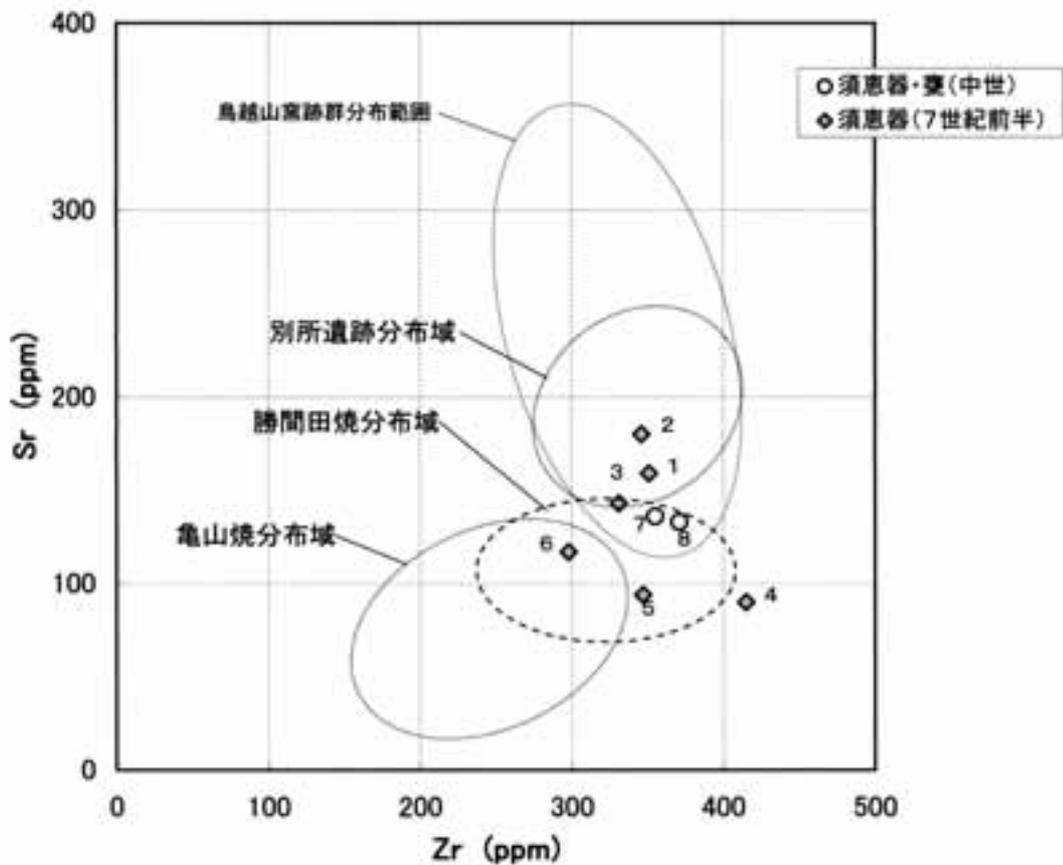
第96図 須恵器の産地推定 (K - Ca)



第97図 須恵器の産地推定 (Rb - Sr)



第98図 須惠器の産地推定 (Ti - Ca)



第99図 須惠器の産地推定 (Zr - Sr)

第3節 南原千軒遺跡出土サヌカイト剥片の産地分析

藁科 哲男（京都大学原子炉実験所）

はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行なっている^{1, 2, 3}。最近の黒曜石の伝播距離に関する研究では、伝播距離は数千キロメートルは一般的で、6000キロメートルを推測する学者もでてきている。正確に産地を判定することは、原理原則に従って同定を行うことである。原理原則は、同じ組成のサヌカイトが異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある石器の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されていると言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。』

産地分析の方法

まず原石採取であるが、本来、一つの産地から産出する全ての原石を採取し分析する必要があるが不可能である。そこで、産地から抽出した数十個の原石でも、産地全ての原石を分析して比較した結果と同じ結果が推測される方法として、理論的に証明されている方法で、マハラノビスの距離を求めて行う、ホテリングのT²乗検定がある。ホテリングのT²乗検定法の同定とクラスター判定法（同定ではなく分類）、元素散布図法（散布図範囲に入るか否かで判定）を比較する。

クラスター判定法はクラスターを作る産地の組み合わせを変えることにより、クラスターが変動する。例えば、A原石製の遺物とA、B、C産地の原石でクラスターを作ったとき遺物はA原石とクラスターを作るが、A原石を抜いて、D、E産地の原石を加えてクラスターを作ると、遺物がE産地とクラスターを作る。A産地が調査されていないと、遺物はE原石製遺物と判定される可能性があり結果の信頼性に疑問が生じる。A原石製遺物と分かっていたら、E原石とクラスターを作らないようにできる。これには、クラスター分析を行う遺物の原石産地を予め推測し、クラスターを組み立てる必要がある、主観的な判定になる。

元素散布図法は肉眼で原石群元素散布の中に遺物の結果が入るか図示した方法で、原石の含有元素の違いを絶対定量値を求めて地球科学的に議論するには、地質学では最も適した方法であるが、産地分析からみると、クラスター法より、さらに後退した方法で、何個の原石を分析すればその産地を正確に表現されているのか不明で、分析する原石の数で、原石数の少ないときには、A産地とB産地が区別できていたのに、原石数を増やすと、A産地、B産地の区別ができなくなる可能性があり（クラスター法でも同じ危険性がある）判定結果に疑問が残る。産地分析としては、地質学の常識的な知識（高校生）さえあればよく、火山学、堆積学など専門知識は必要なく、分析では非破壊で遺物の形態の違いによる相対定量値の影響を評価しながら、同定を行うことが必要で、地球科学的なことは関係なく、如何に原理原則に従って正確な判定を行うかである。クラスター法、元素散布図法の欠点を解決するために考え出された方法が、理論的に証明された判定法でホテリングのT²乗検定法である。

ある産地の原石組成と遺物組成が一致すれば、その産地の原石と決定できるという理論がないために、多数の産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。

考古学では、人工品の様式が一致すると言う結果が非常に重要な意味があり、見える様式としての形態、文様、見えない様式として土器、青銅器、ガラスなどの人手が加わった調合素材があり一致すると言うことは古代人が意識して一致させた可能性があり、一致すると言うことは、古代人の思考が一致すると考えてもよく、相互関係を調査する重要な意味をもつ結果である。石器の様式による分類ではなく、自然の法則で決定した石材の元素組成を指標にした分類では、例えば石材産地が遺跡から近い、移動キャンプ地のルート上に位置する、産地地方との交流を示す土器が出土しているなどを十分条件の代用にすると産地分析は中途半端な結果となり、遠距離伝播した石材を近くの産地と誤判定する可能性がある。人が移動させた石器の元素組成とA産地原石の組成が一致し、必要条件を満たしたとき、確かにA産地との交流で伝播した可能性は否定できなくなったが、偶然（産地分析法が不完全なために）に一致した可能性も大きくB、C、D・・・の産地でないと証拠がないために、A産地だと言い切れない。ここで、十分条件として、可能な限り地球上の全ての原産地（A、B、C、D・・・）の原石群と比較して、A産地以外の産地とは一致しないことを十分条件として証明すれば、石器がA産地の原石と決定することができる。この十分条件を肉眼観察で求めることは分類基準が混乱し不可能であると思われる。また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何ヶ所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、安山岩などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合（マハラノビスの距離）を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。従って、分析した有限個の原石から産地全体の無限の個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT²乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある原石遺物原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に一個みられ、B産地では一万個中に一個、C産地では百万個中に一個、D産地では・・・一個と各産地毎に求められるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。即ち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析した遺物は鳥取県東伯郡琴浦町に位置する南原千軒遺跡出土のサヌカイト剥片21個で、産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト、ガラス質安山岩原石の分析

サヌカイト、ガラス質安山岩原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイト、ガラス質安山岩では、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srの比量を指標として用いる。サヌカ

イトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地、および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所以上の調査を終えている。第100図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多くの地点から良質なサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数個の群に分かれる。丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は、細石器時代に使用された原材で、善通寺市の大麻山南からも産出している。これら産地の原石および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると156個の原石群に分類でき、その結果を第14表に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩の原石群については、香川県埋蔵文化財センターの森下英治氏より提供された金山奥池、雄山の原石を補充して、金山・奥池第1群、奥池第2群、雄山群の原石群を確立し、神谷町南山地区の原石で南山群を作った。このうち、奥池第1群、雄山群、南山群の組成は非常に似ていて、遺物の産地分析では多くの場合これら3個の群に同時に帰属される。また、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され、奥池、雄山、南山の各群と区別することが可能である。これらのガラス質安山岩は成分的に黒曜石に近いものであり肉眼観察では下呂石に酷似するもの、西北九州産の中町、淀姫産黒曜石、大串、亀岳原石と酷似するものもみられるため、風化した遺物ではこれら似た原材の肉眼での区別は困難と思われるので、正確な原材産地の判定をするためには本分析が必要である。またサヌカイト原石のうち金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すものが淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が第15表に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区において岩屋第一群に一致する原石が、それぞれ92%および88%の割合の個数で存在し、その他に群を作らない数個の原石とがみられ、それらのうちで金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される(第16表)。また和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない(第17表)。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、第15、16表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比量を除いて産地分析を行なった場合と除かずに産地分析を行った場合で同定される原産地に差はない。他の元素比量についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した南原千軒遺跡から出土したサヌカイト剥片の分析結果を第18表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Srの一変量だけを考えると、分析番号94456番の剥片はRb/Srの値が0.303で、金山東群の[平均値] ± [標準偏差値]は、 0.293 ± 0.012 であるから、剥片と原石群の差を標準偏差値()を基準にして考えると剥片は原石群から0.83 離れている。ところで金山東群の産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から ± 0.83 のずれより大きいものが41個ある。すなわち、この遺物が、金山東群の原石から作られていたと仮定しても、0.83 以上離れる確率は41%であると言える。だから、金山東群の平均値から0.83 しか離れていないときには、この剥片が金山東群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの剥片を冠高原群に比較すると、冠高原群の平均値からの隔たりは、約12 である。これを確率の言葉で表現すると、冠高原群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から12 以上離れている確率は、一兆分の一であると言える。このように、一兆倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この剥片が作られたとは考えられないから、この剥片は、冠高原群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この剥片は金山東群に41%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから金山東群の原石が使用されていると同定され、さらに冠高原群に対しては百億分の一の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことから冠高原産原石でないと同定される」。剥片が金山東群と一致したからと言っても、剥片が金山産地から採取された証拠はなく、分析している試料は原石でなく剥片でさらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(金山東群)に一致し必要条件を満たしたと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を第14表の156個すべての原石群について行ない、十分条件である低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて金山東産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Srといった唯1個の変量だけでなく、前述した8個の変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT²乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する^{4, 5)}。産地の同定結果は1個の剥片に対して、サヌカイト製では156個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った剥片の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上『記入』を省略しているのみで、実際に計算しているため、省略産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる、すなわち、金山東群の原石と判定された剥片について、広島県冠高原産原石とか佐賀県多久産、奈良県二上山、北海道旭山の原石の可能性を考慮する必要がない結果で、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を第19表に記入した。原石群を作った原石試料は直径2 cm以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざま、これらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を0.1%に設定した。判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するときに、低

確率の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。今回分析した南原千軒遺跡出土のサヌカイト剥片21個のホテルリングのT2乗検定法で第14表の原石群と比較した結果、18個は信頼限界の0.1%を越えて同定された。しかし、分析番号94463、94472、94473番の遺物は信頼限界に達しなかった。信頼限界に達しない理由として、1：遺物が異常に風化している。2：遺物の厚さが薄く、分析値に影響している。3：未発見の原産地の原石が使用されている。などが推測される。今回0.1%に達しなかった遺物は非常に薄く、特に、遺物の平均厚さが1.5mm以下の薄い試料では、Mn/Sr、Fe/Srの比値が大きく分析され、1mm厚でFe/Sr比は約10%程度大きく分析される。しかし、1mm厚あればRb/Sr、Y/Sr、Zr/Srについては分析誤差範囲で産地分析結果への影響は小さく、Mn/Sr、Fe/Srの影響で推定確率は低くなるが原産地の同定は可能と思われる。分析番号94463、94472、94473番の遺物はエッジ部分が非常に薄く平均すると1mm以下の厚さになり、厚さ補正を行った。分析遺物の平均厚さを約0.7mmのときの補正值《Mn/Zrに0.9、Fe/Srに0.915、Rb/Srに0.920、Y/Srに1.01、Zr/Srに1.08そしてNb/Srに1.2の補正》を行い結果を第19表のホテルリングのT2乗検定欄に《 》で推定確率を示した。薄い遺物は補正で、金山東などに同定されるが、1mm以上の平均厚さの遺物は、補正がかかると当然産地同定結果は不明になり、補正によって他の産地に同定されることはなかった。金山東群（一番目）と2番目に同定される原石群の確率差が10倍以上離れて高確率で同定された原石産地では、金山東産原石は11個で、この金山東群と一致する原石は兵庫県岩屋、大阪府和泉・岸和田の原産地からそれぞれ5%、1%の割合で採取されることから、第15表、第16表のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、岩屋、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたか、否か判断しなければならない。岩屋産地から他の組成の原石を採取せず、金山東群と一致した11個を採取する確率は0.05の累乗11で求められ、0.0000と小数点以下14個のゼロが付くほど低い確率になり、和泉・岸和田産地から、11個の金山東原石を採取する確率はさらに低くなり、岩屋、和泉・岸和田産地の両産地から採取された可能性が否定され、金山東麓との交流のみが考えられる。また、金山西原石と城山原石が使用されている。この金山東群の原石は、東方には静岡県また西方には宮崎県高岡町まで伝搬していることが確認された原石と同じ組成であることは、今回産地同定を行うために比較している原石群が同じであることから言える。従って、肉眼観察とか他の分析方法の判定基準を混在していない、原理原則にもとずいて必要条件と十分条件を満たした結果であることから、他の考古学者から判定基準の違いによる誤判定結果の混入による先史時代の交易、交流の不正確さが指摘されたときに明確に否定できる結果が得られた。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学, 10,11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1980), 考古学と物理化学。学生社



第100図 サヌカイトおよびサヌカイト様岩石の原産地

第14表 - 1 各サヌカイト(安山岩)の原産地における原石郡の元素比の平均値と標準偏差値

原産地名原石群名		分析個数	元素比									
			K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
北海道	イトムカ	46	0.359 ± 0.020	0.430 ± 0.014	0.081 ± 0.006	5.884 ± 0.223	0.166 ± 0.011	0.120 ± 0.013	0.883 ± 0.030	0.015 ± 0.013	0.013 ± 0.001	0.137 ± 0.007
	旭山	80	0.351 ± 0.011	0.288 ± 0.010	0.089 ± 0.005	5.064 ± 0.140	0.174 ± 0.011	0.096 ± 0.009	0.903 ± 0.029	0.015 ± 0.012	0.015 ± 0.001	0.141 ± 0.005
	台場A	48	0.278 ± 0.010	0.323 ± 0.009	0.086 ± 0.009	4.941 ± 0.223	0.143 ± 0.008	0.095 ± 0.010	0.768 ± 0.032	0.012 ± 0.006	0.018 ± 0.002	0.149 ± 0.005
	台場B	82	0.341 ± 0.014	0.295 ± 0.017	0.085 ± 0.011	4.787 ± 0.310	0.177 ± 0.014	0.102 ± 0.015	0.929 ± 0.041	0.021 ± 0.010	0.021 ± 0.002	0.169 ± 0.008
	台場C	50	0.238 ± 0.016	0.303 ± 0.008	0.116 ± 0.012	7.800 ± 0.313	0.160 ± 0.016	0.135 ± 0.015	0.856 ± 0.056	0.018 ± 0.012	0.018 ± 0.002	0.150 ± 0.009
群馬県	荒船山	49	0.319 ± 0.008	0.466 ± 0.011	0.119 ± 0.012	6.686 ± 0.217	0.131 ± 0.012	0.140 ± 0.012	0.894 ± 0.042	0.012 ± 0.007	0.019 ± 0.002	0.160 ± 0.007
神奈川県	火打沢	43	0.194 ± 0.070	0.360 ± 0.028	0.129 ± 0.014	9.205 ± 1.153	0.080 ± 0.034	0.085 ± 0.014	0.458 ± 0.082	0.009 ± 0.010	0.013 ± 0.021	0.123 ± 0.032
新潟県	極野	40	0.092 ± 0.005	0.285 ± 0.009	0.166 ± 0.009	12.406 ± 0.332	0.023 ± 0.006	0.111 ± 0.008	0.483 ± 0.023	0.005 ± 0.007	0.012 ± 0.001	0.012 ± 0.001
福井県	滝波川	48	0.231 ± 0.008	0.349 ± 0.028	0.141 ± 0.015	10.218 ± 0.328	0.141 ± 0.012	0.159 ± 0.011	0.819 ± 0.042	0.019 ± 0.012	0.012 ± 0.001	0.124 ± 0.005
福井県	法恩寺山	52	0.327 ± 0.010	0.333 ± 0.008	0.056 ± 0.005	3.145 ± 0.088	0.084 ± 0.005	0.510 ± 0.006	0.606 ± 0.027	0.015 ± 0.006	0.020 ± 0.002	0.150 ± 0.0052
	横川	38	0.478 ± 0.029	0.349 ± 0.020	0.033 ± 0.003	2.137 ± 0.099	0.148 ± 0.007	0.038 ± 0.008	0.667 ± 0.028	0.022 ± 0.006	0.024 ± 0.002	0.192 ± 0.012
長野県	八風山	70	0.183 ± 0.007	0.340 ± 0.017	0.153 ± 0.017	11.018 ± 0.398	0.118 ± 0.011	0.157 ± 0.013	0.721 ± 0.030	0.019 ± 0.009	0.012 ± 0.001	0.113 ± 0.005
岐阜県	下呂	46	0.274 ± 0.028	0.324 ± 0.010	0.090 ± 0.008	4.905 ± 0.505	0.104 ± 0.009	0.100 ± 0.009	0.581 ± 0.033	0.012 ± 0.009	0.018 ± 0.002	0.168 ± 0.014
	豊川	93	1.576 ± 0.055	0.227 ± 0.011	0.038 ± 0.004	7.766 ± 0.025	0.277 ± 0.020	0.031 ± 0.013	0.504 ± 0.024	0.035 ± 0.009	0.052 ± 0.003	0.660 ± 0.025
愛知県	茶臼山	51	0.299 ± 0.007	0.568 ± 0.020	0.052 ± 0.009	4.672 ± 0.338	0.115 ± 0.008	0.083 ± 0.019	0.848 ± 0.028	0.031 ± 0.009	0.020 ± 0.002	0.151 ± 0.005
奈良県	二上山	24	0.293 ± 0.005	0.324 ± 0.007	0.093 ± 0.009	6.643 ± 0.256	0.141 ± 0.009	0.107 ± 0.011	1.086 ± 0.037	0.038 ± 0.009	0.021 ± 0.002	0.157 ± 0.006
大阪府	和泉	51	0.288 ± 0.010	0.215 ± 0.006	0.071 ± 0.006	4.629 ± 0.270	0.202 ± 0.012	0.066 ± 0.009	0.620 ± 0.022	0.024 ± 0.010	0.019 ± 0.001	0.144 ± 0.005
兵庫県	岩屋第一群	26	0.494 ± 0.023	0.325 ± 0.025	0.056 ± 0.004	4.060 ± 0.148	0.296 ± 0.021	0.065 ± 0.010	0.706 ± 0.025	0.038 ± 0.010	0.023 ± 0.001	0.194 ± 0.009
	岩屋第二群	28	0.616 ± 0.021	0.254 ± 0.012	0.057 ± 0.005	3.610 ± 0.189	0.365 ± 0.019	0.056 ± 0.012	0.846 ± 0.026	0.027 ± 0.017	0.018 ± 0.001	0.186 ± 0.007
	淡路第三群	24	0.535 ± 0.020	0.263 ± 0.005	0.053 ± 0.005	3.438 ± 0.103	0.340 ± 0.015	0.042 ± 0.012	1.069 ± 0.030	0.026 ± 0.014	0.017 ± 0.001	0.173 ± 0.008
	甲山	48	0.732 ± 0.032	0.257 ± 0.011	0.065 ± 0.003	4.086 ± 0.103	0.396 ± 0.015	0.088 ± 0.017	1.175 ± 0.055	0.030 ± 0.018	0.039 ± 0.001	0.284 ± 0.011
香川県	五台山	22	0.300 ± 0.017	0.154 ± 0.005	0.056 ± 0.007	3.350 ± 0.261	0.130 ± 0.012	0.061 ± 0.033	0.574 ± 0.021	0.012 ± 0.007	0.018 ± 0.001	0.159 ± 0.008
	金山	28	0.457 ± 0.011	0.251 ± 0.007	0.053 ± 0.005	3.574 ± 0.122	0.311 ± 0.019	0.043 ± 0.016	0.970 ± 0.033	0.038 ± 0.015	0.015 ± 0.001	0.149 ± 0.005
	蓮光寺	18	0.459 ± 0.012	0.249 ± 0.008	0.053 ± 0.005	3.518 ± 0.129	0.308 ± 0.019	0.043 ± 0.015	0.972 ± 0.037	0.034 ± 0.009	0.016 ± 0.001	0.150 ± 0.004
	白峰	51	0.534 ± 0.015	0.262 ± 0.005	0.053 ± 0.005	3.376 ± 0.108	0.340 ± 0.014	0.040 ± 0.016	1.071 ± 0.051	0.032 ± 0.011	0.017 ± 0.001	0.173 ± 0.007
	法印谷	25	0.397 ± 0.009	0.239 ± 0.004	0.069 ± 0.005	4.619 ± 0.127	0.277 ± 0.012	0.059 ± 0.011	1.145 ± 0.029	0.031 ± 0.013	0.015 ± 0.001	0.130 ± 0.004
	金山東	48	0.478 ± 0.014	0.227 ± 0.006	0.076 ± 0.009	4.511 ± 0.119	0.293 ± 0.022	0.083 ± 0.014	1.183 ± 0.046	0.020 ± 0.010	0.025 ± 0.003	0.188 ± 0.005
	金山西	43	0.414 ± 0.011	0.217 ± 0.006	0.078 ± 0.007	4.574 ± 0.132	0.283 ± 0.014	0.073 ± 0.015	1.100 ± 0.040	0.032 ± 0.013	0.023 ± 0.002	0.168 ± 0.006
	城山	63	0.402 ± 0.011	0.216 ± 0.006	0.079 ± 0.006	4.741 ± 0.138	0.289 ± 0.014	0.068 ± 0.016	1.065 ± 0.026	0.021 ± 0.014	0.013 ± 0.001	0.116 ± 0.003
	双子山	54	0.350 ± 0.007	0.233 ± 0.005	0.074 ± 0.006	4.898 ± 0.169	0.261 ± 0.012	0.061 ± 0.014	1.093 ± 0.035	0.023 ± 0.016	0.011 ± 0.002	0.105 ± 0.004
	*奥池第一群	51	0.842 ± 0.046	0.127 ± 0.006	0.024 ± 0.006	2.087 ± 0.088	0.492 ± 0.030	0.018 ± 0.018	0.722 ± 0.047	0.045 ± 0.013	0.035 ± 0.003	0.434 ± 0.024
	*奥池第二群	50	0.641 ± 0.052	0.133 ± 0.007	0.033 ± 0.007	2.471 ± 0.135	0.391 ± 0.028	0.021 ± 0.017	0.934 ± 0.067	0.038 ± 0.011	0.029 ± 0.003	0.331 ± 0.027
	*雄山	50	0.827 ± 0.052	0.128 ± 0.006	0.026 ± 0.008	2.119 ± 0.091	0.485 ± 0.032	0.016 ± 0.018	0.731 ± 0.050	0.043 ± 0.014	0.035 ± 0.003	0.421 ± 0.027
	*神谷・南山	51	0.852 ± 0.040	0.131 ± 0.007	0.027 ± 0.008	2.083 ± 0.088	0.495 ± 0.026	0.020 ± 0.016	0.703 ± 0.045	0.050 ± 0.014	0.035 ± 0.004	0.433 ± 0.023
	*大麻山南第一群	39	0.693 ± 0.072	0.149 ± 0.007	0.041 ± 0.010	2.792 ± 0.180	0.473 ± 0.043	0.034 ± 0.021	0.965 ± 0.061	0.044 ± 0.012	0.029 ± 0.003	0.344 ± 0.038
	*大麻山南第二群	34	0.992 ± 0.041	0.124 ± 0.009	0.034 ± 0.011	2.370 ± 0.138	0.691 ± 0.024	0.021 ± 0.022	0.774 ± 0.032	0.054 ± 0.015	0.039 ± 0.004	0.480 ± 0.018
愛媛県	中井谷	40	0.458 ± 0.041	0.374 ± 0.007	0.073 ± 0.009	5.160 ± 0.157	0.393 ± 0.022	0.108 ± 0.017	1.473 ± 0.051	0.037 ± 0.021	0.020 ± 0.008	0.219 ± 0.009
鳥取県	馬ノ山	41	0.188 ± 0.007	0.178 ± 0.006	0.011 ± 0.001	0.916 ± 0.033	0.032 ± 0.002	0.001 ± 0.002	0.177 ± 0.009	0.004 ± 0.002	0.015 ± 0.001	0.111 ± 0.005
	下砂見	46	0.168 ± 0.003	0.162 ± 0.004	0.021 ± 0.003	1.447 ± 0.038	0.028 ± 0.004	0.011 ± 0.003	0.262 ± 0.026	0.007 ± 0.003	0.016 ± 0.001	0.119 ± 0.005
	麻畑	51	0.442 ± 0.012	0.444 ± 0.044	0.061 ± 0.006	3.570 ± 0.097	0.109 ± 0.008	0.080 ± 0.009	0.988 ± 0.032	0.078 ± 0.009	0.027 ± 0.003	0.206 ± 0.006
広島県	冠高原	60	0.651 ± 0.021	0.485 ± 0.014	0.046 ± 0.004	3.322 ± 0.104	0.174 ± 0.009	0.029 ± 0.009	0.462 ± 0.017	0.185 ± 0.010	0.025 ± 0.002	0.241 ± 0.008
	伴蔵C	45	0.277 ± 0.010	0.345 ± 0.008	0.019 ± 0.002	1.604 ± 0.057	0.039 ± 0.015	0.008 ± 0.006	0.368 ± 0.012	0.026 ± 0.006	0.019 ± 0.001	0.171 ± 0.006
	伴蔵A	51	0.340 ± 0.008	0.319 ± 0.008	0.020 ± 0.003	1.347 ± 0.025	0.047 ± 0.011	0.011 ± 0.005	0.381 ± 0.021	0.044 ± 0.056	0.019 ± 0.002	0.190 ± 0.009
	冠山東	29	0.323 ± 0.019	0.363 ± 0.031	0.019 ± 0.001	1.607 ± 0.060	0.059 ± 0.009	0.003 ± 0.005	0.399 ± 0.043	0.025 ± 0.009	0.021 ± 0.001	0.171 ± 0.006
	坂山	25	1.116 ± 0.061	0.472 ± 0.022	0.037 ± 0.005	2.228 ± 0.080	0.245 ± 0.011	0.023 ± 0.009	0.524 ± 0.014	0.246 ± 0.013	0.038 ± 0.003	0.391 ± 0.021
山口県	平生	45	0.184 ± 0.009	0.190 ± 0.006	0.112 ± 0.031	7.290 ± 0.346	0.170 ± 0.015	0.077 ± 0.011	0.691 ± 0.040	0.026 ± 0.010	0.011 ± 0.001	0.097 ± 0.004

第14表 - 2 各サヌカイト(安山岩)の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地名原石群名	分析個数	元素比										
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
福岡県 八女市	昭和池第一群	50	1.825 ± 0.041	0.644 ± 0.024	0.053 ± 0.007	2.125 ± 0.063	0.453 ± 0.019	0.107 ± 0.017	1.477 ± 0.049	0.044 ± 0.022	0.050 ± 0.003	0.500 ± 0.012
	昭和池第二群	50	1.592 ± 0.066	0.609 ± 0.020	0.061 ± 0.005	3.075 ± 0.123	0.534 ± 0.039	0.111 ± 0.020	1.671 ± 0.134	0.049 ± 0.012	0.042 ± 0.003	0.419 ± 0.014
	昭和池第三群	50	3.144 ± 0.069	0.724 ± 0.036	0.073 ± 0.009	2.919 ± 0.099	0.925 ± 0.048	0.181 ± 0.026	2.820 ± 0.114	0.072 ± 0.020	0.074 ± 0.026	0.817 ± 0.040
	昭和池第四群	50	1.922 ± 0.108	0.681 ± 0.050	0.064 ± 0.005	3.023 ± 0.103	0.607 ± 0.033	0.122 ± 0.017	1.887 ± 0.098	0.050 ± 0.015	0.050 ± 0.004	0.499 ± 0.018
佐賀県	多久第一群	40	0.820 ± 0.053	0.405 ± 0.013	0.056 ± 0.009	4.680 ± 0.233	0.494 ± 0.033	0.049 ± 0.029	0.912 ± 0.045	0.199 ± 0.030	0.031 ± 0.003	0.284 ± 0.017
	多久第二群	42	0.844 ± 0.061	0.395 ± 0.019	0.061 ± 0.010	5.106 ± 0.397	0.539 ± 0.053	0.069 ± 0.030	0.911 ± 0.050	0.197 ± 0.028	0.032 ± 0.004	0.293 ± 0.026
	梅野(多久第3群)	42	1.287 ± 0.051	0.340 ± 0.013	0.058 ± 0.010	3.643 ± 0.225	0.784 ± 0.030	0.081 ± 0.022	0.824 ± 0.033	0.265 ± 0.032	0.038 ± 0.009	0.458 ± 0.050
	老松山	62	0.704 ± 0.029	0.314 ± 0.009	0.073 ± 0.015	5.266 ± 0.176	0.533 ± 0.035	0.077 ± 0.027	0.720 ± 0.053	0.191 ± 0.035	0.026 ± 0.028	0.249 ± 0.010
	寺山・岡本	50	0.629 ± 0.043	0.310 ± 0.088	0.070 ± 0.012	5.553 ± 0.236	0.492 ± 0.034	0.083 ± 0.021	0.700 ± 0.032	0.180 ± 0.027	0.024 ± 0.002	0.227 ± 0.014
	西有田	17	0.453 ± 0.019	0.331 ± 0.005	0.098 ± 0.010	7.489 ± 0.249	0.307 ± 0.024	0.081 ± 0.015	0.568 ± 0.023	0.106 ± 0.010	0.023 ± 0.002	0.237 ± 0.016
	松尾転礫	47	0.717 ± 0.036	0.410 ± 0.012	0.081 ± 0.006	5.312 ± 0.241	0.383 ± 0.024	0.094 ± 0.013	0.810 ± 0.039	0.095 ± 0.023	0.028 ± 0.027	0.291 ± 0.014
	松尾第二群	40	0.970 ± 0.032	0.330 ± 0.009	0.066 ± 0.007	3.683 ± 0.121	0.431 ± 0.021	0.077 ± 0.016	0.554 ± 0.023	0.110 ± 0.021	0.034 ± 0.003	0.377 ± 0.012
	椎葉産第一群	42	0.822 ± 0.027	0.369 ± 0.010	0.065 ± 0.007	3.888 ± 0.236	0.392 ± 0.021	0.076 ± 0.018	0.540 ± 0.049	0.089 ± 0.020	0.027 ± 0.009	0.330 ± 0.013
	椎葉産第二群	41	0.675 ± 0.016	0.390 ± 0.010	0.073 ± 0.007	4.666 ± 0.218	0.346 ± 0.021	0.078 ± 0.012	0.582 ± 0.065	0.087 ± 0.013	0.024 ± 0.007	0.280 ± 0.011
	椎葉産第三群	12	0.538 ± 0.011	0.401 ± 0.007	0.076 ± 0.010	5.271 ± 0.189	0.296 ± 0.019	0.075 ± 0.015	0.587 ± 0.024	0.075 ± 0.009	0.022 ± 0.002	0.227 ± 0.009
	椎葉産第四群	37	0.744 ± 0.014	0.409 ± 0.010	0.080 ± 0.010	5.176 ± 0.202	0.399 ± 0.020	0.092 ± 0.015	0.807 ± 0.027	0.096 ± 0.023	0.029 ± 0.003	0.302 ± 0.010
長崎県	大串	28	1.111 ± 0.118	0.140 ± 0.009	0.055 ± 0.020	1.650 ± 0.236	0.236 ± 0.043	0.041 ± 0.027	0.486 ± 0.038	0.082 ± 0.022	0.050 ± 0.006	0.607 ± 0.059
	龜岳	19	1.072 ± 0.042	0.144 ± 0.008	0.041 ± 0.006	1.776 ± 0.152	0.233 ± 0.014	0.015 ± 0.013	0.497 ± 0.018	0.065 ± 0.015	0.049 ± 0.003	0.587 ± 0.018
	牟田第一群	51	0.788 ± 0.084	0.341 ± 0.023	0.067 ± 0.009	4.581 ± 0.198	0.884 ± 0.119	0.224 ± 0.055	0.753 ± 0.082	0.259 ± 0.053	0.029 ± 0.004	0.273 ± 0.028
	牟田第二群	40	0.588 ± 0.042	0.330 ± 0.018	0.088 ± 0.014	7.611 ± 0.599	1.058 ± 0.119	0.348 ± 0.069	1.033 ± 0.102	0.402 ± 0.064	0.023 ± 0.003	0.203 ± 0.014
	川棚第一群	59	0.498 ± 0.030	0.302 ± 0.011	0.067 ± 0.005	4.225 ± 0.181	0.220 ± 0.018	0.076 ± 0.010	0.814 ± 0.048	0.035 ± 0.012	0.012 ± 0.002	0.133 ± 0.008
	川棚第二群	42	0.357 ± 0.031	0.238 ± 0.008	0.073 ± 0.002	5.078 ± 0.182	0.198 ± 0.025	0.043 ± 0.005	0.751 ± 0.059	0.018 ± 0.013	0.023 ± 0.001	0.153 ± 0.011
	福井第一群	46	0.634 ± 0.019	0.330 ± 0.007	0.087 ± 0.016	7.527 ± 0.226	1.174 ± 0.030	0.381 ± 0.042	1.096 ± 0.047	0.480 ± 0.070	0.023 ± 0.002	0.217 ± 0.007
	福井第二群	47	0.509 ± 0.016	0.315 ± 0.007	0.078 ± 0.010	7.116 ± 0.234	0.909 ± 0.042	0.299 ± 0.046	0.947 ± 0.054	0.361 ± 0.055	0.020 ± 0.002	0.177 ± 0.007
	崎針尾第一群	67	0.382 ± 0.026	0.252 ± 0.023	0.052 ± 0.006	4.106 ± 0.227	0.106 ± 0.018	0.057 ± 0.009	0.434 ± 0.039	0.056 ± 0.011	0.010 ± 0.001	0.107 ± 0.007
	崎針尾第二群	56	0.590 ± 0.072	0.393 ± 0.020	0.077 ± 0.009	5.396 ± 0.448	0.330 ± 0.028	0.078 ± 0.015	0.675 ± 0.059	0.096 ± 0.017	0.024 ± 0.006	0.219 ± 0.041
熊本県	駒崎鼻	42	0.635 ± 0.072	0.309 ± 0.009	0.071 ± 0.012	5.519 ± 0.425	0.500 ± 0.050	0.076 ± 0.025	0.690 ± 0.055	0.183 ± 0.030	0.025 ± 0.003	0.231 ± 0.025
	阿蘇第一群	39	1.999 ± 0.212	0.664 ± 0.061	0.067 ± 0.011	1.862 ± 0.368	0.476 ± 0.060	0.126 ± 0.023	1.647 ± 0.181	0.067 ± 0.014	0.067 ± 0.010	0.602 ± 0.086
	阿蘇第二群	44	1.045 ± 0.171	0.547 ± 0.064	0.056 ± 0.008	2.822 ± 0.410	0.312 ± 0.048	0.088 ± 0.015	1.108 ± 0.160	0.046 ± 0.013	0.036 ± 0.006	0.302 ± 0.038
	菊池	42	0.678 ± 0.057	0.458 ± 0.020	0.062 ± 0.005	3.457 ± 0.206	0.194 ± 0.018	0.072 ± 0.009	0.728 ± 0.054	0.025 ± 0.010	0.019 ± 0.002	0.185 ± 0.015
鹿児島県	上牛鼻	50	0.612 ± 0.015	0.496 ± 0.009	0.042 ± 0.005	2.625 ± 0.103	0.164 ± 0.007	0.073 ± 0.013	0.977 ± 0.021	0.018 ± 0.008	0.029 ± 0.003	0.271 ± 0.007
	標準試料 JG-1*	56	1.327 ± 0.021	0.266 ± 0.006	0.058 ± 0.006	2.817 ± 0.074	0.756 ± 0.015	0.183 ± 0.024	0.762 ± 0.033	0.078 ± 0.014	0.036 ± 0.003	0.448 ± 0.011

麻畑原産地は岡山理科大学白石純氏発見の原産地(近日正式発表予定)
 平均値 ± 標準偏差値 * : 黒曜石様ガラス質安山岩 a) : Ando,A., Kurawasa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8 175-192.

第14表 - 3 原産地不明の組成の似たサヌカイト(安山岩)製遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

原産地名原石群名	分析個数	元素比										
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
北海道	頭無川遺物群	35	0.352 ± 0.029	0.291 ± 0.021	0.094 ± 0.012	5.376 ± 0.721	0.170 ± 0.015	0.103 ± 0.016	0.874 ± 0.101	0.018 ± 0.011	0.017 ± 0.021	0.156 ± 0.090
	納内No.17遺物群	48	0.284 ± 0.006	0.316 ± 0.008	0.113 ± 0.016	9.214 ± 0.461	0.158 ± 0.013	0.160 ± 0.013	1.067 ± 0.046	0.022 ± 0.012	0.020 ± 0.002	0.164 ± 0.040
千葉県	千葉1群	32	0.089 ± 0.002	0.307 ± 0.005	0.177 ± 0.013	13.143 ± 0.459	0.066 ± 0.006	0.116 ± 0.012	0.557 ± 0.030	0.016 ± 0.008	0.012 ± 0.002	0.102 ± 0.004
	千葉2群	36	0.292 ± 0.012	0.352 ± 0.007	0.109 ± 0.010	7.204 ± 0.254	0.184 ± 0.011	0.135 ± 0.013	0.906 ± 0.035	0.024 ± 0.013	0.019 ± 0.002	0.161 ± 0.008
	千葉3群	48	0.098 ± 0.002	0.306 ± 0.004	0.141 ± 0.012	8.952 ± 0.285	0.032 ± 0.008	0.096 ± 0.008	0.419 ± 0.019	0.011 ± 0.006	0.014 ± 0.001	0.120 ± 0.003
	千葉4群	48	0.134 ± 0.002	0.259 ± 0.004	0.128 ± 0.012	9.617 ± 0.196	0.092 ± 0.009	0.098 ± 0.009	0.612 ± 0.023	0.017 ± 0.009	0.012 ± 0.001	0.093 ± 0.002
	有吉No.13群	48	0.143 ± 0.002	0.243 ± 0.004	0.114 ± 0.010	7.889 ± 0.163	0.091 ± 0.009	0.097 ± 0.009	0.566 ± 0.029	0.016 ± 0.009	0.015 ± 0.002	0.117 ± 0.003
石川県	有吉No.14群	48	0.204 ± 0.002	0.310 ± 0.004	0.116 ± 0.009	8.780 ± 0.158	0.146 ± 0.009	0.106 ± 0.010	0.654 ± 0.026	0.015 ± 0.002	0.015 ± 0.002	0.130 ± 0.003
	酒見遺物群	42	0.447 ± 0.064	0.608 ± 0.017	0.089 ± 0.012	5.098 ± 0.781	0.153 ± 0.019	0.116 ± 0.014	1.258 ± 0.118	0.016 ± 0.012	0.024 ± 0.004	0.208 ± 0.027
	地方15865群	48	0.366 ± 0.011	0.341 ± 0.013	0.077 ± 0.008	4.116 ± 0.119	0.115 ± 0.012	0.087 ± 0.010	0.586 ± 0.059	0.012 ± 0.008	0.022 ± 0.002	0.204 ± 0.007
	地方19398群	48	0.333 ± 0.005	0.363 ± 0.007	0.060 ± 0.004	3.314 ± 0.089	0.087 ± 0.006	0.048 ± 0.009	0.619 ± 0.017	0.018 ± 0.009	0.020 ± 0.002	0.152 ± 0.004
岐阜県	野管No.261他群	56	0.632 ± 0.032	0.393 ± 0.013	0.045 ± 0.005	2.234 ± 0.070	0.170 ± 0.009	0.046 ± 0.012	1.030 ± 0.041	0.029 ± 0.006	0.022 ± 0.002	0.213 ± 0.010
	野管No.271他群	35	0.407 ± 0.010	0.304 ± 0.005	0.040 ± 0.005	1.882 ± 0.041	0.089 ± 0.005	0.033 ± 0.005	0.671 ± 0.030	0.023 ± 0.005	0.018 ± 0.002	0.177 ± 0.006
	野管No.282他群	33	0.799 ± 0.009	0.512 ± 0.010	0.050 ± 0.005	2.540 ± 0.096	0.221 ± 0.014	0.077 ± 0.011	1.213 ± 0.039	0.034 ± 0.007	0.026 ± 0.002	0.240 ± 0.009
	野管No.289他群	32	3.515 ± 0.134	1.068 ± 0.047	0.149 ± 0.023	6.620 ± 0.453	0.617 ± 0.041	0.210 ± 0.032	1.330 ± 0.067	0.158 ± 0.027	0.016 ± 0.015	0.252 ± 0.081
	野管No.262群	40	0.384 ± 0.004	0.318 ± 0.006	0.057 ± 0.005	2.356 ± 0.068	0.102 ± 0.007	0.051 ± 0.007	0.651 ± 0.022	0.022 ± 0.005	0.017 ± 0.002	0.161 ± 0.004
静岡県	野管No.295群	32	3.584 ± 0.178	1.077 ± 0.058	0.075 ± 0.016	3.775 ± 0.153	0.441 ± 0.024	0.197 ± 0.019	1.118 ± 0.053	0.150 ± 0.028	0.183 ± 0.019	0.989 ± 0.159
	川津No.1群	48	0.101 ± 0.002	0.297 ± 0.003	0.145 ± 0.012	13.011 ± 0.347	0.056 ± 0.009	0.112 ± 0.009	0.589 ± 0.028	0.011 ± 0.009	0.011 ± 0.001	0.288 ± 0.002
愛知県	朝日No.7群	35	0.334 ± 0.004	0.362 ± 0.005	0.067 ± 0.009	3.895 ± 0.150	0.082 ± 0.005	0.044 ± 0.007	0.758 ± 0.044	0.027 ± 0.009	0.017 ± 0.002	0.147 ± 0.010
	朝日No.15群	35	1.016 ± 0.022	0.582 ± 0.012	0.043 ± 0.005	4.187 ± 0.141	0.477 ± 0.019	0.089 ± 0.020	1.722 ± 0.058	0.058 ± 0.026	0.032 ± 0.009	0.557 ± 0.021
京都府	赤ヶ平No.13群	48	0.458 ± 0.012	0.199 ± 0.003	0.053 ± 0.007	3.752 ± 0.073	0.217 ± 0.017	0.060 ± 0.011	0.635 ± 0.047	0.013 ± 0.006	0.019 ± 0.002	0.145 ± 0.004
大阪府	向出No.6群	30	0.236 ± 0.003	0.189 ± 0.003	0.075 ± 0.005	4.966 ± 0.089	0.194 ± 0.010	0.063 ± 0.011	0.588 ± 0.019	0.010 ± 0.011	0.015 ± 0.001	0.127 ± 0.002
	向出No.49群	30	0.310 ± 0.003	0.203 ± 0.003	0.052 ± 0.004	3.734 ± 0.074	0.228 ± 0.016	0.059 ± 0.010	0.610 ± 0.021	0.011 ± 0.012	0.017 ± 0.001	0.147 ± 0.002
	中社No.62群	30	0.333 ± 0.003	0.229 ± 0.003	0.066 ± 0.004	4.363 ± 0.080	0.212 ± 0.014	0.066 ± 0.011	0.618 ± 0.019			

原産地名原石群名	分析個数	元素比										
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
島根県	家の後No.14群	48	1.518 ± 0.195	0.929 ± 0.084	0.108 ± 0.014	7.721 ± 0.024	0.462 ± 0.036	0.101 ± 0.022	1.134 ± 0.046	0.026 ± 0.011	0.049 ± 0.007	0.384 ± 0.041
	平田磨製石斧群	48	0.365 ± 0.025	0.281 ± 0.018	0.252 ± 0.010	3.352 ± 0.083	0.241 ± 0.013	0.016 ± 0.008	0.189 ± 0.024	0.005 ± 0.002	0.023 ± 0.003	0.165 ± 0.006
山口県	上太田6遺物群	45	0.261 ± 0.005	0.202 ± 0.004	0.077 ± 0.002	5.481 ± 0.073	0.276 ± 0.011	0.076 ± 0.013	0.861 ± 0.020	0.016 ± 0.013	0.020 ± 0.001	0.127 ± 0.001
徳島県	城ノ内遺物群	50	3.129 ± 0.089	1.851 ± 0.049	0.185 ± 0.020	17.480 ± 0.603	1.168 ± 0.046	0.235 ± 0.052	2.177 ± 0.082	0.115 ± 0.038	0.144 ± 0.012	1.445 ± 0.053
香川県	六ツ目遺物群	30	0.307 ± 0.004	0.258 ± 0.005	0.067 ± 0.005	4.736 ± 0.096	0.235 ± 0.010	0.058 ± 0.014	0.840 ± 0.023	0.030 ± 0.013	0.146 ± 0.005	0.133 ± 0.004
高知県	庵の谷遺物群	60	0.684 ± 0.012	0.248 ± 0.006	0.066 ± 0.012	4.139 ± 0.128	0.429 ± 0.019	0.077 ± 0.022	1.178 ± 0.040	0.058 ± 0.013	0.025 ± 0.002	0.262 ± 0.007
	松ノ木遺物群	37	0.610 ± 0.017	0.223 ± 0.004	0.079 ± 0.005	4.528 ± 0.120	0.325 ± 0.016	0.063 ± 0.017	1.151 ± 0.028	0.019 ± 0.014	0.024 ± 0.002	0.193 ± 0.006
宮崎県	永迫No.18遺物群	48	0.293 ± 0.007	0.237 ± 0.003	0.050 ± 0.006	3.976 ± 0.127	0.164 ± 0.010	0.061 ± 0.010	0.658 ± 0.026	0.024 ± 0.008	0.017 ± 0.002	0.127 ± 0.007
	永迫No.19遺物群	48	0.440 ± 0.085	2.190 ± 0.242	0.026 ± 0.005	0.671 ± 0.068	0.012 ± 0.002	0.057 ± 0.005	0.913 ± 0.047	0.050 ± 0.008	0.339 ± 0.037	4.867 ± 0.543
	永迫No.328遺物群	45	0.239 ± 0.006	0.195 ± 0.003	0.065 ± 0.002	5.106 ± 0.092	0.174 ± 0.010	0.063 ± 0.007	0.628 ± 0.014	0.013 ± 0.010	0.010 ± 0.001	0.097 ± 0.001
	永迫329-316遺物群	50	1.017 ± 0.015	0.270 ± 0.006	0.057 ± 0.002	3.168 ± 0.082	0.538 ± 0.016	0.114 ± 0.007	1.194 ± 0.030	0.021 ± 0.013	0.037 ± 0.001	0.386 ± 0.015
	久木野10遺物群	34	0.397 ± 0.006	0.297 ± 0.007	0.071 ± 0.009	3.723 ± 0.129	0.181 ± 0.011	0.048 ± 0.012	0.397 ± 0.029	0.071 ± 0.010	0.021 ± 0.002	0.189 ± 0.012
	久木野12遺物群	48	0.687 ± 0.010	0.369 ± 0.008	0.046 ± 0.005	2.596 ± 0.074	0.132 ± 0.008	0.033 ± 0.010	0.995 ± 0.027	0.066 ± 0.011	0.033 ± 0.003	0.284 ± 0.014
	久木野17遺物群	45	37.546 ± 7.947	6.872 ± 1.512	0.055 ± 0.024	12.163 ± 1.242	1.718 ± 0.118	0.319 ± 0.060	1.898 ± 0.167	0.211 ± 0.052	1.490 ± 0.316	16.795 ± 3.403
	久木野26遺物群	48	20.336 ± 1.582	7.598 ± 0.614	0.046 ± 0.015	7.914 ± 0.477	1.359 ± 0.073	0.396 ± 0.064	3.562 ± 0.227	0.050 ± 0.029	0.803 ± 0.098	8.469 ± 0.649
	久木野44遺物群	45	0.766 ± 0.067	0.513 ± 0.029	0.049 ± 0.019	2.430 ± 0.163	0.334 ± 0.034	0.418 ± 0.052	0.739 ± 0.083	0.069 ± 0.036	0.080 ± 0.016	4.625 ± 0.293
	久木野45遺物群	48	1.207 ± 0.070	1.243 ± 0.056	0.022 ± 0.009	1.545 ± 0.063	0.152 ± 0.015	0.080 ± 0.015	0.493 ± 0.039	0.030 ± 0.012	0.160 ± 0.020	7.566 ± 0.327
	小田元1遺物群	48	3.016 ± 0.070	0.776 ± 0.023	0.072 ± 0.015	5.825 ± 0.210	1.422 ± 0.045	0.327 ± 0.070	2.927 ± 0.123	0.128 ± 0.032	0.095 ± 0.010	1.075 ± 0.035
	小田元2遺物群	48	6.803 ± 0.509	6.350 ± 0.483	0.053 ± 0.019	28.371 ± 1.498	0.952 ± 0.046	0.273 ± 0.046	2.286 ± 0.179	0.114 ± 0.041	0.505 ± 0.068	10.179 ± 0.870
	小田元16遺物群	48	10.792 ± 0.566	6.922 ± 0.400	0.039 ± 0.011	7.900 ± 0.181	0.941 ± 0.035	0.152 ± 0.048	2.189 ± 0.088	0.103 ± 0.027	0.449 ± 0.040	3.560 ± 0.188
	小田元17遺物群	48	7.394 ± 0.483	5.276 ± 0.388	0.087 ± 0.020	16.004 ± 0.737	1.026 ± 0.046	0.209 ± 0.053	1.914 ± 0.088	0.094 ± 0.042	0.359 ± 0.039	3.562 ± 0.299
	小田元18遺物群	48	1.235 ± 0.051	1.195 ± 0.063	0.066 ± 0.029	1.396 ± 0.168	0.779 ± 0.069	0.908 ± 0.074	2.009 ± 0.190	0.139 ± 0.063	0.100 ± 0.013	5.405 ± 0.216
	小田元20遺物群	48	4.151 ± 0.104	0.877 ± 0.032	0.069 ± 0.018	5.517 ± 0.182	1.853 ± 0.058	0.515 ± 0.061	3.206 ± 0.112	0.197 ± 0.011	0.129 ± 0.011	1.394 ± 0.045
	小田元21遺物群	48	0.152 ± 0.015	0.188 ± 0.022	0.023 ± 0.010	2.606 ± 0.215	0.123 ± 0.023	0.227 ± 0.026	0.621 ± 0.086	0.033 ± 0.019	0.026 ± 0.005	1.251 ± 0.131
	小田元22遺物群	48	2.988 ± 0.185	1.712 ± 0.113	0.083 ± 0.018	12.064 ± 0.318	0.995 ± 0.031	0.214 ± 0.069	2.217 ± 0.088	0.114 ± 0.033	0.099 ± 0.009	0.901 ± 0.048
	小田元23遺物群	48	1.071 ± 0.027	0.751 ± 0.028	0.075 ± 0.012	10.726 ± 0.392	0.708 ± 0.030	0.147 ± 0.040	1.690 ± 0.066	0.093 ± 0.025	0.043 ± 0.004	0.377 ± 0.010
鹿児島県	大原野24遺物群	48	0.783 ± 0.013	0.525 ± 0.008	0.041 ± 0.006	2.415 ± 0.071	0.202 ± 0.010	0.091 ± 0.016	1.131 ± 0.034	0.025 ± 0.011	0.033 ± 0.003	0.324 ± 0.006
	大原野27遺物群	48	7.505 ± 0.286	3.161 ± 0.125	0.065 ± 0.019	16.100 ± 1.244	1.072 ± 0.042	0.154 ± 0.049	1.722 ± 0.067	0.102 ± 0.032	0.190 ± 0.021	1.418 ± 0.080
	大原野28遺物群	48	7.403 ± 0.961	2.017 ± 0.279	0.096 ± 0.039	6.621 ± 0.075	1.250 ± 0.098	0.800 ± 0.091	1.995 ± 0.192	0.118 ± 0.062	0.326 ± 0.065	16.352 ± 2.120
	大原野34遺物群	48	0.694 ± 0.010	0.337 ± 0.005	0.079 ± 0.011	6.278 ± 0.206	0.592 ± 0.023	0.081 ± 0.031	0.872 ± 0.034	0.190 ± 0.002	0.043 ± 0.004	0.258 ± 0.008
	道下段76遺物群	50	0.354 ± 0.006	0.302 ± 0.004	0.072 ± 0.001	4.520 ± 0.051	0.174 ± 0.009	0.073 ± 0.011	0.677 ± 0.019	0.020 ± 0.013	0.023 ± 0.001	0.155 ± 0.001

注：向出遺跡、下山No.5.No.11群、中ノ社遺跡、六ツ目遺跡、松ノ木遺跡、朝日遺跡、鬼虎川遺跡、野篁No.262、295群、粟生間谷遺跡、永迫2遺跡、笹吹2遺跡、川平遺跡、家の後遺跡、横ヶ峠遺跡、川津町、有吉遺跡、堅田遺跡No.8.24.28遺物群、地方遺跡、小田元第2遺跡、大原野遺跡、道下段遺跡の分析個数は1個の遺物の分析場所を変えて分析した回数をあらわす。下山遺跡(No.4.No.14.No.15)、平田遺跡(No.12.No.13)、庵の谷遺跡、野篁遺跡、喜時雨遺跡、東船遺跡、千葉2、3、4遺物群、城ノ内遺物群(No.13.No.22)の分析個数はそれぞれ2個以上の遺物の分析場所を変えて分析した回数をあらわす。

第15表 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原産地との関係
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
	6	9	法印谷群に一致
	5	8	国分寺群に一致
	4	6	蓮光寺群に一致
	3	5	金山東群に一致
	2	3	和泉群に一致
	4	6	不明(どこの原石群にも属さない)

第16表 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原産地との関係
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明(どこの原石群にも属さない)

第17表 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原産地との関係
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	淡路島、岸和田、和歌山に出現
	10	48	不明(どこの原石群にも属さない)

第18表 南原千軒遺跡出土サヌカイト剥片の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
94455	0.441	0.222	0.089	4.757	0.292	0.090	1.187	0.027	0.022	0.172
94456	0.439	0.222	0.088	4.819	0.303	0.081	1.177	0.000	0.021	0.171
94457	0.452	0.223	0.085	4.639	0.292	0.086	1.165	0.024	0.022	0.175
94458	0.438	0.222	0.084	4.653	0.309	0.089	1.179	0.022	0.022	0.173
94459	0.438	0.222	0.083	4.562	0.291	0.088	1.172	0.024	0.022	0.172
94460	0.424	0.221	0.084	4.704	0.309	0.077	1.170	0.042	0.021	0.166
94461	0.448	0.232	0.089	5.051	0.301	0.067	1.129	0.027	0.013	0.123
94462	0.437	0.222	0.086	4.498	0.289	0.091	1.146	0.037	0.021	0.168
94463	0.457	0.223	0.089	4.978	0.331	0.072	1.107	0.025	0.013	0.123
94464	0.454	0.222	0.085	4.859	0.312	0.071	1.133	0.027	0.012	0.121
94465	0.447	0.223	0.088	4.646	0.314	0.082	1.199	0.019	0.022	0.176
94466	0.435	0.227	0.082	4.497	0.282	0.088	1.211	0.037	0.022	0.171
94467	0.436	0.225	0.084	4.628	0.278	0.076	1.198	0.020	0.021	0.168
94468	0.438	0.220	0.088	4.885	0.322	0.069	1.123	0.033	0.012	0.120
94469	0.440	0.222	0.087	4.699	0.301	0.080	1.164	0.008	0.022	0.173
94470	0.437	0.222	0.085	4.778	0.329	0.077	1.105	0.024	0.012	0.119
94471	0.439	0.225	0.088	4.691	0.311	0.078	1.163	0.019	0.021	0.167
94472	0.442	0.221	0.094	5.192	0.318	0.077	1.090	0.029	0.012	0.118
94473	0.446	0.219	0.091	5.123	0.319	0.072	1.098	0.030	0.012	0.121
94474	0.447	0.229	0.088	4.628	0.288	0.070	1.142	0.039	0.022	0.173
94475	0.431	0.223	0.084	4.550	0.304	0.089	1.156	0.011	0.021	0.168
JG-1	1.265	0.284	0.052	2.736	0.737	0.171	0.854	0.045	0.036	0.410

JG-1：標準試料Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

第19表 南原千軒遺跡出土サヌカイト剥片の原産地分析結果

分析番号	番号	出土地	取上No.	ホテリングのT2乗検定(確率)	判定	時代・時期
94455	6	B6・7	2350	金山東(4%),城山(0.1%),金山西(0.2%)	金山東	弥生時代
94456	7	弥生包含層	227	金山東(0.9%)	金山東	弥生時代終末期
94457	8	SD2:3区上層	227	金山東(57%),城山(1%),金山西(0.6%)	金山東	弥生時代終末期
94458	9	SD2:3区上層	227	金山東(24%),城山(0.5%),金山西(0.5%)	金山東	弥生時代終末期
94459	10	SD2:3区上層	227	金山東(53%),城山(5%),金山西(4%)	金山東	弥生時代終末期
94460	11	SD2:3区上層	227	金山西(14%),城山(5%),金山東(0.1%)	金山西・城山	弥生時代終末期
94461	12	SD2:3区上層	227	城山(0.1%)	城山	弥生時代終末期
94462	13	SD2:3区上層	227	金山東(7%),城山(3%),金山西(3%)	金山東・金山西・城山	弥生時代終末期
94463	14	SD2:3区上層	227	《金山東(64%)》	金山東	弥生時代終末期
94464	15	SD2:3区上層	227	金山西(1%),城山(0.8%)	金山西・城山	弥生時代終末期
94465	16	SD2:3区上層	227	金山東(77%)	金山東	弥生時代終末期
94466	17	SD2:3区下層	229	金山東(1%)	金山東	弥生時代終末期
94467	18	SD2:3区下層	229	金山東(6%),金山西(2%),城山(0.3%)	金山東・金山西	弥生時代終末期
94468	19	SD2:3区下層	229	城山(0.3%),金山西(0.2%)	金山西・城山	弥生時代終末期
94469	20	SD2:3区下層	229	金山東(12%),城山(0.6%),金山西(0.6%)	金山東	弥生時代終末期
94470	21	SD2:3区下層	229	城山(2%),金山西(2%)	金山東・金山西	弥生時代終末期
94471	22	SD2:3区下層	229	金山東(3%)	金山東	弥生時代終末期
94472	23	SD2:3区下層	229	《金山西(2%),金山東(1%),城山(0.3%)》	金山東・金山西	弥生時代終末期
94473	24	SD2:3区下層	229	《金山東(8%),金山西(0.7%),城山(0.2%)》	金山東	弥生時代終末期
94474	25	SD2:3区下層	229	金山西(1%),金山東(1%)	金山東・金山西	弥生時代終末期
94475	26	SD2:3区下層	229	金山東(8%),城山(6%),金山西(3%)	金山東・金山西・城山	弥生時代終末期

注意：近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法（土器様式の基準も研究方法で異なるように）にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係（相互チェックなし）ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察する必要があります。

《金山東(64%)》：《 》で示された推定確率は、分析遺物の平均厚さを0.7mmのときの補正值《Mn/Sr=0.9、Fe/Sr=0.915、Rb/Sr=0.92、Y/Sr=1.01、Zr/Sr=1.08、Nb/Sr=1.2》を用いて元素比値を補正後、表1の156個原石群の中で最も高い確率で判定された原石産地を記し、低い確率の原石産地は紙面の都合で省略した。

第4節 南原千軒遺跡出土碧玉・ヒスイ製玉材の産地分析

藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
（有）遺物分析研究所

はじめに

今回分析を行った玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のように思われているのが実態である。これら玉材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどくらいであり、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこかの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなく、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）や碧玉の原産地のうち、どこかの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説であったが、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2, 3)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究としては蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用することで産地分析をより正確に行った例⁴⁾が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動距離、活動範囲は、石器が生活必需品であるので、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではなく、勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリとして精神的な面に重要な作用を与えられとされる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を表わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏ではないかと考えられる。このように玉類の産地分析では、石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は、鳥取県東伯郡琴浦町に位置する南原千軒遺跡出土弥生時代の碧玉製玉材の9個およびヒスイ製玉材1個の合計10個で、分析結果は先ず碧玉製玉材を、次にヒスイ製玉材の順番に報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を

消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している⁴⁾非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダ - に置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比を測り、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した⁵⁾。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を第101図に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピ - クも異同はあるものの第101図で示されるピ - クは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第102図に示す。佐渡猿八原産地は、新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であつたらしく採石跡が何ヶ所か見られるが、今回分析した原石は猿八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であつた。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のもは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系の縞があるなど、多少色の違いがあつても分析した組成上には大きな差はみられなかつた。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は 島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。横屋堀地区から産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがつて比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のもは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域のもが分析されているのがわかる。これら花仙山周辺の面白谷、瑠璃公園、くらさこ地区などから原石を採取し組成の似た原石でくらさこ群、面白谷瑠璃群、また、花仙山凝灰岩群などを作つた。玉谷原産地は、 兵庫県豊岡市辻、八代谷、日高町玉谷地域で産出する。碧玉の色、石質な

どは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より緻密で優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した玉谷産原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。ここの河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。また元素組成は他の産地の組成と異なっており区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重を分析した8個は2.25～2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6～2.5が5個、2.5～2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の礫から採取するため、短時間で良質の碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。石川県小松市菩提、那谷に緑色凝灰岩の露頭があり、その中に緻密な碧玉が包含されている。産出量は少ないが良質の碧玉が菩提川、宇田川から採取される。この河床から採取された碧玉の中に、女代南B遺物群に一致する組成の碧玉が含まれる。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り第20表-1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒に行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索するという目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B(女代B)群であるが、同質の材料で作られた可能性がある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木汲田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作ら

れた管玉で作った未定C（未定（C））群をそれぞれ原石群と同じように使用する。また、岐阜県可児市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚（1）（2）の遺物群、多摩ニュータウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、現在遺物群は合計92個になり、これら遺物群を第20表 - 2 に示した。この他、鳥取県の福部村多鯨ヶ池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉様の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重（2.35）が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

南原千軒遺跡出土の玉材と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、（1）蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。（2）また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら玉材の蛍光X線分析のスペクトルを第103図1～9に示し、比重および管玉の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を第21表に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb, Sr, Y, Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。また、緑色凝灰岩（グリ-ンタフ）製は比重が2.4に達しない玉材が多い。分析した玉材の比重は、2.58～2.50で碧玉製と推測される。これら遺物の元素組成比の結果を碧玉原石群（第20表）の結果と比較してみる。分析個数が少なく統計処理ができる群が作れなかった原産地については、原石の元素組成比を、遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT²乗検定⁶⁾により同定をおこない、それぞれの原石群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{4, 5)}。産地の同定結果は1個の管玉に対して、119個の推定確率結果が得られている。119個の結果の中で、高確率で同定された原石群（必要条件満たした）の産地に管玉の原材産地を同定するが、原理原則は、同じ組成の碧玉が異なった産地では生成されないという理論がないために、少なくとも遺跡から半径数千キロメートルの内にある玉類の原材産地の原石と遺物を比較し、必要条件と十分条件を満たす必要がある。『遺物原材とある産地の原石が一致したという「必要条件」を満たしても、他の産地の原石にも一致する可能性が残っているから、他の産地には一致しないという「十分条件」を満たして、一致した産地の原石が使用されていると言い切れる。また、十分条件を求めることにより、一致しなかった産地との交流がなかったと結論でき、考古学に重要な資料が提供される。』十分条件の低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、本研究ではこれら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる。すなわち菩提、那谷産原石と判定された遺物に対して、花仙山産原石とか玉谷産の原石の可

能性を考える必要がないという結果であり、ここでは高い確率で同定された産地のみの結果を第22表に記入した。原石群を作った原石試料は直径2cm以上で精度良く分析される。遺物は、大きさ、形がさまざまにこれらの影響により分析値が少しは変化していることを推測し、判定の信頼限界を0.1%に設定した。判定結果には推定確率が求められているために、先史時代の交流を推測するとき、低確率の遺物はあまり重要に考えないなど、考古学者が推定確率をみて選択できるために、誤った先史時代交流を推測する可能性がない。蛍光X線分析の判定で、女代南B群、菩提、那谷原石と同定(第22表)された玉材を、より正確に産地を特定するためにESR分析を併用して総合的に産地分析を行った。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第104図-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号()は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号()と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号()で構成されている。第104図-(1)では、信号()より信号()の信号の高さが高く、第104図-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号()が信号()より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号()の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第105図-(1)に花仙山、猿八、玉谷、土岐を第105図-(2)に興部、石戸、八代谷-4、女代B遺物群は菩提、那谷原石と一致、八代谷および第105図-(3)に富良野市空知川の空知(A)、B、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号()のスペクトルを示す。第105図-(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリ-ンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR分析では玉材と管玉のESR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石だったり、産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、その産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した玉材のESR信号()の結果を第106図に示す。分析番号94446~94454の信号()は女代南Bとか菩提・那谷原石形である。これら一致したESR信号形を第22表に示し、より正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合は、遺物が過大でESR分析ができず蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確に、その原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定原石産地の欄に結果(第22表)を記した。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)などの軽元素⁷⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)、鉄(Fe)、ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)、チタニウム(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、ルビジウム(Rb)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)、ニオブウム(Nb)、バリウム(Ba)、ランタニウム(La)、セリウム(Ce)の

各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピ - クを観測し、そのピークの大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピ - クを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法に頼る他ないのではなからうか。各原産地（第107図）の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川、大屋、若桜、大佐、神居コタン、長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高、引佐、飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高、飛騨、引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピ - クがFeのピ - クに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピ - クが見られ、Baのピ - クも大きく、糸魚川産では見られないLa、Ceのピ - クが観測されている。このCeのピ - クは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するとき有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピ - クが見られるのが特徴的である。日高産、引佐産、飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またFeピークに比べてSrなどのピ - クが小さいのが特徴で糸魚川産のものと区別するときの判断基準になる。

春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr、Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSr、Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雪浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉、大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)のピークが見られる個体が多いのも特徴である。

これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系、コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のものと、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若桜産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑かかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産、大屋産の原石では比重が3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質、種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質な原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行なうときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。第23表 - 1、2に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最小値と最大値の範囲を示し、判定基準23 - 1とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重が3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(1)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産、引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小さくて、糸魚川産と区別する判定基準23 - 1になる。第23表 - 2の判定基準にはCr、Mn、Rb、Y、Nb、Ba、La、Ceの各元素の蛍光X線ピ - クが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピ - クが観測されなかったとき、その遺物は、若桜、大佐、長崎産のヒスイでないといえる。

第108図はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。は大佐産の、は若桜産の、は大屋産のヒスイの分布を示している。

糸魚川と大佐、若桜、大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピ - クが見られなかった場合、第23表 - 2の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。印の日高産および*印の引佐産ヒスイの分布の一部が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Fe比を指標とすることにより(第109図)糸魚川産ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことにより(第110図)遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

南原千軒遺跡出土のヒスイ製玉材の分析結果

出土玉材の比重が3.33(アルキメデス法)あり良質硬玉の可能性の範囲に入る。蛍光X線スペクトル(第111図)には硬玉の主成分の一つのNa元素が観測されることから、この玉を硬玉製と判定した。また、分析できた含有元素の結果を第24表に示した。この硬玉製玉材の原産地を明らかにするために、これら分析値を各原産地の原石の元素比量Sr/Fe対Zr/Srの分布範囲と比較すると、玉材は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示す(第108図)。また、Sr/Fe対Ca/Siでも、玉は糸魚川産の範囲にのみ入り、糸魚川産地のヒスイの可能性を示した(第109図)。またNa/Si対Mg/Siの第110図では、玉は糸魚川、大佐、若桜、神居コタンの重なる範囲に入っている。これら判定に使用した図と判定基準表23 - 1の比重の範囲およびBa元素の有無などの条件を考慮して、全ての条件を

満たした玉の産地として、糸魚川・青海産硬玉を使用した玉と同定し、結果を第25表に示した。

結 論

分析番号94446～94449、94451～94454番の玉材は、蛍光X線分析とESR分析の両結果が女代南B遺物群と菩提に一致し、女代南B遺物群で菩提・那谷産地の原石が使用されていると判定した。分析番号944450番は蛍光X線分析では菩提に一致し、ESR分析も女代南B形（菩提形）と一致することから、菩提・那谷産の原石が使用されていると判定した。また94481番はESR信号は女代南B形崩れで、蛍光X線分析の結果は、第20表の何処の原石・遺物群にも信頼限界の0.1%を越えて一致しなかった。南原千軒遺跡で多用されている女代南B群は菩提・那谷産原石で、弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、滋賀県の筑摩佃、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に女代南B遺物群が使用されていた。京都府の日吉ヶ丘遺跡、鳥取県八幡遺跡女代南B遺物群（菩提・那谷産）が使用されている。また余部遺跡で剥片には玉谷産原石が使用され、湯坂遺跡では管玉1個が出土している。女代南B遺物群は関東地方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では、清洲町朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、畿内地域では東大阪市の、鬼虎川、巨摩、亀井、久宝寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地方では、佐用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末～中期初頭の玉材、岡山市の百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県湯梨浜町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。また、続縄文時代には北海道の上磯町茂別遺跡、余市大川遺跡、千歳市キウス遺跡にまで伝播し、女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、今だ畿内では使用が確認されていない管玉として、南溝手遺跡の中期前葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ里遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されている。また、猿八産原石が弥生時代に使用されている遺跡は、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の続縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大麻22遺跡出土の続縄文（後北C1式）の管玉に、七飯町の大中山13遺跡（続縄文）出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。西日本では、鳥取県の長瀬高浜遺跡では女代南B群と同時に猿八産碧玉が使用されているにすぎない。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ル・トとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレ・式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。未定C群は、最近の予備的な実験で朝日遺跡で使用されている可能性が推測されたことから、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ル・トをって伊予、備前、讃岐へ流入し現在の東進の限界になっている。朝日遺跡での使用が確実になれば、播磨、摂津、大和、近江を飛び越え、尾張の朝日遺跡に伝播したことが明らかになり東進の限界が一気に300km延

びる可能性がでている（第102図）。花仙山産原石は弥生後期に笠見第3遺跡で使用され、湯坂遺跡でも確認されている。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団（原石群）を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島猿八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B遺物群を作る遺物の一部は菩提・那谷産地に一致するが、全ての組成の遺物を菩提・那谷地区に存在するか調査を深めていく必要がある。また、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これら不明遺物群の原石群を作ることが今後の課題である。また、今回分析した南原千軒遺跡のC5グリッド：表土から出土した硬玉製玉材にはBa元素のピークがされず、比重も3.3以上あり良質の硬玉のようである。糸魚川産硬玉の使用圏を抜粋して示すと例えば北海道千歳市美々遺跡から青森県大石平遺跡、岩手県大日遺跡、山梨県石堂遺跡、岐阜県西田遺跡、愛知県白石遺跡、三重県森添遺跡、大分県二反田遺跡、熊本県ワクド石遺跡、宮崎県学頭遺跡まで日本全国におよび、これら遺跡では糸魚川産ヒスイが尊重される共通の基盤を持っていたと思われ、糸魚川産地から遠くなるにしたがって、希少価値が増すと推測され本遺跡がヒスイの玉類を入手できる力（経済力）が大きかったことが推測される（第107図）。また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な玉類を数多く調査することが重要で、是非とも各地の遺跡の詳細な玉類の科学的調査が必要であるが現在調査が殆ど進んでいないのが現状で、国庫補助での発掘調査には必ず科学的調査も加えるべきだと思う。今回行った産地分析は完全な非破壊で、玉類、碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われま

参考文献

- 1) 茅原一也(1964)、長者が原遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藁科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 藁科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』,14:95-109
- 4) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学,16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina(1992)、Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 6) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学,9:77-90

第20表 - 2 各原石産地不明碧玉類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差

遺物群名	分析回数	Al/Si		K/Si		Ca/K		Ti/K		K/Fe		Rb/Fe		Sr/Zr		Y/Zr		Mn/Fe		Ti/Fe		Nb/Zr		比重	
		X _{av} ±σ	X _v ±σ																						
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.171±0.097	0.034±0.016	0.028±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019											
未定C	58	0.030±0.028	4.416±0.618	0.013±0.013	0.207±0.034	0.589±0.130	0.650±0.113	0.583±0.110	0.369±0.035	0.090±0.030	0.070±0.026	0.022±0.001	0.101±0.019	0.019±0.016	2.646±0.023										
車塚1	33	0.030±0.015	3.774±0.404	0.015±0.005	0.278±0.043	0.334±0.031	0.469±0.030	0.782±0.016	0.365±0.016	0.071±0.012	0.090±0.060	0.002±0.001	0.081±0.013	0.033±0.013	2.619±0.019										
車塚2	45	0.035±0.015	4.066±0.618	0.012±0.004	0.232±0.025	0.544±0.118	0.672±0.112	0.540±0.122	0.350±0.026	0.070±0.0280	0.057±0.024	0.002±0.001	0.109±0.023	0.038±0.013	2.616±0.019										
牟田辺	58	0.082±0.042	3.327±0.450	0.853±0.213	0.913±0.178	0.091±0.019	0.161±0.018	1.342±0.160	0.214±0.026	0.140±0.412	0.064±0.024	0.067±0.008	0.018±0.010	2.1~											
天王山4号第1主体-No.1	38	0.018±0.004	1.341±0.031	0.079±0.013	0.277±0.013	0.257±0.011	0.389±0.036	0.814±0.057	0.316±0.032	0.168±0.027	0.074±0.031	0.066±0.001	0.069±0.003	0.055±0.027											
天王山4号第1主体-No.2	40	0.027±0.000	2.602±0.025	0.021±0.003	0.234±0.006	0.184±0.001	0.228±0.005	2.645±0.044	0.599±0.014	0.135±0.009	0.066±0.007	0.013±0.007	0.039±0.001	0.018±0.011											
天王山4号第1主体-No.5	42	0.034±0.000	3.572±0.129	0.002±0.002	0.252±0.009	0.777±0.030	1.035±0.040	0.287±0.009	0.295±0.005	0.072±0.004	0.041±0.004	0.025±0.015	0.176±0.003	0.025±0.004											
天王山4号第2主体-No.7	42	0.036±0.000	2.650±0.020	0.003±0.003	0.073±0.007	0.557±0.010	0.672±0.019	0.517±0.014	0.345±0.007	0.074±0.006	0.337±0.015	0.023±0.019	0.036±0.003	0.012±0.007											
長塚(1)	47	0.036±0.004	3.525±0.347	0.033±0.005	0.439±0.050	0.204±0.037	0.361±0.040	2.756±0.473	0.980±0.110	0.472±0.083	0.379±0.143	0.005±0.001	0.094±0.013	0.022±0.016	2.533±0.016										
長塚(2)	45	0.028±0.007	2.659±0.122	0.010±0.004	0.064±0.003	0.719±0.065	0.832±0.054	0.412±0.038	0.341±0.023	0.036±0.010	0.386±0.242	0.004±0.001	0.047±0.004	0.024±0.013	2.569±0.003										
No.200-1	32	0.042±0.004	0.808±0.025	3.588±0.074	0.639±0.016	0.051±0.002	0.042±0.006	1.751±0.149	0.073±0.016	4.665±0.374	0.239±0.026	0.006±0.001	0.033±0.001	0.006±0.009	2.308										
No.200-2	28	0.037±0.004	0.990±0.021	2.384±0.067	0.605±0.029	0.064±0.003	0.072±0.011	1.422±0.075	0.102±0.015	6.680±0.322	0.170±0.017	0.008±0.001	0.038±0.002	0.006±0.010	2.277										
No.200-3	28	0.039±0.003	0.926±0.020	2.527±0.114	1.085±0.059	0.653±0.009	0.053±0.002	0.053±0.009	0.088±0.093	4.455±0.197	0.343±0.031	0.014±0.003	0.058±0.003	0.002±0.005	2.27										
No.200-4	32	0.047±0.007	0.855±0.025	3.771±0.079	1.228±0.035	0.657±0.003	0.118±0.023	1.110±0.129	0.130±0.030	9.626±1.090	0.117±0.025	0.005±0.001	0.068±0.002	0.006±0.008	2.256										
No.200-6	32	0.040±0.006	4.185±0.162	0.031±0.006	0.103±0.003	0.821±0.019	0.692±0.040	0.646±0.037	0.447±0.025	0.207±0.020	0.296±0.026	0.111±0.002	0.082±0.003	0.038±0.026	2.542										
本郷-No.17	30	0.049±0.003	0.922±0.036	4.701±0.161	1.027±0.112	0.042±0.002	0.193±0.062	1.390±0.134	0.271±0.096	8.307±0.791	0.118±0.036	0.008±0.002	0.043±0.004	0.005±0.005											
本郷-No.23	34	0.049±0.003	1.094±0.030	3.635±0.074	0.823±0.021	0.658±0.021	0.166±0.012	1.282±0.021	0.888	0.213±0.021	0.137±0.019	0.006±0.001	0.047±0.001	0.005±0.005											
本郷-No.16	27	0.053±0.004	1.254±0.037	3.706±0.076	0.970±0.092	0.029±0.004	0.085±0.018	2.626±0.429	0.215±0.025	8.981±0.646	0.170±0.028	0.013±0.001	0.027±0.002	0.004±0.004											
本郷-No.22	32	0.051±0.005	1.274±0.089	3.133±0.146	0.699±0.046	0.048±0.003	0.175±0.022	-----	0.329±0.047	6.754±0.505	0.168±0.033	0.007±0.001	0.034±0.001	0.005±0.006											
本郷-No.11	30	0.051±0.004	1.082±0.028	4.221±0.039	0.827±0.015	0.041±0.001	0.148±0.011	1.580±0.109	0.230±0.023	9.062±0.598	0.160±0.025	0.009±0.001	0.034±0.001	0.001±0.003											
本郷-No.8	32	0.034±0.003	0.749±0.043	3.138±0.498	1.446±0.131	0.019±0.001	0.014±0.002	5.991±0.477	0.084±0.015	3.924±0.299	0.362±0.025	0.021±0.001	0.027±0.001	0.010±0.012											
札幌市-K135	38	0.040±0.006	4.017±0.246	0.150±0.008	0.160±0.006	2.022±0.015	0.315±0.022	1.739±0.136	0.546±0.028	0.451±0.026	0.136±0.030	0.007±0.001	0.035±0.001	0.036±0.016											
山崎4	58	0.012±0.001	0.286±0.021	2.049±0.022	0.231±0.019	0.028±0.002	0.090±0.009	15.726±1.722	1.418±0.177	6.628±0.094	0.076±0.081	0.002±0.000	0.006±0.000	0.127±0.059	2.588										
梅田1	40	0.021±0.003	1.204±0.094	0.066±0.017	0.143±0.008	0.065±0.005	0.220±0.029	2.710±0.421	0.273±0.374	7.741±0.134	0.001±0.000	0.009±0.001	0.014±0.019	2.579±0.013											
梅田2	44	0.032±0.004	2.539±0.246	0.025±0.006	0.522±0.050	0.172±0.020	0.290±0.051	3.517±0.603	2.024±0.053	3.16±0.048	0.283±0.066	0.005±0.001	0.080±0.011	0.035±0.015	2.531±0.007										
梅田3	40	0.027±0.003	1.911±0.062	0.020±0.007	0.518±0.010	0.261±0.012	0.430±0.017	3.262±0.209	1.401±0.057	0.338±0.028	0.386±0.048	0.005±0.001	0.121±0.005	0.033±0.027	2.511										
梅田4	38	0.081±0.008	7.149±0.288	0.023±0.003	0.082±0.002	0.558±0.020	0.473±0.026	1.003±0.046	0.473±0.018	0.222±0.032	0.100±0.013	0.006±0.001	0.039±0.002	0.039±0.010	2.446										
上ノ段1	42	0.014±0.002	0.413±0.046	0.054±0.026	0.395±0.040	0.053±0.005	0.223±0.020	3.772±0.448	0.833±0.068	0.077±0.037	0.296±0.053	0.006±0.001	0.019±0.001	0.014±0.018	2.636±0.001										
梅田東1	67	0.030±0.007	1.974±0.317	0.026±0.011	0.529±0.061	0.192±0.011	0.219±0.019	2.366±0.474	0.512±0.069	0.072±0.024	0.101±0.042	0.008±0.001	0.095±0.014	0.027±0.018	2.541±0.016										
新方1	30	0.056±0.005	1.868±0.115	1.640±0.137	0.733±0.069	0.078±0.012	0.111±0.205	1.610±0.264	0.175±0.018	8.296±0.619	0.078±0.019	0.050±0.020	0.046±0.006	0.027±0.009	2.290±0.018										
新方2	39	0.044±0.008	0.912±0.178	2.416±0.174	0.786±0.267	0.080±0.011	0.086±0.018	3.847±0.314	1.137±0.057	0.649±0.095	0.139±0.053	0.010±0.003	0.061±0.004	0.032±0.017	2.546±0.011										
新方3	51	0.046±0.004	3.875±0.879	0.316±0.009	0.234±0.004	0.146±0.018	0.256±0.021	1.874±0.168	0.476±0.020	1.994±0.080	0.077±0.022	0.084±0.001	0.035±0.001	0.021±0.011	2.482										
新井1	42	0.013±0.002	0.608±0.049	0.080±0.015	0.355±0.018	0.136±0.011	0.278±0.025	1.874±0.168	0.291±0.015	0.983±0.010	0.142±0.015	0.010±0.001	0.045±0.002	0.027±0.016	2.461										
山ノ奥1	48	0.048±0.006	3.589±0.151	0.096±0.013	0.346±0.012	0.151±0.005	0.220±0.009	2.478±0.104	0.545±0.021	0.452±0.059	0.065±0.016	0.004±0.000	0.046±0.002	0.033±0.014											
大蔵山3号墳-No.10	48	0.062±0.007	0.280±0.045	26.464±5.515	1.390±0.161	0.002±0.000	0.002±0.001	77.099±9.460	0.152±0.049	0.428±0.079	0.120±0.060	0.012±0.001	0.003±0.000	0.087±0.040											
大蔵山3号墳-No.2	42	0.037±0.004	1.817±0.072	0.111±0.008	0.289±0.008	0.052±0.002	0.109±0.004	4.471±0.140	0.470±0.017	0.281±0.018	0.265±0.028	0.012±0.001	0.012±0.000	0.002±0.005											
大蔵山3号墳-No.3	40	0.118±0.001	0.466±0.010	0.376±0.009	0.108±0.004	0.020±0.004	0.087±0.004	4.081±6.946	0.756±0.136	0.056±0.074	0.001±0.000	0.002±0.000	0.002±0.005	2.190 吸水											
東船2	41	0.112±0.010	3.879±0.431	0.122±0.022	0.668±0.030	0.034±0.004	0.073±0.011	0.768±0.951	0.706±0.062	0.117±0.011	0.128±0.022	0.005±0.001	0.022±0.002	0.094±0.020	2.530±0.054										
亀川3	48	0.028±0.005	2.002±0.046	0.020±0.010	0.442±0.015	0.169±0.009	0.290±0.014	0.967±0.040	0.280±0.010	0.952±0.007	0.062±0.010	0.002±0.001	0.070±0.002	0.035±0.010	2.501										
大蔵山3号墳-No.4	48	0.077±0.006	6.185±0.139	0.058±0.006	0.104±0.003	0.287±0.003	0.286±0.016	1.216±0.076	0.346±0.011	0.166±0.014	0.113±0.014	0.008±0.001	0.025±0.001	0.014±0.007											
大蔵山3号墳-No.4	48	0.030±0.005	2.078±0.122	0.040±0.018	0.702±0.032	0.132±0.008	0.263±0.009	3.776±0.179	0.991±0.049	0.227±0.035	0.145±0.048	0.005±0.001	0.083±0.002	0.035±0.015	2.579										
有岡1	45	0.046±0.003	0.454±0.091	4.885±0.933	1.484±0.257	0.038±0.008	0.058±0.007	2.395±0.270	0.138±0.025	1.638±0.375	0.421±0.041	0.006±0.001	0.050±0.005	0.004±0.006	2.2										
彼ノ宗6	44	0.033±0.007	3.017±0.430	0.154±0.042	0.107±0.012	0.045±0.002	0.120±0.004	12.584±0.739	1.508±0.072	0.367±0.018	0.069±0.027	0.007±0.001	0.005±0.000	0.014±0.011	2.475										
彼ノ宗3	35	0.072±0.008	2.647±0.079	1.233±0.015	0.915±0.018	0.085±0.003	0.167±0.029	1.471±0.106	0.245±0.038	5.611±0.363	0.067±0.019	0.006±0.001	0.069±0.001	0.026±0.009											

第4節 原原千軒遺跡出土碧玉・ヒスイ製玉材の産地分析

40	0.067±0.010	4.156±0.155	0.344±0.009	0.488±0.009	0.134±0.005	0.183±0.007	1.692±0.065	0.310±0.010	0.739±0.020	0.074±0.014	0.011±0.001	0.068±0.002	0.032±0.009
45	0.045±0.004	3.512±0.108	0.038±0.004	0.090±0.003	0.839±0.059	0.618±0.047	0.819±0.074	0.522±0.020	0.181±0.011	0.984±0.219	0.015±0.001	0.070±0.004	0.030±0.033
46	0.103±0.010	4.761±0.127	0.039±0.005	0.513±0.069	0.090±0.003	0.157±0.006	1.470±0.050	0.231±0.007	0.574±0.047	0.022±0.015	0.008±0.001	0.044±0.006	0.025±0.005
47	0.079±0.008	3.542±0.123	0.148±0.014	0.561±0.019	0.044±0.001	0.047±0.004	2.782±0.184	0.131±0.014	1.861±0.149	0.028±0.009	0.008±0.001	0.024±0.001	0.023±0.006
48	0.100±0.008	4.776±0.117	0.061±0.004	0.600±0.007	0.073±0.001	0.097±0.009	1.650±0.059	0.159±0.016	2.187±0.037	0.020±0.014	0.009±0.001	0.046±0.001	0.018±0.005
45	0.105±0.002	4.135±0.005	0.313±0.043	0.781±0.030	0.045±0.005	0.045±0.005	0.729±0.035	0.332±0.035	0.220±0.037	0.105±0.032	0.010±0.001	0.010±0.001	0.049±0.002
45	0.088±0.008	4.591±0.091	0.123±0.005	0.439±0.008	0.074±0.002	0.099±0.007	2.090±0.151	0.206±0.013	1.523±0.108	0.028±0.010	0.008±0.001	0.032±0.001	0.024±0.007
46	0.039±0.004	2.666±0.087	0.042±0.006	0.144±0.003	0.482±0.018	0.456±0.019	0.911±0.041	0.415±0.016	0.173±0.011	0.262±0.023	0.008±0.001	0.064±0.002	0.024±0.016
48	0.038±0.005	2.294±0.066	0.109±0.009	0.302±0.008	0.273±0.010	0.401±0.018	1.349±0.077	0.540±0.026	0.627±0.035	0.143±0.024	0.014±0.001	0.077±0.003	0.033±0.019
48	0.053±0.007	3.044±0.206	0.432±0.011	0.766±0.016	0.072±0.003	0.116±0.009	1.643±0.158	0.190±0.021	1.583±0.113	0.031±0.019	0.011±0.001	0.051±0.002	0.024±0.009
36	0.029±0.019	3.666±0.328	0.081±0.034	0.268±0.050	0.529±0.189	0.674±0.256	0.548±0.131	0.337±0.017	0.198±0.096	0.103±0.038	0.005±0.002	0.129±0.028	0.035±0.016
30	0.019±0.001	1.325±0.043	0.010±0.007	1.041±0.047	0.109±0.003	0.157±0.005	1.810±0.058	0.281±0.011	0.010±0.006	0.049±0.006	0.022±0.006	0.102±0.003	0.025±0.010
30	0.014±0.001	0.461±0.059	0.001±0.003	0.336±0.038	0.098±0.011	0.134±0.014	4.288±0.414	0.567±0.062	1.160±0.117	0.204±0.035	0.065±0.009	0.029±0.002	0.010±0.018
30	0.095±0.002	4.703±0.190	0.140±0.006	0.421±0.013	0.062±0.005	0.101±0.010	3.071±0.337	0.304±0.006	0.483±0.011	0.039±0.002	0.001±0.001	0.023±0.002	0.024±0.003
46	0.031±0.001	3.129±0.100	0.010±0.005	0.394±0.008	0.261±0.005	0.418±0.009	2.810±0.041	0.835±0.018	0.253±0.013	0.343±0.014	0.006±0.007	0.093±0.001	0.011±0.009
46	0.049±0.002	0.677±0.053	7.307±0.891	1.069±0.113	0.004±0.001	0.002±0.001	36.228±2.282	0.061±0.011	7.363±0.353	0.253±0.015	0.012±0.001	0.004±0.001	0.000000
45	0.066±0.005	2.596±0.355	0.876±0.105	0.937±0.082	0.093±0.008	0.192±0.020	1.124±0.189	0.210±0.018	4.640±0.439	0.044±0.008	0.001±0.004	0.079±0.011	0.016±0.004
42	0.040±0.001	0.762±0.042	0.929±0.018	0.206±0.018	0.035±0.002	0.020±0.003	1.338±0.014	0.027±0.004	0.595±0.023	0.064±0.004	0.023±0.002	0.006±0.001	0.009±0.005
42	0.055±0.004	3.186±0.281	0.489±0.048	0.726±0.031	0.080±0.010	0.150±0.020	1.124±0.172	0.194±0.011	2.827±0.286	0.050±0.007	0.019±0.004	0.052±0.007	0.019±0.004
45	0.038±0.002	3.370±0.104	0.024±0.024	0.244±0.053	0.273±0.039	0.368±0.044	1.210±0.222	0.445±0.114	0.277±0.223	0.063±0.025	0.005±0.007	0.068±0.006	0.032±0.011
45	0.045±0.003	4.282±0.393	0.001±0.002	0.173±0.014	0.981±0.119	1.164±0.185	0.290±0.023	0.333±0.041	0.079±0.015	0.055±0.010	0.010±0.014	0.152±0.012	0.021±0.008
42	0.030±0.000	1.977±0.039	0.020±0.003	0.914±0.026	0.104±0.003	0.267±0.005	2.840±0.086	0.752±0.029	0.097±0.013	0.100±0.009	0.015±0.007	0.085±0.001	0.024±0.011
44	0.069±0.001	2.580±0.035	1.220±0.056	0.892±0.014	0.049±0.003	0.120±0.006	1.831±0.072	0.218±0.005	0.625±0.088	0.043±0.004	-----	0.039±0.002	0.011±0.003
42	0.027±0.001	2.279±0.131	0.014±0.010	0.166±0.008	0.141±0.012	0.162±0.009	2.644±0.126	0.423±0.014	0.177±0.012	0.112±0.009	0.016±0.006	0.021±0.002	0.011±0.008
43	0.017±0.001	1.289±0.178	0.044±0.008	0.196±0.031	0.038±0.001	0.116±0.002	30.326±1.854	3.478±0.213	0.544±0.055	0.270±0.036	0.006±0.003	0.007±0.001	0.0003±0.001
40	0.020±0.000	1.496±0.058	0.021±0.005	0.139±0.008	0.279±0.007	0.406±0.013	0.669±0.012	0.269±0.009	0.088±0.007	0.068±0.006	0.023±0.013	0.033±0.002	0.020±0.008
40	0.018±0.001	1.001±0.102	0.027±0.009	0.152±0.018	0.117±0.007	0.247±0.009	6.616±0.948	1.618±0.198	0.362±0.114	0.088±0.033	0.019±0.010	0.016±0.002	0.005±0.010
40	0.019±0.001	0.818±0.017	0.105±0.014	0.074±0.021	0.129±0.002	0.233±0.012	0.485±0.020	0.160±0.009	0.112±0.006	0.049±0.003	0.048±0.010	0.119±0.002	0.026±0.006
45	0.059±0.001	2.691±0.337	0.695±0.164	0.364±0.032	0.105±0.009	0.189±0.034	1.890±0.163	0.354±0.063	1.457±0.333	0.174±0.060	0.002±0.002	0.034±0.005	0.006±0.005
49	0.066±0.001	2.651±0.040	0.801±0.049	0.391±0.007	0.098±0.003	0.198±0.006	1.691±0.101	0.331±0.017	1.149±0.022	0.125±0.020	0.004±0.002	0.035±0.001	0.005±0.005
42	0.052±0.003	1.344±0.138	1.402±0.232	0.269±0.153	0.085±0.018	0.134±0.015	2.814±0.508	0.370±0.042	2.117±0.547	0.565±0.383	0.010±0.005	0.019±0.008	0.0003±0.002
42	0.055±0.000	3.076±0.009	0.240±0.002	0.373±0.004	0.118±0.000	0.263±0.004	1.958±0.020	0.512±0.008	1.228±0.017	0.164±0.004	0.004±0.000	0.039±0.000	0.011±0.006
30	0.042±0.000	3.220±0.066	0.120±0.006	0.119±0.004	0.257±0.017	0.252±0.014	1.425±0.106	0.355±0.013	0.863±0.029	0.062±0.007	0.008±0.004	0.027±0.002	0.005±0.004
44	0.013±0.000	0.365±0.083	0.038±0.022	0.308±0.068	0.144±0.032	0.226±0.024	2.700±0.284	0.605±0.091	2.127±0.233	0.013±0.022	0.126±0.018	0.038±0.003	0.016±0.023
36	0.042±0.001	2.786±0.361	0.196±0.085	0.156±0.028	0.199±0.029	0.218±0.029	1.918±0.474	0.405±0.062	1.776±0.688	0.084±0.027	0.002±0.003	0.028±0.005	0.002±0.004
28	0.029±0.000	1.932±0.057	0.032±0.005	0.179±0.005	0.224±0.019	0.325±0.023	1.814±0.129	0.583±0.017	0.316±0.038	0.075±0.009	0.028±0.007	0.036±0.003	0.005±0.006
40	0.085±0.014	2.960±0.197	0.632±0.192	0.668±0.041	0.064±0.005	0.139±0.014	1.436±0.232	0.196±0.016	4.070±0.584	0.033±0.006	-----	0.038±0.004	0.015±0.003
40	0.055±0.002	5.450±0.139	0.000±0.007	0.130±0.005	1.156±0.076	1.352±0.064	0.253±0.009	0.339±0.008	0.069±0.005	0.058±0.004	0.006±0.009	0.135±0.012	0.020±0.006
40	0.036±0.000	3.098±0.046	0.165±0.019	0.091±0.008	0.273±0.004	0.292±0.011	1.538±0.039	0.445±0.018	0.386±0.017	0.127±0.007	0.009±0.011	0.023±0.002	0.010±0.008
40	0.077±0.002	3.223±0.121	1.289±0.111	0.652±0.022	0.087±0.003	0.195±0.009	0.931±0.026	0.619±0.006	6.947±0.121	0.049±0.004	0.003±0.005	0.051±0.001	0.011±0.004
40	0.028±0.000	1.343±0.016	0.130±0.009	0.231±0.012	0.038±0.002	0.191±0.009	16.790±0.660	3.181±0.144	0.853±0.052	0.150±0.022	0.011±0.002	0.008±0.000	0.0003±0.003
50	0.038±0.004	3.323±0.455	0.018±0.012	0.047±0.006	0.360±0.058	0.412±0.053	1.454±0.239	0.583±0.030	0.085±0.018	0.174±0.034	0.019±0.009	0.015±0.002	0.025±0.008
48	0.045±0.006	4.044±0.475	0.026±0.007	0.325±0.064	0.274±0.048	0.311±0.034	2.861±0.314	0.876±0.083	0.276±0.095	0.168±0.089	0.011±0.005	0.078±0.009	0.019±0.010
54	0.041±0.005	3.292±0.543	0.020±0.009	0.054±0.019	0.377±0.051	0.377±0.051	2.510±0.450	0.922±0.122	0.341±0.137	0.123±0.032	0.007±0.007	0.013±0.003	0.021±0.015
40	0.058±0.004	5.308±0.422	0.033±0.036	0.071±0.013	0.212±0.038	0.263±0.041	3.643±0.395	0.938±0.053	0.352±0.071	0.126±0.020	0.011±0.004	0.014±0.004	0.034±0.013
49	0.658±0.041	0.420±0.046	0.129±0.096	0.373±0.060	0.433±0.036	0.556±0.074	0.566±0.093	0.510±0.091	0.653±0.183	0.455±0.070	0.089±0.019	0.066±0.012	0.014±0.011

Xav: 平均値、σ: 標準偏差 比重2.29以下は緑色凝灰岩女代南B: 女代南遺跡(豊岡市)、未定C: 宇木沢田遺跡(唐津市)、車塚1,2: 車塚古墳(交野市)、牟田辺: 牟田辺遺跡(多久市)、長塚(1),(2): 長塚古墳(可児市)、No.200-1~6: 多摩ニュータウン遺跡(東京都)、梅田1~4: 梅田古墳(兵庫県和田山町)、梅田東1: 梅田東古墳(兵庫県和田山町)、上ノ段1: 上ノ段遺跡(兵庫県島根)、新方1~3: 新方遺跡(神戸市)、新井1: 新井3丁目遺跡(東京都中野区)、亀川13: 亀川遺跡(阪南市自然田)、東船1: 東船遺跡(高根県今津町)、山ノ奥1: 山ノ奥遺跡(岡山県)、倉敷3,4: 屋敷大塚古墳(大垣市)、青当坊6: 市田青当坊(京都府久御山町)、笠見3~13: 笠見第3遺跡(鳥取県東部町)矢野4: 矢野遺跡(徳島市)、青田77,78: 青田遺跡(新潟県加治川村)、菜畑(唐津市)、石田2,3: 石田古墳(松江市)、美保1: 中野美保遺跡(出雲市)、大代8・5: 大代古墳(鳴門市)で使用されている原石産地不明の玉類で作った群。

第21表-1 南原千軒遺跡出土玉材の分析結果

分析番号	元素比									
	Al/Si	K/Si	Cs/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr		
94446	0.040	3.276	0.046	0.119	0.243	0.289	2.084	0.599		
94447	0.043	3.473	0.032	0.086	0.350	0.401	1.513	0.603		
94448	0.040	3.312	0.036	0.114	0.457	0.383	1.310	0.498		
94449	0.037	2.971	0.024	0.104	0.377	0.337	1.398	0.468		
94450	0.037	2.670	0.056	0.108	0.583	0.525	0.838	0.436		
94451	0.041	3.503	0.015	0.108	0.348	0.346	1.494	0.514		
94452	0.042	3.419	0.022	0.125	0.195	0.205	2.867	0.584		
94453	0.041	3.294	0.039	0.108	0.452	0.446	1.075	0.476		
94454	0.045	3.482	0.040	0.114	0.324	0.348	1.397	0.483		
JG-1 ^{a)}	0.067	3.392	0.774	0.237	0.111	0.263	3.795	0.998		

第21表-2 南原千軒遺跡出土玉材の分析結果

分析番号	元素比					重量比	重量	gr
	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr			
94446	0.316	0.186	0.021	0.026	0.005	0.54384	2.552	
94447	0.353	0.192	0.027	0.030	0.015	0.48659	2.526	
94448	0.310	0.125	0.033	0.047	0.013	0.10898	2.547	
94449	0.228	0.135	0.033	0.035	0.015	0.49372	2.578	
94450	0.403	0.115	0.051	0.057	0.018	1.01090	2.504	
94451	0.167	0.179	0.030	0.034	0.018	0.77558	2.571	
94452	0.166	0.209	0.018	0.022	0.020	0.30647	2.545	
94453	0.420	0.209	0.035	0.044	0.007	0.64326	2.559	
94454	0.178	0.166	0.029	0.033	0.007	0.34813	2.509	
JG-1 ^{a)}	1.345	0.281	0.024	0.024	0.079			

a)標準試料、Ando,A., Kurasawa,H.,Ohmori,T. & Takeda,E.(1974).
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference
samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.
Geochemical Journal, Vol.18:175-192.

第22表 南原千軒遺跡出土玉材の原材産地分析結果

分析番号	番号	出土地	取上No.	ホテリングのT2乗検定(確率)	E S R形	判定	時代時期
94446	1		291	女代南B遺物群(8%),菩提-1(81%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	
94447	2		225	菩提-1(16%),女代南B遺物群(6%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	
94448	3		227	菩提-1(40%),女代南B遺物群(17%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	
94449	4		229	菩提-1(54%),女代南B遺物群(50%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	
94450	1	SK10	1584	菩提-1(4%)	女代南B形	菩提	12世紀後半
94451	2	SD2:2区下層	225	菩提-1(68%),女代南B遺物群(45%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	弥生時代
94452	3	SD2:3区下層	227	女代南B遺物群(7%),菩提-1(22%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	弥生時代
94453	4	SD2:3区下層	229	菩提-1(8%),女代南B遺物群(1%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	弥生時代
94454	5	SD3:1区	164	女代南B遺物群(12%),菩提-1(9%)	女代南B形	菩提、女代南B遺物群	弥生時代

第23表-1 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(1)

原産地名	分析個数	蛍光X線法による元素比の範囲					
		比重	K/Ca	Ti/Ca	Sr/Fe	Zr/Sr	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00~3.35	0.01~0.17	0.01~0.56	0.15~30	0.00~2.94	0.72~27.6
若桜産	12	3.12~3.29	0.01~0.91	0.03~0.59	3.45~47	0.00~0.25	4.33~48.4
大佐産	20	2.85~3.17	0.01~0.07	0.00~1.01	3.18~61	0.00~12.4	3.47~28.6
長崎産	3	3.16~3.23	0.01~0.14	0.17~0.33	0.02~0.06	4.30~16.0	
日高産	22	2.98~3.29	0.00~0.01	0.00~0.02	0.00~0.37	0.00~0.063	5.92~51.6
引佐産	8	3.15~3.36	0.04~0.04	0.00~0.03	0.03~0.33	0.00~0.018	36.3~65.9
大屋産	18	2.96~3.19	0.03~0.08	0.04~0.16	1.08~79	0.02~0.48	0.95~4.81
神居コタン産	9	2.95~3.19	0.02~0.49	0.09~0.17	0.04~0.22	0.12~0.85	2.22~17.3
飛騨産	40	2.85~3.15	0.01~0.04	0.00~0.00	0.02~0.10	0.00~1.24	12.7~28.5
ミャンマ産	26	3.15~3.36	0.02~0.14	0.01~0.26	0.09~2.5	0.01~23	
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND	ND	

ND: 検出限界以下の濃度

第23表-2 ヒスイ製遺物の原石産地の判定基準(2)

原産地名	蛍光X線法による分析元素(各元素が確認できた個体数の百分率)								
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce	
糸魚川産	26%	6%	20%	ND	13%	33%	ND	ND	ND
若桜産	ND	ND	16%	ND	100%	100%	67%	67%	
大佐産	ND	ND	44%	ND	33%	100%	67%	67%	
長崎産	ND	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%	
日高産	tr	tr	ND	ND	ND	tr	ND	ND	
引佐産	88%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
大屋産	tr	ND	31%	ND	6%	90%	100%	100%	
神居コタン産	ND	100%	22%	100%	ND	55%	ND	ND	
飛騨産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND	
ミャンマ産	13%	4%	ND	ND	ND	35%	ND	ND	
台湾産	tr	tr	ND	ND	ND	ND	ND	ND	

ND: 検出限界以下の濃度

第24表 南原千軒遺跡出土のヒスイ製玉材の元素分析値と比重の結果

遺物	分析番号	元素分析値の比量									
		Na/Si	Mg/Si	Al/Si	K/Ca	Ca/Si	Ti/Ca	Cr/Fe	Mn/Fe	Ni/Fe	Sr/Fe
玉材	94521	0.275	0.266	0.17	0.17	3.742	0.05	0.008	0.033	0.056	2.742
JG-1		0.024	0.086	0.06	1.25	3.354	0.30	0.001	0.024	0.001	0.426

遺物	分析番号	元素分析値の比量							試料比重	試料重量
		Zr/Sr	Nb/Sr	Ba/Sr	La/Sr	Ce/Sr	Rb/Sr	Y/Sr		
玉材	94521	0.295	0.00	0.07	0.07	0.00	0.00	0.00	3.333	14.79795
JG-1 ^{a)}		0.719	0.10	5.77	0.23	0.29	0.72	0.18		

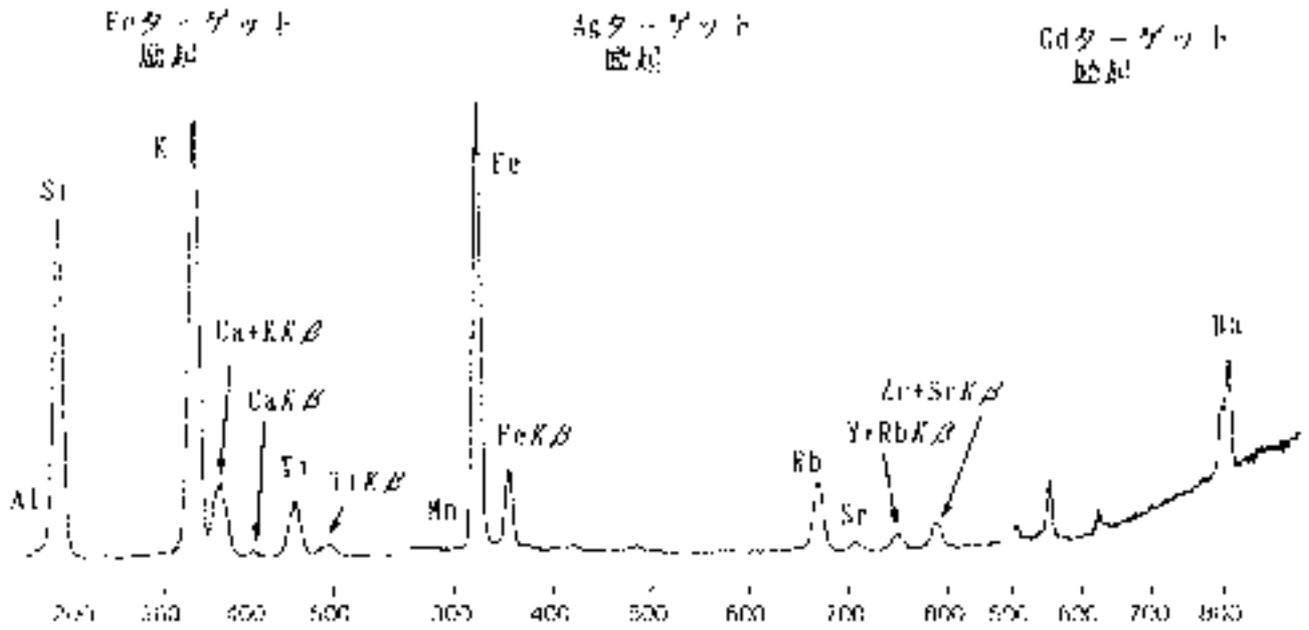
a): 標準試料、Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974). 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-19

第25表 南原千軒遺跡出土のヒスイ製玉材の原産地分析結果

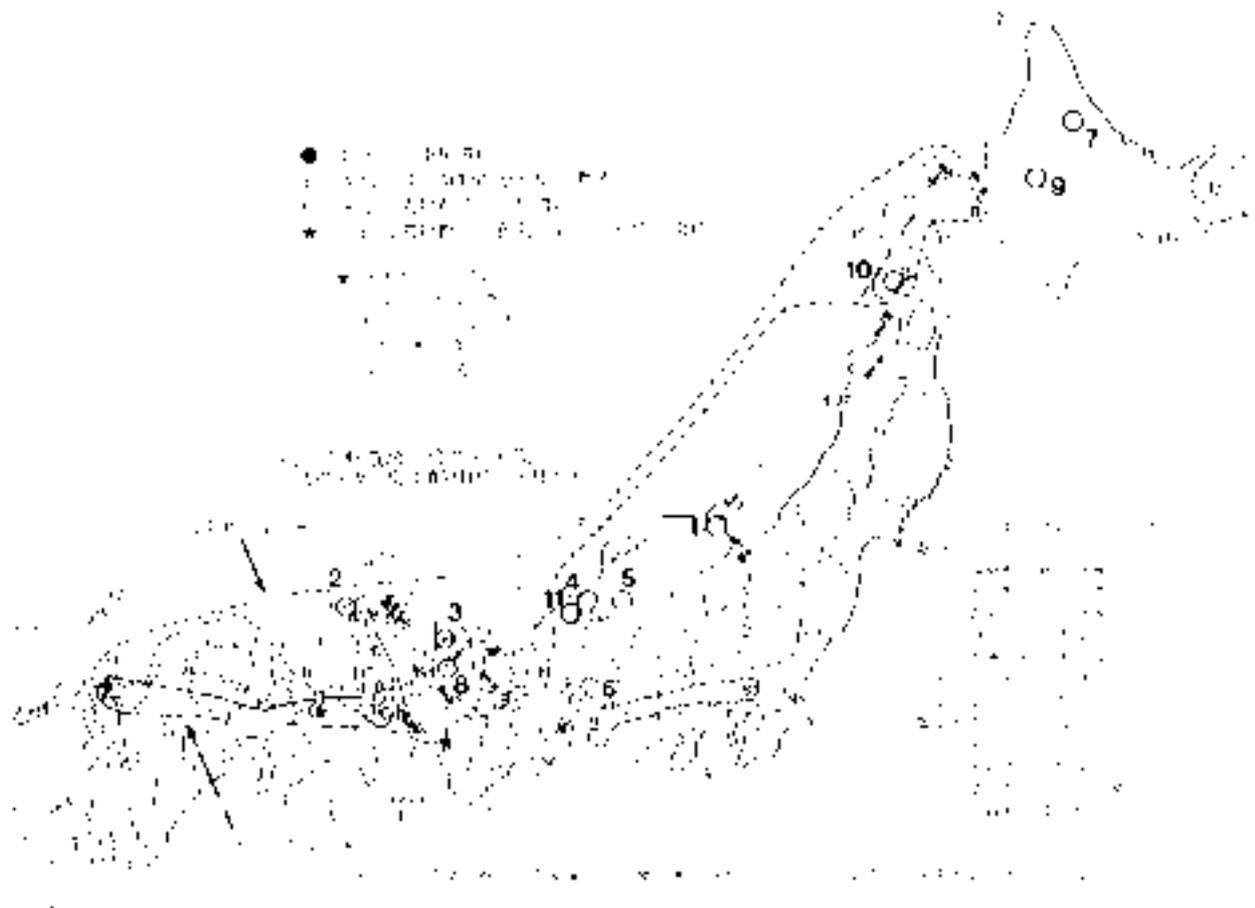
遺物	分析番号	各分類基準による判定				総合判定
		第108図判定	第109図判定	第110図判定	比重&基準(2) Ni/Fe判定 a)	
玉材	94521	IT,OY	IT,OY	IT	IT,IN,HK,WK	糸魚川産

IT: 糸魚川 WK: 若桜 OS: 大佐 NG: 長崎 HK: 日高 IN: 引佐 OY: 大屋
KM: 神居コタン HD: 飛騨

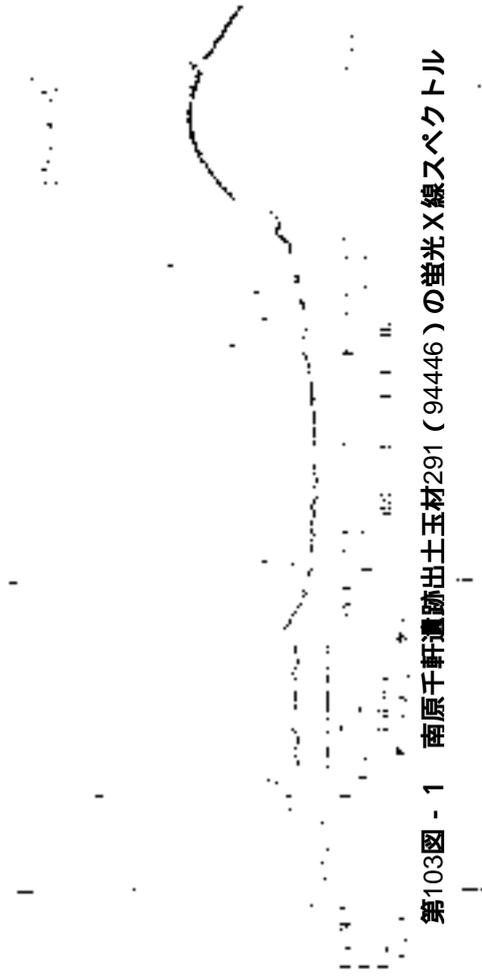
a): Ni/Fe比は日高産地および飛騨産地に同時に帰属された遺物の分類指標
(飛騨産原石、4 2 個の平均値 ± 標準偏差) Ni/Fe=0.091 ± 0.030
(日高産原石、1 4 個の平均値 ± 標準偏差) Ni/Fe=0.065 ± 0.028



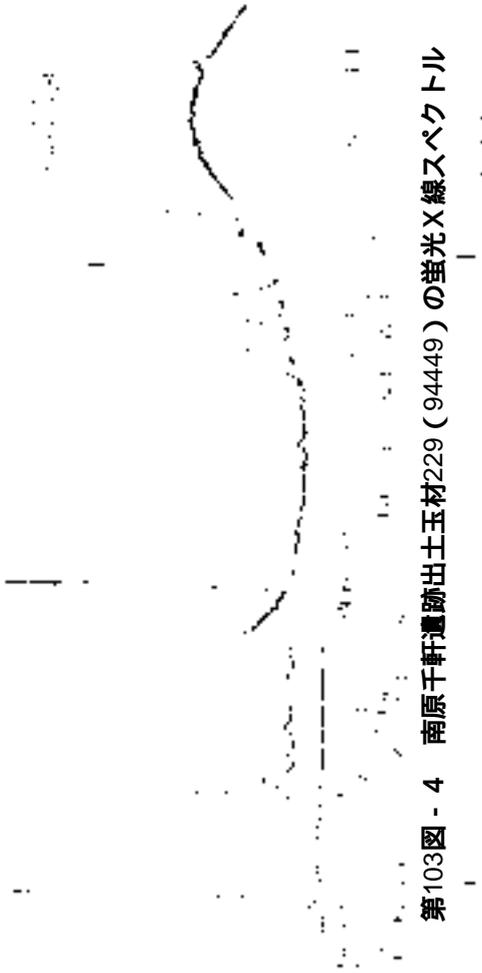
第101図 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル



第102図 弥生(統縄文)時代の碧玉製、綠色凝灰岩製玉類の原材使用分布圖および碧玉・碧玉様岩の原産地



第103図 - 1 南原千軒遺跡出土玉材291 (94446) の蛍光X線スペクトル



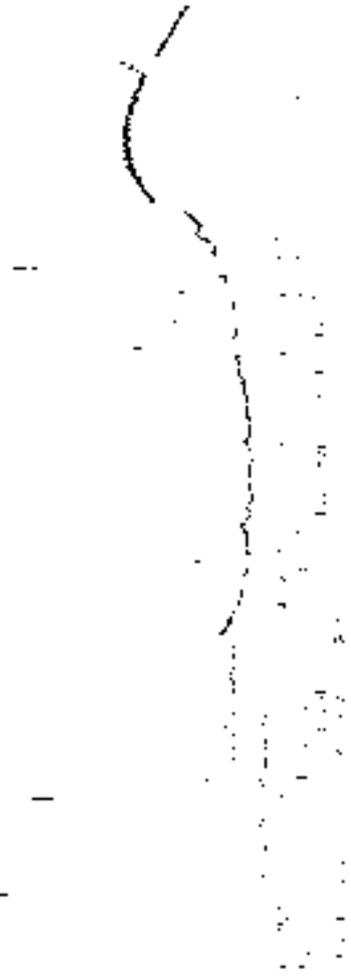
第103図 - 4 南原千軒遺跡出土玉材229 (94449) の蛍光X線スペクトル



第103図 - 2 南原千軒遺跡出土玉材225 (94447) の蛍光X線スペクトル



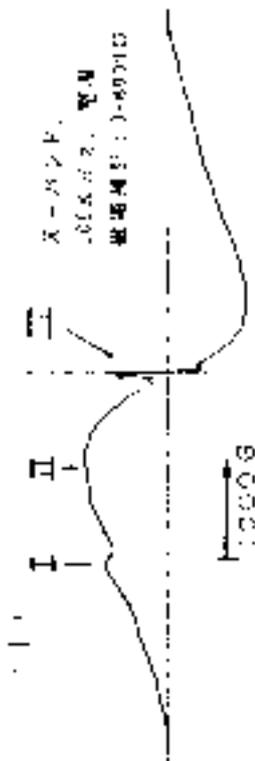
第103図 - 5 南原千軒遺跡出土玉材1584 (94450) の蛍光X線スペクトル



第103図 - 3 南原千軒遺跡出土玉材227 (94448) の蛍光X線スペクトル

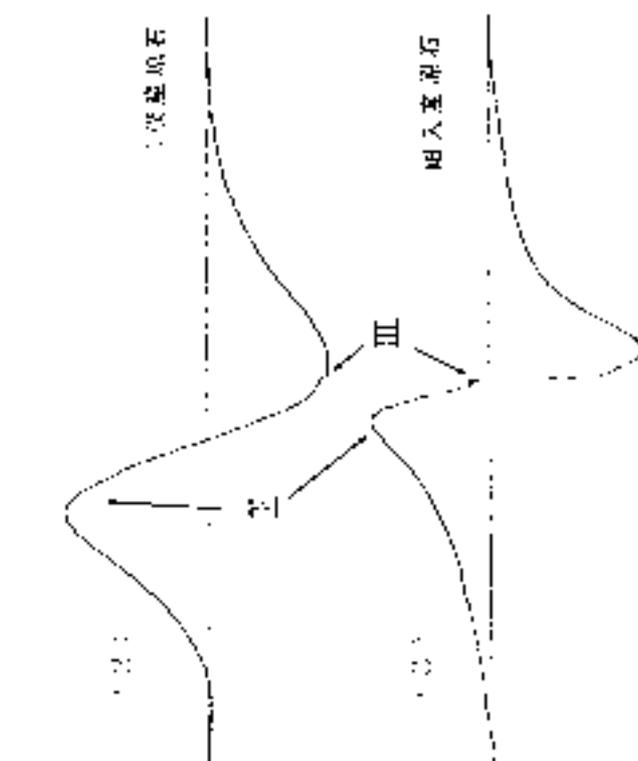


第103図 - 6 南原千軒遺跡出土玉材225 (94451) の蛍光X線スペクトル



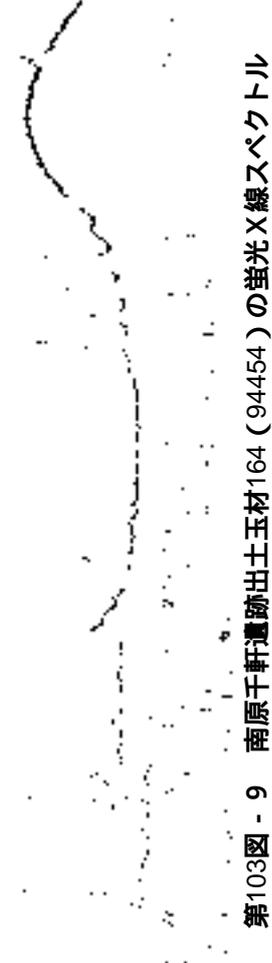
第103図 - 7 南原千軒遺跡出土玉材227 (94452) の蛍光X線スペクトル

$g = 4.3 \quad 2.58 \quad 2.0165$

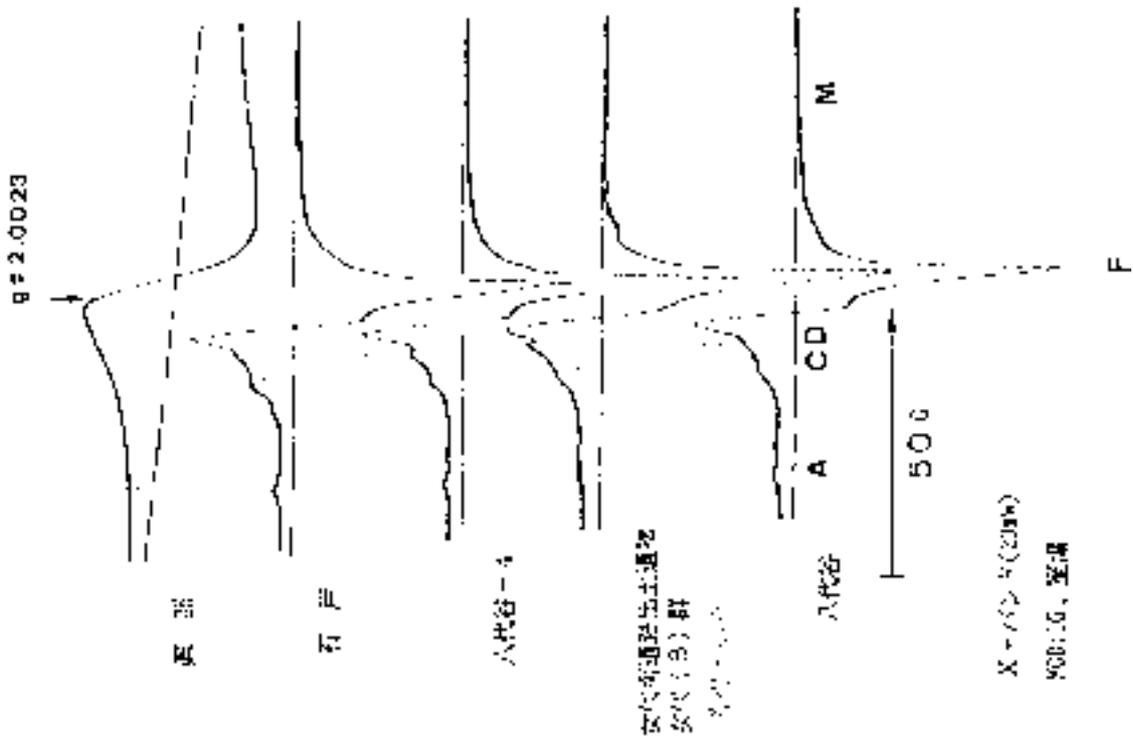


第103図 - 8 南原千軒遺跡出土玉材229 (94453) の蛍光X線スペクトル

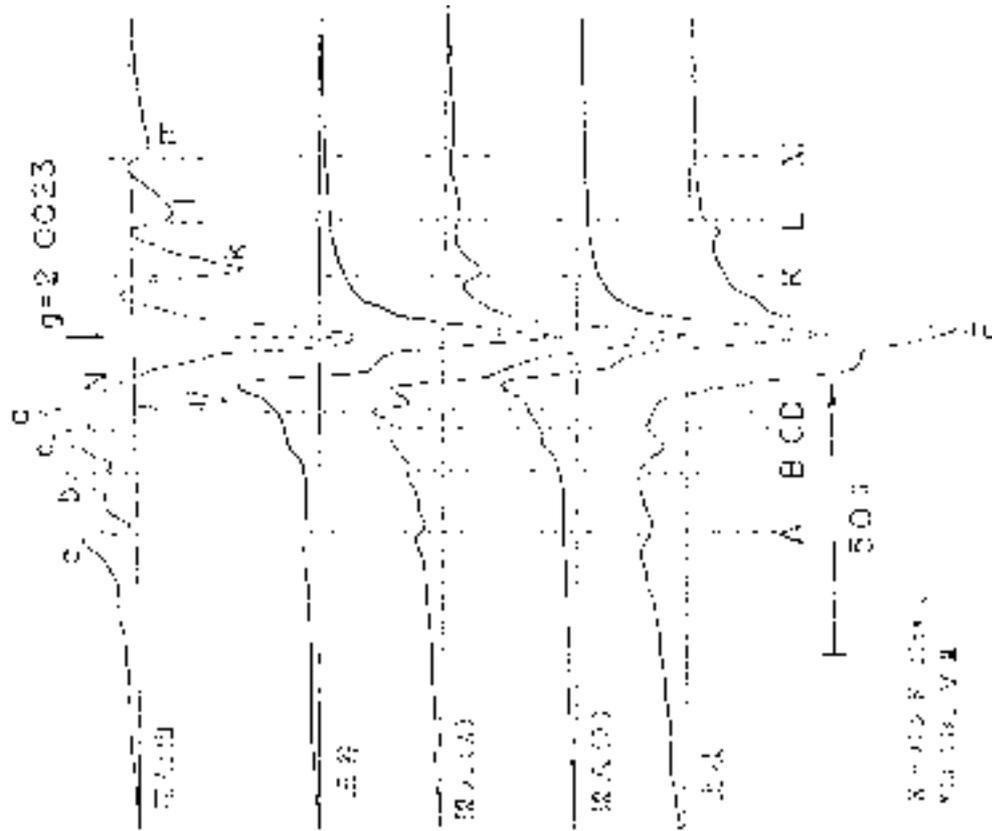
第104図 碧玉原石のESRスペクトル
(花仙山、玉谷、猿八、土岐)



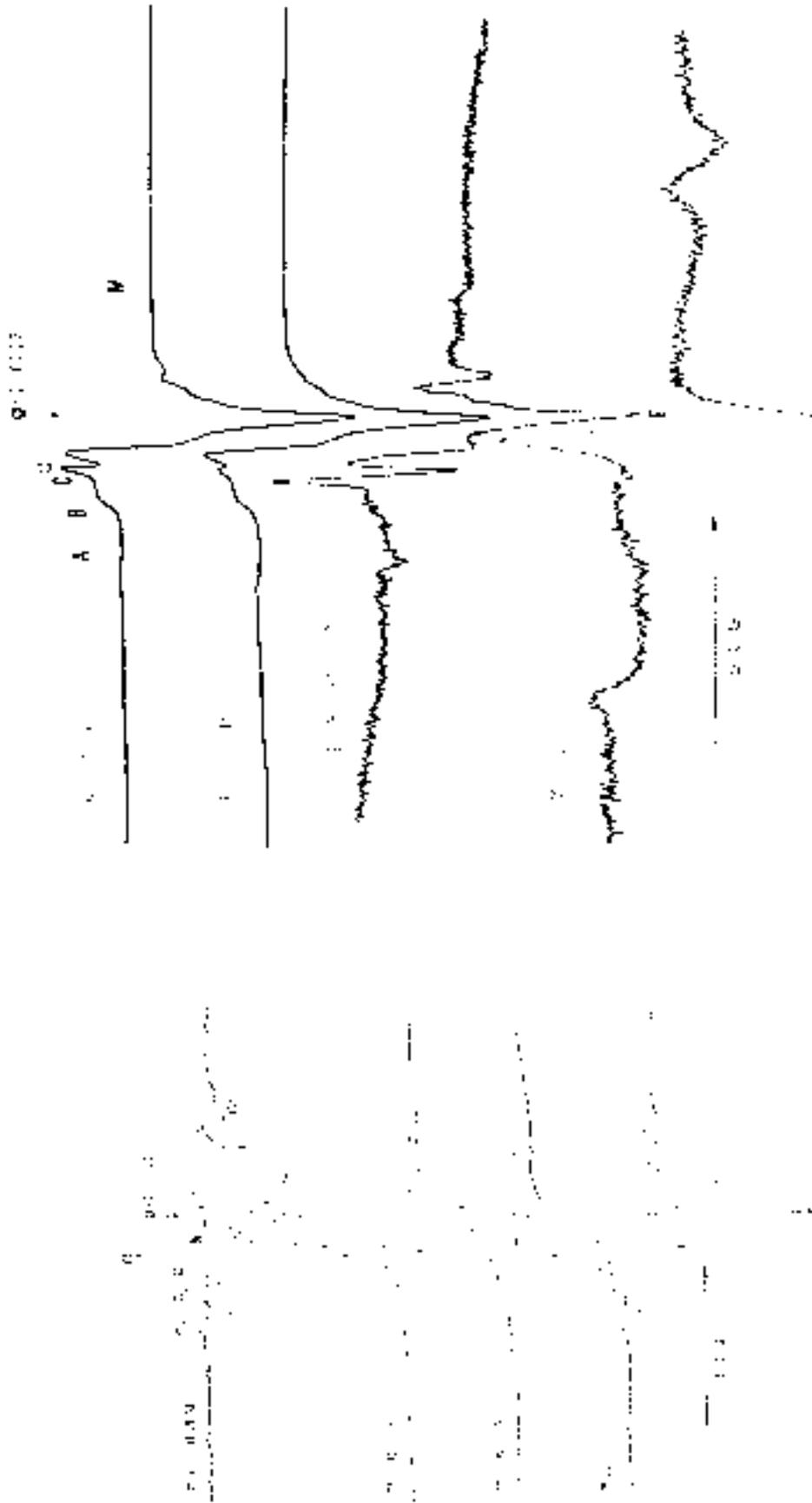
第103図 - 9 南原千軒遺跡出土玉材164 (94454) の蛍光X線スペクトル



第105図 - (2) 碧玉原石の信号 (F) の ESR スペクトル

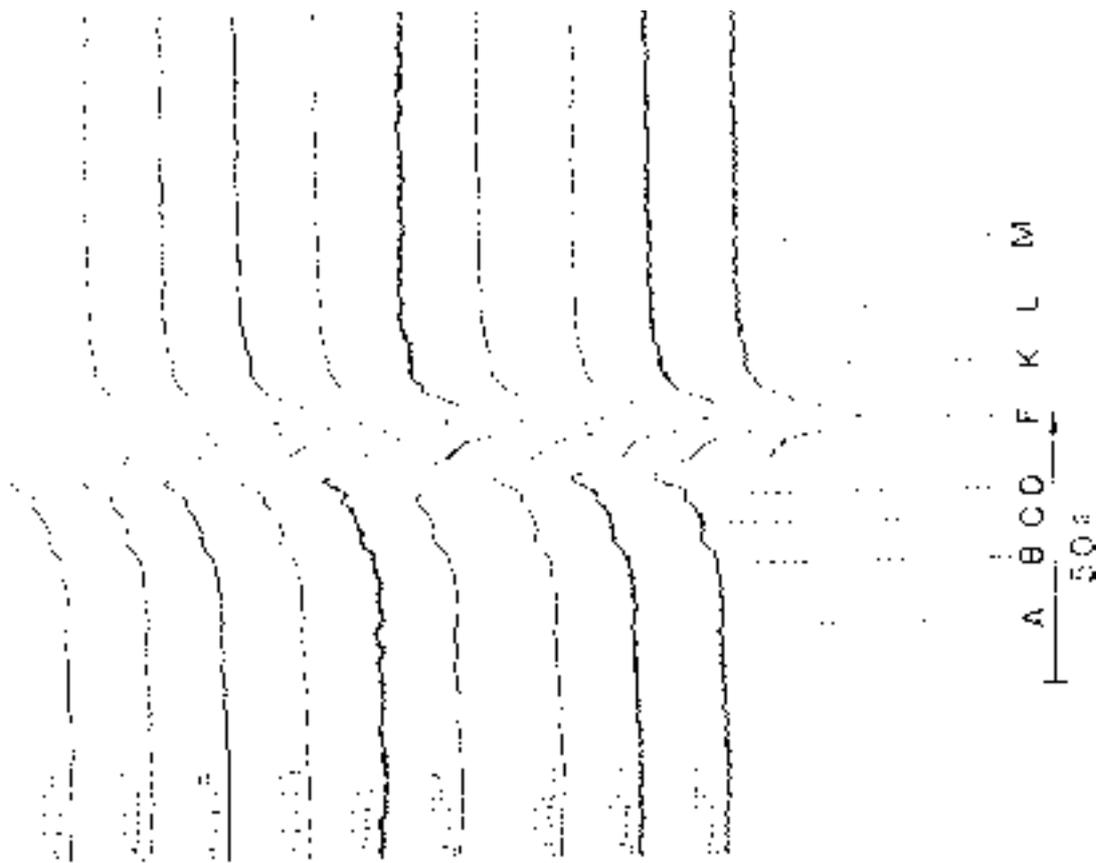


第105図 - (1) 碧玉原石の信号 (J) の ESR スペクトル

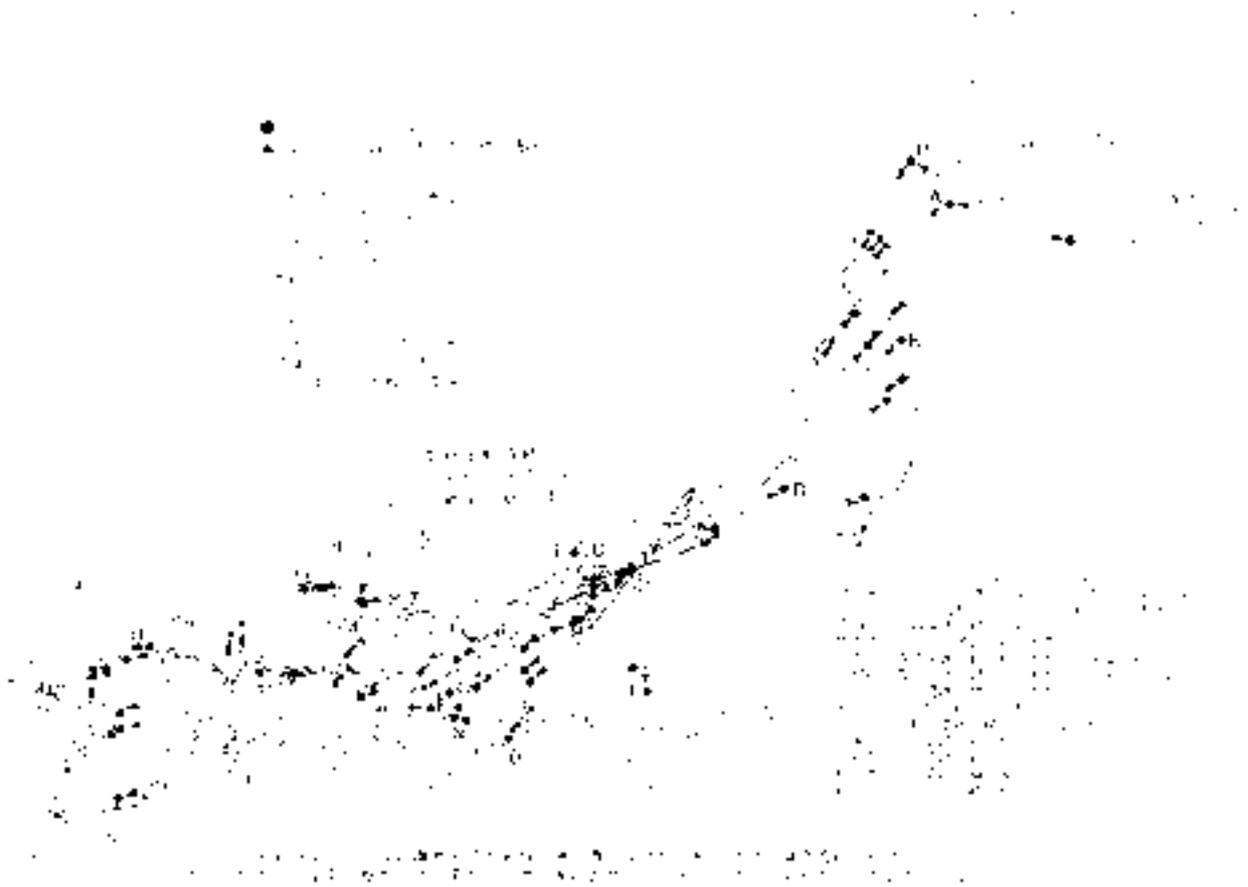


第105図 - (4) 碧玉原石の信号 () の ESR スペクトル

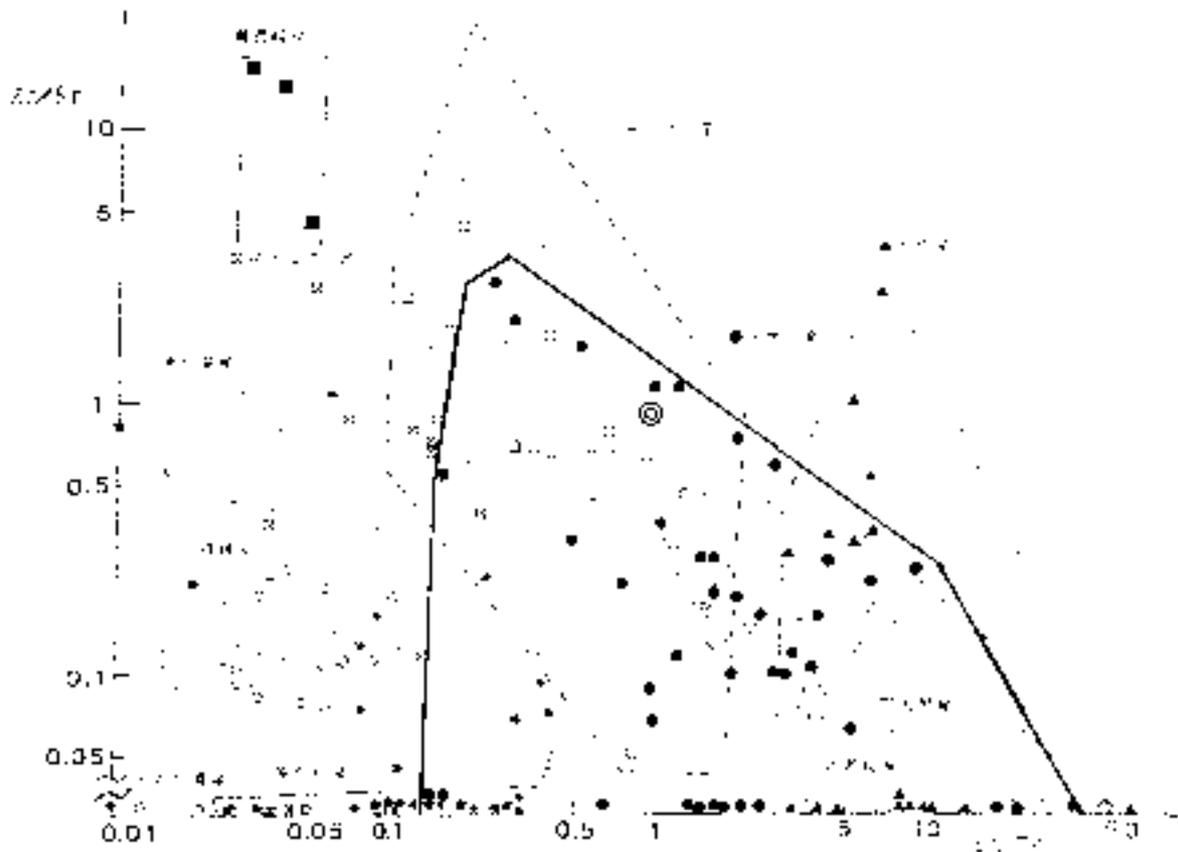
第105図 - (3) 碧玉原石の信号 () の ESR スペ



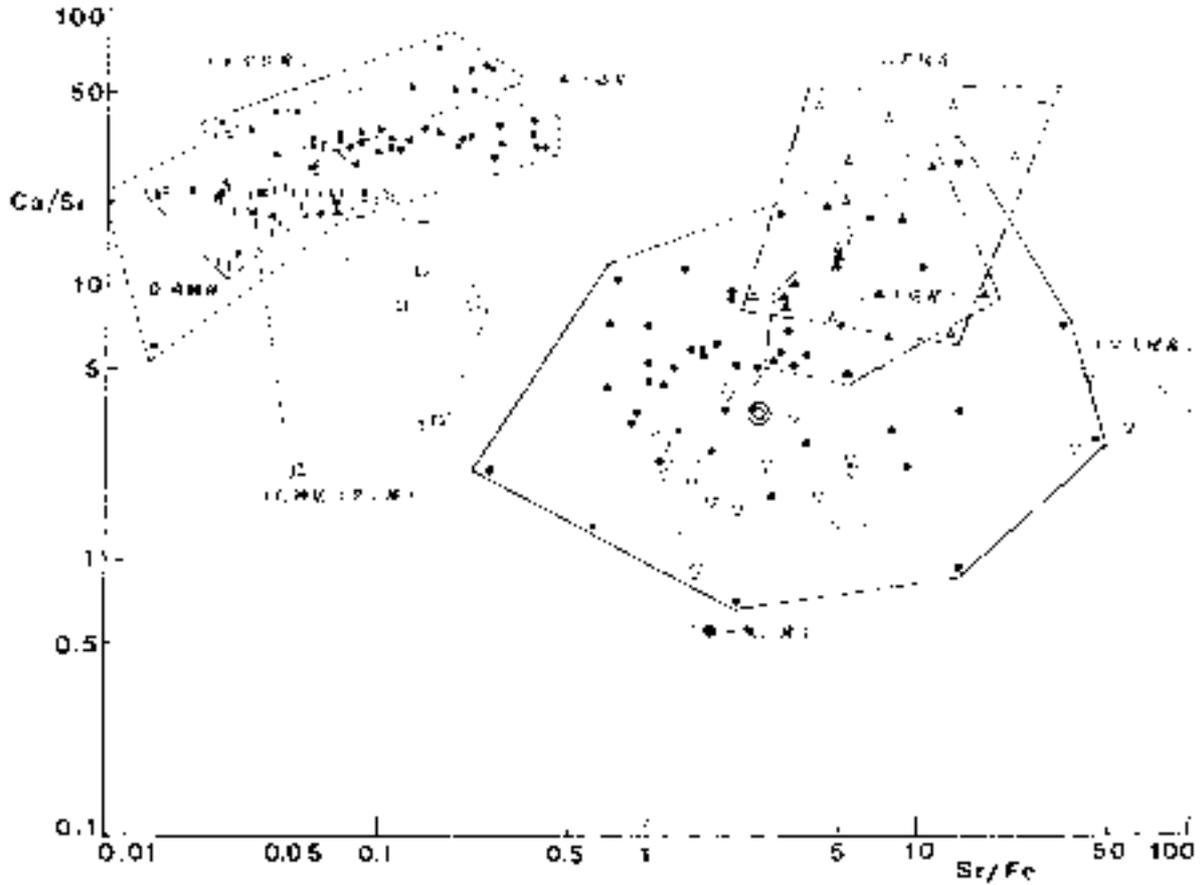
第106図 南原千軒遺跡出土玉材の信号()のESRスペクトル



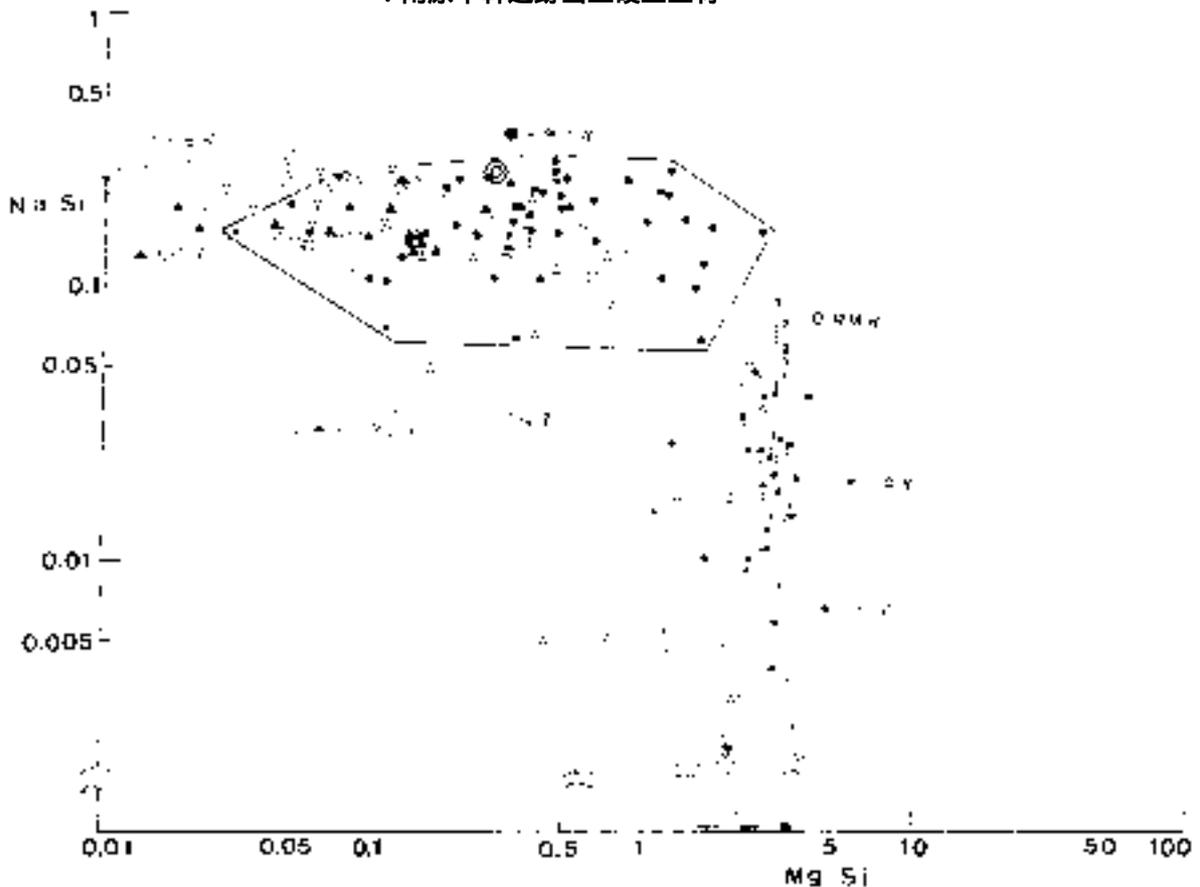
第107図 ヒスイ原産地およびヒスイ製玉類使用遺跡分布圏



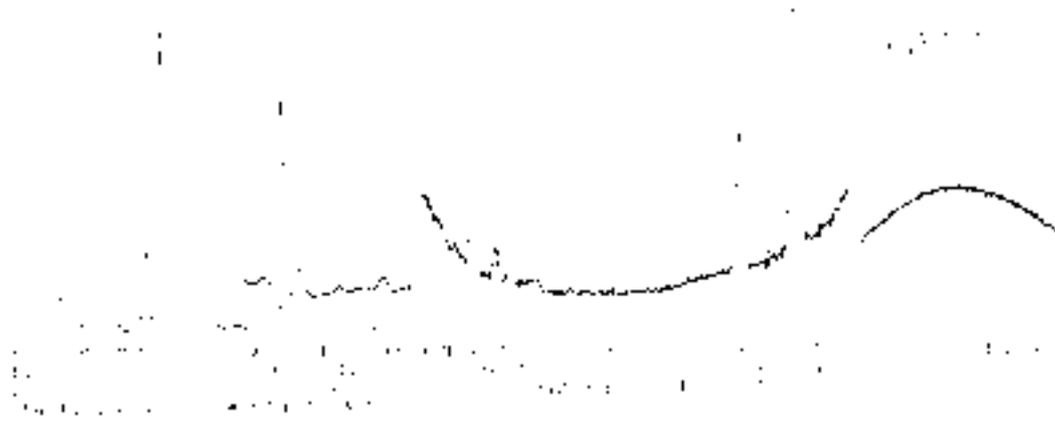
第108図 ヒスイ原石の元素比值Zr / Sr対Sr / Feの分布および分布圏
：南原千軒遺跡出土硬玉玉材



第109図 ヒスイ原石の元素比值Ca / Si対Sr / Feの分布および分布圏
 : 南原千軒遺跡出土硬玉玉材



第110図 ヒスイ原石の元素比值Na / Si対Mg / Siの分布および分布圏
 : 南原千軒遺跡出土硬玉玉材



第111図 南原千軒遺跡出土硬玉製玉材112 (94521) の蛍光X線スペクトル

第5章 考察

第1節 南原千軒遺跡における縄文時代の遺構・遺物について

(1) 出土土器の編年的位置づけについて

今回の調査で検出された縄文時代の遺構はSI 5のみである。出土土器をみると、全体形を窺える資料はないものの、第8図5、6、9、10では磨消縄文を描く沈線が途切れており、特に5、6では文様の末端が入り組み状を呈している。これらは「中津式」あるいは「福田K式古段階」にみられる特徴である（泉・玉田1986、玉田1989、柳浦2000）。また、磨消縄文帯の幅が10mm前後とやや狭い点、同図7のように底部近くまで文様が施される点、同図11にみられる鉤状J字文に近いモチーフなども、中津式の新しい段階以降に顕著な特徴である。これらのことから、SI 5出土土器は全体として中津式の新相に位置づけられるものと考えられる。

遺構外からも多数の縄文土器片が出土したが、図化できたのはごく一部である。厳密な統計をとっていないが、量的には中津式が主体を占める。図示したものについては、SI 5出土土器と同様に中津式の新相に相当するものが多いように思われる。

中津式以外では、前期の爪形文土器（第35図108：北白川下層 a式、第49図180：北白川下層 a～b式、第86図261：羽島下層～北白川下層式）後期前葉～中葉（第12図12：崎ヶ鼻式～沖丈式）後期中葉～後葉（第12図13・第28図86：元住吉山式併行）の土器を確認している。

(2) 竪穴住居跡について

中津式期の竪穴住居であるSI 5は、長軸5.25m、短軸約3.6mの楕円形を呈し、床面中央からやや偏った位置に石囲炉が設けられている。ただし、この平面形態と規模については拡張・建て替えの結果である可能性が高い。中津式期の住居跡は、鳥取県内で確実なものは智頭枕田遺跡（智頭町）で調査されている。ここで

第26表 鳥取県内の縄文時代竪穴住居跡

は、当該期の住居形態の特徴として平面が方形ないし長方形、中央に石囲炉ないし埋甕炉をもつ、主柱は2本、掘り込みが浅い、などが指摘されている（木田・酒井2004）。SI 5と比較すると、は一致するが、は相違点である。県東部の智頭枕田遺跡例に限らず、中西部の後期の住居跡をみても（第26表）、森

番号	遺跡名	遺構名	所在地	平面形態	時期	備考
1	取木	竪穴状遺構	倉吉市	方形	早期（大川式）	張出部あり
2	泉中峰・泉前田	SK 9	米子市	円形	早期	
3	智頭枕田	竪穴状遺構	八頭郡智頭町	不整円形	早期（高山寺式）	
4	長山馬籠	J SI01	西伯郡伯耆町	楕円形	前期初頭（長山式）	
5	長山馬籠	J SI02	西伯郡伯耆町	楕円形	前期初頭（長山式）	
6	智頭枕田	SI 1（旧）	八頭郡智頭町	方形	中期末	石囲埋甕炉
7	智頭枕田	SI 4	八頭郡智頭町	方形	中期末	石囲炉
8	智頭枕田	SI 8	八頭郡智頭町	長方形	中期末	石囲炉
9	智頭枕田	SI 5	八頭郡智頭町	方形	中期末～後期初頭	石囲炉
10	智頭枕田	SI 6	八頭郡智頭町	（長）方形	中期末～後期初頭	石囲炉
11	智頭枕田	SI 7	八頭郡智頭町	？	中期末～後期初頭	石囲炉
12	智頭枕田	SI 1（新）	八頭郡智頭町	長方形	後期初頭（中津式）	石囲炉
13	智頭枕田	SI 9	八頭郡智頭町	長方形	後期初頭（中津式）？	
14	智頭枕田	SI10	八頭郡智頭町	？	後期初頭（中津式）	石囲炉
15	智頭枕田	SI12	八頭郡智頭町	長方形	後期初頭（中津式）	石囲炉
16	智頭枕田	SI13	八頭郡智頭町	？	後期初頭（中津式）？	
17	智頭枕田	SI14	八頭郡智頭町	？	後期初頭（中津式）	石囲炉
18	南原千軒	SI 5	東伯郡琴浦町	楕円形	後期初頭（中津式）	石囲炉
19	南川	縄文後期住居跡	西伯郡大山町	？	後期前葉（福田K式）	石囲炉
20	横峰	5号竪穴住居跡	倉吉市	？	後期前葉（福田K式）？	地床炉
21	森藤第2	竪穴住居跡1号	東伯郡琴浦町	隅丸方形	後期前葉（布勢式）	石囲炉
22	森藤第2	竪穴住居跡2号	東伯郡琴浦町	隅丸方形	後期前葉（布勢式）	石囲炉？
23	智頭枕田	SI 2	八頭郡智頭町	？	後期前葉（縁帯文）	石囲炉
24	津田峰	3号住居跡	倉吉市	方形	後期前葉（崎ヶ鼻式）？	石囲炉
25	百塚第7	SI01	米子市	方形	後期前葉（崎ヶ鼻式）	地床炉
26	大下畑	SI27	米子市	？	後期前葉（崎ヶ鼻式）	地床炉
27	大塚	縄文住居跡	西伯郡大山町	円形	後期	石囲炉
28	久古第3	1号竪穴住居	西伯郡伯耆町	円形	晩期（滋賀里 a式）	
29	智頭枕田	竪穴住居	八頭郡智頭町	円形	晩期（突帯文）	5軒程度

藤第2遺跡、津田峰遺跡など方形プランが多いようである。濱田竜彦は、山陰東部における隅丸方形プランで石囲炉をともなう住居跡について、後期前葉に近畿地方を經由して波及してきたこと、その分布が典型的な布勢式土器の分布域と重なることを指摘している（濱田2000）。今回の調査は布勢式の分布域に石囲炉の1例を追加したことになるが、異なる平面形態の背景については類例の増加を待って再検討したい。

(3) 土偶について

表土中から土偶の脚部片が出土した。土偶は、県内ではこれまでに5例が出土している（第27表）。そのうち3例は、西日本に広く分布する「分銅形土偶」である。本遺跡出土例は、天白遺跡例（三重県）更良岡山遺跡例（大阪府）佃遺跡例（兵庫県）など、「今朝平タイプ」（原田1995）と呼ばれる一群に類似する。伊藤正人によれば、今朝平タイプは「東海地方（伊勢湾周辺）を中心に分布する、縄文時代後期中葉～後葉の顔のない伸身像土偶」（伊藤1998）である。最大の特徴は顔面表現の無いこととされており、この点において、脚部のみの本遺跡例を今朝平タイプと断定することは適当ではない。ただし、脚部に限定しても、特徴的な足首の括れは先述の3例と共通しており、前面に隆帯を貼付して膝？を表現する点は更良岡山例（第112図9）^(註)に近い。本遺跡例の特色として指摘すべきは、赤彩や刺突、沈線、縄文による文様の繁縟さであろう。

本遺跡例の時期については、相伴土器がなく決定できない。ただし、このタイプの盛行時期を後期中葉～後葉とする伊藤の年代観に従うならば、当該期の土器として本遺跡では元住吉山式併行の土器片が少量出土している。したがって、土偶の出土と合わせて、当該期の遺構が近傍に存在するものと推測される。中国地方の土偶集成（深田2002）によると、岡山県西岡貝塚の「山形系土偶」が今朝平タイプにやや類似するが、山陰地方では他に類例は見出せない。仮に本遺跡例が今朝平タイプと評価



1. 南原千軒 2. 森藤第2 3. 妻木法大神 4・5. 古市河原田 6. 古市流田 7. 天白（三重県嬉野町） 8・9. 更良岡山（大阪府四条畷市） 10. 佃（兵庫県東浦町）

第112図 鳥取県出土の土偶および類例

第27表 鳥取県内出土の土偶

番号	遺跡名	遺構名	所在地	形態	時期	文献
1	南原千軒	表土中	東伯郡琴浦町	今朝平タイプ？	後期中葉？	本書
2	森藤第2	竪穴住居1号	東伯郡琴浦町	分銅形	後期前葉（布勢式）	大賀他1987
3	妻木法大神	包含層	西伯郡大山町	分銅形	後期	岡野編2003
4	古市河原田	包含層	米子市	分銅形？	後期中葉	中森他編1999
5	古市河原田	包含層	米子市	不明	不明	中森他編1999
6	古市流田	SD 9	米子市	脚部片	晩期中葉～後葉？	濱田他編2000

できるならば、日本海側での分布の西端となる可能性がある。当該期の地域間交流を考えるうえで貴重な例であり、今後さらに検討を進めていきたい。(君嶋)

【註】更良岡山例、佃例については、大野薫が今朝平タイプと関連するものと評価している(大野2002、2003)。

【引用・参考文献】

- 泉 拓良・玉田芳英 1986 「文様系統論 縁帯文土器」『季刊考古学』17、雄山閣
 伊藤正人 1998 「今朝平タイプ土偶覚書」『三河考古』11、三河考古刊行会
 大賀靖浩・米原公子 1987 『森藤第1・森藤第2遺跡発掘調査報告書』東伯町教育委員会
 大野 薫 2002 「大阪府更良岡山遺跡・砂遺跡の土偶」『藤澤一夫先生卒壽記念論文集』藤澤一夫先生卒壽記念論文集刊行会
 大野 薫 2003 「顔のない土偶」『立命館大学考古学論集』立命館大学考古学論集刊行会
 岡野雅則編 2003 『妻木法大神遺跡』鳥取県教育文化財団
 木田 真・酒井雅代 2004 「智頭枕田遺跡における縄文時代後期の調査」『中津式の成立と展開』中四国縄文研究会徳島実行委員会
 玉田芳英 1989 「中津・福田K式土器様式」『縄文土器大観』4、小学館
 中森 祥他編 1999 『古市遺跡群1』鳥取県教育文化財団
 濱田竜彦 2000 「大山山麓の縄文時代遺跡」『山陰の縄文時代遺跡』第28回山陰考古学研究会集事事務局
 濱田竜彦他編 2000 『古市遺跡群2』鳥取県教育文化財団
 原田昌幸 1995 『土偶』日本の美術345、至文堂
 深井明比古編 1998 『佃遺跡』兵庫県教育委員会
 深田 浩 2002 「中国地方の土偶について」『下山遺跡(2)』鳥根県教育委員会
 柳浦俊一 2000 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『鳥根考古学会誌』17、鳥根考古学会
 山田康弘 2002 「中国地方の縄文時代集落」『鳥根考古学会誌』19、鳥根考古学会

【挿図の出典】

第112図：1.本書 2.(大賀・米原1987) 3.(岡野編2003) 4・5.(中森他編1999) 6.(濱田他編2000) 7.(伊藤1998)より再トレース 8・9.(大野2002)より再トレース 10.(深井編1998)

第26表は、(濱田2000)(山田2002)を参考に作成した。智頭枕田遺跡のデータは、(木田・酒井2004)および木田真氏、酒井雅代氏の御教示に拠る。

第2節 南原千軒遺跡における弥生時代の玉作について

(1) 南原千軒遺跡出土の玉作関連遺物(第113図)

玉未成品：管玉未成品と考えられる碧玉が5点出土した。J1、J2、J3の3点はSD2から、J5、J6は遺構外から出土した。J1～J3は産地分析の結果、菩提、女代南B群に属することが判明した。J1、J2、J5、J6には施溝痕がみられ、施溝分割技法を用いていたことがわかる。また打割分割技法によるJ3もあり、2種類の技法の存在が確認できた。

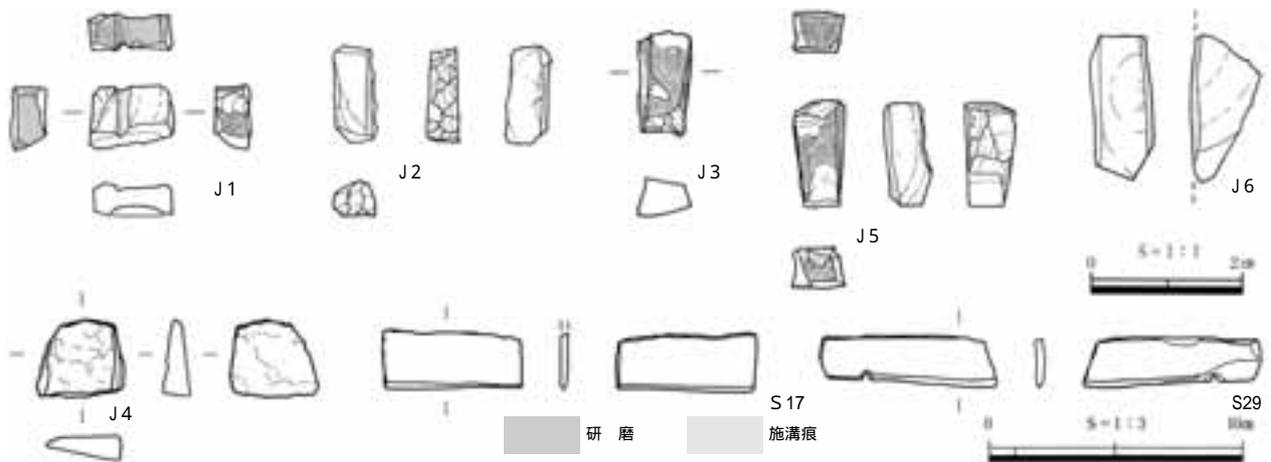
翡翠は遺構外から2点出土し、うち1点は糸魚川産と判明した。図示したJ4には、碧玉と同様に施溝痕がみられ、勾玉の未成品と考えられる。

工具：施溝時に使用されたと考えられる石鋸が2点あり、S17はSK20から、S29は遺構外から出土した。産地は不明であるが、S17は石英片岩製、S29は結晶片岩製である。他に砥石も出土しているが、玉作との関連は明確でないためここでは扱わないこととする。

本遺跡では玉作関連遺構そのものは検出していないが、石鋸S17が出土したSK20の時期から、弥生時代中期前葉から中葉頃には玉生産を開始していた可能性が高い。

(2) 鳥取県における玉作関連遺跡(第28表)

鳥取県内の主な玉作関連遺跡を参照して、玉作の様相を概観する^{註1)}。玉素材の分割技法に着目してみると、長期間一貫して施溝分割技法を用いる青谷上寺地遺跡があるものの、全体的な傾向としては、中期後葉に施溝分割技法、後期後葉に打割分割技法がみられる久蔵峰北遺跡のように、後期に技法の主体が打割分割技法に移る様子が看取できる。また石材産地については、自然科学分析が行われ



第113図 南原千軒遺跡出土の玉作関連遺物

た例が多くないため明確にはいえないが、後期になると産地が女代南B群のものだけではなく、鳥根県玉湯町の花仙山産碧玉も使用されている^{註2)}。

当該期の翡翠製玉未成品の出土例は、県内は他にみられず、鳥根県八束郡鹿島町の堀部第2遺跡の溝状遺構（後期末～古墳時代初頭）から翡翠原石が1点見つかった。正式報告がなされていないため詳細は不明であるが、本遺跡の翡翠と同様、施溝痕がみられるようである（丹羽野・深田2004）。以上のとおり、山陰地方での出土例は、管見によれば本遺跡を含めて2例しか確認されていない。

石鋸は、3遺跡で確認され、西高江遺跡^{註3)}は石材が不明であるが、青谷上寺地遺跡からは雲母片岩製、妻木晩田遺跡からは紅簾片岩製と考えられる石鋸が出土している。

(3) 玉の生産と流通

先述したとおり、本遺跡での玉作の開始時期は弥生時代中期前葉から中葉頃と考えられる。また、打割分割技法の存在から、少なくとも後期に至るまでの、長期間にわたって玉作が行われていたと想定される。

翡翠は、糸魚川産であることから北陸地方から直接的あるいは間接的に入手したもので、日本海沿岸における翡翠の流通ルートを考える上で貴重な発見である。本遺跡例は遺構外出土のため時期は特定できないが、北陸地方で翡翠勾玉生産遺跡の分布が拡大し、生産量が増加する時期は中期後半とされる（浅野2003）。その見解に従うならば、山陰地方ではわずかししか出土していない翡翠を入手できるほどの集団が、中期後半以降に本遺跡周辺に存在した可能性が高い。

次に工具である石鋸は、当地方では産出しない石材である雲母片岩や、紅簾片岩などの結晶片岩製石鋸が他遺跡にみられた。そのような石材の産地や、入手経路など検討すべき問題が残されているが、本遺跡でも同様の結晶片岩製石鋸を使用しており、遺跡単位を越えた共通性がみられる。また石庖丁が石鋸に転用される場合も想定されており（丹羽野2004）、施溝分割技法と密接に関わる施溝具について、石材、使用痕などに注意を払う必要があるだろう。

本遺跡での玉作は、中期以降継続的に行われ、石材と技法の点で、同時期の他の玉作関連遺跡と同様の傾向をみせる。翡翠を入手するなど他遺跡にみられない活発な交流を行っていたことが窺える反面、出土した資料数や当該期の遺構数が少ない点をどのように考えるかは、今後の周辺の調査をまっけて検討したい。

断片的な資料であるため、遺物の性格付けが不安定な感は否めないが、今回の発見によって当地域の玉生産研究がより深まることを期待したい。（山根）

第28表 鳥取県内の主な弥生時代玉作関連遺跡

遺跡名(所在地)	出土遺構	種別	石材(産地)	分割技法	関連石製品	時期	備考/文献
南原千軒遺跡 (東伯郡琴浦町光)	SD2・3	未成品	碧玉(女代南B)	施溝、打割		~終末	本書
	遺構外	未成品・剥片	碧玉(女代南B)・翡翠(糸魚川)	施溝	石鏝	-	
	SK20	-	-	-	石鏝	中期前葉~中葉	
秋里遺跡 (鳥取市江津~秋里)	遺構外	未成品・剥片	碧玉・緑色凝灰岩・石英安山岩	打割	砥石・敲石?	後期後葉	原田雅弘1990『第3節 管玉未成品について』『秋里遺跡(西皆竹)』鳥取県教育文化財団
布勢第2遺跡 (鳥取市布勢)	SI02	未成品・剥片	緑色凝灰岩	打割?	砥石	後期初頭	中野知照ほか1981『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団
青谷上寺地遺跡 (鳥取市青谷町青谷)	遺構外	未成品・剥片	碧玉	施溝	砥石・石鏝	前期末~古墳前期初頭	湯村功編2002『青谷上寺地遺跡4』鳥取県教育文化財団
長瀬高浜遺跡 (東伯郡湯梨浜町長瀬)	SI131	未成品・剥片	碧玉	打割	石鏝	前期中葉~後葉	鳥取県教育文化財団1983『長瀬高浜遺跡』
	SI156	未成品・剥片	碧玉	打割(輪切施溝)	砥石・石鏝・臺状石製品	前期中葉~後葉	
	SI158	未成品・剥片	碧玉	打割(輪切施溝)	石鏝	前期?	
	SI169	未成品・剥片	碧玉	打割(輪切施溝)	石鏝	前期中頃	
西高江遺跡 (東伯郡大栄町由良)	竪穴住居1号	未成品	水晶	打割	砥石・石鏝?	中期後葉~後期前葉	清水真一1981『東高江・西高江遺跡発掘調査報告書』大栄町教育委員会
	竪穴住居2号	未成品	水晶	打割	筋砥石・砥石		
	竪穴住居3号	未成品	碧玉・水晶	施溝(碧玉)? ・打割(水晶)	石鏝		
	竪穴住居4号	未成品	水晶	打割	砥石		
	竪穴住居6号	未成品	水晶	打割	敲石		
	竪穴住居7号	未成品	水晶	打割	敲石・砥石・石鏝		
	竪穴住居8号	未成品	碧玉・水晶	施溝(玉)・水晶(打割)	砥石・石刀?		
笠見第3遺跡*1 (東伯郡琴浦町笠見)	SI34	未成品・剥片・ガラス小玉	緑色凝灰岩・碧玉(女代南B)・ガラス	打割	筋砥石	後期中葉	大半が緑色凝灰岩
	SI49	管玉・未成品・剥片・ガラス小玉	緑色凝灰岩・碧玉(花仙山・女代南B)・ガラス	打割	砥石・敲石・擦石	後期前葉	碧玉は大半が女代南B群
久蔵峰北遺跡*2 (東伯郡琴浦町八橋)	SK32	石核	緑色凝灰岩	施溝	-	中期後葉	
	SI40	勾玉	翡翠(糸魚川)	-	-	後期後葉	
	SI58	未成品・剥片	水晶・碧玉(花仙山・女代南B)・緑色凝灰岩	打割	敲石	後期後葉	碧玉は大半が花仙山産
妻木晩田遺跡 (西伯郡大山町長田・淀江町福岡)	妻木新山地区 第51竪穴住居	未成品	緑色凝灰岩	?	-	後期前葉	松本哲ほか2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』大山スライス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会
	松尾頭地区 第31竪穴住居跡	未成品・剥片	碧玉・黒曜石	打割?	筋砥石	終末	
	洞ノ原地区 住居1	剥片	碧玉・水晶	?	穿孔針素材?(珪化木)	終末 ~古墳前期初頭	
	遺構外	未成品	緑色凝灰岩	施溝	石鏝	?	

*1 牧本哲雄編2004『笠見第3遺跡』鳥取県教育文化財団

*2 小山浩和他編2004『久蔵峰北遺跡・蛭谷遺跡・岩本遺跡』鳥取県教育文化財団

【註】

- (1) 県内の玉作関連遺跡については、増田浩太氏が体系的に整理されているので参照されたい(増田2004)。
- (2) 打割分割技法や、硬質の花仙山産碧玉の採用については、「後期に入って急速に普及する鉄製工具との関連性」が指摘されている(増田2004)。ただし花仙山産碧玉に比べ、軟質の女代南B群石材の使用も古墳時代中期まで続く(米田2000)。
- (3) 調査担当者も述べているが、出土した石鏝は厚く、形割り時にタガネとして使用された可能性がある。

【参考文献】

- 浅野良治 2003 「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『富山大学考古学研究室論集 屋敷楼』六一書房
- 丹羽野裕・深田浩 2004 「玉作遺跡 調査表」『古代出雲における玉作の研究』鳥根県教育委員会・鳥根県古代文化センター
- 丹羽野裕 2004 「松江市西川津遺跡における弥生時代管玉製作技術の再検討」『古代出雲における玉作の研究』鳥根県教育委員会・鳥根県古代文化センター
- 増田浩太 2004 「鳥取県の玉作関連遺跡」『古代出雲における玉作の研究』鳥根県教育委員会・鳥根県古代文化センター
- 米田克彦 2000 「碧玉製管玉の分類と碧玉原産地」『古代吉備』第22集、古代吉備研究会

第3節 南原千軒遺跡SK2の出土遺物について

(1) 和鏡

SK2から出土した和鏡は鏡背面に山吹と鳥を対称構図に配置した山吹双鳥鏡である(第114図)。

直径8.1cm、鏡胎厚1~2mm、外区幅2~3mm、外区厚5mmを測る。鏡胎は全体に薄く平坦で、周縁は外傾気味に立ち上がる。鏡背の中央には半球形の鈕があり、その側面に半円形の孔が貫通する。

鏡背文様は全体に鑄上がりが悪いため、肉眼観察では不明瞭な部分が多い。鏡背界圏から鈕寄りにかけての内区には、二羽の鳥と二輪一對の山吹が鈕を中心に対称構図で描かれる。鳥は頭部・胸部・尾部・翼部がそれぞれ独立して表現される。尾部が若干長めであることから、尾長鳥であろうか。いずれも外向きに羽ばたいており、翼にはわずかではあるが羽根の表現が確認できる。山吹は折枝の先端に五弁の花弁を飾る。花弁は一重で、蕊は認められない。また、折枝の先端に葉をあらわすものもあるが、花弁とは異なり立面で表現される。外区に描かれた山吹も同様に立面で表現される。鈕座は捺菊座となる。

山吹双鳥鏡の類例(第115図)として島根県鰐淵寺例があげられる。仁平二(1152)年の銘をもつ湖州鏡と仁平三(1153)年の銘をもつ経筒とともに蔵王窟から出土したものである。

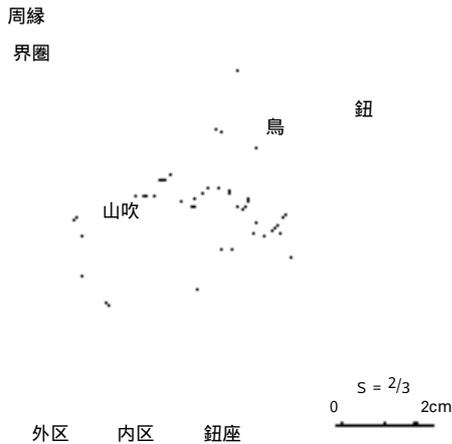
このほかには京都府鞍馬寺例がある。本堂北方の経塚周辺から出土したもので、本来は経塚から出土した治承三(1179)年の銘をもつ経筒に伴うものである。

久保智康の論考(久保1997・1999)にみる平安時代後期(12世紀)の和鏡の変遷的特徴を上述の三者にあてはめると、いずれも幅2~3mmで外傾気味の周縁を持つ類中縁鏡に相当する。~類の中で類がもっともポピュラーな和鏡で、12世紀全般を通して製作される。

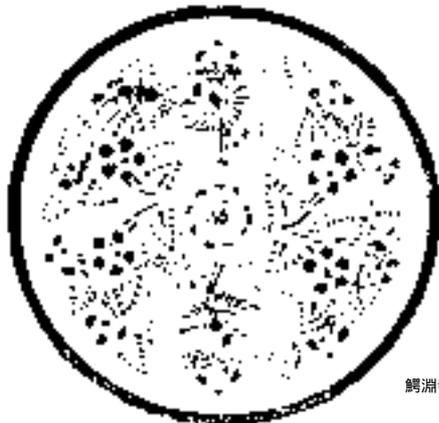
鏡背文様を見ても、三者とも描かれる山吹と鳥が対称構図を取っていることから、山吹に樹枝が加わった梅樹表現を採用するようになる12世紀第4四半期までは降らないであろう。

外区の山吹と折枝文の立面表現も共通しており、三者に見られる文様の相違点は鈕座表現のみである。南原千軒遺跡例、鰐淵寺例は捺菊座で、前者は細弁表現、後者は幅広で高肉の表現である。いっぽう、鞍馬寺例は低い花蕊座となる。

捺菊座は12世紀第2・3四半期に多く、類細縁鏡に伴う特徴なので、その影響のもとに製作された可能性が想定される。花蕊座は12世紀後半に多く見られるようである。以上のことから経筒に紀年銘を持つ二者は12世紀中頃、同様に南原千軒遺跡出土例もほぼ同じ時期に製作されたと見てよい。



第114図 SK2出土和鏡背面復元図および部位名称



鰐淵寺



鞍馬寺

第115図 山吹双鳥鏡の類例

(2) 輪状鉄製品

SK2からは和鏡のほか輪状鉄製品が出土した。いびつな楕円形を呈するものが多いが、本来は円形をなしていたものと思われる。直径は15cm前後に復元でき、合計4個体分を数える(第116図)。

同様の鉄製品は島根県吉佐山根1号墳のSK01から出土している^{註)}(錦田他1995)。SK01は1号墳の墳丘北西側墳裾の西隅部に隣接する土壌墓で、土壌内からは鉄製の刀子1点、鈴5点、環状製品2点が出土した(第117図)。環状鉄製品は断面が直径約6~7mm。環状をなす直径は21cm前後に復元できる。表面に繊維状のものが巻きつけられていた。出土状況から判断して、本来は直立し、2点が1対をなしていたようである(第118図)。調査担当者は、それらがあるものの両端に直立する「輪っか」もしくは杵がつく構造を持つものであるという推測のもと、「杵付き締め太鼓」を想定した。鈴と共伴していることから楽器である蓋然性は高いようである。

今回、南原千軒遺跡から出土した輪状鉄製品は吉佐山根1号墳SK01出土例に比べ、ひと回り小さいものであるが、所々に螺旋状に巻きつけた繊維状の付着物が残存していること、また輪状鉄製品が対をなすような出土位置にあることなどはきわめて似た状況である。本遺跡出土例を吉佐山根1号墳SK01の類例と認めるならば、これまで明確でなかった吉佐山根1号墳SK01の時期も平安時代後半まで下げて考えてよいのではないか。

さて、南原千軒遺跡SK2に葬られた人間像であるが、鏡を伴っていることから判断して女性である可能性が高いであろう(秋山1999)。また、SK2からの出土ではないが、SK2北東のP351(第85図)からは内面に赤色顔料が付着した青白磁合子の蓋(258)が出土している。SK2は全体に残りが浅く、遺構の上面が大きく削平を受けている可能性が高いことから、258も本来はSK2に伴う副葬品であったかもしれない。

このように見たとき、輪状鉄製品も女性的な要素を示す副葬品となるのであろうか。今後の資料増加に期待したい。(西川)

【註】松本岩雄氏の御教示による。

【参考文献】

- 秋山浩三 1999 「古代の男性墓・女性墓 - 奈良・平安時代墳墓の副葬品・伴出品にみる性差 - 」『古代文化』51 - 12、古代学協会
 久保智康 1997 『京都国立博物館蔵 和鏡』京都国立博物館
 久保智康 1999 『中世・近世の鏡』日本の美術394、至文堂
 錦田剛志・丹羽野裕・岩橋孝典 1995 『平ラ 遺跡 吉佐山根1号墳 穴神横穴墓群』島根県教育委員会

広瀬都巽 1938 『扶桑紀年銘鏡図説』大阪市立美術館学報1

【挿図の出典】第115図：(広瀬1938)、第117・118図：(錦田他1995)

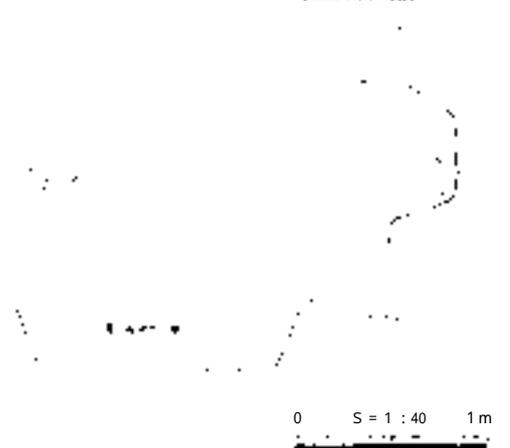
いずれも改変して引用

0 S = 1 : 6 10cm

第116図 SK2出土輪状鉄製品



第117図 島根県吉佐山根1号墳SK01出土鉄製品



第118図 島根県吉佐山根1号墳SK01遺物出土状況

第4節 南原千軒遺跡の掘立柱建物について

(1) SB1の出土銭貨について

南原千軒遺跡SB1の4か所の柱穴からはそれぞれ一枚ずつ銭貨が出土した。P1・P5・P8は礎盤石の上面で、柱を立てるとほぼ同時に納められ、P11は柱を立て、掘方埋土を何度か埋め戻している段階で納められた。いずれの柱穴も柱を立てる作業の中で銭貨を納めており、すべて身舎に伴うものであるのが特徴的である。掘立柱建物での地鎮に関わる銭貨の埋納例は県内ではこれが初例となる(中森1999・2004)。

全国的な視野に立つと銭貨を伴った地鎮遺構は多数の出土例があり、様々な埋納方法もうかがえる。銭貨を伴った地鎮遺構の分類に関しては嶋谷和彦の論考(嶋谷1997)があり、それを参照すると南原千軒遺跡SB1は「銭貨のみが単独で出土するもの」に相当する。以下に関連する遺構に関して若干の検討を試みる^{註1)}(第29表)。

まず、柱を立てるとほぼ同時に銭貨を納めたものには福岡県大宰府条坊跡や高知県具同中山遺跡群^{註2)}(筒井編2001)がある。前者は根石あるいは礎盤石を据える直前か柱を立てる前後に銭貨を納めている。後者の柱穴口2の出土状況は南原千軒遺跡SB1のそれと類似する。また建物の平面形式をみても身舎の(二2~6、八2~6、口2~6)西側と南側に、矩折れに取り付く廂をもつ可能性があり、興味深い。今後、建物の詳細な検討が必要であろう。

次に銭貨が建物のどの柱穴に納められているのかをみていくと、当遺跡では身舎の北東隅(P1)とその対角線に位置する柱穴(P8)、そしてその両側(P5・P11)に納められている。

陰陽道では災いの多い方角として北東方向を鬼門、その反対の南西方向を裏鬼門とし、忌み嫌う方角とみなしてきた。掘立柱建物の柱穴に銭貨を埋納したのは、それらの位置を意識していたためではないかという見方もある(海邊・渡邊2004、大庭1999、西尾2004)。以下、それに関連する例を列挙する。

鬼門の位置に対応しているのは岡山県百間川米田遺跡の建物148。裏鬼門に対応しているのは山口県下右田遺跡で、かつ棟持柱の位置にあたる。また徳島県円通寺遺跡・神宮寺遺跡・薬師遺跡、愛媛県南久米町遺跡では裏鬼門に対応する柱穴に共通して開元通寶が納められる。そして鬼門と裏鬼門の両方に対応するのが島根県渡橋沖遺跡である。ただし、その方位は厳密ではない。

このほか岡山県百間川米田遺跡の建物164や岩手県泉屋遺跡15次調査SB17などはいずれにも該当しない。先述の徳島県薬師遺跡でも裏鬼門に対応する出土例のほかに、南棟持柱・南東隅の柱穴からの銭貨出土例も見られる。一概に建物の北東側に納められた銭貨を鬼門、南西側のものを裏鬼門という解釈で片付けてしまった場合、これらの埋納銭貨にはどのような意義付けをするべきか、南原千軒遺跡出土例も含め、今後の検討課題であろう。

今調査区でもう1棟検出されたSB2からは全く地鎮の痕跡は認められなかった。一方、SB1の南東に位置するSK10では多量の土器が廃棄されており、明確ではないが別の作法による地鎮あるいは祭祀の可能性が想定される。ひとつの屋敷地内において、建物の規模や性格の違い、あるいは土地そのものを対象とした場合ではそれぞれ地鎮作法を使い分けているのかどうかということも念頭に入れながら、今後も調査を進めていく必要がある。

(2) SB1・2の建物復元

SB1・2は調査当初の段階では、2間×2間の身舎に1間の廂が取り付く、2棟の建物が双堂の

第29表 銭貨出土掘立柱建物の類例

県名	遺跡名	時期	遺構名	柱穴の位置・性格	埋納位置	銭種
福岡	大宰府条坊跡(140次)	13~14C	SB010	P・c・e(南西)・f・g・h	掘方底面近く	c:元祐通寶 e:元祐通寶 f:皇宋通寶 g:嘉祐通寶 h:元祐通寶
高知	具同中山遺跡群()	13~14C前	SB 1	八2・口2(南西)	掘方底面近く口2は礎盤とともに出土	八2:天禧通寶 口3:皇宋元寶
山口	下右田遺跡(3次)	中世	SB17	PH 8 棟持柱(南西)	柱穴内	太平通寶、洪武通寶ほか8枚
島根	渡橋沖遺跡	13~14C	SB01	P359(北東) P213(南西)	柱穴内	P359:宋通元寶 P213:元豊通寶
岡山	百間川米田遺跡	鎌倉時代後半	掘立柱建物148	柱穴6(北東)	柱穴内	景德元寶2、天聖元寶
"	"	鎌倉時代	掘立柱建物164	柱穴3(南)	柱穴内	皇宋通寶、聖宋通寶
徳島	円通寺遺跡(小山地区)	14C	SA1019	P1598(北東寄り)	掘方埋土	元祐通寶、政和通寶
"	神宮寺遺跡	13前~16C	SA1011	柱穴(南西隅)	柱穴内	開元通寶
"	薬師遺跡	14~16C	SA1014	柱穴(南西隅)	柱穴内	開元通寶
"	"	"	SA1002	柱穴(南東隅)	柱穴内	洪武通寶
"	"	"	SA1010	柱穴(南)棟持柱	柱穴内	銭種不明
愛媛	南久米町遺跡(2次)	9~11C	掘立柱建物 1	柱穴(南西隅)	柱穴内根石の下層基底部	開元通寶
岩手	泉屋遺跡	15C	15 SB17	P359	掘方埋土中位	天聖元寶、元豊通寶

ごとく並列したものであると捉えていた。

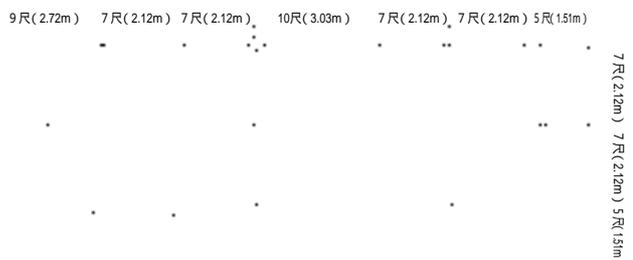
しかしSB 1の西面で身舎に伴う柱穴(P17・18)を、また東面では南面から連続する廂(P19~22)を確認したことから、桁行中央間が広がる形式の建物であると判断し、同様にSB 2も西面に廂を持った、桁行中央間が広がる形式の建物とした。

まず、それぞれの柱間寸法を復元する。遺構検出面では柱穴の掘方から多くの柱痕跡を確認した。その柱痕跡をそのまま柱列として結んでいくと、柱筋が通らない所が多くなる。これは必ずしも真直ぐな柱材ばかりを使用していないこと、また桁材あるいは梁材と組み合う上部での調整の結果が反映されたものと理解しておく。礎盤石の位置が高くなるSB 1のP13や二段重ねにしたSB 2のP13なども、上部での長さを揃えるための微調整であったことを物語る。よって、小屋組みにおいて整った数値の尺度で組み合っているという前提で柱間寸法を推定する。

1尺=30.3cmとしてみた場合、SB 1は第119図のようになる。P15のように約1尺ずれるものもあるが、全体的に見て柱筋ともほぼ対応しているので、妥当なものであると判断したい。

次にSB 2であるが、身舎の平面形式はSB 1と同様なので、その尺度をあててみた(第120図)。桁行方向の柱掘方にはかなりばらつきが見られ、SB 1ほどの対応関係は認められないが、全体でのバランスを考慮するとすれば、身舎に関しては同様の尺度であったと見るべきであろう。廂部分に関しては柱位置から判断してSB 1より1尺長い6尺であったと考えられる。

次に柱配置から平面形式を復元すると、SB 1は 身舎 廂 下屋の大きく3つの空間に分けることができる。 については柱位置から見て少なくとも3部屋に仕切られていた可能性がある。 は軒先に向かって柱間寸法が身舎より2尺短くなり、南東側で隅をなす。 に関しては北端と南端の桁行の延長上で同様の柱穴が検出できなかったことから判断した。このことから西妻側に差し掛けが設けられ、そこが入り口となったのであろう。また、そのように考えた場合、P14~16・28の西側に対応する小ピット、あるいは平坦面を持つ石のある位置が縁束に相当すると考えられ、北面を除いた



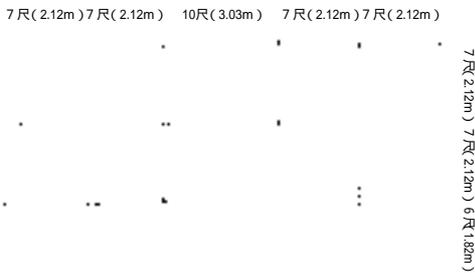
第119図 SB 1 柱間寸法復元図 (S = 1/200)

身舎の周囲には縁板が貼り巡らされていた可能性が高い。しかし、身舎内では床束の痕跡を全く認められなかったため、さらに想像を逞しくしてしまうが、縁板があるとすれば、床板も当然あったものと見てよいのではないだろうか。上屋に関しては後述する。

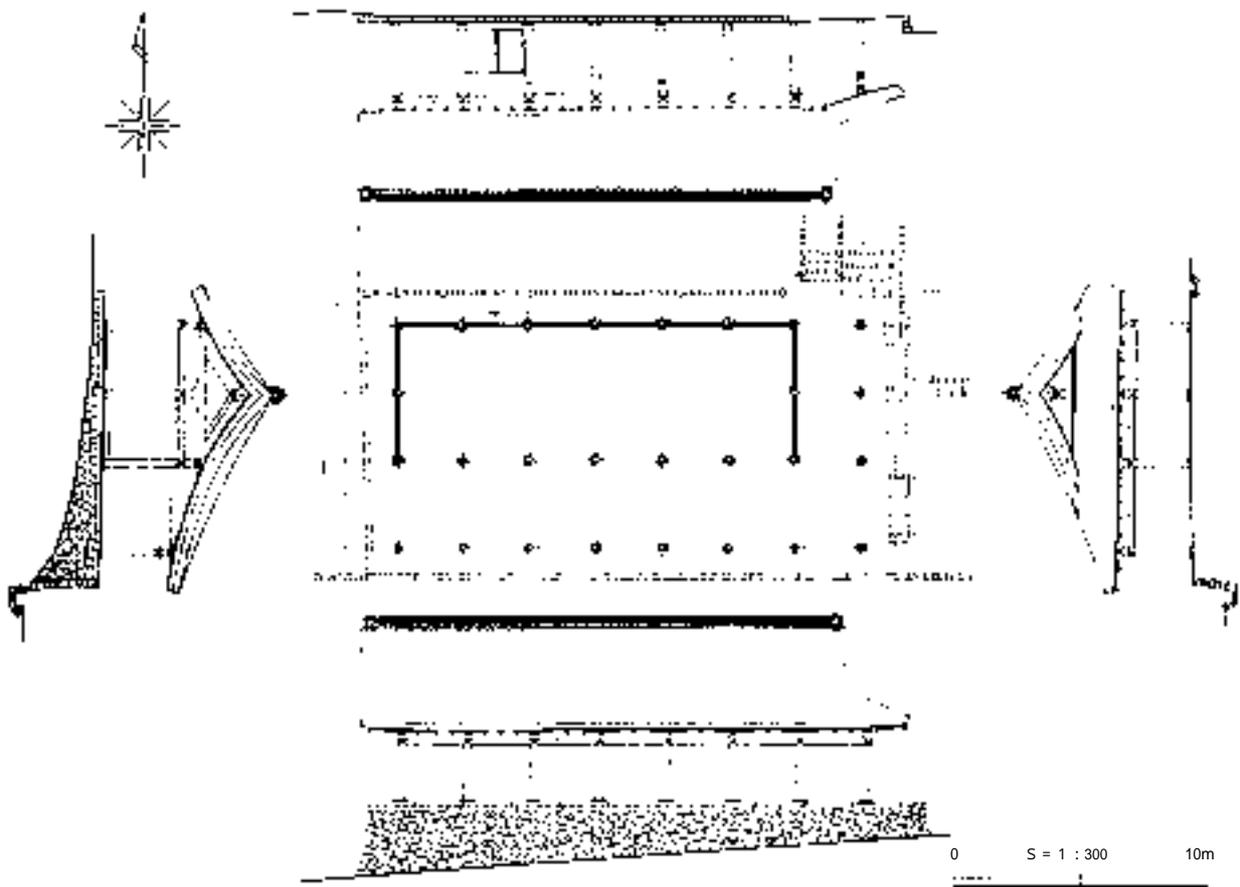
次にSB 2 であるが、遺構面があまり良好に残存しなかったこともあり、SB 1 と同様の身舎を持ち、西側に廂をもつということ以外は不明確である。礎盤石の可能性のあるP161（第84図）などを尊重すれば、北面に下屋が存在したとも想定できるであろう。また南面のP131・133・135・137なども桁行方向の柱筋に対応していると看取できるが、これらの掘方埋土の断面観察では柱痕跡や抜き取り痕跡も認められず、しまりのない埋土であったことから、建物には直接関連しないものと判断した。床面の有無に関しても、先述のように残りが悪いため、保留としておく。

さてSB 1 とSB 2 の両者の関係であるが、前者が東西棟、後者が南北棟の建物で、それぞれの軸線の交わる角度は80°をなし、直交しない。また柱穴の底面の標高から判断する限り、両者には大きな差はなく、本来はほぼ同じ高さの地表面に立てられていたものとみてよい。

同時併存していたかどうかは明確にはいえないが、掘方埋土に含まれる遺物に大きな時期差がないこと、柱抜き取り穴がほとんどないことから、移築等、建て替えの可能性は低いと考えられる。



第120図 SB 2柱間寸法復元図 (S = 1/200) 次にSB 1 の上屋構造の復元を考える上での参考例とし



第121図 奈良県春日大社到着殿 平面図および立面図

て、奈良県春日大社着到殿をあげる^{註3)}。この建物は延喜十六(916)年に造立され、現存するものは応永二十(1413)年に建立されたものが、いく度かの修造を経たものである。正面7間、側面3間の檜皮葺礎石建物。正面6間、側面2間の身舎の南側と東側へ矩折れに1間通りの廂を付けた形式である。

上屋は切妻造りの身舎に廂屋根が取り付け付いた形で、東妻は入母屋造り、西妻は流れ造りという特異な形式である(第121図)。

建物の下部構造や規模、柱配置などはSB1と異なるが、矩折れの廂を持つ建物の屋根形態および隅軒の納め方を考える上では重要な参考資料となるであろう。(西川)

【註】

- (1) 以下、報告書の出典がないものは(出土銭貨研究会四国ブロック編2002)を参照した。
- (2) 池澤俊幸氏から御教示を得た。
- (3) 箱崎和久氏から御教示を得た。

【参考文献】

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書』
 大庭俊次・間野大丞・足立克己 1999 『渡橋沖遺跡』鳥根県教育委員会
 岡本寛久編 1989 『百間川米田遺跡(旧当麻遺跡)3』岡山県教育委員会
 海邊博史・渡邊淳子 2004 「讃岐における地鎮めの様相」『2004年出土銭貨報告会』発表資料
 嶋谷和彦 1997 「中世の“地鎮”と銭貨」『出土銭貨』7、出土銭貨研究会
 出土銭貨研究会四国ブロック編 2002 『中世の地鎮と銭貨』出土銭貨研究会
 筒井三菜編 2001 『具同中山遺跡群』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
 中森 祥 1999 「鳥取県下の出土状況」『出土銭貨』11、出土銭貨研究会
 中森 祥 2004 「地鎮にかかる銭貨・鳥取県」『山陰の出土銭貨』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局
 西尾克己 2004 「地鎮にかかる銭貨・鳥根県」『山陰の出土銭貨』出土銭貨研究会中国ブロック大会事務局
 山口県教育委員会 1980 『下右田遺跡第4次調査概報』

【挿図の出典】

第121図：『重要文化財春日大社本社宝庫・車舎・着到殿修理工事報告書』奈良県教育委員会事務局・奈良県文化財保存事務所1966より一部改変して引用

第5節 南原千軒遺跡における中世初頭の鉄生産について

本遺跡では、鉄関連遺構を検出していないものの、非常に多くの鉄関連遺物が出土した。出土遺構の時期から、鉄生産は中世初頭(12~13世紀)を中心として行われていたと考えられる。本節では、当該期における鳥取県内の製鉄関連遺跡を概観し、本遺跡の鉄生産の性格を明らかにしたい。

第30表 鳥取県内の中世製鉄関連遺跡

遺跡名(所在地)	鉄関連遺構	鉄関連遺物	出土点数/総重量 (単位はg)	時期	文献
南原千軒遺跡 (東伯郡琴浦町光)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・椀形鉄塊・鉄塊系遺物・炉壁・羽口・鉄製品ほか	627/98395.8	12~13世紀 (7世紀?~)	本書
円護寺坂ノ下遺跡 (鳥取市円護寺)	炉壁集積遺構・ 鋳溜・鍛冶炉	椀形鍛冶滓・粒状滓・鍛造刮片・羽口・炉壁・ガラス質滓・ 鋳型・鉄製品	?/10728	13世紀前半	谷口恭子・稲浜隆志編2000『円護寺坂ノ下遺跡』鳥取市教育福祉振興会
大河原遺跡 (倉吉市関金町山口)	製錬炉・精錬鍛冶炉・ 鍛錬鍛冶炉	製錬滓・精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓・炉壁	??	16世紀	日野琢郎 1985『大河原製鉄遺跡発掘調査報告書』関金町教育委員会
観音堂遺跡 (倉吉市関金町松河原)	-	鍛冶滓・羽口・台石	4~/?	12~13世紀	日野琢郎 1993『観音堂地区』関金町内遺跡群発掘調査報告書』関金町教育委員会
押平弘法堂遺跡 (西伯郡大山町押平)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口・鉄製品	23~/2259.8~	鎌倉前期	八峠興編 2002『茶畑六反田遺跡・押平弘法堂遺跡・富岡播磨洞遺跡・安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団
茶畑六反田遺跡 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口・鉄製品	17~/723.4~	鎌倉	
茶畑六反田遺跡 0区 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口・鉄製品	12~/755.2~	12世紀	中森祥編 2004『茶畑六反田遺跡(0・5区)』鳥取県教育文化財団
茶畑六反田遺跡 0区 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・鉄製品	14~/643.5~	15世紀前半~	
茶畑六反田遺跡 0区 (西伯郡大山町茶畑)	-	椀形鍛冶滓・鍛冶滓・羽口	8~/125.7~	16~17世紀初頭	
露牛ノ尾遺跡 B地区 (日野郡日南町霞)	-	流出孔滓・椀形鍛冶滓・流動滓・鉄塊系遺物・ 再結合滓・炉壁・羽口・炉壁石・鉄製品ほか	117~/57900.5~	中世~	中森祥・濱隆造・森田結城 2001『露遺跡群』鳥取県教育文化財団

管見によれば鳥取県内における中世の製鉄関連遺跡は6遺跡確認できる^{註1)}(第30表)。炉跡などの遺構が確認されているのは、円護寺坂ノ下遺跡、大河原遺跡の2遺跡で、他の遺跡は本遺跡と同様、鉄関連遺物が出土しているのみである。

本遺跡で出土した鉄滓は、含鉄鉄滓が非常に少ない点が特徴的である。この含鉄鉄滓の割合について、西伯郡大山町の名和衣装谷遺跡(平安初期)では含鉄鉄滓の占める割合の高さから、同遺跡において鉄の流通管理が行われていたと考えられている(湯川2003)。含鉄鉄滓が鉄素材として流通していたのか、精錬鍛冶工程の段階で金属鉄を残しつつも廃棄されたものなのか判断は難しい。いずれにせよ本遺跡では、含鉄鉄滓の占める割合の低さから、鉄素材あるいは鉄製品の製作まで組織的に行われていたと考えられる。また各遺跡の鉄製品を除く鉄関連遺物の出土点数・総重量をみると^{註2)}、本遺跡と霞牛ノ尾遺跡B区が群を抜いている。他の遺跡では集落内での小規模な鍛冶が行われていたと想定されるが、特に本遺跡の場合、それらの遺跡に比べ大規模な操業で、12世紀以降にみられる鉄の量産化(角田2004)に対応したものと考えられ、他地域への供給を行っていた可能性も推測できる。

鳥取県の中世製鉄関連遺跡は、旧関金・三朝両町を中心とした東伯郡の山間部・海岸部の西伯郡旧名和町周辺・日野郡一帯に分布しているが、今回の調査によって、本遺跡が位置する東伯郡の海岸部でも本格的な鉄生産が行われていたことが明らかとなった。また、伯耆国では鉄を貢納していた荘園がいくつか知られており、これらと鉄生産遺跡をどのように関連づけられるかが今後の重要な研究課題となろう。

近年琴浦町では、時期は異なるものの新たな製鉄関連遺跡の発見が相次いでおり^{註3)}、本遺跡の南側調査区外に存在する可能性が高い鍛冶遺構等が確認されれば、当地域における鉄生産の様相がより一層明らかになることが期待される。

(山根)

【註】

- (1) 県内の中世製鉄遺跡については松之舎文雄氏が整理している(松之舎2004)。
- (2) 鉄製品については、各遺跡の鍛冶工程の所産のもの判断しかねる例が存在するため除外した。また、本遺跡は全出土資料のデータであるが、他の遺跡は主に図示した資料のデータであるため、厳密な比較はできない。ただし、大まかな傾向は把握できる。
- (3) 八橋第8・9遺跡：小口英一郎編 2003 『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団
別所中峯遺跡：大野哲二編 2004 『松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡』鳥取県教育文化財団
中道東山西山遺跡：高尾浩司編 2005 『中道東山西山遺跡』鳥取県教育文化財団

【参考文献】

- 角田徳幸 2004 「中国地方における古代末から中世の精錬鍛冶遺跡」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会
松之舎文雄 2004 「鳥取県の中世製鉄遺跡」『中国山地の中世製鉄遺跡』第32回山陰考古学研究会事務局
湯川善一 2003 「まとめ」『名和衣装谷遺跡・古御堂金蔵ヶ平遺跡』鳥取県教育文化財団

第6節 南原千軒遺跡出土の古代・中世の土器について

今回の調査では、古代・中世、特に12世紀～13世紀代に位置づけられる土器が多量に出土した。これらの土器について、以下に若干の整理を試みる。

(1) 古代の土器について

8・9世紀代の土器がSD1、SD6から出土している。8世紀代に位置づけられるものは須恵器坏(SD1:126)、須恵器高台坏(SD6:135、136、SD7:142)、須恵器皿(SD6:137)などである。これらは底部回転系切であり、高広編年 期(8世紀中葉～9世紀前半)に相当する。また、SD9からは須恵器長頸壺底部(182)が出土しており、同 B期(7世紀末～8世紀前半)に遡る可能性がある。注目される遺物として、鉄鉢形須恵器(SD1:128)、朱墨付着の坏(SD1:126)がある。

9世紀代に位置づけられる土器として、赤色塗彩、底部回転ヘラ切りの特徴をもつ坏、皿が出土し

ている（SD 1 : 131、132、SD 6 : 140）。これらは伯耆国庁編年2段階（9世紀）に相当する。

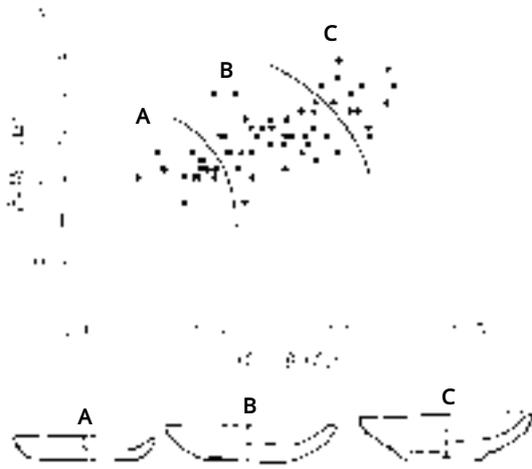
これらの遺物はSD 1・SD 6の埋土中から混在して出土しており、これらの溝が9世紀代に埋没したことを示している。今回の調査では8世紀代の遺構は検出されていないが、本調査地から勝田川を挟んで対岸に位置する八幡遺跡では、飛鳥・奈良時代の総柱掘立柱建物跡や、畿内系土師器、墨書土器、転用硯などが発見されており、官衙関連施設としての性格が想定されている（野口編2005）。本調査地における鉄鉢形須恵器や朱墨付着土器の出土から、本調査地の近傍にもこれと関連する遺構が存在したことが想定される。

（2）中世土器の器種分類

中世初頭の土器は、底部回転系切の土師器を主体として各遺構から多量に出土している。この中には、SK10・SK12出土土器のように、一括して廃棄されたと考えられる良好な資料も含まれる。

まず、土師器の器種について以下のように整理する。

- ・ 坏 口縁部が直線的に広がるもの（A）と内弯するもの（B）、器高が低く皿に近いもの（C）がある。A類、B類の底部はいずれも回転系切である。坏B類には、外面にナデ調整による凹凸が段状に残るものが多い。



第122図 小皿の分類

- ・ 皿 いわゆる小皿が主体である。法量を基準として以下のとおり分類する（第122図）^{註1）}。

A : 器高1.8cm未満、口径／底径比1.5未満。 B : 器高1.8cm～2.2cm、口径／底径比1.5～1.9。 C : 器高2.3cm以上、口径／底径比2.0以上。

- ・ 柱状高台坏・皿 底部回転系切で柱状の高台をもつ坏、皿である。完形のものはないが、八峠興の分類^{註2）}

	高台坏	坏	皿・小皿	柱状高台皿	煮炊具
中世	米子城跡21遺跡SK32	B			甕A
	SK10	A, B, C	B, C	B	218, 217
	SK12		207, 206, 202, 205, 215, 211, 212	223, 226, 229, 230, 231	坏B, C
期	打塚遺跡土壇状盛土				甕B, 鍋
	期			SD 4 170, SK 9 199	SD 4 168, SD 4 167, SB 1 117, SI 31 119

第123図 中世土器の変遷

第31表 遺構別出土土器集計表

遺構	坏			底部	皿			柱状高台			甕		鍋	羽釜	須恵器 壺・甕	陶磁器		
	A	B	C		A	B	C	B	B	坏B	A	B				白磁	青磁	その他
SI 2	1			1		1	2									1		
SB 1				2	1								2		1		1	
SB 2				1	1													1
SK 1				1	1						1							
SK 3				1														
SK 5					1												1	
SK 6		1		2														
SK 7						1											2	
SK 9														1				
SK10	2	2	1	5		2	4	1				2						
SK11				1														
SK12				1			5		2	1								
SK13					1										1			1
SK14					1													
SK15	1			1	3										1			
SK18		1		2	1													
SK21		1		2														
SK22	1			2										1				
SD 4				1	1	1						1	1	1			3	
SD 5																		1
SD 7		1		1	2		4			1			1				2	
SD 8				1													1	

による皿 B類、 B類、 C類、 坏 B類を確認できる。

・煮炊具 全体形を窺えるものはないが、甕、鍋、羽釜が出土している。甕は土師質で、ゆるく外反して直線的な体部につながるもの（A）と、口縁部が「く」字状に外反するもの（B）とがある。鍋は土師質と瓦質がある。土師質は受け口状のもの（SB 1 : 117）と「く」字状に外反するもの（SD 7 : 161）がある。瓦質のものは小片だが、口唇部が小さく外反して面をもつ（SB 1 : 119）。羽釜は土師質である（SD4 : 170、SK9 : 199）。

土師器の他に須恵器、輸入陶磁器が出土している。須恵器は、全体形を窺えるものとして遺構外出土の壺284がある。遺構出土のものには壺、甕と思われる破片があり、そのうちSK13出土の破片は胎土分析により勝間田産と推定された（第4章第2節参照）

輸入陶磁器には完形のものはないが、白磁、青磁片が出土している。白磁は 類、 類の碗がある。青磁は白磁と比べるとごく小数であり、かつ小片のみであるが、龍泉窯系と考えられる破片が出土している。その他に、褐釉陶器と考えられる破片や、青白磁合子の身と蓋が1点ずつ出土している。

（3）中世土器の編年的位置づけ

第3章の事実報告においては、これらの出土土器を八峠中世 期（12世紀）ないし中世 期（13世紀）に位置づけたが、上述の器種分類を踏まえ、ここで改めて整理する。第31表は、出土した土器の器種、分類を遺構ごとに示したものである^{註3)}。SK10などを除いて厳密な共伴関係を示す資料は少なく、また出土した遺物のすべてを図化しているわけではないのでおおまかな傾向を示すに過ぎない。

さて、中世 期と 期とを分期する基準は必ずしも明確ではないが、煮炊具では中世 期になると羽釜、受け口状口縁の鍋が出現する。また輸入陶磁器では、中世 期には白磁主体であった組成が、期にかけて青磁が増加し、やがて龍泉窯系青磁が中心となる傾向が指摘されている。

この編年観に則してみると、中世 期に位置づけられるのはSB 1・SD 4・SD 5・SK 9である。SB 1からは受け口状口縁土師質鍋、瓦質鍋、外面に蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗が出土している。SD 4からは土師質羽釜が出土している。また、浅い溝であるため一括性は疑問であるが、甕A類、白磁碗 類、瓦質の羽釜脚部かと思われる破片が含まれる。なお、SB 1とSD 4とは切り合い関係にあり、前者が後出する。

良好な一括資料と評価できるSK10・SK12は中世 期に位置づけられる。伯耆の中世 期の資料として、八峠編年（八峠2004）では米子城跡21遺跡SK32、打塚遺跡土壇状盛土出土資料が例示されており、編年表の配列からは後者が新しく位置づけられているようである。SK10とSK12出土資料は、小皿や柱状高台皿の形態が打塚出土資料に近い様相を示している（第123図）。ただし、SK10・SK12、打塚出土資料は、小皿B、C類の組成に違いがある。すなわち、SK10・打塚出土例はB、C類を含

むがSK12はC類のみである。ここで示したA～C類の法量差、形態差が時期差を示すものと立証されれば、出土量の多い小皿は当該期編年の基軸となることが予想されるが、今回は十分な分析を果たせなかった。後考を期すことにしたい。

以上、SK10・SK12を中世 期に、SB1・SD4・SD5・SK9を中世 期に位置づけた。これら以外の遺構については、土器の出土点数が少ない、あるいは小片であるなどの理由から時期判断の難しいものが多いため、～ 期と幅を持たせて把握しておきたい。

今回の調査を含め、当該期の資料は近年急速に蓄積が進んでおり、土器編年も整備されていくものと期待される。その成果如何によっては、現状の編年観に基づく各遺構の評価に変更が生じる可能性もあることを付記しておく。 (君嶋)

【註】

- (1) 本遺跡出土の実測図掲載資料に、サンプル数を確保するため打塚遺跡土壇状盛土内出土土器、大日寺遺跡遺構外出土土器(ともに倉吉市)を加えた上でグラフを作成した。総サンプル数は70である。倉吉市の2遺跡出土資料の法量は報告書記載の実測図から計測したものである。
- (2) 類：器高が低く、台部は円盤高台状で低い。 A類：接地面からそのまま開くもの、または円柱状の高台をもつもの。
B類：接地部から内傾して立ち上がるもの。
類：器高がやや高く、台部は外に張り出すものが多い。 A類：台部が円柱状で垂直方向に立ち上がるもの。 B類：台部が接地部から内傾して立ち上がるもの。 C類：台部の端部が一段高くなるもの。
坏(椀) A類：台が接地面から垂直方向に立ち上がる円柱状のもの。坏(椀) B類：台が接地面から内傾するもの。坏(椀) C類：台の端部が一段高く、装飾的なもの。(八峠2001)
- (3) 実測図掲載個体のみを数えたものであり、出土した土器の組成を反映しているものではない。また、口縁部、体部を欠き、坏か皿かの判断が難しい底部のみの破片については「底部」として一括している。

【参考文献】

- 真田廣幸編 1983 『打塚遺跡発掘調査報告』倉吉市教育委員会
野口良也編 2005 『八幡遺跡』鳥取県教育文化財団
森下哲哉編 1993 『大日寺遺跡群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
八峠 興 1998 「山陰における中世土器の変遷について」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
八峠 興 2000 「山陰における平安時代の土器・陶磁器について」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
八峠 興 2001 「柱状高台考」『中世土器研究論集』中世土器研究会
八峠 興 2004 「山陰の中世土器に関する覚書」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
湯村 功他編 1998 『米子城跡21遺跡』鳥取県教育文化財団
【挿図の出典】第123図：米子城跡21遺跡SK32(湯村他編1998) 打塚遺跡土壇状盛土(真田編1983)

第7節 南原千軒遺跡と勝田荘

南原千軒遺跡では、中世初頭(12～13世紀)の遺構が多数検出された。当該期の南原千軒遺跡の性格について、以下に考察を試みる。

(1) 中世初頭における南原千軒遺跡の空間構成

当該期の遺構として、溝(SD7など)、土坑(SK10など)、墓(SK2)、竪穴建物(SI2・4)、掘立柱建物(SB1・2)が確認された。また、遺構として検出されてはいないが、鍛冶関連施設が近傍に存在した可能性は極めて高いと考えられる。

まず、これらの遺構のいくつかについて、その性格を考えてみよう。溝SD7は、等高線に平行する直線的な走向であることから、人為的に掘削された溝と考えられる。かつ、先行するSD6・SD1とほぼ重複していることから、踏襲された地割を示す区画溝である可能性が高い。もしそうならば、SD6・SD1の埋没時期は9世紀代であることから、かなり長期間にわたってこの地割が踏襲されていたことになる。さらに溝の規模を考え合わせると、これらSD1・6・7は条里地割の坪境の溝ではないだろうか。周辺では、日野尚志によって調査地の西側に条里地割が復元されている^{註1)}(日野

1990) SD7の方向はこの地割には一致しないが、勝田川東岸の小字界とは整合的であるように見受けられる(第125図)。このことから、勝田川西岸とは別個の条里地割が同東岸に施行されていた可能性を考えたい。また、滞水していた状況が窺えることから、用水や運河的な機能を合わせ持っていたのかもしれない^{註2)}。

掘立柱建物SB1・SB2は廂をもつ建物である。廂部分を含めた平面規模はSB1が78m²(13×6m)、SB2が66m²(11×6m)であり、周辺遺跡の類例と比較すれば大型の部類に属する^{註3)}。

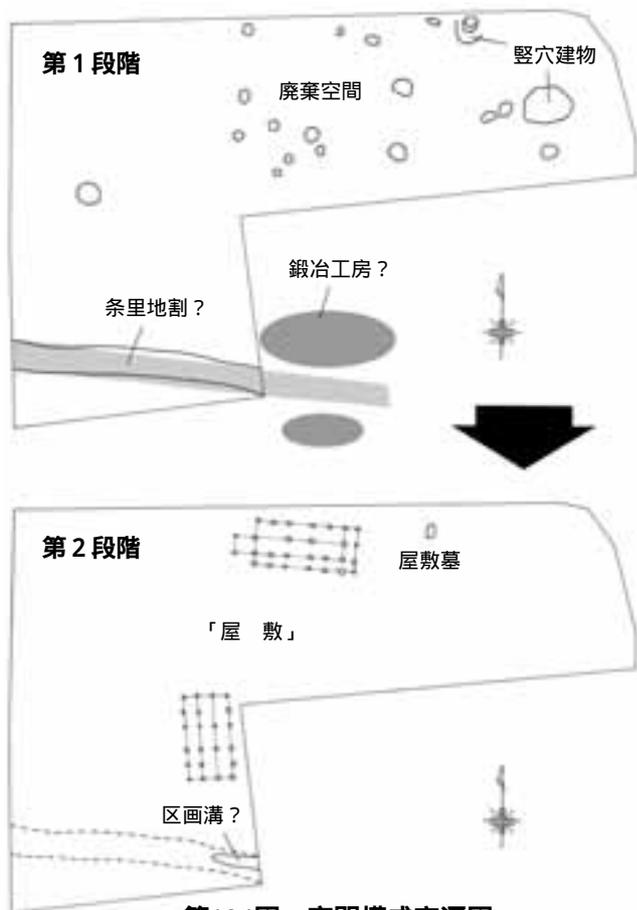
墓墳SK2は、建物SB1に近接して単独で設けられていることから「屋敷墓」の範疇で理解できる。ただし、出土した和鏡の年代観は12世紀半ば頃であり、13世紀代と考えたSB1の時期とは齟齬があるが、これについては鏡の製作・使用年代と埋葬年代との差と解釈する余地もある。

土坑の多くはその性格を充分明らかにできないが、SK10やSK12のように土師器皿を中心とする土器が多量に出土した土坑については廃棄土坑と考えられる。特にSK10出土土器には意図的な打ち欠き等が見られることから、儀礼的行為に伴い一括廃棄されたものと考えられる。

次に、中世における空間利用の変遷について整理する。本章第6節で述べたように、中世の遺構は出土遺物から中世～期に位置づけられる。中世～期に位置づけられる遺構としてSB1・SD4などがあるが、SB1はSD4の埋没後に建てられていることから、SB1が最新相を示す遺構ということになる。したがって、本調査地の空間利用については、SB1・SB2の成立を画期として以下のような2段階の変遷を想定することができる(第124図)。

第1段階(中世～期～中世～期)

SD7は中世～期の段階で埋没が始まっていたものと考えられるが、なお区画溝として機能していた可能性もある。この段階の主要な建物はSD7の南側など調査区外に存在したものと想定される。SD7の北側にあたる調査区内には数多くの土坑が掘られており、廃棄空間として利用されていたのであろう。調査区の東側には性格不明の竪穴建物(SI2・4)が設けられる。また、SD7の北側ないし南側の調査区外には鍛冶関連施設が存在したものと推測される。



第124図 空間構成変遷図

た可能性もある。この段階の主要な建物はSD7の南側など調査区外に存在したものと想定される。SD7の北側にあたる調査区内には数多くの土坑が掘られており、廃棄空間として利用されていたのであろう。調査区の東側には性格不明の竪穴建物(SI2・4)が設けられる。また、SD7の北側ないし南側の調査区外には鍛冶関連施設が存在したものと推測される。

第2段階(中世～期)

これまで廃棄空間だった調査区中央にSB1・SB2が建てられる。墓墳SK2については、先述したとおり副葬品の示す時期との齟齬があるが、屋敷墓の「被葬者が「屋敷」創設の主体者」(橘田1991)であったとする通説に従うならば、この段階に位置づけられる可能性も考えられる。SD7はほぼ埋没し、区画溝(坪境溝)としての役割を終えたものと考えられる。ただし、SD7埋没後に掘り込まれたSD

5が新たな区画溝として機能した可能性がある。

(2) 文献史料にみる勝田荘

以上、考古学的所見に基づいて空間利用の変遷を整理した。さて、南原千軒遺跡に人々の活動の痕跡が刻まれた中世初頭、調査地周辺の勝田川流域はどのような歴史的環境にあったのであろうか。

文献史料によれば、当該期の調査地周辺には「勝田荘」と呼ばれる荘園が存在した可能性がある。鎌倉時代の公家藤原経光の日記である『経光卿記』天福元(1233)年5月の紙背文書中の年月日・氏名不詳断簡に「仰伯州勝田荘、雖為六代相伝地…去年地頭新補之上」とある。この記事から、勝田荘は承久の乱(1221年)後の地頭補任地と考えられている(錦織1999)。

勝田荘の所在地については、大別して西伯耆の会見郡説と東伯耆の八橋郡説とがある。『荘園志料』(清水・竹内1933)は会見郡、現在の米子市勝田(かんだ)周辺に比定している。田中稔も同様に会見郡とし^{註4)}(田中1970)、陶山徹も田中の説を引いている(陶山1973)。一方で、『角川日本地名大辞典31 鳥取県』(1982)および錦織勤(錦織前掲)は八橋郡、すなわち調査地周辺の勝田川流域に比定する。前者は、会見郡説への反論として『佐々木文書』所収の文和三(1354)年10月14日付足利尊氏袖判下文を引き、米子市勝田は中世には「神田庄」と表記されていたものであり勝田荘とは別であると論じる。

文和三年10月14日付足利尊氏袖判下文には次のように記されている。

「下 佐々木近江守秀綱跡 加令早領知出雲国女来庄 伯耆国小鴨次郎・同庶子等跡并蚊屋庄 城大曾祿跡 神田庄南條又五郎跡 因幡国私部郷 毛利次郎同庶子跡 事・・・(以下略)。」

この文書は、足利尊氏が、前年戦死した佐々木秀綱の遺領を氏名不詳某に与えるという内容で、その遺領の中に「神田庄南條又五郎跡」がある。この南條又五郎は、戦国期に羽衣石城(東伯郡湯梨浜町)を本拠地として東伯耆に勢力を拡大した南条氏の一族と推測される。もしそうであるならば、その遺領である「神田庄」は西伯耆よりも東伯耆にあったとする方が考えやすい。また、米子市の現行地名にみるように「かつた」と「かんだ」が通じるならば、八橋郡の勝田もかつては「かんだ」と発音されることがあったと想定される。これらのことから、南條又五郎の「神田庄」を八橋郡の勝田川流域に比定することも可能なのではないだろうか^{註5)}。

勝田荘を勝田川流域に想定した場合、地名としての「勝田」集落は、調査地のすぐ東側を流れる勝田川の上流約1.5kmに位置している。ただし、本調査地から南東へ約300m離れた勝田川の東岸に、荘園を示唆する地名である「上公文給」の小字名が残っていることから、調査地周辺が荘園に含まれる可能性は十分に考えられる。時期的には、承久の乱後の地頭補任地であり、乱以前に6代に渡って相伝されてきたとあるため、南原千軒遺跡の遺構の時期と重なりを持つことになる。

南原千軒遺跡と勝田荘を直接に結びつける証拠(墨書土器や木簡など)はない。ただし、本遺跡が勝田荘の一角を占めると仮定するならば、建物SB1や墓壙SK2、多量に出土した鉄関連遺物などの理解が容易になるのではないだろうか。SB1とSK2に関連して、屋敷墓を分析した橋田正徳は、荘園遺跡に「屋敷墓」を擁する建物群が多いこと、屋敷墓は主に百姓層(名主層)に受容されたことを論じている(橋田前掲)。SB1・2を営んだ主体の性格、階層を考えるうえで興味深い指摘である。また、今回の調査で出土した鉄関連遺物は総重量が100kg近くに達し、集落内で消費していたには多すぎる印象がある。伯耆国内では鉄を貢納していた荘園が何箇所か知られており(福田1996)、本遺跡でも貢納品として鉄が生産されていたのかもしれない。

以上、南原千軒遺跡と勝田荘との関係について述べてきた。仮定に仮定を重ねた乏しい根拠に基づく見解ではあるが、仮説として提示しておき、再検討の機会を待つことにしたい。（君嶋）

【註】

- (1) また、岩永實も、笹津付近から西宮付近にかけての方格地割（N - 2° - E）の存在を示唆している（岩永1977）。
- (2) SD7の溝底には3箇所の台状の高まりが設けられていたが、長原遺跡（大阪市）の堀底にも同様な「堰状の施設」が存在し、水を滞留させて用水として利用したものと解釈されている（宇野2001）。この堀がやはり条里の坪境溝と考えられていることは興味深い。
- (3) 例えば、茶畑六反田遺跡、押平弘法堂遺跡（大山町）では鎌倉時代の掘立柱建物が多数検出されているが、最大規模の建物は約32㎡である（八峠編2002）。
- (4) ただし、田中は勝田荘を那智山領、預所は僧長庵とするが、『角川日本地名大辞典31』が指摘するとおり、長庵が預所であった勝田荘とは美作国勝田郡に所在した別の荘園であろう。
- (5) 以上、南條又五郎と神田庄を巡る論点については国田俊雄氏の御教示による。

【参考文献】

岩永 實 1977 『鳥取県地誌考』岩永實先生記念論文集刊行会
 宇野隆夫 2001 『荘園の考古学』青木書店
 橋田正徳 1991 「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究』、日本中世土器研究会
 清水正建・竹内理三 1933 『荘園志料』帝都出版社
 陶山 徹 1973 「第1章第3節 2. 因伯の新補地頭」『鳥取県史2 中世』鳥取県
 田中 稔 1970 「承久の乱後の新地頭補任地<拾遺>」『史学雑誌』79 - 12、史学会
 鳥取県編 1973 『鳥取県史2 中世』鳥取県
 豊島吉則他編 1982 『角川日本地名大辞典31 鳥取県』角川書店
 錦織 勤 1999 「伯耆国」『中国地方の荘園』講座日本荘園史9、吉川弘文館
 日野尚志 1990 「伯耆国の駅路について」『佐賀大学教育学部論文集』38 - 2、佐賀大学教育学部
 福田豊彦 1996 「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』57、雄山閣
 八峠 興編 2002 『茶畑六反田遺跡 押平弘法堂遺跡 富岡播磨洞遺跡 安原溝尻遺跡』鳥取県教育文化財団
 勝田荘に関しては、国田俊雄氏、中村芳雄氏から有意義な御教示をいただいた。末筆ながら記して謝意を表する次第である。



第125図 勝田川流域の小字界と条里地割復元案（調査地西側の復元は（日野1990）による）

第32表 土器・土製品観察表

・量は最大値である。 は復元値、 は残存値を示す。・内外面で色調が異なる場合は上段に外面、下段に内面を示した。
 ・色調は、基本的に『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に拠る。・「」は調整の順序を示す。

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	量法〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
1	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	口径: 38.0 器高: 23.0	胴部 1/4周	外面:磨消縄文 内面:横・斜め条痕	にぶい橙色	径2mm以下の砂礫多く混	やや不良	中津式
2	第8図 PL.22	SI5 床面直上	縄文土器 粗製深鉢	口径: 16.0 器高: 4.1	口縁部 1/5周	外面:口縁部横ナデ、胴部ケズリ様の雑なナデ 内面:横ナデ	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂礫多く混	良好	
3	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 粗製深鉢	口径: 25.0 器高: 12.1	胴部 1/3周	外面:横・斜めのケズリ様の雑なナデ 内面:横条痕、ナデ	にぶい黄褐色	径3mm以下の砂礫多量に混	良好	
4	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 双耳壺	器高: 4.5	突起部 破片	外面:横ミガキ、磨消縄文 内面:横ミガキ	暗赤褐色	砂粒、雲母粒多く混	やや不良	後期初頭
5	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 5.8	波頂部 破片	外面:磨消縄文 内面:ナデ	橙色	砂粒やや多く混	やや不良	中津式
6	第8図 PL.40	SI5 床面直上	縄文土器 精製鉢	器高: 3.6	口縁部 破片	外面:RL磨消縄文、ミガキ 内面:ミガキ	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂礫まばらに混	やや不良	中津式
7	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 7.7 底径:8.2	底部 完存	外面:磨消縄文、斜め条痕 内面:斜め雑なナデ	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂礫多量に混	やや不良	中津式
8	第8図 PL.22	SI5 床面直上	縄文土器 精製鉢	胴部径:8.6 器高: 4.6	胴部 1/3周	外面:磨消縄文、横ミガキ 内面:横ミガキ、ナデ	橙色	砂礫、雲母粒多く混	やや不良	中津式
9	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.5	波頂部 破片	外面:磨消縄文 内面:ナデ	にぶい黄褐色	砂粒多く混	不良	中津式
10	第8図 PL.22	SI5 床面直上	縄文土器 精製深鉢		胴部 破片	外面:磨消縄文 内面:横条痕	橙色 黒褐色	砂粒多く混	やや不良	後期初頭～前葉
11	第8図 PL.22	SI5 埋土中	縄文土器 精製深鉢		胴部 破片	外面:磨消縄文 内面:横条痕	にぶい黄褐色 黒褐色	径2mm以下の砂礫やや多く混	やや不良	中津式 外面煤付着
12	第12図 PL.40	SD3 埋土中	縄文土器 精製鉢		胴部 破片	外面:RL縄文 内面:ナデ	灰褐色	白色砂粒多く混	良好	外面煤付着、後期前葉～中葉(崎ヶ鼻～沖文)
13	第12図 PL.40	SD3 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 3.4	口縁部 破片	外面:ナデ 内面:口唇部に斜め刻み、その下位を沈線1条で区画	褐灰色 オリーブ黄色	砂粒多量に混	良好	後期中葉～後葉(元住吉山式併行)
14	第12図 PL.23	SD2 埋土中	縄文土器 深鉢	器高: 2.5	口縁部 破片	外面:口縁部刻目突帯部に竹管状刺突文、胴部にも刺突文 内面:条痕	にぶい橙色	やや粗、1mm大の砂粒混	良好	凸帯文
15	第12図 PL.23	SD3 埋土中	弥生土器 壺	口径: 13.0 器高: 6.5	口縁部 1/6周	外面:ナデ 内面:ユビオサエ	にぶい黄褐色	密	良好	弥生前期
16	第12図 PL.23	SD2 埋土中	弥生土器 甕	口径: 23.0 器高: 5.5	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ 平行沈線 内面:ハケ ナデ	にぶい黄褐色	やや粗、1～2mm大砂粒多く混	良好	弥生中期
17	第12図 PL.23	SD3 検出面	弥生土器 甕	口径: 11.7 器高: 4.7	口縁部 1/8周	外面:平行沈線、口唇部に格子状の刻目文、上面に刺突文 内面:ナデ	にぶい黄褐色	密、砂粒若干混	良好	弥生中期
18	第12図 PL.23	SD3 埋土中	弥生土器 甕	口径: 14.4 器高: 8.3	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ 内面:ナデ 胴部下半ケズリ	灰黄褐色	密、1mm以下砂粒混	良好	弥生中期
19	第12図 PL.23	SD2 埋土下層	弥生土器 壺	口径: 19.0 器高: 8.9	口縁部 1/2周	外面:ハケ ナデ 内面:ミガキ	橙黄褐色	密、1mm以下の砂粒若干混	良好	弥生後期(第 様式)
20	第12図 PL.23	SD3 埋土中	弥生土器 甕	口径: 13.0 器高: 2.2	口縁部 1/8周	外面:凹線文 内面:ナデ	橙黄褐色	密、1mm以下砂粒混	良好	弥生後期(-1)
21	第12図 PL.23	SD2 埋土中	弥生土器 甕	口径: 25.0 器高: 6.6	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ、凹線文 内面:ケズリ、ナデ	暗褐色	密、1～2mm大石英、長石混	良好	弥生後期(-1)
22	第12図 PL.23	SD2 埋土下層	弥生土器 甕	口径: 19.7 器高: 6.6	口縁部 1/8周	外面:多条平行沈線 一部ナデ 内面:ケズリ、ミガキ、ナデ	淡黄褐色 灰褐色	密、1mm大砂粒混	良好	弥生後期(-3)
23	第12図 PL.23	SD2 埋土上層	弥生土器 甕	口径: 13.0 器高: 4.8	口縁部 1/8周	外面:ナデ 内面:口縁部ナデ、胴部ケズリ	橙黄褐色	密、砂粒若干混	良好	弥生終末期
24	第12図 PL.23	SD2 埋土下層	弥生土器 脚付壺	器高: 12.1	胴部下半～脚部 1/4周	外面:胴部ミガキ 内面:胴部ケズリ ナデ、脚部ナデ	橙色	密	良好	
25	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 壺	口径: 20.0 器高: 6.8	口縁部 1/6周	外面:口縁部斜格子文、頸部タテハケ以下凹線 内面:口縁部～頸部横ミガキ	にぶい橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中期
26	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 13.7 器高: 8.5	口縁部 完存	外面:ミガキ、口縁部ナデ 内面:ナデ	淡黄褐色	やや粗、1mm大砂粒多く混	良好	
27	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 17.2 器高: 10.5	口縁部 1/2周	外面:ハケ 刺突文、ミガキ 内面:ケズリ ナデ、ミガキ	暗褐色	密、1mm大砂粒混	良好	外面煤付着 弥生中期
28	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 31.6 器高:12.3	口縁部 1/5周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ刺突文。以下横ミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、タテハケ横ミガキ	橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中期

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
29	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 23.6 器高: 13.5	口縁部- 胴部1/4周	内外面:ハケ ナデ、ミガキ	にぶい黄褐色	密、1mm以下 砂粒若干混	良好	弥生中期
30	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 19.6 器高: 11.8	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ、その下にハケ状 工具による刺突文、タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下横ミガキ、タテミガキ	橙色	密	良好	外面煤付着 弥生中期
31	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 18.9 器高: 11.2	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ、一部横ミガキ。 その下にハケ状工具による刺突文、タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下横ミガキ、タテミガキ	にぶい橙色 黄褐色	密	良好	外面煤付着 弥生中 期 30と同一個体か
32	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 19.6 器高: 11.6	口縁部 1/4周	外面:口頸部ヨコナデ、胴部タテハケ 刺突文 内面:口頸部ヨコナデ、胴部タテハケ 下半ナデ	にぶい橙色	密、雲母粒 僅かに混	良好	弥生中期
33	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 23.0 器高: 6.8	口縁部 1/4周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部タテ ハケ 内面:横ミガキ	黄褐色	密	良好	胴部外面煤付 着 弥生中期
34	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 17.8 器高: 24.6 胴部径: 17.0 底径: 5.2	口縁部 3/4周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部細かなタテハケ。下 半以下タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、肩 部ヨコナデミガキ、最大径以下ケズリ ナデ	橙色	密	やや不良	外面全体に煤付着。上半 部以下二次的焼熱、剥 離、底部に焼成前穿孔
35	第15図 PL.24	SK4 埋土中	弥生土器 甕	口径: 22.8 器高: 33.3 底径: 6.3	口縁部 3/4周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部上半タテハケ 刺突文。下半タテミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、以下タテハケ ナデ	浅黄色	密	やや不良	胴部外面黒斑、煤付着。 外面二次的焼熱。内面 下半肌荒れ。弥生中期
36	第15図 PL.25	SK4 埋土中	土師器 甕	口径: 23.0 器高: 8.6	口縁部 1/6周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下タテハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下右方向ケ ズリ	淡黄色	やや粗、2~5 mm大の礫混	良好	胴部外面僅か に煤付着、混 入品
37	第15図 PL.25	SK4 埋土中	弥生土器 壺	器高: 22.3 胴部径: 24.0 底径: 8.8	底部完存 胴部1/2周	外面:タテミガキ 内面:タテハケ、底部ナデ	浅黄褐色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	
38	第15図 PL.25	SK4 坑底直上	弥生土器 蓋	口径: 8.0 器高: 2.8	口縁部 1/4周	外面:細かなミガキ 内面:ナデ 細かなミガキ	黄褐色	密	良好	内外面煤付着
39	第15図 PL.26	SK4 埋土中	弥生土器 手捏ね土器	器高: 2.6 底径: 3.4	底部 1/3周	内外面:ナデ	暗褐色	密	良好	
40	第15図 PL.26	SK4 埋土中	弥生土器 壺	器高: 4.3 底径: 4.5	底部 2/3周	外面:幅広のタテミガキ 内面:ケズリ	黄褐色	密	良好	外面煤付着
41	第15図 PL.26	SK4 埋土中	弥生土器 甕	器高: 5.4 底径: 8.0	底部 完存	外面:タテハケ ミガキ 内面:丁寧なナデ	黄褐色	密	良好	外面赤彩
42	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 甕	口径: 21.4 器高: 8.6	口縁部 1/8周	外面:口縁部ナデ、頸部以下ハケ 内面:ハケ ナデ	淡橙色	密、3mm大 の砂粒混	良好	外面頸部以下 に煤付着
43	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 甕	器高: 3.1	口縁部 破片	内外面:ナデ 口縁部に刻み、外 面頸部下に櫛描平行洗線 6 条	橙色	密、3mm大の 砂粒少量混	良好	弥生中期
44	第17図 PL.26	SK16 坑底直上	弥生土器 底部	器高: 2.7 底径: 10.3	底部 完存	内外面:ナデ	赤褐色	密、砂礫 多く混	やや不良	
45	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 底部	器高: 4.0 底径: 10.0	底部 完存	内外面:ナデ	にぶい橙色	密、砂礫 多量に混	良好	
46	第17図 PL.26	SK16 埋土中	弥生土器 底部	底径: 10.8 器高: 6.2	底部 3/4周	内外面:不明	赤褐色 灰褐色	密、1~3mm大 の砂粒多く混	やや不良	
47	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	器高: 11.8	1/8 未満	外面:頸部ハケ、胴部ミガキ 内面:ミガキ	明赤褐色	密、3mm大の 砂粒少量混	良好	口縁部内外面 赤彩 弥生中期
48	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	口径: 13.6 器高: 14.7	口縁部 1/4周	外面:ハケ ミガキ、頸部ヨコナデ 内面:ハケ ナデ、一部ミガキ	橙色	密、3mm大 の砂粒混	良好	外面口縁部・胴 部下半に煤付着
49	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	器高: 4.9	口縁部 破片	外面:ハケ ヨコナデ 内面:ヨコナデ ミガキ	明黄褐色	密、1mm大 の砂粒混	良好	口縁部内外面・ 胴部に煤付着 弥生中期
50	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 甕	口径: 26.8 器高: 9.7	口縁部 1/6周	外面:ミガキ、口縁部下に5条一単 位の櫛描平行洗線 櫛描波状文 内面:ナデ	明褐色	密、1mm大 の砂粒混	良好	弥生中期
51	第19図 PL.26	SK20 埋土中	弥生土器 底部	底径: 5.8 器高: 9.2	底部 1/2周	外面:ミガキ 内面:ナデ	浅黄色 黒褐色	密、1mm大の 砂粒多く混	やや不良	
52	第21図 PL.26	SK23 埋土中	弥生土器 甕	口径: 20.4 器高: 5.0	口縁部 1/4周	外面:ハケ ナデ 端部に刻目 内面:ナデ	にぶい黄褐色	密、1mm大 石英混	良好	
53	第21図 PL.25	SK23 埋土中	弥生土器 壺	口径: 15.4 器高: 25.8 胴部径: 17.7	口縁部 ~胴部 1/2周	外面:口縁部斜格子文。頸部タテハケ、肩部凹線25 ~ 以下山形文、胴部下半タテミガキ、内面:口縁部 ~頸部ミガキ、胴部ヨコハケ 縦方向強いナデ	にぶい黄褐色	密	良好	胴部外面黒斑
54	第24図 PL.27	SI1 床面直上	須恵器 蓋坏坏身	口径: 13.4 器高: 3.6	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ 底面回転ケズリ 内面:ヨコナデ	青灰色	密 径2mm以下の 砂粒やや多く混	良好	
55	第26図 PL.27	SI3 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 10.8 器高: 3.6	口縁部 1/6周	外面:ヨコナデ ケズリ 内面:ヨコナデ	灰白色	2mm角以下の白色 砂礫まばらに混	良好	
56	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 14.1 器高: 4.3	口縁部 3/4周	外面:天井部1/3回転ケズリ、以下回転 ナデ 内面:天井部不整ナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	
57	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 14.8 器高: 4.5	口縁部 一部欠	外面:天井部回転ケズリ、口縁部 回転ナデ 内面:回転ナデ、天井部不整ナデ	灰色	径1mm以下の白色 砂粒やや多く混	良好	八橋 期 (TK209)
58	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 14.4 器高: 3.9	ほぼ 完存	外面:天井部回転ケズリ、口縁部 回転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	径2mm以下の砂礫 まばらに混	良好	口縁部内面に浅い洗線1 条 八橋 期 (TK209)

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
59	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径:12.3 器高:4.0	ほぼ 完存	外面:天井部1/8切り離し ナデ、以下 回転ナデ 内面:天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰白色	密	良好	
60	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	器高: 3.2	天井部 1/8周	外面:天井部回転ケズリ。天井部 と口縁部の境に沈線2条。以下回 転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	
61	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	器高: 3.0	天井部 ほぼ完存	外面:天井部回転ケズリ、以下回転ナ デ 内面:天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	外面自然釉
62	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 13.0 器高:2.7	口縁部 1/2周	外面:天井部2/3回転ケズリ、口縁部回転ナ デ 内面:天井部不整ヨコナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	外面天井部赤 彩痕(記号か)
63	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 11.8 器高:3.9	口縁部 1/2周	外面:回転ナデ、底部1/5回転ケズリ 内面:回転ナデ、底部不整ナデ	灰色	密	良好	底部須恵器片 溶着
64	第28図 PL.28	SI6 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 11.1 器高:4.2	口縁部 1/2周	外面:口縁部~底部2/3回転ナデ、以下回転 ケズリ 内面:回転ナデ、底部ヨコナデ	灰色	密	良好	底部外面自然 釉
65	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 12.2 器高: 3.3	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	
66	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 廳	器高: 7.1 胴部:8.8	胴部 完存	外面:肩部~中位力キ目、中位波状文。以下 回転ケズリ、ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	中位円形孔
67	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 有蓋高坏蓋	つまみ径:3.3 器高: 1.7	つまみ 部破片	外面:回転ナデ 内面:ナデ	灰色	密	良好	
68	第28図 PL.27	SI6 埋土中	須恵器 無蓋高坏	口径:13.3 器高:17.4 底径:11.2	完存	外面:口縁部回転ナデ2段の横間に波状文、底部回転ナデ、 脚部方に2段方形透孔、中に沈線2条、回転ナデ 内面: 坏部回転ナデ、底部不整ナデ、脚部回転ナデ	灰色	密	良好	脚部外面自然 釉
69	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 有蓋高坏	口径: 13.0 器高: 5.1	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	
70	第28図 PL.29	SI6 埋土中	須恵器 高坏	器高: 7.2	脚部 1/8周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	良好	透孔2箇所以 上
71	第28図 PL.27	SI6 埋土中	須恵器 甕	口径: 22.3 器高: 7.6	口縁部 1/8周	外面:口縁部回転ナデ、肩部平行叩き 内面:口縁部回転ナデ、肩部同心円文 当て具痕	灰色	密	良好	
72	第28図 PL.30	SI6 埋土中	須恵器 甕	口径: 22.8 器高: 5.8	口縁部 1/8周	外面:口縁部~頸部回転ナデ、肩 部平行叩き 内面:回転ナデ	灰白色 暗灰色	密	良好	内面自然釉
73	第28図 PL.27	SI6 埋土中	土師器 甕	口径:15.1 器高:22.6 最大径:21.3	ほぼ 完存	外面:口縁部ヨコナデ、胴部粗いハケ 内面:口縁部ヨコナデ、胴部斜上方向 ケズリ	黄橙~ にぶい黄橙色	密	やや不良	胴部外面全体に 煤付着、底部付 近二次的被熱
74	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 12.9 器高: 6.8	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ ミガキ 内面:口縁部ミガキ、頸部以下上方向ケズリ	黄橙色 灰色	密	良好	内面黒斑
75	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 18.5 器高: 3.8	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	浅黄橙色	密	良好	
76	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 15.2 器高: 3.7	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	浅黄橙色	密	良好	
77	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 11.0 器高: 5.7	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ 内面:口縁部横ミガキ、頸部以下右方向 ケズリ	にぶい橙色 灰白色	密	良好	頸部付近に刺 突痕あり
78	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 10.0 器高: 10.0 胴部径: 13.6	口縁部 1/3周	外面:口縁部~胴部最大径付近ヨコナ デ、以下横ミガキ 内面:口縁部~頸 部ヨコナデ、頸部以下左方向ケズリ	にぶい赤褐色~褐色 浅黄色~にぶい褐色	密	やや不良	口縁部~頸部 内面赤彩
79	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 20.0 器高: 11.4	口縁部 1/4周	外面:胴部タテハケ、口縁部~肩部ナ デ 内面:口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	にぶい褐色	径2mm以下の砂礫、 雲母粒多く混	やや不良	
80	第28図 PL.27	SI6 埋土中	土師器 甕	口径:16.9 器高: 9.8	口縁部 ほぼ完存	外面:胴部タテハケ 口縁部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	径3mm以下の 砂礫多量に混	良好	
81	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 23.0 器高: 7.2	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部以下タテ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下左方向ケズリ	浅黄色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	
82	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 18.5 器高: 6.9	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ケズリ	橙色	密、2~5mm 大の礫混	良好	外面煤付着
83	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 17.8 器高: 6.4	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、肩部以下 右方向ケズリ	橙色	密	良好	
84	第28図 PL.30	SI6 埋土中	土師器 甕	口径: 9.0 器高: 9.8	口縁部 1/8周	外面:タテハケ 内面:頸部ヨコナデ以下左方向ケズリ	浅黄褐色	密	良好	外面全体煤付 着。一部赤変。
85	第28図 PL.29	SI6 埋土中	土製紡錘車	長軸:2.6 短軸:2.5 厚さ:2.4	一方の 端部欠	手捏ね整形 ナデ、斜めに穿孔	浅黄褐色	密	良好	
86	第28図	SI6 埋土中	縄文土器 精製浅鉢	器高: 3.2	口縁部 破片	外面:LR縄文、沈線で連弧状のモチ ーフを描く 内面:ナデ	浅黄色	密、径1mm以下の 砂礫まばらに混	良好	後期中葉~後葉 (元住吉山式併行)
87	第30図 PL.28	SI6周辺 表土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 13.1 器高:4.0	口縁部 3/4周	外面:回転ナデ、底部1/5回転ケズリ 内面:回転ナデ、底部不整ナデ	明緑灰色 灰白色	密	良好	外面自然釉
88	第30図 PL.28	SI6周辺 表土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:11.2 器高:3.2	ほぼ 完存	外面:底部回転ケズリ、口縁部回 転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	径1mm以下の白色 砂粒やや多く混	やや不良	八橋 期 (TK209)

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
89	第30図 PL.29	S16周辺 表土中	須恵器 甕	口径: 11.8 器高: 3.4	口縁部 1/6周	外面:回転ナデ、沈線1条 内面:回転ナデ	暗灰色 灰黄色	密	良好	中位円形孔 外面自然釉
90	第30図 PL.29	S16周辺 表土中	須恵器 甕	器高: 11.4 胴部径:10.2	胴部 完存	外面:頸部～胴部最大径付近回転 ナデ、肩部沈線1条。 胴部下半力キ目 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	中位円形孔 外面自然釉
91	第30図 PL.28	S16周辺 表土中	須恵器 有蓋高坏	口径: 15.6 器高:5.0 つまみ径:2.6	口縁部 2/3周	外面:天井部力キ目、以下回転ナデ 内面:天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰白色	密	良好	天井部円形柱 状つまみ
92	第30図 PL.28	S16周辺 表土中	須恵器 有蓋高坏	口径: 13.3 器高: 5.0	受け部 完存	外面:口縁部～坏部中位回転ナデ、 以下力キ目 内面:回転ナデ、底部ヨコナデ	灰白～灰色 灰白色	密	良好	
93	第30図 PL.30	S16周辺 表土中	土師器 甕	口径:23.4 器高:12.3	頸部 1/4周	外面:胴部タテハケ、口縁部ヨコ ナデ 内面:口縁部ヨコハケ ヨ コナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄橙色	径2mm以下の 砂粒多く混	やや不良	口縁部外面に 煤付着
94	第30図 PL.29	S16周辺 表土中	土師器 甕	口径: 16.2 器高: 6.6	口縁部 1/6周	外面:口縁部ヨコナデ、胴部タテ ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、屈 曲部以下右方向ケズリ	浅黄橙色	密	良好	
95	第30図 PL.29	S16周辺 表土中	土師器 甕	口径: 19.3 器高: 7.5	口縁部 1/6周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテ ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、屈 曲部以下ケズリ ナデ	浅黄橙色 にぶい黄橙色	密	良好	内外面化粧土
96	第30図 PL.27	S16周辺 表土中	土師器 甕	口径:16.6 器高: 4.9	口縁部 3/4周	外面:胴部タテハケ、口縁部ヨコ ナデ 内面:口縁部ヨコハケ ヨ コナデ、頸部以下ケズリ	橙色	径1mm以下の白 色砂粒多く混	やや不良	
97	第30図 PL.29	S16周辺 表土中	土師器 甕	口径: 14.9 器高: 6.1	口縁部 1/8周	外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテ ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、屈 曲部以下ケズリ	浅黄橙色	密	良好	
98	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 15.6 器高: 2.7	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	橙色	密、径2mm以下 の砂粒多く混	不良	焼成は土師器 に近い
99	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:14.9 器高:6.6 底径:6.7	口縁部 一部欠	外面:底部回転ケズリ、口縁部回 転ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密、径2mm以 下の砂粒多く混	良好	
100	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径: 13.1 器高:4.5 底径: 6.7	口縁部 1/2周	外面:天井部外周ケズリ、以下回 転ナデ 内面:回転ナデ	にぶい橙色	密、径約1mmの 砂粒まばらに混	不良	焼成は土師器 に近い
101	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 蓋坏坏身	口径:12.0 器高:3.6 底径:6.5	口縁部 一部欠	外面:底部外周ケズリ、以下回転 ナデ 内面:回転ナデ	暗灰色	密、2mm以下の 砂粒多量に混	良好	底部ヘラ切り 未調整
102	第32図 PL.30	SD10 埋土中	須恵器 瓶	口径: 14.0 器高: 5.2	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	灰白色	密、径1mm以下 の石英まばらに混	良好	
103	第32図 PL.30	SD10 埋土中	土師器 甕		底部 破片	外面:本体際ハケ、他板ナデ 内面:板ナデ	浅黄橙色	密、2mm以下の 砂粒まばらに混	やや不良	
104	第32図 PL.30	SD10 埋土中	土師器 甕	長: 5.3 幅:6.5	把手部 破片	外面:器壁際ハケ、他ナデ 内面:縦ケズリ	にぶい黄橙色	密、雲母粒混	良好	
105	第32図 PL.30	SD10 埋土中	土師器 甕	器高: 7.5	底部 破片	外面:ハケ 内面:ケズリ	浅黄橙色	密、2mm大の 砂粒少量混	良好	外面下部に刺突 文、底部板目痕か
106	第35図 PL.40	SI2 埋土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 2.3	口縁部 破片	外面:RL磨消縄文 内面:ナデ	にぶい黄色 暗灰黄色	密、径2mm以下 の砂粒まばらに混	良好	中津式
107	第35図 PL.40	SI2 埋土中	縄文土器 精製鉢		胴部 破片	外面:RL縄文、ミガキ 内面:ミガキ	黄褐色 暗灰黄色	密、径2mm以下 の砂粒やや多く混	やや不良	中津式
108	第35図 PL.40	SI2 埋土中	縄文土器 深鉢		胴部 破片	外面:C字爪形文（一部連続爪形 文）3段 内面:ナデ	橙色 にぶい黄橙色	密、径2mm以下の石英、 雲母粒やや多く混	不良	前期中葉（北白 川下層 a式）
109	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 碗	口径: 12.8 器高:5.3	口縁部 1/3周	外面:ヨコハケ ナデ 内面:ヨコハケ ナデ タテミガキ	橙色	密、径1mm以下 の砂粒微量混	良好	内外面赤彩
110	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 坏	口径: 14.6 器高:3.9 底径: 5.1	口縁部 1/5周	内外面:回転ナデ	橙色～褐灰色 橙色～浅黄褐色	密、径2mm以下の赤 褐色砂粒僅かに混	良好	底部回転系切
111	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 皿	口径:8.8 器高:2.3 底径:4.8	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色	密、径約1mmの赤 褐色砂粒僅かに混	良好	底部回転系切
112	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 皿	口径:8.0 器高:1.9 底径:4.3	口縁部 一部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色	密、径3mm以下 の赤褐色砂粒少量混	良好	底部回転系切
113	第35図 PL.35	SI2 床面直上	土師器 皿	口径:8.2 器高:2.3 底径:4.0	口縁部 一部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色	密、径3mm以下 の赤褐色砂粒少量混	良好	底部回転系切
114	第35図 PL.42	SI2 埋土中	白磁 碗	口径: 10.0 器高: 2.0	口縁部 1/8周	内外面:施釉	灰白色	密、精良	良好	
115	第35図 PL.35	SI2 埋土中	土師器 坏	器高: 2.1 底径:6.8	底面 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色	密、径2mm以下の赤褐 色、白色砂粒僅かに混	良好	底部回転系切
116	第37図 PL.31	P1 掘方埋土	土師器 皿	底径: 6.2 器高: 1.1	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	にぶい赤褐色	密	良好	底部回転系切
117	第37図 PL.31	P18 掘方埋土	土師器 鍋	器高: 1.7	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	にぶい黄褐色 ～橙色	密	良好	内外面に赤彩
118	第37図 PL.31	P13 埋土中	青磁 碗	器高: 2.4	口縁部 破片	内外面:施釉。貫入あり 外面:ヘラ描き連 弁文、弁端には下に重複する割付線あり	施釉部:オリ～黄 色 露胎部:灰白色	密	良好	龍泉窯系
119	第37図 PL.31	P10 掘方埋土	瓦質土器 鍋	器高: 1.5	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	灰色 灰白色	密	良好	
120	第37図 PL.31	P2 掘方埋土	土師器 底部	底径: 7.5 器高: 6.5	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色～ 灰褐色	密	良好	底部回転系切
121	第37図 PL.31	P13 埋土中	土師器 底部	底径: 6.8 器高: 1.8	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい黄褐色 ～灰白色	密	良好	
122	第37図 PL.31	P24 掘方埋土	須恵器 胴部	胴部径: 18.4 器高: 4.3	胴部 1/8周	外面:格子叩き ヨコナデ 内面:底 部寄りユビオサエ 胴部タテハケ	灰色	密	良好	勝間田焼もし くは龜山焼

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
123	第42図 PL.31	SB2 P9 掘方埋土	土師器 皿	器高:1.8	底部-口縁 部1/4周	外面:側縁に沿ったヨコナデ 側 縁を内側に軽く折り曲げる 内面:ナデ	橙色～褐灰色	密	良好	底部回転系切 耳皿か
124	第42図 PL.31	SB2 P13 埋土中	土師器 底部	底径: 5.9 器高: 1.4	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
125	第42図 PL.31・42	SB2 P17 掘方埋土	陶器		胴部 破片	外面:施釉、横位沈線1条の下位に 円形の剥離痕 内面:施釉	灰オリーブ色 浅黄色	密	良好	褐釉陶器 水注か
126	第44図 PL.31・42	SD1 溝底直上	須恵器 坏	口径: 10.6 底径: 7.5 器高:4.2	口縁部 1/4周 底部 1/2周	外面:回転ナデ、底部ナデ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	底部系切、底部外面・見 込み・底部後面に朱墨付 着、見込みに墨付着
127	第44図 PL.31	SD1 埋土中	須恵器 坏	口径:12.4 器高:3.3	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	
128	第44図 PL.31	SD1 埋土中	須恵器 鉢	口径:12.6 器高:8.7	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰色～灰白色 灰色	密	良好	
129	第44図 PL.31.42	SD1 埋土中	須恵器 底部高台	底径: 12.4 器高: 2.1	底部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰色	密、白色砂 粒混	良好	底部系切、底部外面 高台内に朱墨付着
130	第44図 PL.31	SD1 埋土中	須恵器 底部高台	底径:9.0 器高: 2.9	底部 3/4周	外面:回転ナデ 内面:ナデ	灰色	密、2mm程度の 砂粒僅かに混	良好	底部外面中央 にヘラ記号か
131	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 坏	口径:12.8 底径:9.2 器高:4.0	ほぼ 完存	外面:回転ナデ、底部ナデ 内面:ヨコナデ	橙色	密、2mm程度の 砂粒僅かに混	良好	内外面赤彩、 底部ヘラ切り
132	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 坏	口径: 13.7 底径: 9.8 器高:2.8	口縁部 1/6周	内外面:ヨコナデ	にぶい橙色	密、2mm程度 の砂粒少量混	良好	内外面赤彩、 底部ヘラ切り
133	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 甕	口径: 22.0 器高: 5.2	口縁部 1/6周	外面:ヨコナデ 一部ハケ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下 ケズリ	灰黄色 にぶい黄色	密、2mm程度 の砂粒混	やや不良	外面一部に煤 付着
134	第44図 PL.31	SD1 埋土中	土師器 底部高台	底径: 13.6 器高: 1.9	底部 1/8周	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	見込み部に黒 班
135	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 高台坏	口径: 11.8 底径: 8.7 器高:4.0	口縁部 1/8周 底部 1/3周	内外面:回転ナデ	灰色	密	良好	底部回転系切、 ただし不明瞭
136	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 高台坏	口径: 13.0 底径: 9.0 器高:4.5	口縁部 1/8周 底部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	やや不良	底部回転系切、 ただし不明瞭
137	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 皿	口径: 15.2 底径: 10.4 器高:2.2	口縁部 1/8周 底部 1/4周	内外面:回転ナデ	灰色	密、2mm大の砂 粒少量混	良好	底部回転系切
138	第44図 PL.32	SD6 埋土中	須恵器 底部	底径: 11.4 器高: 4.7	底部 1/3周	外面:ナデ 内面:底部ユビオサエ ヨコナデ	灰白色	密	良好	底部ヘラ切りか
139	第44図 PL.32	SD6 埋土中	土師器 坏	口径: 12.8 器高: 2.7	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	浅黄色	密	良好	底部ヘラ切り
140	第44図 PL.32	SD6 埋土中	土師器 皿	器高: 1.1	口縁部 破片	外面:ナデ 一部ミガキ 内面:ナデ	浅黄色	密	良好	全面赤彩
141	第44図 PL.32	SD6 埋土中	土師器 甕	口径: 36.6 器高: 6.6	口縁部 破片	外面:ヨコナデ 内面:口縁部ヨコ ナデ、頸部以下ケズリ	黄灰色 浅黄色	密	やや不良	外面に黒班、頸部外 面に少量の煤付着
142	第45図 PL.33	SD7 埋土最下層	須恵器 高台坏	口径: 13.6 底径: 9.4 器高: 4.2	口縁部 1/8周 底部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	良好	底部回転系切、 ただし不明瞭
143	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	須恵器 坏	器高: 3.2	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	灰色 灰白色	密	良好	口縁部下に工 具による沈線
144	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	須恵器 坏	器高: 3.4	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	灰白色	密	不良	
145	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	須恵器 壺	器高: 3.5	口縁部 破片	内外面:ヨコナデ	灰色	密	良好	内外面に自然釉、 外面口縁下に沈線
146	第45図 PL.33	SD7 埋土下層	須恵器 坏蓋	口径: 13.4 器高: 4.3	口縁部 1/8周	内外面:ヨコナデ	灰色	密	良好	
147	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	須恵器 底部高台	底径: 13.2 器高: 2.2	底部 1/4周	外面:回転ナデ、胴部下半ケズリ 内面:回転ナデ	灰色	密	良好	底部回転系切、高 台内に鉄付着
148	第45図 PL.42	SD7 埋土上層	白磁 碗	器高:2.2	口縁部 破片	内外面:ヨコナデ	灰白色	密	良好	
149	第45図 PL.42	SD7 埋土上層	白磁 碗	底径: 6.0 器高: 2.9	底部 1/2周	外面:ケズリ 一部ナデ 内面:ナ デ、見込み部ユビオサエ	灰白色	密	良好	胴部下半内外 面に沈線
150	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:8.6 底径:4.8 器高:2.0	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、2mm大の赤 色粒少量混	良好	底部回転系切
151	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:8.5 底径:4.5 器高:2.4	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部回転系切
152	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:7.9 底径:4.2 器高:2.1	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部回転系切
153	第45図 PL.34	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径:9.5 底径:4.6 器高:2.6	完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒僅かに混	良好	底部回転系切
154	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	土師器 皿	口径: 8.4 底径: 5.6 器高:1.3	口縁部 1/6周 底部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色	密、1mm大の赤 色粒僅かに混	良好	底部ヘラ切り
155	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 皿	口径: 8.6 底径: 7.0 器高:1.0	口縁部 1/8周 底部 1/8周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部ヘラ切り
156	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 坏	口径: 13.7 器高: 3.0	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密、2mm大の砂 粒僅かに混	やや不良	外面に煤付着

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
157	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 坏	口径: 8.2 器高: 2.1	口縁部- 底部1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい黄褐色	密、1mm大の赤色粒僅かに混	良好	底部ヘラ切り 底部押圧 ナデ
158	第45図 PL.33	SD7 埋土下層	土師器 坏	器高: 3.5	口縁部 破片	内外面:ミガキ、一部ハケ	にぶい黄褐色	密	良好	底部内面に少量の鉄分付着
159	第45図 PL.33	SD7 埋土上層	土師器 柱状高台皿	底径:7.7 器高:3.5	底部 ほぼ完存	外面:回転ナデ、一部工具によるナデ 内面:回転ナデ	灰褐色 にぶい黄褐色	密、1-3mm大の赤色粒混	良好	底部回転系切
160	第45図 PL.33	SD7 埋土中層	土師器 底部	底径:6.7 器高: 1.7	底部 完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、1-3mm大の赤色粒混	良好	底部回転系切、打ち欠きか
161	第45図 PL.34	SD7 埋土中	土師器 鍋	口径: 30.8 器高: 12.2	口縁部 1/8周	内外面:ハケ 一部ナデ	明黄褐色	密	やや不良	
162	第45図 PL.34	SD7 埋土中	土師器 甕	口径: 25.4 器高: 9.6	口縁部 1/8周 胴部 1/4周	内外面:ハケ 一部ナデ	灰黄褐色 浅黄色	密、3mm大の砂粒多量に混	良好	外面に多量の煤付着
163	第45図 PL.34	SD7 埋土上層	土錘	長さ:3.9 幅:1.7 孔径:0.5 重量:9g	ほぼ 完存		橙色	密	良好	
164	第45図 PL.34	SD7 埋土上層	弥生土器 胴部	器高: 3.3	胴部 破片	外面:ナデ、上部に横位沈線1条 内面:ナデ	黄橙色	密	良好	外面にヘラ描き、絵画か
165	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 皿	口径: 10.6 器高:1.8	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	
166	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 皿	口径: 9.0 器高:1.8	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	浅黄褐色 淡橙色～橙色	密	良好	内外面に煤付着
167	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 鍋	器高: 3.6	口縁部 破片	外面:頸部タテハケ、口縁部ヨコハケ 内面:口縁部斜めハケ ヨコハケ、頸部ヨコハケ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	密	良好	
168	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 甕	器高: 4.4	口縁部 破片	外面:ヨコナデ 内面:ヨコハケ 口縁部ヨコナデ	橙色	密	良好	外面煤付着
169	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 底部	底径: 4.8 器高: 1.3	底部 ほぼ完存	内外面:回転ナデ	明褐色 橙色	密	良好	外面赤彩 底部回転系切
170	第47図 PL.32	SD4 埋土中	土師器 羽釜		鏝部 破片	内外面:ナデ	橙色	密	良好	外面煤付着
171	第47図 PL.42	SD4 検出面	白磁 碗	器高: 2.5	口縁部 破片	内外面:施釉、貫入あり	灰白色	密	良好	
172	第47図	SD4 埋土中	白磁 碗	器高: 1.9	口縁部 破片	内外面:施釉	灰白色～ 淡黄色	密	良好	
173	第47図 PL.42	SD4 埋土中	白磁 碗	底径: 3.6 器高: 1.0	底部 1/4周	外面:施釉、底部ケズリ 内面:施釉	灰白色	密	良好	
174	第47図 PL.34	SD4 埋土中	瓦質土器 脚部		脚部 破片	表面:ケズリ ナデ	褐灰色	密	良好	煤付着 五徳・脚釜・ 脚鍋等の脚部か
175	第47図 PL.34	SD4 埋土中	不明土製品	器高: 2.5		ケズリ ナデ 不規則なミガキ	赤褐色	密	良好	
176	第47図 PL.34	SD4 埋土中	土錘	長さ:4.3 幅:1.3 孔径:0.4 重量:7.7g	完存	側面:タテケズリ ナデ 端面:ケズリ	暗灰色	密	良好	
177	第49図 PL.42	SD5 埋土中	青磁 碗		胴部 破片	外面:蓮弁文、施釉 内面:花文、施釉	オリーブ灰色 オリーブ黄色	密	良好	龍泉窯系
178	第49図 PL.42	SD8 埋土中	白磁 碗	器高: 2.0	口縁部 破片	内外面:施釉、貫入あり	灰白色	密	良好	
179	第49図 PL.35	SD8 埋土中	土師器 底部	底径: 5.0 器高: 1.3	底部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色 淡橙色	密、1mm大の砂粒混	やや不良	底部回転系切、ただし不明瞭
180	第49図 PL.35	SD9 埋土中	縄文土器 深鉢		胴部 破片	外面:押し引き状のC字爪形文5段 内面:ナデ	暗灰黄色	密、径1mm以下の砂礫、角閃石多く混	不良	前期中葉 (北白川下層 a~ b)
181	第49図 PL.35	SD9 埋土中	須恵器 坏蓋	口径: 13.2 器高: 2.2	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	灰白色	密	良好	
182	第49図 PL.34	SD9 埋土中	須恵器 長頸壺	底径: 8.2 器高: 4.8	底部 3/4周	外面:回転ナデ、胴部下半ケズリ 内面:回転ナデ	暗灰色 灰色	密	良好	
183	第49図 PL.35	SD9 埋土中	須恵器 高坏		脚基部 破片	外面:回転ナデ 内面:ナデ	灰色	密	良好	三方向の長方形透孔
184	第49図 PL.35	SD9 埋土中	土師器 甕	口径: 27.6 器高: 4.9	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい褐色	密、2mm大の砂粒多く混	やや不良	
185	第49図 PL.35	SD9 埋土中	土師器 甕	口径: 14.8 器高: 3.7	口縁部 1/6周	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい黄褐色	密、1mm大の砂粒混	良好	
186	第49図 PL.35	SD9 埋土中	土師器 甕	口径: 17.0 器高: 4.2	口縁部 1/8周	外面:ヨコナデ、頸部ハケ 内面:ヨコナデ、頸部以下ケズリ	にぶい褐色	密、2mm大の砂粒少量混	やや不良	
187	第52図 PL.36	SK1 埋土中	土師器 皿	口径: 8.4 器高: 1.8	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密、赤褐色砂礫、角閃石やや多く混	良好	
188	第52図 PL.36	SK1 埋土中	土師器 坏	器高: 1.6 底径:4.4	底部 完存	内外面:回転ナデ	橙色	密、赤褐色砂礫多く混	良好	底部回転系切
189	第52図 PL.36	SK1 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 4.2 底径: 7.4	底部一 部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい褐色～ 橙色	密、赤褐色砂礫、角閃石やや多く混、白色砂粒多く混	やや不良	底部回転系切
190	第58図 PL.42	SK5 埋土中	白磁 碗	器高: 4.0 底径:5.6	底部 完存	外面:施釉、底部周辺露胎、回転ケズリ 内面:施釉	灰白色～ 淡黄色	密、灰白色微砂粒混	良好	

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
191	第58図 PL.38	SK5 埋土中	土師器 皿	器高:1.2	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色 橙色	密	良好	底部回転糸切
192	第58図 PL.38	SK6 埋土中	土師器 坏	口径: 14.0 器高:3.7	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	底部回転糸切 内面に煤付着
193	第58図 PL.38	SK6 埋土4層	土師器 底部	底径: 8.4 器高: 2.0	底部 1/4周	内外面:回転ナデ	黒褐色 灰黄褐色	密	良好	底部回転へラ 切り
194	第58図 PL.38	SK6 埋土3層	土師器 底部	底径: 6.6 器高: 1.1	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央を不定 方向の仕上げナデ	灰黄褐色 明赤褐色	密	良好	底部回転糸切
195	第58図 PL.38	SK3 埋土中	土師器 底部	器高: 0.9 底径: 6.4	底部 1/5周	内外面:回転ナデ	灰褐色	密 赤褐色砂 礫やや多く混	良好	底部回転糸切
196	第60図 PL.38	SK7 埋土中	土師器 皿	口径: 7.4 器高:2.1	底部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切 内外面赤彩
197	第60図 PL.42	SK7 埋土中	白磁 碗	器高: 3.7	口縁部 破片	内外面:施釉	浅黄色	密	良好	
198	第60図 PL.42	SK7 埋土中	白磁 碗	器高: 3.5	口縁部 破片	内外面:施釉、貫入あり	灰白色	密	良好	
199	第63図 PL.37	SK9 坑底直上	土師器 羽釜	口径: 22.2 器高: 9.0	口縁部 1/8周	内外面:口縁部ヨコナデ、胴部板 ナデ	灰褐色	2mm角の石英、 金雲母多量に混	やや不良	
200	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径:9.1 器高:2.8	ほぼ 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	にぶい黄橙色～ にぶい褐色橙色	密	良好	外面に煤付着、底部 回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
201	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径: 8.9 器高:2.5	口縁部 2/3周	内外面:回転ナデ	灰黄褐色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
202	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 皿	口径: 9.1 器高:2.6	口縁部 1/2周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	外面に赤彩あり、底 部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
203	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径:8.5 器高:4.3	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	にぶい黄褐色	密	良好	内外面に煤付着、底 部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
204	第66図 PL.36	SK10 埋土中	土師器 皿	口径:8.8 器高:2.6	ほぼ 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ、ユビオサエも残る	暗灰黄色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
205	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 皿	口径: 8.7 器高:2.0	口縁部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	外面赤彩、底部回 転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
206	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 坏	口径: 15.0 器高: 4.5	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい褐色～ にぶい褐色	密	良好	内外面赤彩
207	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 坏	口径: 14.2 器高: 4.0	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	にぶい褐色	密	良好	
208	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.8 器高: 2.2	底部ほ ぼ完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央をさら に回転による仕上げナデ	浅黄褐色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
209	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.5 器高: 1.4	底部ほ ぼ完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	橙色	密	良好	底部回転糸切
210	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.1 器高: 1.8	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	にぶい褐色 褐色	密	良好	内外面赤彩、底部 回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
211	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径: 6.0 器高: 2.2	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央ナデ	褐色	密	良好	底部回転糸切
212	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径: 5.6 器高: 2.1	底部-胴部 1/5周	内外面:回転ナデ	褐色	密	良好	底部回転糸切
213	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:6.2 器高: 1.9	底部 2/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面 中央をさらに回転による仕上げナデ	褐色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
214	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 底部	底径:4.2 器高: 1.4	底部 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央をさら に回転による仕上げナデ	褐色	密	良好	内外面赤彩、 底部回転糸切
215	第66図 PL.38	SK10 埋土中	土師器 柱状高台皿	底径:6.3 器高: 2.8	底部 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面中央をさらに回転による仕上 げナデ 棒状工具による沈線	褐色	密	良好	底部回転糸切、底部側 面にも糸切痕残る
216	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 鉢	器高: 6.2	口縁部 破片	外面:横方向のミガキ 内面:胴部下半をタテナデ、上半 ～口唇部をヨコナデ	にぶい褐色 褐色～黒褐色	密	良好	内外面とも風 化著しい
217	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 甕	器高: 7.5	口縁部 破片	外面:胴部不定方向のハケ、頸部タテハ ケ、口唇部ヨコナデ 内面:胴部～口縁 部ヨコハケ、胴部一部不定方向のハケ	にぶい褐色	密、1-3mm大の 白色砂粒多く混	良好	
218	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土師器 甕	器高: 3.9	口縁部 破片	外面:頸部斜めハケ、タテナデ消し、部分的にヨ コナデ、胴部タテハケ、口唇部ヨコナデ 内面: 頸部-胴部斜めハケ ヨコナデ、口縁部ヨコナデ	にぶい褐色～灰褐色 浅黄褐色	密	良好	外面に煤付着
219	第66図 PL.37	SK10 埋土中	土錘	長さ:3.5 幅:4.5 孔径:1.0 重量: 35.6 g	全体の 1/2	側面:ナデ、ユビオサエ 端面:ナデ	黒褐色	密、1-5mm大の 白色砂粒多く混	良好	片面穿孔
220	第66図 PL.37	SK11 埋土中	土師器 皿	口径:12.4 器高:2.7 底径: 9.0	口縁部 1/4周	外面:回転ナデ、底部ケズリ 内面:回転ナデ	褐色	密、白色微砂粒、 角閃石少量混	良好	摩滅著しい
221	第69図 PL.38	SK11 埋土中	土師器 底部	器高: 0.5 底径: 5.2	底部 1/2周	外面:回転ナデ 内面:(剥離)	灰褐色 淡褐色	密、赤褐色砂礫 僅かに混	良好	底部回転糸切
222	第69図 PL.37	SK12 埋土中	須恵器 坏	口径: 20.4 器高: 3.0	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	青灰色	密、径1mm以下の 砂礫僅かに混	良好	混入か
223	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 皿	口径:9.3 器高:2.9 底径:4.7	口縁部 1/4周 底部 完存	外面:回転ナデ 内面:ナデ	浅黄褐色	密、雲母粒 混	やや不良	底部回転糸切
224	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 皿	口径:9.2 器高:2.6 底径:4.2	ほぼ 完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄褐色～ 褐色	密、雲母粒 少量混	良好	底部回転糸切

No.	挿図・P.L.	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
225	第69図 PL.36	SK12 坑底直上	土師器 皿	口径:9.3 器高:2.4 底径:4.3	口縁部 一部欠	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄橙色	密、径2mm以下の 砂礫やや多く混	良好	底部回転系切、 口縁部歪みあり
226	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 皿	口径: 8.5 器高:2.7 底径:4.3	口縁部 3/4周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄橙色～ 橙色	密、精良	良好	底部回転系切、 口縁部歪みあり
227	第69図 PL.38	SK12 埋土中	土師器 坏	器高: 2.0 底径: 7.2	底部 1/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	密、砂粒僅 かに混	良好	底部回転系切 底面 に重に粘土を貼り足 し一度目の系切
228	第69図 PL.38	SK12 埋土中	土師器 皿	口径: 9.8 器高:2.4 底径: 5.0	底部 1/4周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	浅黄橙色	密	良好	底部回転系切
229	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 3.3 底径: 7.2	高台部 3/4周	内外面:回転ナデ	にぶい褐色	密、3mm角の 礫まばらに混	良好	底部回転系切
230	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 3.5 底径: 6.0	底部 1/2周	外面:回転ナデ 内面:ナデ	浅黄橙色	密、砂粒少 量混	良好	底部回転系切
231	第69図 PL.36	SK12 埋土中	土師器 柱状高台皿	器高: 2.5 底径:5.6	底部ほ ぼ完存	内外面:回転ナデ	浅黄橙色	密、雲母粒 僅かに混	良好	底部回転系切
232	第72図 PL.37	SK13 埋土中	須恵器 甕	底径: 22.4 器高: 10.7	底部・胴部 1/6周	外面:格子叩き 回転ナデ 内面:底部～胴部タテハケ 胴部 無文当て具痕	灰色	密	良好	
233	第72図 PL.38	SK13 埋土中	土師器 皿	口径: 7.2 器高: 1.5	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
234	第72図 PL.42	SK13 埋土中	青白磁 合子	口径: 5.8 器高: 1.8 受部径: 6.8	口縁部 1/8周	内外面:施釉、受部は露胎	明緑灰色 露胎部分は灰白色	密	良好	
235	第72図 PL.38	SK14 埋土中	土師器 皿	口径: 7.8 器高:1.6 底径: 4.4	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色 橙色	密、砂粒、雲母 粒やや多く混	不良	外面煤付着 底部回転系切
236	第75図 PL.37	SK15 P2 埋土中	須恵器 甕		頸部・肩部 1/6周	外面:肩部格子叩き ヨコナデ、 頸部タテハケ ヨコナデ 内面:ヨコハケ 回転ナデ	灰色	密	良好	
237	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 坏	口径: 12.3 器高: 4.5	口縁部 1/6周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	密	良好	
238	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 皿	口径: 6.8 器高:1.8	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
239	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 皿	口径: 7.8 器高:1.6	口縁部 1/3周	内外面:回転ナデ	にぶい黄橙色	密	良好	底部回転系切
240	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 皿	口径: 8.4 器高:1.5	口縁部 1/4周	内外面:回転ナデ	にぶい橙色	密	良好	
241	第75図 PL.38	SK15 埋土中	土師器 底部	底径:4.0 器高: 1.0	底部 完存	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
242	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 坏	口径: 13.0 器高: 3.8	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	明褐色	密	良好	内外面に煤付着
243	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 皿	口径: 7.2 器高:1.2	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密	良好	底部回転系切
244	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 底部	底径:4.9 器高: 1.5	底部ほ ぼ完存	内外面:回転ナデ	にぶい橙色 浅黄色	密	良好	内外面赤彩、底部回 転系切、側面に打込 き痕らしき破面残る
245	第75図 PL.38	SK18 埋土中	土師器 底部	底径:5.2 器高: 1.2	底部 2/3周	内外面:回転ナデ	浅黄橙色 橙色	密	良好	内外面赤彩 底部回転系切
246	第78図 PL.38	SK21 埋土中	土師器 坏	口径: 15.0 器高:3.4	口縁部 1/8周	内外面:回転ナデ	黄褐色	密、1mm大 の赤色粒混	良好	内外面煤付着
247	第78図 PL.38	SK21 埋土1層	土師器 底部	底径: 7.6 器高: 1.0	底部 1/6周	内外面:回転ナデ	黄橙色	密	良好	底部回転系切、 ただし不明瞭
248	第78図 PL.38	SK21 埋土1層	土師器 底部	底径: 6.8 器高: 1.2	底部 1/2周	内外面:回転ナデ	橙色	密	やや不良	底部回転系切、 外面煤付着
249	第80図 PL.38	SK22 埋土1層	土師器 坏	器高: 2.7	口縁部 破片	内外面:回転ナデ	黄橙色	密、1mm大 の赤色粒混	良好	外面煤付着
250	第80図 PL.38	SK22 埋土1層	土師器 底部	底径: 8.4 器高: 1.5	底部 1/8周	内外面:回転ナデ	黒褐色 橙色	密、1mm大の 赤色粒混	良好	底部ヘラ切り
251	第80図 PL.38	SK22 埋土1層	土師器 底部	底径: 5.8 器高: 1.1	底部 1/8周	内外面:回転ナデ	橙色	密、1mm大の赤 色粒少量混	良好	底部ヘラ切り
252	第83図 PL.37	P91 埋土中	土師器 坏	口径: 16.2 器高:4.5 底径:7.0	口縁部 1/4周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	灰褐色	密、赤褐色砂 礫まばらに混	良好	底部回転系切
253	第83図 PL.37	P127 埋土中	土師器 皿	口径:8.1 器高:2.0 底径:4.5	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色	赤褐色砂礫 まばらに混	良好	底部回転系切、 板圧痕
254	第83図 PL.37	P367 埋土中	土師器 皿	口径: 8.1 器高:2.2 底径: 5.0	口縁 2/3周	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	橙色～ 明赤褐色	密、雲母粒 やや多く混	良好	底部回転系切
255	第83図 PL.37	P367 埋土中	土師器 皿	口径:8.1 器高:1.5 底径:6.7	完存	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ 底面ナデ	にぶい黄褐色	密、白色砂 粒少量混	良好	底部回転系切
256	第83図 PL.42	P422 埋土中	白磁 碗	口径: 14.0 器高: 4.8	口縁部 1/6周	外面:ケズリ 施釉 内面:施釉	灰白色	密、精良	良好	
257	第83図 PL.42	P371 埋土中	白磁 碗	器高: 3.3 底径: 6.4	底部 1/3周	外面:施釉、高台・底面は露胎 内面:八ケ 施釉	灰白色	密、精良	良好	
258	第83図 PL.42	P351 埋土中	青白磁 合子蓋	口径:5.2 器高:1.5	天井部 1/2周	外面:側縁に蓮弁、天井に陽刻草花 文、施釉 内面:天井部のみ施釉	灰白色	密、精良	良好	内面露胎部に 赤色顔料付着

No.	挿図・PL	遺構・層位	器種・種別	法量〔cm〕	遺存度	調整（手法上の特徴）	色調	胎土	焼成	備考
259	第86図 PL.41	C5 表土中	土偶	長: 6.1 幅: 3.6 厚さ: 4.3	脚部 破片	正面上部に隆帯、隆帯の上下は沈線で区画し、沈線の末端に刺突。隆帯上にLR縄文。隆帯の上方には、同様に沈線で区画された右上がりの隆帯の痕跡あり。右側面にLR縄文 平行沈線2条。上段の沈線と隆帯区画沈線との交点に刺突。下段沈線は隆帯区画沈線の末端から伸び、終端に刺突。刺突は計6箇所となる。上段沈線の上方に赤彩残る。下端近くに沈線1条をめぐらせ足首を表現。上端背面側は滑らかな球状の剥離面となっており、接合の技法が窺える。色調はにぶい黄橙色。胎土は白色砂粒をやや多く含み、雲母粒や角閃石が少量混じる。焼成は良好。				
260	第86図 PL.41	B8 表土中	不明土製品	長: 3.7 幅: 2.0 厚さ: 1.7		平坦な側にRL縄文、縦の沈線1条。上面に刺突3箇所（端部近くに2箇所、沈線の末端に1箇所）	灰黄褐色	密、白色砂粒 やや多く混	良好	
261	第86図 PL.40	B3 表土中	縄文土器 深鉢		胴部-底部 破片	外面: D字形爪形文 2段 内面: ナデ	にぶい黄橙色 褐灰色	密、微砂粒、雲 母粒をやや多く混	不良	前期中葉（羽鳥下層 - 北白川下層）
262	第86図 PL.40	C5 攪乱土中	縄文土器 深鉢	器高: 2.8	口縁部 破片	外面: RL磨消縄文、施文帯の上下に円形刺突、それを沈線で結ぶ 内面: ミガキ	にぶい黄褐色 暗灰黄色	密、径1mm以下の 砂礫をやや多く混	不良	中津式
263	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.4	波頂部 破片	外面: LR磨消縄文、波頂部に刻み5単位 内面: ミガキ	にぶい黄褐色	密、径2mm以下の 砂礫をやや多く混	不良	中津式
264	第86図 PL.40	B4 攪乱土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.3	波頂部 破片	外面: 波状口縁。RL磨消縄文 内面: ミガキ	にぶい黄褐色	密	良好	外面黒斑
265	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 8.6	波頂部 破片	外面: RL磨消縄文 内面: ミガキ	にぶい黄褐色	密、雲母粒 やや多く混	良好	外面煤付着 中津式
266	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 4.5	口縁部 破片	外面: 波状口縁。LR磨消縄文 内面: ミガキ	灰黄褐色 浅黄褐色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	
267	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 精製深鉢	器高: 6.2	波頂部 破片	外面: 波状口縁。RL磨消縄文。 内面: 丁寧ナデ	浅黄褐色	密	良好	
268	第86図 PL.40	B4 表土中	縄文土器 粗製深鉢	器高: 3.5	口縁部 破片	外面: 条痕、口唇部に細かい刻み 内面: 条痕	灰黄褐色	密、径2mm以下の石英 雲母粒をやや多く混	やや不良	外面煤付着 中津式
269	第86図 PL.40	C10 攪乱土中	縄文土器 鉢		胴部 破片	外面: LR磨消縄文、沈線内に刺突 内面: ナデ	にぶい黄褐色	密、白色砂粒 やや多く混	良好	中津式
270	第86図 PL.39	B7 表土中	弥生土器 壺	口径: 14.3 器高: 18.4	上半部 1/4周	外面: ミガキ 内面: ナデ、ユビオサエ	にぶい黄褐色	密、1-2mm大 赤褐色粒子混	良好	上面煤付着
271	第86図 PL.40	F9 -5層	弥生土器 甕	器高: 3.3	口縁部 破片	外面: 口縁端部刻み。以下板状工 具による凹線 内面: 横ミガキ	橙色	密	良好	
272	第86図 PL.40	B4 攪乱土中	弥生土器 甕	器高: 3.0	口縁部 破片	外面: 粗いたテハケ 3条以上凹線。 内面: 端部ミガキ。以下ハケ。	橙色	やや粗、2mm 大の砂粒混	良好	外面黒斑
273	第86図 PL.40	F10 -5層	土師器 甕	口径: 13.3 器高: 3.7	口縁部 1/8周	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	にぶい黄褐色	密	良好	
274	第86図 PL.40	F10 攪乱土中	土師器 鼓形器台	口径: 23.6 器高: 6.8	受け部 1/8周	外面: ヨコナデ 円形スタンプ文、 半截竹管を組み合わせたスタンプ 文 内面: ヨコナデ	浅黄褐色	密	良好	
275	第86図 PL.40	G9 表土中	土師器 鼓形器台	口径: 19.4 器高: 7.0	受け部 1/5周	外面: ヨコナデ 内面: 横ミガキ	浅黄褐色	密	良好	
276	第86図 PL.37	C9 表土中	土師器 甕		底部 のみ	上面: ナデ胴部付近ユビオサエ 下面: 端部ハケ、胴部付近ユビオサエ	浅黄褐色	密	良好	
277	第86図 PL.37	C10 攪乱土中	土製紡錘車	長軸: 2.9 短軸: 2.8 厚さ: 2.35	完存	手捏ね整形 ナデ	にぶい黄褐色	密	良好	
278	第86図 PL.40	層	土器片転用 紡錘車	長径: 2.8 短径: 2.8 厚さ: 0.36	完存	外面: ナデ 内面: ハケ	にぶい橙色 黄褐色	密	良好	土器胴部片を円形に加工。焼成前に穿孔か
279	第86図 PL.37	B8 表土中	土錘	長: 4.4 重量: 7.7g 径: 1.4 厚さ: 1.4	完存	手捏ね整形	暗灰色	密	良好	
280	第86図 PL.40	D8 表土中	土師器 甕	口径: 26.0 器高: 5.7	口縁部 1/8周	外面: 口縁端部ヨコナデ、胴部非常に粗いたテハケ 内面: 口縁部ヨコ ハケ ナデ、屈曲部以下ケズリ	にぶい黄褐色	密	良好	
281	第86図 PL.37	B8 表土中	土師器 甕		把手部 破片	外面: 手捏ね整形 内面: ケズリ	灰褐色 にぶい橙色	密	良好	外面黒斑あり
282	第86図 PL.37	F9 -5層	須恵器 坏蓋	口径: 12.8 器高: 4.0 稜径: 12.8	口縁部 3/4周	外面: 天井部1/2回転ケズリ、以下回 転ナデ。天井部との境に鈍い稜 内面: 天井部ヨコナデ、以下回転ナデ	灰色	密	良好	
283	第86図 PL.40	F9 -5層	須恵器 短頸壺	口径: 11.7 器高: 4.4	口縁部 1/8周	内外面: 回転ナデ	灰白色	密	良好	
284	第86図 PL.39	C7 層	須恵器 壺	口径: 18.4 器高: 32.9 底径: 9.3	口縁部- 胴部1/2周	外面: ナデ、底部ケズリ 内面: 頸部ハケ ナデ	黒灰色	1mm以下の 砂粒混	良好	
285	第86図 PL.40	F9 -5層	須恵器 底部高台	器高: 2.6 底径: 7.3	底部 1/8周	内外面: 回転ナデ	暗灰-にぶい赤褐色 灰色	密	良好	
286	第86図 PL.40	E10 攪乱土中	須恵器 高台付皿	口径: 21.0 器高: 4.0 底径: 15.0	口縁部 1/8周	内外面: 回転ナデ	黄灰色	密	良好	口縁部に意図的 な打ち欠きか
287	第86図 PL.42	表土中	白磁 碗	口径: 15.8 器高: 2.6	口縁部 1/6周	内外面: 回転ナデ	灰白色	密	良好	
288	第86図 PL.40	E10 表土中	瓦質土器 底部	器高: 4.4	底部 1/8周	外面: 胴部回転ナデ、底部ケズリ 内面: ヨコハケ	灰色	密	良好	胴部下半突帯 あり
289	第87図 PL.39	C10 攪乱土中	須恵器 甕	器高: 36.8	胴部 1/5周	外面: 平行叩き 内面: 同心円文当て具痕	灰色	密	良好	

第33表 石器・石製品観察表

No.	遺構・層位	挿図・PL.	器種	法量 (mm)			重量(g)	石 材	備 考
				長さ	幅	厚さ			
S1	S15 埋土中	第9図 PL.44	石皿	332	240	98	9600	黒雲母角閃石安山岩	
S2	S15 床面直上	第9図 PL.44	石皿	242	130	97	2600	黒雲母角閃石安山岩	
S3	S15 床面直上	第9図 PL.44	磨石	109	94	55	801	角閃石安山岩	端部が黒く変色
S4	S15 埋土中	第9図 PL.44	磨石	120	104	58		黒雲母角閃石安山岩	
S5	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	26	17	3	1.1	安山岩	無茎凹基
S6	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	22	15	3	0.6	黒曜石	無茎凹基(基部片方欠)
S7	SD2 埋土上層	第13図 PL.44	打製石鏃	22	16	5	1.0	黒曜石	無茎凹基(基部片方欠)
S8	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	17	13	3	0.4	安山岩	無茎凹基
S9	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	16	11	2	0.2	安山岩	無茎凹基
S10	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	18	15	3	0.7	安山岩	無茎凹基
S11	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	14	12	3	0.3	安山岩	無茎凹基
S12	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	15	13	3	0.4	安山岩	無茎凹基
S13	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	16	13	3	0.5	安山岩	無茎凹基
S14	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	13	13	3	0.2	黒曜石	無茎凹基
S15	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	15	12	4	0.5	安山岩	無茎平基
S16	SD2 埋土下層	第13図 PL.44	打製石鏃	15	11	2	0.4	安山岩	無茎平基
S17	SK20 埋土中	第19図 PL.44	石鏃	55	23	3	8.0	石英片岩	
S18	S16 埋土中	第29図 PL.44	打製石鏃	27	21	4	1.5	安山岩	無茎凹基
S19	S16 埋土中	第29図 PL.44	打製石鏃	16	15	4		黒曜石	
S20	S16 埋土中	第29図 PL.44	砥石	45	24	17	34	砂岩	
S21	S12 埋土中	第35図 PL.44	砥石	87	44	34	182	流紋岩	
S22	S12 埋土中	第35図 PL.44	礫	165	186	45	2250	花崗岩	表・裏面中央付近に朱付着 端部に打ち欠き痕、片面に朱付着後敲打痕
S23	SD1 埋土中	第44図 PL.44	剥片石器	89	73	13	92	安山岩	直線的な側縁は風化した自然面
S24	SD1 埋土中	第44図 PL.44	打製石鏃	15	11	3	0.4	安山岩	無茎凹基
S25	SD1 埋土中	第44図 PL.44	打製石鏃	16	15	4	0.6	黒曜石	無茎凹基
S26	SD7 埋土上層	第45図 PL.44	砥石	40	27	17	23	無斑晶安山岩	
S27	SK18 埋土中	第75図 PL.44	砥石	76	53	48	288	細粒花崗岩	
S28	P258 埋土中	第83図 PL.44	石庖丁	94	43	7	48	角閃石花崗閃緑岩	
S29	D5 表土中	第87図 PL.44	石鏃	67	20	3	8.0	結晶片岩	
S30	D5 表土中	第87図 PL.44	片刃石斧	90	26	11	47	ガラス質安山岩	
S31	F9 表土中	第87図 PL.44	磨製石斧	55	54	26	110	アブライト	

第34表 玉類観察表

No.	遺構・層位	挿図・PL.	材 質	種 類	法量 (mm)	特 徴	備 考
J1	SD 2 埋土下層	第13図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：8.1 幅：10.6 厚：4.2	厚さ4.2mmの板状素材から1辺4mm四方の角柱体を形成する過程で廃棄されたもの。上面と縁辺に施溝痕残る。小口を研磨。施溝の裏面(自然面)が剥離し、厚みが不足したために廃棄されたものか。	分析番号94446 菩提、女代南B群
J2	SD 2 埋土下層	第13図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：12.7 幅：5.4 厚：4.6	厚さ4.6mmの板状素材から施溝分割によって成形された幅5.4mmの角柱体。縁辺に施溝痕残る。側面のうち1面は施溝分割の後に押圧剥離を行う。	分析番号94447 菩提、女代南B群
J3	SD 2 埋土下層	第13図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：14.0 幅：7.1 厚：5.9	角柱体。側面は4面とも打割によって成形され、研磨される。	分析番号94451 菩提、女代南B群
J4	C5表土中	第87図 PL.43	翡翠	勾玉未成品?	長：3.1 幅：3.4 厚：1.0	縁辺に施溝痕残る。施溝痕と直交する幅広側の1辺は破断面。他は自然面となる。	
J5	表土中	第87図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：13.6 幅：6.6 厚：5.4	側面と小口の縁辺に施溝痕残る角柱体。側面のうち1面と小口面が研磨される。	
J6	表土中	第87図 PL.43	碧玉	管玉未成品	長：19.1 幅：9.0 厚：7.8	厚さ7.8mmの板状素材から、施溝分割によって角柱体を成形する過程で破損したものの。縁辺に施溝痕残る。破断面にも調整や研磨が行われており、再加工を試みたものか。	

第35表 銅製品観察表

No.	遺構・層位	挿図・PL.	種 類	法 量	特 徴
C1	SB 1 : P1掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.5cm	開元通寶(唐・621年初鑄)
C2	SB 1 : P5掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.5cm	至道元寶(北宋・995年初鑄)草書
C3	SB 1 : P8掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.5cm	元祐通寶(北宋・1086年初鑄)行書
C4	SB 1 : P11掘方埋土	第37図 PL.43	銭貨	径2.4cm	元豐通寶(北宋・1078年初鑄)行書
C5	SK 2 埋土中	第54図 PL.43	和鏡	径8.1cm 厚さ：外区5mm 鏡胎1~2mm	山吹双鳥鏡。二羽の鳥と二輪一對の山吹を描く。鈕座は抜菊座。内区と外区の境に界圈巡る。

写真図版 P L A T E

写真図版目次

PL. 1 南原千軒遺跡遠景 遺跡周辺の地形	PL.16 SD 5 / SD 7 SD 6・7 / SD 1・6・7 土層 断面	土錘・土製品
PL. 2 遺跡周辺の地形		PL.35 SD 8・9・SI 2 出土土器
PL. 3 完掘状況全景	PL.17 SD 7 底面段差部分	PL.36 SK 1・SK10・SK12 出土土器
PL. 4 調査前状況	SD 7 土器出土状況	PL.37 土坑出土土器
PL. 5 SI 5 SI 5 遺物出土状況 SI 5 石囲炉焼土検出状況 SI 5 石囲炉土層断面	SD 7 土層断面 SD 8 / SD 9 SD 9 土層断面	SK10・SK11・ピット出土土 器 / 遺構外出土遺物
PL. 6 SD 2・3 検出状況 SD 2・3 SD 2 礫検出状況 SD 3 遺物出土状況	PL.18 SK 1 SK 2 / SK 2 遺物出土状況 SK 3 / SK 5 / SK 6	PL.38 土坑出土土器
PL. 7 SK 4 / SK 4 遺物出土状況 SK16 / SK16礫検出状況 SK20 SK23 / SK23西側土器出土 状況	PL.19 SK 7 / SK 8 / SK 9 SK10 / SK10遺物出土状況 SK11	PL.39 遺構外出土土器
PL. 8 SI 1 / SI 1 貼床除去後 SI 3	PL.20 SK12 / SK12礫検出状況 SK13 / SK13遺物出土状況 SK14 / SK15	PL.40 縄文土器 遺構外出土遺物
PL. 9 SI 6 / SI 6 遺物出土状況	PL.21 SK18 / SK19 / SK21 / SK22 / SK24 / SK25	PL.41 遺構外出土土偶 不明土製品
PL.10 SD10 / SD10礫検出状況 SD10遺物出土状況 SI 2	PL.22 SI 5 出土土器	PL.42 玉類・サヌカイト / 朱墨・ 顔料付着遺物 / 陶磁器
PL.11 SI 4 / SB 1	PL.23 SD 2・3 出土土器	PL.43 SK 2 和鏡 / 同 X線写真 SB 1 銭貨 / 同 X線写真
PL.12 SB 1 / SB 1 検出状況 SB 1 西半	PL.24 SK 4 出土土器	PL.44 SI 5 出土石皿・磨石 SI 2 出土朱付着礫 石庖丁・石鋸 / 砥石・石斧 石鏃・剥片石器
PL.13 SB 1 東半 SB 1・P28土層断面 SB 1・P28礎盤石検出状況 SB 1・P 5 銭貨出土状況 SB 1・P 1 銭貨出土状況	PL.25 SK 4 出土土器 SK23付近出土土器	PL.45 SK 2 出土輪状鉄製品 輪状鉄製品 X線写真 鉄製品 (1) / 同 X線写真
PL.14 SB 2 検出状況 / SB 2	PL.26 弥生時代土坑出土土器	PL.46 鉄製品 (2) / 同 X線写真
PL.15 SB 2・P13土層断面 SB 2・P13礎盤石検出状況 SD 1 / SD 4	PL.27 SI 1・3 出土土器 SI 6・SI 6 周辺出土土器	PL.47 鉄製品 (3) / 同 X線写真
	PL.28 SI 6・SI 6 周辺出土土器	PL.48 炉壁・羽口
	PL.29 SI 6・SI 6 周辺出土土器	PL.49 鉄滓・鉄塊系遺物 (1) X線写真
	PL.30 SI 6・SD10出土土器 SD10出土土器	PL.50 鉄滓・鉄塊系遺物 (1)
	PL.31 SB 1・2 出土土器 SD 1 出土土器	PL.51 鉄滓・鉄塊系遺物 (2)
	PL.32 SD 4・SD 6 出土土器	PL.52 鉄滓・鉄塊系遺物 (3)
	PL.33 SD 7 出土土器	PL.53 鉄滓・鉄塊系遺物 (4)
	PL.34 SD 7・SD 9 出土土器	PL.54 鉄滓・鉄塊系遺物 (5)
		PL.55 鉄滓・鉄塊系遺物 (6)
		PL.56 鉄滓・鉄塊系遺物 (7)
		PL.57 鉄滓・鉄塊系遺物 (8)



南原千軒遺跡(矢印) 遺業(南東から)



遺跡周辺の地形(上が北)



遺跡周辺の地形（北上空から）



遺跡周辺の地形（西上空から）



完備状況全景（左が北）



1区調査前状況(北西から)



2区調査前状況(南東から)



S15 (東から)



S15 遺物出土状況 (西から)



S15 石圍炉焼土検出状況 (北から)



S15 石圍炉土層断面 (北西から)



SD2 - 3 横出状況 (北から)



SD2 - 3 (北から)



SD2 横出状況 (北東から)



SD3 遺物出土状況 (東から)



SK4 (南から)



SK4遺物出土状況 (北東から)



SK16 (南東から)



SK16遺物出土状況 (南東から)



SK20 (南から)



SK23西側
土器(53)
出土状況
(西から)



SK23 (南西から)



S1 (before)



S1 貼床除去後 (北から)



S13 (before)



S16 (北西から)



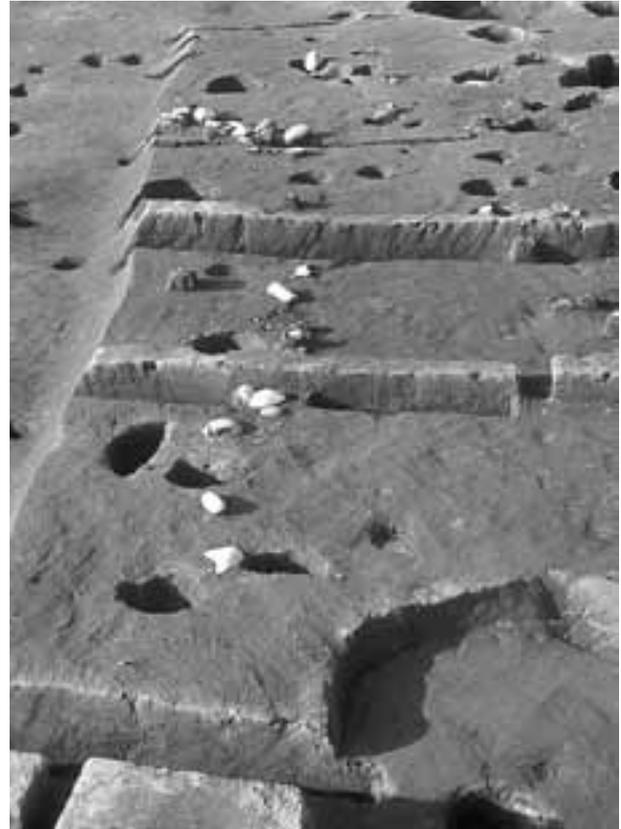
S16 遺物出土状況 (南東から)



S16 遺物出土状況 (北から)



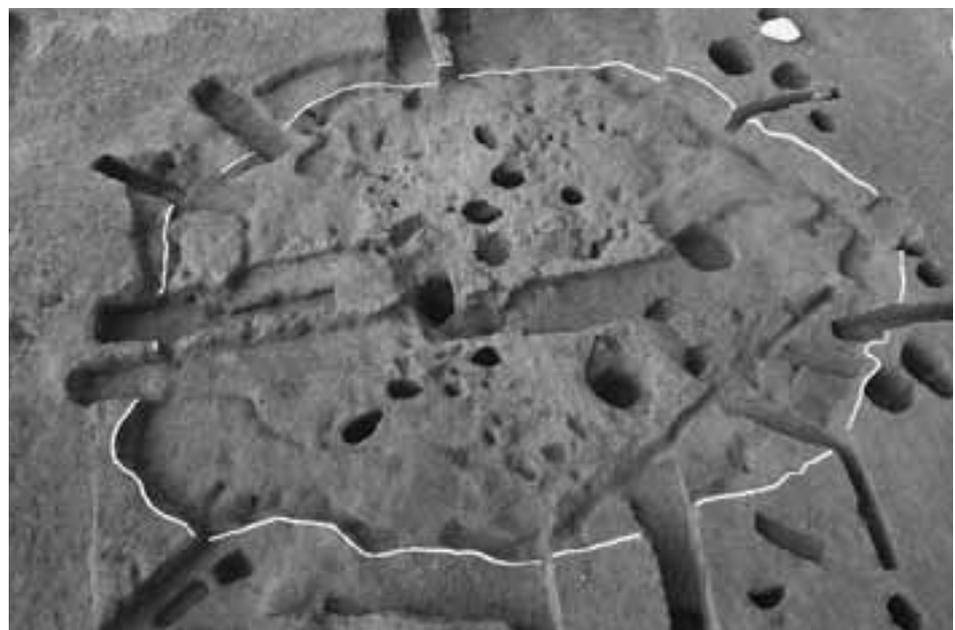
S010 (南から)



S010壁検出状況 (南から)



S010遺物出土状況 (南から)



S12 (南から)



S14 (南から)



S81 (南から)



S81 (南から)



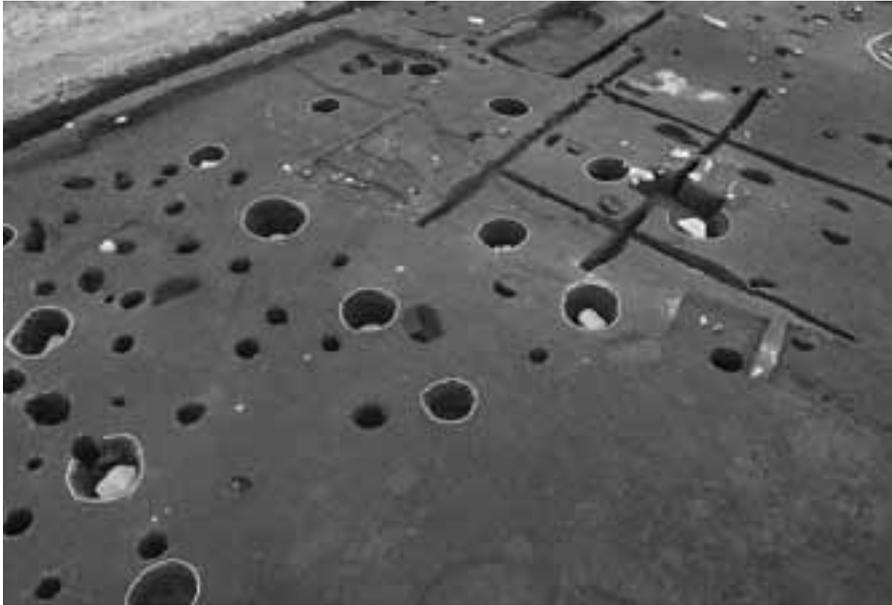
S81 (東から)



S81 検出状況 (南東から)



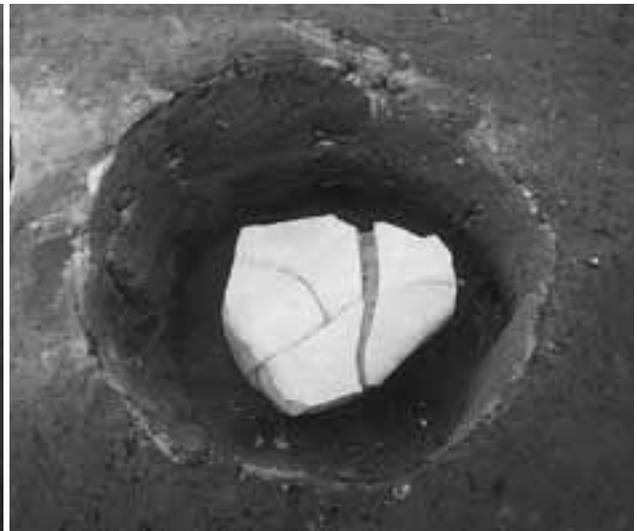
S81 西半 (南西から)



S01 東半 (南西から)



S01 P20土層断面 (東から)



S01 P20礎盤石検出状況 (東から)



S01 P5室遺元直出土状況 (北から)



S01 P1間元遺直出土状況 (西から)

S02 検出状況 (西から)



S02 (南から)



S02 (西から)





SB2 P13土層断面 (北西から)



SB1 P13燧石検出状況 (北西から)



SD1 (西から)



SD4 (北から)



SD6 (西から)



SD6 - 7 (東から)



SD6 - 7 (西から)



SD6 - 7 (北西から)



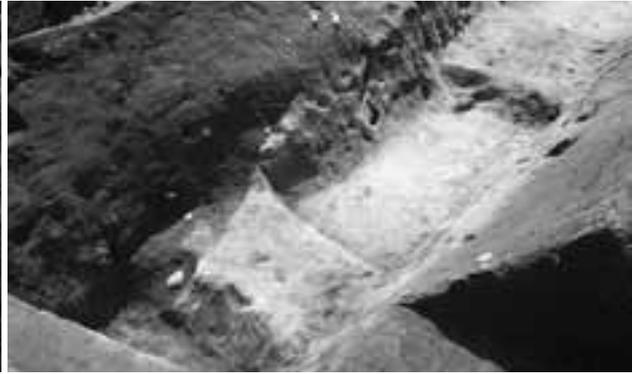
SD7 (西から)



SD1 - 6 - 7 土層断面 (西から)



S07 底面段差部分 (西から)



S07 底面段差部分 (北東から)



S07 土器 (150--153) 出土状況 (東から)



S07 土層断面 (西から)



S08 (南から)



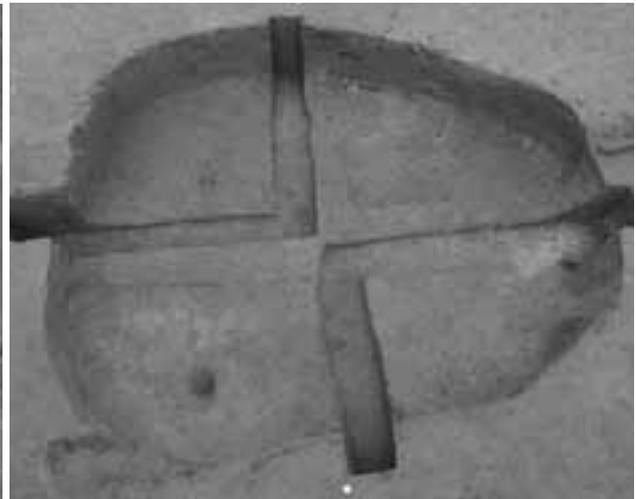
S09 土層断面 (南から)



S09 (南から)



SK1 (北から)



SK3 (南から)



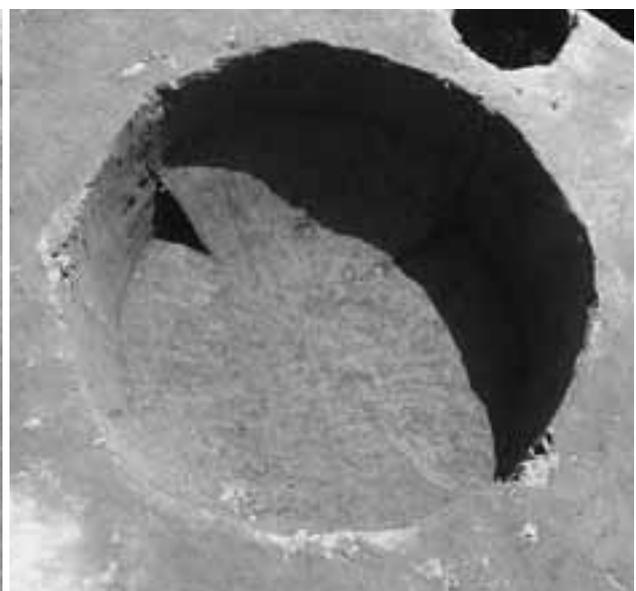
SK2 遺物出土状況 (南から)



SK2 (南から)



SK5 (北東から)



SK6 (北東から)



SK7 (北東から)



SK8 (南から)



SK9 (南から)



SK10 (南西から)



SK11 (南から)



SK10遺物出土状況 (西から)



SK12 (南西から)



SK12遺物出土状況 (北から)



SK13 (南から)



SK13遺物出土状況 (北東から)



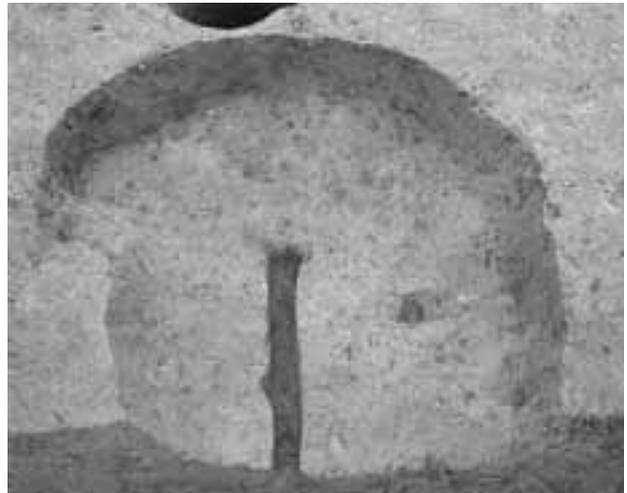
SK14 (西から)



SK15 (南から)



SK18 (北から)



SK22 (西から)



SK19 (南西から)



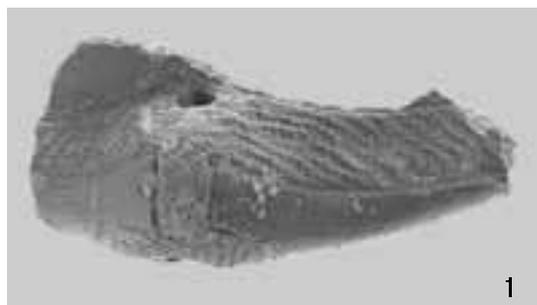
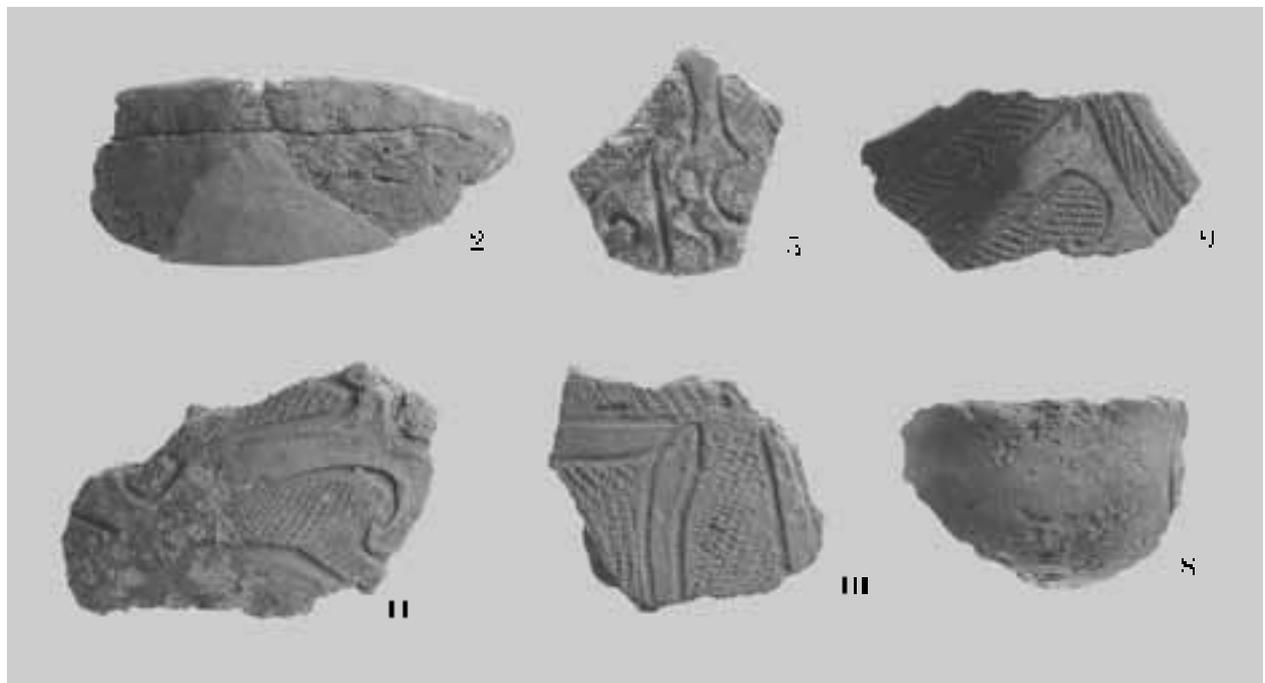
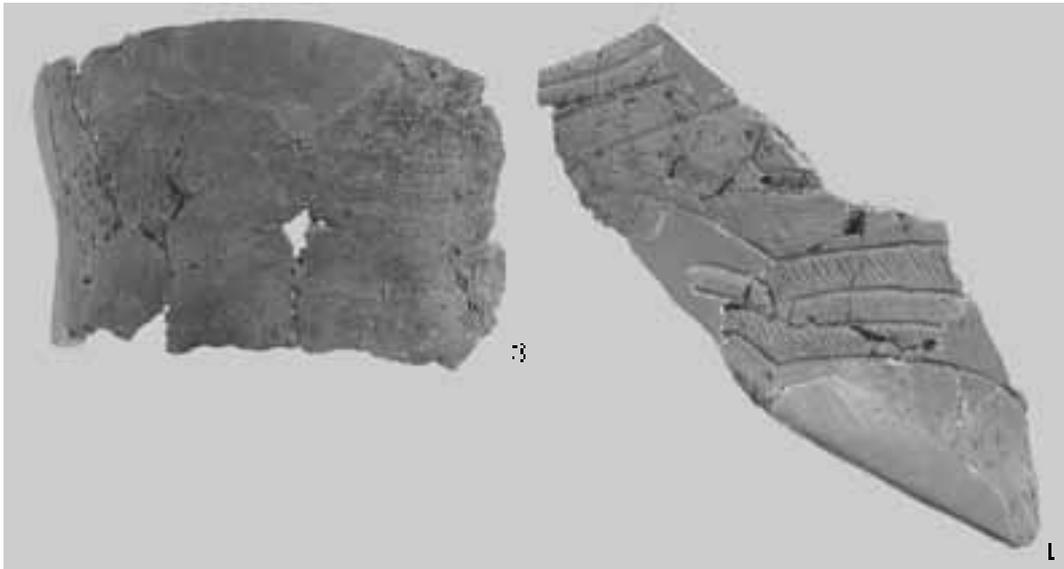
SK24 土層断面 (南から)



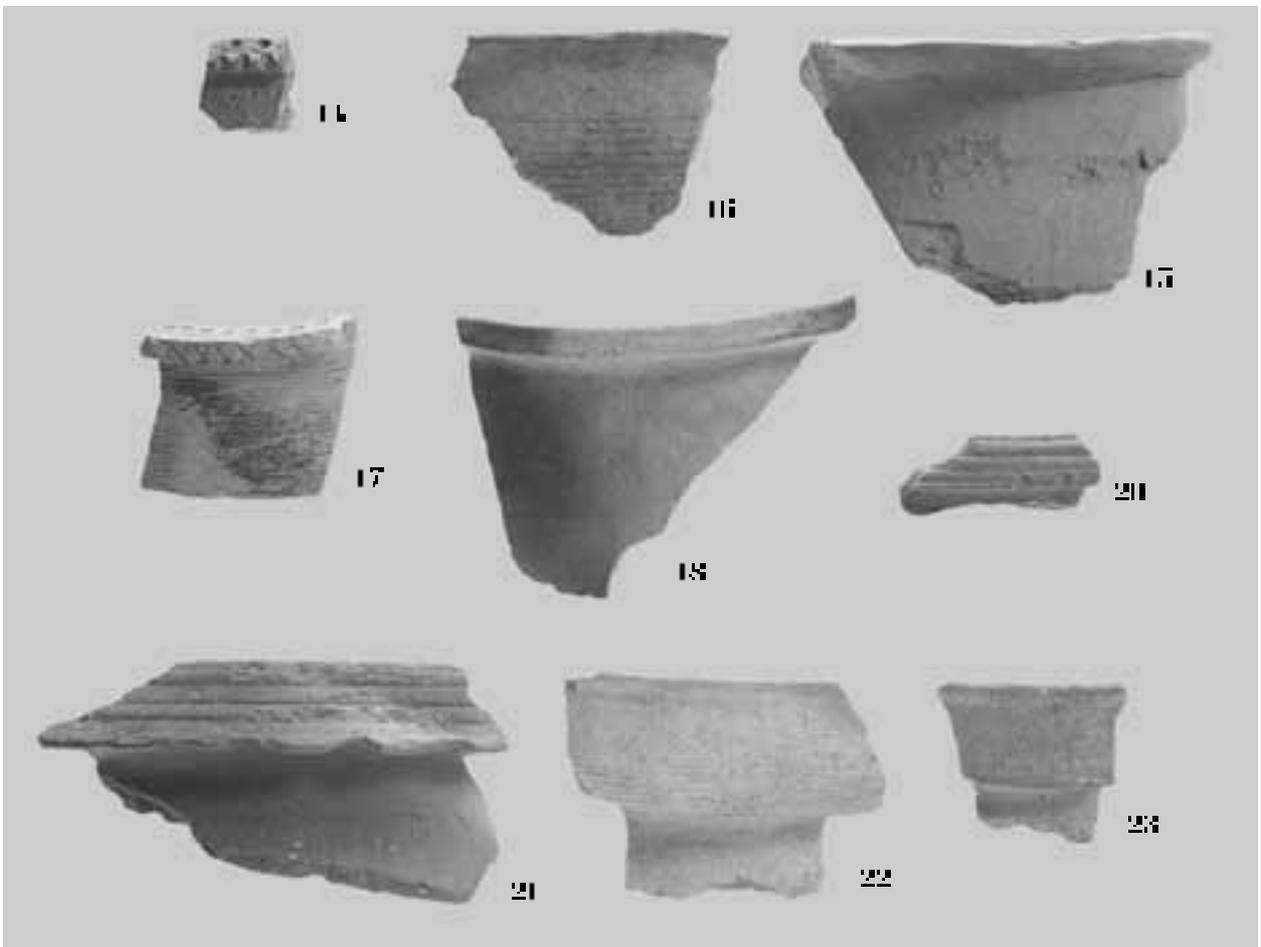
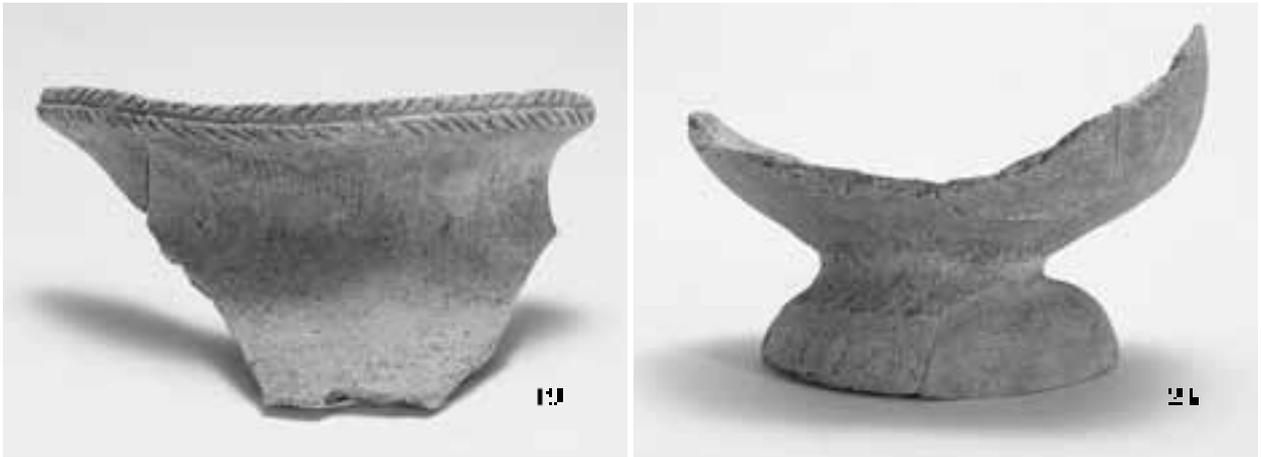
SK21 (北から)



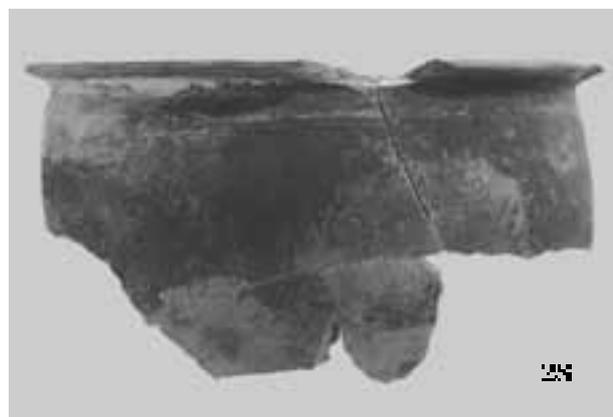
SK25 (北から)



515出土土器



SD2 - 3出土土器



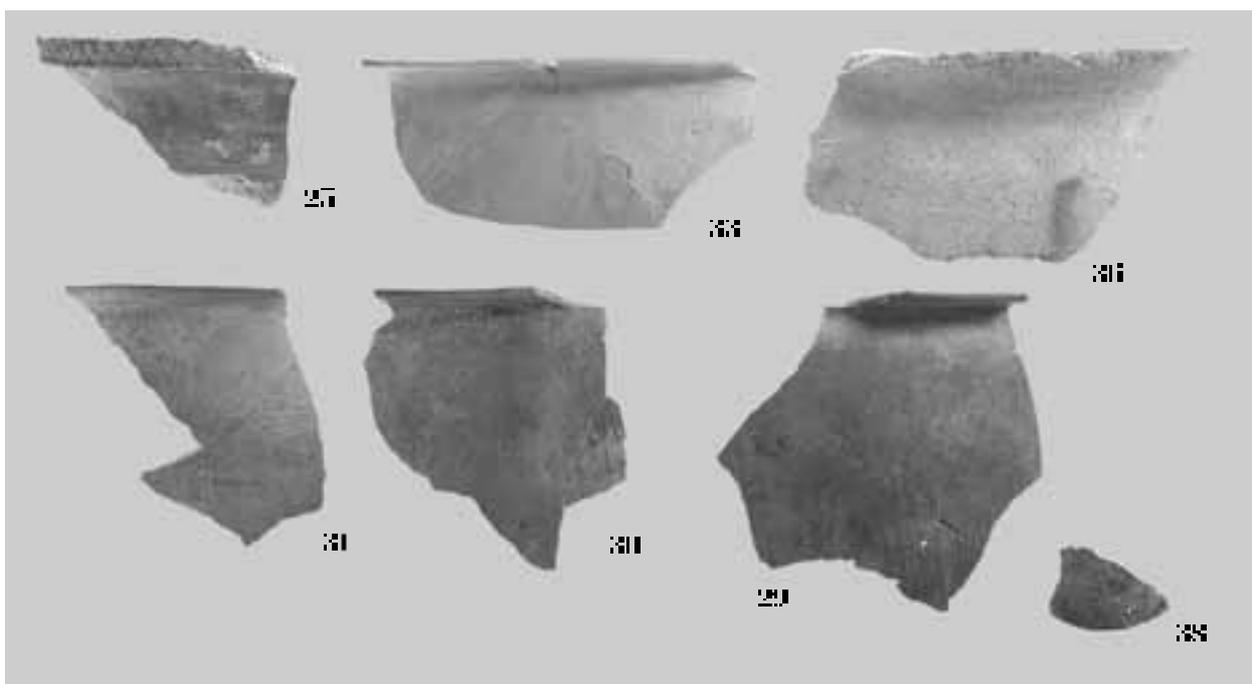
SK4 出土土器



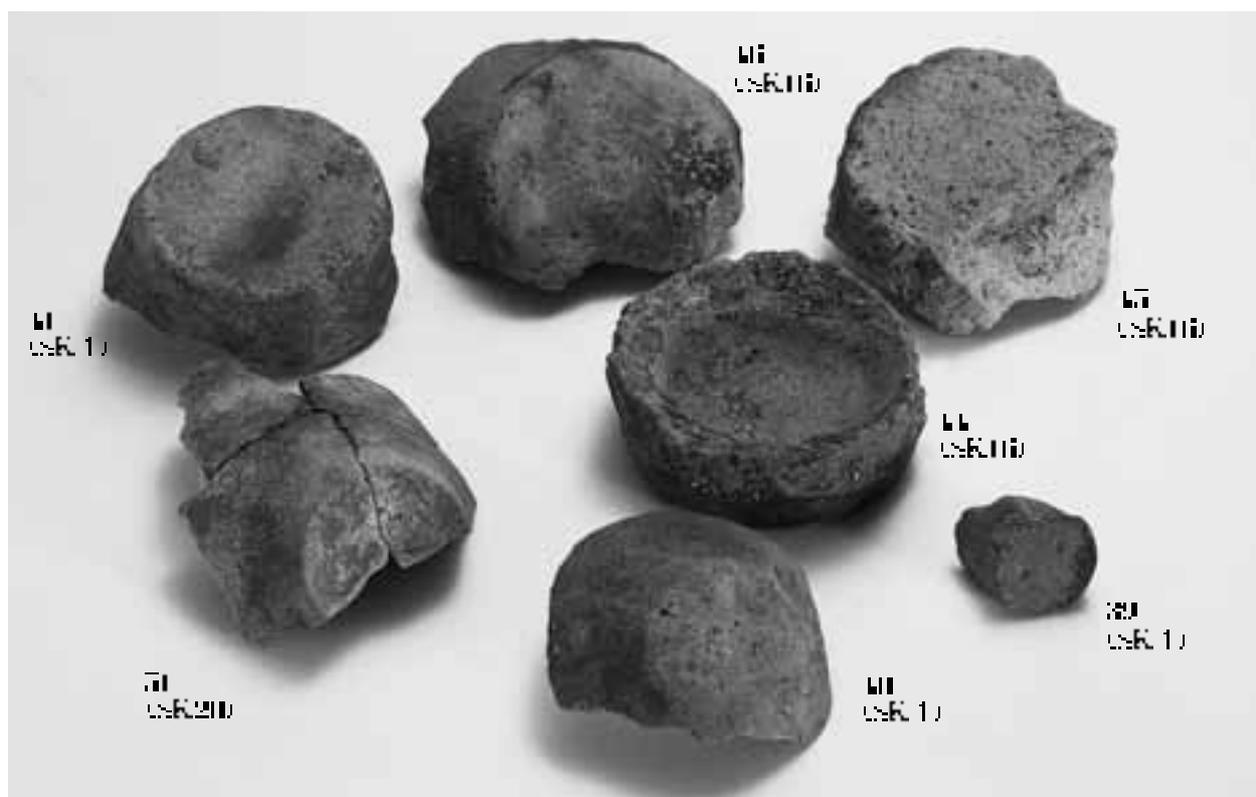
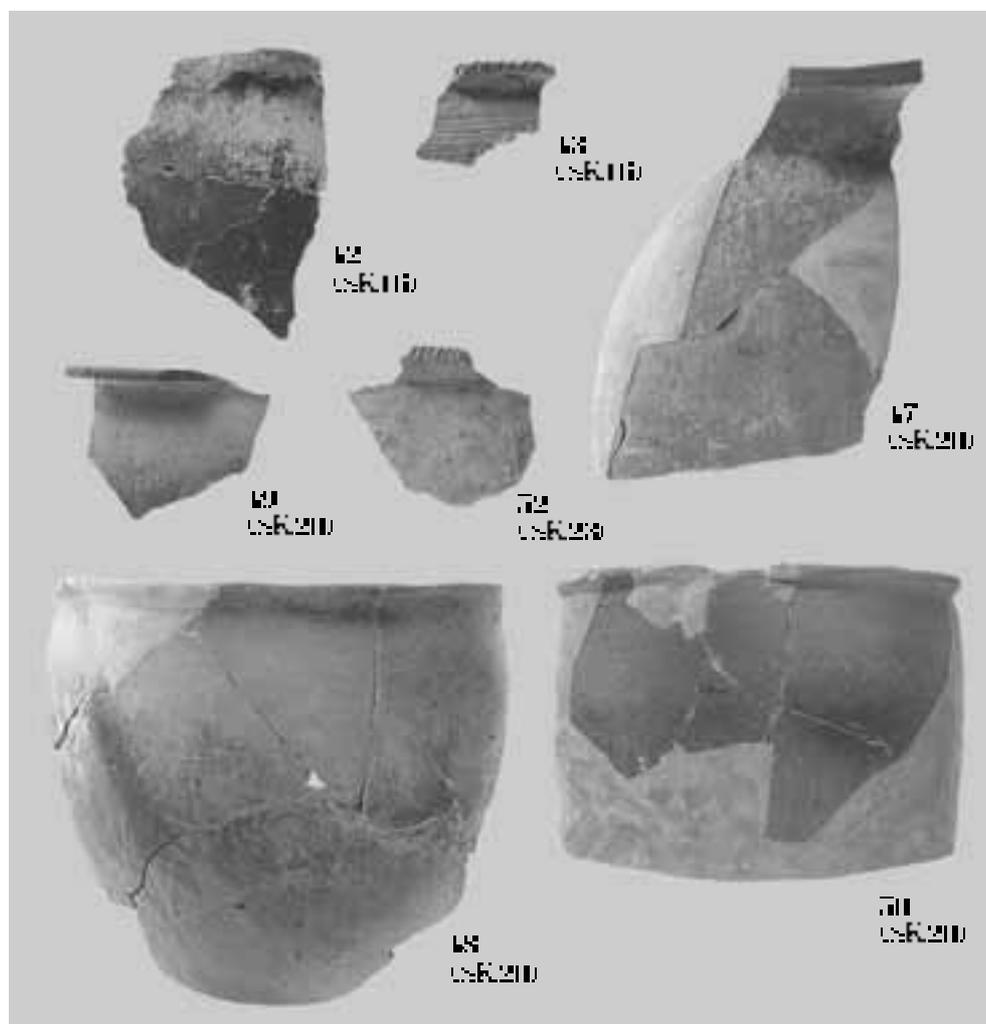
SK4 出土土器



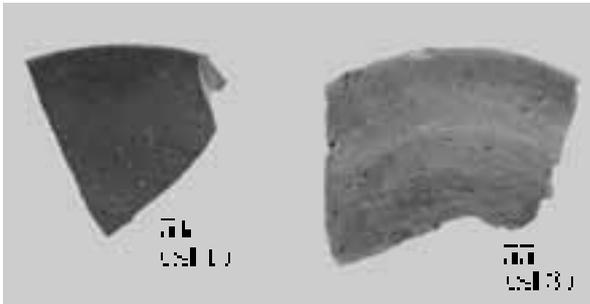
SK23附近出土土器



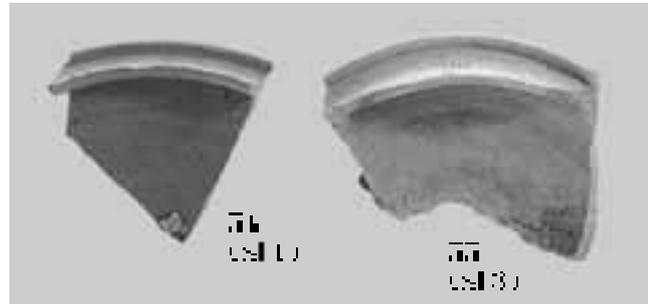
SK4 出土土器



弥生時代土坑出土土器



51 - 3 出土土器 (上面)



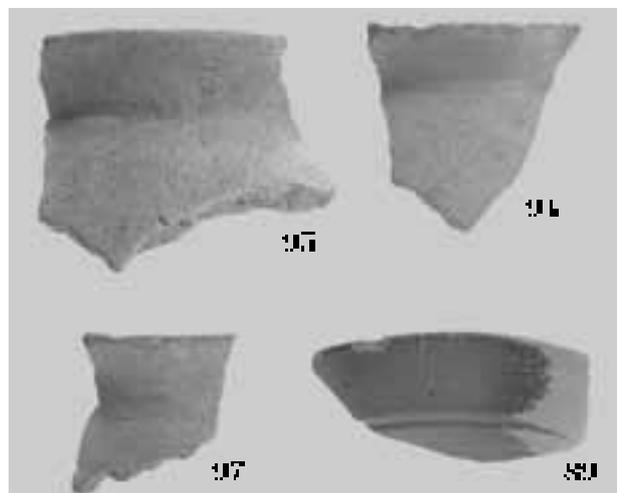
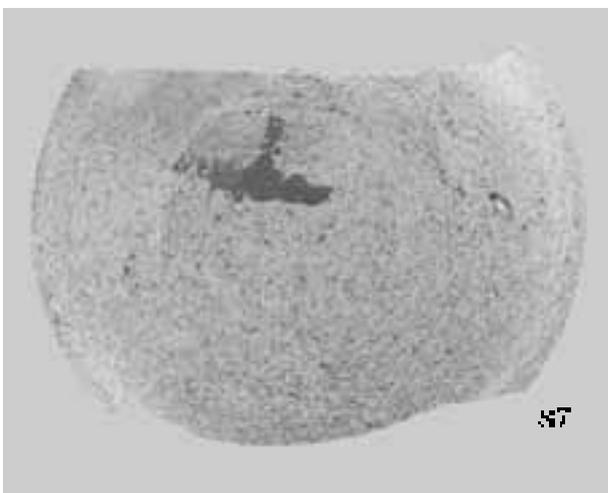
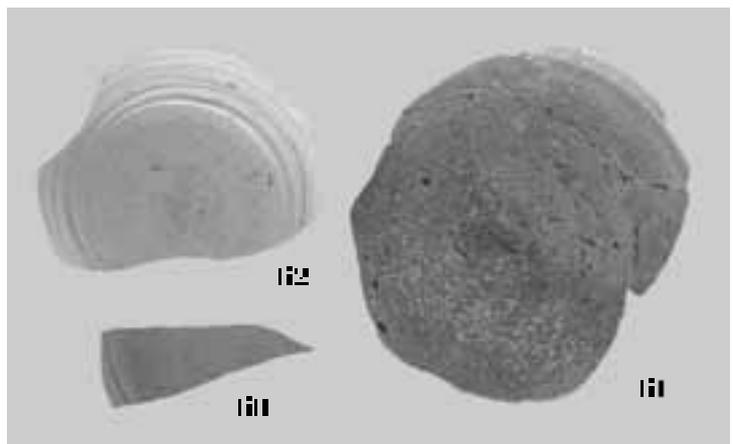
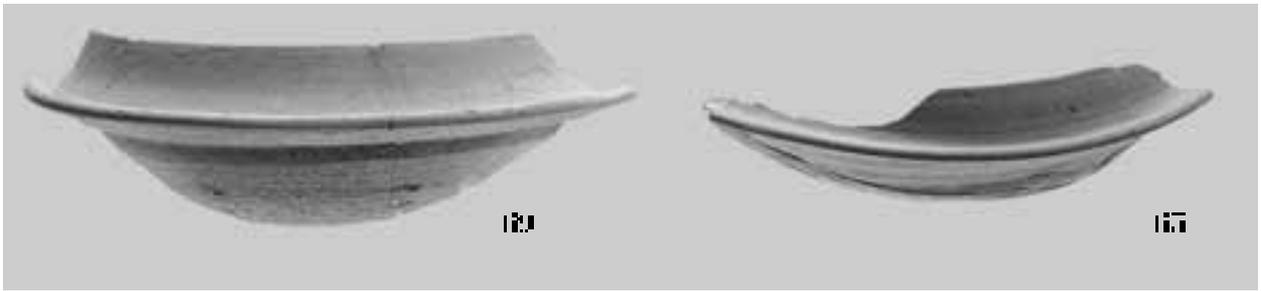
51 - 3 出土土器 (裏面)



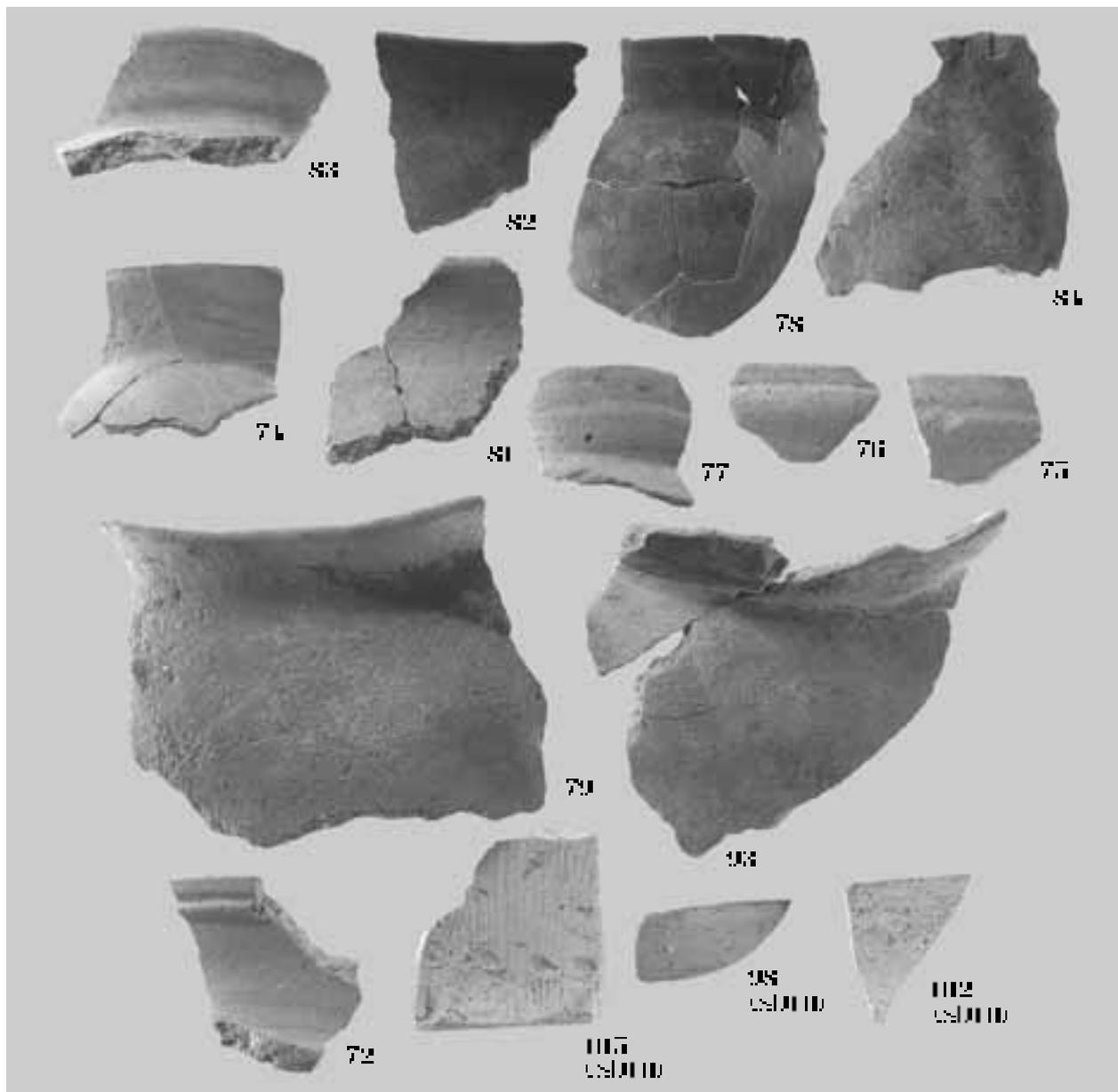
516 - 516 周辺出土土器



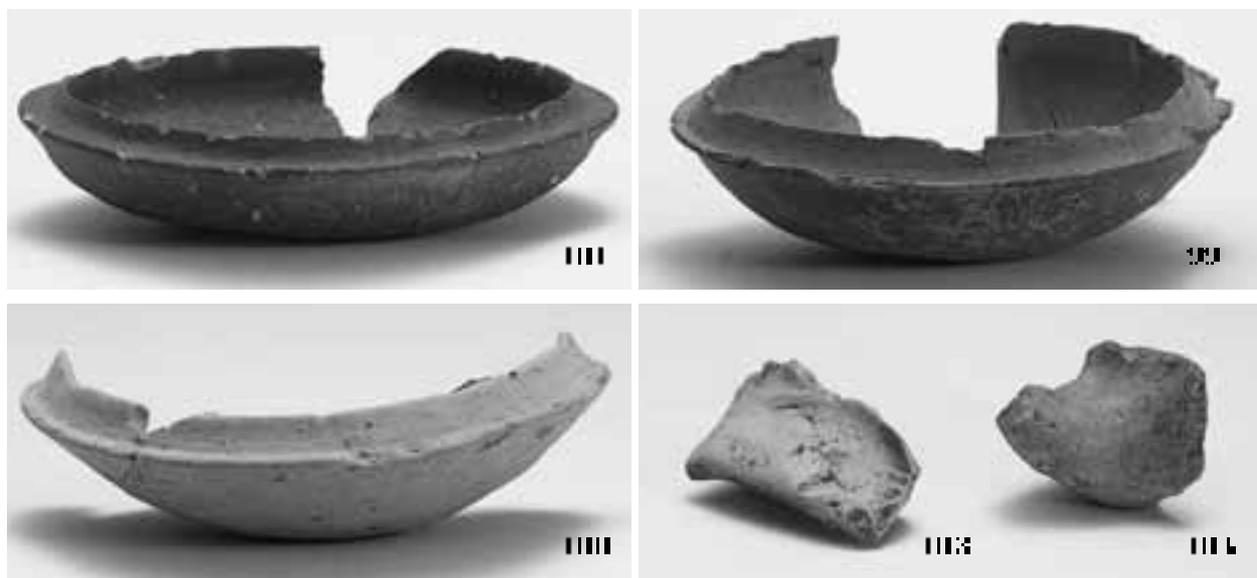
516 - 516 周辺出土土器



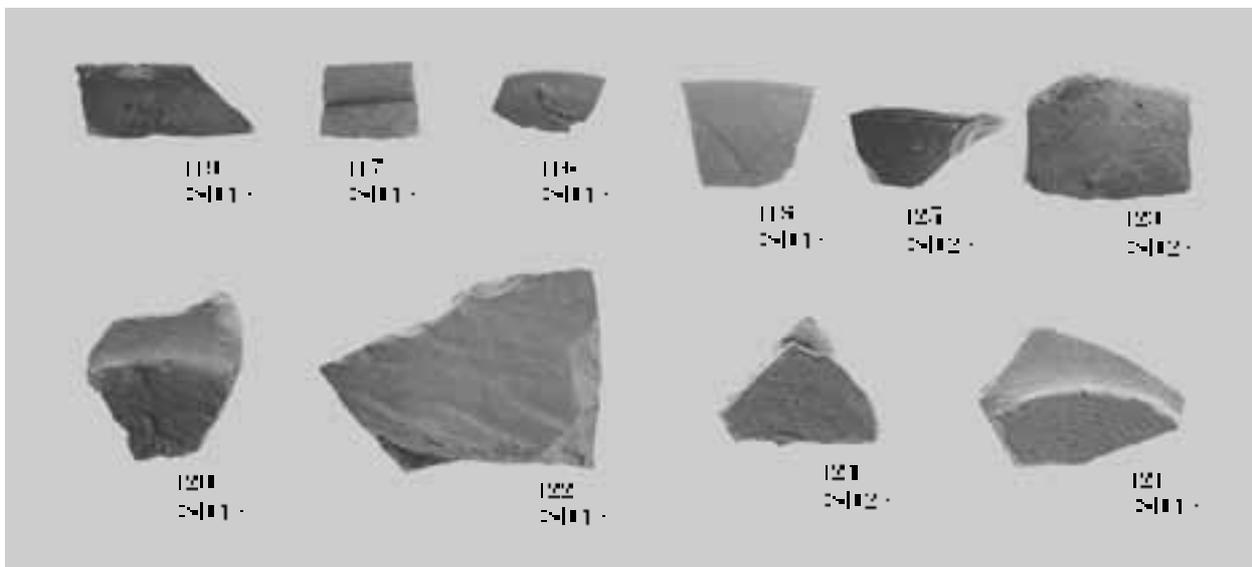
S16 - S16周边出土土器



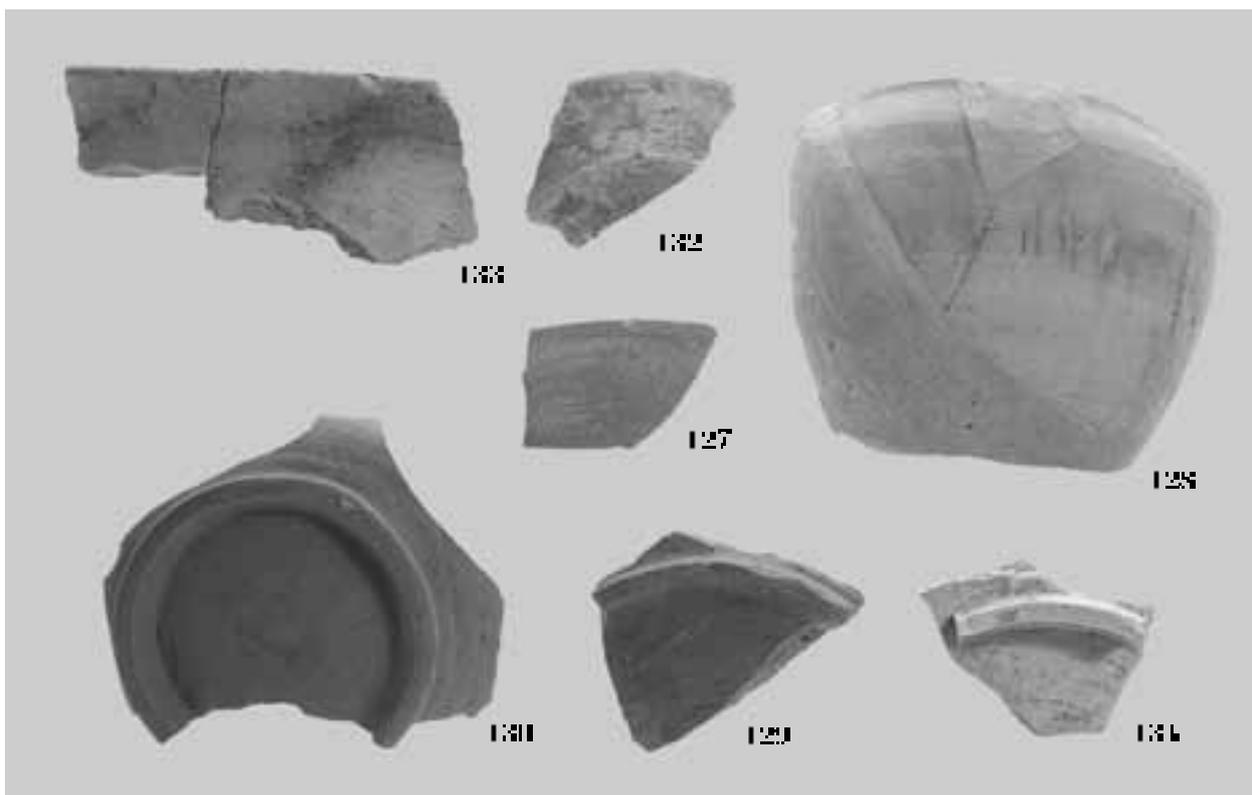
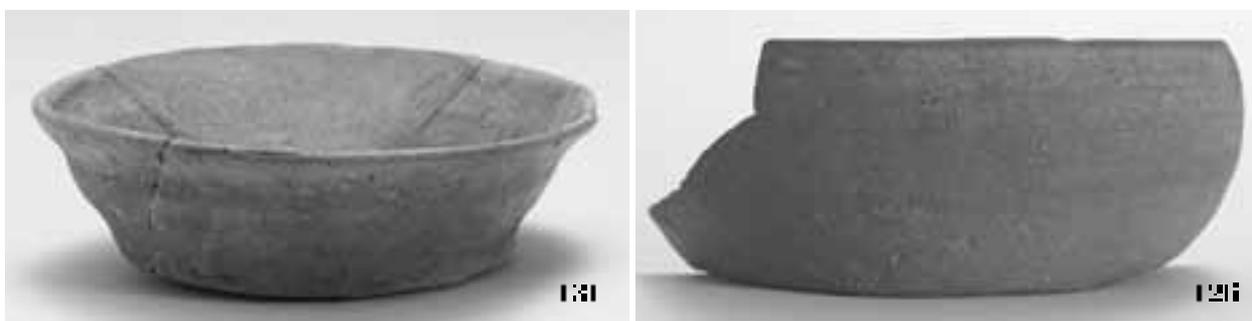
SI 6 - SD10出土土器



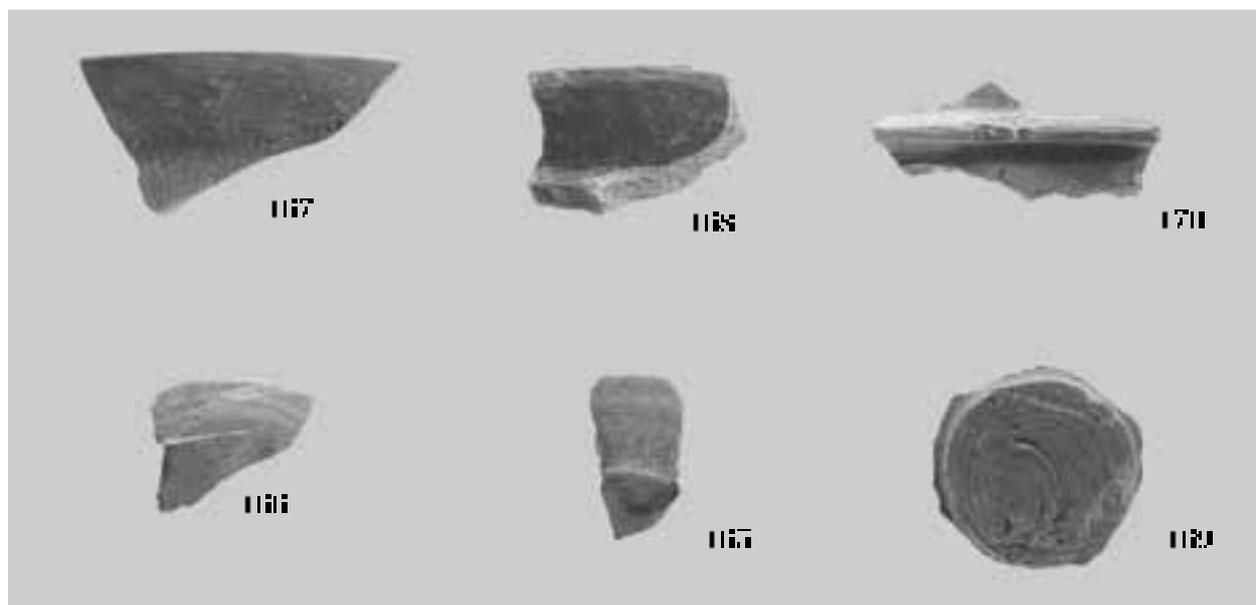
SD10出土土器



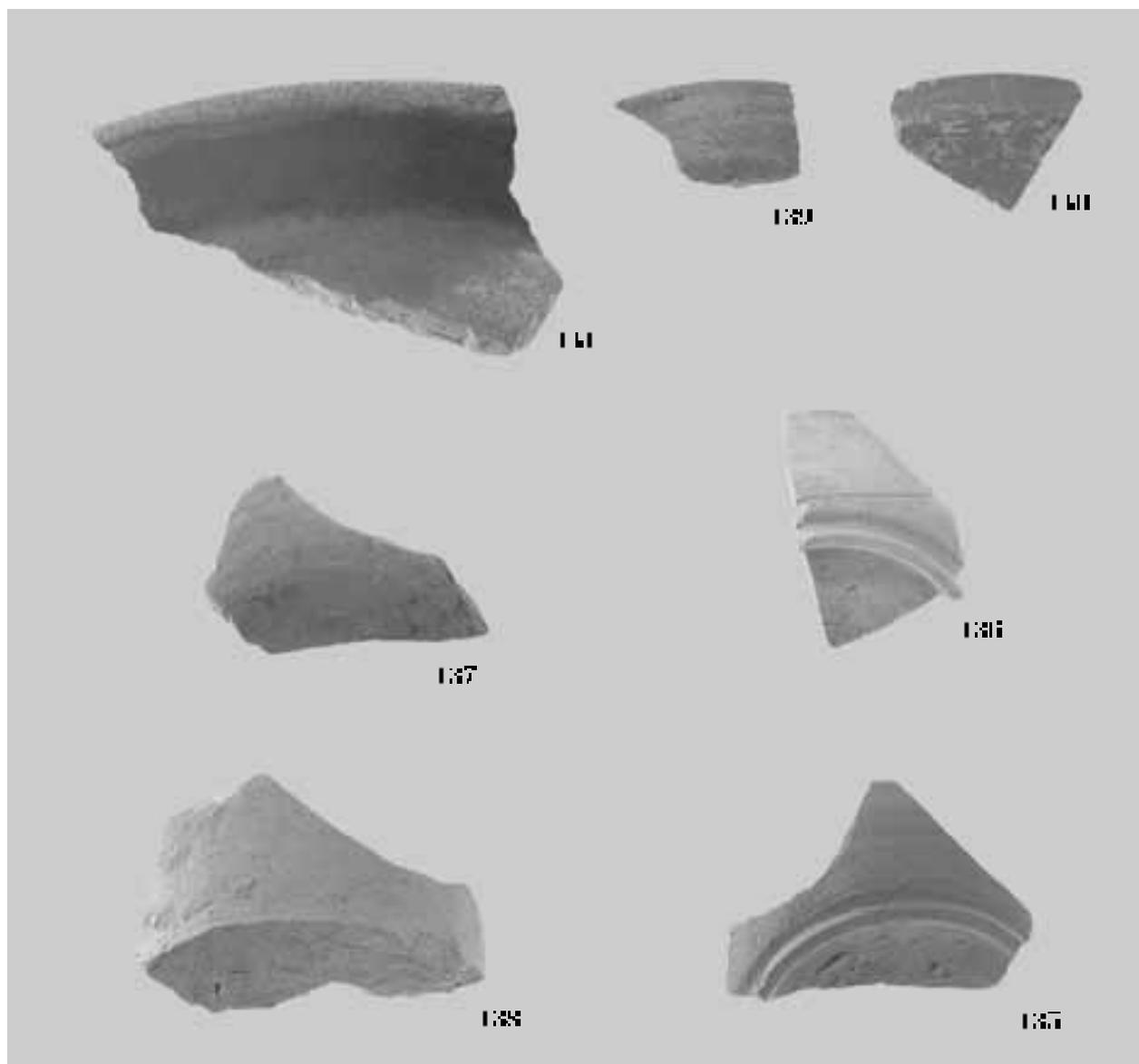
S01 - 2出土土器



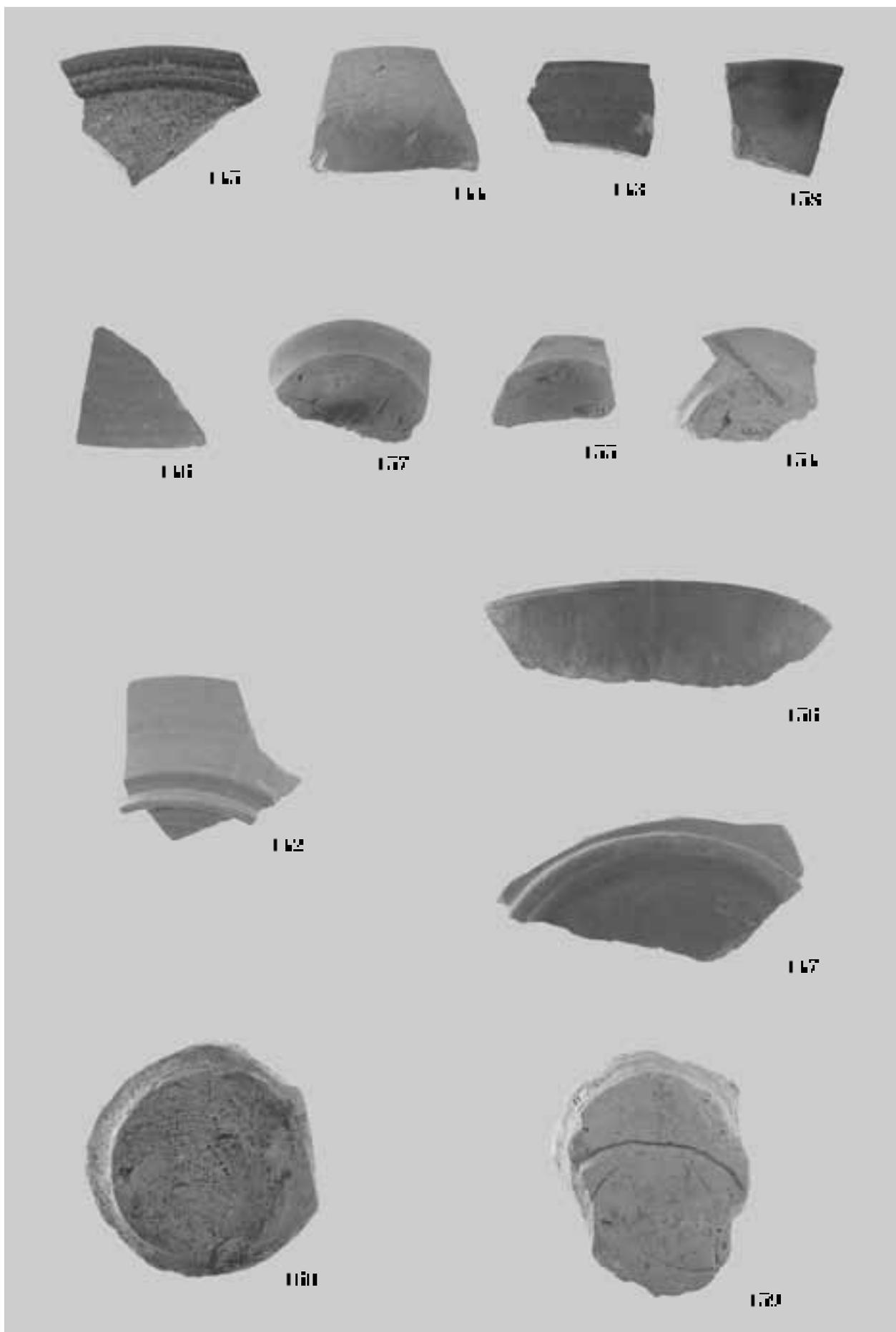
S01出土土器



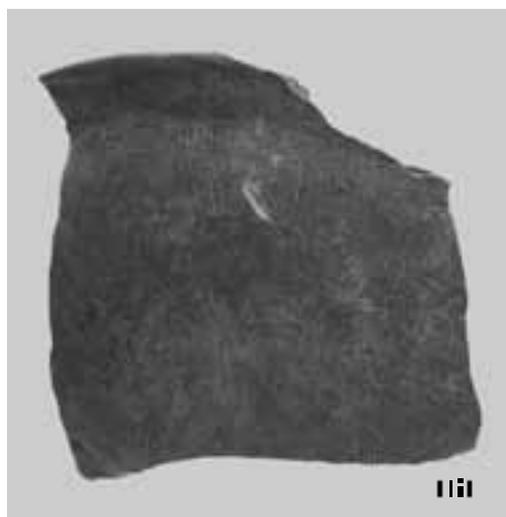
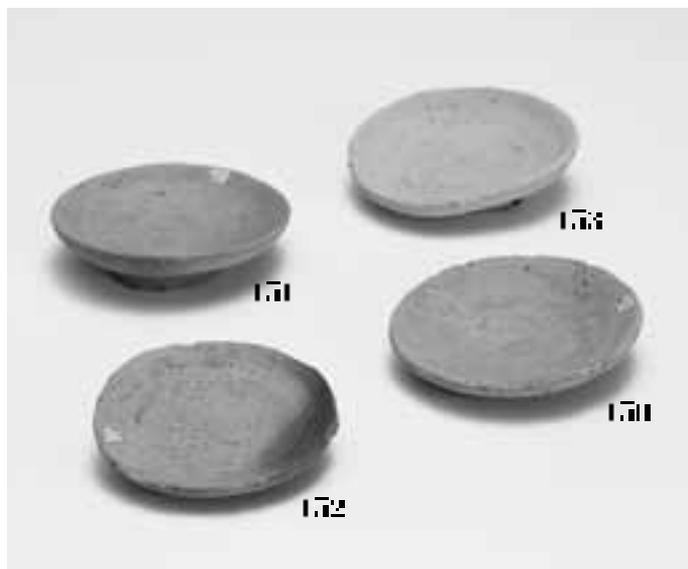
SD4 出土土器



SD6 出土土器



507 出土土器



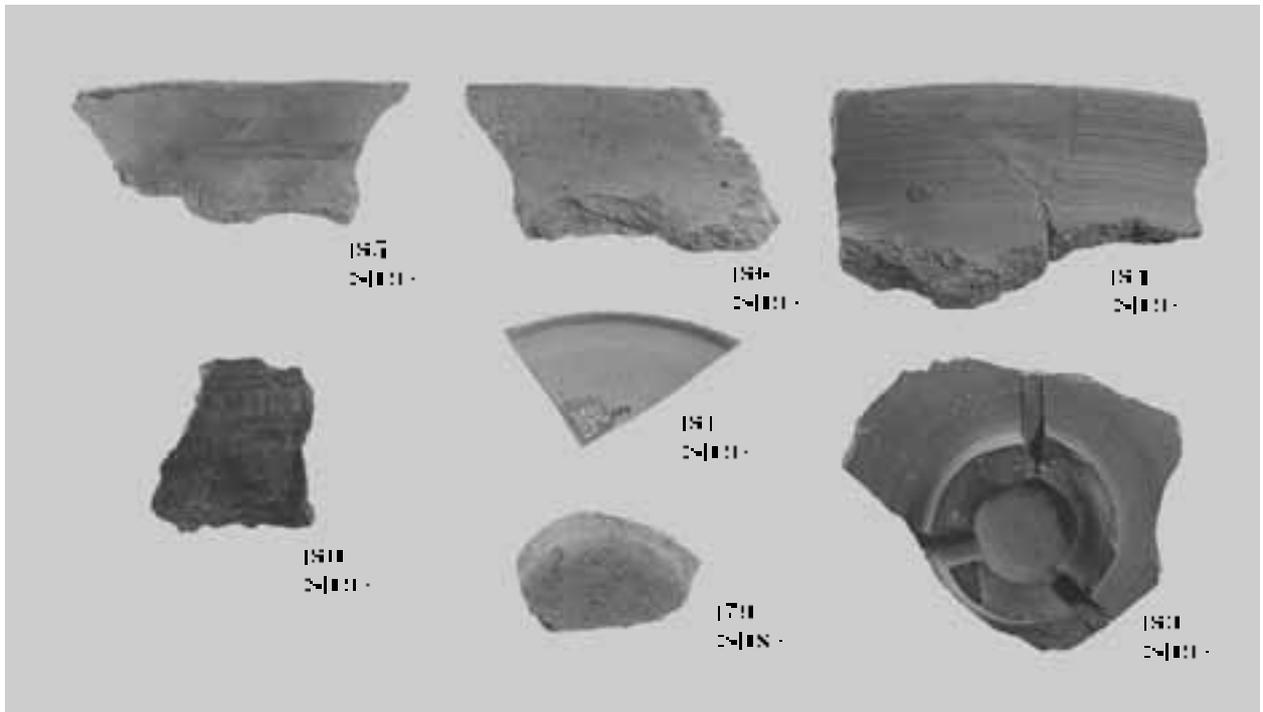
507 出土土器



509 出土土器



土種・土製品



S08 - 9出土土器



S12出土土器



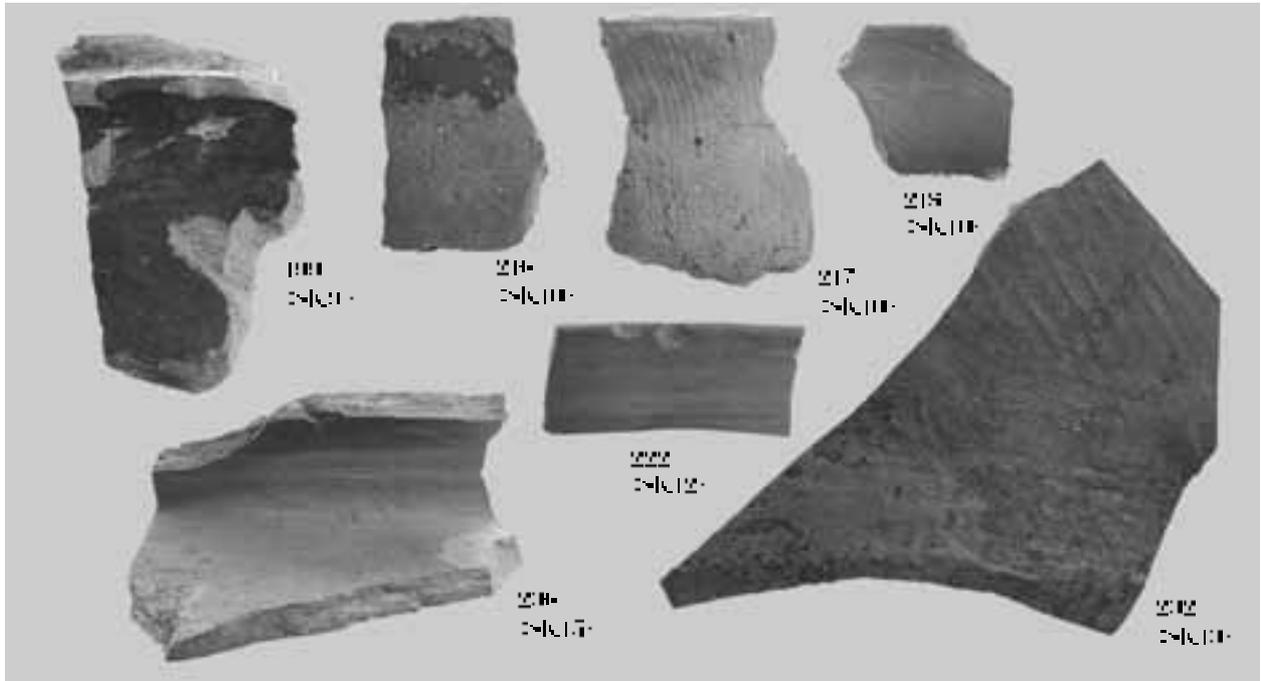
SK1 出土土器



SK10 出土土器



SK12 出土土器



土坑出土土器



SK10出土土器



SK11 出土土器



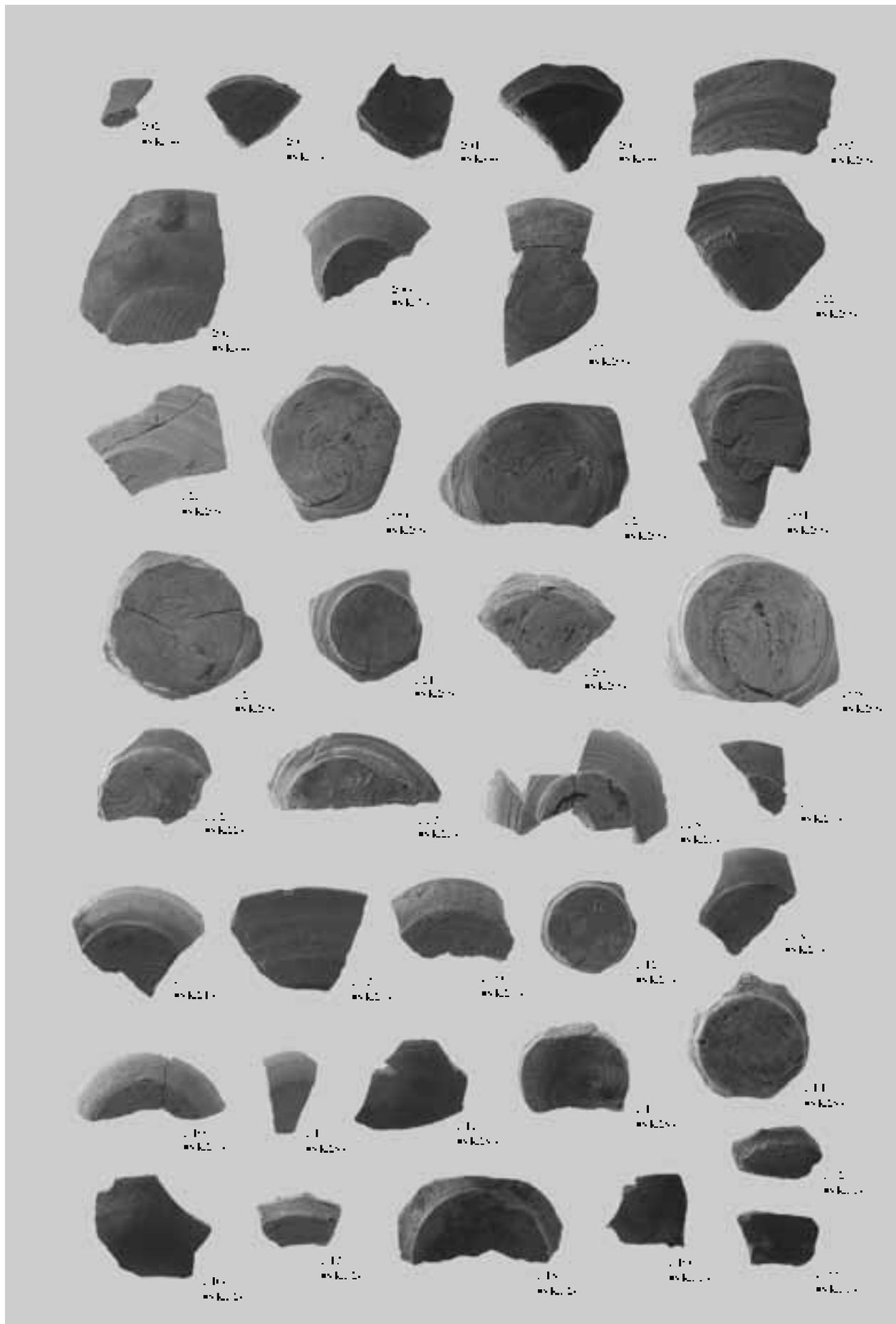
ピット出土土器



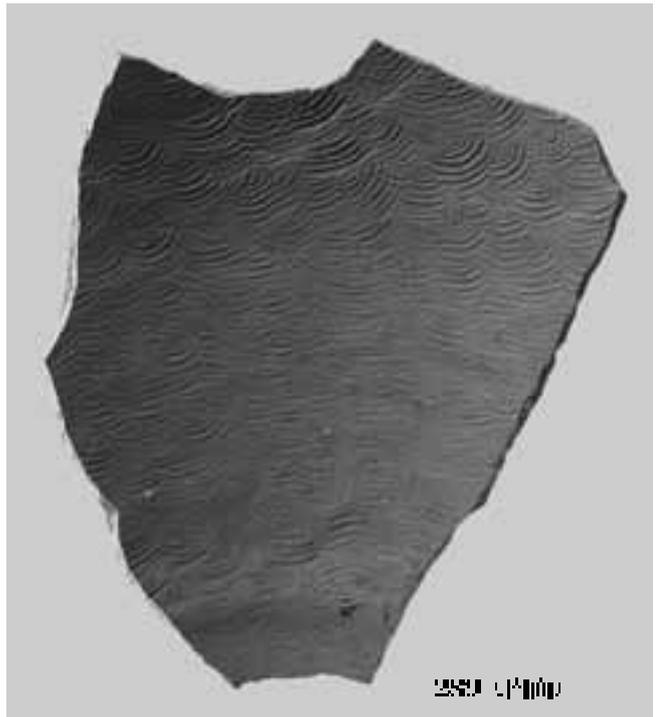
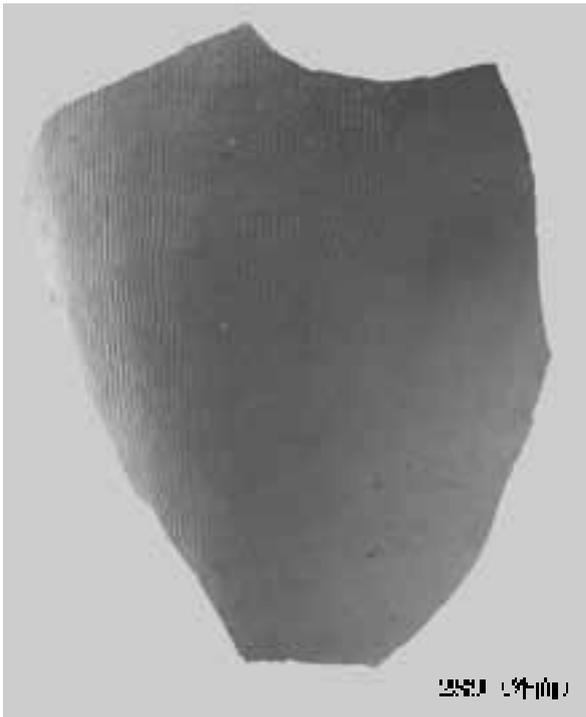
遺構外出土遺物



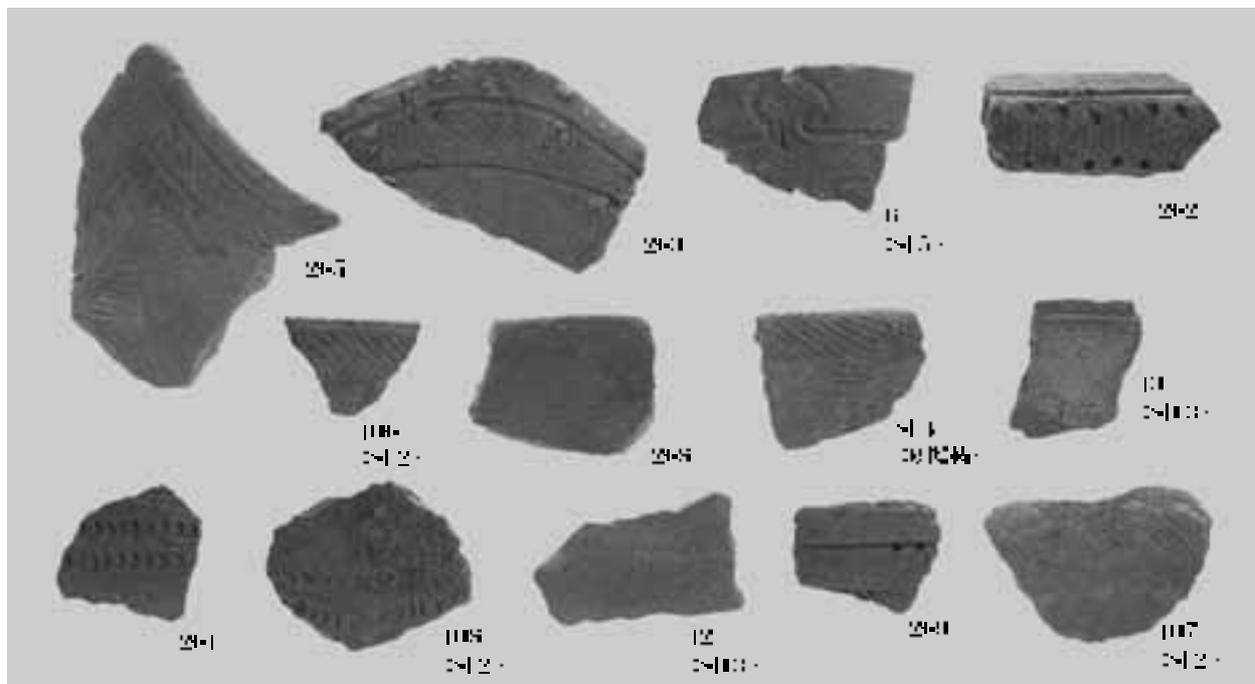
2576



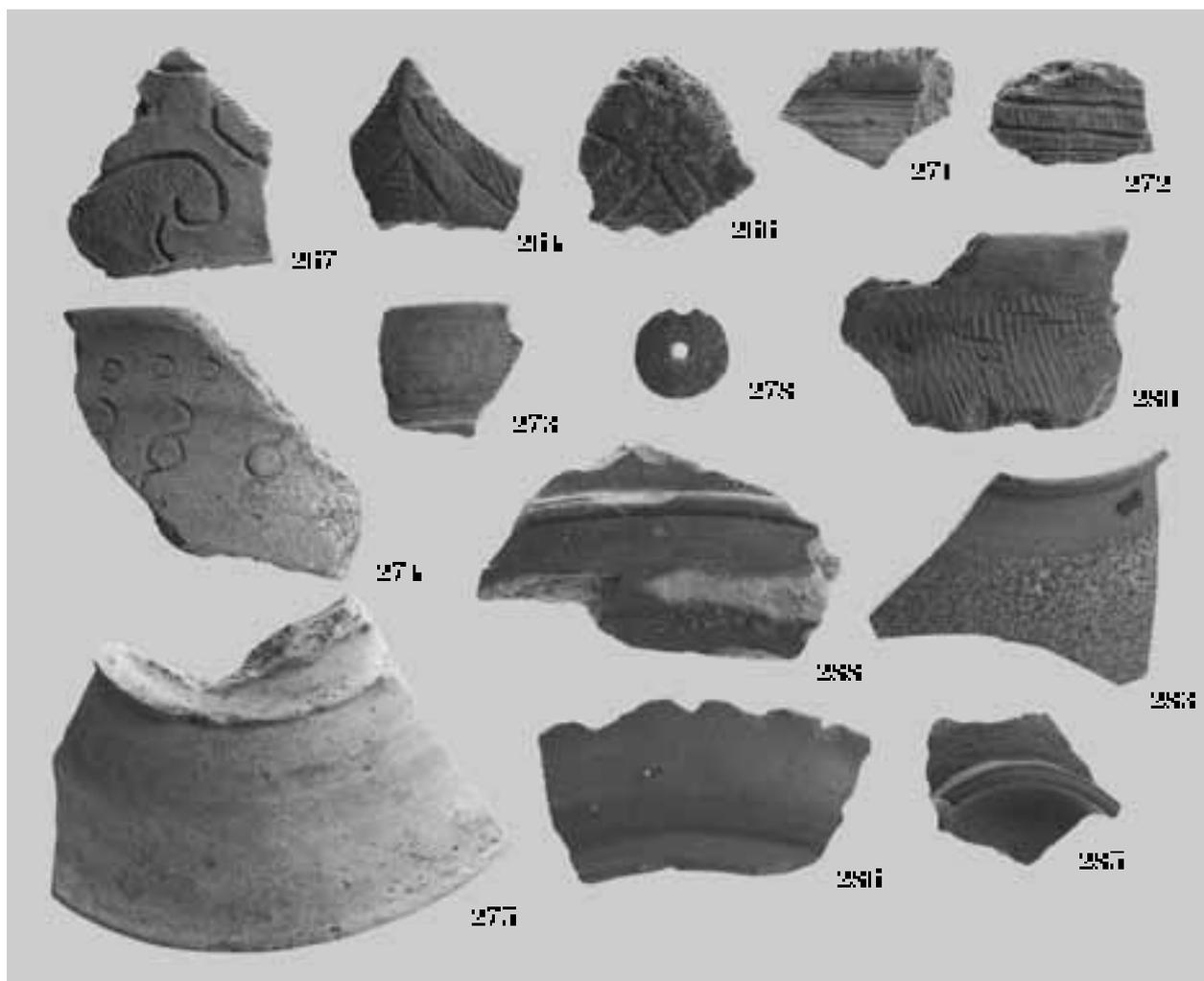
土坑出土土器



遼南外出土土器



縄文土器 遺構名のないものは遺構外出土



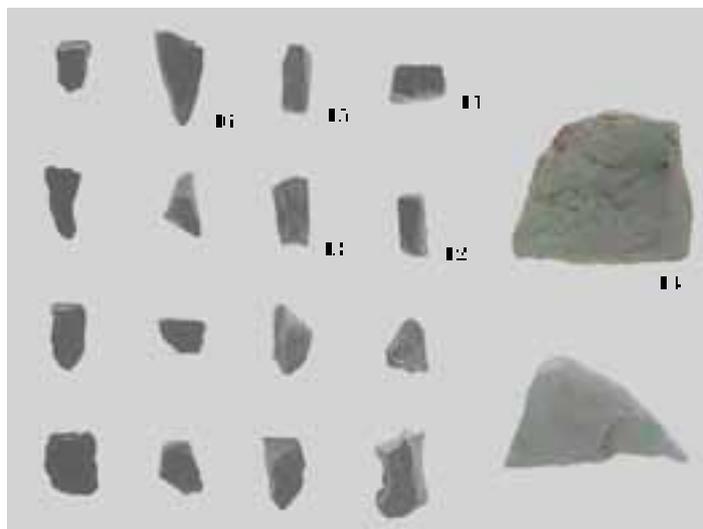
遺構外出土遺物



遺構外出土 土器



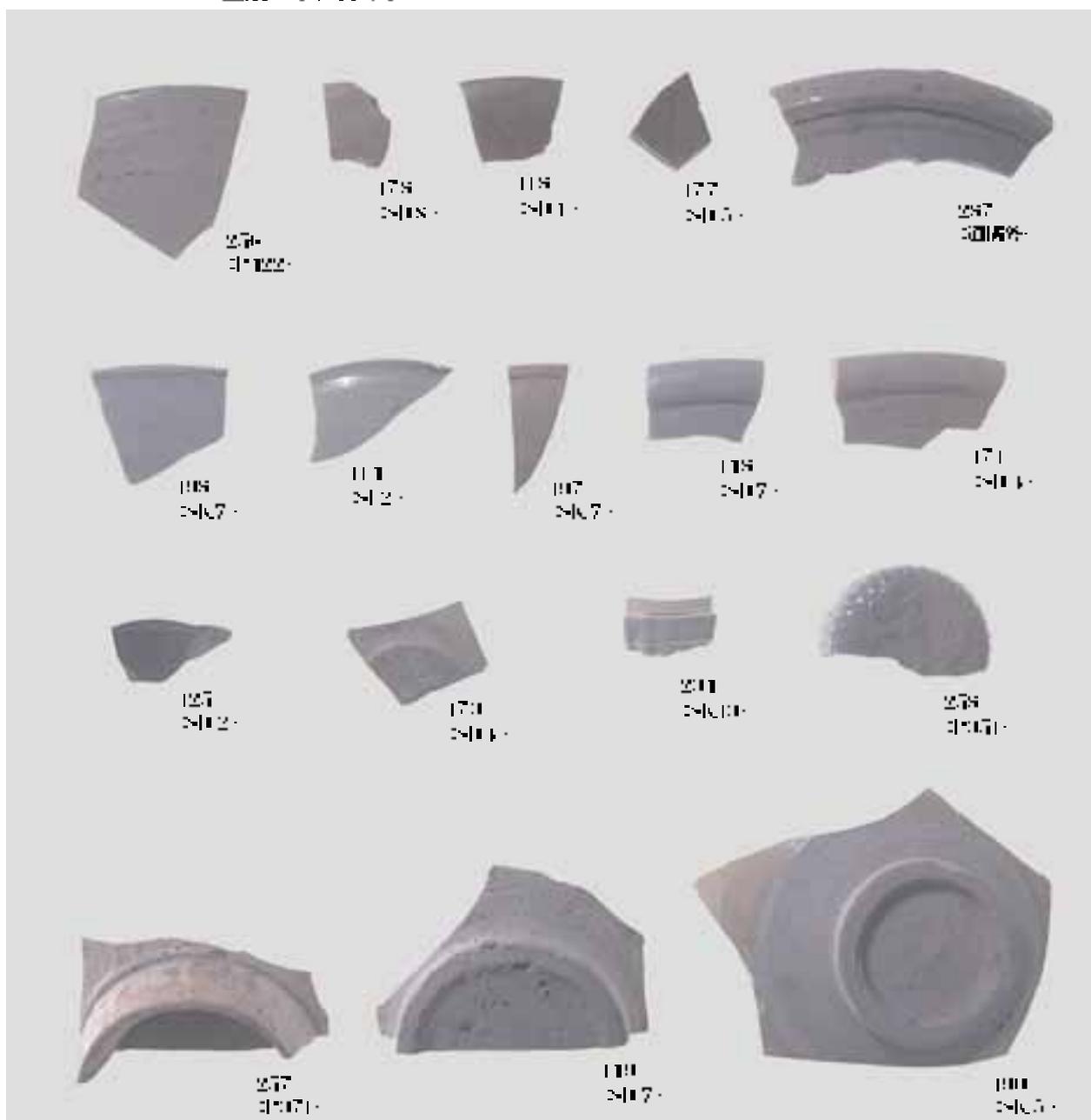
遺構外出土 不明土製品



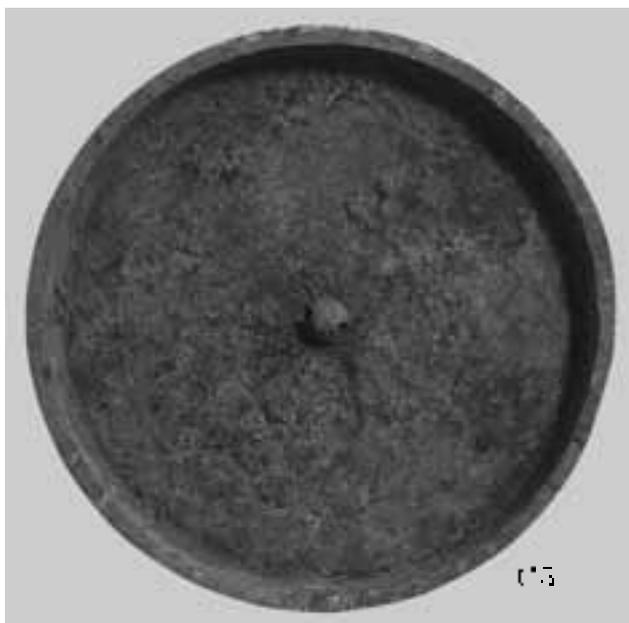
玉類・サヌカイト



朱塗・顔料付遺物



陶磁器



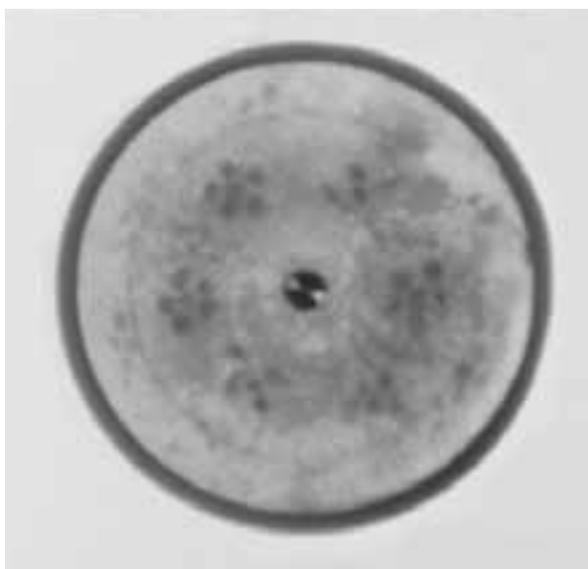
(1)

表向

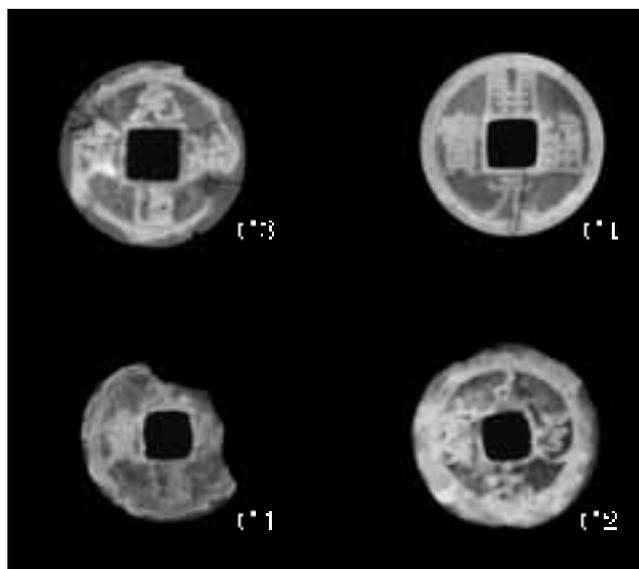
SK2出土 和蘭



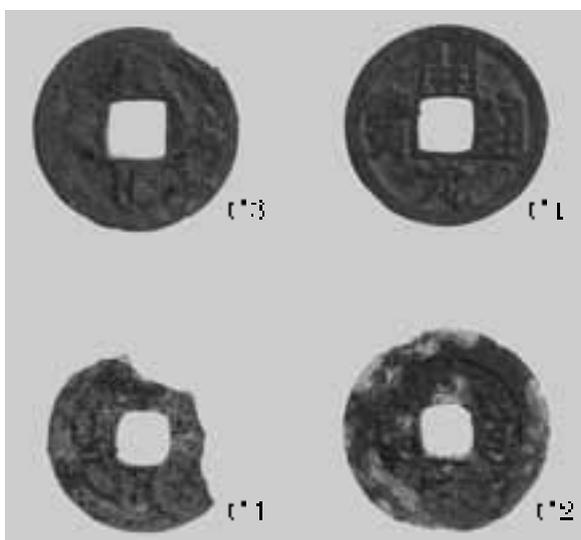
(2)



SK2出土 和蘭X様写真

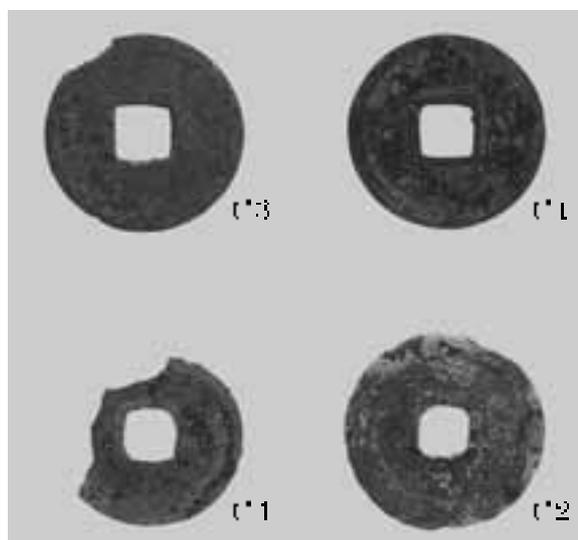


SB1出土 銭貨X様写真

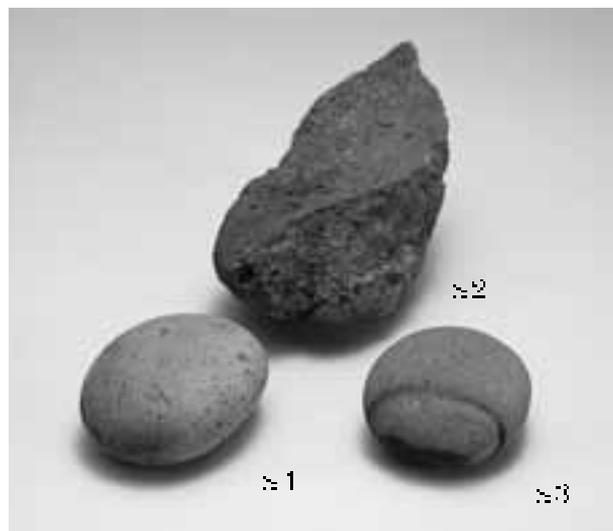


表向

SB1出土 銭貨



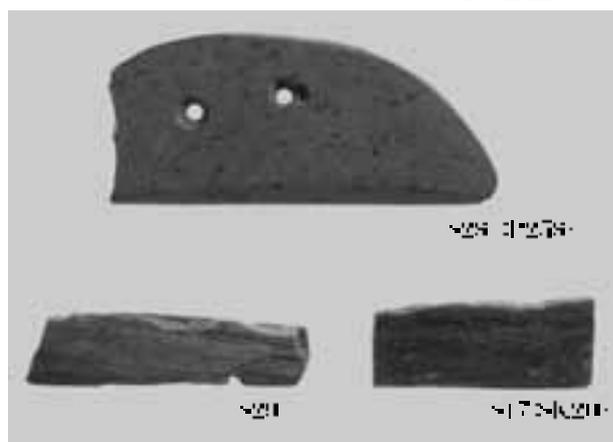
表向



S1 5出土 石皿・磨石

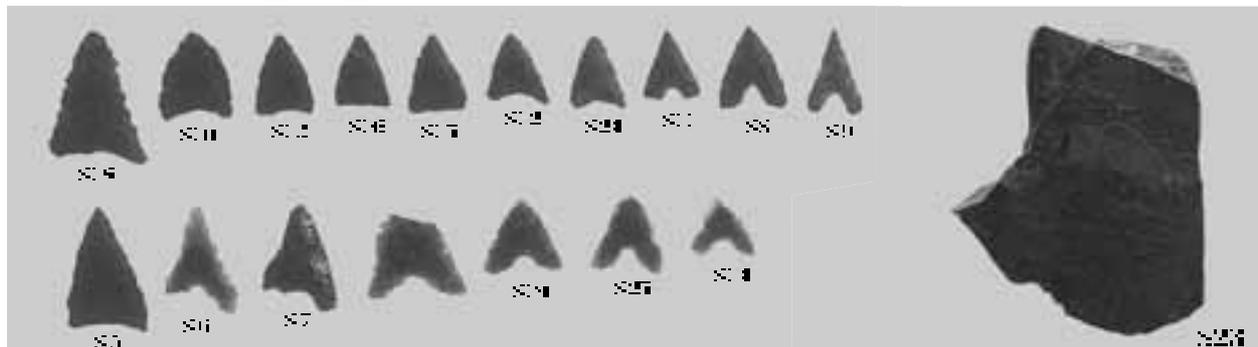


S1 2出土 朱付結核 (S22)

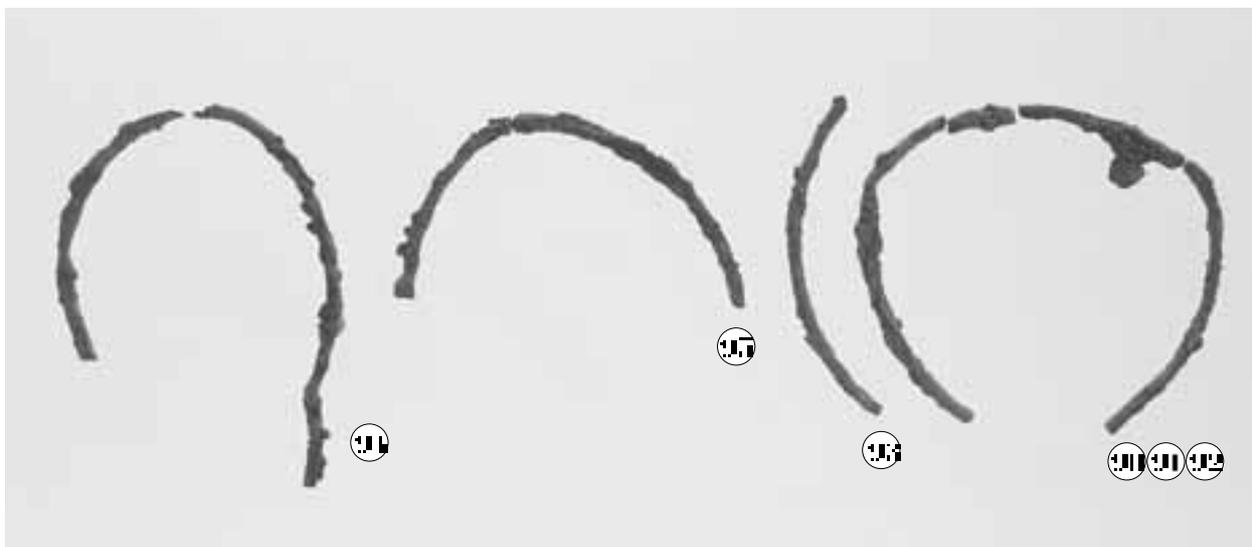


石磨丁・石錐

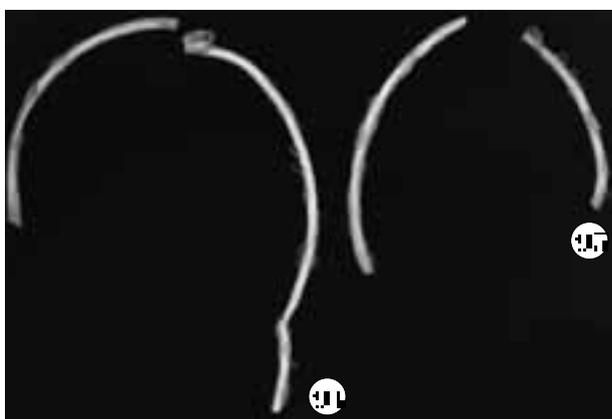
砥石・石斧



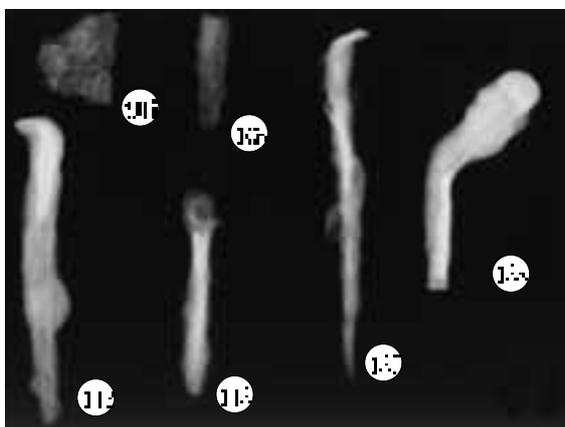
S34 (S44) (S45) (S46) (S47) (S48) (S49) (S50) (S51) (S52) (S53) (S54) (S55) (S56) (S57) (S58) (S59) (S60) (S61) (S62) (S63) (S64) (S65) (S66) (S67) (S68) (S69) (S70) (S71) (S72) (S73) (S74) (S75) (S76) (S77) (S78) (S79) (S80) (S81) (S82) (S83) (S84) (S85) (S86) (S87) (S88) (S89) (S90) (S91) (S92) (S93) (S94) (S95) (S96) (S97) (S98) (S99) (S100) 石鏃・剝片石器



SK2出土 輪状鉄製品



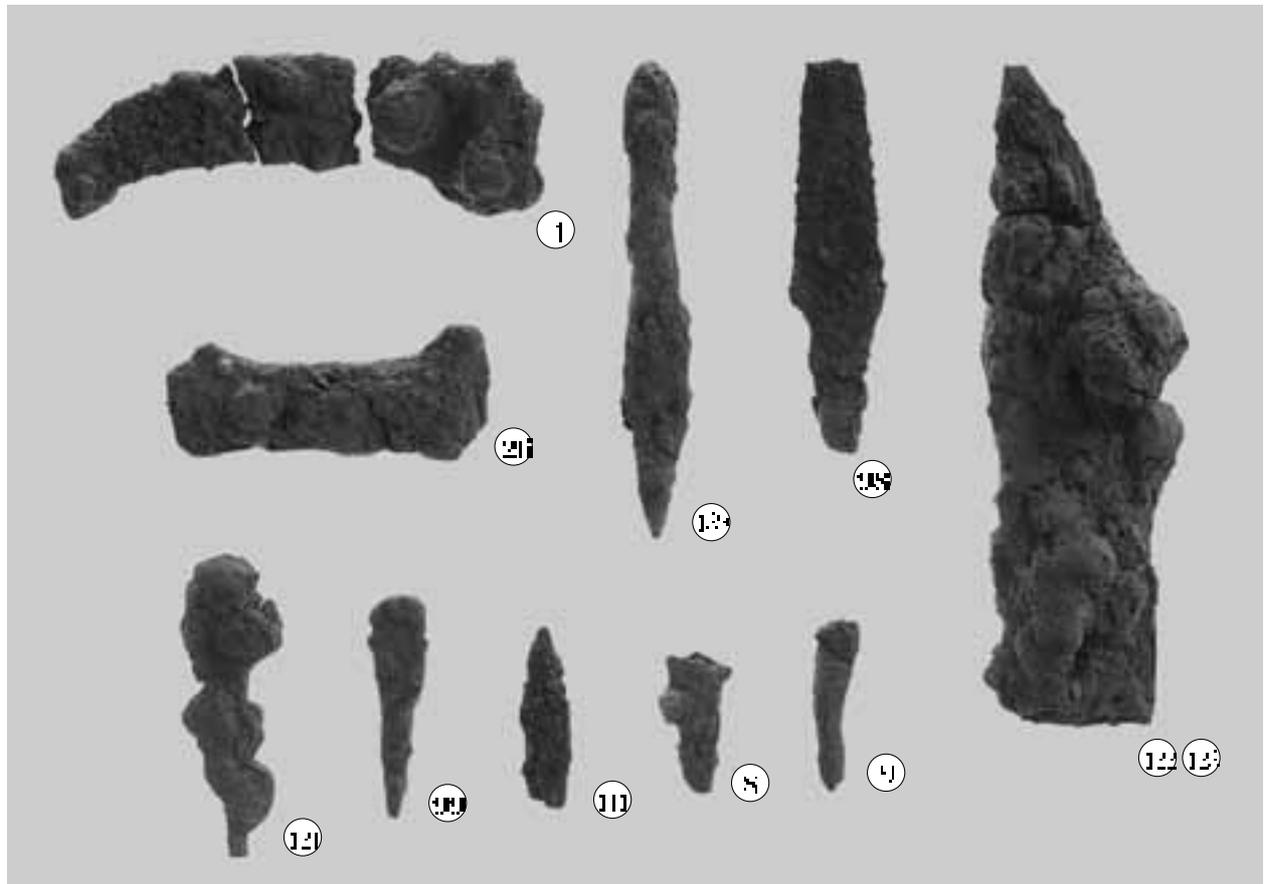
SK2出土 輪状鉄製品 X線写真



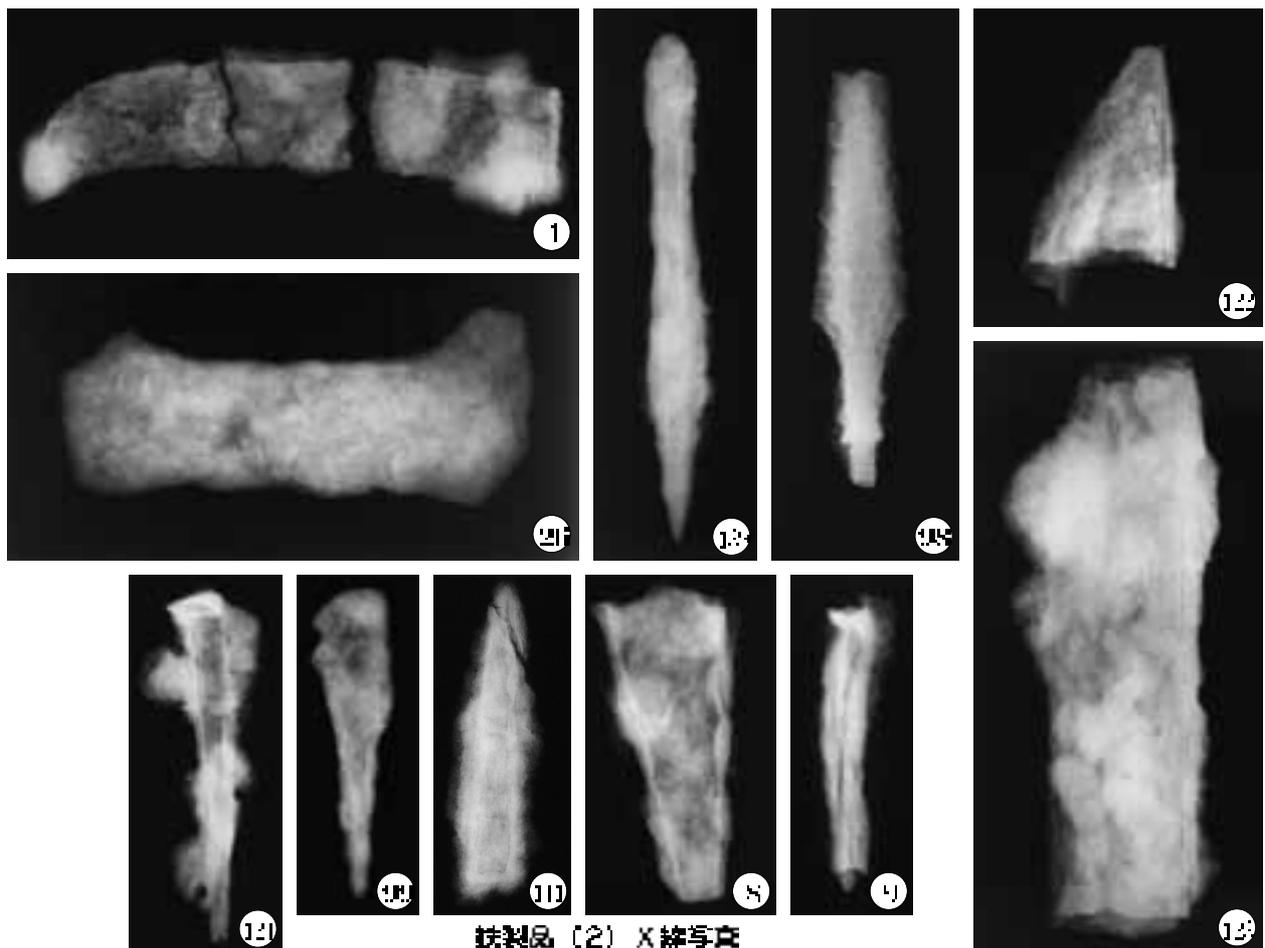
鉄製品(1) X線写真



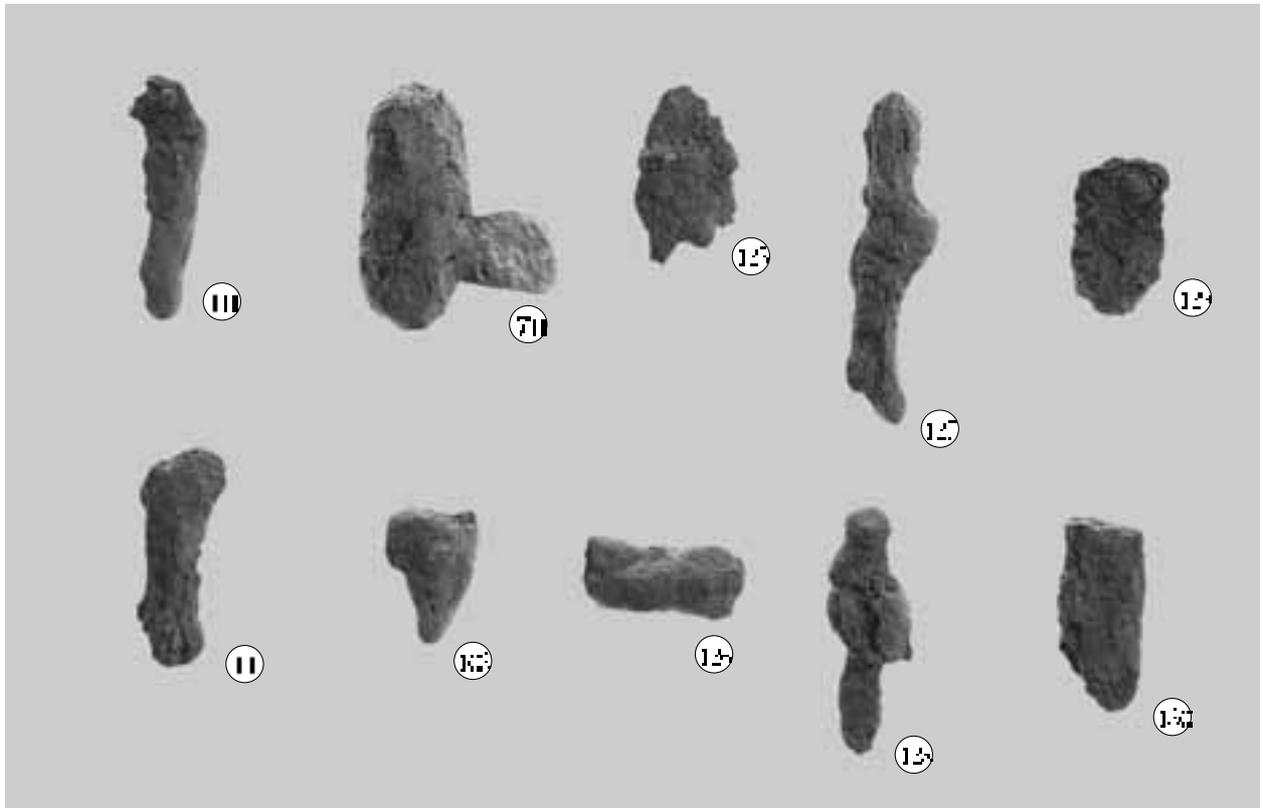
鉄製品(1)



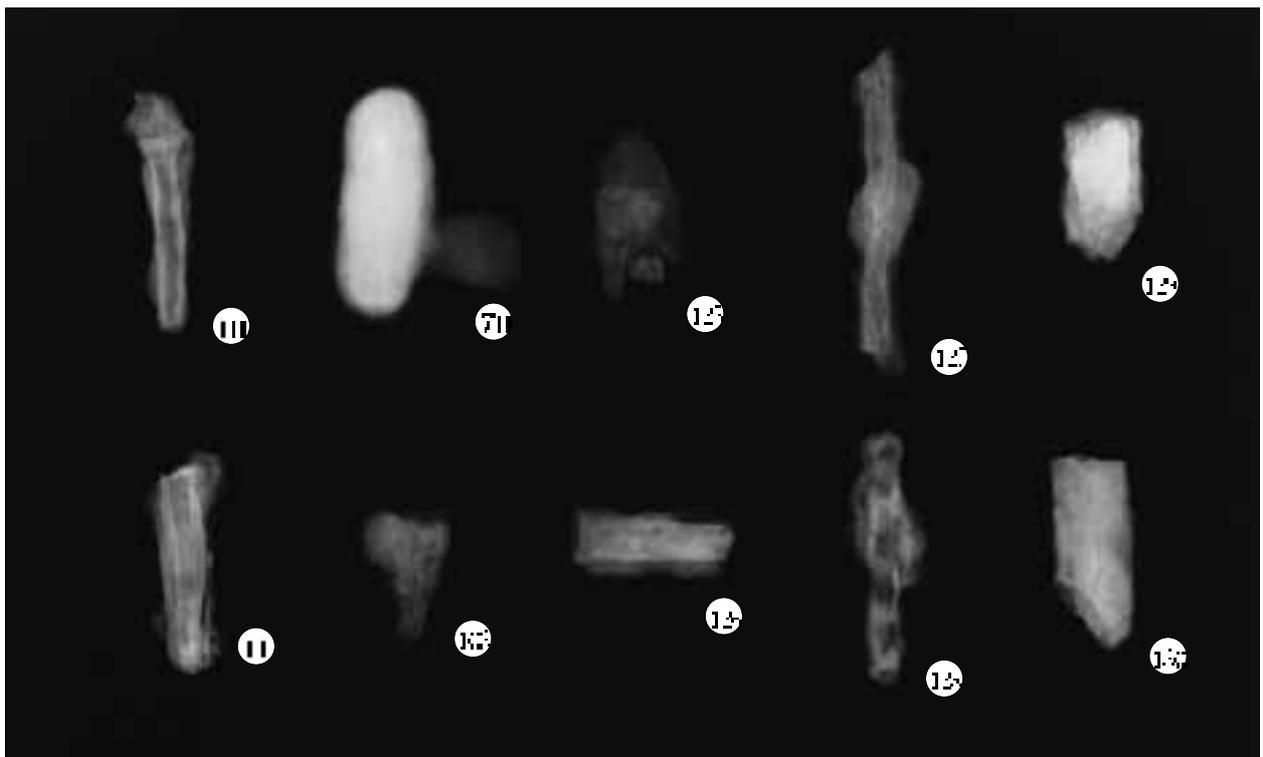
鉄製品 (2)



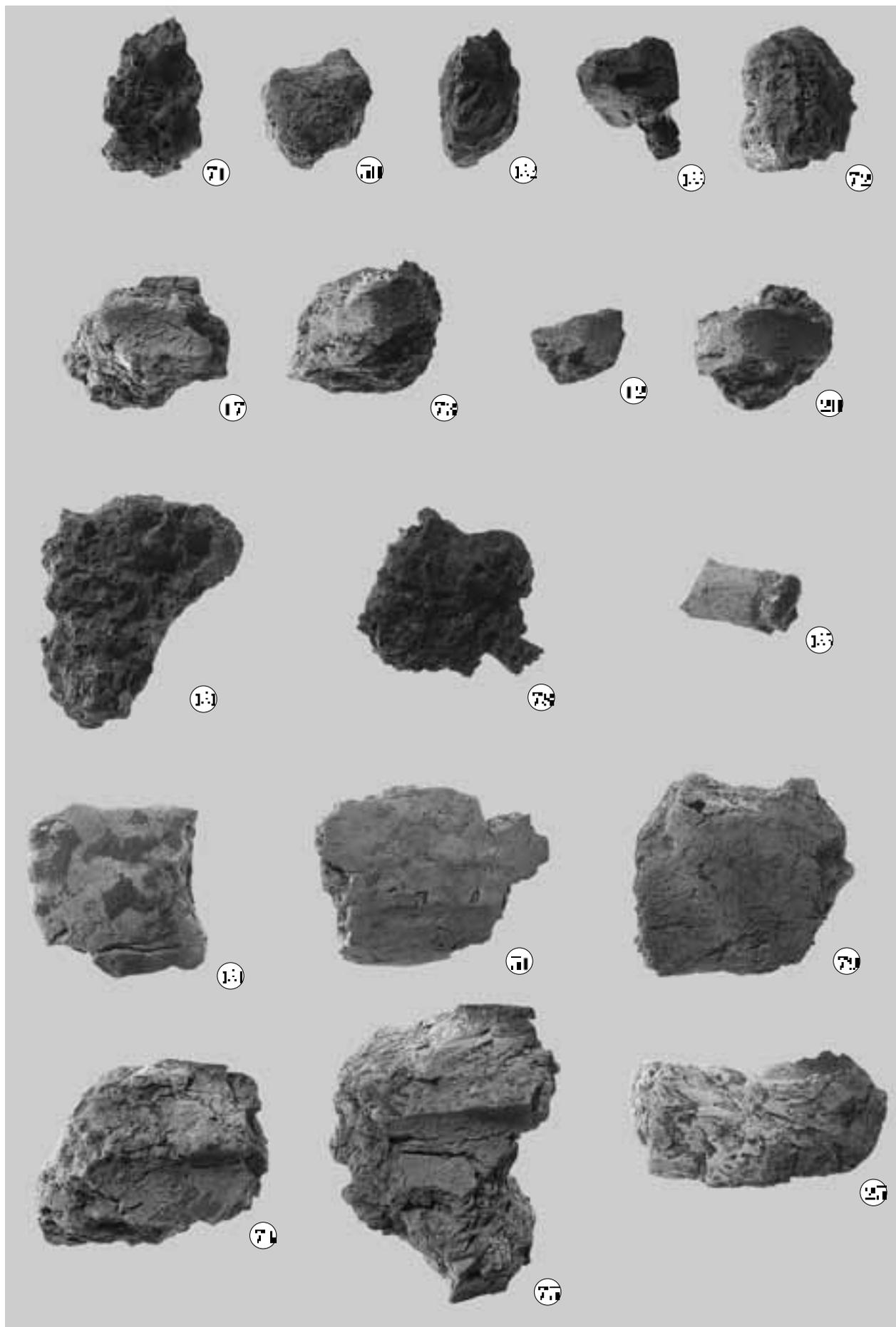
鉄製品 (2) X線写真



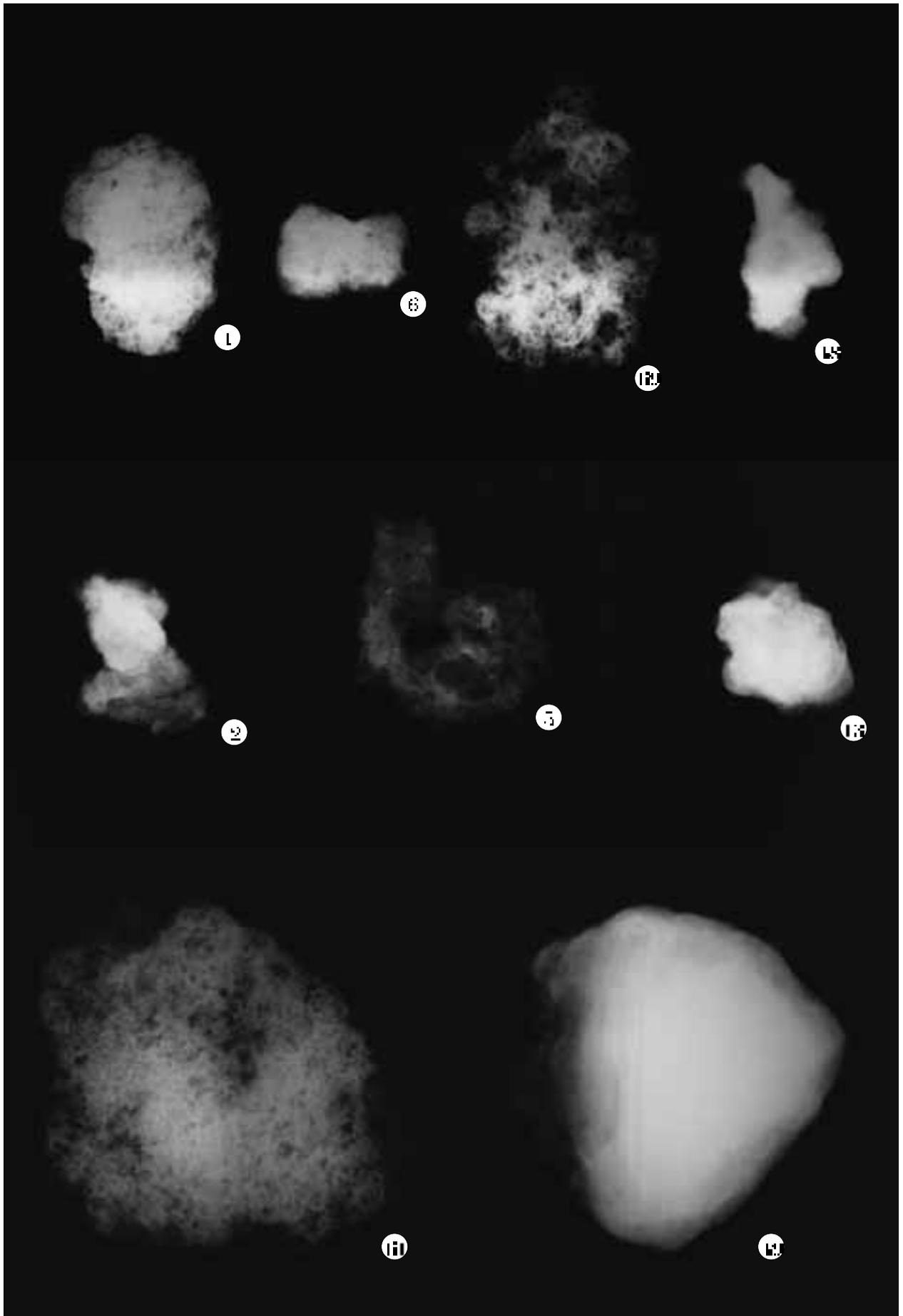
鉄製品 (3)



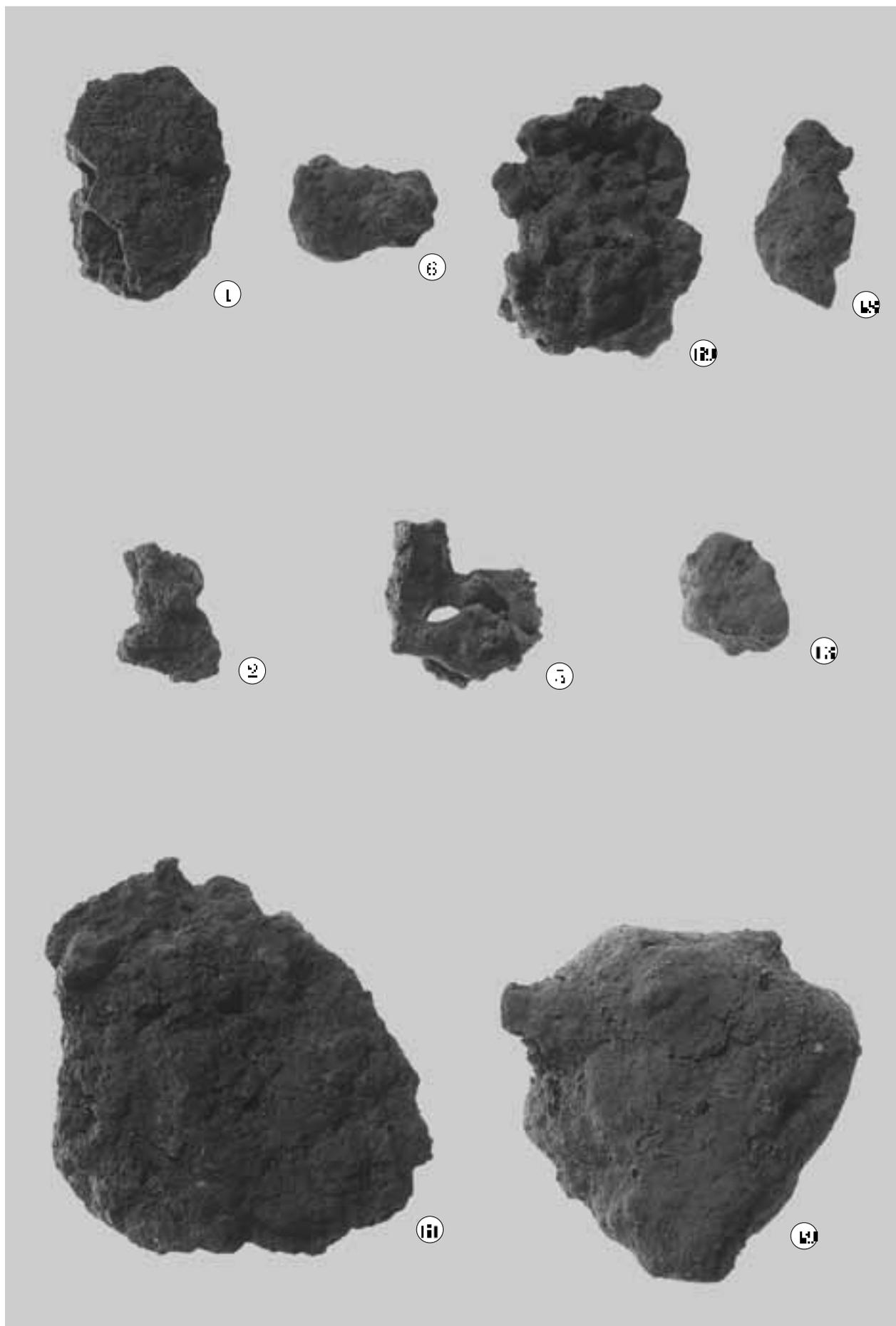
鉄製品 (3) X線写真



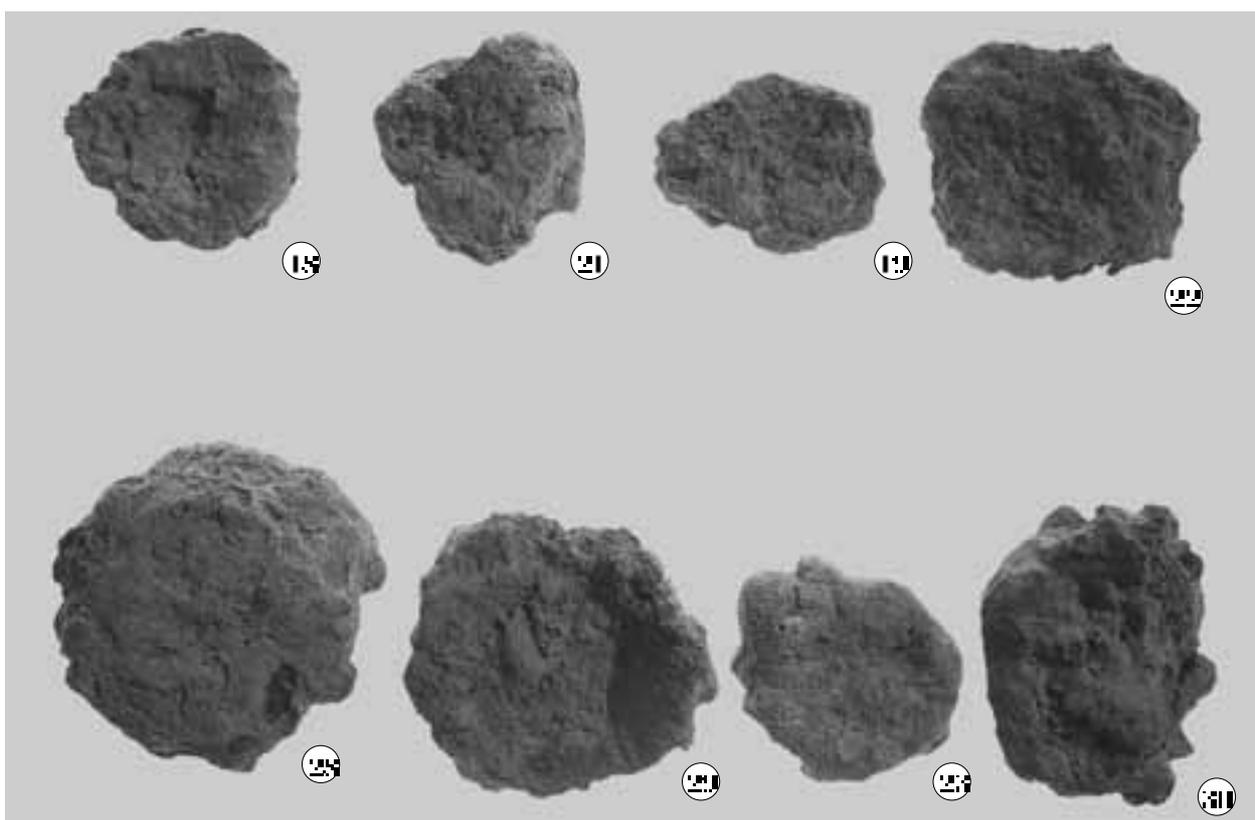
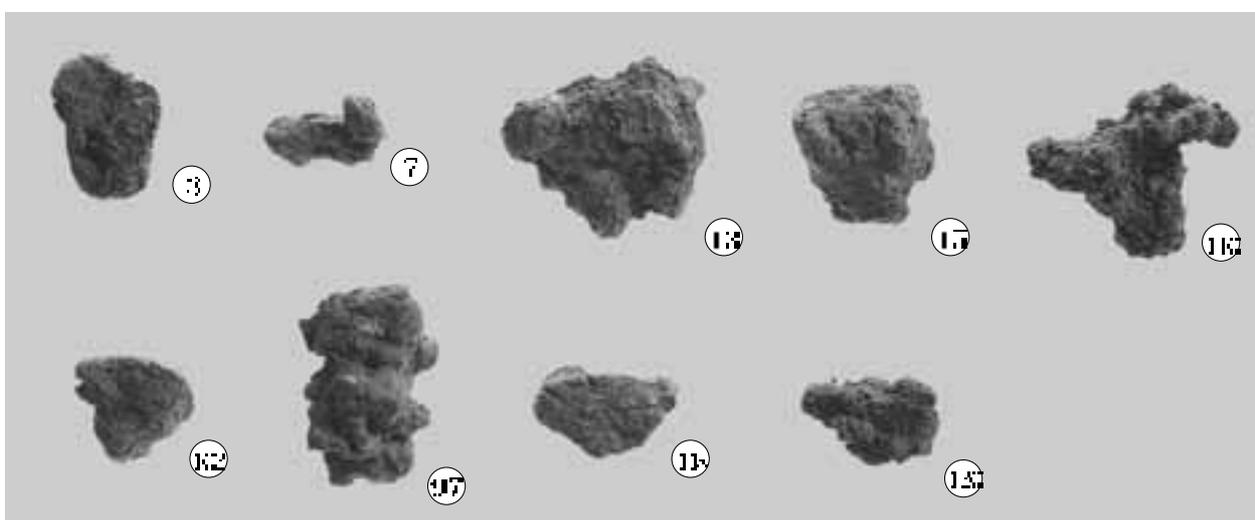
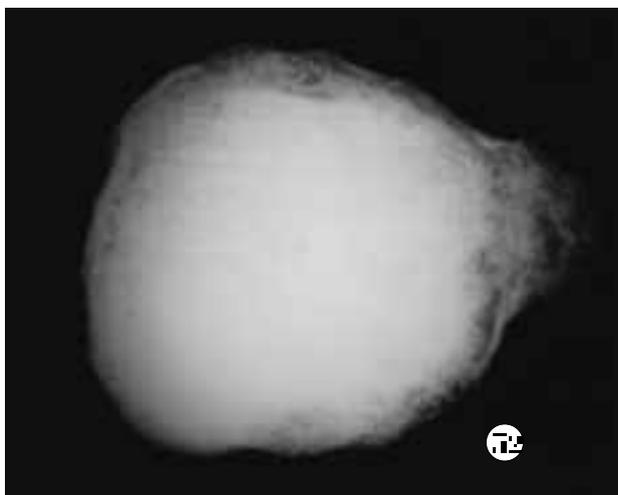
炉壁·羽口



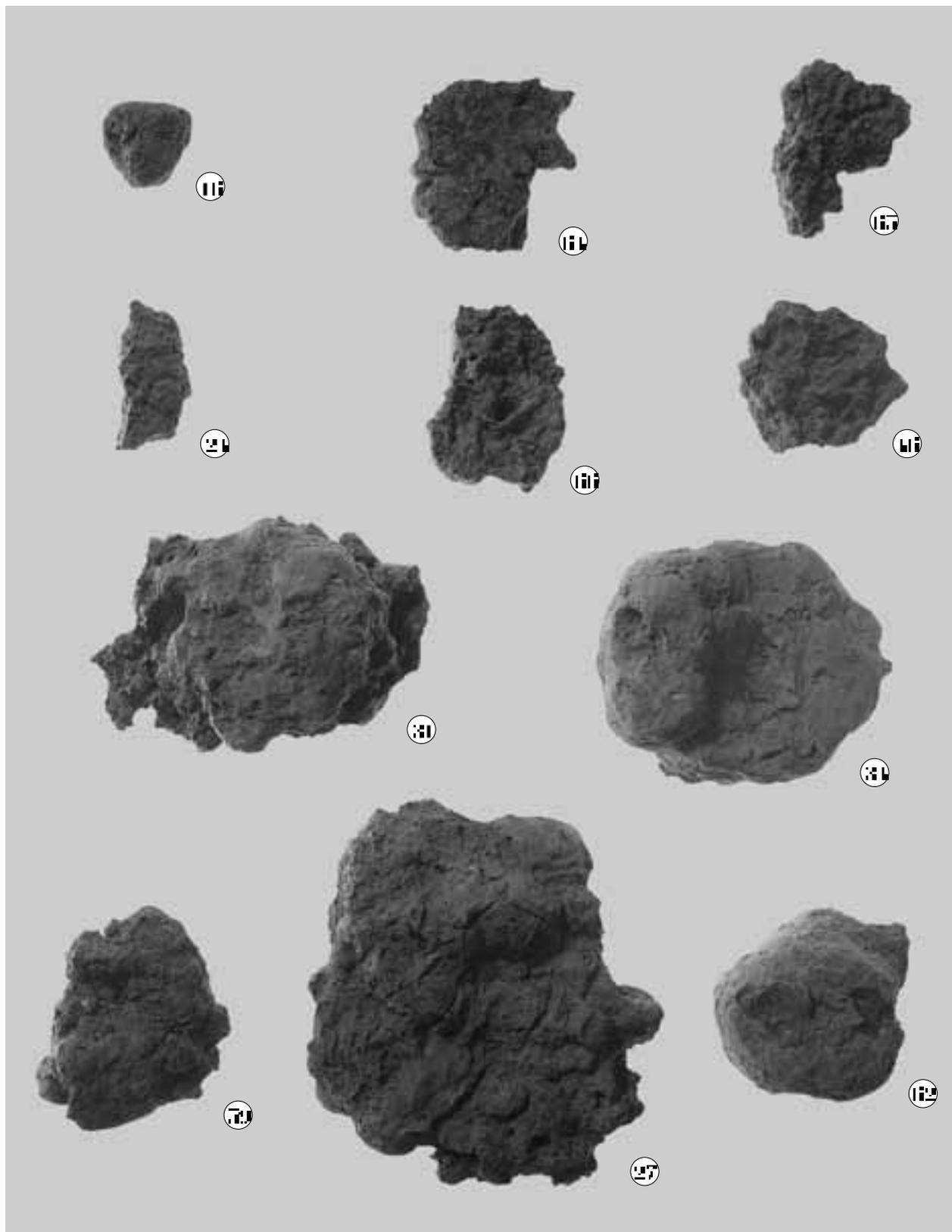
鉄滓 - 鉄燧系遺物 (1) X線写真



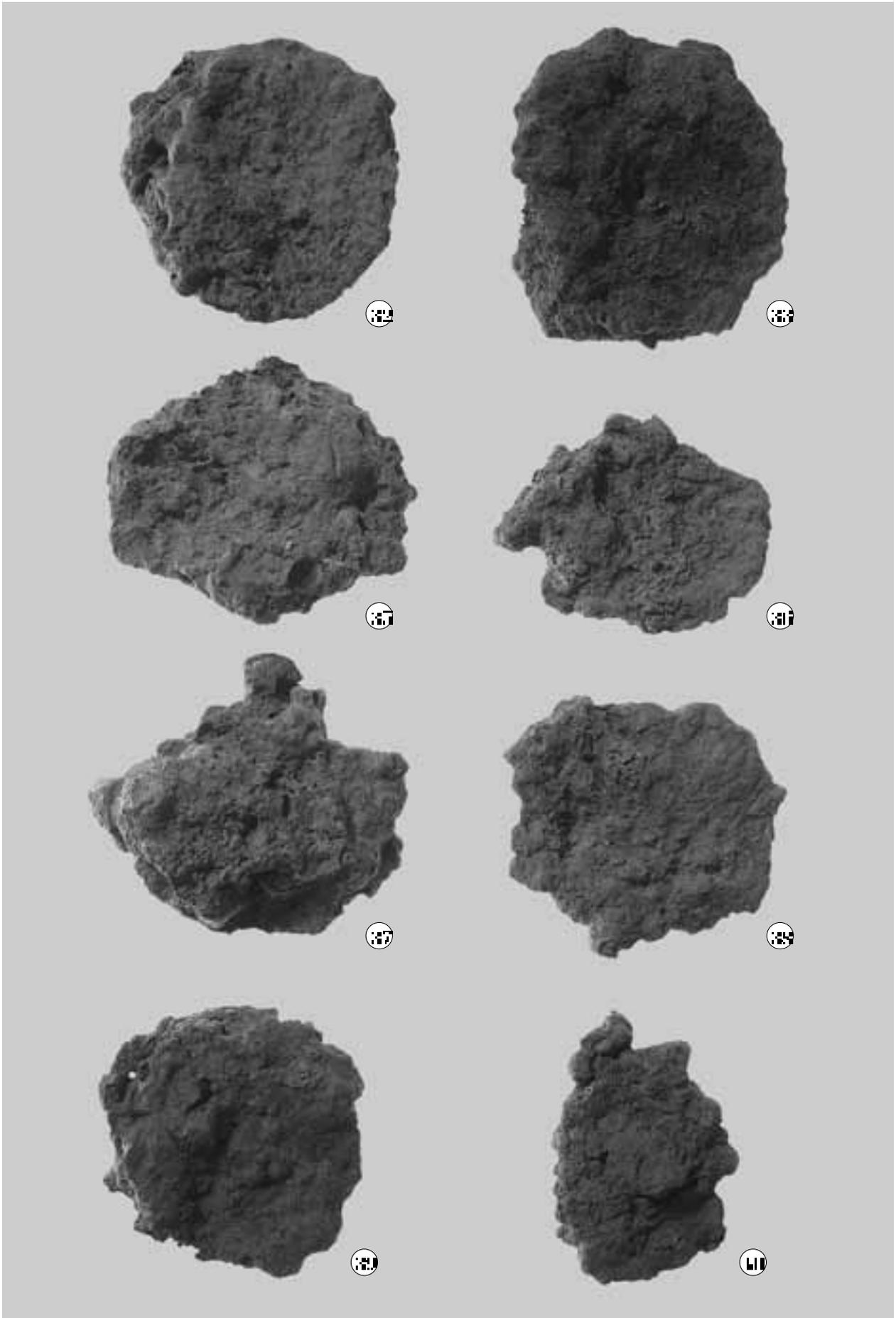
扶澤・扶鳩系遺物 (1)



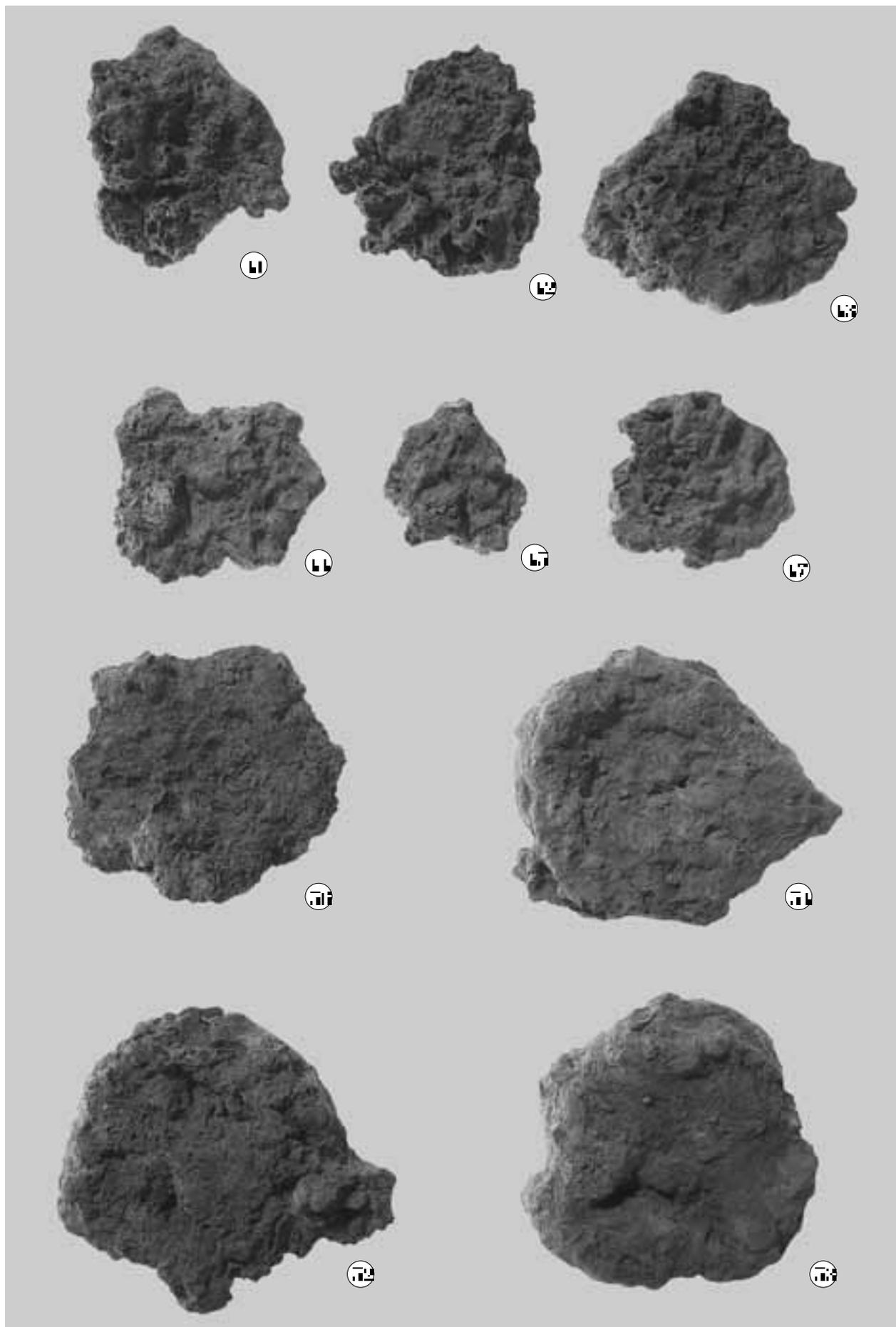
鉄滓・鉄塊系遺物 (2)



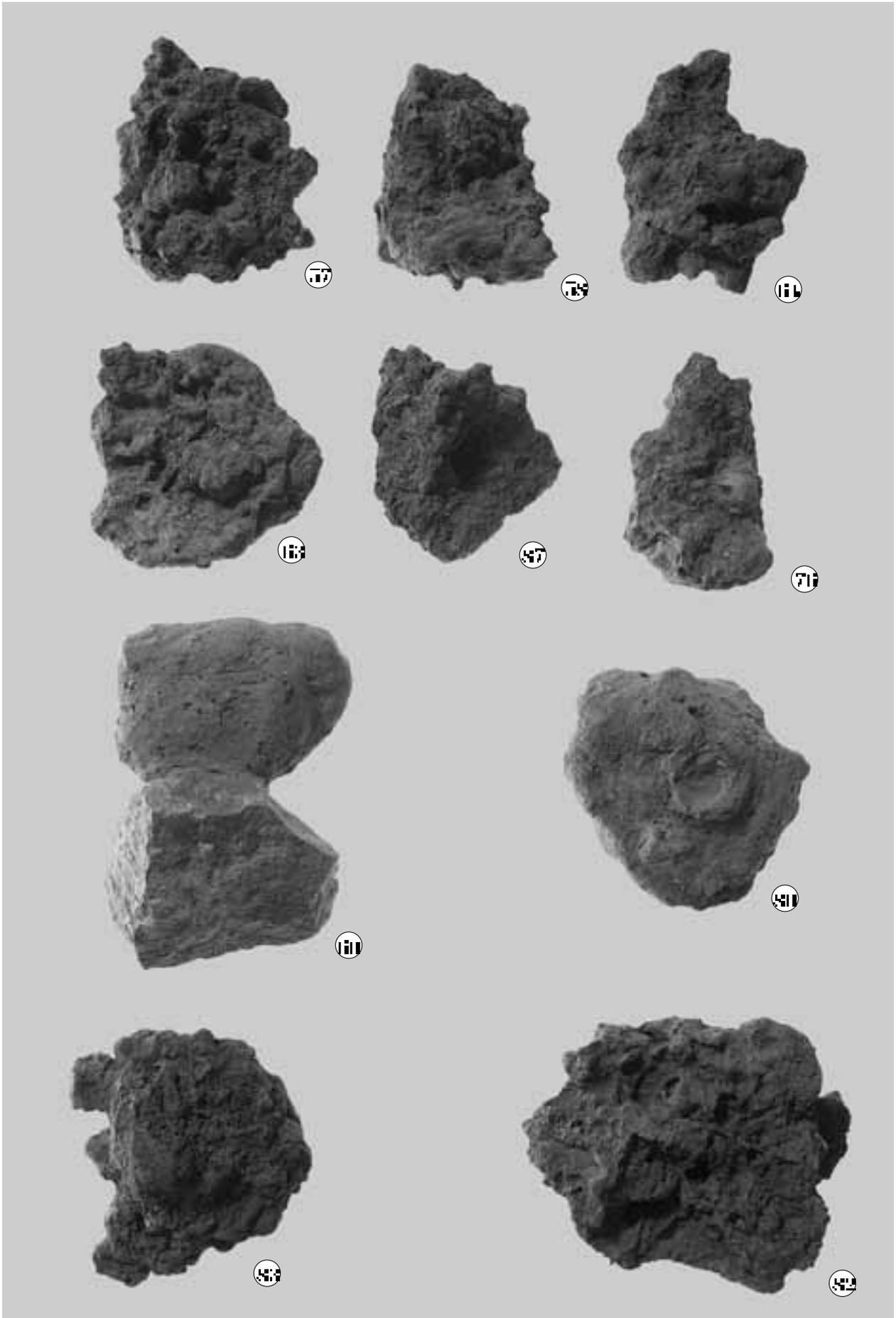
鉄滓・鉄塊系遺物 (3)



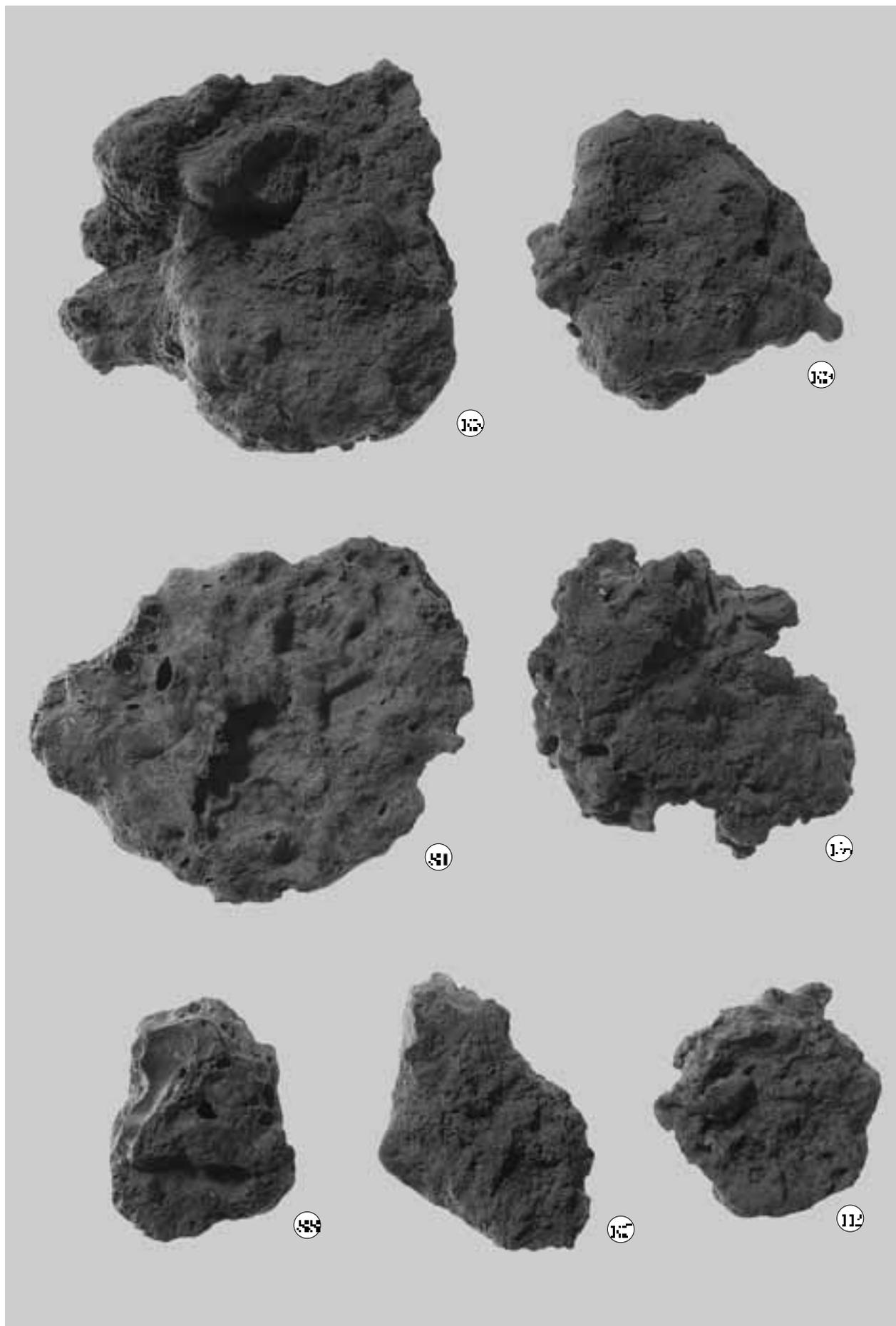
扶洋 - 扶州系遺物 (4)



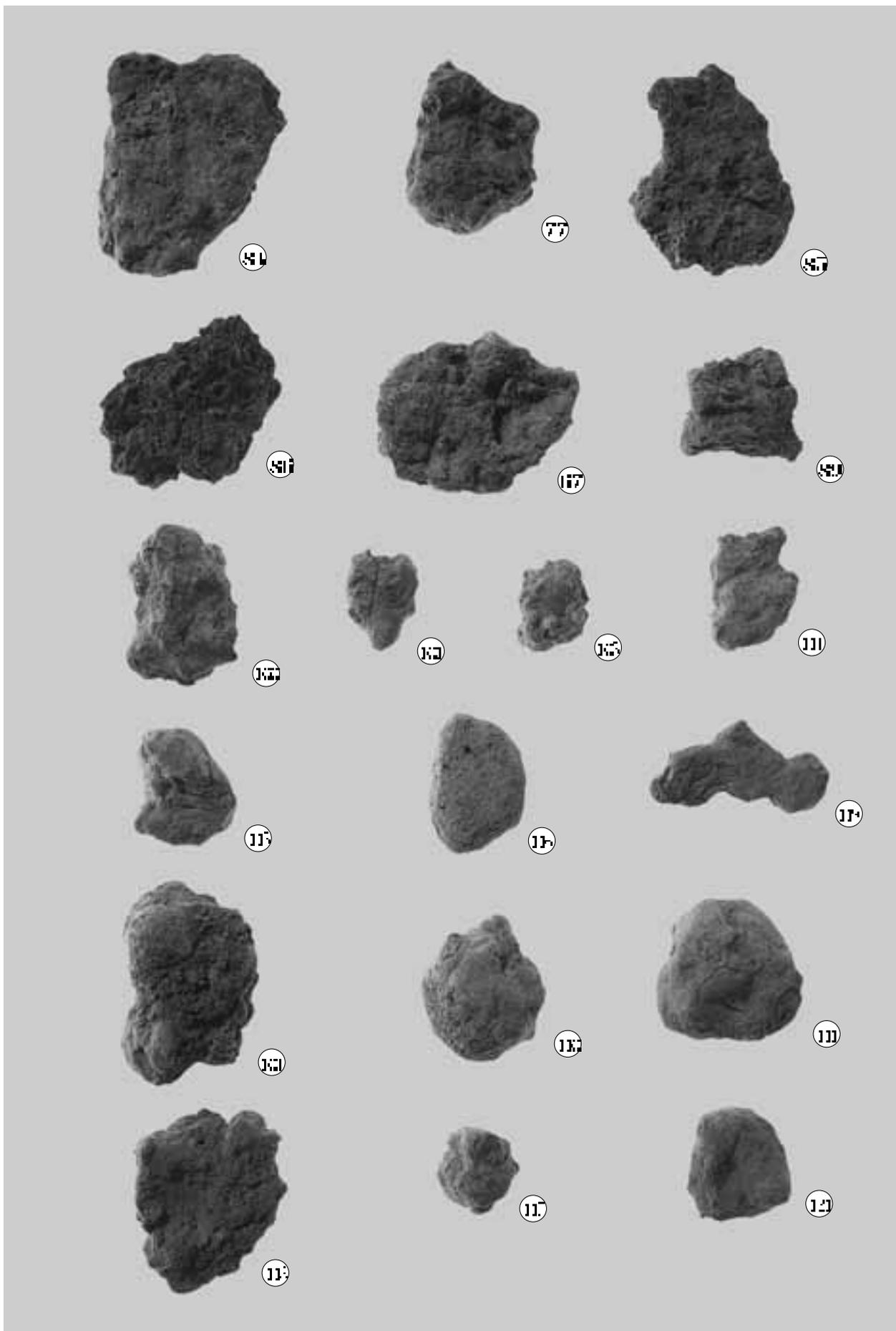
扶澤·扶塊系遺物 (5)



扶洋 - 扶陽系遺物 (6)



扶澤 - 扶壇系遺物 (7)



鉄滓・鉄燐系遺物 (8)

報告書抄録

ふりがな	なんばらせんげんいせき							
書名	南原千軒遺跡							
副書名	一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	100							
編著者名	牧本哲雄、君嶋俊行、西川雄大、山根 航							
編集機関	財団法人 鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260 TEL(0857)27-6717							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なんばらせんげん 南原千軒遺跡	とっとりけんとうほくぐんことうらちようみつ 鳥取県東伯郡琴浦町光 いっほんまつ 字本松1-1外 おおかぶけ 字大加布毛64外	31371	96	35 30 27.16842	133 37 09.5232	20040304 ~ 20041028	2,917.0m ²	一般国道9号 (東伯中山道 路)改築工事
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南原千軒遺跡	集落	縄文時代 後期	竪穴住居跡	縄文土器、石器		石囲炉を伴う中津式 期の竪穴住居跡		
		弥生時代 中期	土坑	弥生土器、石器		玉作関連遺物(石鋸)		
		弥生時代 終末期	溝	弥生土器、石器、玉材		玉作関連遺物(碧玉 製管玉未成品)		
		古墳時代 後期~終末期	竪穴住居跡、溝	土師器、須恵器、鉄製品				
	古代~中世	竪穴住居跡、掘立柱 建物跡、溝、土坑	土師器、須恵器、陶 磁器、鉄製品、石製 品、銭貨、和鏡		<ul style="list-style-type: none"> ・礎盤石を伴う掘立 柱建物跡2棟、う ち1棟の柱穴から 銭貨4点出土 ・屋敷墓と考えられ る墓壇から和鏡1 面出土 ・溝の埋土中から多 量の鉄滓、羽口片 出土 			
包含層	縄文時代~ 近世			縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、陶 磁器、石器、鉄製品、 玉材		<ul style="list-style-type: none"> ・東日本系の土偶脚 部片 ・玉作関連遺物(翡 翠原石、碧玉製管 玉未成品) 		

鳥取県教育文化財団発掘調査報告書 100

一般国道9号(東伯中山道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鳥取県東伯郡琴浦町

南原千軒遺跡

発行 2005年3月28日

編集 財団法人 鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター

〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260
電話(0857)27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団

印刷 富士印刷株式会社